

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

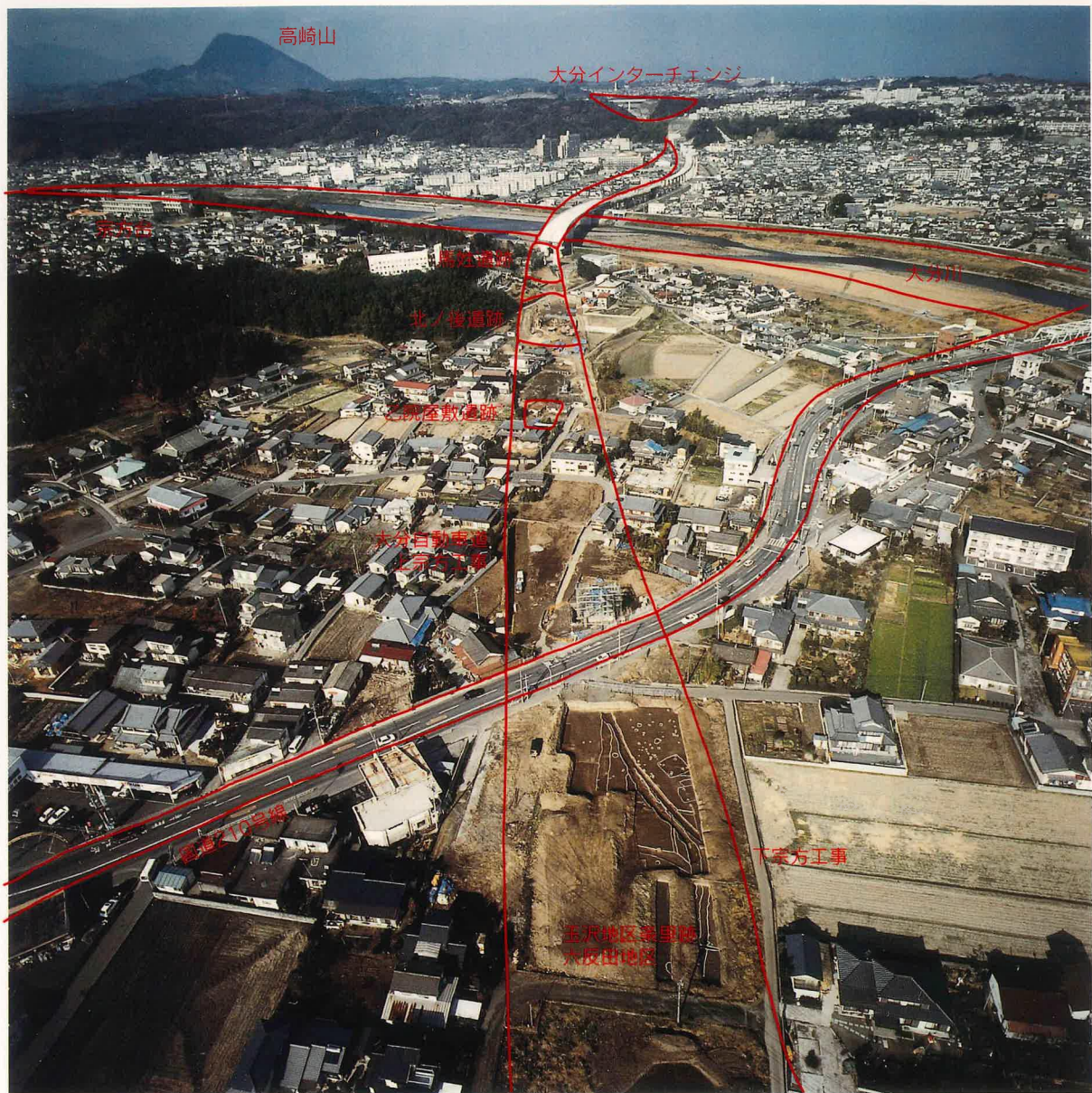
馬 姓 遺 跡
北ノ後遺跡
乙院屋敷遺跡

1999

大分県教育委員会

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

馬 姓 遺 跡
北 ノ 後 遺 跡
乙 院 屋 敷 遺 跡



馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡遠景（南から）

序 文

本書は大分県教育委員会が日本道路公団福岡建設局の委託を受けて、平成5年2月から平成6年9月までの間に実施した九州横断自動車道（大分～大分米良間）建設に伴う馬姓遺跡、北ノ後遺跡、乙院屋敷遺跡にかかる埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

大分県の東西を結ぶ九州横断自動車道（大分自動車道）は、平成8年11月の大分～大分米良間の完成をもって全線開通しましたが、これにより大分県の生活・文化・経済は大きな発展と成長が期待されているところであります。県教育委員会ではこの自動車道の建設に伴い、昭和58年以来、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その成果を報告書として発行してまいりました。

今回の調査では弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世の遺構・遺物が発見され、いずれも当地域の歴史等を知るうえでの資料として、大変貴重でかつ重要なものばかりであります。

今後、本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発並びに学術研究の一助となれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大なる御協力をいただきました関係各位に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成11年3月31日

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本報告書は九州横断自動車道（大分～大分米良間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団福岡建設局の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 遺物の整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室調査補佐員がおこない、遺物の実測・トレースは大分県教育庁文化課職員及び同資料室調査補佐員があたった。
4. 庚申塔銘文の読み下しについては、赤峰重信（前大分県立先哲資料館資料専門員）及び同資料館の諸氏にご教示を賜った。
5. 出土遺物及び関係資料は、大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。
6. 第4図、第5図、第6図、第20図、第262図に使用した座標系は、昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。
7. 北ノ後遺跡の遺構番号は発掘調査時の仮遺構番号から本報告書掲載の新遺構番号に変更している。変更内容は下表の通りである。

新遺構番号	仮遺構番号	新遺構番号	仮遺構番号	新遺構番号	仮遺構番号	新遺構番号	仮遺構番号
1号竪穴住居跡	24号竪穴住居跡	29号竪穴住居跡	22号竪穴住居跡	57号竪穴住居跡	60号竪穴住居跡	9号土坑	2号土坑
2 "	25 "	30 "	43 "	58 "	61 "	10 "	2号焼土
3 "	26 "	31 "	47 "	59 "	59 "	11 "	2号溝状遺構
4 "	27 "	32 "	42 "	60 "	63 "	12 "	7号土坑
5 "	28 "	33 "	41 "	1号掘立柱建物跡	6号掘立柱建物跡	13 "	8 "
6 "	29 "	34 "	37 "	2 "	7 "	14 "	9 "
7 "	2 "	35 "	48 "	3 "	8 "	15 "	10 "
8 "	1 "	36 "	58 "	4 "	3 "	16 "	62号竪穴住居跡
9 "	30 "	37 "	49 "	5 "	1 "	17 "	"
10 "	17 "	38 "	50 "	6 "	4 "	1号溝	3号・8号溝
11 "	15 "	39 "	51 "	7 "	2 "	2 "	12号溝
12 "	16 "	40 "	52 "	8 "	5 "	3 "	9 "
13 "	23 "	41 "	53 "	9 "	9 "	4 "	13 "
14 "	3 "	42 "	54 "	10 "	10 "	5 "	4 "
15 "	4 "	43 "	55 "	11 "	11 "	6 "	1 "
16 "	5 "	44 "	56 "	12 "	12 "	7 "	10 "
17 "	8 "	45 "	40 "	13 "	13 "	8 "	6 "
18 "	10 "	46 "	39 "	14 "	14 "	9 "	14 "
19 "	11 "	47 "	46 "	15 "	15 "	10 "	11 "
20 "	12 "	48 "	38 "	16 "	16 "	11 "	15 "
21 "	6 "	49 "	36 "	1号土坑	1号土坑	12 "	7 "
22 "	7 "	50 "	45 "	2 "	4 "	13 "	16 "
23 "	13 "	51 "	44 "	3 "	3 "	14 "	2 "
24 "	14 "	52 "	34 "	4 "	2 "	15 "	5 "
25 "	18 "	53 "	33 "	5 "	2 "	16 "	4 "
26 "	19 "	54 "	32 "	6 "	2 "		
27 "	20 "	55 "	31 "	7 "	2 "		
28 "	21 "	56 "	35 "	8 "	2 "		

8. 本書の編集・執筆は大分県教育庁文化課 主任 染矢和徳が行なった。

本文目次

I. 調査の概要	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	2
3. 調査の経過	2
II. 地理的歴史的環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	4
III. 馬姓遺跡	11
1. 調査の概要	13
2. I区の遺構と遺物	14
3. II区の遺構と遺物	18
4. 小結	19
IV. 北ノ後遺跡	21
1. 調査の概要	23
2. 遺構と遺物	27
a. 竪穴住居跡	27
b. 掘立柱建物跡	112
c. 土坑	118
d. 溝	130
e. その他の遺構と遺物	227
3. 小結	234
V. 乙院屋敷遺跡	239
1. 調査の概要	241
2. 遺構と遺物	242
3. 小結	244

挿図目次

第1図 調査遺跡位置図	1
第2図 大分川下流域沖積低地の地形分布図	3
第3図 馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡周辺遺跡分布図	7~8
第4図 馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡周辺地形図	9~10
第5図 馬姓遺跡I区遺構配置図	13
第6図 馬姓遺跡II区遺構配置図	14
第7図 1号庚申塔実測図	15
第8図 2号庚申塔実測図	16
第9図 3号庚申塔実測図	16
第10図 4号庚申塔実測図	17
第11図 5号庚申塔実測図	17
第12図 6号庚申塔実測図	18
第13図 1号掘立柱建物跡実測図	18

第14図	1号溝状遺構実測図	19
第15図	2号溝状遺構実測図	20
第16図	3号溝状遺構実測図	20
第17図	4号溝状遺構実測図	20
第18図	北ノ後遺跡基本層序	23
第19図	カマド模式縦断面図及び名称	24
第20図	北ノ後遺跡遺構配置図	25~26
第21図	1号竪穴住居跡実測図	27
第22図	1号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	27
第23図	2号竪穴住居跡実測図	28
第24図	2号竪穴住居跡出土遺物実測図	28
第25図	2号竪穴住居カマド跡実測図	29
第26図	3号竪穴住居跡実測図	30
第27図	3号竪穴住居跡出土遺物実測図	30
第28図	3号竪穴住居カマド跡実測図	31
第29図	3号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	31
第30図	4号竪穴住居カマド跡実測図	32
第31図	4号・5号竪穴住居跡実測図	33~34
第32図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図	35
第33図	4号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	35
第34図	5号竪穴住居跡出土遺物実測図	35
第35図	6号竪穴住居跡出土遺物実測図	36
第36図	6号~8号竪穴住居跡実測図	37~38
第37図	7号竪穴住居跡出土遺物実測図	39
第38図	8号竪穴住居跡出土遺物実測図	39
第39図	9号竪穴住居跡実測図	40
第40図	9号竪穴住居跡出土遺物実測図	41
第41図	10号・12号竪穴住居跡実測図	43
第42図	11号竪穴住居跡実測図	44
第43図	11号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	45
第44図	11号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	46
第45図	11号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	46
第46図	11号竪穴住居カマド跡実測図	47
第47図	12号竪穴住居跡出土遺物実測図	48
第48図	13号竪穴住居跡実測図	48
第49図	14号・15号竪穴住居跡実測図	49
第50図	14号竪穴住居跡出土遺物実測図	49
第51図	16号竪穴住居跡実測図	50
第52図	16号竪穴住居跡出土遺物実測図	51
第53図	16号竪穴住居カマド跡実測図	52
第54図	16号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	53
第55図	17号~20号竪穴住居跡実測図	54

第56図	21号竪穴住居跡実測図	54
第57図	22号竪穴住居跡実測図	55
第58図	22号竪穴住居跡出土遺物実測図	56
第59図	22号竪穴住居カマド跡実測図	56
第60図	22号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	56
第61図	23号・24号竪穴住居跡実測図	57
第62図	23号竪穴住居跡出土遺物実測図	58
第63図	23号竪穴住居カマド跡実測図	59
第64図	23号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	59
第65図	24号竪穴住居跡出土遺物実測図	60
第66図	24号竪穴住居カマド跡実測図	61
第67図	24号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	61
第68図	25号竪穴住居跡実測図	62
第69図	25号竪穴住居跡出土遺物実測図	63
第70図	25号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	63
第71図	26号竪穴住居跡出土遺物実測図	63
第72図	26号竪穴住居跡実測図	64
第73図	26号竪穴住居カマド跡実測図	65
第74図	27号竪穴住居跡出土遺物実測図	65
第75図	27号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	65
第76図	27号竪穴住居跡実測図	66
第77図	27号竪穴住居カマド跡実測図	66
第78図	28号竪穴住居跡実測図	67
第79図	28号竪穴住居カマド跡実測図	68
第80図	28号竪穴住居跡出土遺物実測図	69
第81図	28号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	69
第82図	29号・30号竪穴住居跡実測図	70
第83図	29号竪穴住居カマド跡実測図	71
第84図	29号竪穴住居跡出土遺物実測図	72
第85図	29号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	72
第86図	30号竪穴住居跡出土遺物実測図	72
第87図	31号竪穴住居跡実測図	73
第88図	31号竪穴住居跡出土遺物実測図	74
第89図	32号・33号竪穴住居跡実測図	74
第90図	34号竪穴住居跡実測図	75
第91図	34号竪穴住居跡出土遺物実測図	75
第92図	35号竪穴住居跡実測図	76
第93図	36号・37号竪穴住居跡実測図	77
第94図	38号竪穴住居跡出土遺物実測図	78
第95図	38号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	78
第96図	38号～40号竪穴住居跡実測図	79～80
第97図	39号竪穴住居跡出土遺物実測図	81

第 98 図	40号竪穴住居跡出土遺物実測図	82
第 99 図	40号竪穴住居カマド跡実測図	83
第100図	40号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	83
第101図	41号～43号竪穴住居跡実測図	85～86
第102図	41号竪穴住居跡出土遺物実測図	87
第103図	42号竪穴住居跡出土遺物実測図	88
第104図	43号竪穴住居跡出土遺物実測図	89
第105図	43号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	89
第106図	44号竪穴住居跡実測図	90
第107図	45号竪穴住居跡実測図	90
第108図	45号竪穴住居跡出土遺物実測図	90
第109図	46号竪穴住居跡実測図	91
第110図	46号竪穴住居跡出土遺物実測図	91
第111図	48号竪穴住居跡出土遺物実測図	92
第112図	47号～49号竪穴住居跡実測図	93～94
第113図	48号竪穴住居カマド跡実測図	95
第114図	48号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	96
第115図	49号竪穴住居跡実測図	97
第116図	49号竪穴住居跡出土遺物実測図	97
第117図	49号竪穴住居カマド跡実測図	98
第118図	49号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	98
第119図	50号・51号竪穴住居跡実測図	99
第120図	50号竪穴住居跡出土遺物実測図	100
第121図	51号竪穴住居跡出土遺物実測図	100
第122図	52号竪穴住居跡実測図	101
第123図	53号竪穴住居跡実測図	102
第124図	53号竪穴住居カマド跡実測図	103
第125図	53号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	103
第126図	54号竪穴住居跡実測図	104
第127図	55号竪穴住居跡実測図	105
第128図	55号竪穴住居跡出土遺物実測図	105
第129図	56号竪穴住居跡実測図	106
第130図	56号竪穴住居跡出土遺物実測図	107
第131図	56号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	107
第132図	57号・58号竪穴住居跡実測図	108
第133図	57号竪穴住居カマド跡実測図	109
第134図	57号竪穴住居跡出土遺物実測図	109
第135図	57号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	109
第136図	58号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図	109
第137図	59号竪穴住居跡実測図	110
第138図	59号竪穴住居跡出土遺物実測図	111
第139図	60号竪穴住居跡実測図	111

第140图	1号掘立柱建物跡実測図	112
第141图	2号掘立柱建物跡実測図	112
第142图	3号掘立柱建物跡実測図	113
第143图	4号掘立柱建物跡実測図	113
第144图	5号掘立柱建物跡実測図	113
第145图	6号掘立柱建物跡実測図	114
第146图	7号掘立柱建物跡実測図	114
第147图	8号掘立柱建物跡実測図	114
第148图	8号掘立柱建物跡出土遺物実測図	115
第149图	9号掘立柱建物跡実測図	115
第150图	10号掘立柱建物跡実測図	115
第151图	11号掘立柱建物跡実測図	116
第152图	12号掘立柱建物跡実測図	116
第153图	13号掘立柱建物跡実測図	117
第154图	14号掘立柱建物跡実測図	117
第155图	15号掘立柱建物跡実測図	118
第156图	16号掘立柱建物跡実測図	118
第157图	1号土坑実測図	118
第158图	2号土坑実測図	119
第159图	2号土坑出土遺物実測図	120
第160图	3号土坑実測図	121
第161图	3号土坑出土遺物実測図	122
第162图	4号~10号土坑実測図	123~124
第163图	11号土坑実測図	125
第164图	11号土坑出土遺物実測図	126
第165图	12号土坑実測図	126
第166图	12号土坑出土遺物実測図	126
第167图	13号土坑実測図	127
第168图	14号土坑実測図	128
第169图	15号土坑実測図	128
第170图	16号・17号土坑実測図	129
第171图	17号土坑出土遺物実測図	129
第172图	1号溝実測図	130
第173图	1号溝土層実測図	131
第174图	A区遺物出土状況実測図	133~134
第175图	A区出土遺物実測図(1)	136
第176图	A区出土遺物実測図(2)	137
第177图	A区出土遺物実測図(3)	138
第178图	A区出土遺物実測図(4)	139
第179图	B区遺物出土状況実測図	141~142
第180图	B区出土遺物実測図(1)	147
第181图	B区出土遺物実測図(2)	148

第182図	B区出土遺物実測図 (3)	149
第183図	B区出土遺物実測図 (4)	150
第184図	B区出土遺物実測図 (5)	151
第185図	B区出土遺物実測図 (6)	152
第186図	B区出土遺物実測図 (7)	153
第187図	B区出土遺物実測図 (8)	154
第188図	B区出土遺物実測図 (9)	155
第189図	B区出土遺物実測図 (10)	156
第190図	C区遺物出土状況実測図	159~160
第191図	C区出土遺物実測図 (1)	165
第192図	C区出土遺物実測図 (2)	166
第193図	C区出土遺物実測図 (3)	167
第194図	C区出土遺物実測図 (4)	168
第195図	C区出土遺物実測図 (5)	169
第196図	C区出土遺物実測図 (6)	170
第197図	C区出土遺物実測図 (7)	171
第198図	C区出土遺物実測図 (8)	172
第199図	C区出土遺物実測図 (9)	173
第200図	C区出土遺物実測図 (10)	174
第201図	C区出土遺物実測図 (11)	175
第202図	C区出土遺物実測図 (12)	176
第203図	D区及び2号溝遺物出土状況実測図	179~180
第204図	D区出土遺物実測図 (1)	188
第205図	D区出土遺物実測図 (2)	189
第206図	D区出土遺物実測図 (3)	190
第207図	D区出土遺物実測図 (4)	191
第208図	D区出土遺物実測図 (5)	192
第209図	D区出土遺物実測図 (6)	193
第210図	D区出土遺物実測図 (7)	194
第211図	D区出土遺物実測図 (8)	195
第212図	D区出土遺物実測図 (9)	196
第213図	D区出土遺物実測図 (10)	197
第214図	D区出土遺物実測図 (11)	198
第215図	D区出土遺物実測図 (12)	199
第216図	D区出土遺物実測図 (13)	200
第217図	D区出土遺物実測図 (14)	201
第218図	D区出土遺物実測図 (15)	202
第219図	D区出土遺物実測図 (16)	203
第220図	E区遺物出土状況実測図	204
第221図	E区出土遺物実測図	205
第222図	F区遺物出土状況実測図	207~208
第223図	F区出土遺物実測図 (1)	209

第224図	F区出土遺物実測図(2)	210
第225図	F区出土遺物実測図(3)	211
第226図	F区出土遺物実測図(4)	212
第227図	2号溝実測図	213
第228図	2号溝出土遺物実測図(1)	214
第229図	2号溝出土遺物実測図(2)	215
第230図	3号溝実測図	216
第231図	3号溝出土遺物実測図	217
第232図	4号溝実測図	218
第233図	4号溝出土遺物実測図	219
第234図	5号溝出土遺物実測図	219
第235図	5号溝実測図	220
第236図	6号溝実測図	221
第237図	6号溝出土遺物実測図	221
第238図	7号溝出土遺物実測図	221
第239図	7号溝実測図	222
第240図	8号溝実測図	222
第241図	8号溝出土遺物実測図	223
第242図	9号溝実測図	224
第243図	10号溝実測図	224
第244図	11号溝実測図	225
第245図	12号溝実測図	225
第246図	13号溝実測図	225
第247図	14号溝実測図	225
第248図	15号・16号溝実測図	226
第249図	1号井戸状遺構実測図	228
第250図	1号井戸状遺構出土遺物実測図	228
第251図	1号柵列状遺構実測図	229~230
第252図	縄文・弥生時代の石器実測図	231
第253図	紡錘車実測図	232
第254図	製塩土器実測図	233
第255図	古代の遺物実測図(1)	233
第256図	古代の遺物実測図(2)	233
第257図	古代の遺物実測図(3)	233
第258図	北ノ後遺跡遺構変遷図(1)	235
第259図	北ノ後遺跡遺構変遷図(2)	236
第260図	北ノ後遺跡周辺地形復元図	237
第261図	七瀬川周辺の地形分布と遺跡	238
第262図	乙院屋敷遺跡遺構配置図	241
第263図	1号溝実測図	242
第264図	1号溝出土遺物実測図(1)	243
第265図	1号溝出土遺物実測図(2)	244

図 版 目 次

図版 1	調査風景	大分市立宗方小学校見学風景	馬姓遺跡遠景
図版 2	馬姓遺跡 I 区遠景	1 号庚申塔	2 号・3 号庚申塔
図版 3	4 号・5 号庚申塔	6 号庚申塔	馬姓遺跡 II 区遠景
図版 4	北ノ後遺跡全景	北ノ後遺跡遠景	
図版 5	北ノ後遺跡北側遠景	北ノ後遺跡北側遠景	
図版 6	北ノ後遺跡北側近景	北ノ後遺跡中央西側遠景	
図版 7	北ノ後遺跡中央西側遠景	北ノ後遺跡中央東側遠景	
図版 8	北ノ後遺跡中央東側遠景	北ノ後遺跡南東側遠景	
図版 9	北ノ後遺跡南東側遠景	北ノ後遺跡 1 号溝 F 区近景	
図版 10	北ノ後遺跡南西側遠景	北ノ後遺跡南西側遠景	
図版 11	北ノ後遺跡南西側近景	北ノ後遺跡南西側近景	
図版 12	1 号竪穴住居跡	2 号竪穴住居跡	2 号竪穴住居カマド跡
図版 13	3 号竪穴住居跡	3 号竪穴住居カマド跡	4 号竪穴住居跡
図版 14	4 号竪穴住居カマド跡	5 号竪穴住居跡	6 号竪穴住居跡
図版 15	6 号～8 号竪穴住居跡	11 号竪穴住居跡	11 号竪穴住居カマド跡
図版 16	14 号・15 号竪穴住居跡	16 号竪穴住居跡	16 号竪穴住居カマド跡
図版 17	16 号竪穴住居カマド跡	21 号竪穴住居跡	22 号竪穴住居跡
図版 18	23 号竪穴住居跡	23 号竪穴住居カマド跡	23 号竪穴住居カマド跡
図版 19	24 号竪穴住居跡	24 号竪穴住居カマド跡	24 号竪穴住居カマド跡
図版 20	25 号竪穴住居跡	26 号竪穴住居跡	26 号竪穴住居カマド跡

図版21	27号竪穴住居跡	27号竪穴住居カマド跡	28号竪穴住居跡
図版22	28号竪穴住居カマド跡	29号竪穴住居カマド跡	31号竪穴住居跡
図版23	32号竪穴住居跡	33号竪穴住居跡	36号・37号竪穴住居跡
図版24	38号竪穴住居跡	40号竪穴住居跡	40号竪穴住居カマド跡
図版25	41号竪穴住居跡	42号竪穴住居跡	43号竪穴住居跡
図版26	44号竪穴住居跡	45号竪穴住居跡	46号竪穴住居跡
図版27	47号～49号竪穴住居跡	48号竪穴住居カマド跡	49号竪穴住居跡
図版28	49号竪穴住居カマド跡	50号竪穴住居跡	51号竪穴住居跡
図版29	52号竪穴住居跡	53号竪穴住居跡	53号竪穴住居カマド跡
図版30	55号竪穴住居跡	56号竪穴住居跡	56号竪穴住居跡
図版31	57号竪穴住居跡	57号竪穴住居カマド跡	59号竪穴住居跡
図版32	1号掘立柱建物跡	2号掘立柱建物跡	4号・5号掘立柱建物跡
図版33	5号～7号掘立柱建物跡	8号掘立柱建物跡	1号溝C-C'土層
図版34	1号溝D-D'土層	1号溝E-E'土層	1号溝F-F'土層
図版35	1号溝G-G'土層	1号溝H-H'土層	1号溝南側全景
図版36	1号溝北側近景 1号溝C区近景	1号溝C区近景 1号溝南西コーナー近景	
図版37	1号溝F区近景 1号溝B区近景	1号溝A区近景 1号溝D区近景	
図版38	1号溝F区近景 1号溝F区近景	1号溝F区近景 1号溝F区近景	
図版39	1号溝A区遺物出土状況	1号溝B区遺物出土状況	1号溝B区遺物出土状況
図版40	1号溝C区遺物出土状況	1号溝C区遺物出土状況	1号溝D区遺物出土状況

図版41	1号溝D区遺物出土状況	1号溝D区遺物出土状況	1号溝D区遺物出土状況
図版42	1号溝F区遺物出土状況	1号溝F区遺物出土状況	1号溝F区遺物出土状況
図版43	1号溝F区遺物出土状況	1号溝F区遺物出土状況	1号溝F区遺物出土状況
図版44	3号溝全景 7号溝全景	4号溝全景 8号溝全景	
図版45	9号溝全景 12号溝全景	10号溝全景 柵列状遺構全景	
図版46	2号溝遺物出土状況	3号溝遺物出土状況	乙院屋敷遺跡近景
図版47	3号竪穴住居跡出土遺物 3号竪穴住居カマド跡出土遺物 5号竪穴住居跡出土遺物 8号竪穴住居跡出土遺物	3号竪穴住居カマド跡出土遺物 4号竪穴住居カマド跡出土遺物 5号竪穴住居跡出土遺物 9号竪穴住居跡出土遺物	
図版48	9号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物	9号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物	
図版49	11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物	11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物	
図版50	11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居跡出土遺物 12号竪穴住居跡出土遺物 12号竪穴住居跡出土遺物	11号竪穴住居跡出土遺物 11号竪穴住居カマド跡出土遺物 12号竪穴住居跡出土遺物 16号竪穴住居跡出土遺物	
図版51	16号竪穴住居カマド跡出土遺物 22号竪穴住居跡出土遺物 23号竪穴住居跡出土遺物 23号竪穴住居跡出土遺物	22号竪穴住居跡出土遺物 22号竪穴住居跡出土遺物 23号竪穴住居跡出土遺物 23号竪穴住居跡出土遺物	

図版52	23号竪穴住居跡出土遺物 24号竪穴住居跡出土遺物 25号竪穴住居カマド跡出土遺物 27号竪穴住居カマド跡出土遺物	23号竪穴住居カマド跡出土遺物 24号竪穴住居跡出土遺物 25号竪穴住居カマド跡出土遺物 28号竪穴住居跡出土遺物
図版53	28号竪穴住居跡出土遺物 28号竪穴住居カマド跡出土遺物 29号竪穴住居跡出土遺物 29号竪穴住居跡出土遺物	28号竪穴住居カマド跡出土遺物 28号竪穴住居カマド跡出土遺物 29号竪穴住居跡出土遺物 29号竪穴住居跡出土遺物
図版54	29号竪穴住居カマド跡出土遺物 34号竪穴住居跡出土遺物 38号竪穴住居跡出土遺物 40号竪穴住居跡出土遺物	31号竪穴住居跡出土遺物 34号竪穴住居跡出土遺物 38号竪穴住居カマド跡出土遺物 40号竪穴住居跡出土遺物
図版55	40号竪穴住居跡出土遺物 41号竪穴住居跡出土遺物 41号竪穴住居跡出土遺物 41号竪穴住居跡出土遺物	40号竪穴住居跡出土遺物 41号竪穴住居跡出土遺物 41号竪穴住居跡出土遺物 41号竪穴住居跡出土遺物
図版56	41号竪穴住居跡出土遺物 42号竪穴住居跡出土遺物 42号竪穴住居跡出土遺物 43号竪穴住居跡出土遺物	41号竪穴住居跡出土遺物 42号竪穴住居跡出土遺物 43号竪穴住居跡出土遺物 43号竪穴住居カマド跡出土遺物
図版57	43号竪穴住居カマド跡出土遺物 46号竪穴住居跡出土遺物 48号竪穴住居カマド跡出土遺物 48号竪穴住居カマド跡出土遺物	45号竪穴住居跡出土遺物 48号竪穴住居跡出土遺物 48号竪穴住居カマド跡出土遺物 48号竪穴住居カマド跡出土遺物
図版58	53号竪穴住居カマド跡出土遺物 56号竪穴住居跡出土遺物 56号竪穴住居跡出土遺物 57号竪穴住居跡出土遺物	55号竪穴住居跡出土遺物 56号竪穴住居跡出土遺物 56号竪穴住居カマド跡出土遺物 57号竪穴住居跡出土遺物
図版59	57号竪穴住居カマド跡出土遺物 2号土坑出土遺物 3号土坑出土遺物 3号土坑出土遺物	8号掘立柱建物跡出土遺物 2号土坑出土遺物 3号土坑出土遺物 3号土坑出土遺物

图版60	3号土坑出土遺物	11号土坑出土遺物
	11号土坑出土遺物	11号土坑出土遺物
	12号土坑出土遺物	17号土坑出土遺物
	17号土坑出土遺物	1号溝A区出土遺物
图版61	1号溝A区出土遺物	1号溝A区出土遺物
	1号溝A区出土遺物	1号溝A区出土遺物
	1号溝A区出土遺物	1号溝A区出土遺物
	1号溝A区出土遺物	1号溝A区出土遺物
图版62	1号溝A区出土遺物	1号溝A区出土遺物
	1号溝A区出土遺物	1号溝A区出土遺物
	1号溝A区出土遺物	1号溝A区出土遺物
	1号溝A区出土遺物	1号溝B区出土遺物
图版63	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
图版64	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
图版65	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
图版66	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝B区出土遺物	1号溝B区出土遺物
	1号溝C区出土遺物	1号溝C区出土遺物
图版67	1号溝C区出土遺物	1号溝C区出土遺物
	1号溝C区出土遺物	1号溝C区出土遺物
	1号溝C区出土遺物	1号溝C区出土遺物
	1号溝C区出土遺物	1号溝C区出土遺物

図版76	2号溝出土遺物	2号溝出土遺物
	2号溝出土遺物	3号溝出土遺物
	4号溝出土遺物	5号溝出土遺物
	5号溝出土遺物	5号溝出土遺物
図版77	5号溝出土遺物	5号溝出土遺物
	6号溝出土遺物	6号溝出土遺物
	7号溝出土遺物	8号溝出土遺物
	8号溝出土遺物	8号溝出土遺物
図版78	8号溝出土遺物	8号溝出土遺物
	1号井戸状遺構出土遺物	1号井戸状遺構出土遺物
	1号井戸状遺構出土遺物	1号井戸状遺構出土遺物
	1号井戸状遺構出土遺物	1号井戸状遺構出土遺物
図版79	1号井戸状遺構出土遺物	製塩土器
	製塩土器	製塩土器
	製塩土器	古代の出土遺物
	古代の出土遺物	古代の出土遺物
図版80	古代の出土遺物	古代の出土遺物
	古代の出土遺物	古代の出土遺物
	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
図版81	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
図版82	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物
	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物	乙院屋敷遺跡1号溝出土遺物

I. 調査の概要

1. 調査に至る経過

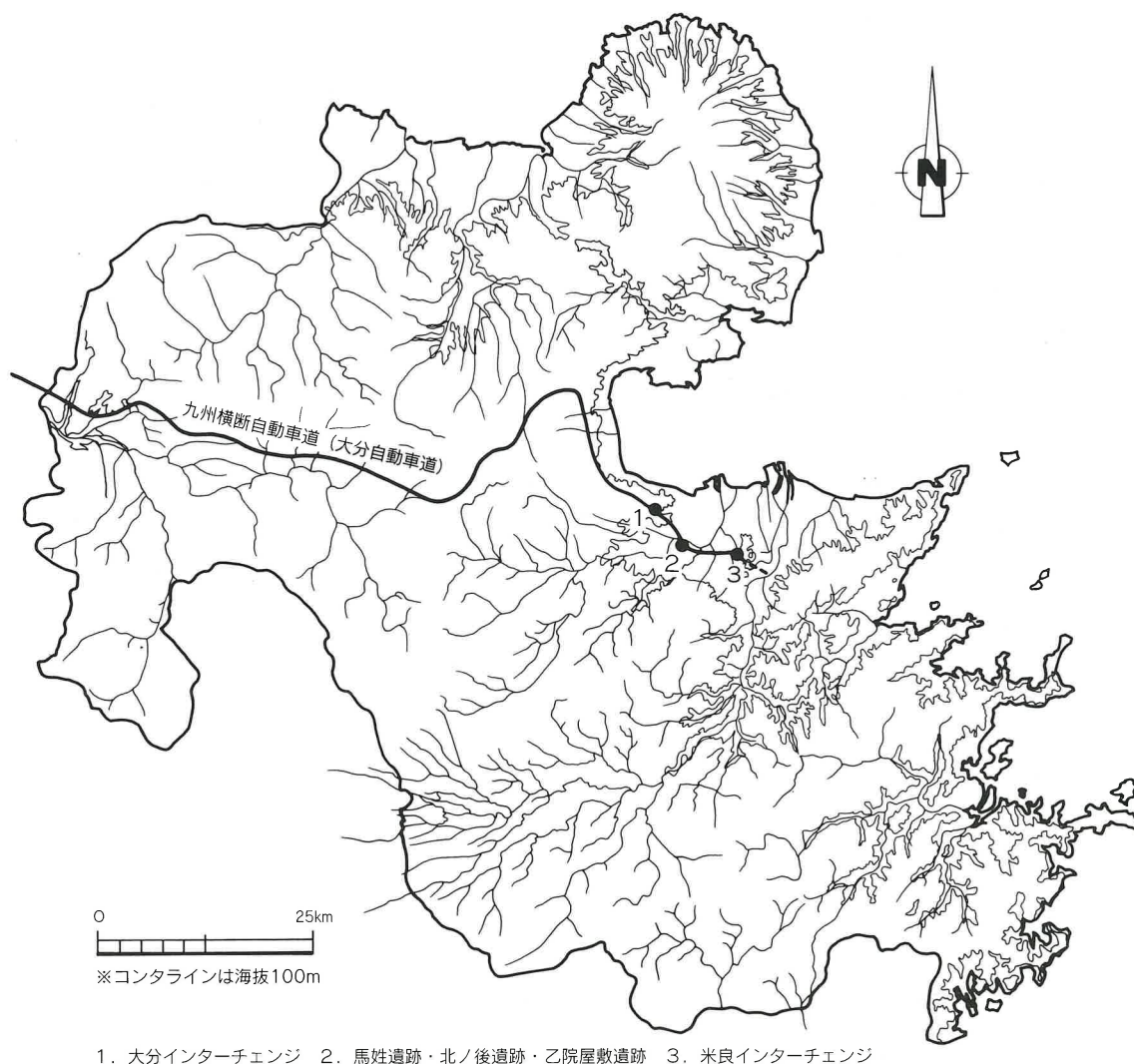
九州横断自動車道は長崎市から大分市までの全長約252kmの高速自動車道である。昭和44年1月、長崎県大村から大分県日田市間（全長149km）の基本計画が決定され、続いて昭和47年6月、大分県日田市から同県大分市間（全長約103km）の基本計画が打ち出された。このうち、大分～大分米良間（大分市街地を東西に横切る全長7.9km）の整備計画は平成元年1月、施工命令は平成2年4月にそれぞれ決定された。この結果を受け大分県教育委員会では日本道路公団福岡建設局の委託事業として大分～大分米良間の道路建設予定地の分布調査を実施し、荏隈杉下遺跡、馬性遺跡、北ノ後遺跡、乙院屋敷遺跡、二反田遺跡、六反田遺跡、山伏田遺跡、曲遺跡を確認した。平成5年2月には荏隈杉下遺跡の発掘調査がはじまり、続いて各遺跡の調査が開始された。このうち、平成11年3月に荏隈遺跡及び玉沢地区条里跡遺跡群の報告書が刊行予定である。

今回報告する馬姓遺跡（大分市大字上宗方字馬姓）、北ノ後遺跡（同字北ノ後）、乙院屋敷遺跡（同字乙院屋敷）は、平成6年4月から平成7年9月に本調査を実施した遺跡である。

参考文献

江田 豊 『荏隈杉下遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（11）大分県教育委員会 1999

江田 豊 『玉沢地区条里跡遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（12）大分県教育委員会 1999



第1図 調査遺跡位置図

2. 調査の組織

平成6年度

調査委員 賀川光夫 (大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授)

石野博信 (徳島文理大学教授)

末広利人 (大分県教育庁文化課長)

調査主任 渋谷忠章 (同文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長)

調査員 西 哲弘 (同文化課主査) 江田 豊 (同文化課主任)

染矢和徳 (同文化課主事：調査担当) 神崎哲也 (同文化課嘱託)

長田大輔 (同文化課嘱託) 稲村博文 (同文化課嘱託)

原田靖久 (同文化課嘱託) 橋本幸二 (同文化課嘱託)

志満紀郎 (同文化課嘱託)

平成7年度

調査委員 末広利人 (同文化課長)

調査主任 渋谷忠章 (同文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長)

調査員 西 哲弘 (同文化課主査) 江田 豊 (同文化課主任)

染矢和徳 (同文化課主事：調査担当) 吉田博嗣 (同文化課嘱託)

濱田教靖 (同文化課嘱託) 横山明代 (同文化課嘱託)

3. 調査の経過

発掘調査は既述の調査組織で行なった。以下、年度ごとに該当遺跡の調査経過を示す。なお、試掘調査は平成5年度より実施(試掘担当：染矢)したので、調査の経過のみ記すことにする。

平成5年度試掘調査

平成6年2月、大分市大字上宗方字北ノ後(北ノ後遺跡)に所在する用地内に試掘溝を10条設定し、遺構、遺物の確認を行なった。調査の結果、溝状遺構、カマドを付設する竪穴住居跡と須恵器片を確認したため、次年度に本調査実施を決定した。

平成6年度調査

平成6年4月に北ノ後遺跡の本調査を開始し、年度内に古墳時代後期の竪穴住居跡50基(内32基にカマド付設を検出)、掘立柱建物跡8基、土坑12基、溝状遺構16条を確認した。並行して用地買収の進捗状況をみながら、同字柵山・同字乙院屋敷(乙院屋敷遺跡)・同字馬姓(馬姓遺跡)・同字新屋敷の順に試掘溝計15条を設定し試掘調査を実施した。調査の結果、馬姓遺跡より柱穴群、溝状遺構、庚申塔を確認、さらに、柵山と乙院屋敷の字境(乙院屋敷遺跡)に19世紀代の遺物を出土する溝状遺構を確認した。共に本調査が必要と判断されたため北ノ後遺跡調査状況、用地買収、工事用作業道、進入路などの条件が整った後、調査に移行した。馬姓遺跡は庚申塔6基、掘立柱建物跡1基、溝状遺構4条、柱穴群を確認。乙院屋敷遺跡は字境に沿って溝状遺構1条と包含層をそれぞれ確認した。馬姓遺跡、乙院屋敷遺跡は共に年度内に調査を終了した。

平成7年度調査

継続して本調査を実施したのは、北ノ後遺跡である。前年度に続き調査区を南側に拡大した。調査の結果、竪穴住居跡10基(内8基にカマド付設)を確認した。さらに、工事用作業道の切り返しの関係上約100㎡の未調査域を残していたので調査を実施した。調査の結果、柱穴群が確認された。調査は平成7年9月に終了した。

参考文献

西 哲弘 江田 豊 染矢和徳『北ノ後遺跡 二反田遺跡 六反田遺跡 山伏田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報-大分~大分間-大分県教育委員会 1995

大分県教育委員会編『大分県埋蔵文化財年報』3 大分県教育委員会 1995

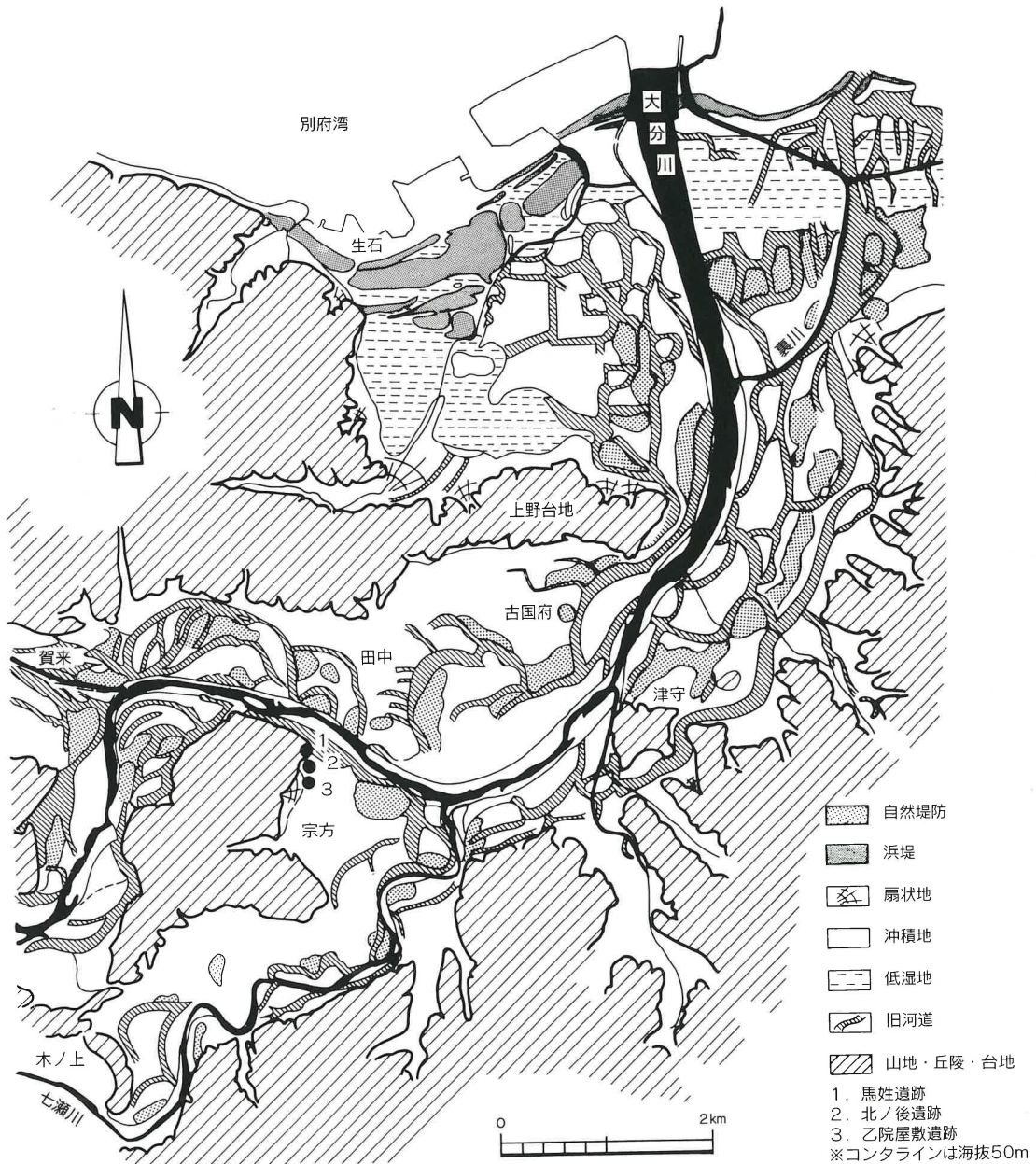
大分県教育委員会編『大分県埋蔵文化財年報』4 大分県教育委員会 1996

大分県教育委員会編『大分県埋蔵文化財年報』5 大分県教区委員会 1997

II. 地理的歴史的環境

1. 地理的環境

調査区は大分県大分市大字上宗方字馬姓・北ノ後・乙院屋敷に所在する。大分市の位置する大分平野は九州東部に広がるもので、北には瀬戸内海西端の別府湾、東には佐賀関半島から豊後水道、南には祖母傾山系、西には九重連山が展開している。近郊を見ると九六位山、霊山、障子岳、高崎山、雨乞岳といった400mから800mほどの山々が大分平野を三方から取り囲み、そのなかに大分県を代表する河川である大分川と大野川が別府湾へと



第2図 大分川下流域沖積低地の地形分布図（『大分市史』上 1987 57頁 第14図を一部修正）

注いでいる。これらの地形が当地方独特の気象を生み出しており、気候的には瀬戸内型が南海型や九州山地型に移行する遷移域にあるとされている。

平野の西部を流れる大分川中下流域には河岸段丘が発達し、河口部には三角州が形成されている。遺跡は大分川の河口から上流約5kmほどのところに位置し、支流である七瀬川が遺跡の南側を東流している。調査区は大分川と七瀬川に挟まれた沖積地内に立地しており、各所に現河道と旧河道が複雑に入り組んでいる。周囲を見渡すと山地、丘陵、台地から土砂が流れ出し、部分的に小規模な扇状地をつくるほか、新旧河道間には河岸段丘、自然堤防がよく発達しており微高地を形成している。遺跡の分布を見ると丘陵、台地、沖積地、河岸段丘、自然堤防の各所に確認されており、大分平野内でも屈指の遺跡密度を示している。特に河岸段丘、自然堤防上には弥生時代から中近世にわたる遺跡が分布しており、当地における開発の歴史を如実に物語るのがある。この地域は現在でも集落、水田などに用いられ生活の場となっている。

今回報告する各遺跡の立地条件を見ると、馬姓遺跡は松ヶ丘ニュータウンが所在する丘陵（宗方台）から続く尾根筋が標高を下げながら大分川に落ち込んでいく最先端部及びその尾根筋と、南隣の尾根筋がつくりだす狭小な谷底平坦部に立地するもので、標高は尾根筋上で約21m、谷底で約15mである。現況は雑木林であった。北ノ後遺跡は宗方台の丘陵の東側に位置し、北側に馬姓遺跡の尾根筋、東側に大分川とそれが作りだした氾濫域、南側に丘陵を浸食して作りだされた扇状地、西側に丘陵の急斜面が展開するもので、遺跡は地形から大分川がつくりだした河岸段丘上に展開すると考えられるが、河川氾濫域に面した部分は浸食がかなり進んでいるものと推定される。現況は宅地・水田に用いられており段丘先端部は著しく削平を受けていた。標高は約14mである。乙院屋敷遺跡は前記した扇状地の先端部に位置するもので、最先端部は河川氾濫域に接している。標高は約11mである。遺跡は宅地・道路・農業用地として中近世段階から現在に至るまで開発が進んでいるものと推定され、一部を除き削平・攪乱を受けていた。

以上の様に、当該地区は周辺の遺跡の展開と様相を同じくするものであるが、大分川を間近に臨む地勢など、恵まれた地理的生活環境ではなかったことが伺える。

2. 歴史的環境

調査区の周辺は前述したとおり、高い遺跡密度を持つ地域である。旧石器時代から縄文時代を見ると本遺跡北方に位置する庄ノ原台地で、旧石器や押型文土器が出土している。弥生時代をみると、後漢鏡片と巴形銅器を出土した雄城台遺跡、後漢鏡片を出土した尼ヶ城遺跡と守岡遺跡、自然堤防・沖積地上には上片面遺跡、深町遺跡、植田平石遺跡、賀来中学校遺跡、ガランジ遺跡など当地域全体で弥生文化を享受した痕跡が確認されている。古墳時代にいたると周辺の丘陵、台地上や斜面上に墳墓が集中的につくられることになる。亀甲山古墳、蓬莱山古墳、御陵古墳、大臣塚古墳（4C中頃～5C中頃）の前方後円墳に続き下ヶ迫古墳、世利門古墳（5C中頃）さらに、弘法穴古墳、千代丸古墳、丑殿古墳（6C後半～7C初頭）という石室古墳が出現するが、調査区周辺に所在する木ノ上峠横穴墓群、土肥横穴墓群、高瀬横穴墓群、岩崎横穴墓群、雄城台下横穴墓群のように大分県全域の特徴である横穴墓が同時に卓越した存在となる。最後に登場するのが被葬者に壬申の乱のうちに活躍した大分君が比定される古宮古墳（7C中頃～後半）がある。集落跡をみると前記した尼ヶ城、守岡、雄城台遺跡は古墳時代前期までに廃絶する。代わって植田市遺跡、古国府石明遺跡、地蔵原遺跡が主要な集落として登場する。このことは、古墳時代に入り新たな社会秩序が成立していったことを伺わせるものである。特に地蔵原遺跡は8世紀後半から9世紀にかけて濠で囲まれた館が建つなど、郡衙的な発展を遂げるにいたる。北ノ後遺跡の竪穴住居跡群も同時代の中に入るもので規模から主要な集落のひとつとなっていたことは容易に考えられる。しかしながら、大分平野内では古墳時代の集落跡の調査例は少なく資料の蓄積も充分でないことから今後の資料の増加に期待したい。

古代を見ると方形の地割から広範囲に条里跡が想定されているが、現在までの調査では明確な遺構を確認していない。調査区から北東約2kmに位置する古国府・羽屋地区は国府の所在地として推定されており、近年、奈良から平安期を中心とする時期の遺跡が徐々に確認されはじめている。調査区を含む周辺は同時代に『和名抄』に

よれば植田郷となるが、詳細はいまのところ知られていない。同郷は文献上遅くとも平安時代末期までには荘園化しており植田荘となっている。同荘は大分川南岸とその支流七瀬川流域の平野を中心に現大分市南西部（横瀬地区を除く植田地区、東植田地区）から野津原町（今市地区を除く）にかけての地域に比定されている。文献上の初見は保元2年（1157）の「太政官符案」で保元の乱で敗退した藤原頼長領を没官し、後白川天皇の後院領とした記事である。本来、この地は開発領主と推定されている大神氏（植田氏）の開発によるもので、『大神系図』によると、植田有綱が源平合戦の恩賞として吉藤名野津原郷を賜ったとあり、鎌倉時代のはじめまでには大神系の植田氏がこの地を得ることになる。

弘安8年（1285）の『豊後国図田帳』には、植田荘は十名に分かれ、個々に地頭がいたことがわかる。さらに、「上義名五拾六町六段 大輔房有秀 乙犬名六拾丁八段 同人」とあり、「乙犬」が後に紹介する乙院屋敷遺跡（小字「乙院屋敷」）の「乙院」に転訛したことを伺わせる記事である。南北朝期に入ると植田氏一族である靈山寺院主有快が上義、乙犬、上乙犬、下永富、吉藤、福重渡地内地行地半分地頭となり、領地の拡大をはたしている。建武3年（1336）には南朝方が国府（高国府）攻略を目指し植田荘内にある靈山寺を占拠し、靈山寺から国府に至る経路上にある有快の館を「在家数十字」とともに焼き払うという事件が起こる。このことは、中世の段階で、地頭の館を中心に集村していたことを伺わせるものである。今日残る小字名をみると、前記の「乙院屋敷」のほかに「新屋敷」「寺屋敷」「田中屋敷」「田代屋敷」「八幡田屋敷」「内屋敷」「外屋敷」「ヤシキ」の地名を残しており「屋敷」を中心に集落を形成していったものと考えられる。このように、植田氏は地頭として各名の経営にあたるが、鎌倉時代中期にいたり、植田惣領家は守護大友氏より養子を迎え入れ実質的には大友系となる。そして、戦国期には植田氏も滅亡し、植田荘は大友家臣の給地として分割されることになる。

近世になると七瀬川上流域より木の山村（延岡藩領）、口戸村（延岡藩領）、市村（白杵藩領）、粟野村（延岡藩領）、桑本村（白杵藩領）、雄城村（延岡藩領）、下宗方村（白杵藩領）、上宗方村（白杵藩領）となる。各村ともに前述した自然堤防上、微高地上に集村した形態をとるもので、今日でも村境には同時代に建立された六地藏石幢を随所にみることができ往時の面影を色濃く残している。延岡藩、白杵藩の支配は幕末まで続き近代を迎えることになる。

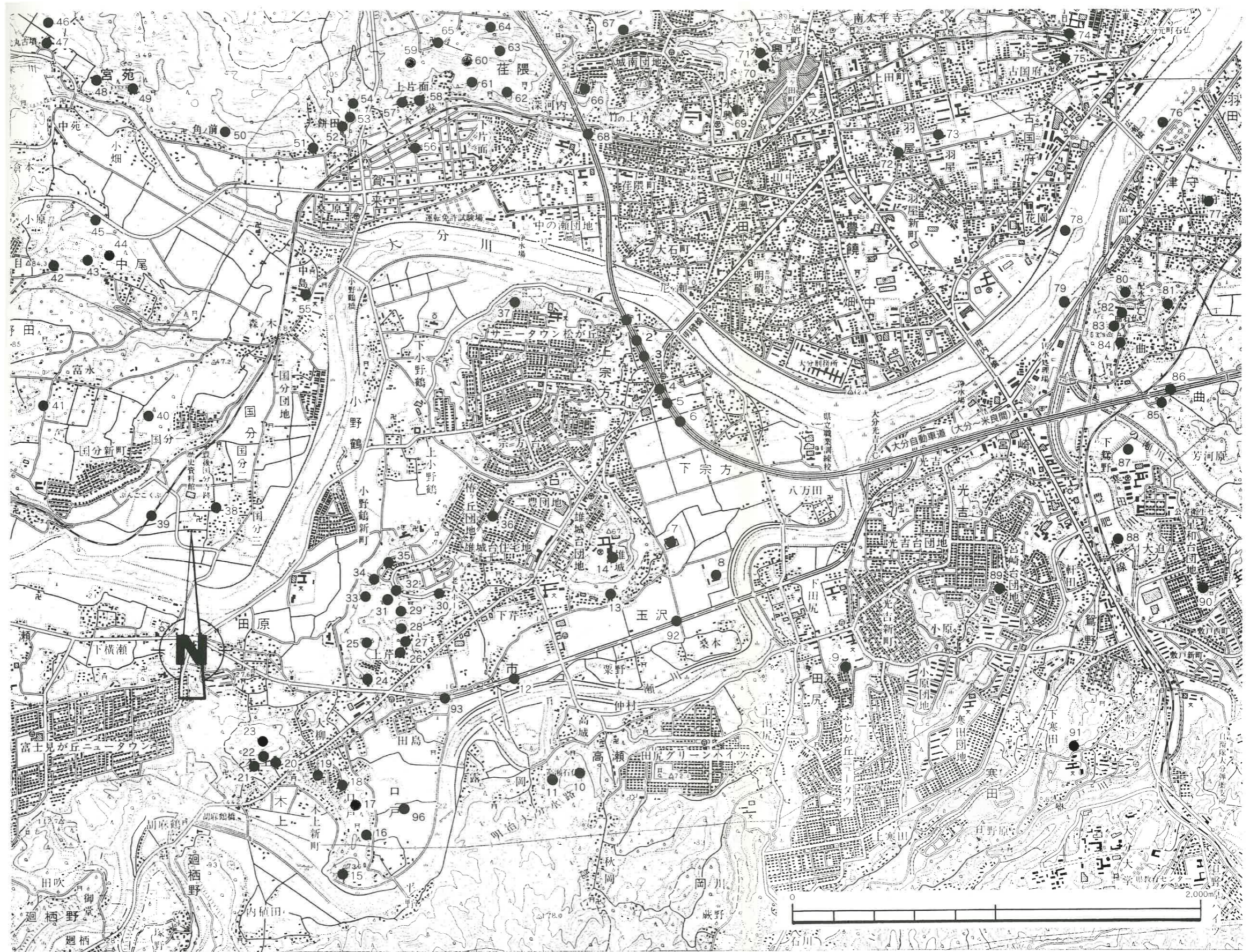
参考文献

- 富来隆・中村俊一・杉崎重臣「庄ノ原遺跡」『大分市の文化財』3 大分市教育委員会 1962
清水宗昭・渋谷忠章『下黒野遺跡』大分県教育委員会 1974
真野和夫「蓬萊山古墳」『日本考古学年報』27 1976
波田野光洋『守岡遺跡』大分市教育委員会 1979
真野和夫『豊後国分寺』大分市教育委員会 1979
讀岐和夫「豊後国府推定地周辺の発掘調査-大分市古国府・羽屋地区の近年の調査から-」『大分県地方史』117号 1984
『大分県史』先史編Ⅱ 大分県 1983
『大分県史』古代編Ⅱ 大分県 1983
『大分市史』上 大分市 1987
吉田 寛『大分市植田市遺跡の調査概要』3 大分県教育委員会 1987
吉田 寛『植田市遺跡』Ⅰ 大分県教育委員会 1988
吉田 寛『植田市遺跡』Ⅱ 大分県教育委員会 1989
吉田 寛『植田市遺跡』Ⅲ 大分県教育委員会 1990
吉田 寛『植田市遺跡』Ⅳ 大分県教育委員会 1991
綿貫俊一『賀来中学校遺跡』大分県教育委員会 1992
坪根伸也『賀来中学校遺跡』大分市賀来中学校プール移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会 1992
渡辺澄夫『豊後国荘園公領史料集成』五（下）別府大学附属図書館 1993
吉田 寛『植田市遺跡』大分県教育委員会 1994
染矢和徳『植田平石遺跡』大分県教育委員会 1994
中野幡能監修『大分県の地名』日本歴史地名大系第45巻 平凡社 1995
高橋 徹 江田 豊 田中裕介 友岡信彦 染矢和徳『机張原遺跡 女狐近世墓 庄ノ原遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（5）大分県教育委員会 1996
坪根伸也 塩地潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ-羽屋・井戸遺跡とその周辺の調査から-」『大分県地方史』163号 1996
小柳和宏『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』国道210号バイパス（木ノ上工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1997

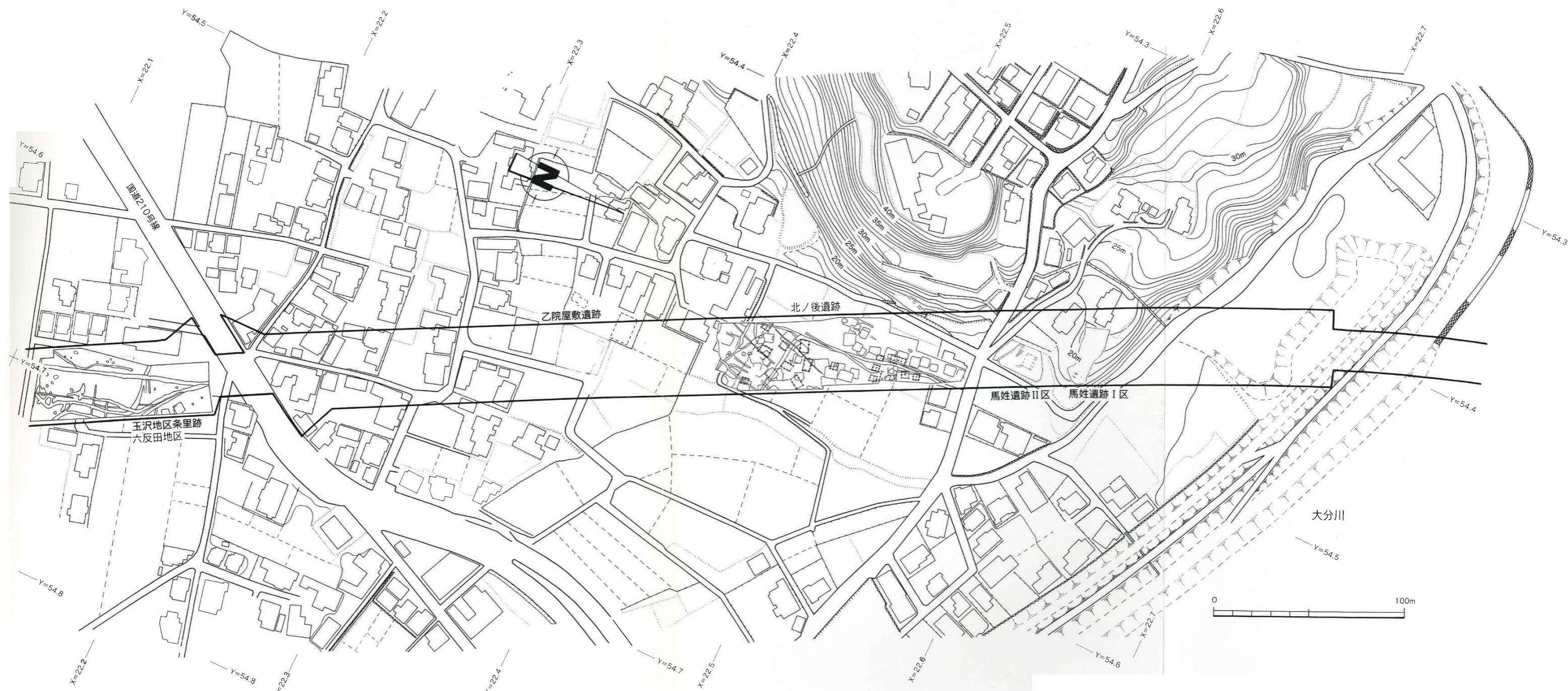
番号	遺跡名	時代
1	馬姓遺跡	近世 他
2	北ノ後遺跡	弥生・古墳・中世
3	乙院屋敷遺跡	江戸
4	玉沢地区条里跡 六反田地区	古墳
5	同 山伏田遺跡	縄文
6	同 二反田遺跡	縄文
7	深町遺跡	弥生
8	植田平石遺跡	弥生
9	東山田横穴墓群	古墳
10	高城山城跡	中世
11	高瀬横穴墓群	古墳
12	植田市遺跡	弥生・古墳・中世 他
13	雄城台下横穴墓群	古墳
14	雄城台遺跡	弥生・中世
15	岩崎横穴墓群	古墳
16	浅草神社古墳群	古墳
17	千人塚	中世
18	御陵古墳	古墳
19	木ノ上古道石棺群	古墳
20	土肥横穴墓群	古墳
21	志土地横穴墓群	古墳
22	木ノ上峠横穴墓群	古墳
23	山伏古墳群	古墳
24	稲荷古墳	古墳
25	大將軍古墳	古墳
26	世利門古墳	古墳
27	漆間古墳	古墳
28	高来山古墳	古墳
29	虎御前古墳	古墳
30	下迫古墳	古墳
31	漆間横穴墓群	古墳
32	六部塚古墳	古墳

番号	遺跡名	時代
33	大曾3横穴墓群	古墳
34	大曾2横穴墓群	古墳
35	大曾横穴墓群	古墳
36	椿ヶ丘横穴墓群	古墳
37	小野鶴横穴墓群	古墳
38	豊後国分寺跡	古代
39	国分遺跡	古代
40	国分台遺跡	縄文
41	野田遺跡	旧石器 他
42	中尾古墳2号墳	古墳
43	中尾遺跡	古墳
44	中尾古墳	古墳
45	小原横穴墓群	古墳
46	宮苑遺跡	中世
47	千代丸古墳	古墳
48	中村遺跡	弥生
49	岩御堂横穴墓群	古墳
50	餅田古墳群	古墳
51	餅田横穴墓群	古墳
52	井手ノ上横穴墓群1	古墳
53	井手ノ上古墳	古墳
54	井手ノ上横穴墓群2	古墳
55	賀来中学校遺跡	弥生・中世
56	上片面遺跡	縄文
57	上片面横穴墓群	古墳
58	丑殿古墳	古墳
59	庄ノ原片面遺跡	縄文
60	田崎古墳群	古墳
61	万寿山古墳群	古墳
62	深河内古墳	古墳
63	田崎遺跡	古墳
64	庄ノ原遺跡	旧石器 他

番号	遺跡名	時代
65	蓬萊山古墳	古墳
66	尼ヶ城遺跡	弥生 他
67	城南遺跡	弥生 他
68	荏隈杉下遺跡	縄文・弥生
69	永興遺跡	古代
70	弘法穴古墳	古墳
71	千人塚	古墳
72	羽屋園遺跡	古代
73	金剛宝戒寺跡	古代
74	岩屋寺横穴墓群	古墳
75	岩屋寺遺跡	中世
76	大分川河川敷3遺跡	縄文・弥生
77	津守遺跡	弥生
78	大分川河川敷1遺跡	縄文・弥生
79	大分川河川敷2遺跡	縄文・弥生
80	滝尾守岡横穴墓群	古墳
81	曲迫横穴墓群	古墳
82	守岡遺跡	弥生・中世
83	守岡古墳	古墳
84	曲平横穴墓群	古墳
85	一ノ迫横穴墓群	古墳
86	曲遺跡	弥生 他
87	芳川原古墳	古墳
88	鴛野遺跡	弥生
89	千人塚古墳	古墳
90	穴井下横穴墓群	古墳
91	大久保横穴墓群	古墳
92	植田条里遺跡	古墳
93	ガランジ遺跡	弥生 他
94	玉沢地区条里跡 田仲地地区	古墳



第3図 馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院「大分」2万5千分の1地形図より転載）



第4図 馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡周辺地形図

馬 姓 遺 跡

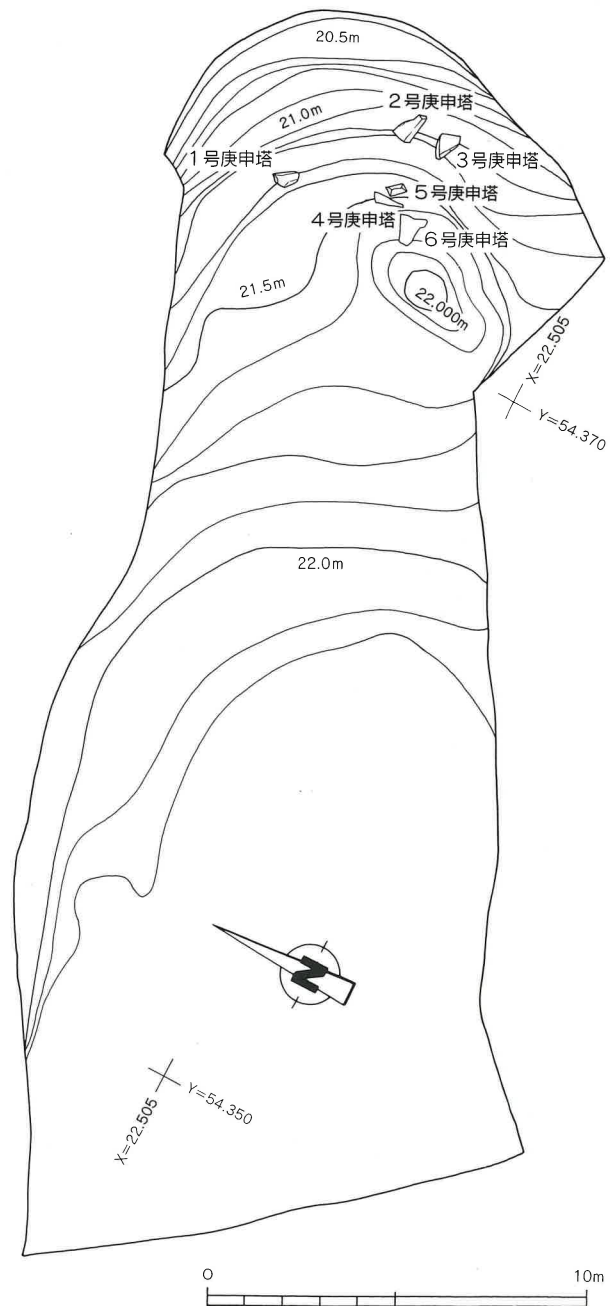
Ⅲ. 馬姓遺跡

1. 調査の概要

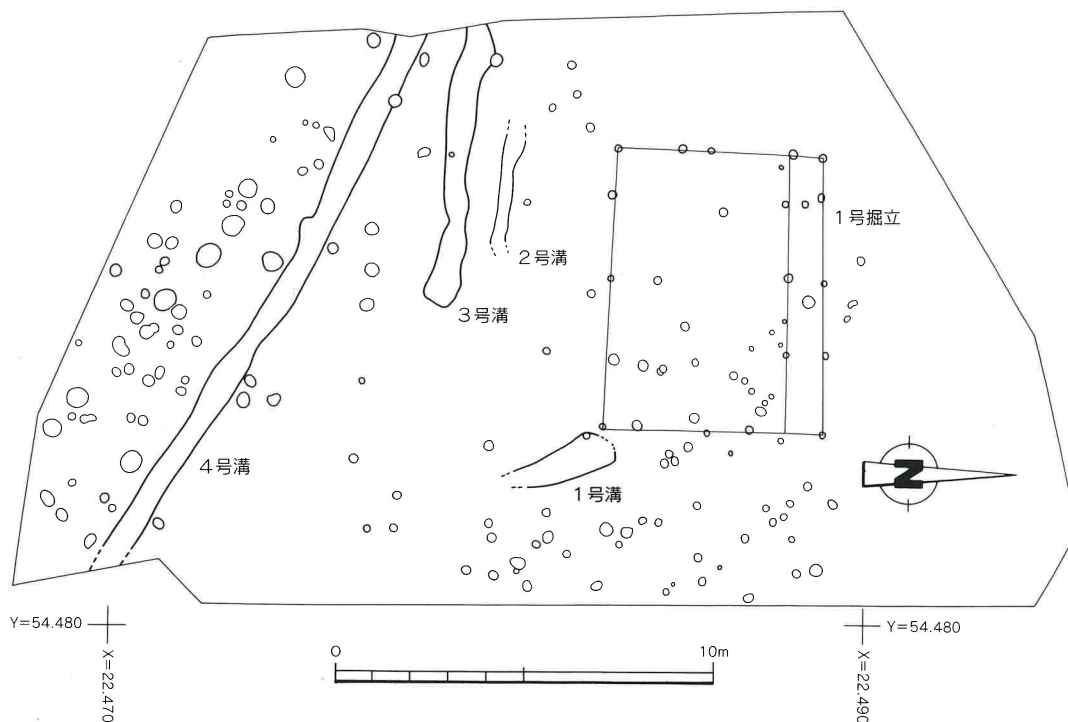
遺跡は大分市大字上宗方字馬姓に所在するもので、北側は大分川の現河道、東側は旧河道、南側は北ノ後遺跡の所在する河岸段丘、西側は比高差約30mの丘陵に面している。調査区は松ヶ丘ニュータウンが位置する丘陵から東西にのびる尾根筋先端部、さらに、その尾根筋と隣の尾根筋がつくりだす狭小な谷底の平坦部に確認されたものである。尾根筋は急峻で東を除く三方を崖面が覆い、崖面の間に西から東に緩やかな勾配のついた谷部が存在するものである。当該区は便宜上、尾根筋上をⅠ区、谷底平坦部をⅡ区とした。

Ⅰ区は踏査時に庚申塔2基を確認しており、これらに伴う遺構、遺物が想定されたため調査を実施した。調査は重機により雑木林を伐採撤去し、重機と手作業により表土層（植物による腐植土）のみを除去した。除去作業中には表土層直下より新たに4基の庚申塔が出土し計6基となった。調査区内の土砂堆積状況は表土層（厚さ10cm～30cm）－砂礫層（厚さ約7m）－凝灰岩層（地山基盤層）の順である。表土除去後の標高は20.450m～22.250mであるが、調査区西半分は宅地造成に伴い平坦に削平を受けており、東半分は尾根筋先端部に進むにしたがって急峻さを増していく地形である。出土した庚申塔は共に尾根筋東端に集中して設置されており、1号・5号が原状のままで、2号～4号・6号が倒れた状態で確認された。塔の広がりを観ると1号～3号が21.100m～21.300mの等高線沿いに、4号～6号が21.500m～21.600mの等高線沿いに分布していることが確認された。調査中、土地所有者、地域住民に庚申塔に関する聞き取り調査を実施したが、移築の有無、伝承などは聴取できなかった。

Ⅱ区は隣接地で事前に調査の進んでいた北ノ後遺跡の広がりが推定されたため調査を実施した。調査は雑木林を手作業で伐採撤去し、重機を用い表土より2mほど掘り下げた。調査区内の土砂堆積状況は表土層（厚さ1.5mの埋土層）－暗褐色土層（厚さ50cmで北ノ後遺跡基本層序のⅧ層に類似する。第18図参照）－褐色粘質土層（遺構検出面で拳大の礫を含む、最大厚2m、北ノ後遺跡基本層序のⅪ層に類似する）－凝灰岩層（地山基盤層）の順である。遺構検出面の標高は14.950m～15.350mである。北ノ後遺跡の標高が12m～14m前後であることから、一段高い斜面に遺跡が展開していたことになる。確認された遺構は掘立柱建物跡1基、溝状遺構4条、柱穴群である。



第5図 馬姓遺跡Ⅰ区遺構配置図



第6図 馬姓遺跡Ⅱ区遺構配置図

2. I区の遺構と遺物

1号庚申塔

庚申塔は調査区の北東隅、塔群の最も北側にあり、標高21.300mの等高線上に正面を西北西に向けて建立されている。石材は凝灰岩で平坦な自然面を正面に、側面、背面、底面は打ち欠き丸味をもたせている。上部が一部欠けており、やや北側に傾いているが原状を止めているものと推定される。全高92cm、全幅63cm、最大厚23cmを測り、正面には右より「寶曆四申戌 上宗方邸 ○奉請庚申供艱之塔 正月初十日 願主講中」と刻字されている。精査の結果、塔直下及び周辺に遺構、遺物は確認されなかった。

2号庚申塔

庚申塔は調査区の東端、塔群の最も東側にあり、標高21.100m～21.200mの等高線上に正面から倒れていた。石材は凝灰岩で平坦な自然面を正面にし、他の面は加工されていなかった。全高90cm、全幅57cm、最大厚24cmを測り、正面には墨書で上段右から「寶曆□□□ ○奉待庚申十八座 □□□□」、下段右から「□□□門 □□□□ □兵□ □兵衛 □吉 □□□□ □□□門 □□□門 □□□□」と書かれている。精査の結果、塔直下及び周辺に遺構、遺物は確認されなかった。

3号庚申塔

庚申塔は調査区の東端、塔群の東側にあり、標高21.100m～21.200mの等高線上に背面から倒れていた。石材は凝灰岩で平坦な自然面を正面に、背面、側面、底面は打ち欠き丸味をもたせている。全高76cm、全幅45cm、最大厚38cmを測り、正面には上段右から「延享□五年 ○奉待庚申塔 二月六日」、下段右からは「松右門 茂右門 牧右門 甚兵衛 □兵衛 善四良 善九良 甚内 新兵衛」と刻字されている。精査の結果、塔直下及び周辺に遺構、遺物は確認できなかった。

4号庚申塔

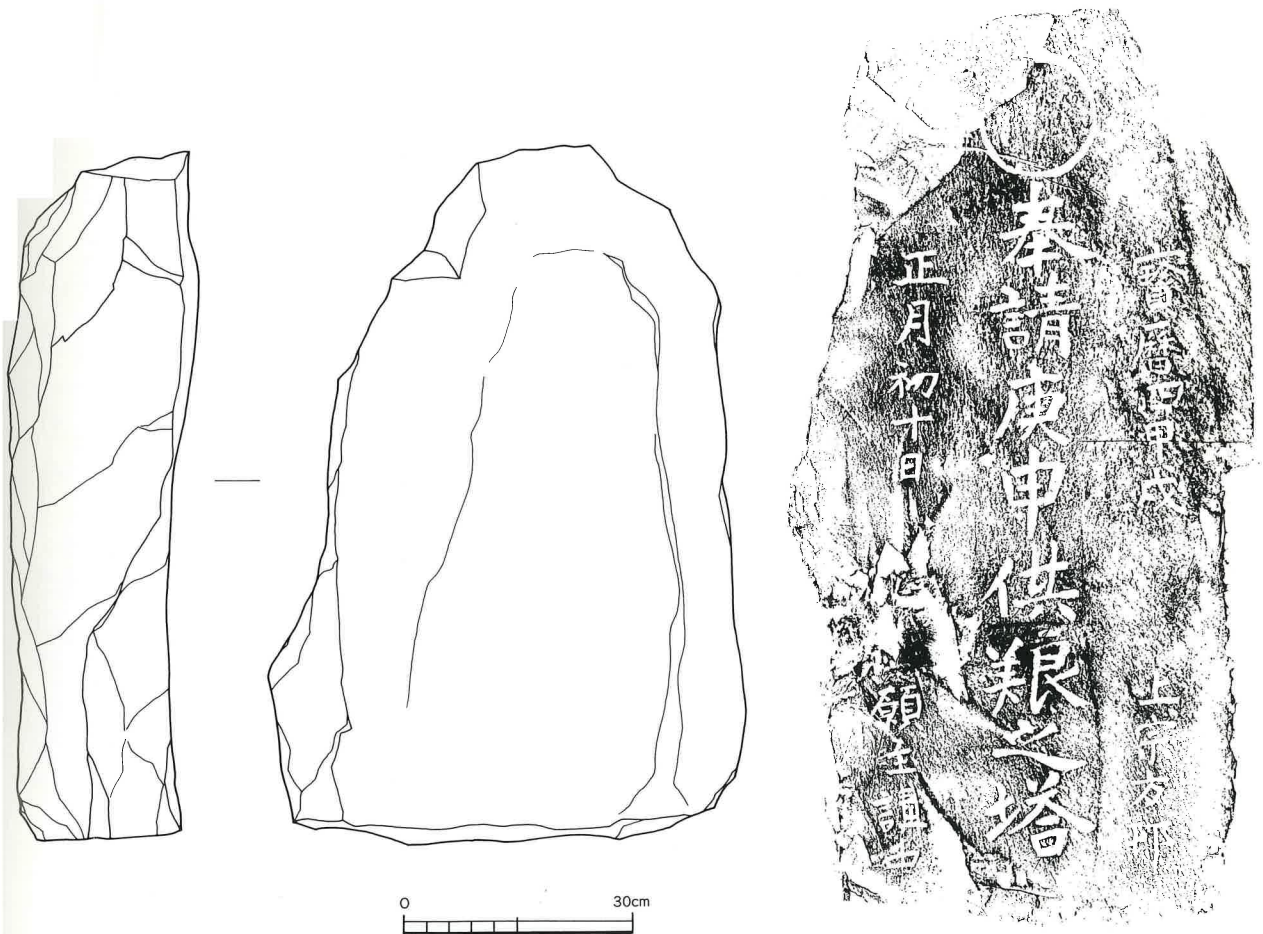
庚申塔は調査区の東側、塔群のほぼ中央部にあり、標高21.500mの等高線上に右側面から倒れていた。石材は凝灰岩で平坦な自然面を正面に、背面、側面、底面は打ち欠き丸味を持たせている。全高79cm、全幅29cm、最大厚18cmを測り、正面には右から「宝曆□卯年□志」「○奉待庚申尊」「十月十四日十一人」と刻字されている。精査の結果、塔直下及び周辺に遺構、遺物は確認されなかった。

5号庚申塔

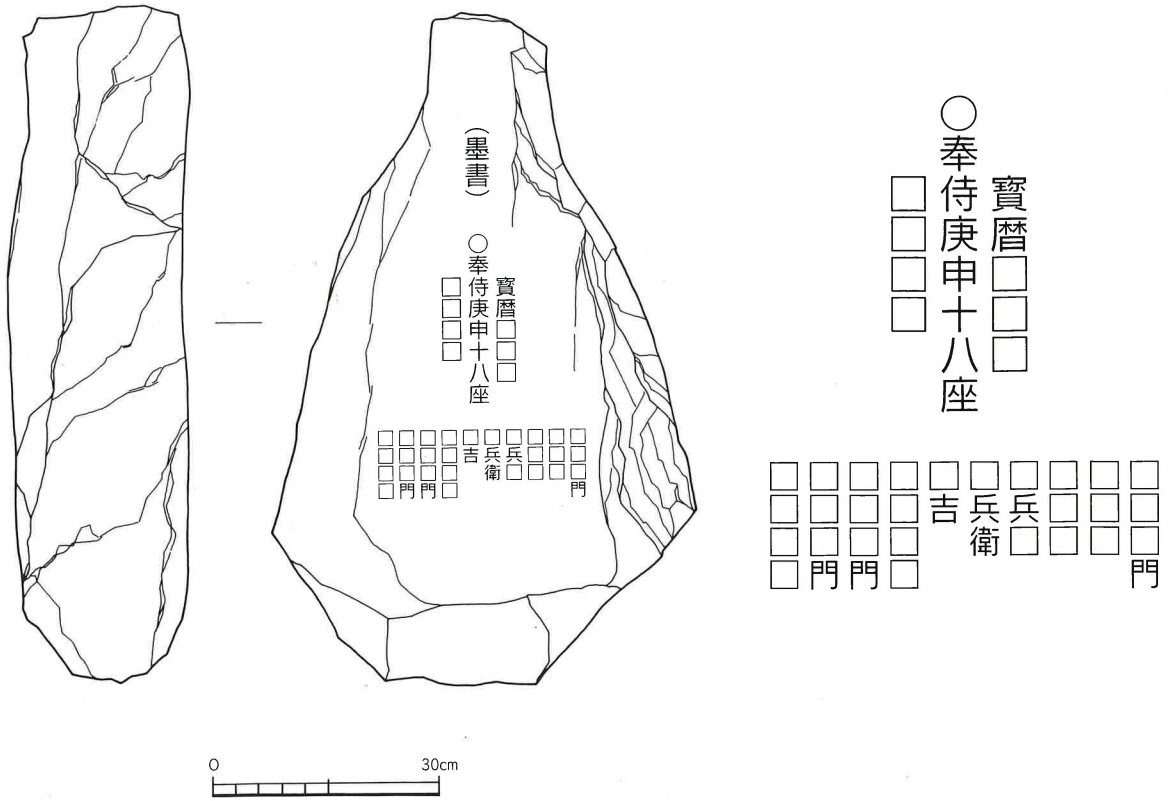
庚申塔は調査区の東側、塔群の中央部にある。標高21.450mの等高線上に正面を北東に向け建立されており、原状を止めているものと推定される。石材は凝灰岩で平坦な自然面を正面に、背面、側面、底面は打ち欠き丸味を持たせている。全高85cm、全幅47cm、最大厚21cmを測り、正面には上段右から「明和五戊子 丑庚申塔 八月上五日」、下段右からは「□右門 □祢 軍次 傳□門 傳□□ □七 □□□」と刻字されている。精査の結果、塔直下及び周辺に遺構、遺物は確認されなかった。

6号庚申塔

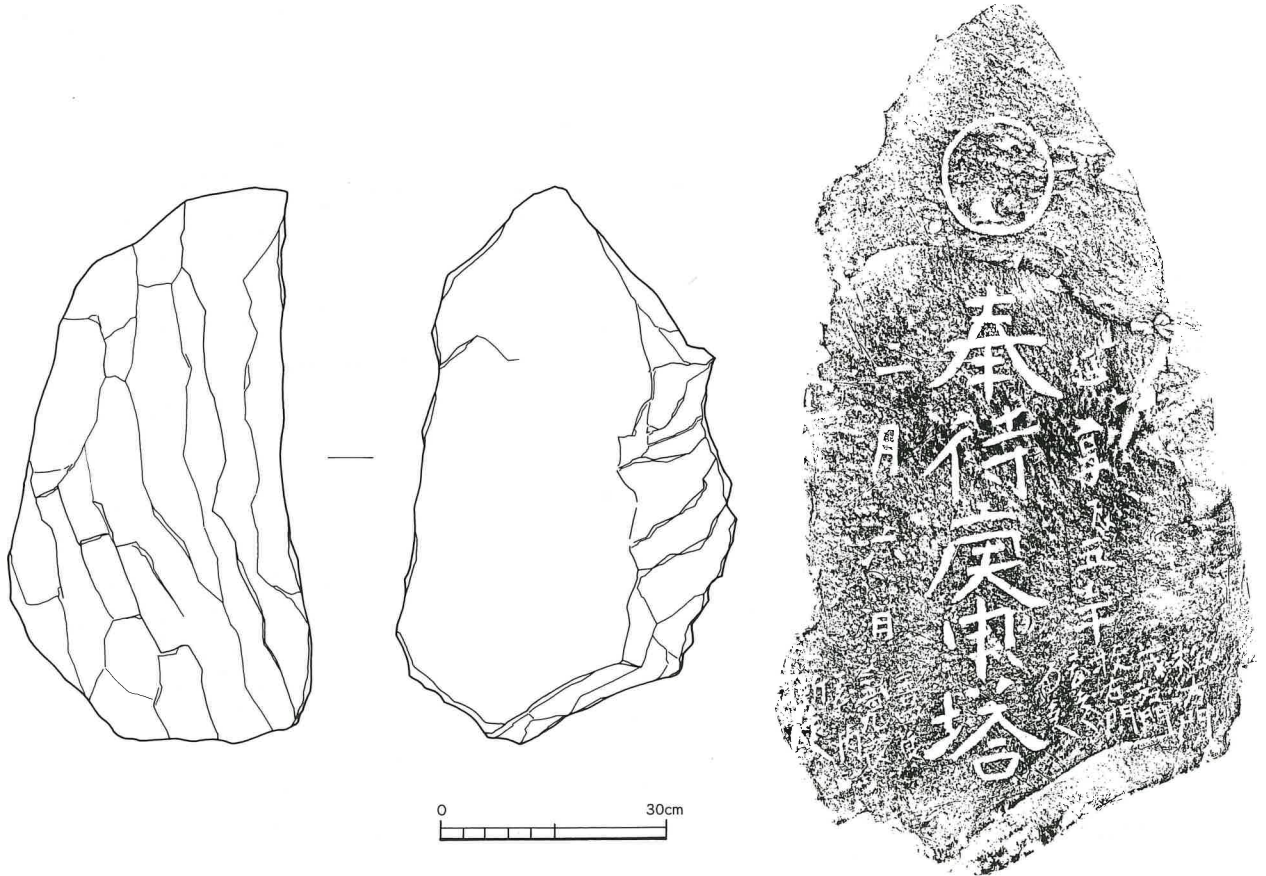
庚申塔は調査区の東側、塔群の西端にあり、標高21.800mの等高線上に背面から倒れていた。石材は凝灰岩で平坦な自然面を正面にし、他の面は加工されていなかった。塔上部は欠損している。全高80cm、全幅52cm、最大厚9cmを測り、正面には上段右から「寅延四未祀」「奉待背面金剛」「正月念二月」、下段右から「新兵衛 善四良 善九良 留兵衛 松右□門 甚兵衛 茂右□門 甚内 甚七 牧右衛門」と刻字されている。精査の結果、塔直下及び周辺に遺構、遺物は確認されなかった。



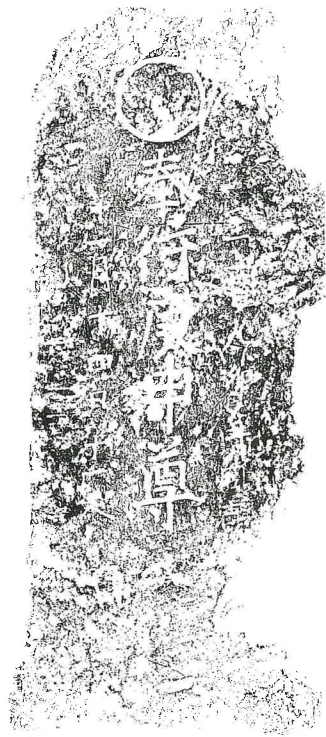
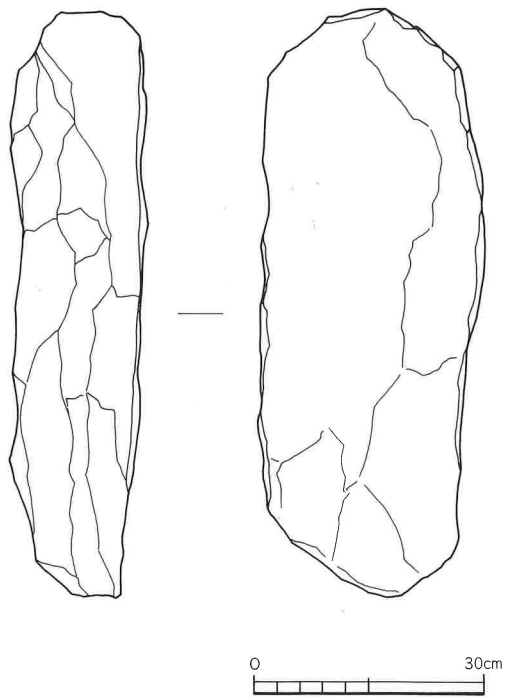
第7図 1号庚申塔実測図



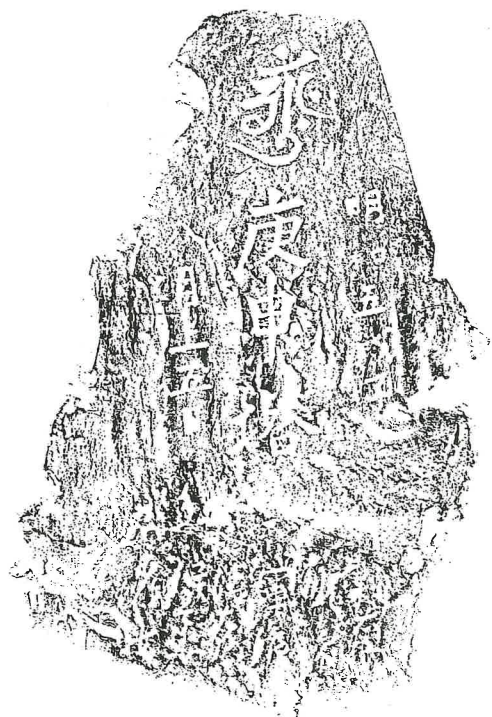
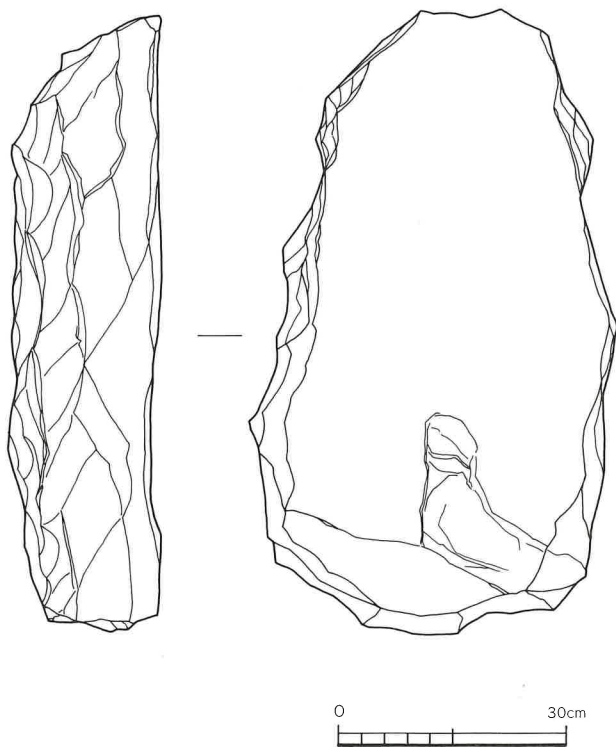
第8图 2号庚申塔实测图



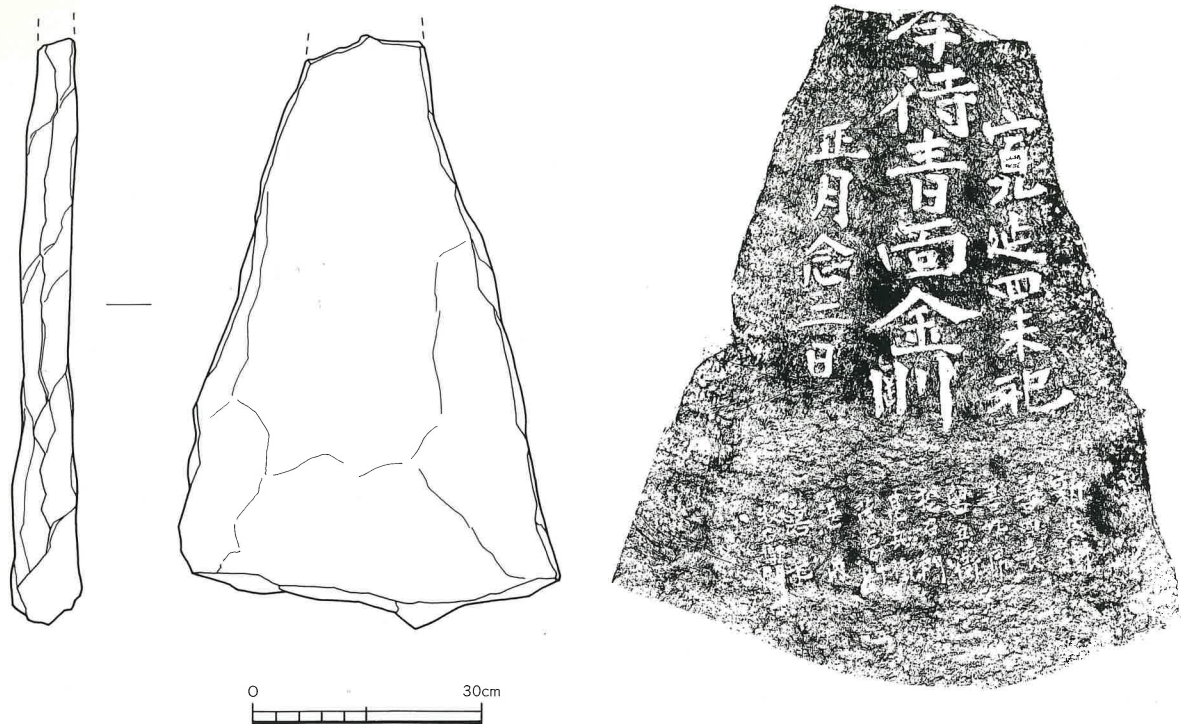
第9图 3号庚申塔实测图



第10图 4号庚申塔实测图



第11图 5号庚申塔实测图

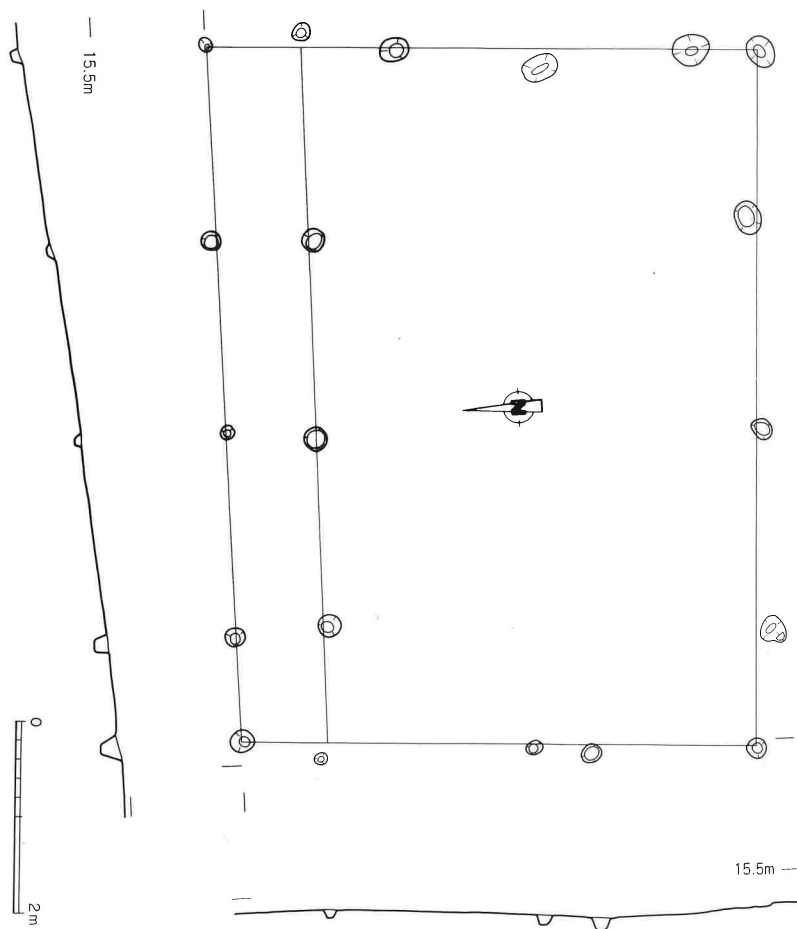


第12図 6号庚申塔実測図

3. II区の遺構と遺物

1号掘立柱建物跡

建物跡は調査区の北側に位置する片廂の掘立柱建物跡で、平面プランはやや台形状を呈している。残存状況は悪く、柱穴の深さが3cmほどのものもある。遺構は桁行7.23m、梁行4.78mで、棟がほぼ東西方向を向いている。廂の部分は身舎北側に設けられているもので、梁行1.01mである。身舎部分の柱穴の掘り方は最大で長軸40cm、短軸32cm、深さ16cmである。廂の柱穴は身舎の柱穴に比べ概して小さく、最大で長軸24cm、短軸23cm、深さ21cmである。柱穴礎石を遺す柱穴は確認されなかった。柱穴埋土は黒褐色一層で調査区内の他の遺構埋土と同じであるが、遺構内からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。



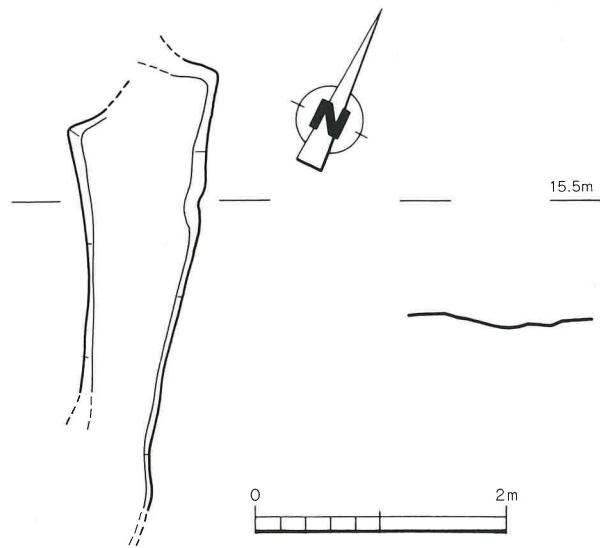
第13図 1号掘立柱建物跡実測図

1号溝

遺構は調査区の東側を北北西から南南東に走るが、両端を消失している。1号掘立柱建物跡に隣接した位置にあるが、同時期に用いられたものかは不明である。確認できる規模は全長3.92m、最大幅92cm、最大深8cmである。底部は凹凸があり、立ち上がりも不明瞭である。埋土は黒褐色土一層である。遺構から遺物は出土しなかった。

2号溝

遺構は調査区の中央部を西北西から東南東に走るが、両端を消失している。確認できる規模は全長2.82m、最大幅56cm、最大深12cmである。底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。埋土は黒褐色土一層である。遺構から遺物は出土しなかった。



第14図 1号溝状遺構実測図

3号溝

遺構は調査区の南西側を西北西から東南東に走る。西南西側は調査区外へ続くと考えられるが、東南東端は段掘りになり途切れた形状をとる。確認できる規模は全長6.28m、最大幅83cm、最大深32cmである。底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。埋土は黒褐色土一層である。遺構から遺物は出土しなかった。

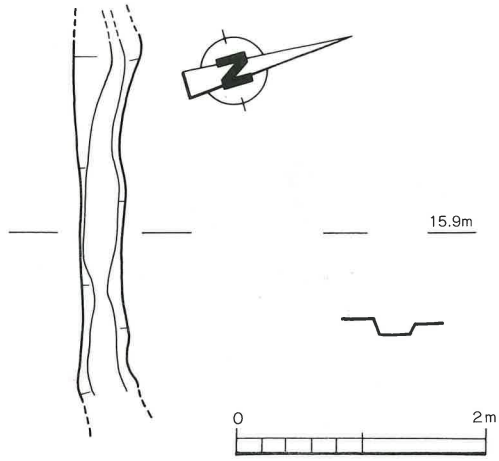
4号溝

遺構は調査区の南側を西北西から東南東に横断している。西北西側は区外に続くものと考えられるが、東南東端は消失している。確認できる規模は全長16.55m、最大幅92cm、最大深47cmで、中央部に段差を一段確認できる。底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。埋土は黒褐色土一層である。遺構から遺物は出土しなかった。

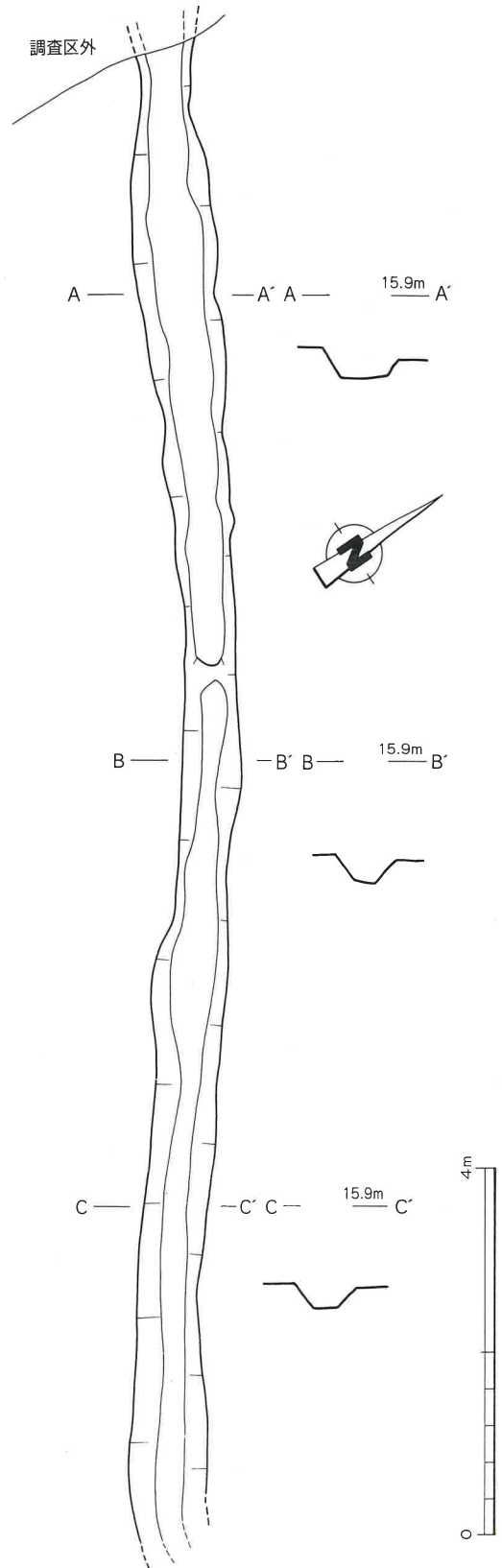
4. 小結

I区で確認された庚申塔の時期は銘文から延享年間（1744～1748）1基、寛延年間（1748～1751）1基、宝暦年間（1751～1764）3基、明和年間（1764～1772）1基で、ともに文字塔である。各塔とも江戸時代中期のもので、地元では「こうしんさま」の名称で親しまれているが、前述したように、移築の有無や伝承等は確認できない。各庚申塔は自然石に手を入れたもので、主尊に「青面金剛」と施されたもののほかは、「庚申」を刻字あるいは墨書しており、ともに、典型的な庚申塔といえる。さらに、主尊に関連するものとして梵字などをみると5号庚申塔に「胎藏界大日如来（アーンク）」がみられる。造塔については1号庚申塔に「願主講中」、2号・3号・5号・6号庚申塔には人名を記銘していることから、地域組織「組」や信仰集団「講」あるいは生活単位の構成人員により設けられたものと考えられる。上宗方集落に点在する石造品をみると、他の集落へつながる路傍や道の分岐点及び辻々に祀られており、通行の安全や災いの侵入を防ぐ役割を持つことが考えられる。馬姓遺跡の庚申塔も同様に大分川沿いにつながる里道沿いに建てられていることから、大分川方向への通行の安全と災いの入り込みを防ぐ願いが込められているかもしれない。

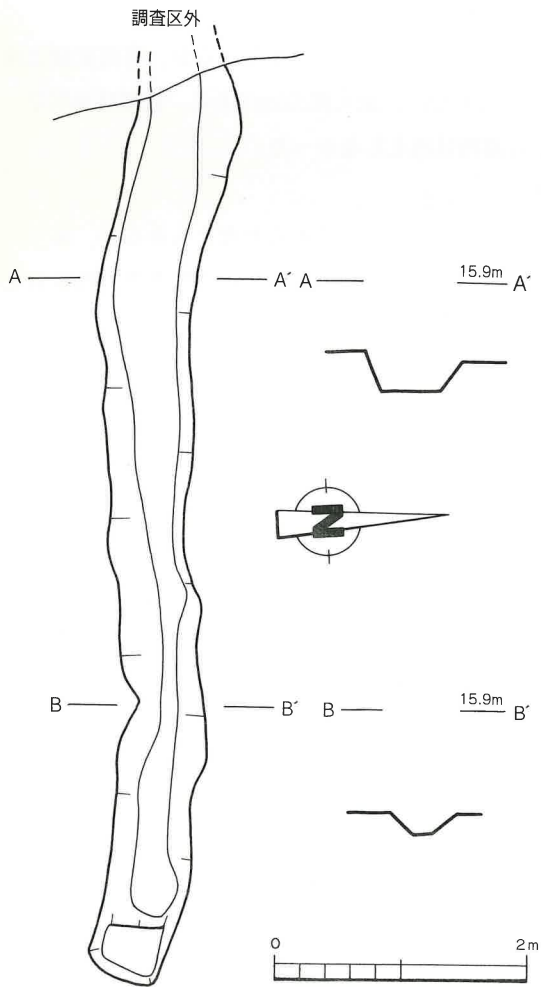
II区からは時期を特定できる遺物は出土していない。柱穴の分布は2号溝南側及び1号掘立柱建物跡周辺に集中している。溝は1号溝を除き谷筋に添い設けられている。掘立柱建物は各溝に比べ一段高い所にあることから溝は建物への浸水を防ぐ施設の可能性もある。II区は北ノ後遺跡にくらべ1.5m程高い立地となっているが各遺跡間の関係は不明である。



第15図 2号溝状遺構実測図



第17図 4号溝状遺構実測図



第16図 3号溝状遺構実測図

北ノ後遺跡

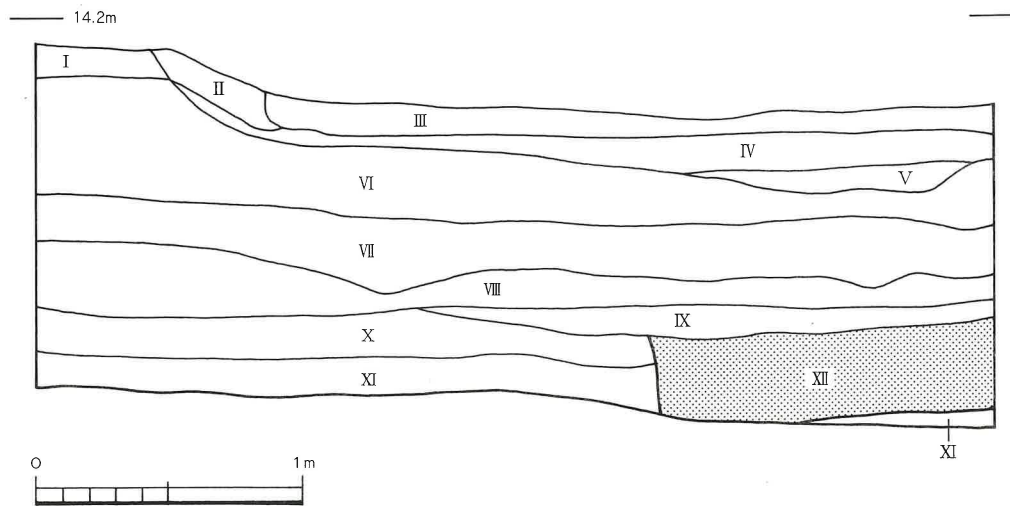
IV. 北ノ後遺跡

1. 調査の概要

遺跡は大分市大字上宗方字北ノ後及び字柵山に所在するもので、北側を尾根筋と谷部により構成される馬姓遺跡、東側を大分川の旧河道、南側を乙院屋敷遺跡の所在する扇状地、西側を比高差約30mの丘陵に取り囲まれている。遺跡は大分川がつくりだした段丘上に展開しており、調査区は段丘を北北西から南南西に横断するかたちで設定した。段丘の全面積は約10,500㎡で今回の調査面積は約半分にあたる約5,000㎡である。当該区は玉沢地区条里跡の北側に隣接するもので、条里遺構及びそれらに関する遺跡の広がりが想定されたため調査を実施した。遺跡及び調査区の現況は宅地及び耕作地で階段状に削平されおり遺構・遺物の残存状況は悪かった。調査は家屋の撤去後、重機と作業員の手作業で遺構・遺物の検出を行なった。検出面の標高は12.050m～13.010m前後で、確認された遺構は竪穴住居跡60基（内41基にカマドを確認）、掘立柱建物跡16基、土坑17基、溝16条、柵列状遺構1条等で、遺物も弥生・古墳時代を中心に多量に出土している。

層序

第18図の層序（1号住居～13号住居に対応）は13号竪穴住居跡を基準に東西方向に作成した土層図である。層序は基本的に4層に分けられ、I層～VI層は近年の耕作土、VII層～IX層は近年以前の堆積層で炭化物を含む、X層・XI層は遺構検出面、XII層は遺構埋土である。調査区内は階段状に削平されていたため、調査区の中央部から南部にかけてはVIII層直上に現代の耕作土が客土されていた（25号住居～60号住居に対応）。また、標高の最も高い西側ではXI層直上に耕作面が造成されていた（14号住居～24号住居に対応）。層序より旧地形は西上がりの緩やかな斜面であったと推定される。



- | | |
|----------------|---|
| I層：黄褐色砂質土層 | 現代の水田床土で酸化鉄が大量に沈着する。 |
| II層：灰褐色弱粘質土層 | 現代の耕作土。 |
| III層：灰色粘質土層 | 現代の耕作土。 |
| IV層：黄褐色粘質土層 | 硬くよく締まる。 |
| V層：灰褐色弱粘質土層 | 硬くよく締まり黄褐色粘質土の粒が混入する。 |
| VI層：褐色弱粘質土層 | 硬くよく締まりバサバサしている。 |
| VII層：黒褐色弱粘質土層 | よく締まり炭化物を僅かに含む。 |
| VIII層：暗褐色弱粘質土層 | よく締まり炭化物を僅かに含む。 |
| IX層：灰色砂礫層 | 極めてよく締まり砂と豆粒大の礫を主とする。 |
| X層：黒褐色粘質土層 | よく締まり土器片と炭化物を含む。(遺構検出面) |
| XI層：黄褐色粘質土層 | 地山基盤層。(遺構検出面で拳大の礫を含む。馬姓遺跡II区の褐色粘質土層に類似) |
| XII層：暗褐色粘質土層 | 13号竪穴住居跡の埋土で土器片及び炭化物を含む。 |

第18図 北ノ後遺跡基本層序

カマド

カマドについては第19図に示す用語を使用して説明する。なお、この模式図及び名称は『塚堂遺跡』Ⅳ 福岡県教育委員会 1985 13頁の「第3図 カマド模式縦断面図」及び「表3 カマド模式計測表」を一部改変して使用させていただいた。

カマド基盤床

今回、確認された竪穴住居跡に伴う張床は検出されておらず、カマド構築時の張床（掘り方）とこの張床（掘り方）無しでカマドを付設した二つのタイプに分けられる。

前庭

カマド前方（袖石より外）の構築時につくられた窪みと薪、炭化物、灰の出入により窪みが生じた部分及び薪、炭化物、灰の堆積層の広がりを示す。

焚口室（焚口部：袖石・天井石）

焚口袖石間でカマドの前室である。焚口袖石、天井石はカマド構築の際、骨組みとなる石で、袖石は河原石か遺跡西側に所在する丘陵の斜面から採取される黄色の堆積岩及び凝灰岩を方柱状に加工して用いる。天井石は前記の堆積岩と凝灰岩を同様に加工し用いている。

燃焼室（焚燃部－支脚部－炎焼部）

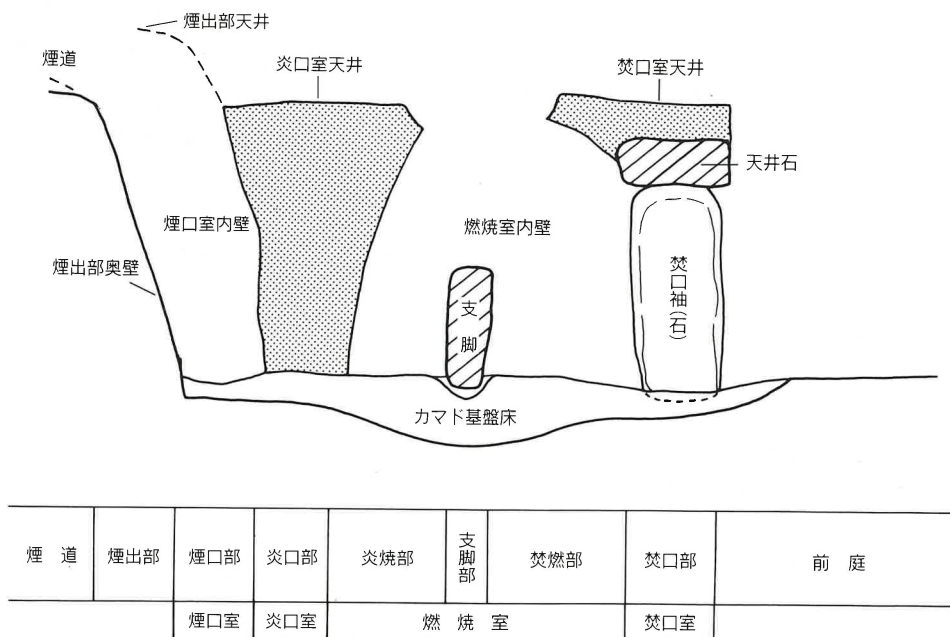
カマド中室である。焚燃部は支脚前方の燃料を燃焼させる部分を示し、当該図では熱変赤色硬化した部分である。支脚部は支脚とその側部で、出土した支脚は上記袖石、天井石同様の黄色の堆積岩及び凝灰岩を方柱状に加工したもの、甕（底部を打ち欠き使用）、高坏を用いている。炎焼部は支脚後方の炎が及ぶ部分を示す。

炎口室（炎口部）

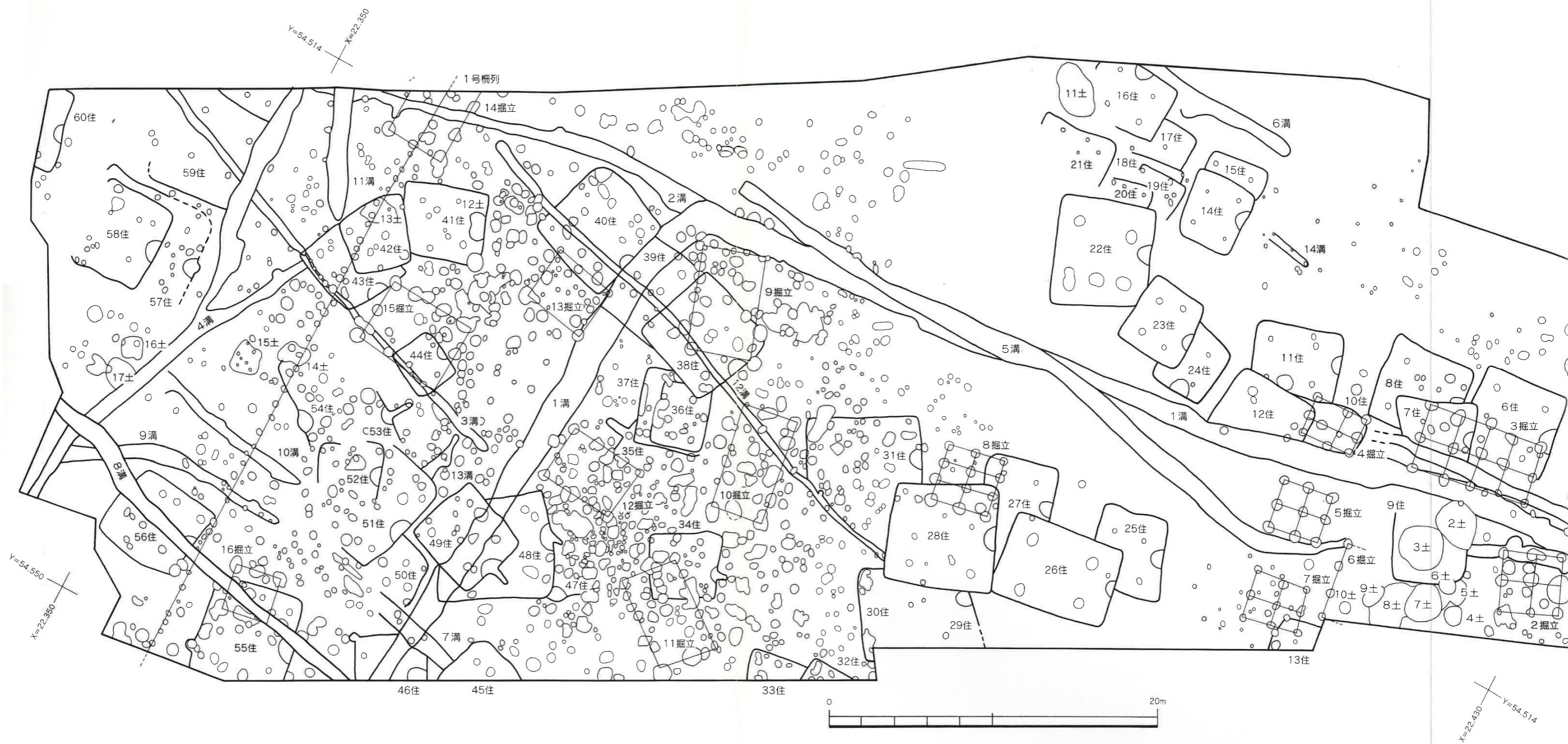
カマドの後室である。炎が最終的に及ぶ部分で、今回、確認されたカマドから炎口袖石及びそれに伴う掘り方は検出されていない。

煙口室（煙口部）－煙出部－煙道

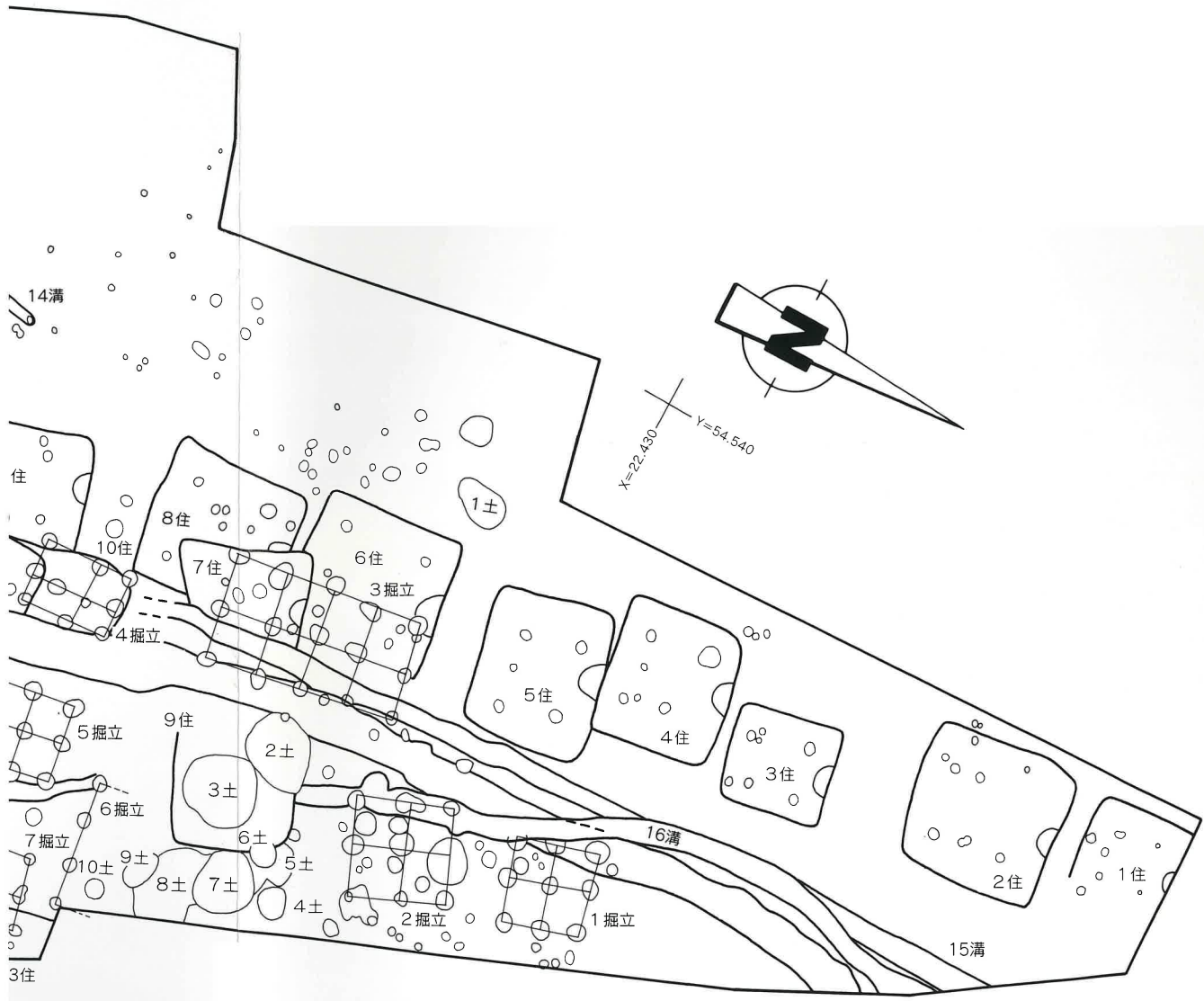
カマド奥室の排煙施設である。奥壁の下端までを煙口部、下端から奥壁上端までを煙出部、住居外部に続く排煙遺構（煙道）をそれぞれ示す。



第19図 カマド模式縦断面図及び名称



第20図 北ノ後遺跡遺構配置図



2. 遺構と遺物

a. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

遺構は調査区の最北端に位置する。住居北側にはカマドを付設しているが、北壁は調査区外に広がるため確認されなかった。東壁は削平されている。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は3.84m×3.45m、最大深36cmである。支柱穴は4基である。

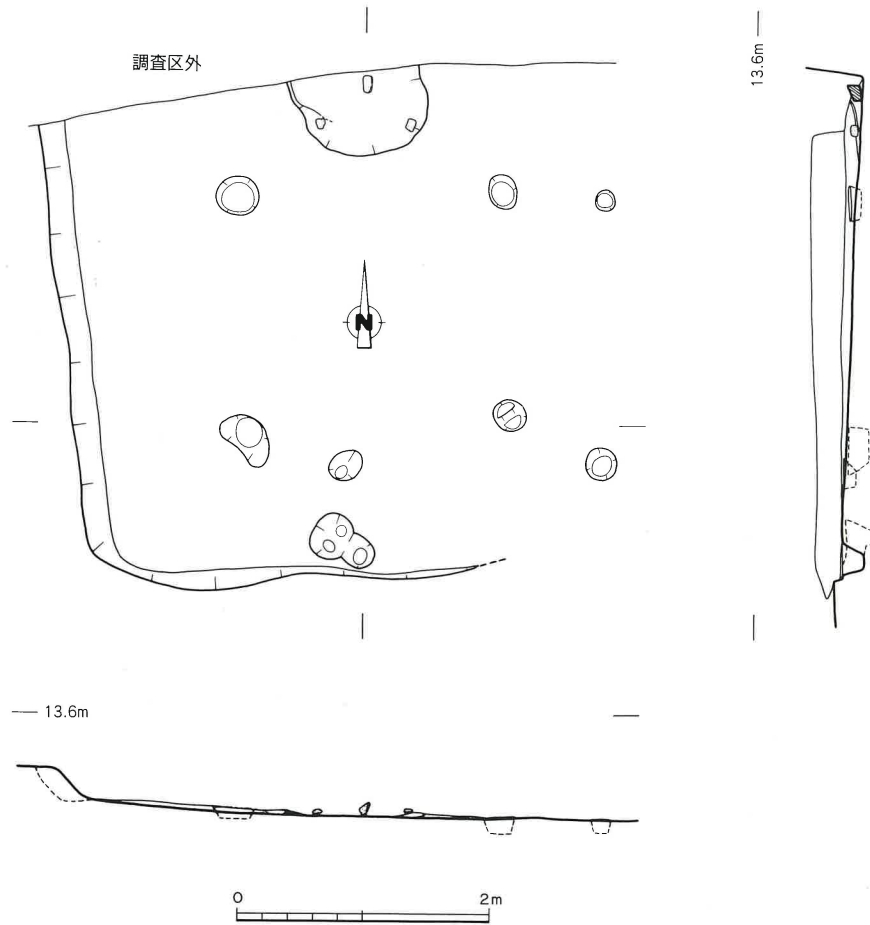
1号竪穴住居カマド跡

住居北側より確認されたものであるが、住居北壁が調査区外に展開するため、カマドも支脚部より前面の構造しか検出できなかった。遺構の残存状態は悪くカマド基盤床、左右焚口袖石、支脚を残すのみであった。基盤床の平面プランはカマボコ形で、確認できる規模は長軸1.05m、短軸57cm、最大深9cmである。袖石及び支脚は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工して用いていた。

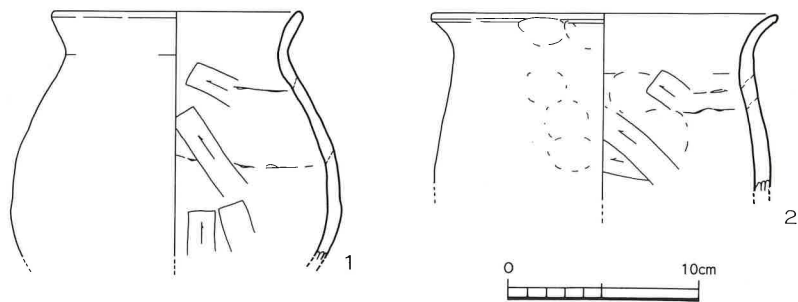
1号竪穴住居カマド跡出土遺物

1・2は土師器甕の口縁部から胴部に至る部分で、カマド精査時に出土した。1の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、黒色

砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデ、内面の口縁部から頸部にかけては横ナデ、頸部から胴部にかけては粘土積み上げ痕とヘラナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が褐色である。遺物外面の赤変は二次加熱を受けたものと考えられ、全面に煤の付着を確認できる。口径は13.3cm、胴部最大径は17.4cmである。2の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕と不定方向ナデ、内面口縁部は横ナデ、頸部以下は粘土積み上げ痕とヘラナデ及び指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が淡黄橙色である。遺物外面の赤変は二次加熱を受けたものと考えられ、全面に煤の付着を観察できる。口径は18.2cm、胴部最大径は17.9cmである。1・2は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。



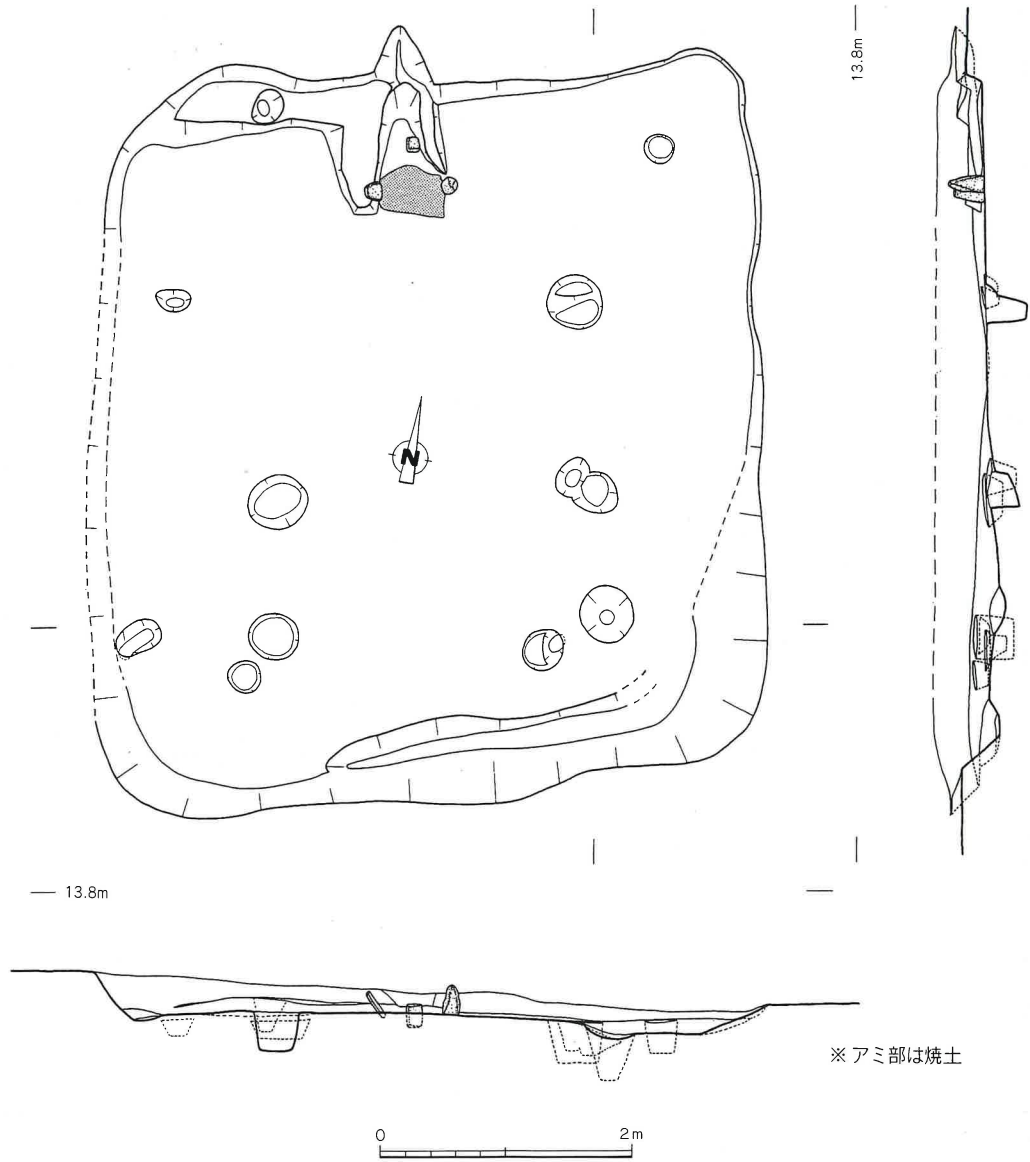
第21図 1号竪穴住居跡実測図



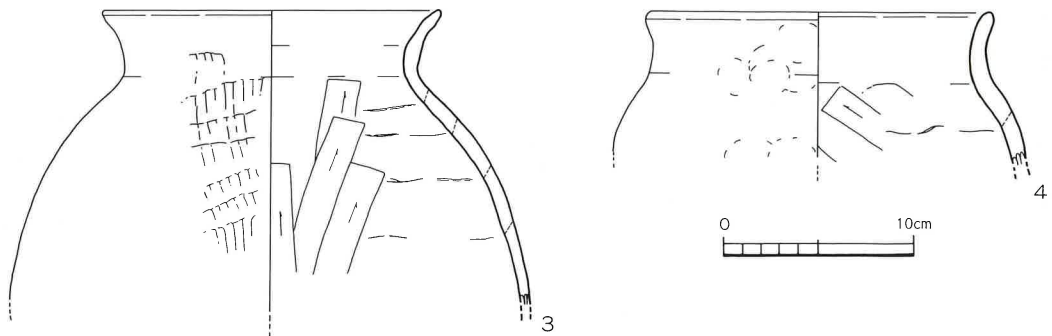
第22図 1号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

2号竪穴住居跡

遺構は調査区の北端に位置し、住居北壁にはカマドを付設している。平面プランは歪な方形で、確認できる規模は5.78m×5.42m、最大深38cmである。主柱穴は5基確認できた。北壁西側にはカマドに接するかたちで階段状の遺構が、南壁には最大深12cmの壁溝が検出された。



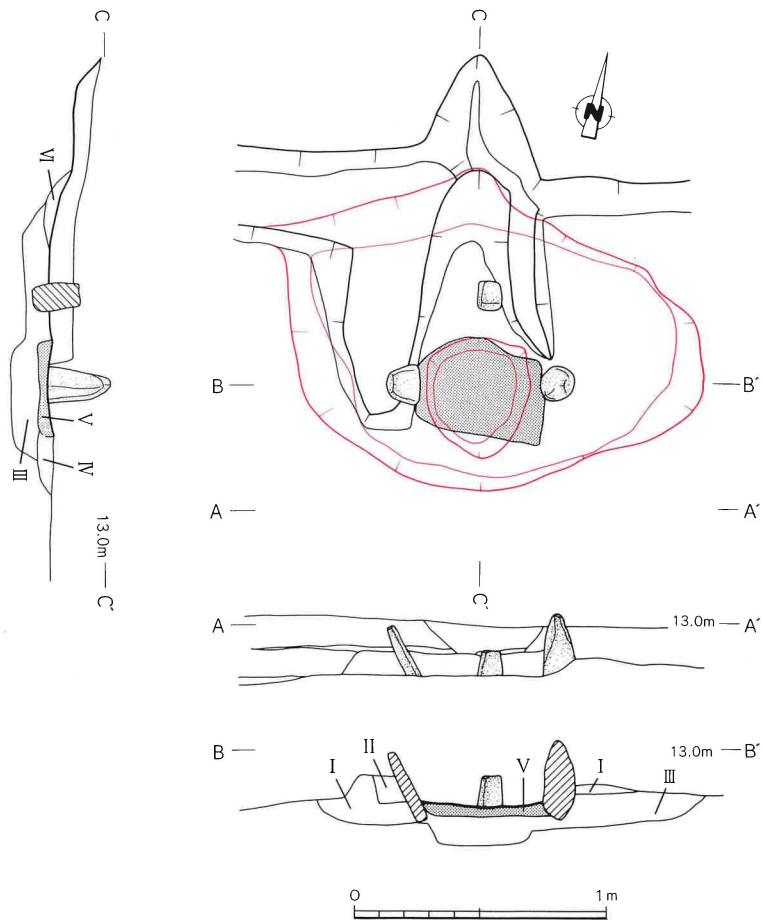
第23図 2号竪穴住居跡実測図



第24図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図

2号竪穴住居跡出土遺物

3・4は土師器甕の口縁部から胴部に至る部分である。3の胎土には金雲母、角閃石、長石が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下をハケ目する。内面の口縁部も横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕とヘラナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物には部分的に煤の付着が僅かにみられる。口径は19.8cmである。4の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部に横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕とヘラナデがみられる。焼成は良好で、色調は外面が赤橙色、内面が暗橙色である。遺物外面の赤変は二次加熱を受けたものと考えられ、内面には煤の付着がみられる。口径は18.3cmである。3・4は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。



- | | |
|----------|------------------|
| I層：暗褐色土 | 僅かに白色砂粒を含みよく締まる。 |
| II層：茶褐色土 | 黄色粒を含みよく締まる。 |
| III層：褐色土 | 僅かに炭化物を含む。 |
| IV層：暗褐色土 | 焼土ブロックと炭化物を含む。 |
| V層：赤色土 | 熱変硬化した炭燃部。 |
| VI層：黒褐色土 | 炭化物を多量に含む。 |

第25図 2号竪穴住居カマド跡実測図

2号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものである。

カマドは天井石を含む上部構造を消失していたが、左右焚口袖石、支脚のほか、カマド両袖の一部、焚口部から煙道に至る構造を良く残していた。袖石、

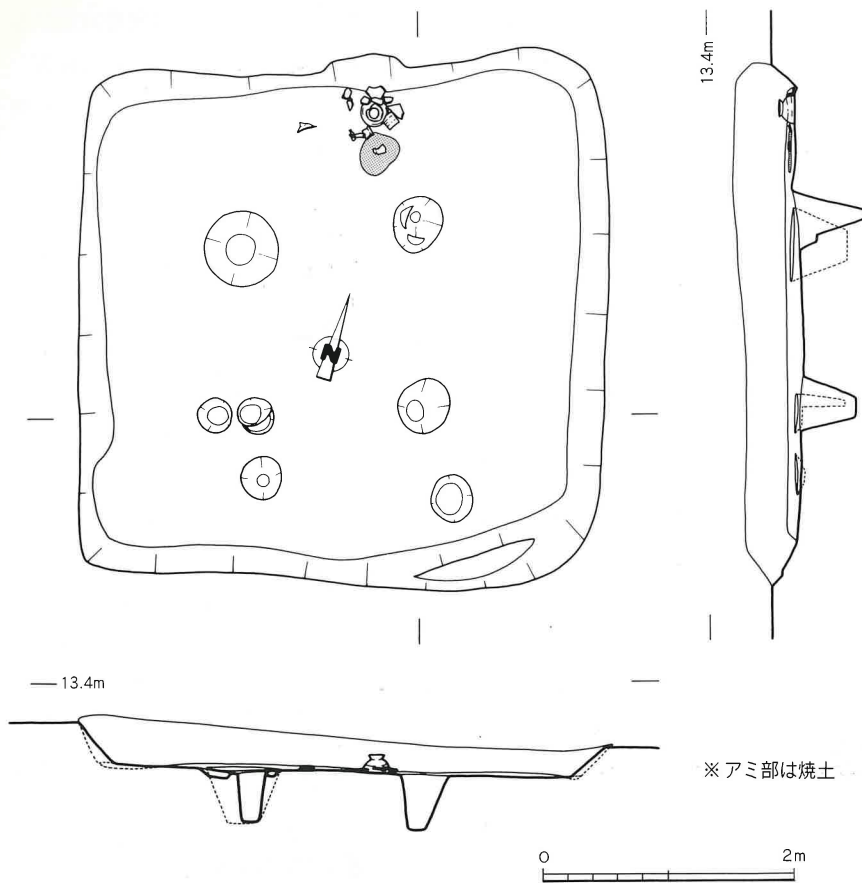
支脚は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を楕円形及び方柱状に加工し用いていた。カマド基盤床は二段掘になっており平面プランは楕円形である。上段の規模は長軸1.62m、短軸1.28m、最大深13cm、下段は長軸48cm、短軸40cm、最大深8cm（上段からは21cm）である。カマド内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。

3号竪穴住居跡

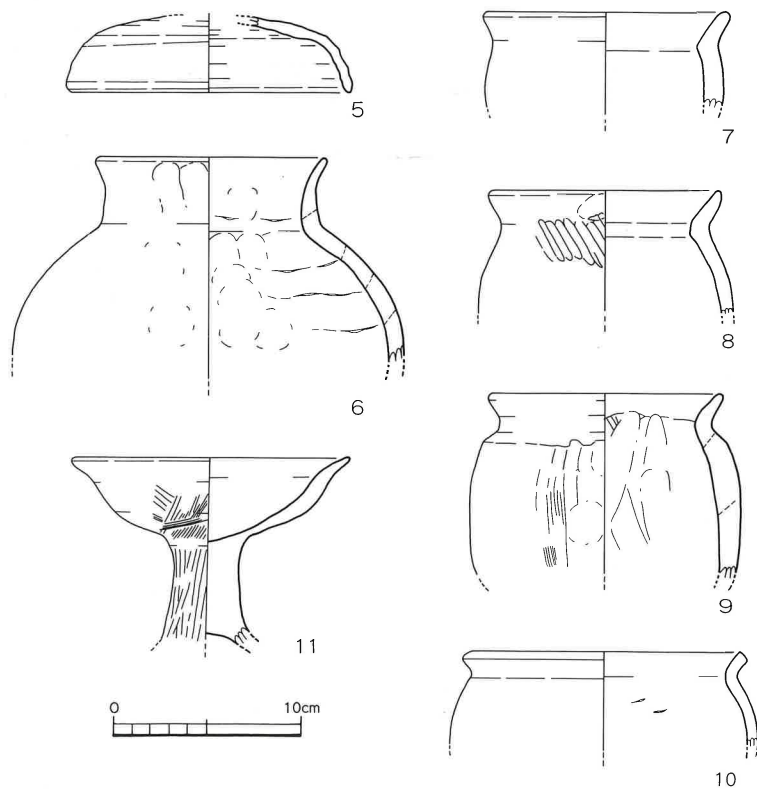
遺構は調査区の北側に位置し、住居北壁にはカマドを付設している。平面プランは方形で、壁面の立ち上がりは明瞭である。確認できる規模は4.22m×3.98m、最大深40cmである。主柱穴は4基である。南壁東側には階段状の段差を確認している。

3号竪穴住居跡出土遺物

5は須恵器坏蓋、6は土師器壺、7~10は土師器甕、11は土師器高坏である。5の胎土には白色砂粒が僅かに含まれ調整は外面天井部にヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.6cmである。6の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕と指圧痕及び不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は12.3cmである。7の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下が不定方向ナデ、内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下が不定方向ナデである。焼成は良好である。色調は内外面ともに赤褐色で、煤の付着が全体的にみ



第26図 3号竪穴住居跡実測図



第27図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図

られる。口径は12.9cmである。
8の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部にはへら状の工具痕、胴部には不定方向ナデ、内面調整は口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部は不定方向ナデを施す。焼成は良好である。色調は内外面ともに赤褐色で、全体的に煤の沈着が認められる。口径は12.3cmである。**9**の胎土には角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部にかけて横ナデ、頸部以下は指圧痕、ハケ目、へらナデ、内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗黄褐色である。外面は二次加熱を受けたものと考えられ、全体的に煤の付着を確認できる。口径は12.4cm、胴部最大径は12.3cmである。**10**の胎土には石英、長石、角閃石、茶色砂粒が含まれ内外面調整はともに横ナデである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が茶褐色である。外面は二次加熱を受けており、全体的に煤の付着がみられる。口径は15.0cmである。**11**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が不定方向ナデ、口縁部以下はハケ目、内面調整は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けたものと考えられる。口径は14.7cmである。
5~11は6世紀後半と考えたい。

3号竪穴住居カマド跡

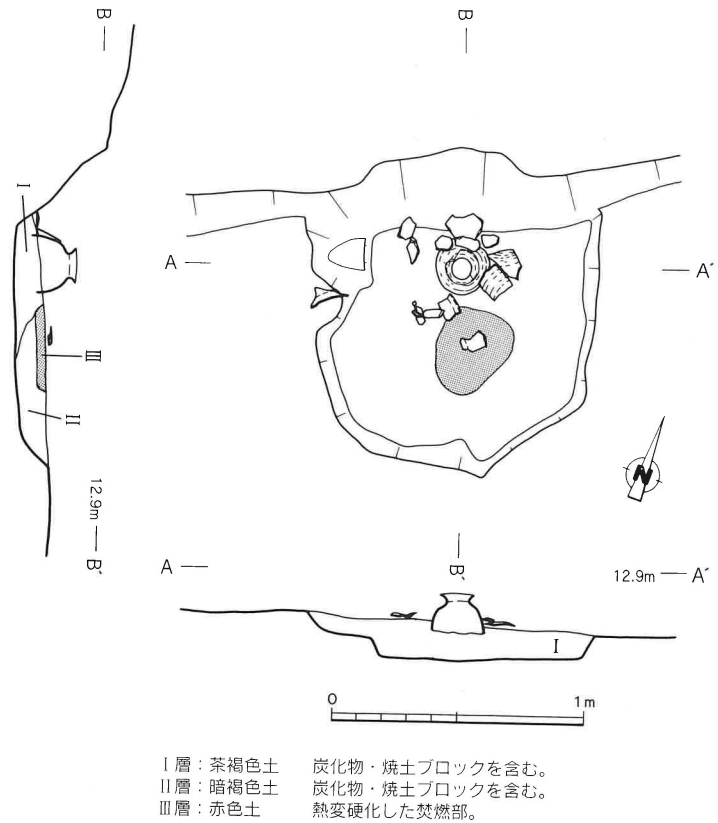
住居北壁に付設されたものである。カマドは熱変赤色硬化した炭燃床-支脚部（胴部から底部を打ち欠いた甕を使用）-煙出部（住居北壁中央部を一段掘込み成形）を残していた。袖石、支脚は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を楕円形及び方柱状に加工し用いていた。カマド基盤床の平面プランは歪なカマボコ形で、北西隅に階段状の突出部を持つ。規模は長軸1.12m、短軸98cm、最大深14cmである。

3号竪穴住居カマド跡出土遺物

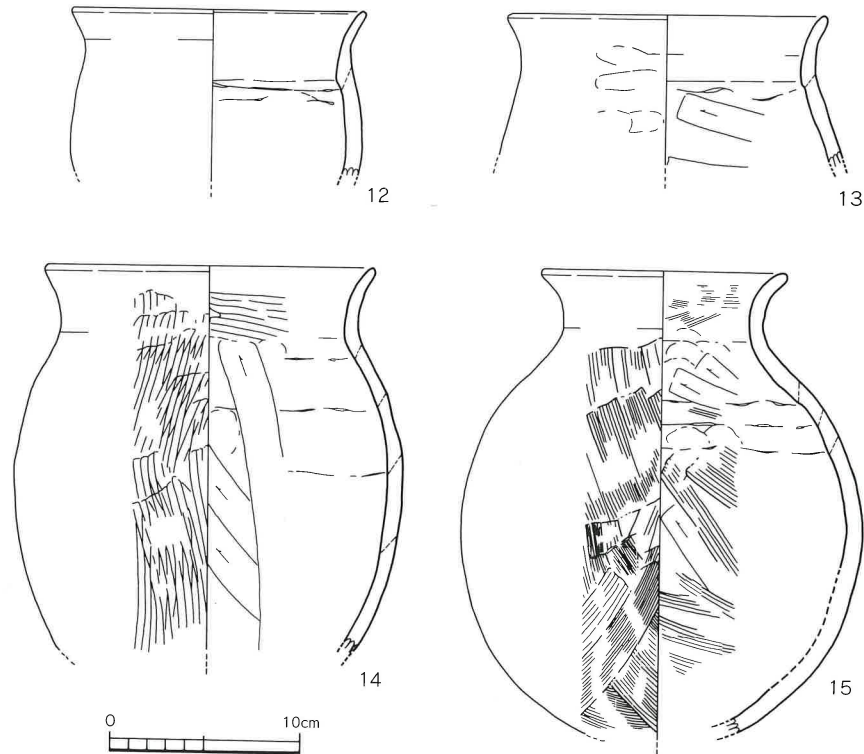
12~14は土師器甕、15は土師器壺である。ともにカマド精査時に出土したもので、15は炭燃部後方の支脚に用いられていた。12の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデを施す。内面頸部には粘土積み上げ痕を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。口径は15.0cm、胴部最大径は15.5cmである。

13の胎土には長石と角閃石が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデ、内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕とヘラ削りを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は全体的に煤の沈着がみられる。口径は17.0cmである。14の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ目で、内面は口縁部が横ナデと粗いハケ目、頸部以下には粘土積み上げ痕、指圧痕、ヘラ削りがみられる。焼成は

良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物の外面は二次加熱を受けたもので、全体的に煤の付着が認められる。口径は17.5cm、胴部最大径は20.5cmである。15の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にハケ目、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕とヘラ削り



第28図 3号竪穴住居カマド跡実測図



第29図 3号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

り及びハケ目を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は支脚に用いられていたため二次加熱を受けており、全体的に煤の沈着がみられる。口径は13.0cm、胴部最大径は21.5cmである。12～15は6世紀後半と考えたい。

4号竪穴住居跡

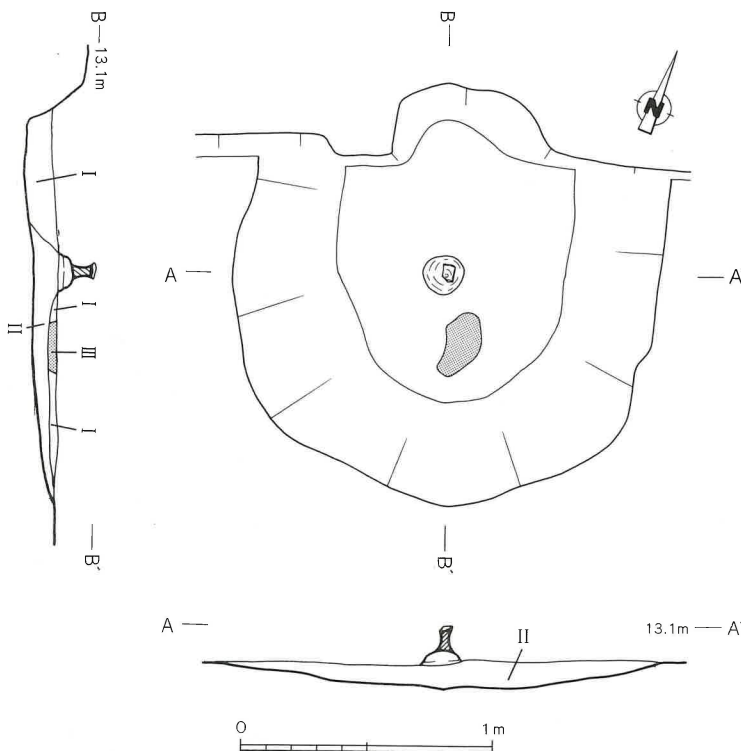
遺構は調査区の北側に位置し、住居北壁にはカマドを付設している。平面プランは長方形で、確認できる規模は4.64m×5.21m、最大深25cmである。支柱穴は4基である。北壁西端から西壁、南壁、東壁中央部にかけて最大深15cmの壁溝を検出した。4号住居は5号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から5号住居から4号住居への切り合いを確認した。

4号竪穴住居跡出土遺物

16は須恵器の高坏脚部、17は土師器甕、18は土師器高坏坏部である。16の胎土には角閃石、長石、白色砂粒を含み内外面調整は回転横ナデを施す。焼成は良好で、色調は青灰色である。底径は12.4cmである。17の胎土には石英、長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下に指圧痕及びナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全体的に煤の付着がみられる。口径は14.6cm、胴部最大径が22.4cmである。18の胎土には長石と角閃石が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、坏部から脚部に至る部分が不定方向ナデ、内面は回転横ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けたものと考えられる。口径は15.8cmである。遺物は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。

4号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものである。カマドは熱変赤色硬化した焚燃部、高坏を用いた支脚（被熱劣化が顕著に観察できる）、北壁を掘込み成形した煙出部を残すのみである。カマド基盤床の平面プランはカマボコ形で長軸1.69m、短軸1.33m、最大深10cmである。

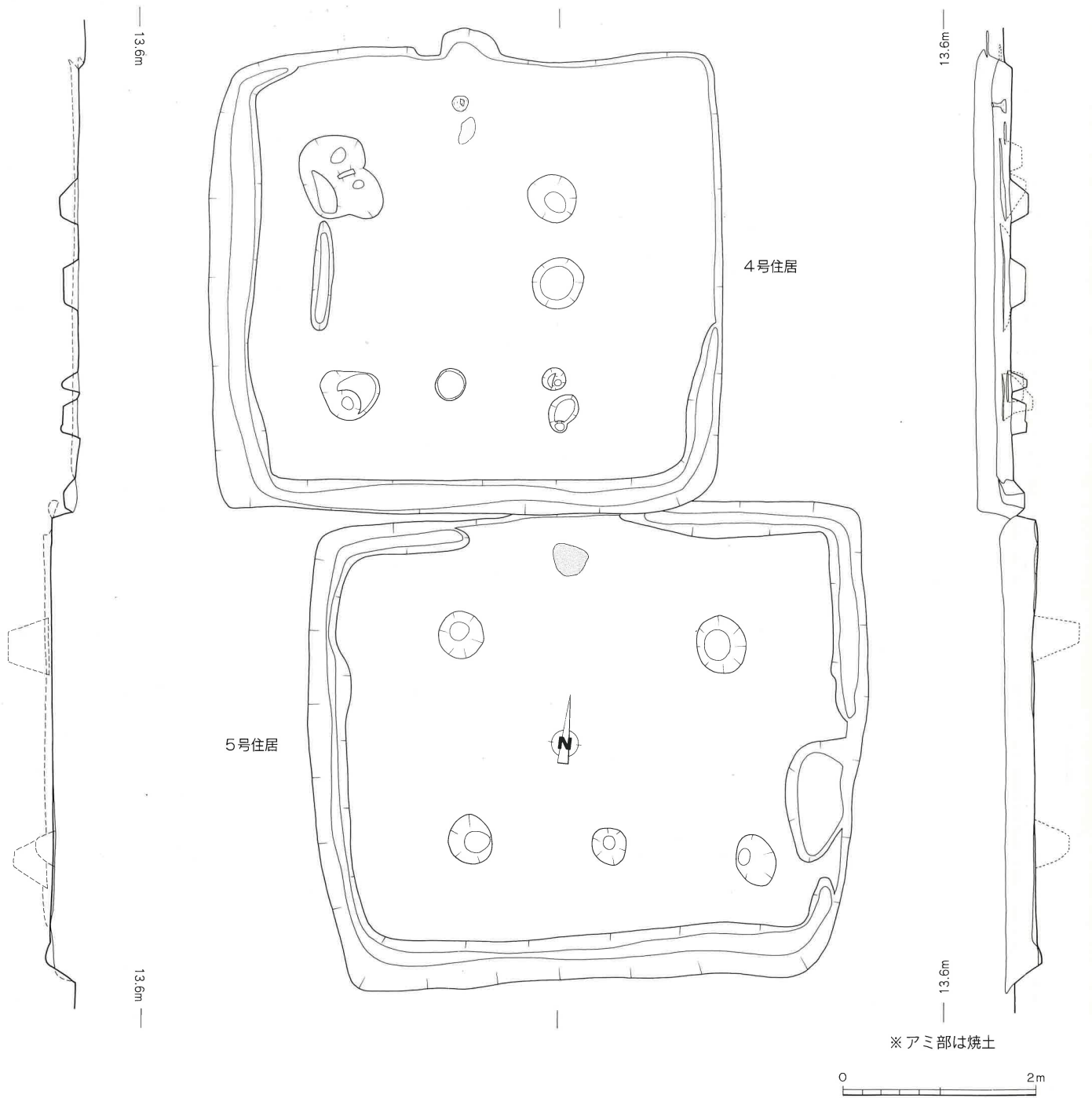


- I層：褐色土 炭化物を含みよく締まる。
- II層：暗褐色土 炭化物を含みよく締まる。
- III層：赤色土 熱変硬化した焚燃部。

第30図 4号竪穴住居カマド跡実測図

4号竪穴住居カマド跡出土遺物

19は土師器甕の把手、20は土師器高坏坏部である。ともにカマド精査時に出土したもので、20は天地を逆に支脚として用いられていた。19の胎土には金雲母と茶色砂粒が含まれ外面調整は指ナデ、内面調整は不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物には全体的に煤の付着が僅かに認められる。20の胎土には石英、長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒が含まれる。外面調整は口縁部が横ナデ、坏部から脚部にかけては指圧痕とハケ目、底部は横ナデ、内面調整は坏部が横ナデ、脚部が粗いヘラ削りを施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は支脚に用いられていたため二次加熱を受けており、表面の劣化が著しい。口径は15.6cm、底径12.7cm、器高12.3cmである。19・20は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。



第31図 4号・5号竪穴住居跡実測図

5号竪穴住居跡

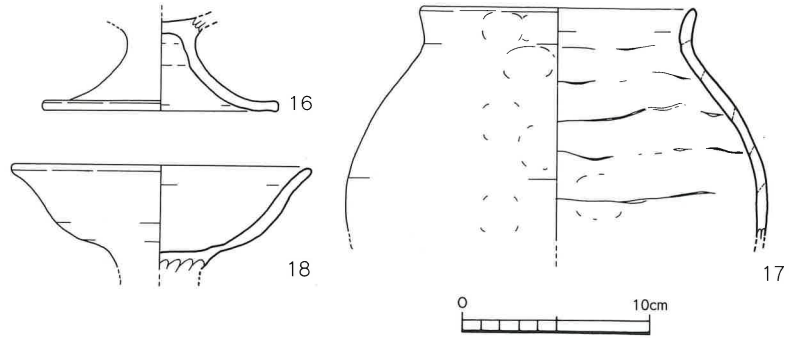
遺構は調査区の北側に位置し、住居北壁にはカマドを付設している。平面プランは長方形で、確認できる規模は4.28m×5.65m、最大深32cmである。支柱穴は4基である。北壁中央部（カマド付設域）と東壁中央部を除き最大深10cmの壁溝を確認した。東壁沿いに設けられた土坑の平面プランは楕円形で、規模は長軸1.21m、短軸61cm、最大深10cmである。5号住居は4号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から5号住居から4号住居への切り合いを確認した。

5号竪穴住居カマド跡

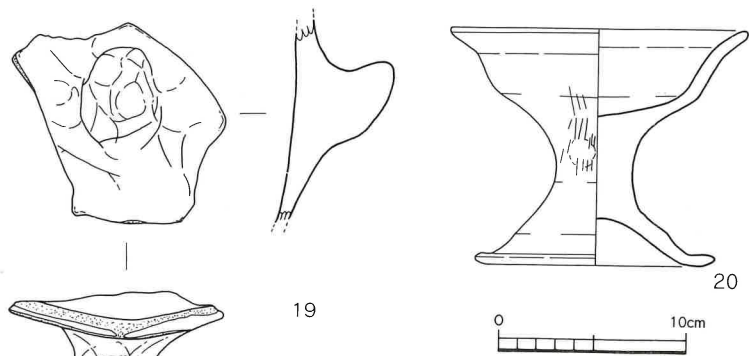
住居北壁に付設されたものと推定される。確認できる構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。遺構内から遺物は出土しなかった。

5号竪穴住居跡出土遺物

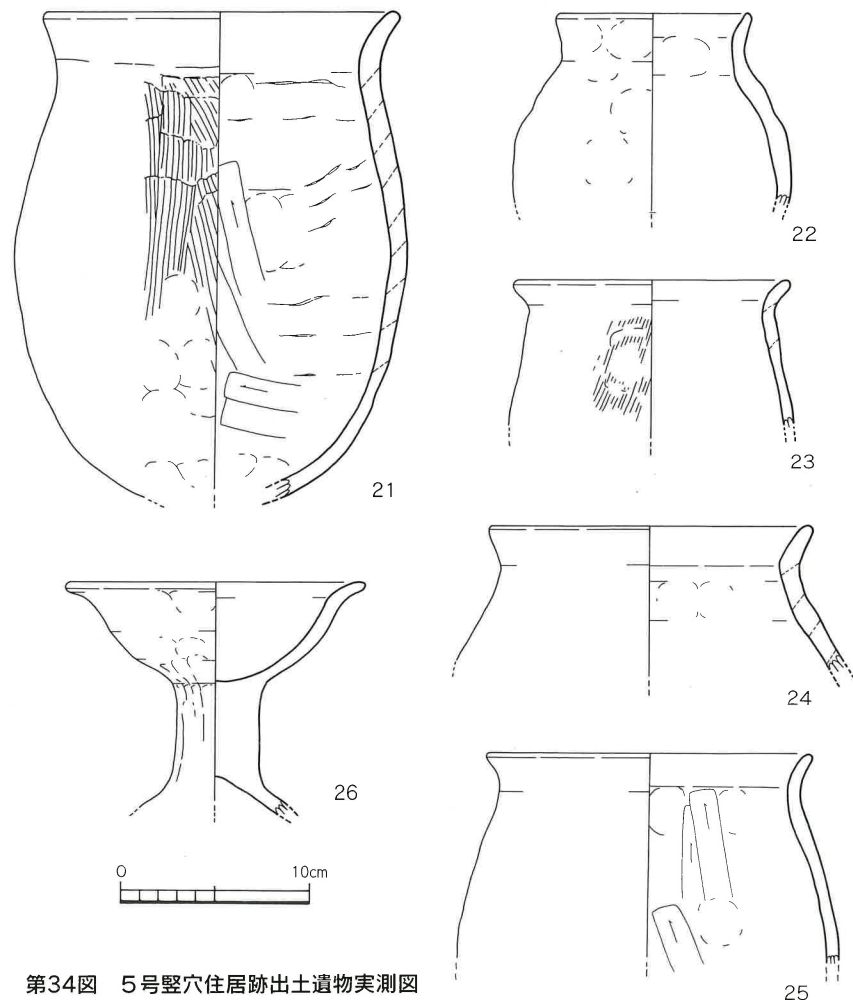
21～25は土師器甕、26は土師器高坏である。21の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部にかけてはハケ目、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデ、内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りが認められる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、外面底部付近には僅かに煤の付着がみられる。口径は19.0cm、胴部最大径は20.7cmである。22の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部が不定方向ナデ、内面の調整は口縁部から頸部



第32図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図



第33図 4号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

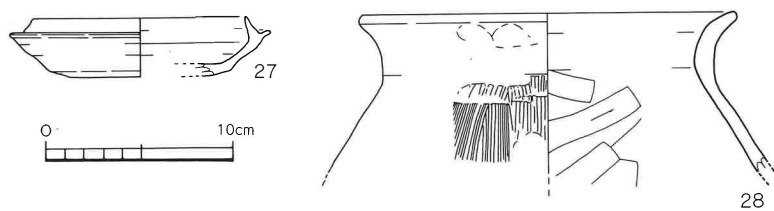


第34図 5号竪穴住居跡出土遺物実測図

が指圧痕と横ナデ、胴部は不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、口縁部に煤の付着がみられる。口径は10.4cm、胴部最大径は14.8cmである。23の胎土には長石と赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がナデ後ハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデである。焼成は良好で、内外面ともに色調は淡黄茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全体的に煤の付着がみられる。口径は14.6cmである。24の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデ、内面には口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は17.1cmである。25の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕と指圧痕及びへら削りを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄橙色である。遺物は二次加熱を受けおり、全面に煤が付着している。口径は17.2cmである。26の胎土には長石と角閃石が含まれ外面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、坏部以下は指圧痕と指ナデ、坏部内面の調整は指圧痕と指ナデ、脚部内面は指圧痕と不定方向ナデがそれぞれ確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄灰色である。遺物坏部内面には赤色塗彩が僅かに残存している。口径は15.8cmである。21～26は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。

6号竪穴住居跡

遺構は調査区の北側に位置する。住居北側にはカマドを付設していたと推定されるが、南壁東半分は7号竪穴住居跡に削平され、東壁は全て消失していた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は5.57m×5.19m、最大深36cmである。主柱穴は4基である。北壁西端から西壁、南壁沿いには最大深10cmの壁溝を確認した。6号住居は7号住居と切り合い関係あり、遺構検出面の観察から6号住居から7号住居への切り合いを確認した。



第35図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図

6号竪穴住居跡出土遺物

27は須恵器坏身、28は土師器甕である。27の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部のみ回転へら削りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗青灰色である。

口径は11.2cmである。28の胎土には長石と赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下がハケ目、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下がへら削りである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全体的に煤の付着が見られる。口径は20.0cmである。27・28は6世紀後半と考えたい。

6号竪穴住居カマド跡

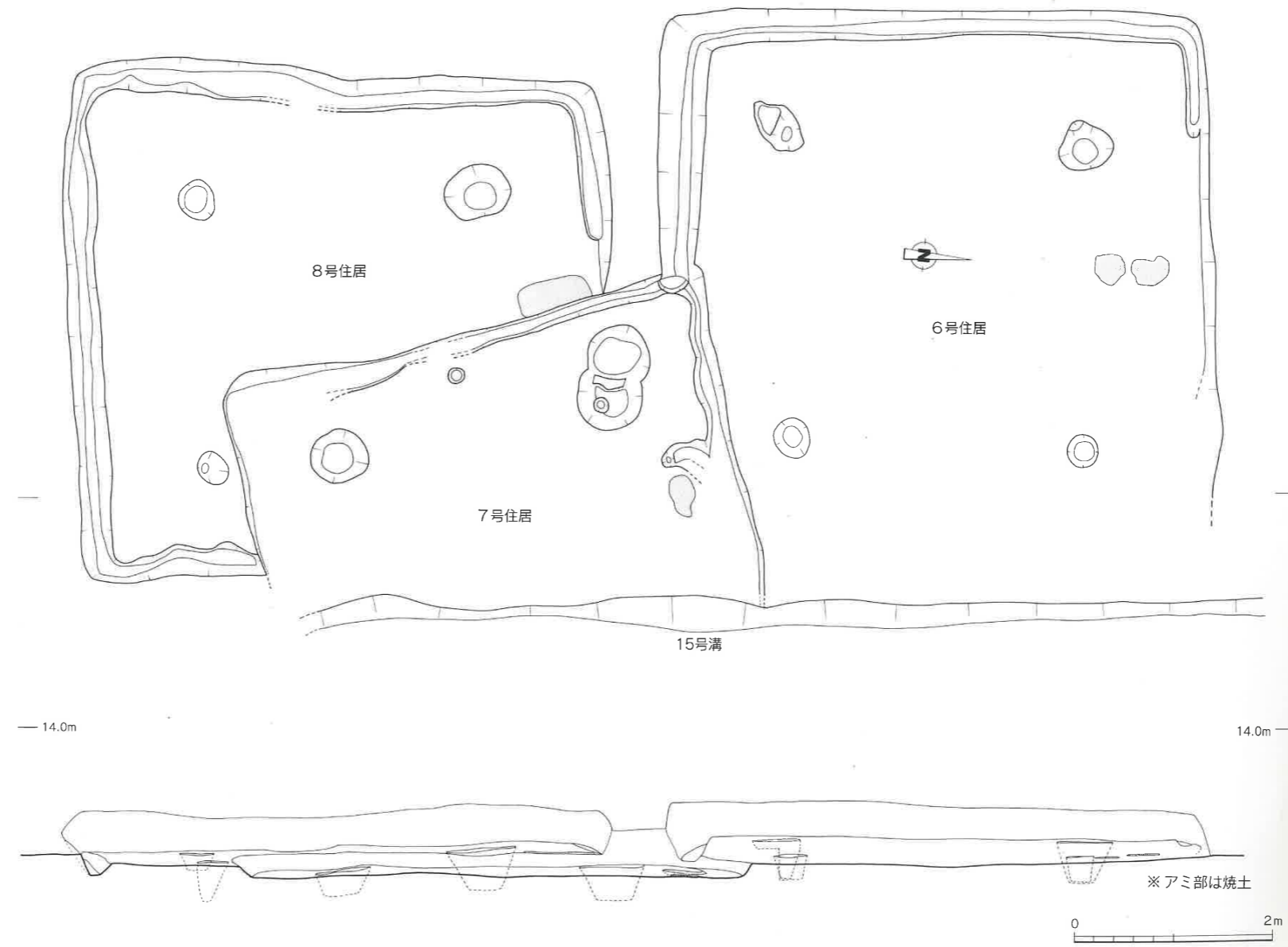
住居北壁に付設されたものと推定される。確認できるカマドの構造は熱変赤色硬化した燐燃部のみである。遺構内から遺物は出土しなかった。

7号竪穴住居跡

遺構は調査区の北側に位置する。住居北側にはカマドを付設していたと推定されるが、南壁東側及び東壁は15号溝により削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.98m×3.52m、最大深33cmである。主柱穴は2基を確認するに止まった。北壁西半分から西壁沿いには最大深1.5cmの壁溝を確認した。7号住居は6号住居と切り合い関係あり、遺構検出面の観察から6号住居から7号住居への切り合いを確認した。

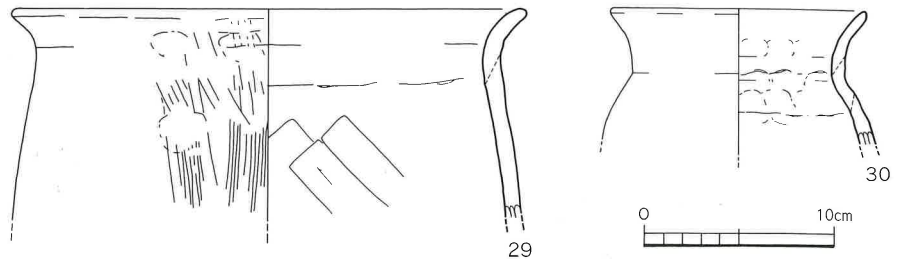
7号竪穴住居跡出土遺物

29・30は土師器甕の口縁部から胴部に至る部分である。29の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ頸部断面には粘土積み上げ痕を残す。外面の調整は口縁部に横ナデを確認できるほか、指圧痕及びハケ目を施している。内面は口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部にはへら削りを観察できる。焼成は良好で、色調は外面が淡黄色、



第36図 6号～8号竪穴住居跡実測図

内面が淡黄褐色である。口径は27.1cmである。30の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ土器断面及び内面には粘土積み上げ痕を残す。外面の調整は口縁部に横ナデを確認できるほか、胴部にはナデを施している。内面は口縁部が横ナデ、頸部から胴部にかけては指圧痕を観察できる。焼成は良好で、色調は外面が淡黄色、内面が淡茶褐色である。口径は13.4cmである。29・30は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。



第37図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図

7号竪穴住居カマド跡

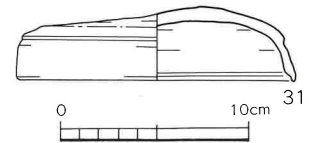
住居北壁に付設されたものと推定される。確認できるカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部と焚燃部西側に設けられ焚口袖石を付設したと推定される最大深5cmの掘り方である。袖石掘り方と壁溝の切り合い関係は確認されなかった。遺構に伴う遺物は出土していない。

8号竪穴住居跡

遺構は調査区の北側に位置する。住居北側にはカマドを付設していたと推定されるが、北壁東半分及び東壁北半分は7号住居により削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は5.51m×5.15m、最大深40cmである。支柱穴は3基を確認するに止まった。カマド部分を除いた各壁沿いには最大深13cmの壁溝を確認した。8号住居は7号住居と切り合い関係があり、遺構検出面の観察から8号住居から7号住居への切り合いを確認した。

8号竪穴住居跡出土遺物

31は須恵器坏蓋である。内面口縁端部には鈍い段を、外面には鈍い段と稜をそれぞれ有す。胎土には石英及び白色砂粒が含まれ調整は外面天井部にヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデある。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.6cm、器高は3.5cmである。31は6世紀前半と考えたい。



第38図 8号竪穴住居跡出土遺物実測図

8号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものと推定される。確認できるカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。また、焚燃部は7号住居により半分以上を消失していた。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

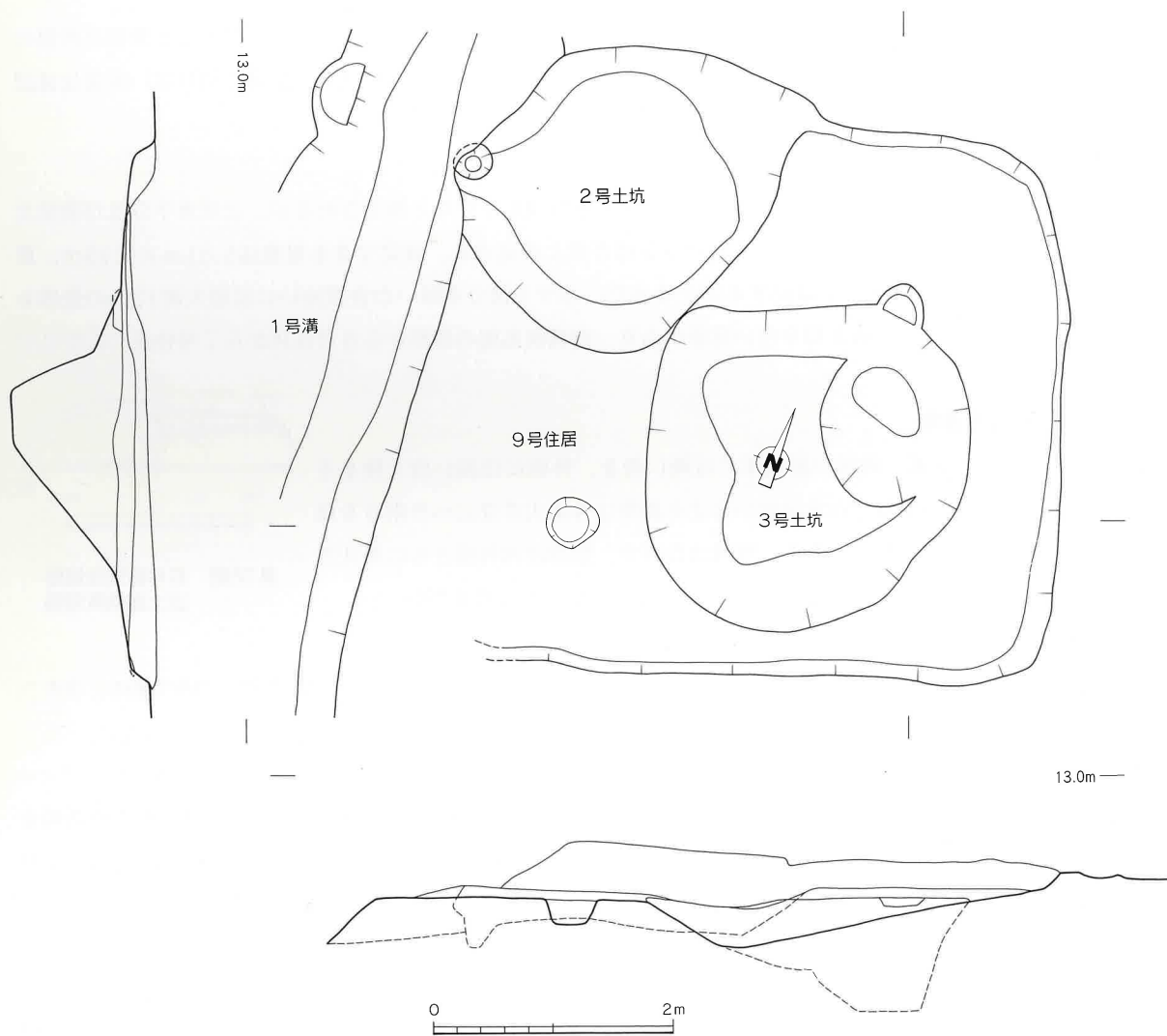
9号竪穴住居跡

遺構は調査区の北側に位置するが、北壁西半分を2号土坑、中央部を3号土坑、さらに、西壁及び南壁西端を消失していた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は4.51m×4.58m、最大深23cmである。支柱穴は2基を確認するに止まった。9号住居は2号土坑及び3号土坑と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から9号住居から2号土坑及び3号土坑へそれぞれの切り合いを確認した。

9号竪穴住居跡出土遺物

32は須恵器坏身、33～35は土師器碗、36は須恵器高坏脚部、37・38は土師器甕、39は紡錘車である。32の胎土には長石と黒色砂粒を含む。調整は外面底部のみヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗青灰色である。口径は9.0cm、器高2.9cmである。33の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデ、外面底部のみヘラ切りを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄色である。口径は11.5cm、器高は3.3cmである。34の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は回転ナデ、底部のみヘラ切り、内面の口縁部にはヘラ磨き、底部付近は剥離のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は15.4cm、器高は3.7cmである。35の胎土には長石と石英が含まれ外面の調整は口縁部がヘラ状工具による不定方向ナデ、底部のみヘラ削り、内面の調整は口縁部が斜め方向にナデ、底部は放射状にナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。

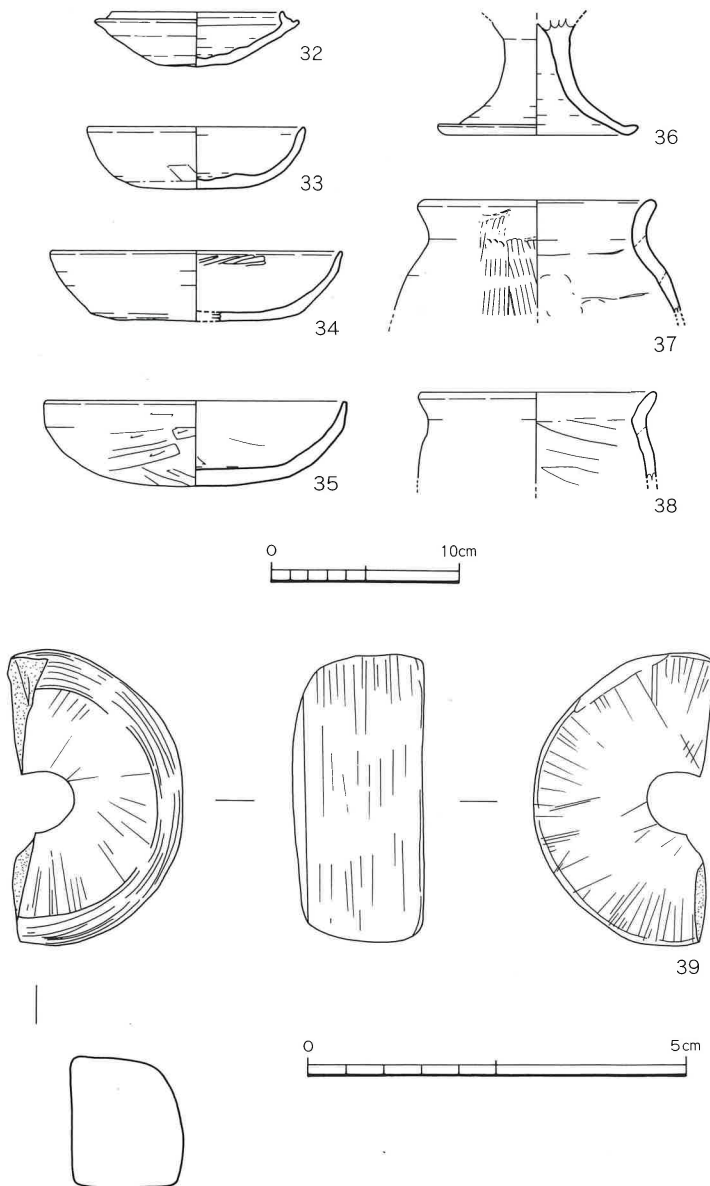
遺物は全面に煤の付着がみられる。口径は16.0cm、器高4.5cmである。36の胎土には黒色と白色の砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。底径10.6cmである。37の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下がハケ目を施す。内面の調整は横ナデと指圧痕がみられ、粘土積み上げ痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤が付着している。口径は12.6cmである。38の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は不定方向ナデ、内面は口縁部が不定方向ナデ、頸部以下がへら削りである。焼成は良好で、色調は褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤が付着している。口径は12.6cmである。39は滑石製である。広径3.8cm、狭径3.0cm、厚さ1.7cm、孔径0.7cm、重量24.1gである。32～38は7世紀前半と考えたい。



第39図 9号竪穴住居跡実測図

10号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部に位置する。住居北側にはカマドを付設していたと推定されるが、東壁は消失し、西壁南端と南壁は12号竪穴住居跡に削平されていた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は5.62m×2.55m、最大深10cmである。支柱穴は1基を確認するに止まった。10号住居は12号住居と切り合い関係があり、遺構検出面の観察から10号住居から12号住居への切り合いを確認した。遺構内からは時期を特定できる遺物は確認されなかった。



第40図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図

65は土師器甕である。40の胎土には白色砂粒と石英が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。口径は11.5cm、器高は4.5cmである。41の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は12.2cm、器高は4.0cmである。42の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は10.3cm、器高は3.1cmである。43の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗青灰色である。口径は11.7cm、器高は3.6cmである。44の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部のみ回転ヘラ削りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗青灰色である。口径は11.7cm、器高は3.5cmである。45の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部のみ回転ヘラ削りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡青灰色である。口径は11.8cm、器高は3.9cmである。46の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部のみ回転ヘラ削りで、ほかは内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は12.4cm、器高は3.9cmである。47の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部のみヘラ切りで、ほかは内外面ともに回転

10号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものと推定される。確認できるカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみであるが、大部分が4号掘立柱建物の柱穴跡により削平されていた。焚燃部は住居壁の外に位置していることから、住居の外側に張り出してカマドを構築したタイプと考えられる。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

11号竪穴住居跡

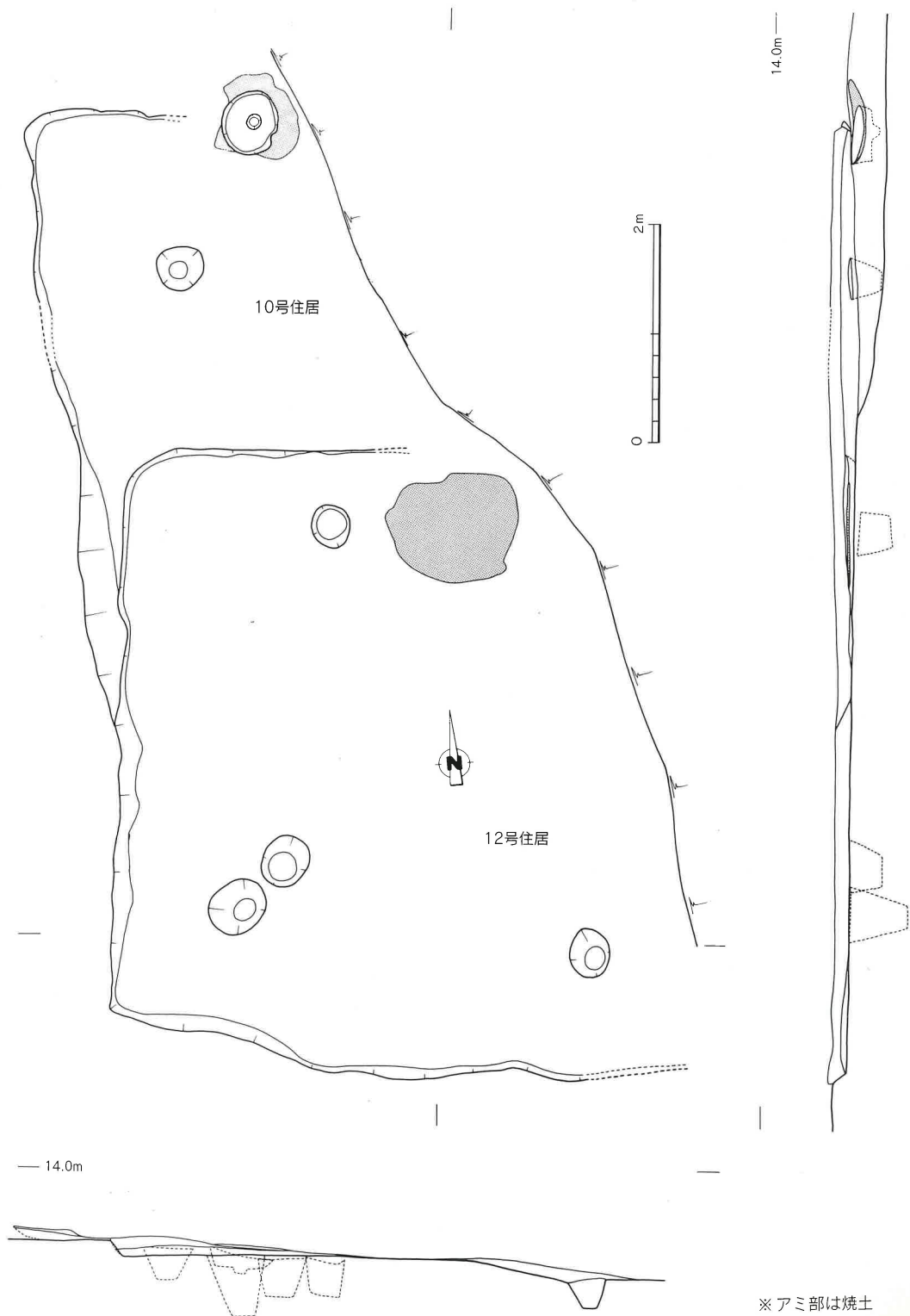
遺構は調査区の中央部に位置する。住居北側にはカマドを付設しているが、南壁東側及び東壁は10号住居及び12号住居により削平されていた。平面プランは歪な長方形と推定され、確認できる規模は5.57m×4.82m、最大深42cmである。支柱穴は4基である。北壁西端から西壁、南壁西側には最大深10cmの壁溝を確認した。さらに、住居東側の支柱穴間には土坑を検出しており、平面プランは楕円形で長軸1.25m、短軸1.06m最大深24cmである。11号住居は10号住居及び12号住居と切り合い関係があり、遺構検出面の観察から11号住居から10号住居と12号住居への切り合いをそれぞれ確認した。

11号竪穴住居跡出土遺物

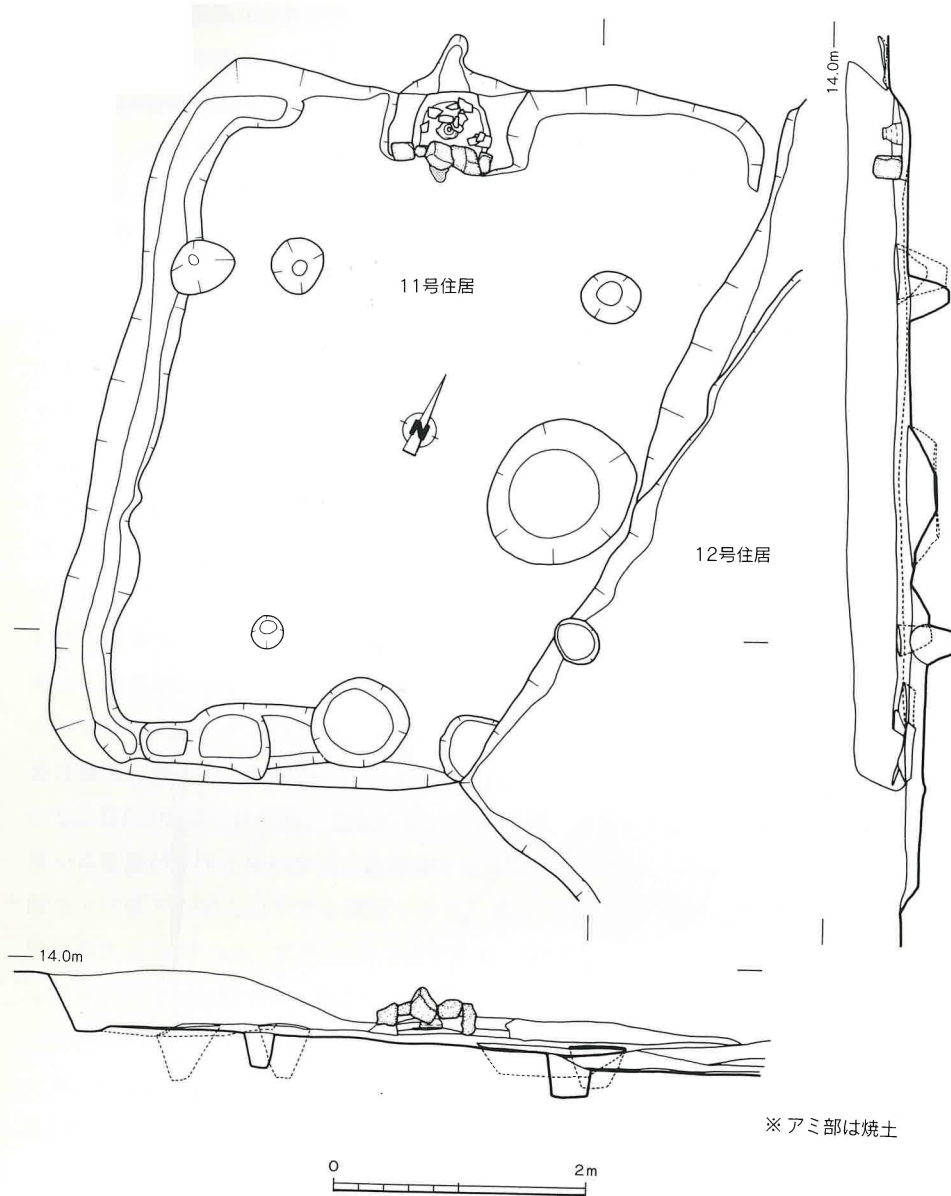
40～49は須恵器坏身、50～55は須恵器坏蓋、56は須恵器甕、57は土師器壺、58～60は土師器甕、61～63は土師器鉢、64・

ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。48の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部のみヘラ切りで、ほかは内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡青灰色である。口径は13.0cm、器高は3.9cmである。49の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ調整は外面底部のみヘラ切りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄灰色である。口径は9.1cm、器高は3.2cmである。50の胎土には石英と黒色砂粒が含まれ調整は外面天井部のみ回転ヘラ削りで、ほかは回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.0cm、器高は3.7cmである。51の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面天井部のみ回転ヘラ削りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は13.0cm、器高は4.0cmである。52の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面天井部のみ回転ヘラ削りで、ほかは内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗青灰色である。口径は13.1cm、器高は3.5cmである。53の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面天井部のみ回転ヘラ削りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は13.6cm、器高は4.2である。54の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面天井部のみ回転ヘラ削りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.2cm、器高は3.0cmである。55の胎土には黒色砂粒が含まれ調整は外面天井部のみ回転ヘラ削りで、ほかは内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。口径は14.7cm、器高は3.4cmである。56の胎土には黒色砂粒が含まれ胴部には焼成前に施された穿孔が1ヶ所確認できる。外面の調整は頸部から胴部上半分にかけては横ナデ、胴部最大径付近にはカキ目、胴部下半分には不定方向ナデとハケ目がみられる。内面の調整は頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄灰色である。57の胎土には長石、白色砂粒、灰色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部から底部がタタキ後ハケ目、底部は不定方向ナデである。内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は15.4cm、胴部最大径は29.8cm、器高は35.2cmである。58の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ外面の調整は口縁部から頸部にかけては横ナデ、頸部以下はハケ目、内面は口縁部から頸部にかけて横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕とヘラ削りを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が確認できる。口径は14.7cm、胴部最大径は16.5cmである。59の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕及び横ナデ、頸部以下が指圧痕とハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕とヘラ削りを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.5cmである。60の胎土には長石、石英、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目、内面の口縁部から頸部にかけては横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色である。口径は17.2cmである。61の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は指圧痕とヘラナデ、内面は指圧痕とヘラナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗茶褐色である。口径は11.1cm、器高は8.4cmである。62の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から胴部が指圧痕と不定方向ナデ、胴部から底部がハケ目、内面は口縁部から胴部がヘラ押しえと不定方向ナデ、胴部から底部がヘラ削りである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着を観察できる。口径は14.6cm、器高は7.9cmである。63の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、胴部が指圧痕、ヘラ押しえ、不定方向ナデ、内面の調整は口縁部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が黄橙色、内面が黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は22.5cmである。64の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、胴部から底部にかけては不定方向ナデ、把手部は指ナデ、内面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下には粘土積み上げ痕とヘラ削り、ハケ目が観察される。底部には焼成前の穿孔が2孔みられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗黄橙色である。遺物には黒斑がみ

られるほか、二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は31.4cm、底径は10.4cm、器高は25.8cmである。65の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下は指圧痕及びへら押しえと指ナデ、把手部には指ナデ、内面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下が指圧痕及びへら押しえと指ナデを観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤が付着している。口径は33.5cm、底径は11.1cm、器高は30.5cmである。40～65は6世紀後半～7世紀前半と考えたい。



第41図 10号・12号竪穴住居跡実測図



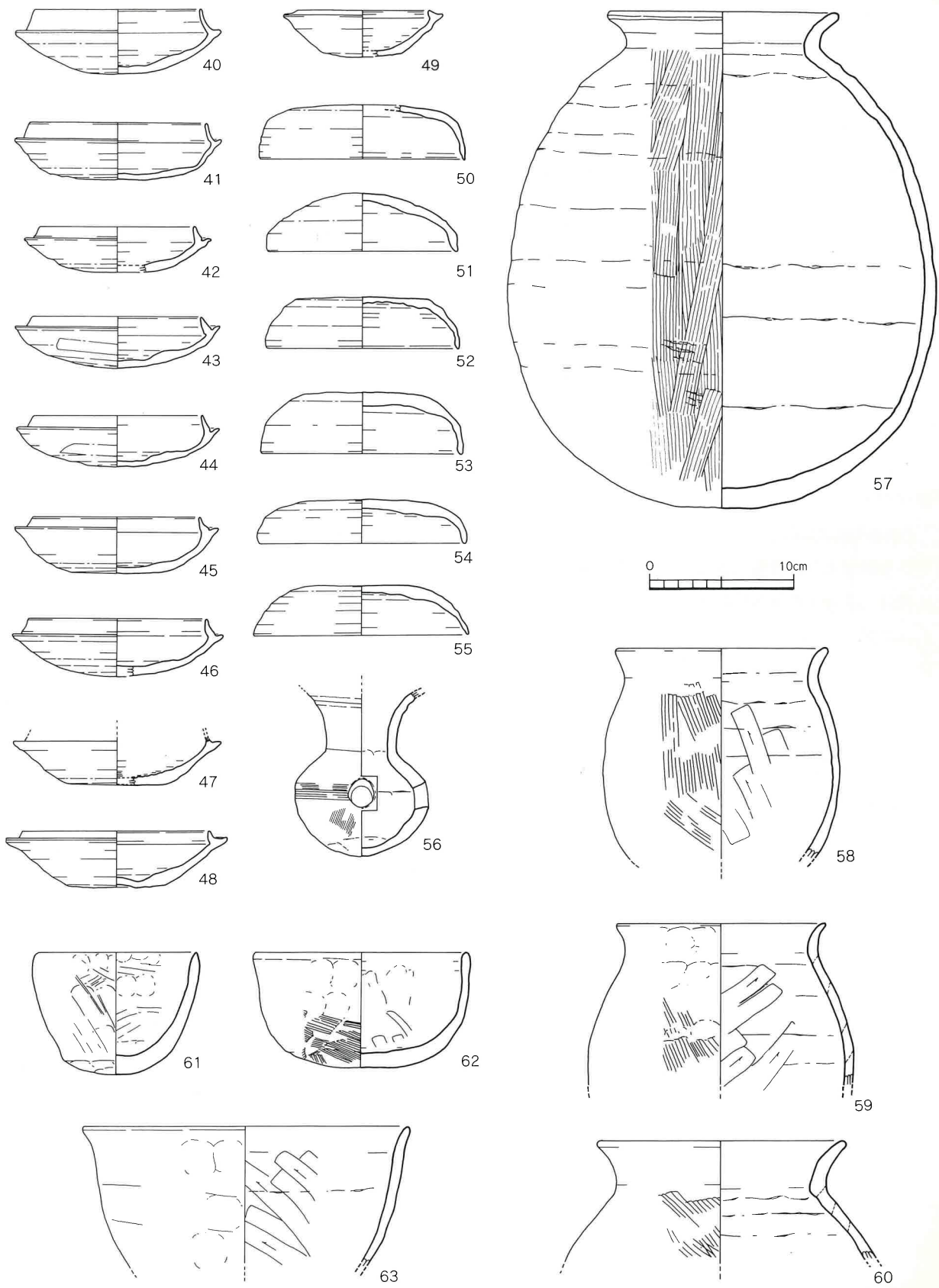
第42図 11号竪穴住居跡実測図

11号竪穴住居カマド跡

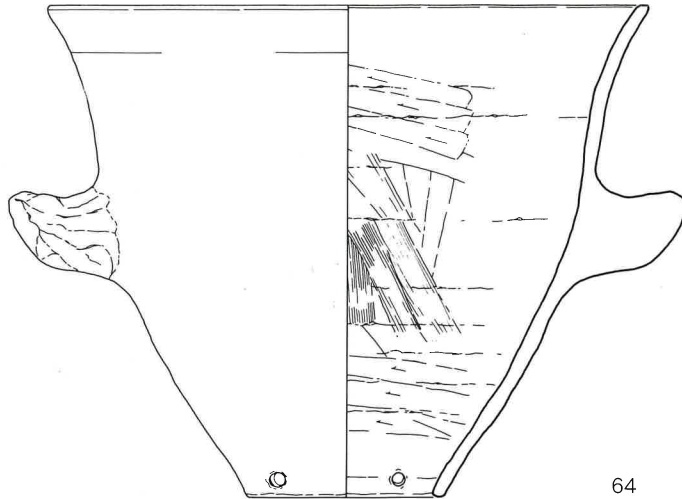
住居北壁に付設されたものである。カマドは天井石（既に割れていた）、左右焚口袖石、カマド両袖（上部は消失）が残存していたほか、前庭から煙道に至る構造が検出された。支脚には脚付鉢を用いていた。天井石、袖石は遺跡周辺より採取される灰色の凝灰岩を方柱状に加工し使用していた。カマド基盤床の平面プランは不定形で、規模は長軸1.23m、短軸1.01m、最大深15cmである。さらに、袖石直下には石を固定するための浅い掘り方も確認された。以上から、カマドの構築は不定形の掘り方を掘削後、袖石固定のために浅い掘込みを設け、袖石を基盤床と共に形成し、支脚を置き、天井石を架け、両袖をつくりあげたようである。

11号竪穴住居カマド跡出土遺物

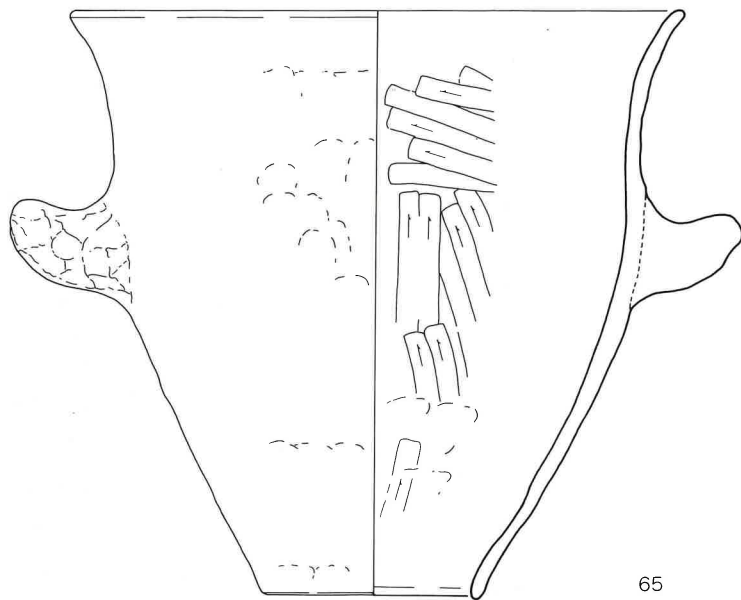
66は土師器脚付鉢、67は土師器甕である。66の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は鉢部が粗いハケ目、脚部が横ナデ及び指圧痕、内面の調整は鉢部の口縁部が横ナデ、口縁部以下が不定方向ナデ、脚部は横ナデである。成形をみると連続成形後、円盤充填を施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は天地を逆にしてカマドの支脚に用いられていたため二次加熱を受けており、部分的に器面が剥離しているほか、煤の沈着がみられる。口径は15.4cm、底径は9.0cm、器高は8.1cmである。67の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部にかけては斜め方向に粗いハケ目を施す。内面の調整は口縁部から頸部にかけては横ナデ、頸部から胴部にかけては粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が暗黄橙色、内面が淡灰白色である。遺物は二次加熱を受けているものと考えられ、全体的に煤の付着が観察された。67の出土状況みると66の直上に広がることから、カマド使用時に用いられていた甕の可能性が高い。口径は30.4cm、胴部最大径は32.6cmである。66・67は6世紀後半～7世紀前半と考えたい。



第43图 11号竖穴住居跡出土遺物実測図(1)



64



65



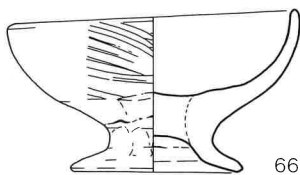
第44図 11号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

12号竪穴住居跡

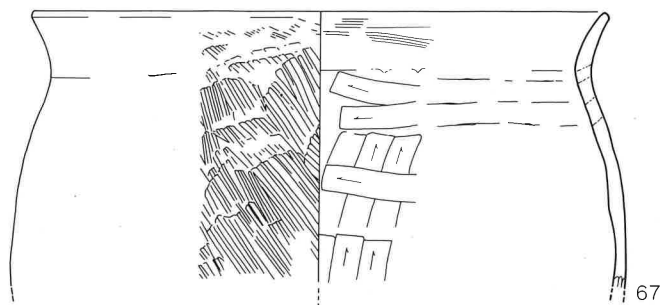
遺構は調査区の中央部に位置する。住居北側にカマドを付設していたと推定されるが、北壁東半分及び東壁、南壁東端は削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は5.78m×5.37m、最大深13cmである。主柱穴は3基を確認するに止まった。12号住居は10号住居と切り合い関係があり、遺構検出面の観察から10号住居から12号住居への切り合いを確認した。

12号竪穴住居跡出土遺物

68は土師器壺、69は土師器小壺、70は土師器鉢、71~74は土師器甕である。68の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は不定方向ナデとハケ目、内面は粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が淡黄橙色、内面が暗黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、部分的に煤の付着がみられる。胴部最大径は27.6cmである。69の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部から底部が指圧痕、粗いハケ目、不定方向ナデ、内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部から底部にかけては粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤色、内面が暗黄橙色

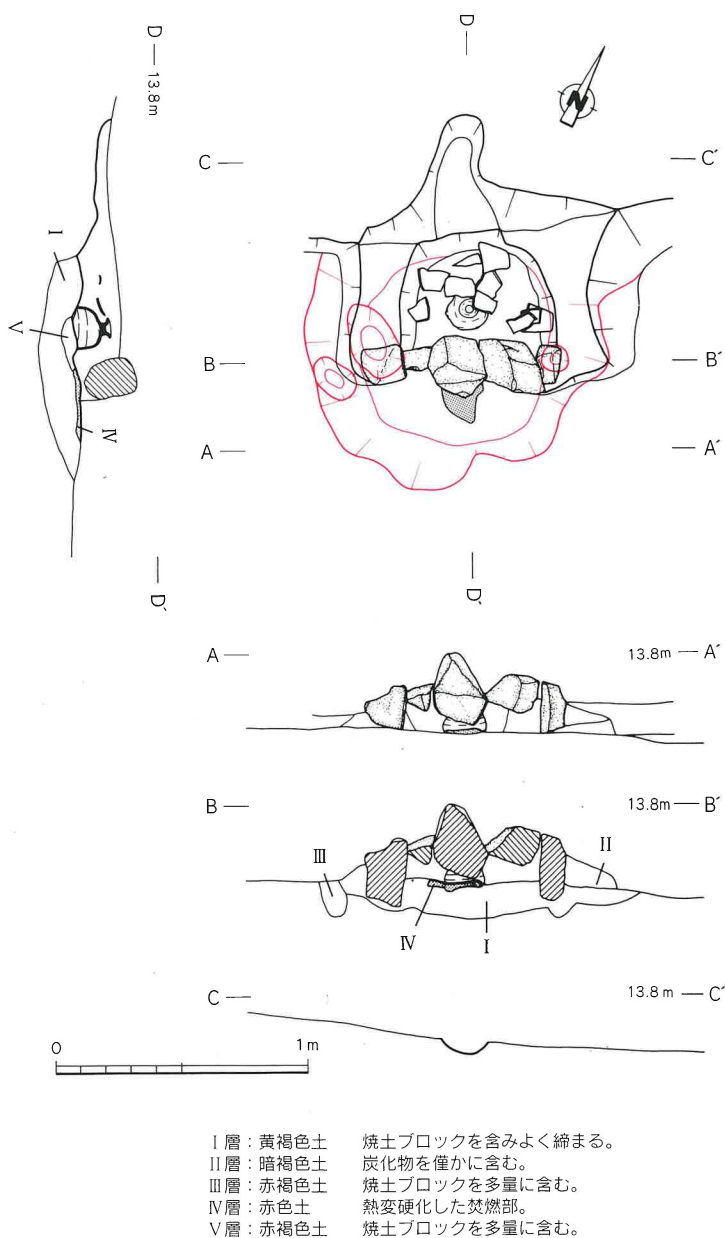


66



67

第45図 11号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図



第46図 11号竪穴住居カマド跡実測図

ヘラ削りを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は21.5cmである。74の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は外面が淡黄橙色、内面が淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.9cm、胴部最大径は27.1cmである。68~74は6世紀後半を中心と時期と考えたい。

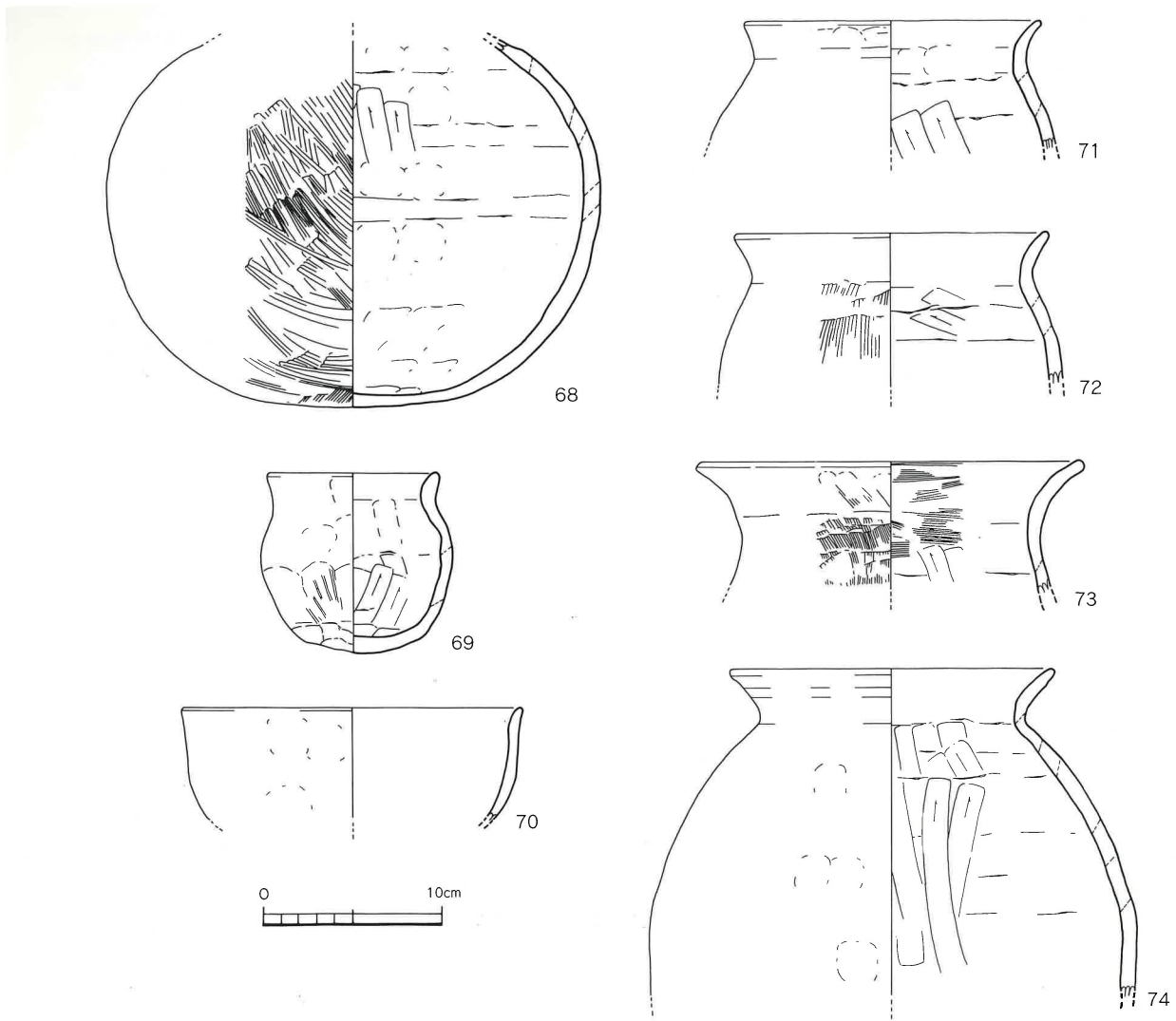
12号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものと推定される。確認できるカマドの構造は前庭（炭化物を検出）—焚口部—焚燃部（熱変赤色化しているが硬化はしていない）に至ると推定される部分のみである。カマド遺構内に伴う遺物は出土しなかった。

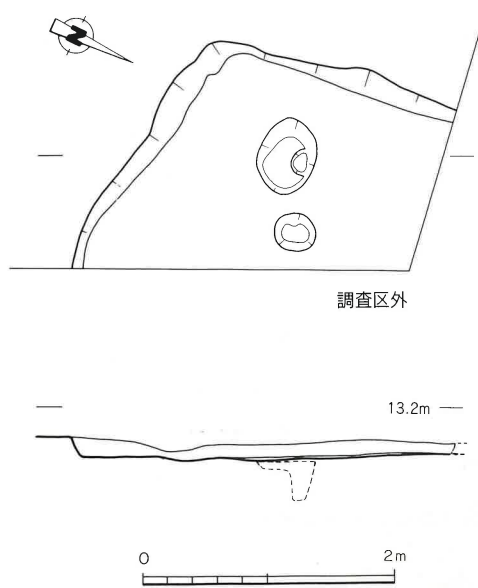
13号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部東側に位置する。検出されたのは住居南西隅の部分と推定され、調査区外に遺構は展開しているものと考えられる。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は2.04m×2.38m、最大深17cmである。遺構内には柱穴を2基確認したが主柱穴かは判断できない。遺構内から遺物は出土しなかった。

である。遺物は二次加熱をうけており外面全体に煤が沈着している。口径は10.3cm、胴部最大径は10.7cm、器高は9.9cmである。70の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、胴部が不定方向ナデ、内面の口縁部は横ナデ、胴部が不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が淡赤褐色、内面が淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.0cmである。71の胎土には角閃石、灰色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部から胴部が指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部が指ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.5cmである。72の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下がハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が黄橙色、内面が茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.5cmである。73の胎土には長石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕とヘ



第47図 12号竪穴住居跡出土遺物実測図



第48図 13号竪穴住居跡実測図

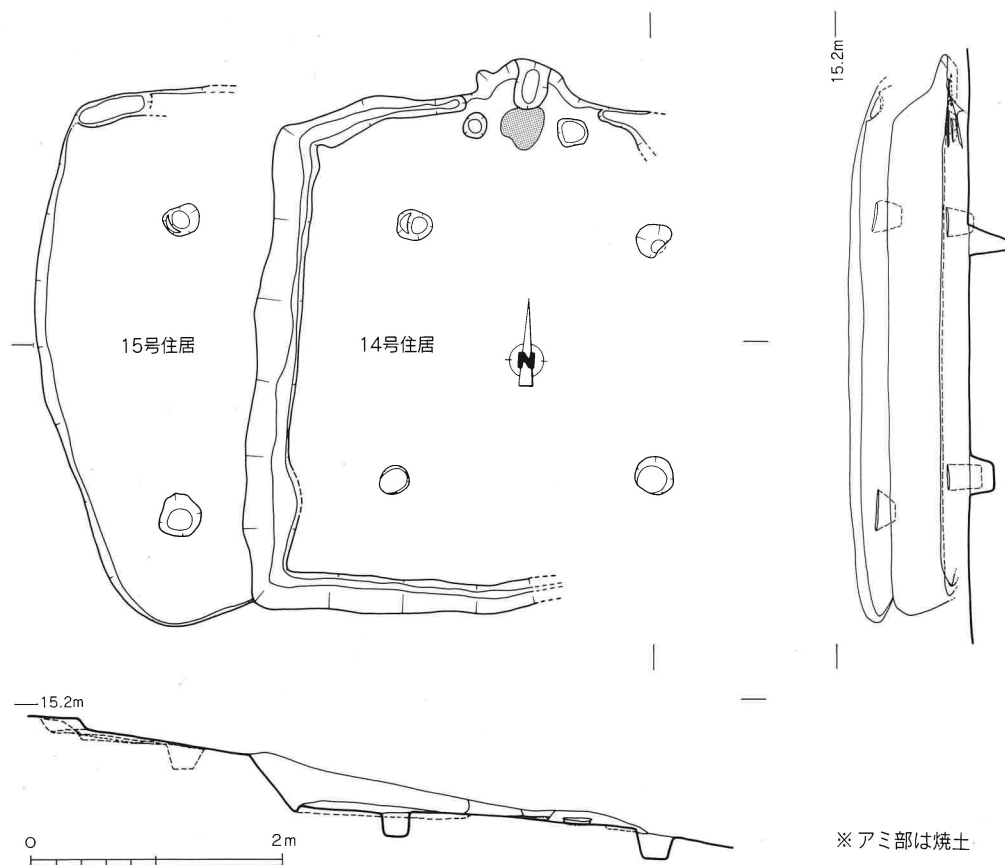
14号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部西側に位置する。住居北壁にカマドを付設していたと推定されるが、南壁東半分、東壁、北壁東端は削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.08m×3.18m、最大深40cmである。支柱穴は4基である。カマド東側及びカマド西側から西壁、南壁沿いには最大深5cmの壁溝を確認した。14号住居は15号住居と切り合い関係があり、遺構検出面の観察から15号住居から14号住居への切り合いを確認した。

14号竪穴住居跡出土遺物

75は須恵器坏身、76は須恵器壺、77は土師器甕である。75の胎土には灰色砂粒と雲母が僅かに含まれる。調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰色である。口径は12.5cm、器高は4.3cmである。76の胎土には角閃石と灰色砂粒が僅かに含まれる。外面の調整は口縁部から頸部にか

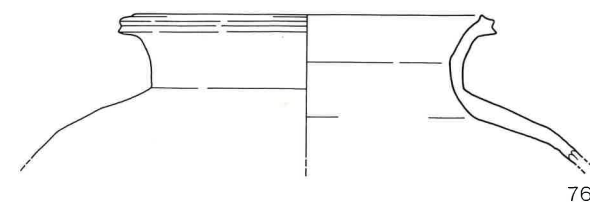
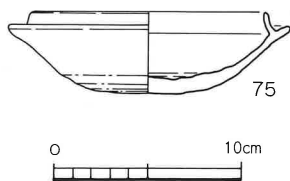
けて横ナデ、胴部は僅かにカキ目を残す。内面は口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部は剥落しており不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は19.9cmである。77の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕と指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は外面が明黄白色、内面が淡茶色である。口径は23.3cmである。75~77は6世紀後半と考えたい。



第49図 14号・15号竪穴住居跡実測図

14号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものである。確認できるカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部、左右焚口袖石掘り方、支脚掘り方及び支脚部の成形と考えられる住居北側への張り出し部の掘削痕である。遺物は出土していない。



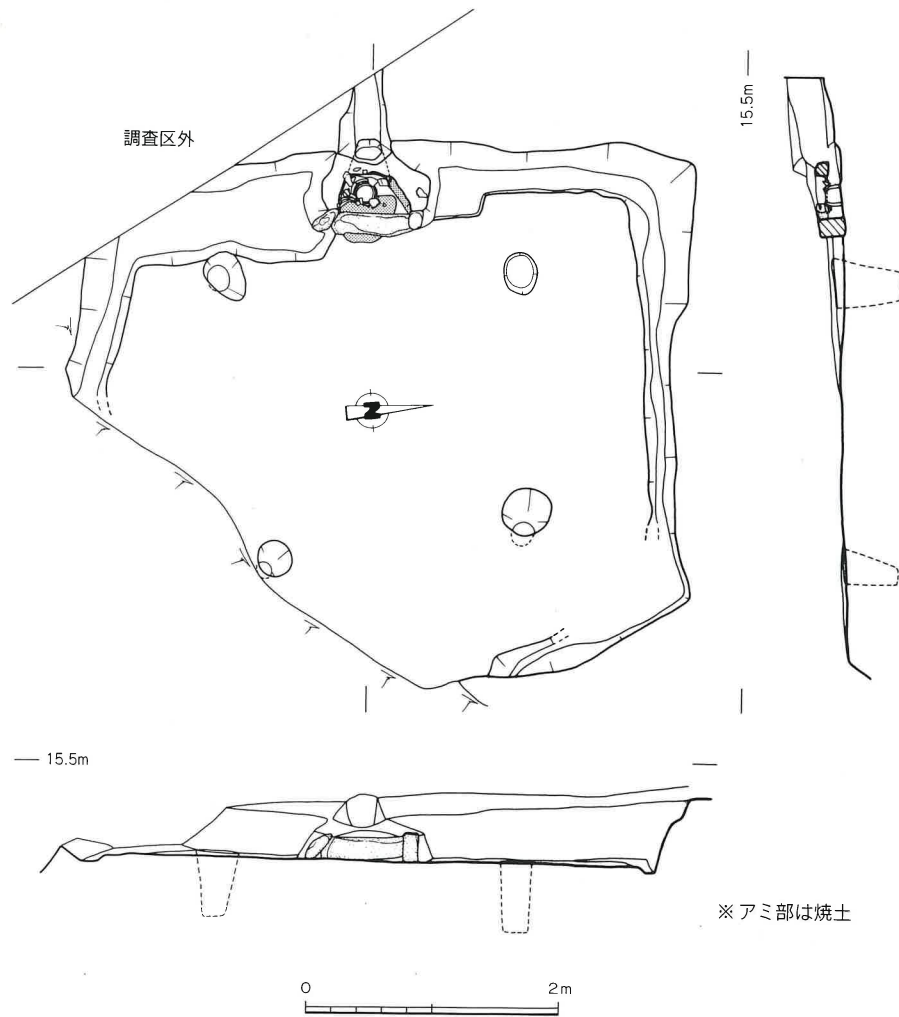
第50図 14号竪穴住居跡出土遺物実測図

15号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部西側に位置するが、住居東半分は14号住居により削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.23m×1.64m、最大深8cmである。支柱穴は2基を確認するに止まった。北壁西端には最大深4cmの壁溝と推定される掘り方を検出した。15号住居は14号住居と切り合い関係があり、遺構検出面の観察から15号住居から14号住居への切り合いを確認した。遺物は出土していない。

16号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部西端に位置する。西壁にはカマドを付設しているが、南壁東側及び東壁南半分は近年の攪乱により削平されていた。住居南西隅は調査区外に展開するものと考えられる。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は4.32m×4.81m、最大深52cmである。支柱穴は4基を確認した。カマド部分と住居北東隅を除いた各残存壁沿いには最大深10cmの壁溝を確認した。16号住居は17号住居と切り合い関係があるが、削平が著しいため新旧関係を確認できなかった。

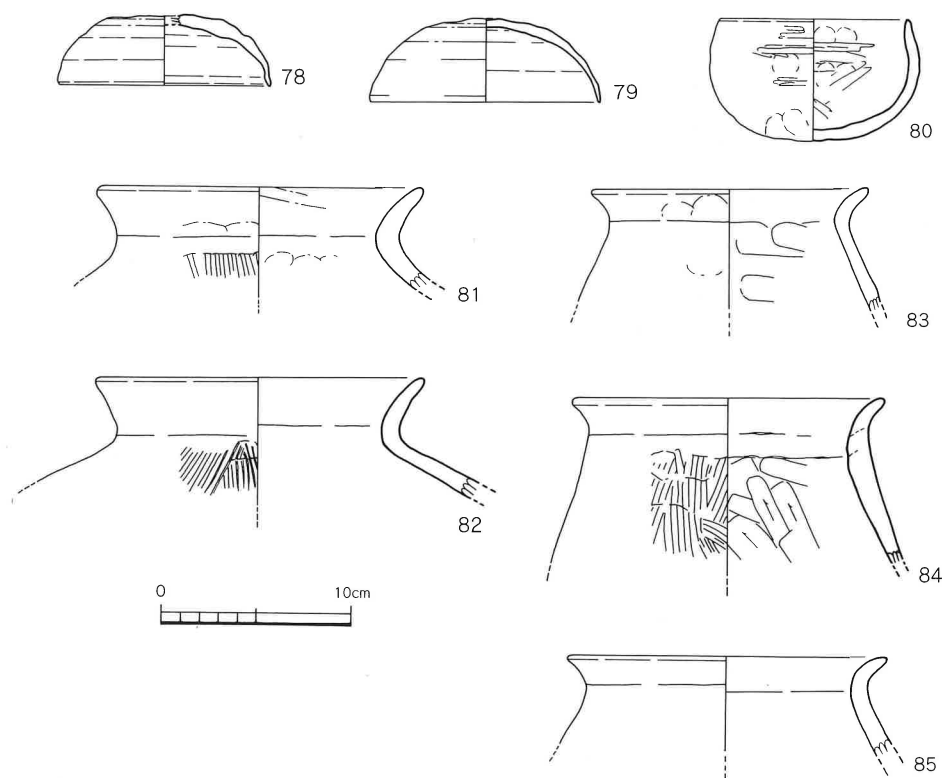


第51図 16号竪穴住居跡実測図

16号竪穴住居跡出土遺物

78・79は須恵器坏蓋、80は土師器鉢、81・82は土師器壺、83～85は土師器甕である。78の胎土には石英が僅かに含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.1cm、器高は3.7cmである。79の胎土には石英が僅かに含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほか、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は12.1cm、器高は4.3cmである。80の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から胴部にかけては磨きと指圧痕、底部には不定方向ナデ、内面は磨き及び指圧痕が観察される。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄白色である。口径は10.1cm、器高は6.4cmである。81の胎土には長石が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下がナデとハケ目、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕がみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は17.2cmである。82の胎土には長石、角閃石、

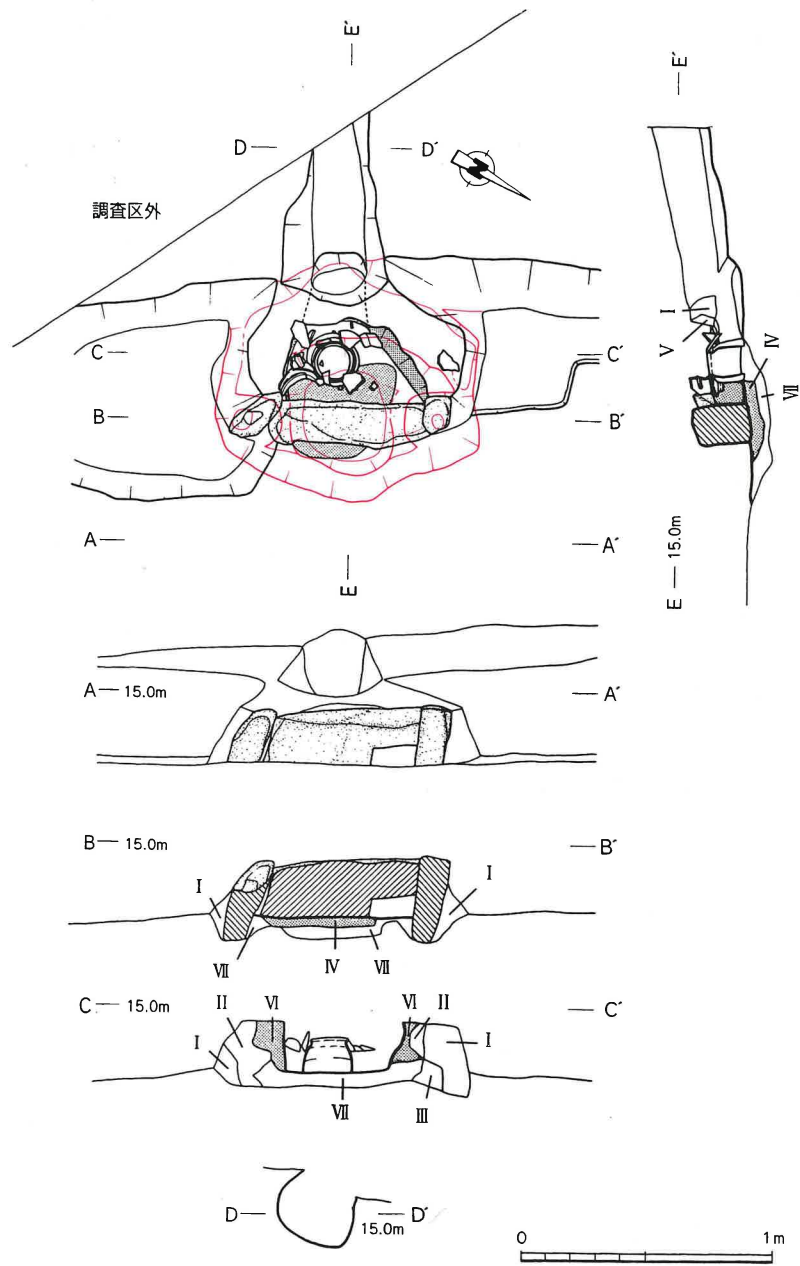
黒色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下がハケ目、内面は口縁部から頸部が不定方向ナデ、胴部は摩滅しており不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は17.3cmである。83の胎土には角閃石と赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部が不定方向ナデと指圧痕、内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部がへら削りである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.5cmである。84の胎土には長石、石英、角閃石、雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下がハケ目、内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下が不定方向へら削りである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が見られる。口径は16.4cmである。85の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は横ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。口径は16.9cmである。78～85は6世紀後半と考えたい。



第52図 16号竪穴住居跡出土遺物実測図

16号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたもので、調査区内より確認されたカマドのなかで最も保存状況の良い遺構である。損壊していたカマド構造は焚口室天井、煙出部天井より煙道上部に至る各天井及び上部構造、天井石の焚口袖石間への崩落（人為的なものか自然的なものかは判断できない）のみである。前庭は極めて浅く窪み、左右焚口袖石内面、燃焼室内壁は熱変赤色硬化し、両袖は粘質土を用い構築している。支脚は甕（胴部下半と底部を打ち欠き使用）を据え付けるものである。炎口室天井と煙口室内壁は残存している。低い煙出部（煙出部奥壁）から断面楕円形の煙道に至る。煙道断面の長軸は32cm、短軸24cm以上で、長さ54cm以上（煙道は調査区外に続く）である。焚口袖石と天井石は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いていた。カマド基盤床の平面プランは不定形で前庭から支脚部にかけて掘削していた。さらに、焚口部から焚燃部及び左右焚口袖石直下を全体より一段深く掘込んでいた。規模は長軸1.05m、短軸65cm、最大深14cmである。

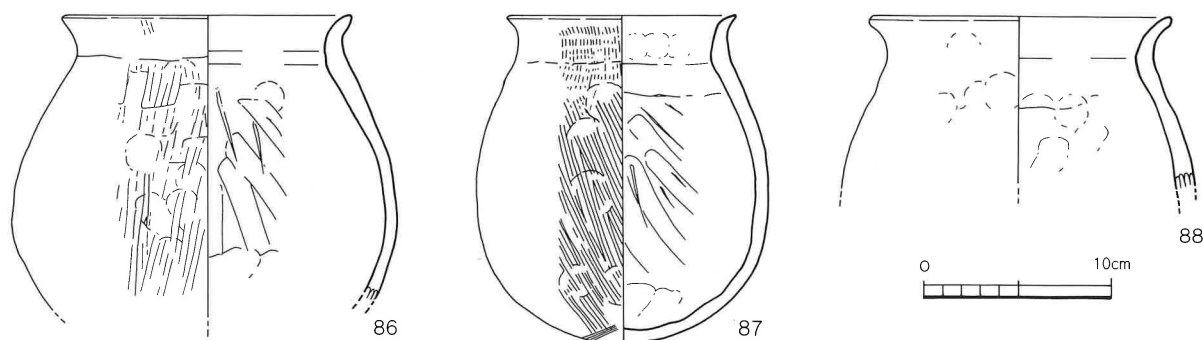


- | | |
|------------|----------------------------|
| I層：黒褐色土 | 暗褐色粒を含みよく締まる。 |
| II層：明褐色粘質土 | 褐色の粘土層で熱硬化した焚燃部を取り巻く形で広がる。 |
| III層：暗黒褐色土 | 暗黒褐色粒を含みよく締まる。 |
| IV層：赤褐色土 | 熱硬化した焚燃部。 |
| V層：黒色土 | カマド上部構造で暗褐色、赤褐色の粒を含む。 |
| VI層：赤褐色土 | IV層に類似するもので、燃焼室内壁と推定される。 |
| VII層：黒色土 | 赤色粒を僅かに含みよく締まる。 |

第53図 16号竪穴住居カマド跡実測図

16号竪穴住居カマド跡出土遺物

86～88は土師器甕で、86は支脚に用いられていた。86の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕とハケ目、内面の調整は口縁部から頸部は横ナデ、胴部は指圧痕及びへら削りを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の沈着がみられる。口径は15.1cm、胴部最大径は20.2cmである。87の胎土には長石、石英、雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部から底部が指圧痕とハケ目、内面の調整は口縁部から頸部は横ナデと指圧痕、胴部には粘土指圧痕及びへら削りと指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の沈着がみられる。口径は12.1cm、胴部最大径は15.5cm、器高は17.1cmである。88の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部が指圧痕と不定方向ナデ、内面の調整は口縁部から頸部は横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が黄橙色、内面が暗黄色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の沈着がみられる。口径は16.0cmである。86～88は6世紀後半と考えたい。



第54図 16号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

17号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部西側に位置する。住居は16号住居、18号住居と切り合い関係にあり、西壁北半分を残すのみである。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は2.68m×2.61m、最大深15cmである。残存する壁面に沿い最大深3cmの壁溝を検出した。住居内には柱穴を2基確認したが遺構に伴うものかは不明である。切り合い関係にある遺構との新旧は特定されなかった。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

18号竪穴住居跡

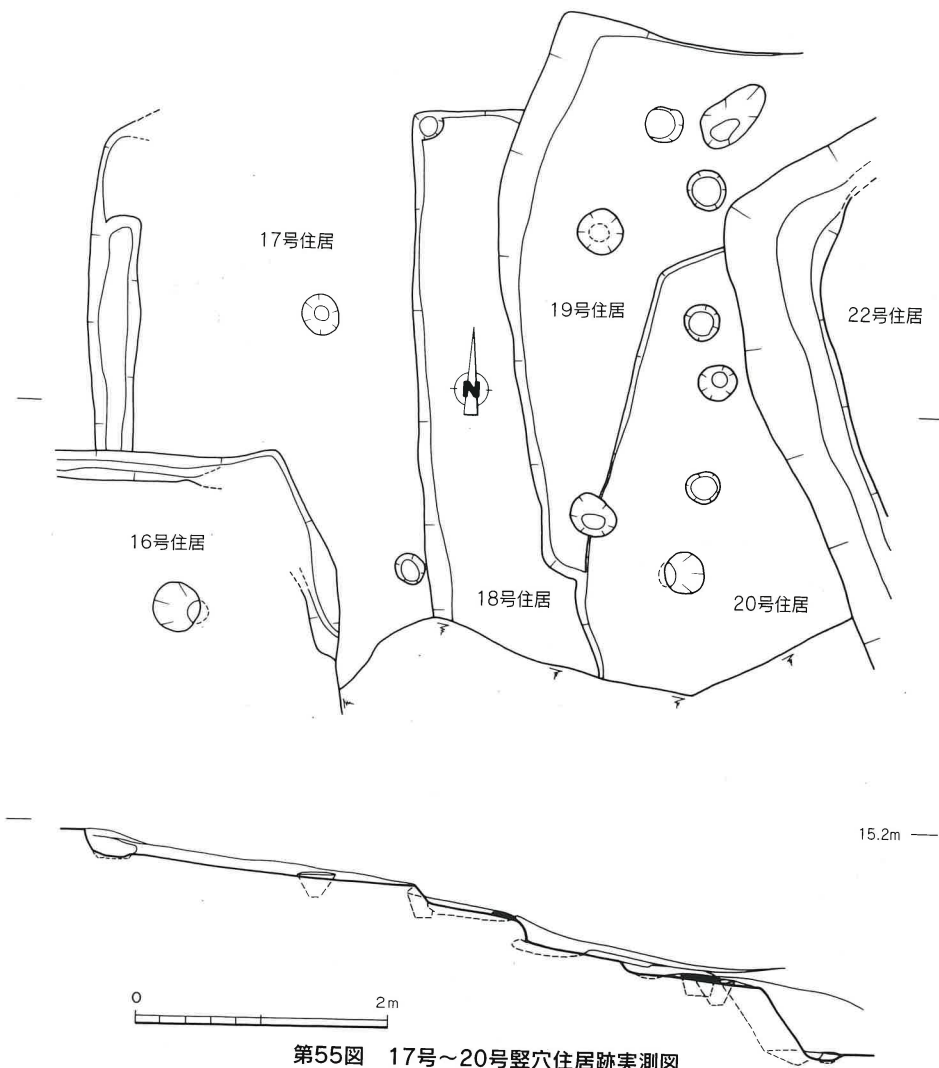
遺構は調査区の中央部西側に位置する。住居は17号住居、19号住居、20号住居と切り合い関係にあり、西壁南端を除く部分と北壁西端を残すのみである。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.03m×90cm、最大深15cmである。残存する壁面に沿い柱穴を1基検出したが遺構に伴うものかは不明である。切り合い関係にある遺構との新旧は特定されなかった。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

19号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部西側に位置する。住居は18号住居、20号住居、22号住居と切り合い関係にあり、北壁西半分、西壁、南壁西端を残すのみである。平面プランは歪んだ方形と推定され、確認できる規模は4.47m×2.45m、最大深25cmである。住居内には柱穴を5基確認したが遺構に伴うものかは不明である。切り合い関係にある遺構との新旧は特定されなかった。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

20号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部西側に位置する。住居は18号住居、19号住居、22号住居と切り合い関係にあり、北壁西端と西壁南端を除く部分を残すのみである。平面プランは歪んだ方形と推定され、確認できる規模は3.37m×2.08m、最大深7cmである。住居内からは柱穴を4基確認したが遺構に伴うものかは不明である。切り合い関係にある遺構との新旧は特定されなかった。時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第55図 17号～20号竪穴住居跡実測図

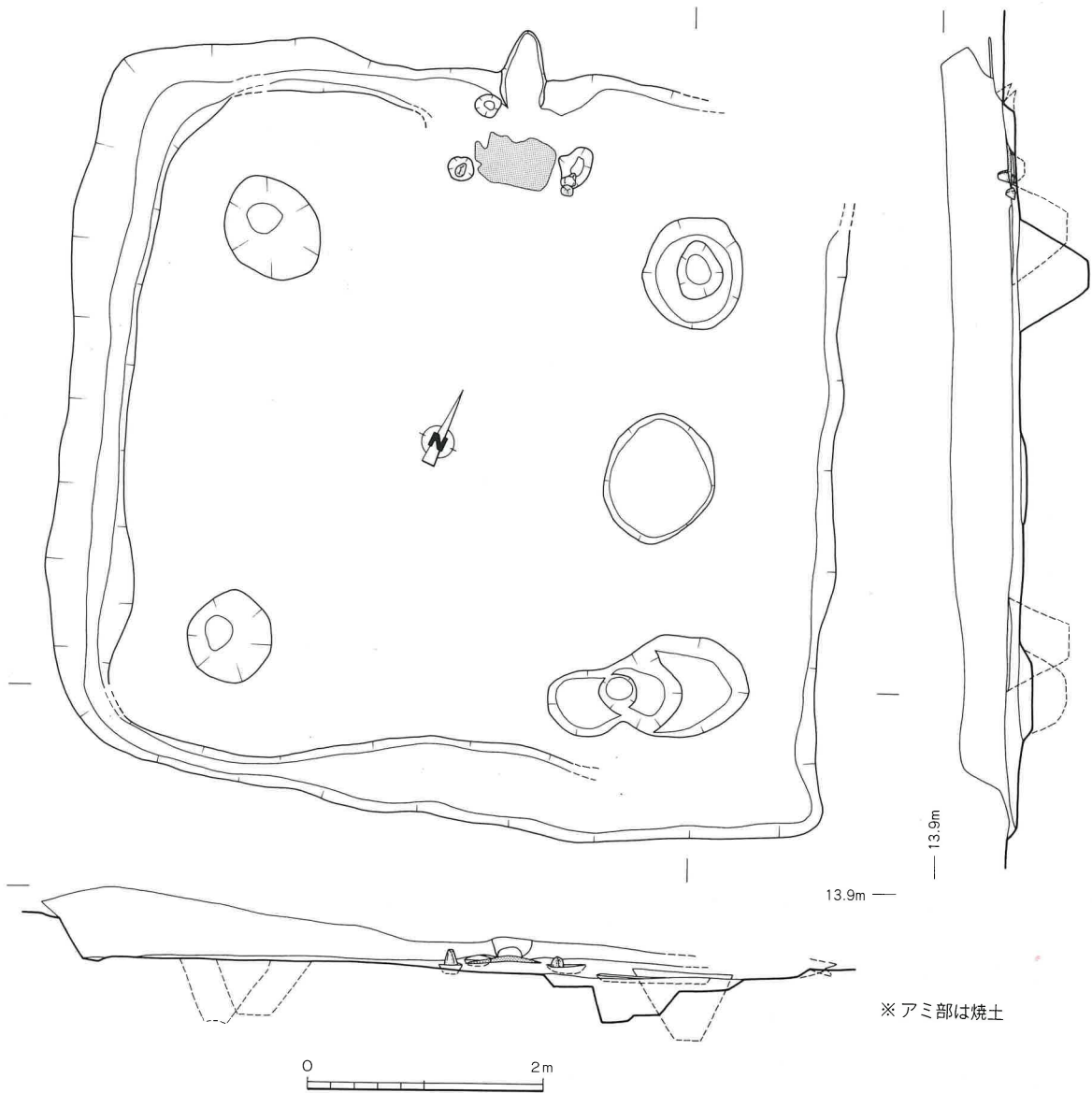
第56図 21号竪穴住居跡実測図

21号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部西側に位置する。住居は東半分を近年の攪乱により消失しており、西半分を残すのみである。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.42m×2.69m、最大深35cmである。西壁沿いには最大深6cmの壁溝を検出した。住居床面には柱穴を4基確認したが支柱穴を断定できない。時期を特定できる遺物は確認されなかった。

22号竪穴住居跡

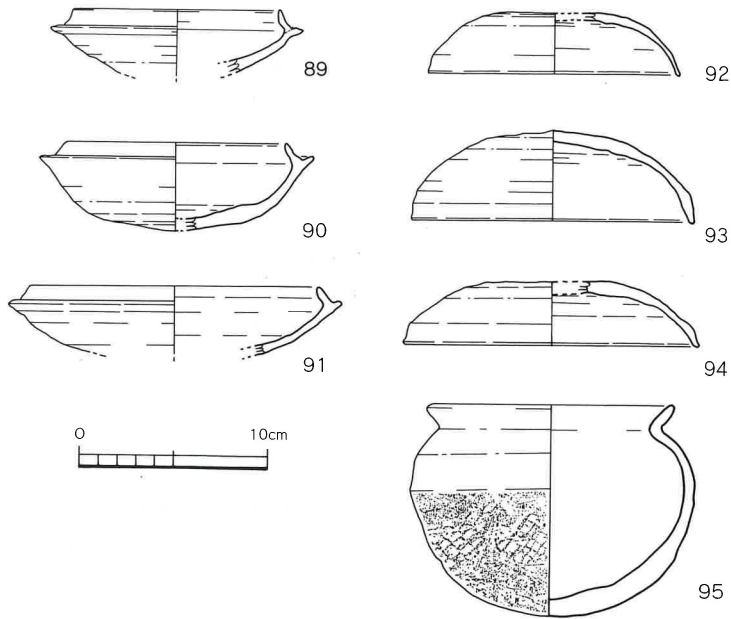
遺構は調査区の中央部に位置し、北壁にはカマドを付設している。住居北東隅は23号住居と接するが近年の攪乱により消失していた。平面プランは長方形で、確認できる規模は6.47m×6.55m、最大深58cmである。支柱穴は4基を確認した。カマド西側から西壁、南壁中央部に至るまで最大深5cmの壁溝を検出した。東側の支柱穴間には楕円形の土坑を検出した。規模は長軸1.11m、短軸95cm、最大深5cmである。23号住居との前後関係は断定できなかった。



第57図 22号竪穴住居跡実測図

22号竪穴住居跡出土遺物

89~91は須恵器坏身、92~94は須恵器坏蓋、95は土師器小甕である。89の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.0cmである。90の胎土には石英、長石、白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.6cm、器高は4.6cmである。91の胎土には長石と石英が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は15.3cmである。92の胎土には石英が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は13.3cm、器高は3.2cmである。93の胎土には石英、長石、角閃石が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.9cm、器高は4.7cmである。94の胎土には石英、長石が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は15.6cm、器高は3.4cmである。95の胎土には長石、石英、灰色砂粒が含まれ外面の調整



第58図 22号竪穴住居跡出土遺物実測図

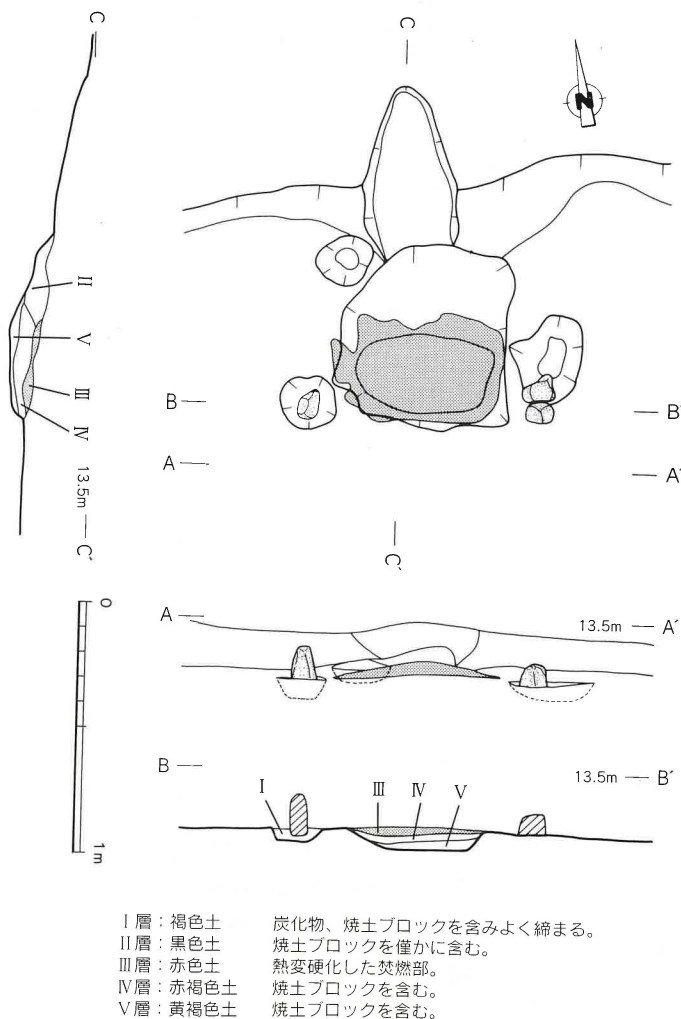
は口縁部から胴部上半分が横ナデ、胴部下半分から底部にかけては格子目タタキと不定方向ナデ、内面のは口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部から底部は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤が沈着している。口径は13.0cm、器高は11.1cmである。89~95は6世紀後半と考えたい。

22号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設している。カマドは左右焚口袖石、熱変赤色硬化した焚焼部、排煙施設を残している。袖石は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いている。カマド基盤床の平面プランは不定形で長軸75cm、短軸68cm、最大深17cmである。

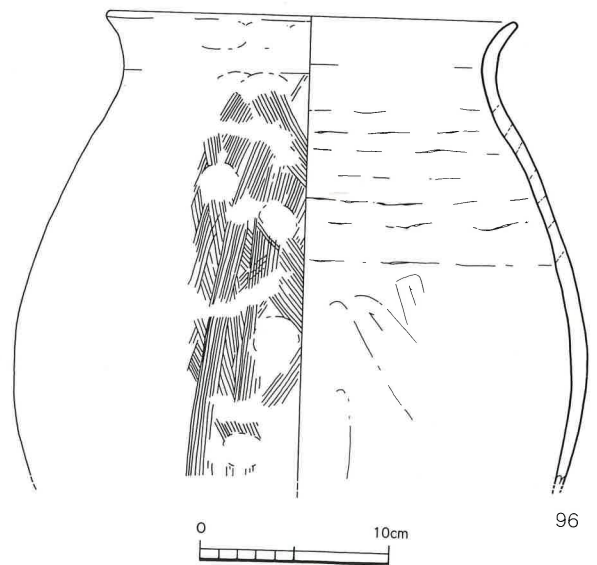
22号竪穴住居カマド跡出土遺物

96は土師器甕である。胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下は指圧痕とハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕とヘラナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに明茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は21.5cm、胴部最大径は30.2cmである。遺物は6世紀後半と考えたい。



- | | |
|----------|---------------------|
| I層：褐色土 | 炭化物、焼土ブロックを含みよく締まる。 |
| II層：黒色土 | 焼土ブロックを僅かに含む。 |
| III層：赤色土 | 熱変硬化した焚焼部。 |
| IV層：赤褐色土 | 焼土ブロックを含む。 |
| V層：黄褐色土 | 焼土ブロックを含む。 |

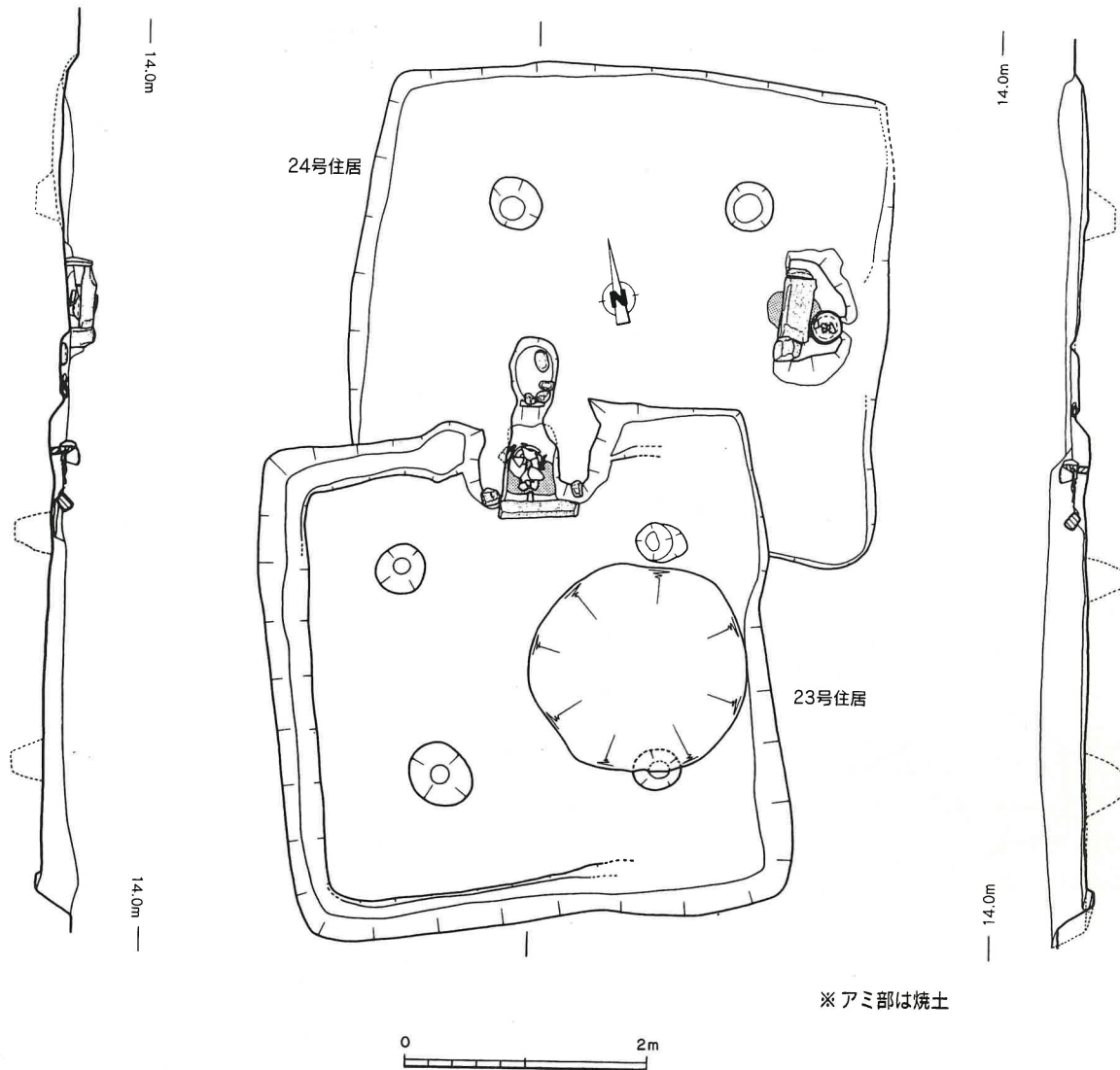
第59図 22号竪穴住居カマド跡実測図



第60図 22号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

23号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部に位置する。住居北壁にはカマドを付設しているが、東寄りに近年の攪乱坑が確認されている。平面プランは正方形で、規模は4.17m×4.12m、最大深40cmである。主柱穴は4基を確認した。カマド東側と西側より西壁、南壁中央部に至まで最大深5cmの壁溝を検出した。23号住居は24号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から24号住居から23号住居への切り合いを確認した。

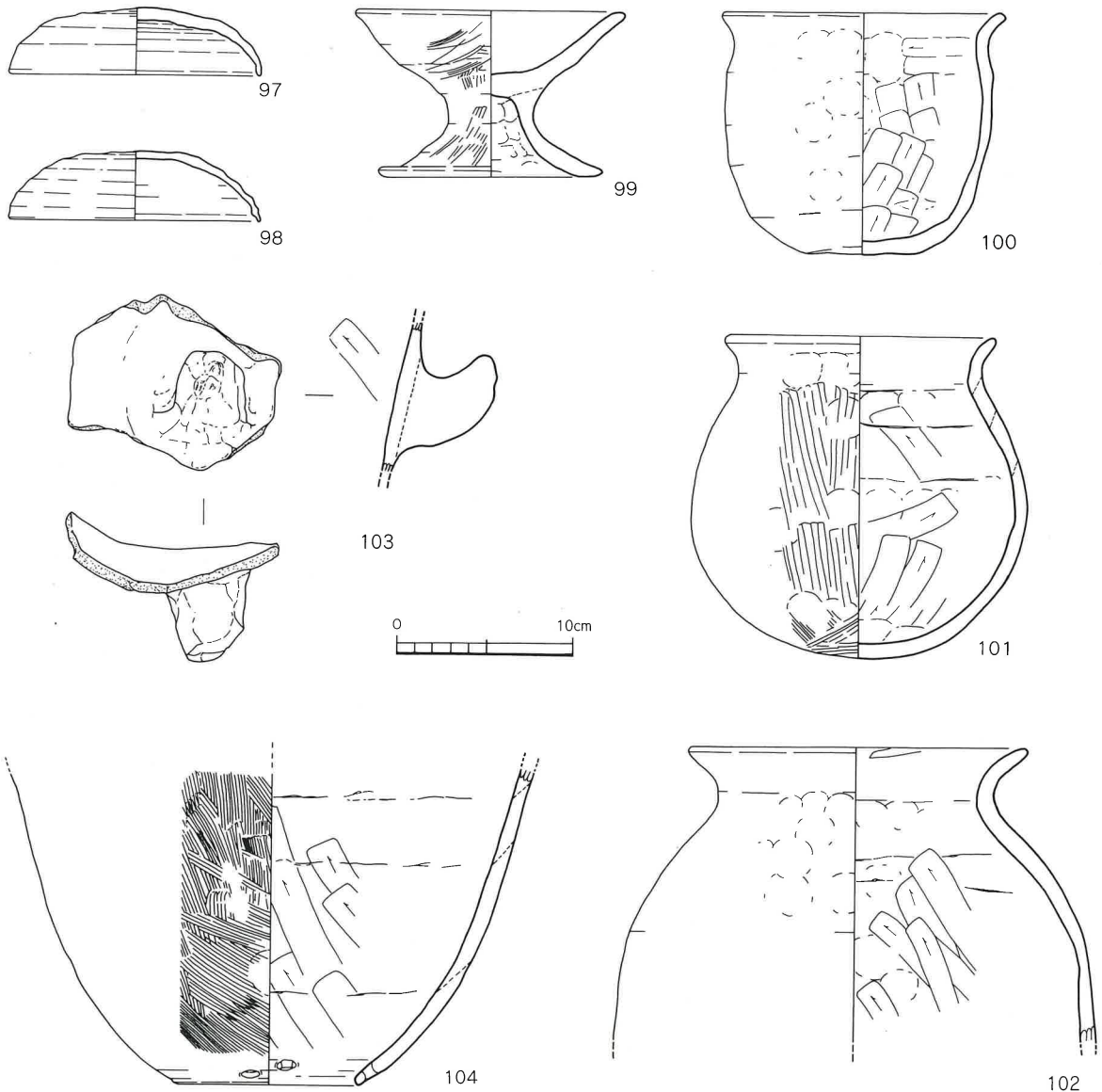


第61図 23号・24号竪穴住居跡実測図

23号竪穴住居跡出土遺物

97・98は須恵器坏蓋、99土師器高坏、100～102は土師器甕、103・104は土師器甔である。97の胎土には石英、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は外面天井部にヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.0cm、器高は3.7cmである。98の胎土には石英、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は外面天井部にヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.1cm、器高は3.8cmである。99の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整はハケ目、底部のみ横ナデ、内面は坏部が横ナデ、脚部に指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の沈着がみられる。口径は15.2cm、底径は12.3cm、器高9.2cmである。100の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕、胴部から底部は指圧痕と不定方向ナデ、内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、

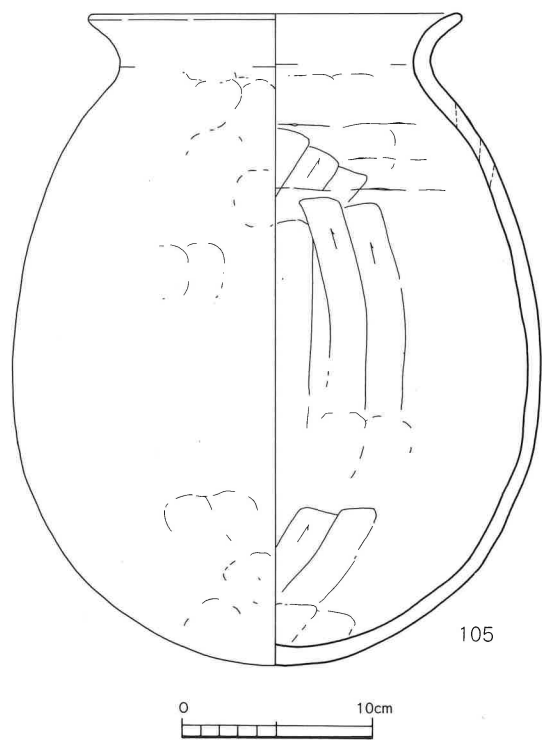
内面が暗赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.0cm、器高は13.4cmである。**101**の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下はハケ目と指圧痕、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下が粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りを観察できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.1cm、胴部最大径は18.8cm、器高は17.8cmである。**102**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部は指圧痕、胴部には指圧痕と不定方向ナデ、内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部から胴部にかけては粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄色である。口径は18.9cmである。**103**は長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は指ナデ、内面はヘラ削りと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**104**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整はハケ目で、底部のみ横ナデを施す。内面には粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデを観察できる。底部には焼成前の穿孔が2孔残される。焼成は良好で、色調は暗黄色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。底径は10.0cmである。**97~104**は6世紀後半と考えたい。



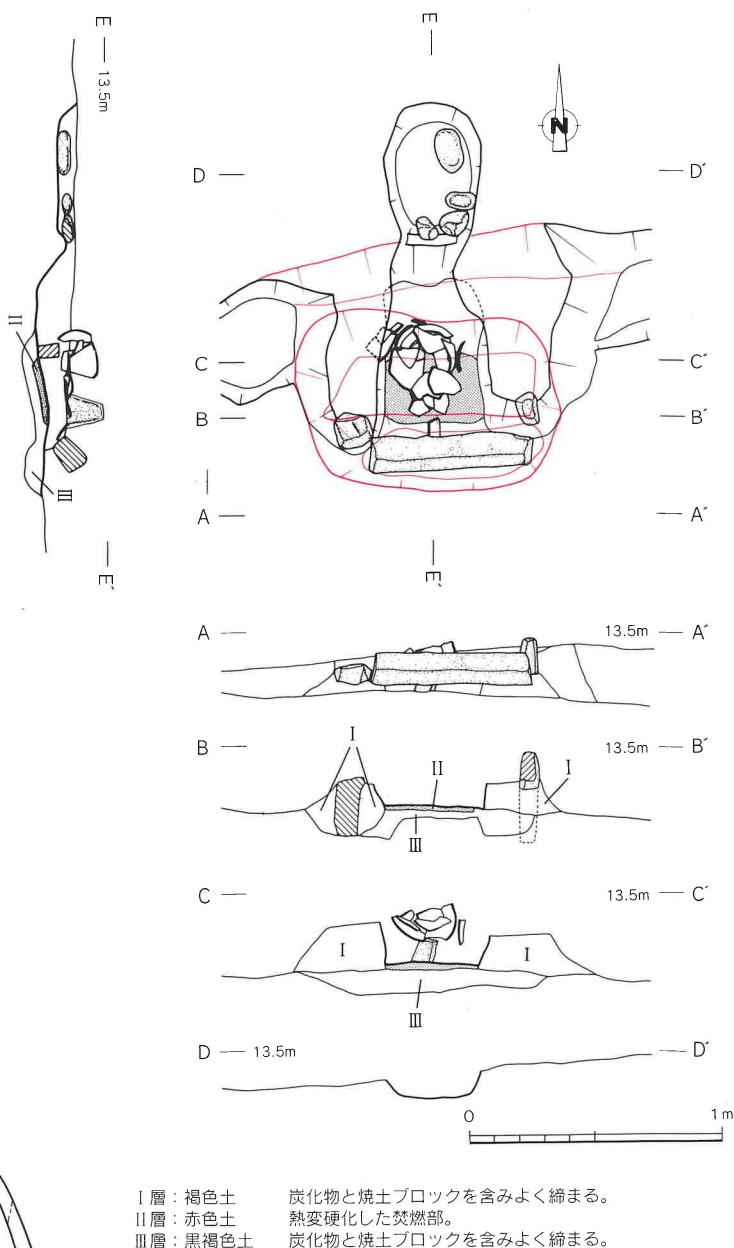
第62図 23号竪穴住居跡出土遺物実測図

23号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたもので良好な保存状況であった。損壊したカマド構造は焚口室天井－焚口室天井－煙出部天井より煙道上部に至る各天井及び上部構造、天井石の前庭への崩落（人為的なものか自然的なものかは判断できない）のみである。前庭は極めて浅い窪みを持ち、焚燃部は熱変赤色硬化し、両袖は暗褐色土を用い構築している。支脚直上には被熱劣化した甕の底部片が散在していた。煙口室内壁は残存し、低い煙出部（煙出部奥壁）から煙道に至る。煙道内には僅かに熱変赤色化した河原石が4個出土している。焚口袖石、天井石、支脚は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いていた。カマド基盤床の平面プランは不定形で前庭から支脚部にかけて掘削されていた。さらに、前庭から焚口部及び左右焚口袖石直下を一段深く掘込んでいた。掘り方の規模は長軸1.03m、短軸70cm、最大深13cmである。



第64図 23号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図



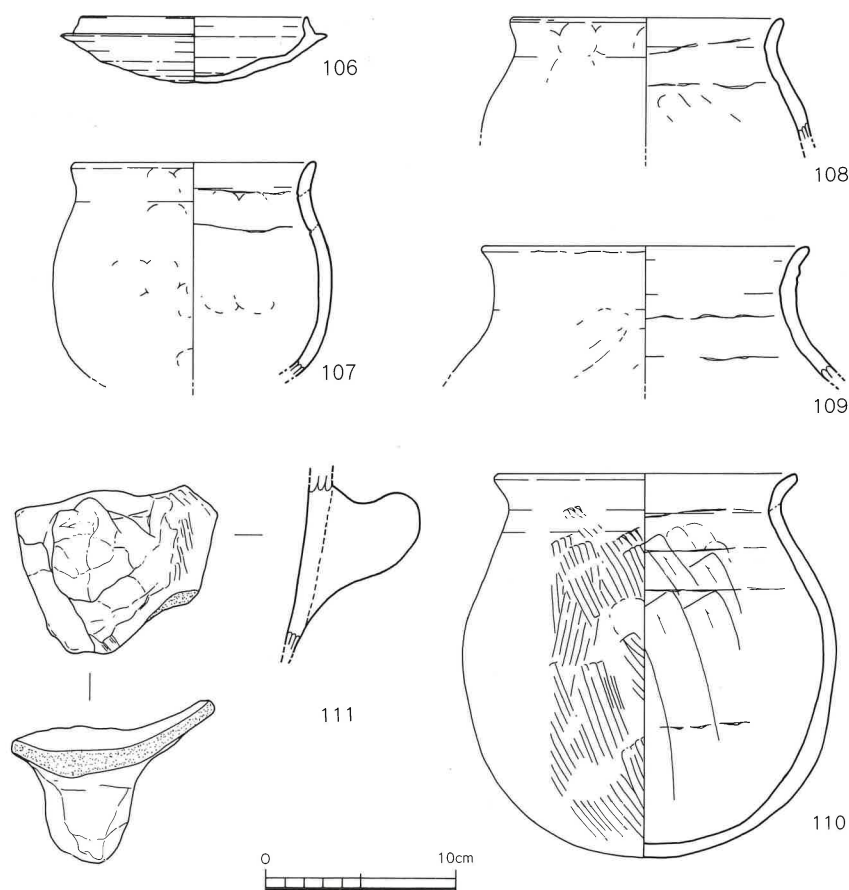
第63図 23号竪穴住居カマド跡実測図

23号竪穴住居カマド跡出土遺物

105は支脚直上に据えられていた土師器甕で、カマド使用時のものと考えられる。胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部から底部が指圧痕と不定方向ナデ、内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りである。焼成は良好で、色調は外面が淡黄色、内面が淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が観察される。口径は19.8cm、胴部最大径は27.8cm、器高は34.1cmである。105は6世紀後半と考えたい。

24号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部に位置する。住居東壁にはカマドを付設しているが、南壁は23号住居により大部分が削平されていた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は4.35m×3.86m、最大深18cmである。主柱穴は23号住居の削平により2基を確認するに止まった。24号住居は23号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から24号住居から23号住居への切り合いを確認した。



第65図 24号竪穴住居跡出土遺物実測図

24号竪穴住居跡出土遺物

106は須恵器坏身、107～110は土師器甕、111は土師器甕である。106の胎土には長石、角閃石が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.9cm、器高は4.5cmである。107の胎土には長石と角閃石が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は12.9cm、胴部最大径は17.7cmである。

108の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下は指圧痕と不定方向ナデ、内面には粘土積み上げ痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は14.4cmである。109の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は横ナデと指圧痕、内面には粘土積み上げ痕と横ナデが確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。口径は17.2cmである。110の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれる。外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目と指圧痕、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びヘラナデと指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面は暗茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.0cm、胴部最大径は19.8cm、器高は20.1cmである。111の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は指ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。106～111は6世紀後半と考えたい。

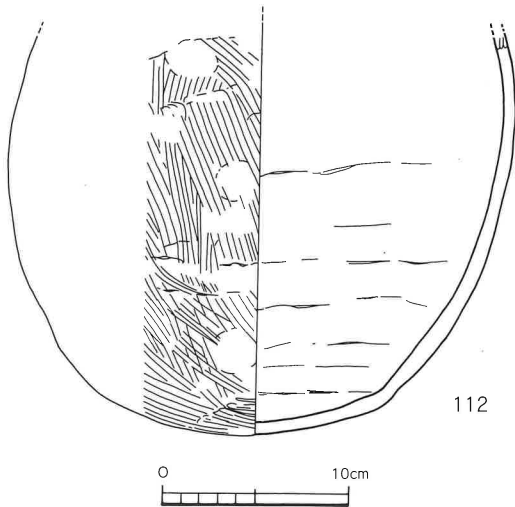
24号竪穴住居カマド跡

住居東壁に付設されたものである。損壊したカマド構造は焚口室天井－炎口室天井以降の部分である。天井石は左右焚口袖石間に崩落（人為的なものか自然的なものかは判断できない）している。前庭は燃烧室より一段低く、

焚燃部は熱変赤色硬化している。両袖は粘質土を用い構築している。支脚は出土せず被熱劣化した甕の底部のみ残存していた。左右焚口袖石、天井石は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いていた。カマド基盤床の平面プランは歪な楕円形で前庭から燃焼室付近にかけて掘削されていた。規模は長軸1.15m、短軸82cm、最大深13cmである。

24号竪穴住居カマド跡出土遺物

112は天井石後方に据えられていた土師器甕で、カマド使用時のものと考えられる。胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は指圧痕とハケ目、内面には粘土積み上げ痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は27.0cmである。112は6世紀後半と考えたい。



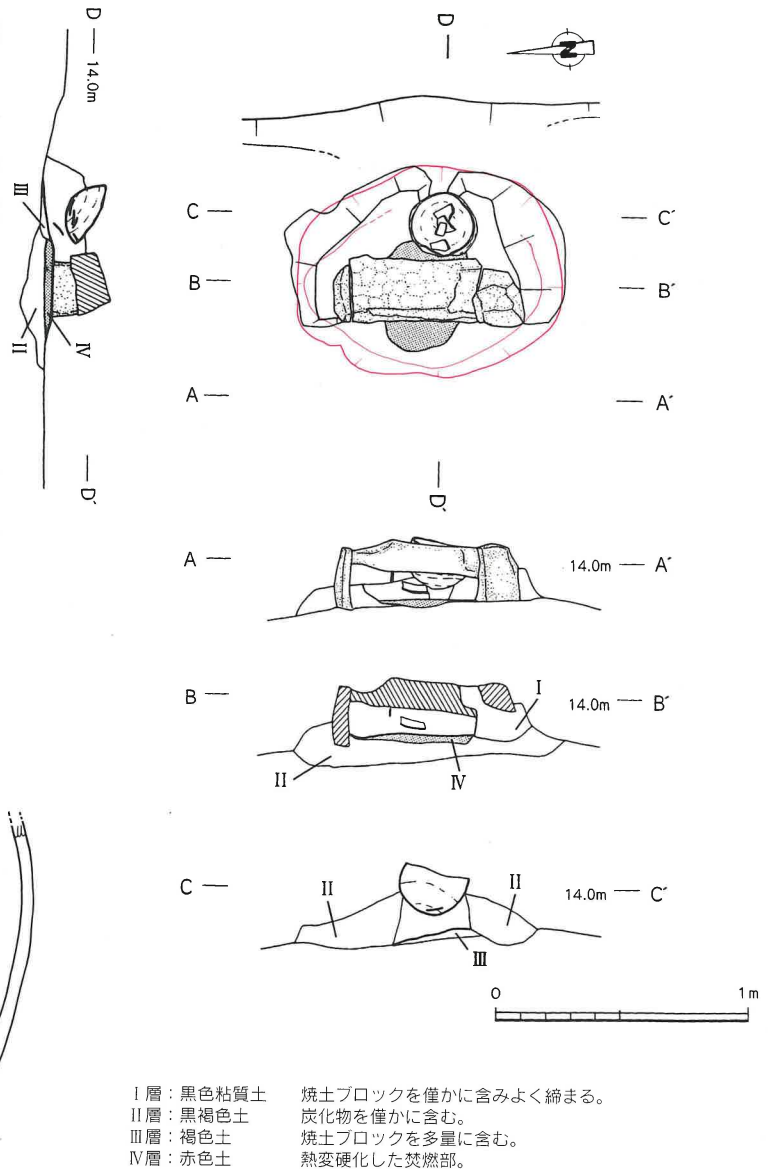
第67図 24号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

25号竪穴住居跡

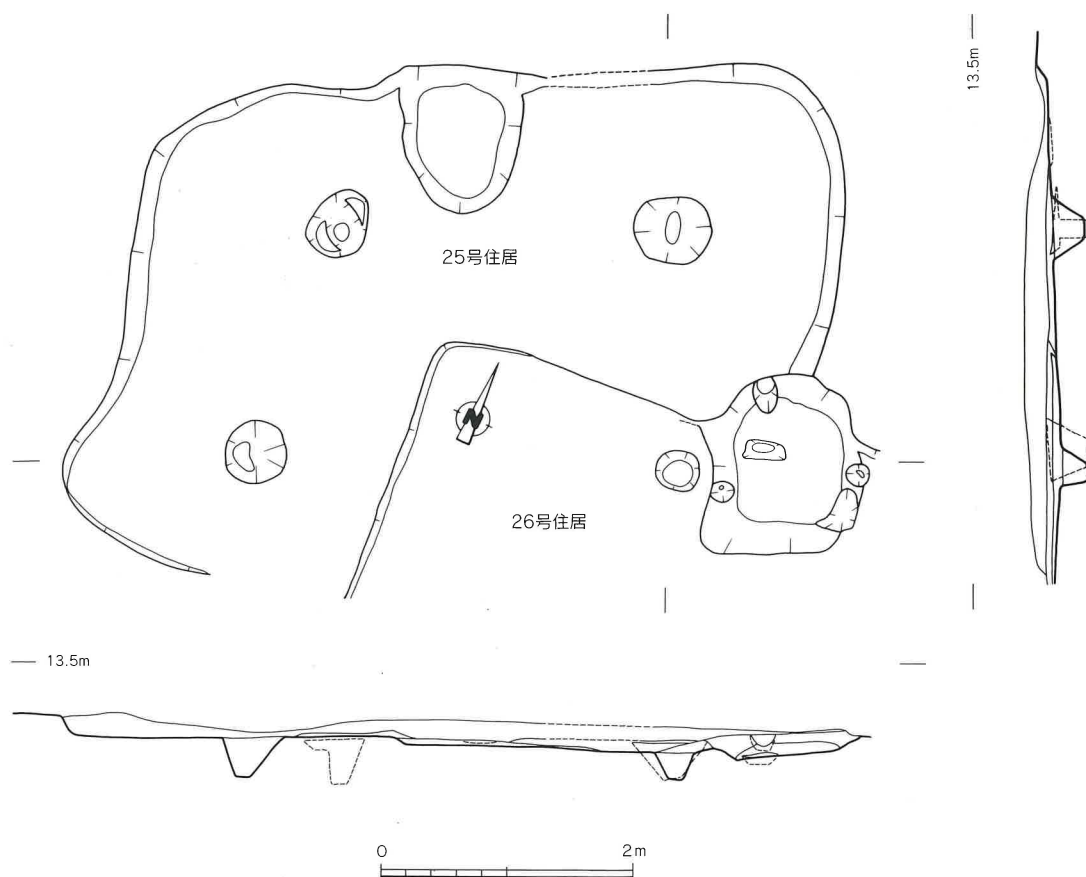
遺構は調査区の中央部東側に位置するが、住居東南部は26号住居により削平されていた。平面プランは歪な方形と推定され、確認できる規模は3.93m×5.55m、最大深23cmである。北壁には平面プラン楕円形の掘り方を検出した。規模は長軸1.16m、短軸96cm、最大深3cmで、カマド構築時の掘り方である可能性が高い。支柱穴は26号住居により一部削平されていたが4基を確認した。25号住居は26号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から25号住居から26号住居への切り合いを確認した。

25号竪穴住居跡出土遺物

113は土師器甕、114は紡錘車である。113の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下は指圧痕とハケ目、把手は指ナデ、内面は口縁部が横ナデ、口縁部以下には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が淡黄色、内面が淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は27.6cmである。114は滑石製である。広径4.1cm、狭径3.2cm、厚さ1.9cm、孔径0.7cm、重量26.6gである。113は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。



第66図 24号竪穴住居カマド跡実測図



第68図 25号竪穴住居跡実測図

25号竪穴住居カマド跡出土遺物

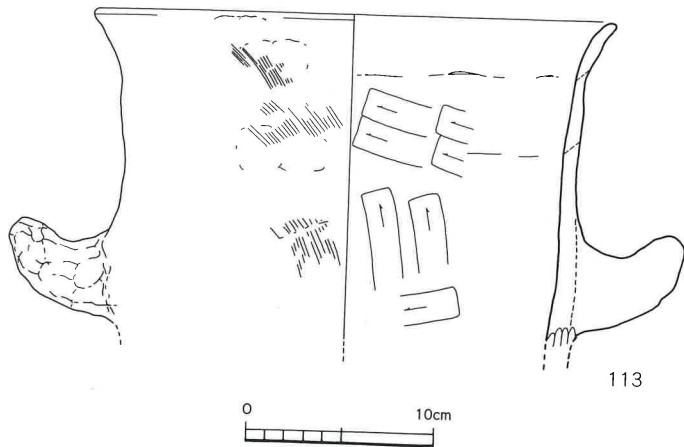
115は土師器甕、116は土師器高坏である。115の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がハケ目と不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びへら削り、指圧痕、不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、器面の剥離と煤の付着がみられる。口径は14.1cm、胴部最大径は19.3cmである。116の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれる。坏部外面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下はハケ目、脚部外面はへらナデで底部のみ回転横ナデである。坏部内面は口縁部が横ナデ、口縁部以下は不定方向ナデ、脚部内面は回転横ナデである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.6cm、底径は11.4cm、器高は11.5cmである。115・116は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。

26号竪穴住居跡

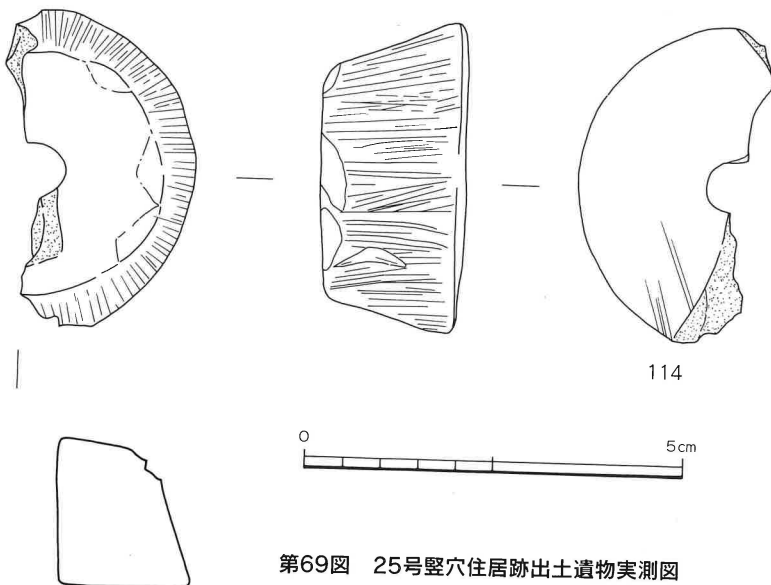
遺構は調査区の中央部東側に位置する。住居北壁にはカマドを付設しているが、南東隅は近年の攪乱により消失していた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は7.87m×6.08m、最大深7cmである。主柱穴は4基を確認した。26号住居は25号住居、27号住居、28号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から25号住居から26号住居、27号住居から26号住居、26号住居と28号住居は攪乱のため新旧関係不明である。

26号竪穴住居跡出土遺物

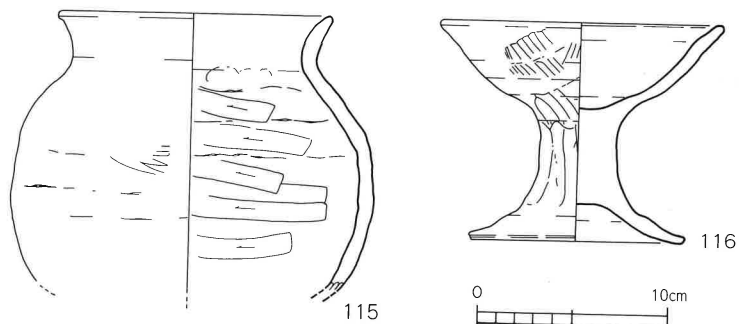
117は土師器甕である。胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ胴部には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰白色である。口径は15.8cmである。遺物は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。



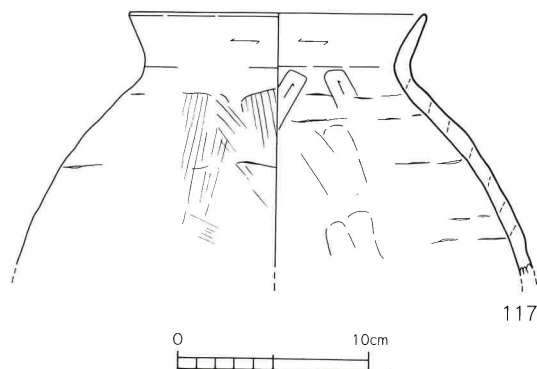
第69図 25号竪穴住居跡出土遺物実測図



第70図 25号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図



第71図 26号竪穴住居跡出土遺物実測図



26号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設している。カマドは支脚と熱変赤色硬化した焚燃部を残している。支脚は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いている。カマド基盤床の平面プランは不定形で長軸1.45m、短軸1.16m、最大深20cmである。東西のり面には焚口袖石の掘り方を検出している。カマド内から遺物は出土していない。

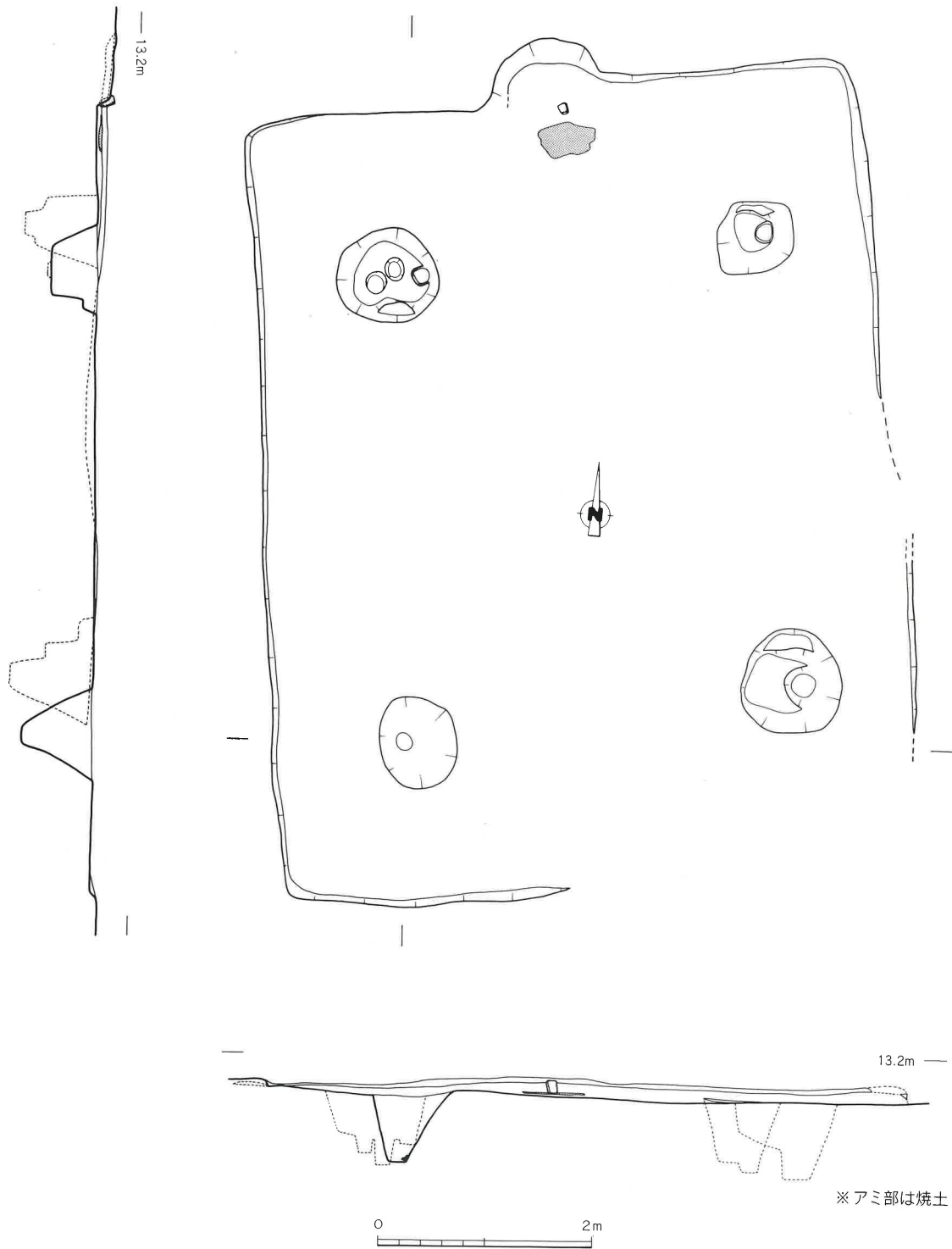
27号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部東側に位置する。北壁にはカマドを付設しているが、26号住居、28号住居により住居北東隅、南東隅を削平されている。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は4.53m×3.62m、最大深8cmである。主柱穴は26号住居、28号住居により一部削平されていたが4基を確認した。27号住居は26号住居、28号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から27号住居から26号住居、27号住居から28号住居にそれぞれ新旧関係を確認した。

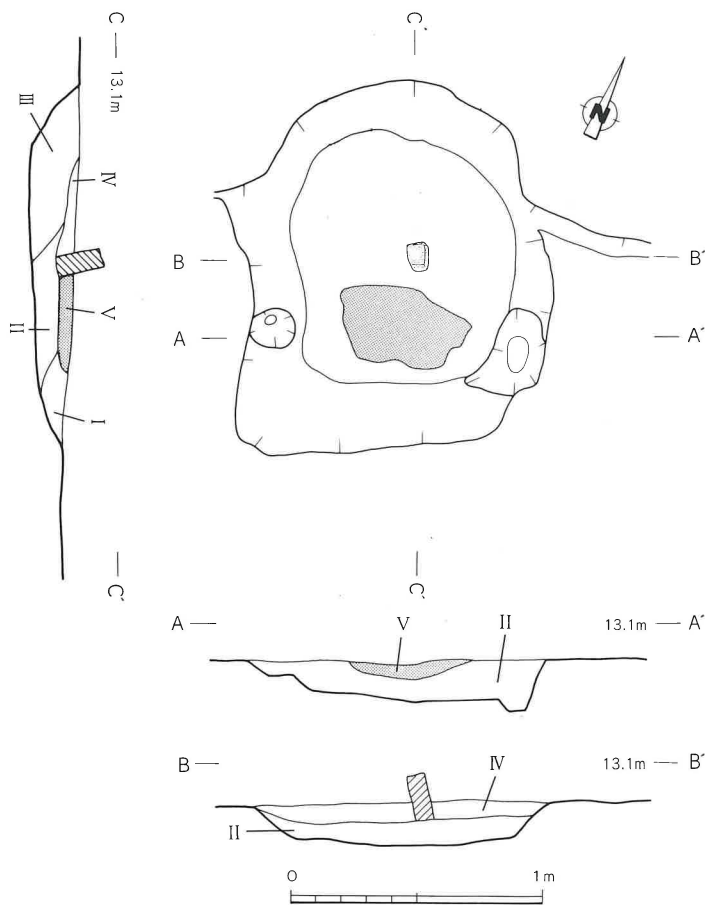
27号竪穴住居跡出土遺物

118・119は土師器甕、120は把手無しの土師器甕である。118の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕、胴部がハケ目、内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がへら削りである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は21.4cmである。119の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれる。外面の調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部が不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕と不定方向

ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。口径は19.3cmである。120の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデ、底部が横ナデ、内面は口縁部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕、指圧痕、ヘラ削り、不定方向ナデ、底部は横ナデがそれぞれみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が観察される。口径は23.4cm、底径は9.6cm、器高は19.4cmである。118~120は6世紀後半を中心とした時期と考えたい。



第72図 26号竪穴住居跡実測図



- I層：暗赤褐色土 焼土ブロック、炭化物を多量に含む。
- II層：褐色土 焼土ブロックを僅かに含む。
- III層：黒色土 炭化物を多量に含む。
- IV層：赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
- V層：赤色土 熱変硬化した焚燃部。

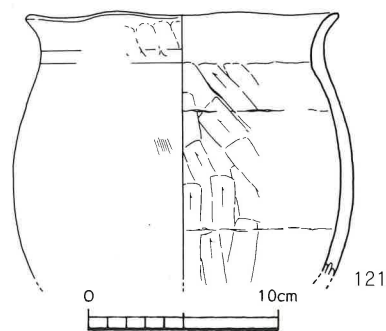
第73図 26号竪穴住居カマド跡実測図

27号竪穴住居カマド跡

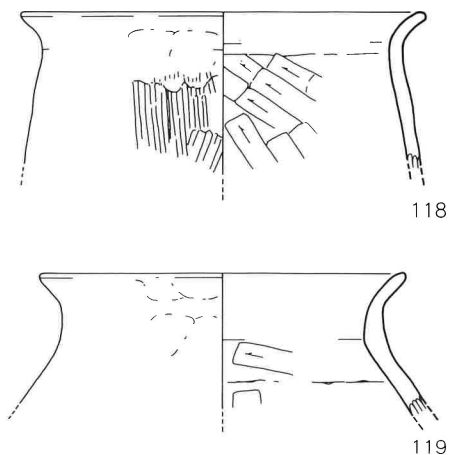
住居北壁に付設している。カマドは支脚と熱変赤色硬化した焚燃部を残している。支脚は甕の胴部から底部を打ち欠いたものを用いている。カマド基盤床の平面プランは不定形で長軸90cm、短軸71cm、最大深9cmである。東西のり面には焚口袖石の浅い掘り方を検出している。

27号竪穴住居カマド跡出土遺物

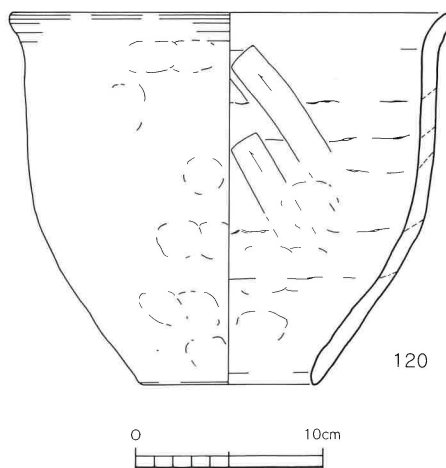
121は支脚に使用された土師器甕である。遺物の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部には僅かにハケ目が残る。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面は暗灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.4cm、胴部最大径は18.0cmである。121は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。

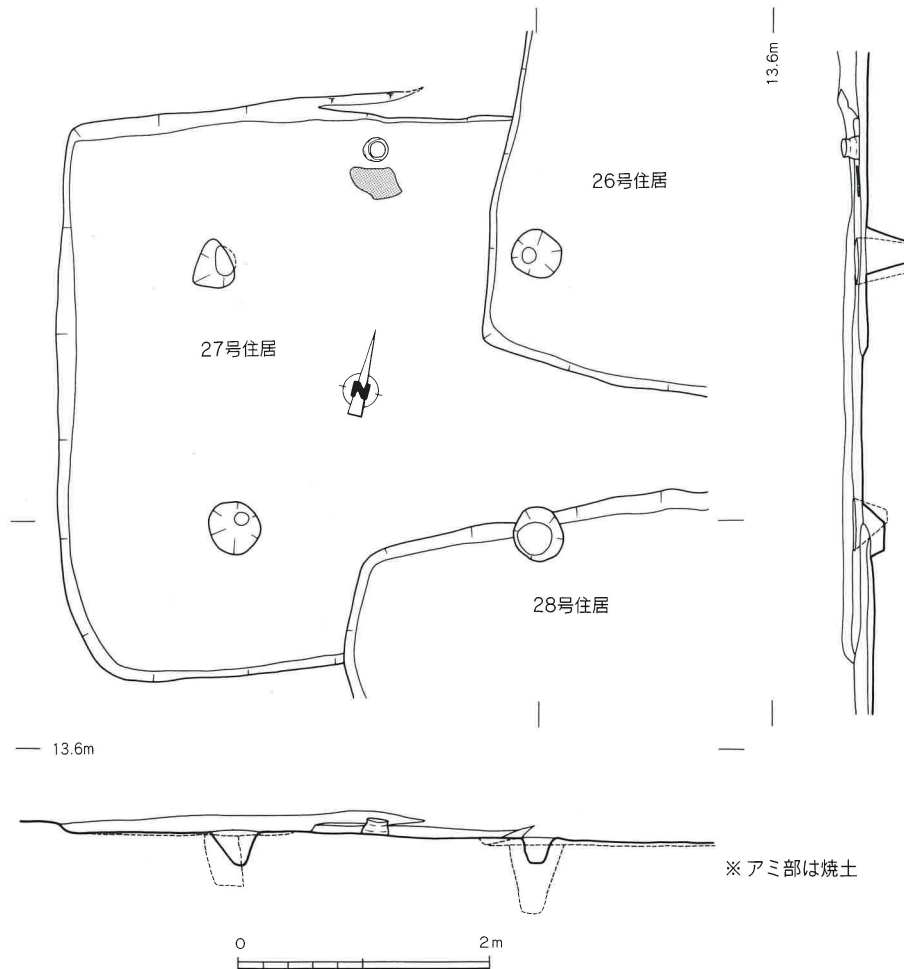


第75図 27号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図



第74図 27号竪穴住居跡出土遺物実測図





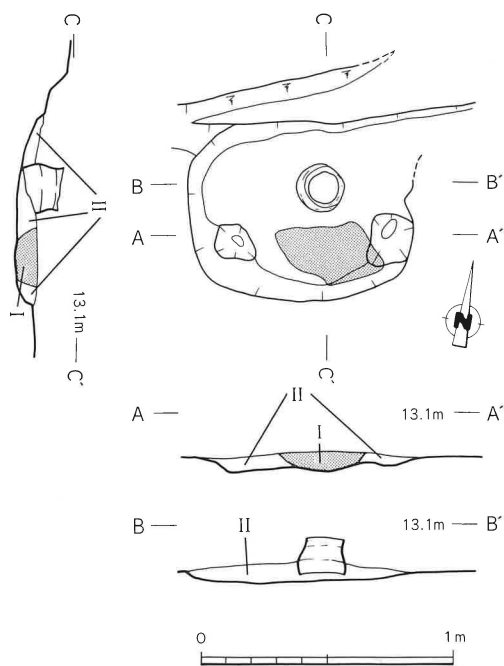
第76図 27号竪穴住居跡実測図

28号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部東側に位置する。北壁にはカマドを付設しているが、住居北東隅は近年の攪乱により削平されていた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は6.78m×6.36m、最大深18cmである。主柱穴は4基を確認した。28号住居は26号住居、27号住居、29号住居、30号住居、31号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から27号住居から28号住居、29号住居から28号住居、30号住居から28号住居、31号住居から28号住居、28号住居と26号住居は攪乱のため新旧関係不明である。

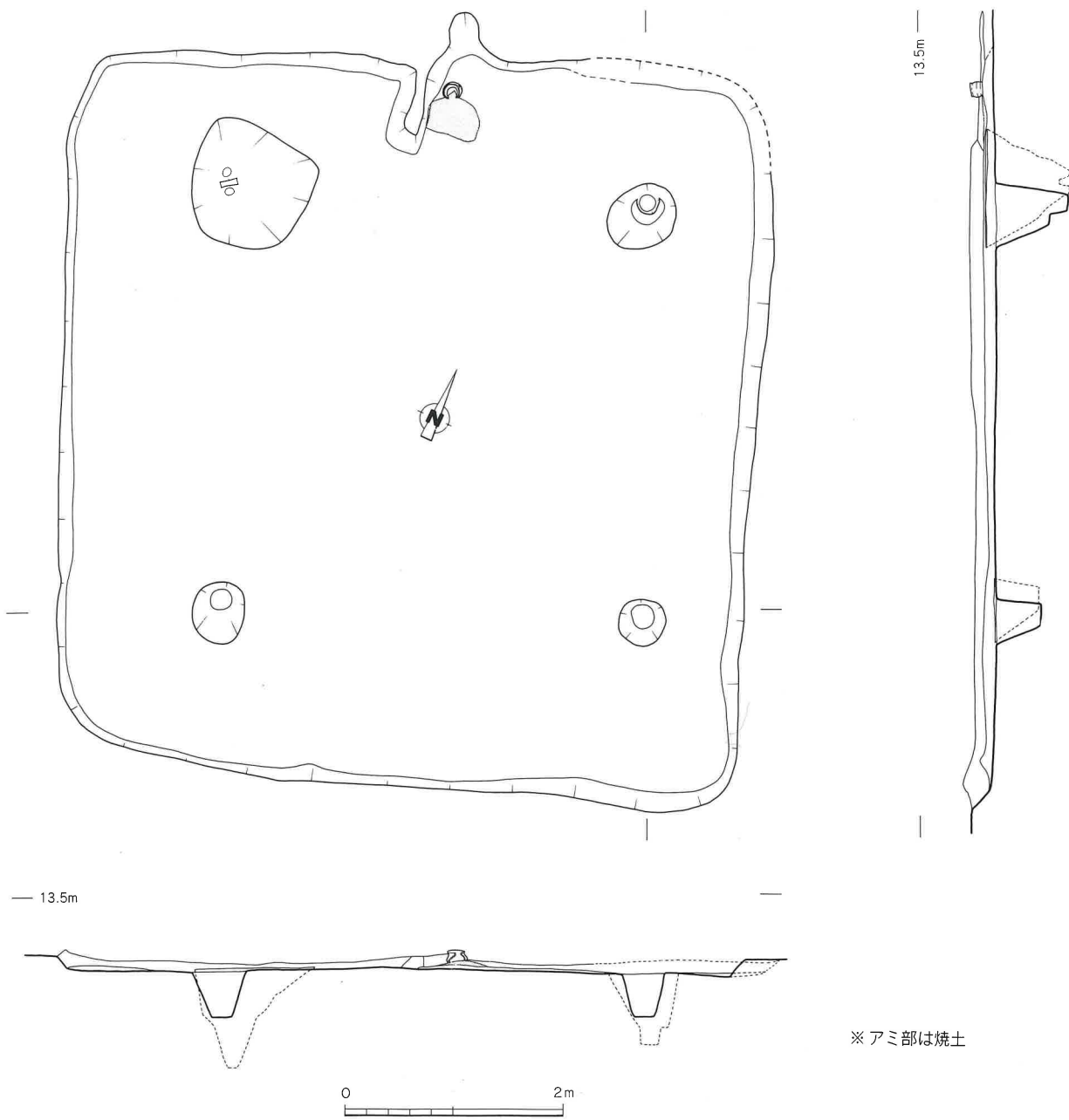
28号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものである。損壊したカマド構造は東側袖、焚口室天井—炎口室天井—煙道の部分である。残存する袖は褐色土で構築されているが、焚口袖石は確認されていない。焚燃部は熱変赤色硬化、支脚は甕の底部を打ち欠き用いている。支脚部後方から煙出部は比較的長めの構造を持つ。カマド基盤床の平面プランは不定形で前庭から煙出部奥壁下端にかけて掘削されていた。規模は長軸1.11m、短軸1.03m、最大深8cmである。



I層：赤色土 熱変硬化した焚燃部。
II層：茶褐色土 炭化物を含む。

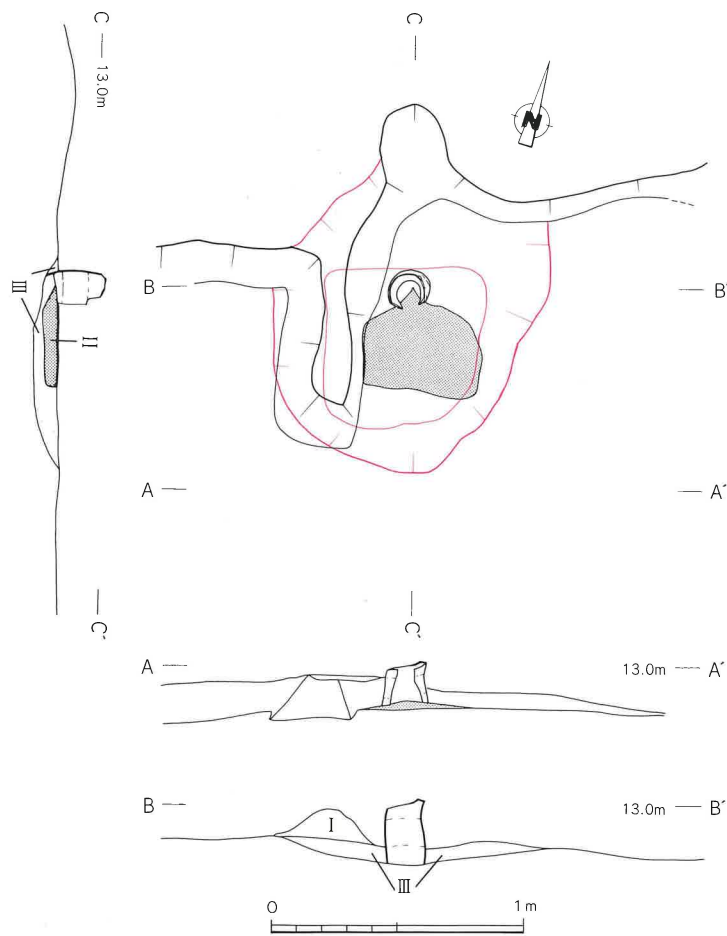
第77図 27号竪穴住居カマド跡実測図



第78図 28号竪穴住居跡実測図

28号竪穴住居跡出土遺物

122・123は須恵器坏身、124土師器壺、125は土師器甕である。122の胎土には白色砂粒が僅かに含まれ調整は外面底部のみへら削りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄灰色である。口径は11.5cmである。123の胎土には白色砂粒が僅かに含まれ調整は外面底部のみへら削りで、ほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗黄灰色である。口径は13.1cmである。124の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部から底部はハケ目を残す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部から底部には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており全面に煤の付着がみられる。口径は11.6cm、胴部最大径は24.2cm、器高は22.9cmである。125の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれる。外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がハケ目、内面は口縁部から頸部が横



I層：褐色土 白色の粘土粒を含みよく締まる。
 II層：赤色土 熱変硬化した焚燃部。
 III層：暗褐色土 炭化物と微細な焼土粒を含む。

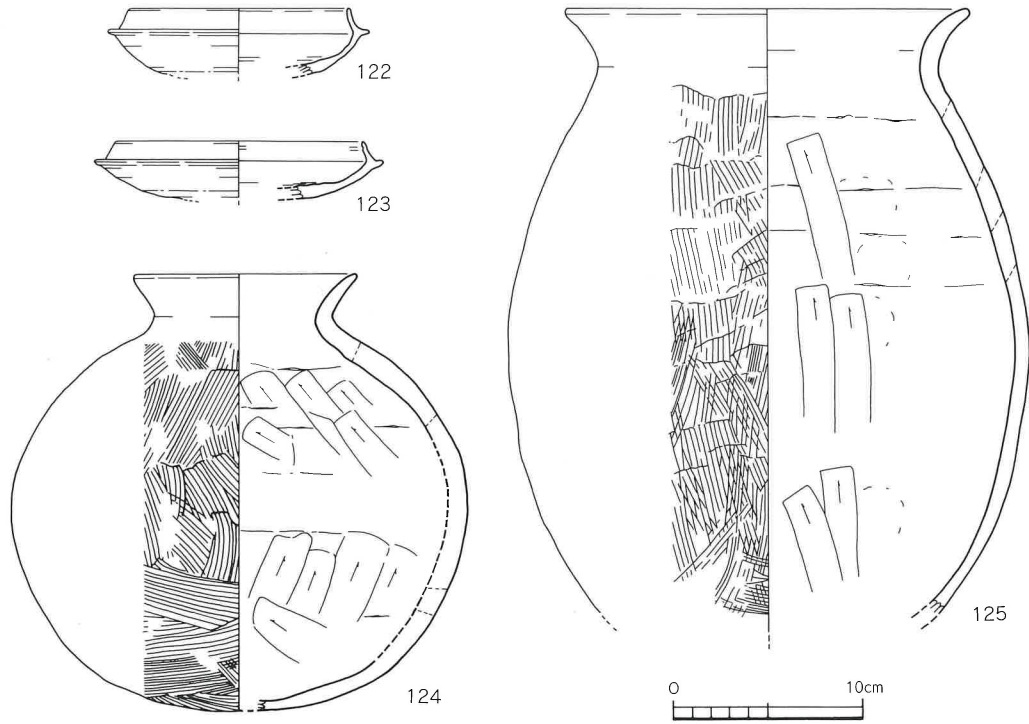
第79図 28号竪穴住居カマド跡実測図

れる。口径は16.1cm、器高は11.1cmである。128の胎土には長石、石英、角閃石、黒色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデで、胴部以下はハケ目を残す。内面の調整は口縁部が横ナデで、胴部以下には不定方向ナデを確認できる。色調は外面が淡灰白色、内面が淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は25.5cmである。129の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ目、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は外面が淡黄褐色、内面が淡灰白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着を確認できる。口径は17.8cmである。130の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には僅かに指圧痕とハケ目を残す。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びヘラ削りと不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.2cmである。131の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ目、内面は口縁部がハケ目、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.6cm、胴部最大径は23.2cmである。126～131は6世紀後半と考えたい。

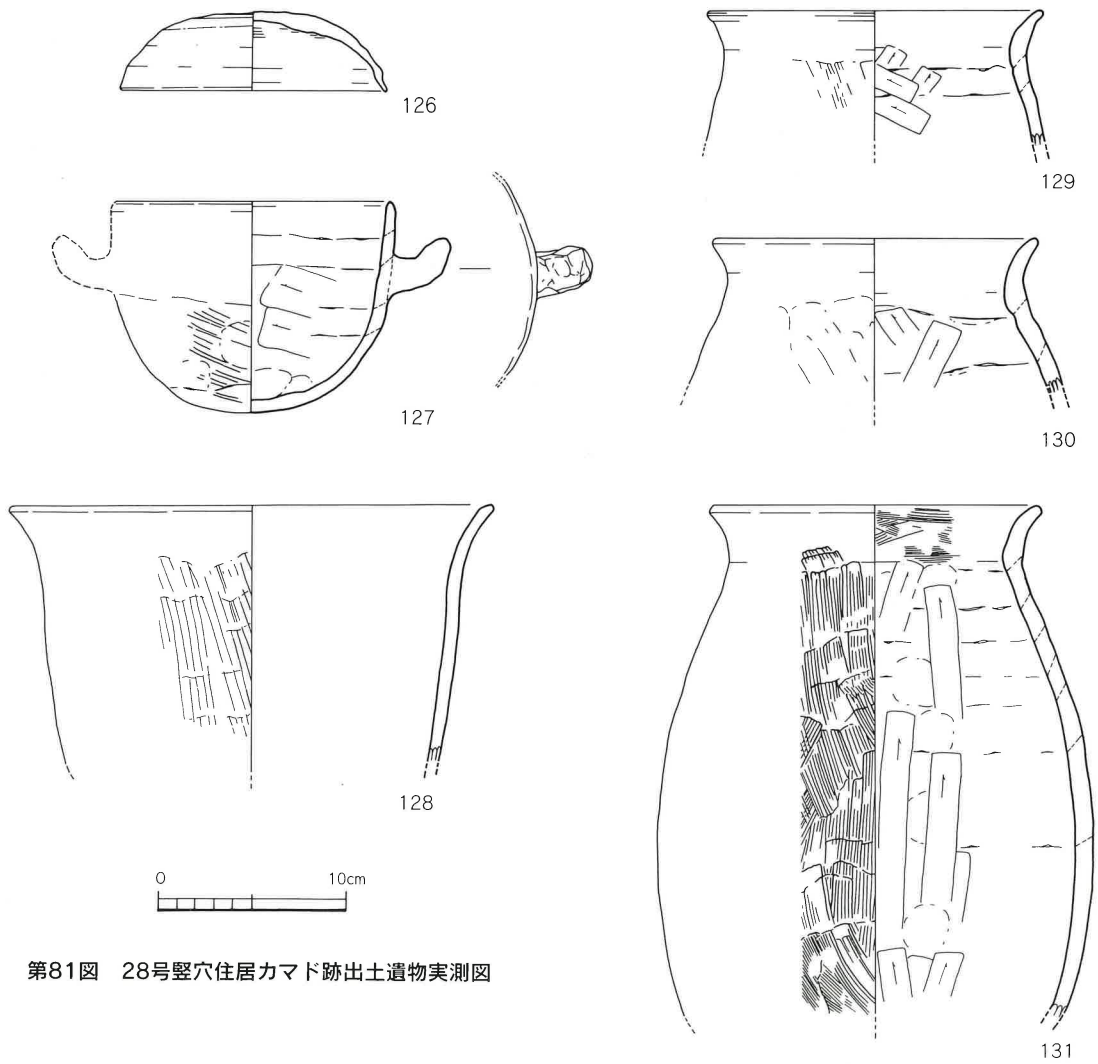
横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びヘラ削り、指圧痕、不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は21.3cm、胴部最大径は27.6cmである。122～125は6世紀後半と考えたい。

28号竪穴住居カマド跡出土遺物

126は須恵器坏蓋、127は土師器把手付鉢、128は土師器甕、129～131は土師器甕で、131はカマド支脚に用いられていた。126の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は青灰色である。口径は14.0cm、器高は4.2cmである。127の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、把手部が指ナデ、胴部から底部は指圧痕と横ナデ、内面は口縁部が横ナデ、胴部から底部には粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りを残す。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみら



第80図 28号竪穴住居跡出土遺物実測図



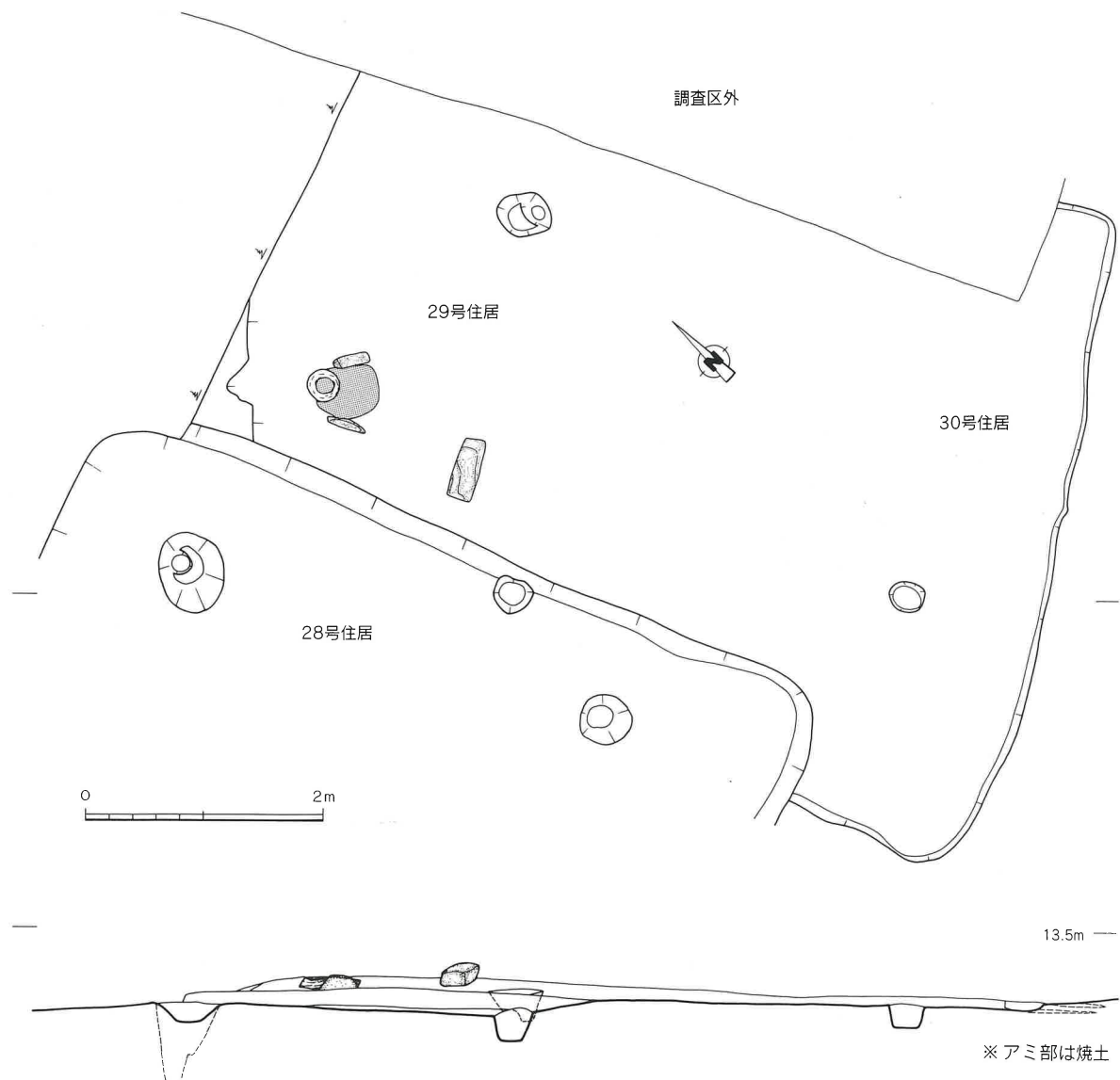
第81図 28号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

29号竪穴住居跡

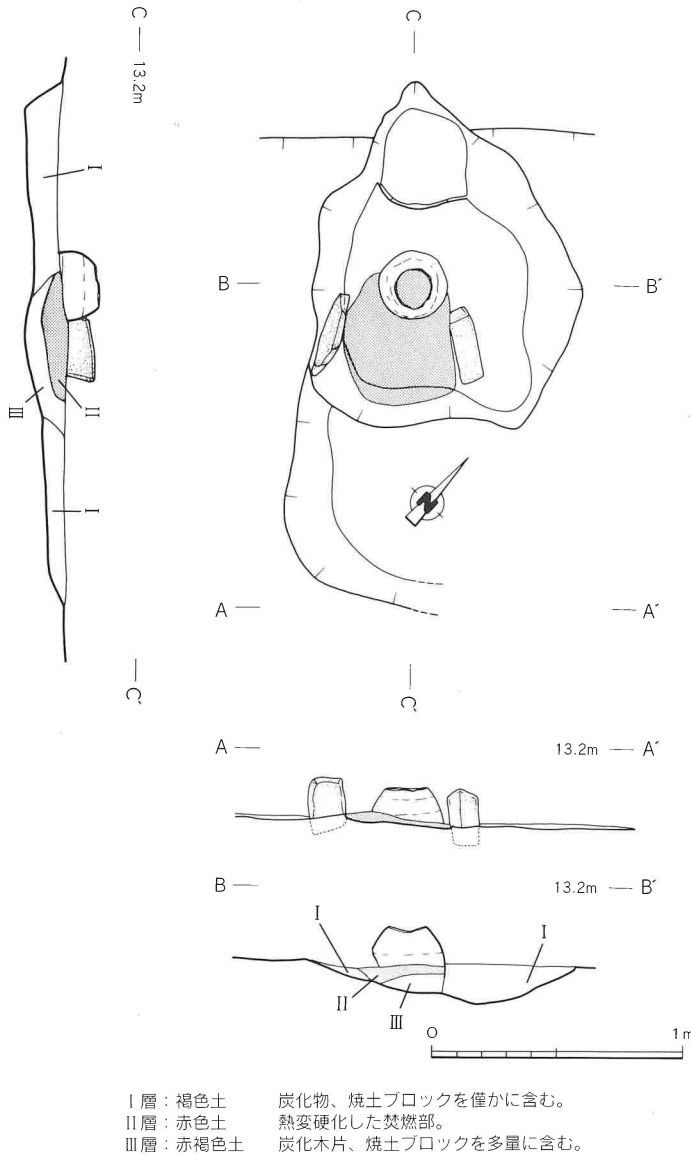
遺構は調査区の中央部東側に位置するが、28号住居、30号住居、近年の攪乱、調査区の設定上、カマドと支柱穴と推定される柱穴3基を確認するに止まった。柱穴間の寸法は3.15mと3.35mで、今回の調査で確認された一辺5.5mほどの中規模の竪穴住居跡であったと考えられる。30号住居と同一住居とも考えられたが、カマド煙出部奥壁の方位と30号住居南壁の方位が大きく食い違ったため別遺構として取り扱った。カマドの南側に放置されている黄色の堆積岩（遺跡周辺で採取できる）は方柱状に面取りされており、天井石と推定される。29号住居は28号住居、30号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から29号住居から28号住居、29号住居と30号住居は新旧関係不明である。

30号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部東側に位置するが、住居西壁南端、南壁、東壁南端を残すのみである。平面プランは方形と考えられ、確認できる規模は1.52m×5.68m、最大深10cmである。支柱穴は確認されず29号住居の南壁とも考えられたが、29号住居カマド煙出部奥壁と方向が食い違うことから30号住居として取り扱った。30号住居は28号住居、29号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から30号住居から28号住居、29号住居と30号住居は新旧関係不明である。



第82図 29号・30号竪穴住居跡実測図



第83図 29号竪穴住居カマド跡実測図

灰白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は24.8cm、底径は9.0cm、器高は29.7cmである。134の胎土には長石、石英、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が上下方向にナデ、内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は13.6cm、胴部最大径は19.4cmである。135の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕とへら削りを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.4cmである。136と137は同一個体である。胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は口唇部が横ナデ、外面は全面にハケ目を施す。内面は口縁部にハケ目、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕、へら削り、不定方向ナデが残る。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.7cmである。132～137は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。

29号竪穴住居カマド跡出土遺物

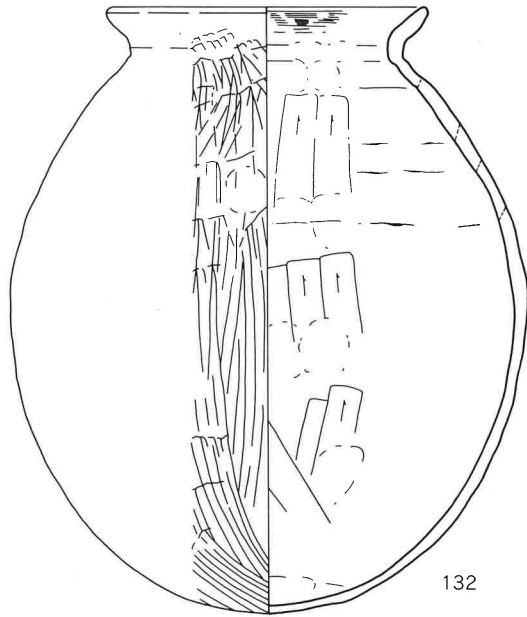
138はカマド支脚に用いた土師器甕である。胎土には長石と赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下が指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕、へら削り、不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受け、全面に煤の付着がみられる。口径は17.5cm、胴部最大径は27.5cmである。遺物は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。

29号竪穴住居カマド跡

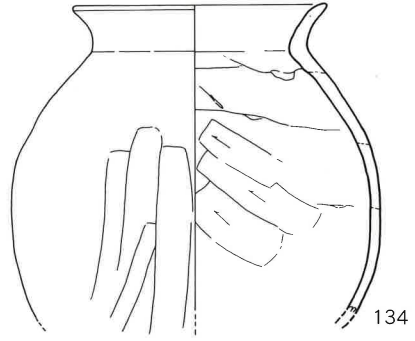
カマドは支柱穴の配置から住居北西壁に付設されたものと推定される。残存するカマド構造は左右焚口袖石、前庭、熱変赤色硬化した焚燃部、支脚（底部を打ち欠いた甕を使用）、炎焼部から煙口部に至る床面である。焚口袖石と天井石は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いていた。基盤床の平面プランは不定形の三段掘りで前庭から煙出部奥壁下端にかけて掘削されていた。規模は長軸2.09m、短軸1.08m、最大深17cmである。

29号竪穴住居跡出土遺物

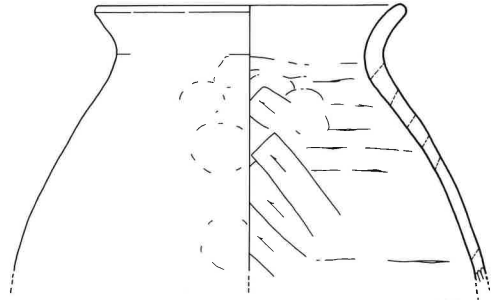
132は土師器壺、133は土師器甕、134～137は土師器甕である。132の胎土には長石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は指圧痕とハケ目、内面は口縁部が指圧痕とハケ目、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕とへら削りがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.0cm、胴部最大径は27.2cm、器高31.6cmである。133の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、把手部が指ナデ、胴部から底部はハケ目、内面は口縁部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕、へら削り、指圧痕、不定方向ナデを確認できる。底部には焼成前穿孔を2孔有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡



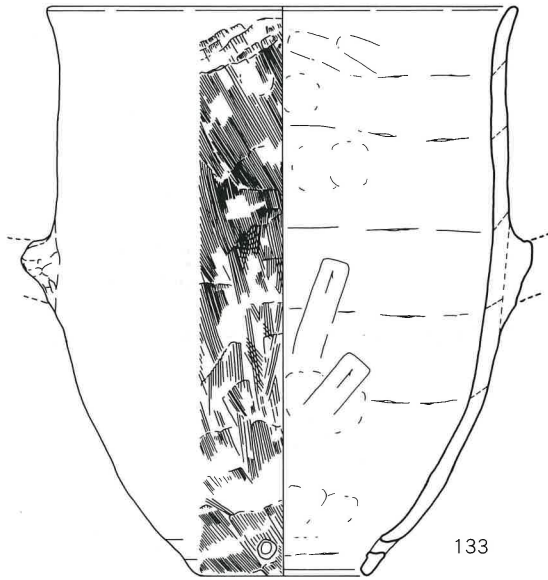
132



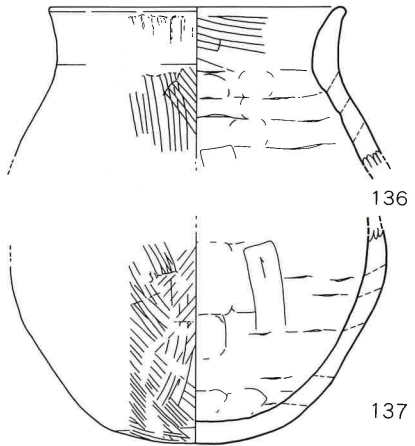
134



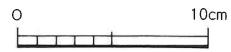
135



133

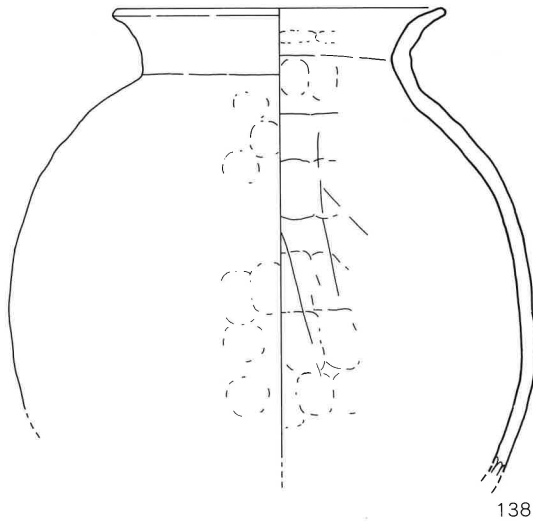


136



137

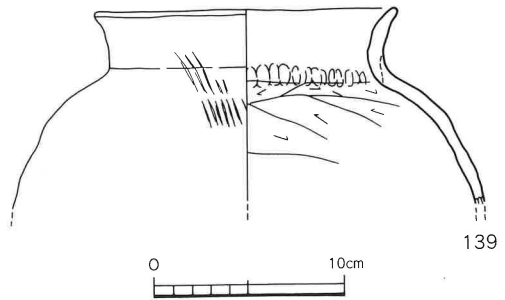
第84図 29号竖穴住居跡出土遺物実測図



138



第85図 29号竖穴住居カマド跡出土遺物実測図



139



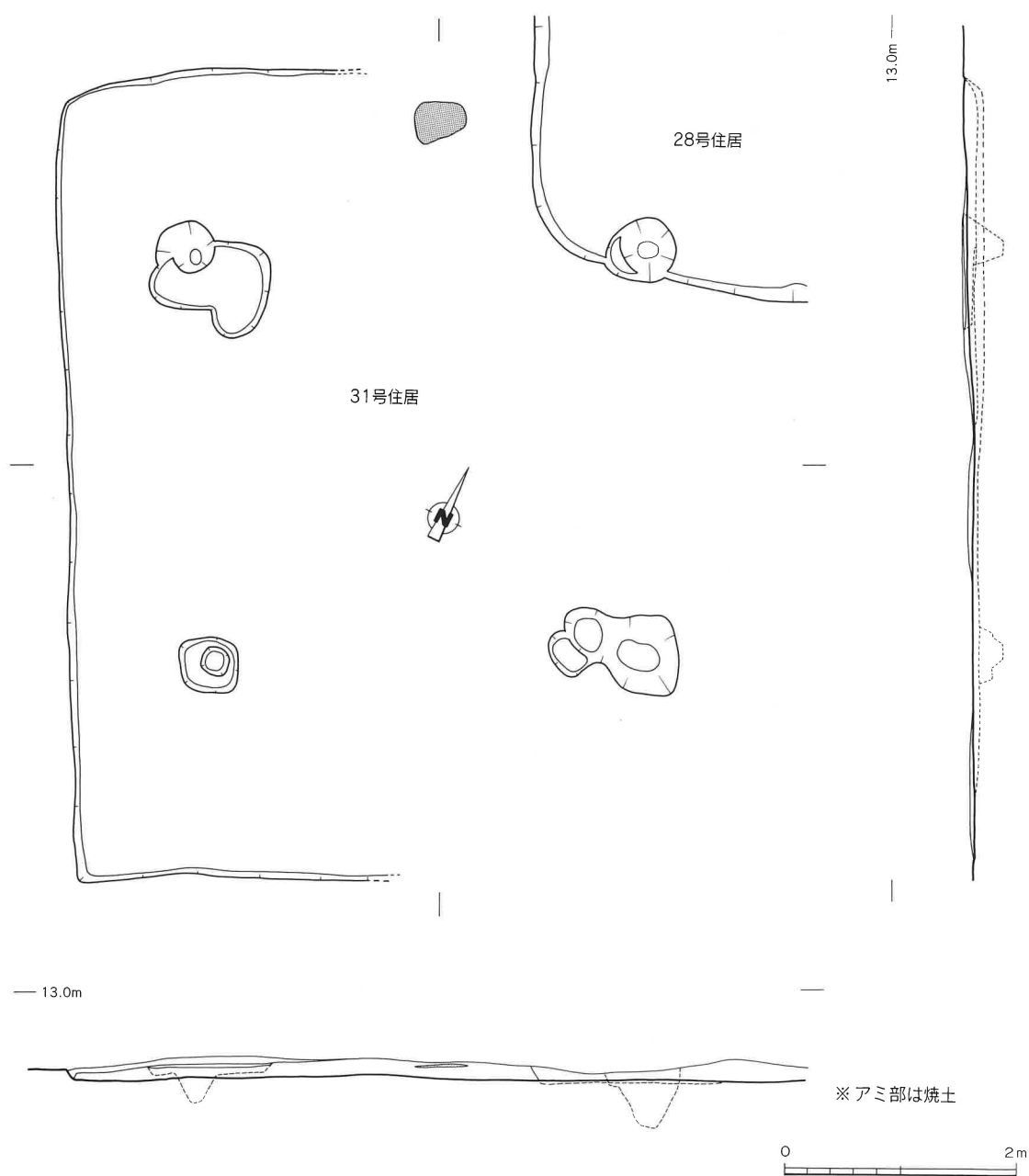
第86図 30号竖穴住居跡出土遺物実測図

30号竪穴住居跡出土遺物

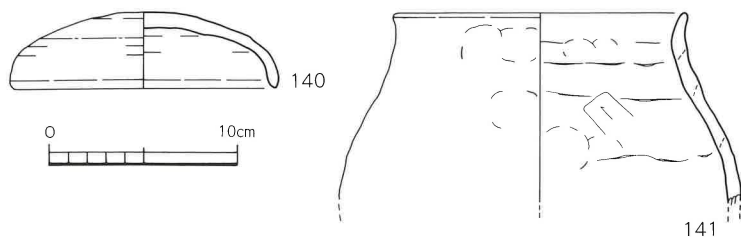
139の胎土には長石と灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粗いハケ目、内面は口縁部が横ナデ、頸部には明瞭な指圧痕、胴部はヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。口径は15.4cmである。遺物は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。

31号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部に位置する。北壁にはカマドを付設したものと推定されるが、28号住居と耕作土の客土のため、住居東半分を消失していた。平面プランは方形と想定され、確認できる規模は6.91m×3.47m、最大深10cmである。主柱穴は28号住居に一部削平されていたが4基を確認した。31号住居は28号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から31号住居から28号住居への切り合いを確認した。



第87図 31号竪穴住居跡実測図



第88図 31号竪穴住居跡出土遺物実測図

31号竪穴住居跡出土遺物

140は須恵器坏蓋、141は土師器甕である。140の胎土には石英が含まれ外面の調整は天井部が回転ヘラ削り、ほかは回転ナデ、内面は天井部が不定方向ナデで、ほかは回転ナデである。焼成は良好で、

色調は内外面ともに灰色である。口径は13.8cm、器高は4.1cmである。141の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部は横ナデ、胴部は指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕、ヘラ削り、不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.6cmである。140・141は6世紀後半と考えたい。

31号竪穴住居カマド跡

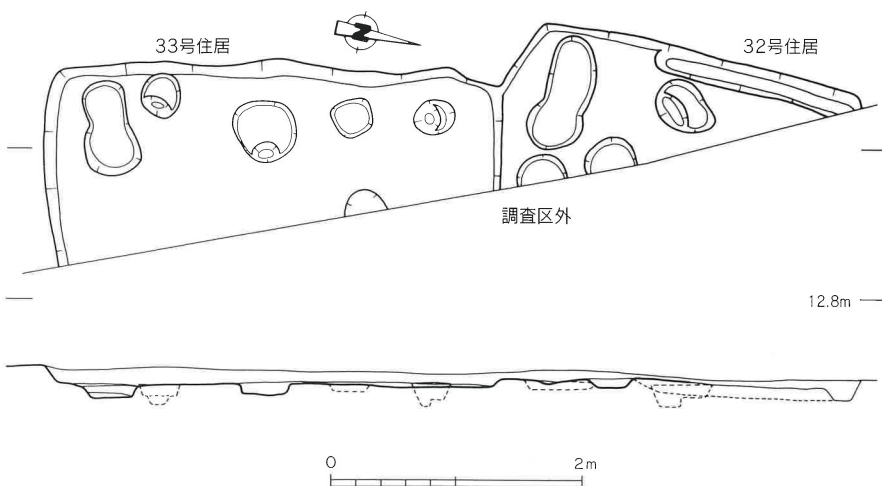
住居北壁に付設したものと推定される。残存するカマド構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。カマド基盤床は確認されていない。遺構内から遺物は出土しなかった。

32号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部東端に位置するもので、北壁、東壁、南壁東半分は調査区外に展開するものと考えられる。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は、2.85m×1.25m、最大深10cmである。西壁北半分には最大深12cmの壁溝を検出したほか、浅い掘り方を4基確認しているが、主柱穴を断定するには至らなかった。32号住居は33号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から32号住居から33号住居への切り合いを確認した。遺構からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。

33号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部東端に位置するもので、北壁東半分、東壁、南壁東半分は調査区外に展開するものと考えられる。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は、3.65m×1.57m、最大深12cmである。住居内からは浅い掘り方を6基検出しているが、主柱穴を確認するには至らなかった。33号住居は32号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から32号住居から33号住居への切り合いを確認した。遺構から時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第89図 32号・33号竪穴住居跡実測図

34号竪穴住居跡

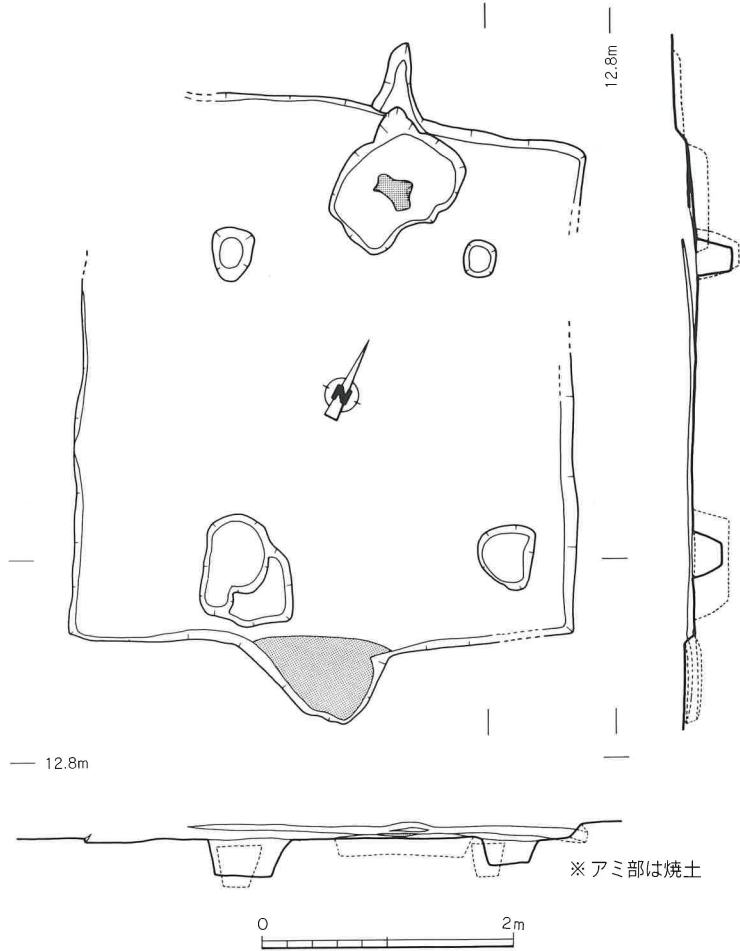
遺構は調査区の南側に位置する。北壁にはカマドを付設しているが、住居北西隅と東壁北側は削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.39m×3.98m、最大深13cmである。南壁中央部には台形状の突出部（南壁より63cm張り出す）があり床面は僅かに熱変赤色化している。主柱穴は4基である。

34号竪穴住居カマド跡

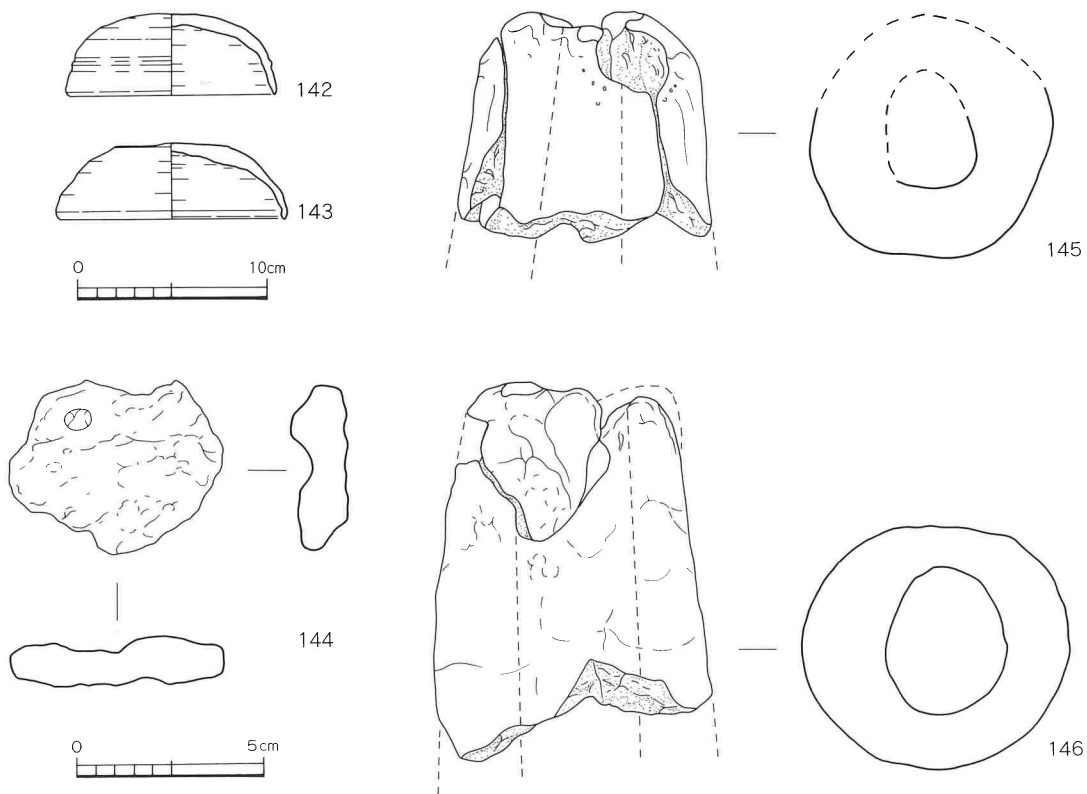
住居北壁に付設されたものである。カマドは熱変赤色硬化した焚燃部と煙出部奥壁から煙道の一部を残すのみである。カマド基盤床の平面プランは不定形で長軸1.21m、短軸1.12m、最大深15cmである。カマド内から遺物は出土しなかった。

34号竪穴住居跡出土遺物

142・143は須恵器坏蓋、144は鉄滓、145・146はフイゴ羽口である。142の胎土には石英が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径は10.8cm、器高は4.2cmである。143の胎土には長石が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。口径は11.9cm、器高は4.0cmである。144は4.3×5.6cm、重量40.0gである。145の胎土には石英が含まれ指成形でナデ仕上げである。色調は淡黄橙色で、煤の沈着が全面にみられる。最大外径6.2cm、最大内径2.1cmである。146の胎土には石英が含まれ指成形でナデ仕上げである。色調は淡黄灰色で、煤の沈着が全面にみられる。最大外径7.0cm、最大内径3.9cmである。142・143は6世紀末～7世紀初頭と考えたい。



第90図 34号竪穴住居跡実測図



第91図 34号竪穴住居跡出土遺物実測図

35号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部側に位置する。住居南壁にはカマドを付設していたと推定されるが、カマド周辺以外の壁面は全て削平されていた。平面プランは断定できず、確認できる規模は南壁と推定される全長1.93m、最大深7cmである。住居西側には36号住居と37号住居が展開するため主柱穴は2基を確認するに止まった。残存するカマド構造は全長1.47m、最大深12cmの煙道と推定される構造のみである。35号住居は36号住居・37号住居と切り合い関係があるが、削平が著しく新旧関係を断定できなかった。遺構からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第92図 35号竪穴住居跡実測図

36号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部南側に位置するが、37号住居と38号住居により北壁西半分、西壁、南壁西半分の壁面を削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.23m×1.64m、最大深8cmである。主柱穴は検出できなかった。住居中央部と推定される部分には直径37cmの熱変赤色硬化した焼土盤を確認している。焼土に伴う掘り方は設けられていない。36号住居は37号住居と切り合い関係があり、遺構検出面の観察から36号住居から37号住居への切り合いを確認した。遺構から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

37号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部南側に位置する。住居西壁にはカマドを付設していたと推定されるが、西壁北半分は38号住居により削平されていた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は4.82m×4.37m、最大深23cmである。主柱穴は4基で、南壁中央部には最大深7cmの壁溝を検出している。37号住居は36号住居、38号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から36号住居から37号住居、37号住居から38号住居への新旧関係をそれぞれ確認した。遺構から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

37号竪穴住居カマド跡

住居西壁に付設されたものと推定されが、38号住居の削平により損壊していた。確認できるカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。遺構から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

38号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部南側に位置し、住居北壁にはカマドを付設していたと推定される。平面プランは長方形で、確認できる規模は6.02m×5.68m、最大深25cmである。主柱穴は4基である。38号住居は37号住居、39号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から37号住居から38号住居、39号住居から38号住居への新旧関係をそれぞれ確認した。

38号竪穴住居カマド跡

住居北側に付設されたものと推定される。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。

39号竪穴住居跡

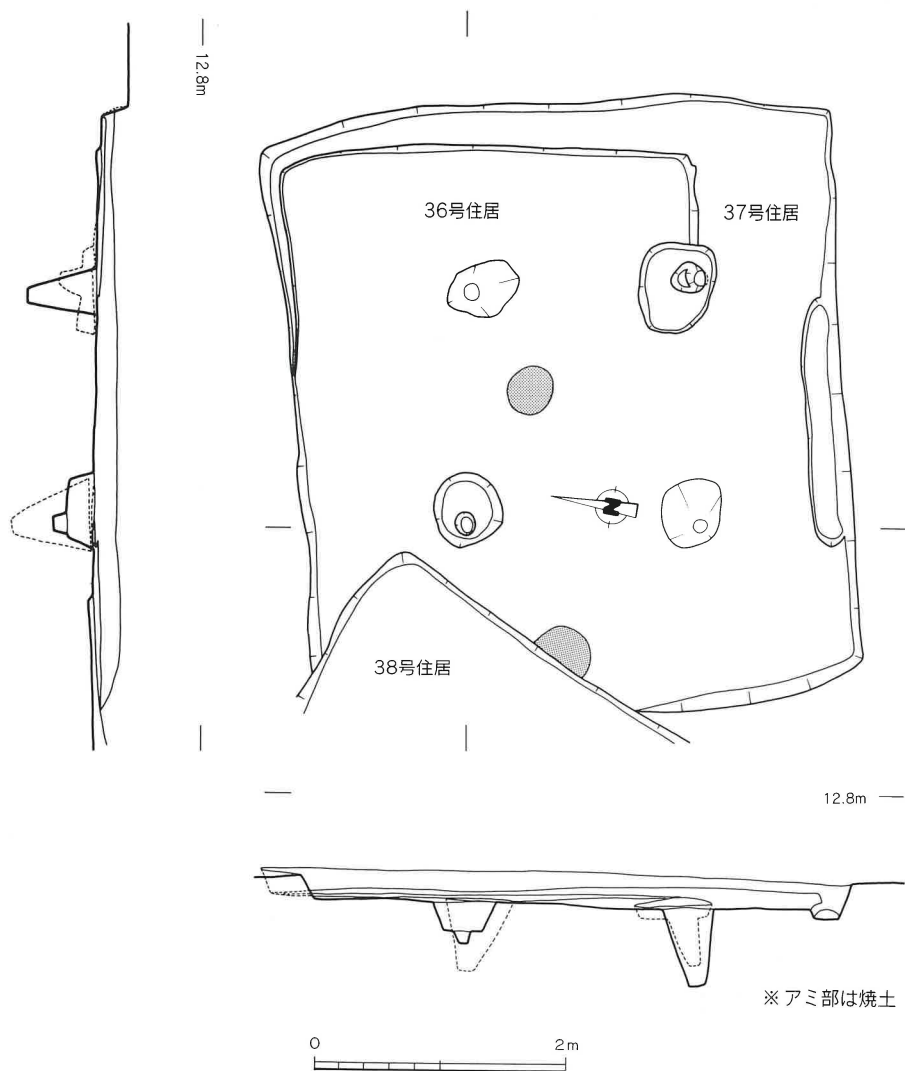
遺構は調査区の中央部南側に位置するが、38号住居と40号住居に北壁と南壁を削平されている。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.52m×5.97m、最大深13cmである。支柱穴は40号住居により一部削平されていたが4基を確認した。39号住居は38号住居、40号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から39号住居から38号住居、39号住居から40号住居への新旧関係をそれぞれ確認した。

40号竪穴住居跡

遺構は調査区の中央部南側に位置し、住居北壁にはカマドを付設している。平面プランは長方形で、規模は5.58m×6.01m、最大深25cmである。支柱穴は4基で、南側の支柱穴間にも柱穴を1基確認している。住居西南端には土坑を設けている。平面プランは不定形で、規模は長軸1.11m、短軸93cm、最大深30cmである。40号住居は、39号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から39号住居から40号住居への新旧関係を確認した。

40号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものである。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部と遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工した支脚、炎焼部一煙口部の床面及び煙出部奥壁の一部である。カマド基盤床の平面プランは楕円形で、長軸95cm、短軸85cm、最大深13cmである。

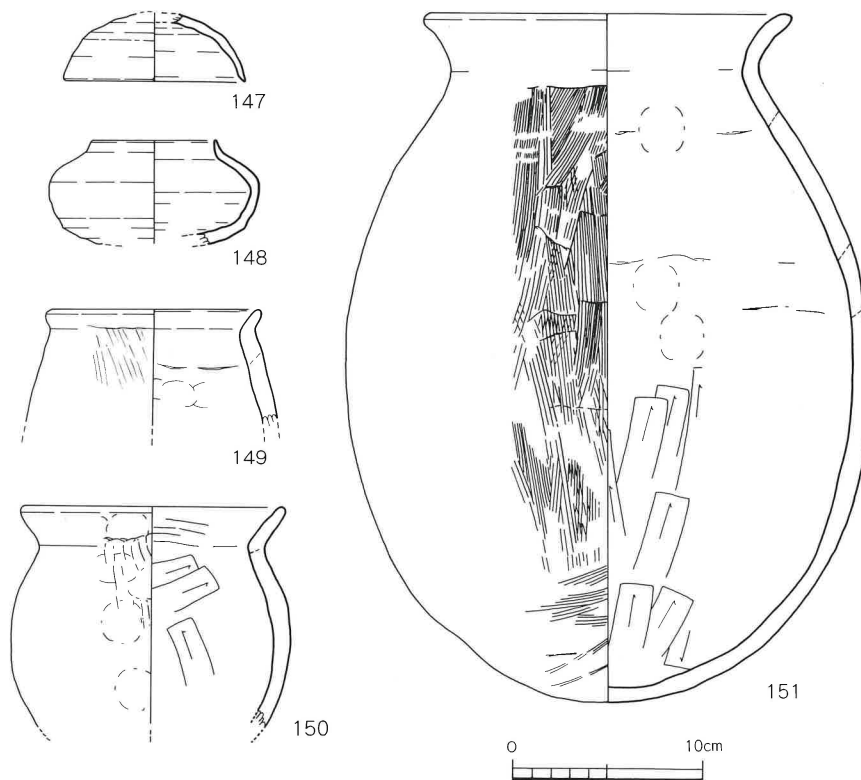


第93図 36号・37号竪穴住居跡実測図

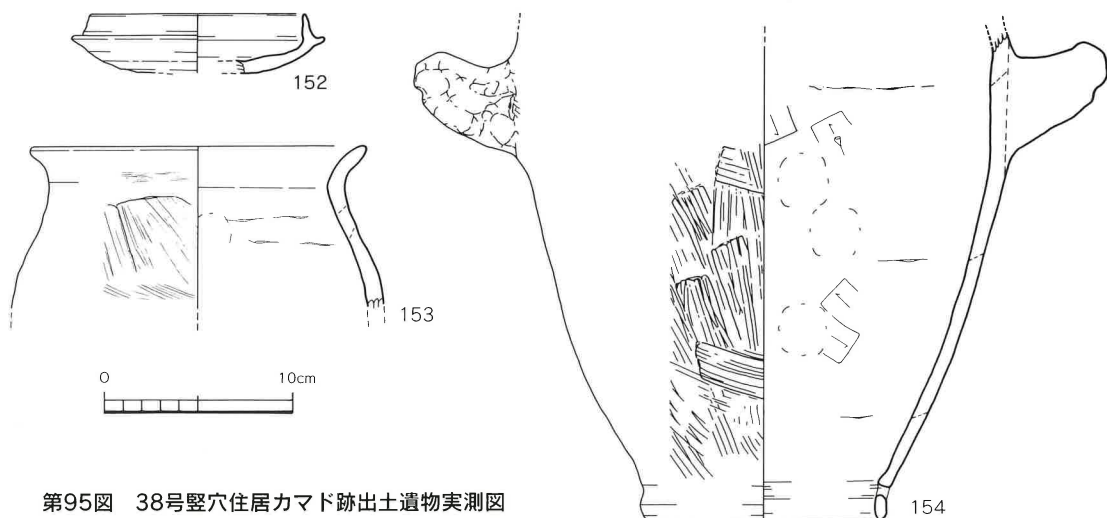
38号竪穴住居跡出土遺物

147は須恵器坏蓋、148は須恵器短頸壺、149～151は土師器甕である。147の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒灰色である。口径は9.7cmである。148の胎土には長石と白色砂粒が含まれ調整は外面底部のみ回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗青灰色である。口径は6.6cm、胴部最大径は11.1cmである。149の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は11.3cmである。150の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部以下はハケ目、指圧痕、不定方向ナデを残す。内面の調整は口縁部が横ナデと粗いハケ目、頸部以下にはヘラ削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、

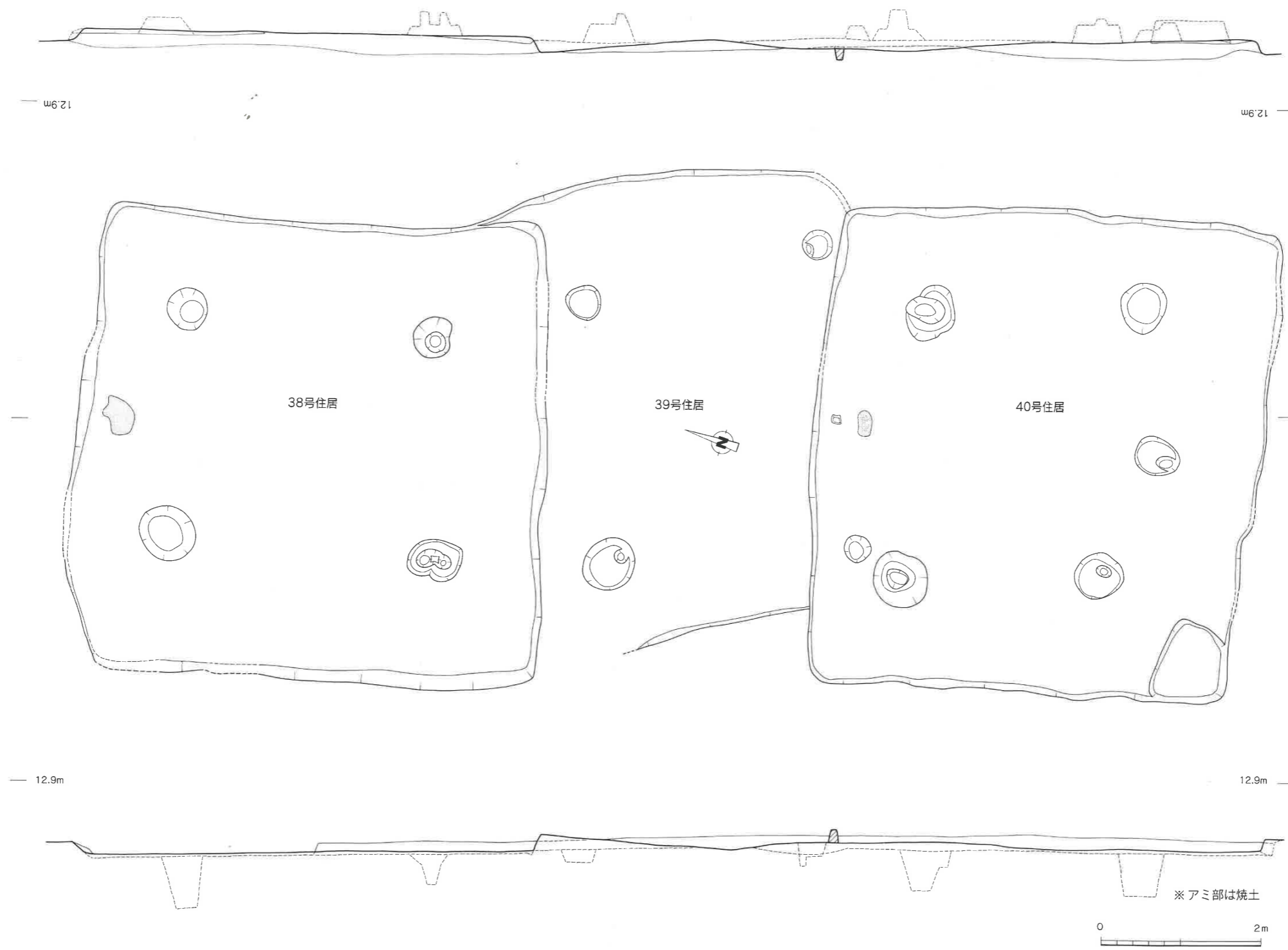
全面に煤の付着がみられる。口径は13.9cm、胴部最大径は14.8cmである。151の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部から底部がハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕、ヘラ削り、不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.8cm、胴部最大径は27.6cm、器高は36.0cmである。145～151は6世紀末～7世紀初頭と考えたい。



第94図 38号竪穴住居跡出土遺物実測図



第95図 38号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図



第96図 38号~40号竪穴住居跡実測図

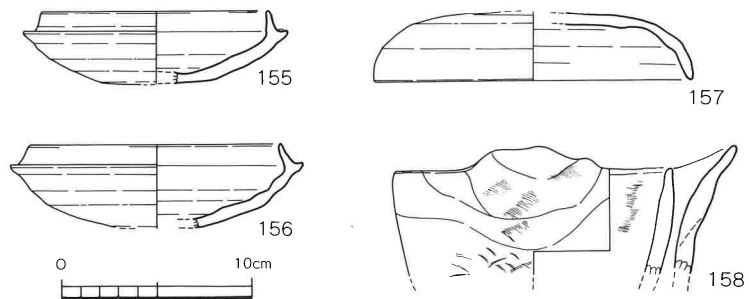
38号竪穴住居カマド跡出土遺物

152は須恵器坏身、153は土師器甕、154は土師器甕である。152の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。口径は11.4cm、器高は3.1cmである。153の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下はハケ目を残す。内面の調整は口縁部から頸部は横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデが観察される。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.6cmである。154の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は把手部が指ナデ、胴部はハケ目、底部は横ナデである。内面調整をみると、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕、ヘラ削り、不定方向ナデを施す。底部には焼成前穿孔を2孔有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。底径は12.5cmである。152～154は6世紀末～7世紀初頭と考えたい。

39号竪穴住居跡出土遺物

155～156は須恵器坏身、157は須恵器坏蓋、158は土師器片口鉢である。

155の胎土には石英が僅かに含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面とも回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は12.1cm、器高は3.8cmである。156の胎土には石英



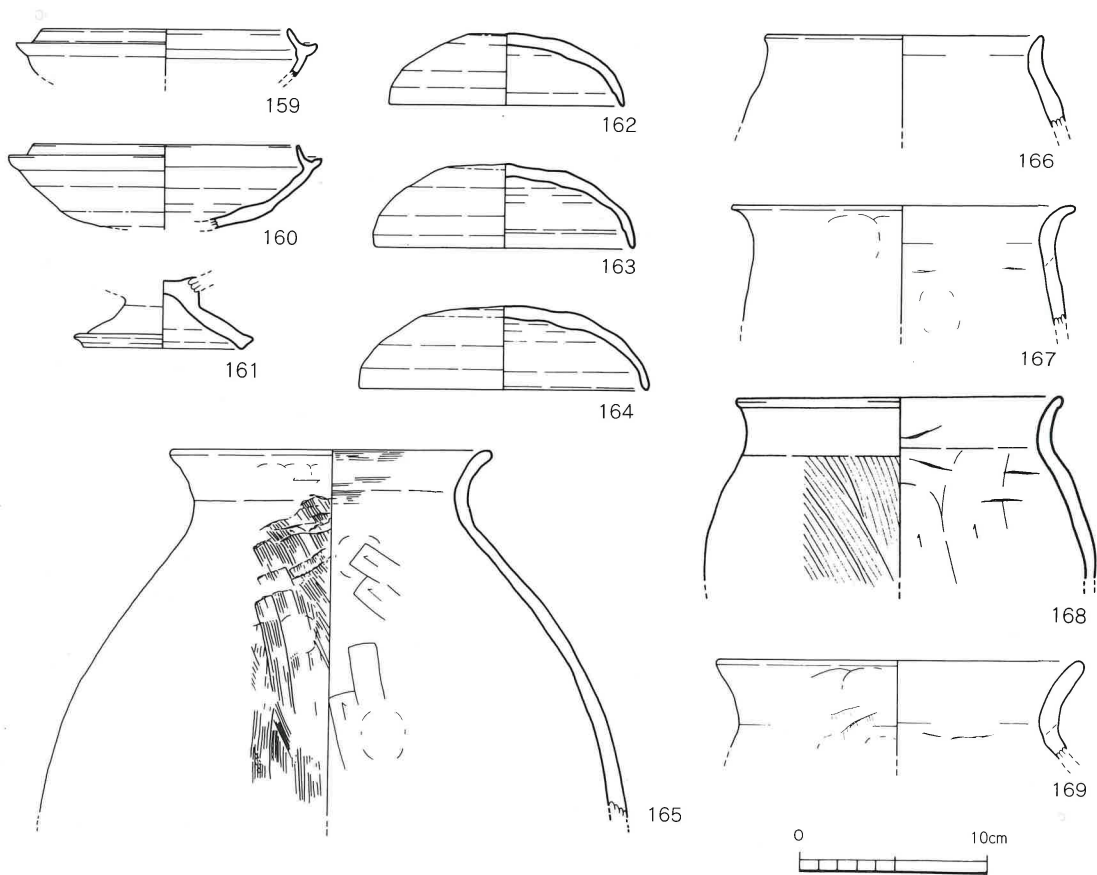
第97図 39号竪穴住居跡出土遺物実測図

が僅かに含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面とも回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は13.4cm、器高は4.3cmである。157の胎土には石英が僅かに含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は16.8cm、器高は3.7cmである。158の胎土には長石、石英、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ外面の調整は片口部が指成形後、ハケ目及び不定方向ナデ、口縁部以下はハケ目と不定方向ナデを残す。内面はハケ目及び不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は13.7cmである。155～158は6世紀後半と考えたい。

40号竪穴住居跡出土遺物

159・160は須恵器坏身、161は須恵器高坏脚部、162～164は須恵器坏蓋、165～169は土師器甕である。159の胎土には白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は13.0cmである。160の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は灰褐色である。口径は14.0cmである。161の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。底径は9.5cmである。162の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は灰褐色である。口径は12.4cm、器高は3.8cmである。163の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ切り、内面天井部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は灰褐色である。口径は13.8cm、器高は4.3cmである。164の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ切り、内面天井部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は灰褐色である。口径は15.2cm、器高は4.4cmである。165の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ及び指圧痕、頸部以下にはハケ目と指圧痕が残る。内面の調整は口縁部から頸部がハケ目、胴部には指圧痕及びヘラ削りと不定方向ナデが確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口

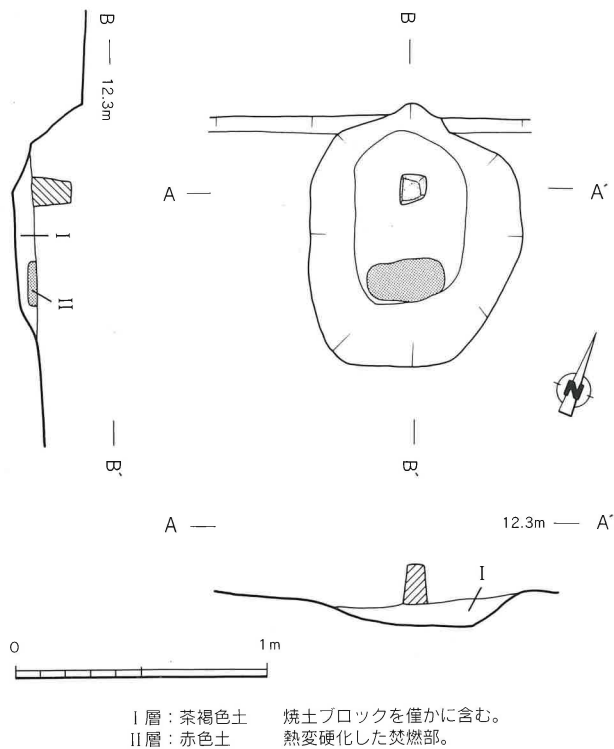
径は16.7cmである。166の胎土には長石と灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は外面が黄橙色、内面が淡灰白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.7cmである。167の胎土には長石と灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.2cmである。168の胎土には長石、石英、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。口径は17.2cmである。169の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下がハケ目、内面には粘土積み上げ痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。口径は19.4cmである。159～169は6世紀末～7世紀前半と考えたい。



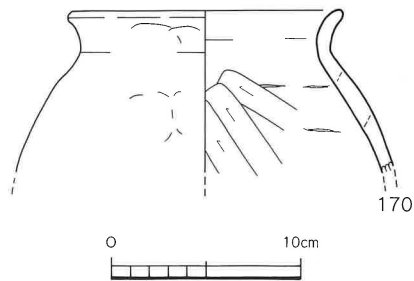
第98図 40号竪穴住居跡出土遺物実測図

40号竪穴住居カマド跡出土遺物

170は土師器甕である。胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれる。外面の調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部が指圧痕と不定方向ナデを残す。内面の調整は口縁部から頸部にかけては横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラ削りを観察できる。焼成は良好で、色調は外面が淡黄橙色、内面が淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.5cmである。遺物は6世紀末～7世紀前半と考えたい。



第99図 40号竪穴住居カマド跡実測図



第100図 40号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

4号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から43号住居から42号住居、3号溝から43号住居への新旧関係は確認したが、4号溝との前後関係は不明であった。

43号竪穴住居カマド跡

住居東壁に付設したものと推定される。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。

41号竪穴住居跡出土遺物

171~175は須恵器坏身、176は須恵器高坏、177~182は須恵器坏蓋、183は土師器、184は土師器短頸壺、185土師器甕、186は土師器横瓶、187は土師器甕である。171の胎土には石英が僅かに含まれ調整は外面底部にヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は8.4cmである。172の胎土には石英が僅かに含まれ調整は内面底部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は8.6cmである。173の胎土には長石、石英が含まれ調整は外面底部にヘラ切り及び内面底部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は10.4cm、器高は3.2cmである。174の胎土には石英が含まれ調整は外面底部にヘラ切り及び内面底部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、

41号竪穴住居跡

遺構は調査区の南部西側に位置するが、住居南東隅は削平されていた。カマドは検出されていない。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は5.45m×3.82m、最大深30cmである。遺構内からは柱穴を5基確認したが、主柱穴を断定するには至らなかった。41号住居は42号住居及び12号土坑と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より41号住居から42号住居、41号住居から12号土坑への新旧関係をそれぞれ確認した。

42号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置しており、カマドは検出されていない。平面プランは歪な方形で、規模は4.07m×4.43m、最大深23cmである。住居内からは43号住居の主柱穴の他に、2基の柱穴を確認したが主柱穴を断定するには至らなかった。42号住居は41号住居、43号住居、13号土坑と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から41号住居から42号住居、43号住居から42号住居、42号住居から13号土坑への新旧関係をそれぞれ確認した。

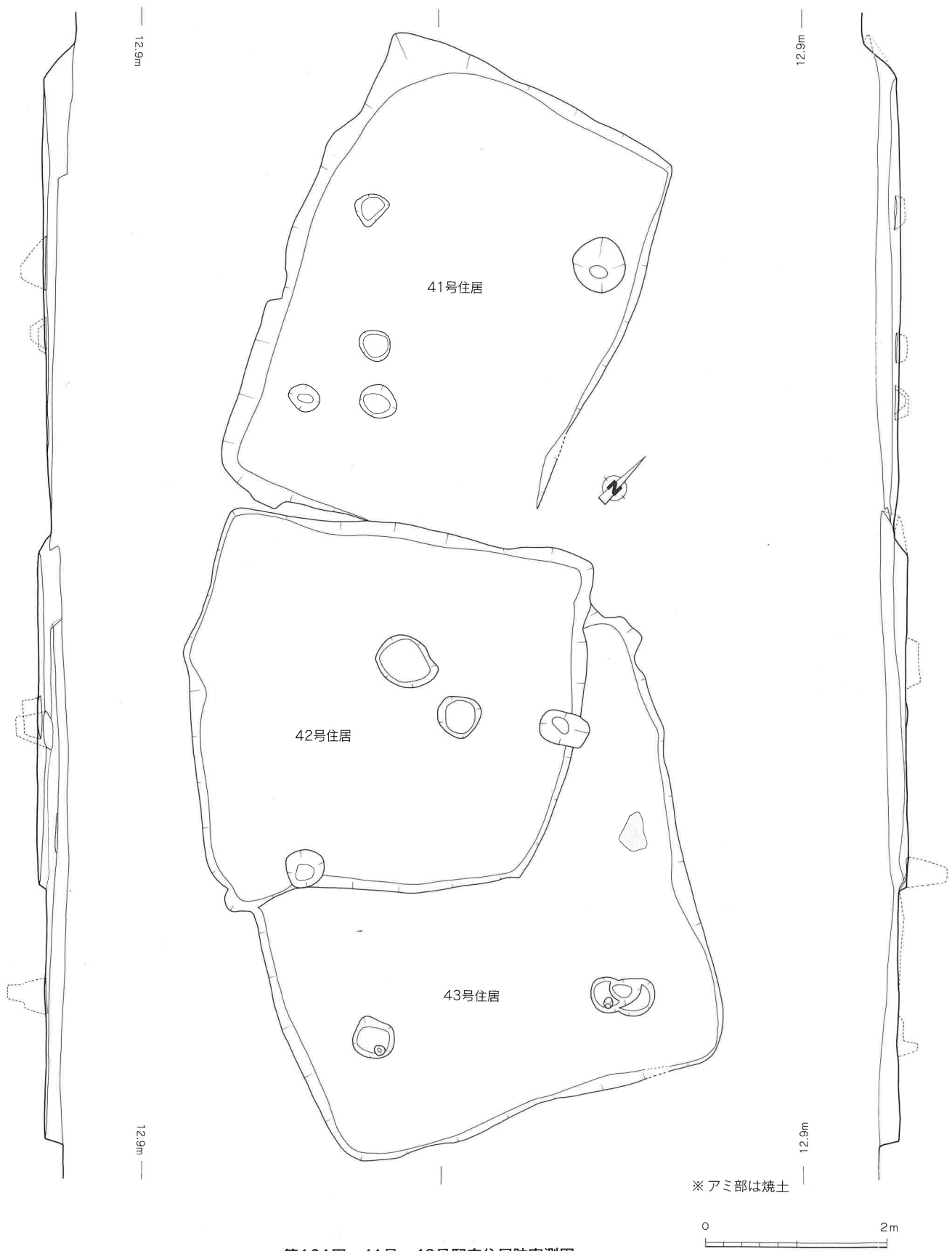
43号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置しており、住居東壁にカマドを付設していたものと推定される。住居北壁及び西壁北半分は42号住居により削平されていた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は4.78m×5.18m、最大深23cmである。主柱穴は42号住居により一部削平されているが4基を確認した。43号住居は42号住居、3号溝、

色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.2cm、器高は2.9cmである。175の胎土には石英が含まれ調整は外面底部にヘラ切り及び内面底部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は11.6cm、器高は3.4cmである。176の胎土には白色砂粒が含まれ調整は坏部内面に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。高坏脚部内面には二箇所へラ記号を有する。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は8.8cmである。177の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面天井部にヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は9.6cm、器高は2.9cmである。178の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗青灰色である。口径は9.9cm、器高は3.1cmである。179の胎土には石英と白色砂粒が含まれ外面の調整は天井部が回転ヘラ削り、天井部から口縁部にかけては回転ナデ、内面は天井部が不定方向ナデ、天井部から口縁部にかけては回転ナデである。坏蓋内面にはヘラ記号を有する。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.5cm、器高は4.6cmである。180の胎土には石英と白色砂粒が含まれ外面の調整は天井部が回転ヘラ削り、天井部から口縁部にかけては回転ナデ、内面は天井部が不定方向ナデ、天井部から口縁部にかけては回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.2cm、器高は3.6cmである。181の胎土には白色砂粒が含まれ外面の調整は天井部が回転ヘラ削り、天井部から口縁部にかけては回転ナデ、内面は天井部が不定方向ナデ、天井部から口縁部にかけては回転ナデである。坏蓋内面にはヘラ記号を有する。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は12.1cm、器高は3.8cmである。182の胎土には石英が含まれ調整は内面天井部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は13.0cm、器高は3.9cmである。183の胎土には長石、石英、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は13.0cm、器高は4.7cmである。184の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下は指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は6.6cm、胴部最大径は10.9cm、器高は7.8cmである。185の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ。頸部以下は不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデとヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.9cmである。186の胎土には長石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。口径は11.2cmである。187の胎土には長石、石英、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ把手部の調整は指ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。171～187は6世後半～7世紀前半を中心とする時期と考えたい。

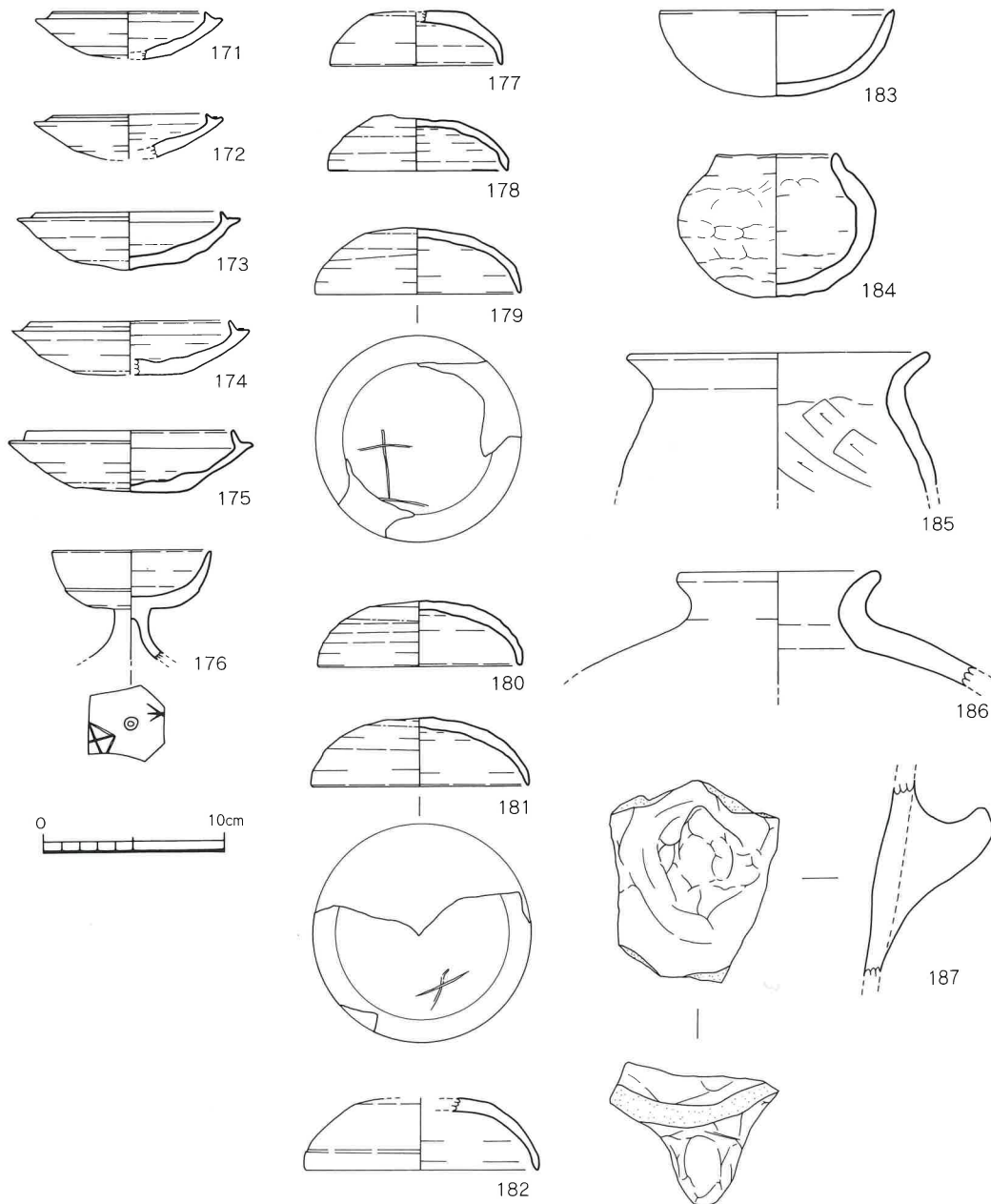
42号竪穴住居跡出土遺物

188～190は須恵器坏身、191は須恵器坏蓋、192は須恵器高坏蓋、193は須恵器高坏、194は土師器碗、195は土師器壺、196は土師器甗、197は紡錘車である。188の胎土には石英が僅かに含まれ調整は外面底部に回転ヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は8.6cm、器高は2.8cmである。189の胎土には長石と白色砂粒が含まれ調整は外面底部が回転ヘラ切り、内面底部に指圧痕を残すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は淡灰色である。口径は9.2cm、器高は3.1cmである。190の胎土には石英が含まれ調整は外面底部が回転ヘラ切り、内面底部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰色である。口径は10.6cm、器高は3.6cmである。191の胎土には石英が含まれ調整は外面天井部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径は11.1cm、器高は3.7cmである。192

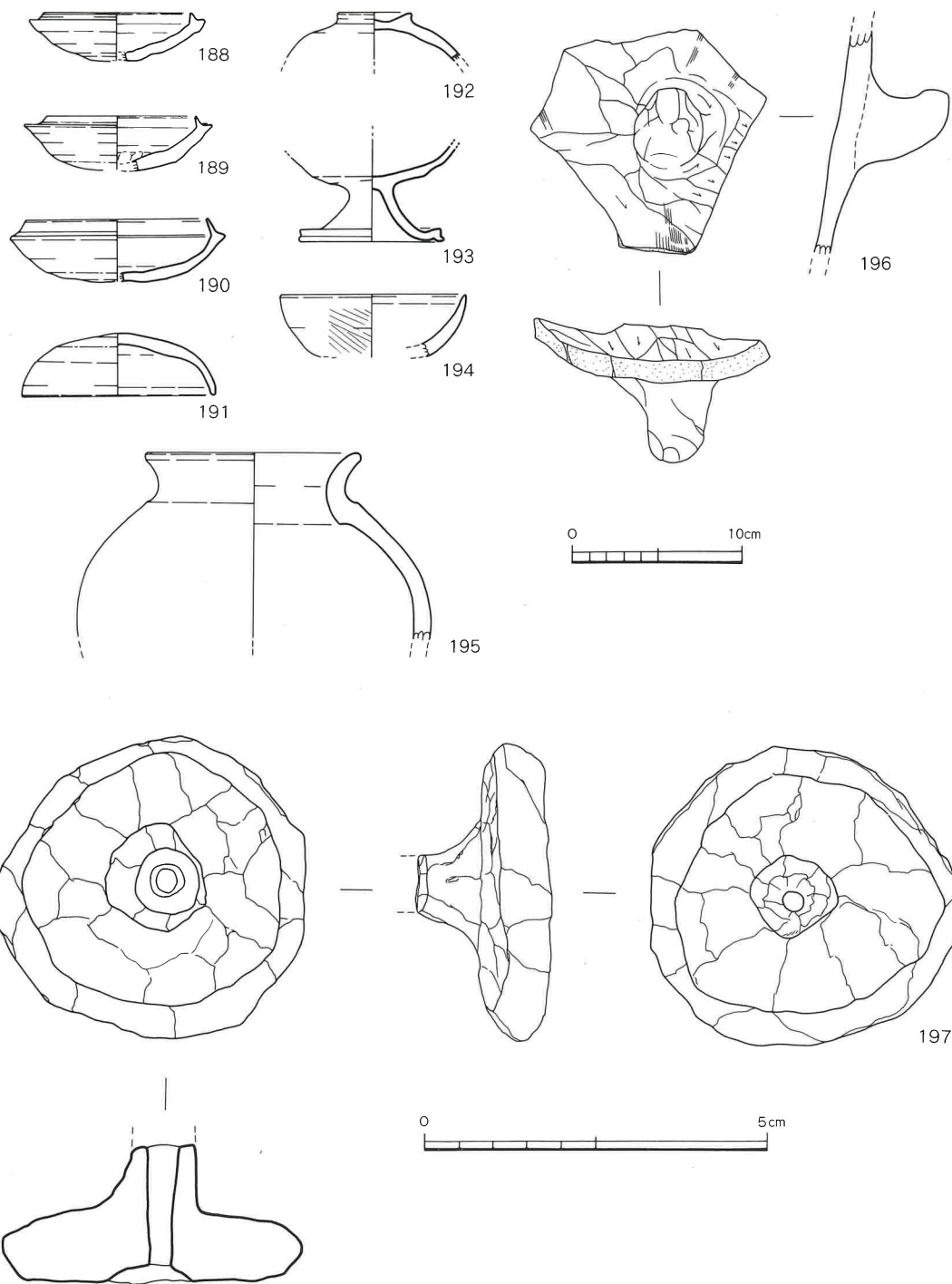


第101図 41号~43号竪穴住居跡実測図

の胎土には石英が含まれ調整は内外面ともに横ナデある。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。**193**の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は灰色である。底径は8.4cmである。**194**の胎土には雲母と茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下から底部にかけてはハケ目を残す。内面の調整は横ナデである。焼成は良好で、色調は暗褐色である。口径は10.9cmである。**195**の胎土には長石、石英、茶色褐色が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は12.6cm、胴部最大径は20.7cmである。**196**の胎土には長石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は把手部が指ナデ、ほかはハケ目と不定方向ナデがみられる。内面はヘラ削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**197**は鉄製である。直径4.6cm、最大厚2.0cm、最大孔径1.3cm、最小孔径0.3cm、重量37.9gである。**188~196**は7世紀前半と考えたい。



第102図 41号竪穴住居跡出土遺物実測図

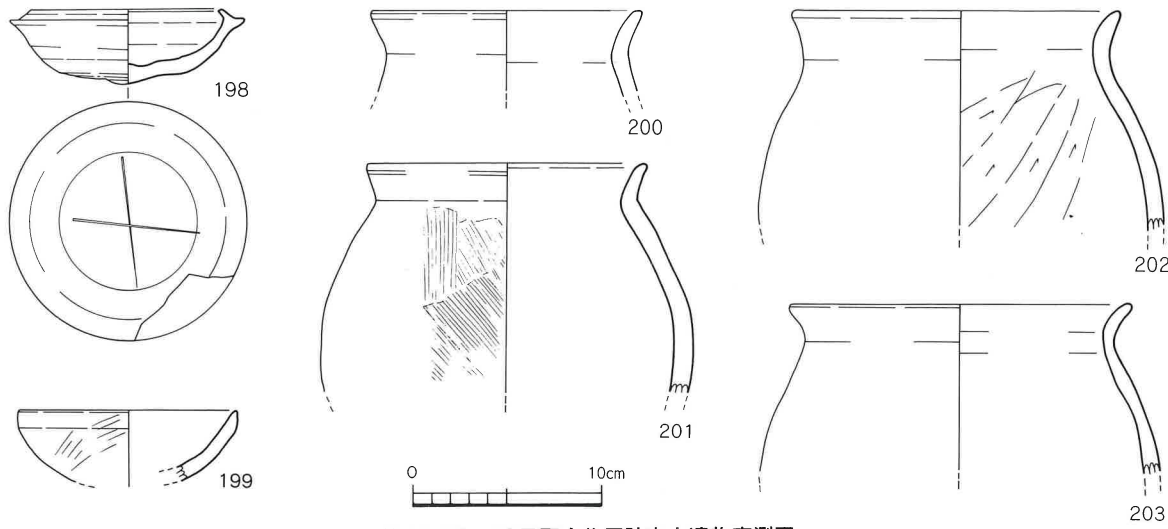


第103図 42号竪穴住居跡出土遺物実測図

43号竪穴住居跡出土遺物

198は須恵器坏身、199は土師器碗、200～203は土師器甕である。198の胎土には長石、石英、茶色砂粒が含まれ調整は外面底部が回転ヘラ切り、内面底部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。外面にはヘラ記号を有する。焼成は良好で、色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色である。口径は10.1cm、器高は3.9cmである。199の胎土には赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、口縁部から底部にかけてはハケ目を残す。内面の調整は横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。口径は11.9cmである。200の胎土には長石、石英、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は14.3cmである。201の胎土には石英、長石、茶色砂粒が含まれ外面の調整

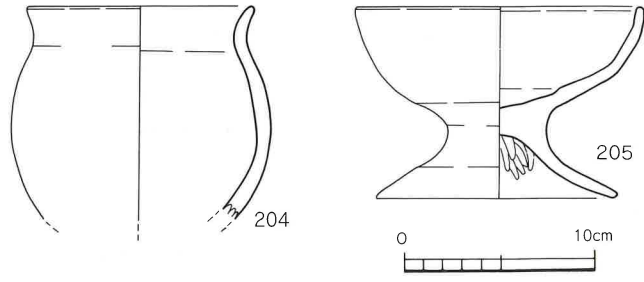
は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.8cm、胴部最大径は19.7cmである。**202**の胎土には長石、石英、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はへら削りと不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.8cmである。**203**の胎土には長石、石英、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下が不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.2cmである。**198~203**は7世紀前半と考えたい。



第104図 43号竪穴住居跡出土遺物実測図

43号竪穴住居カマド跡出土遺物

204は土師器甕、**205**は土師器高坏である。**204**の胎土には長石と茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は12.0cm、胴部最大径13.7cmである。**205**の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ調整は脚部内面にへら状工具痕を残すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.2cm、底径12.7cm、器高10.1cmである。**204・205**は7世紀前半と考えたい。



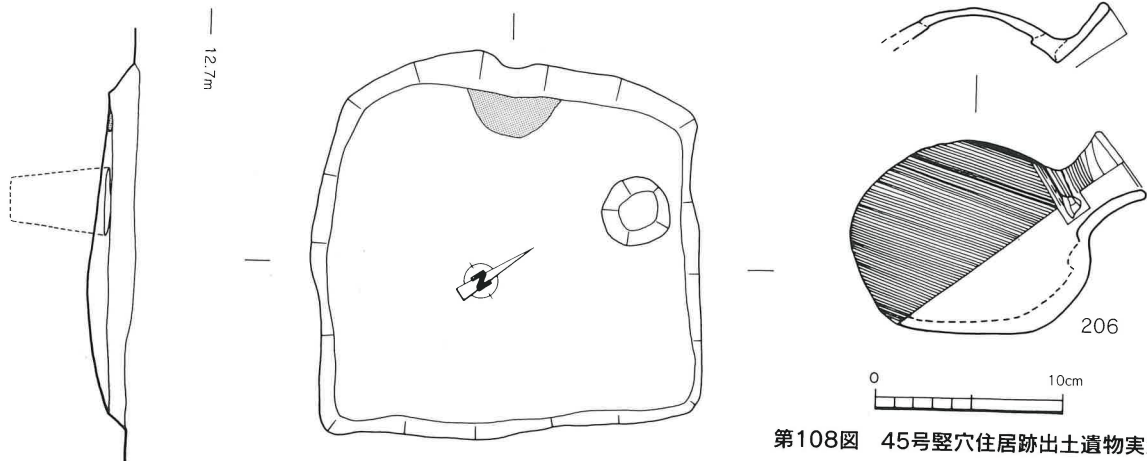
第105図 43号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

44号竪穴住居跡

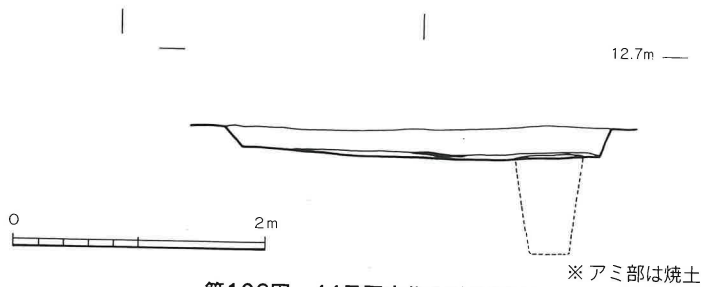
遺構は調査区の南側に位置し、西壁にはカマドを付設したものと推定される。平面プランは正方形で、規模は3.08m×3.08m、最大深22cmである。遺構内からは柱穴を1穴のみ検出したが、主柱穴を断定するには至らなかった。44号住居は3号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から3号溝から44号住居への新旧関係を確認した。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

44号竪穴住居カマド跡

住居西壁に付設されたものと推定される。残存するカマドの構造は熱変赤色化した床面のみである。カマドに伴う遺物は出土しなかった。



第108図 45号竪穴住居跡出土遺物実測図



第106図 44号竪穴住居跡実測図

45号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側東端側に位置するもので、住居北壁及び東壁は調査区外に展開するものと推定される。平面プランは方形と考えられ、確認できる規模は3.33m×3.35m、最大深28cmである。南壁と西壁南半分には壁溝を確認している。柱穴は2基確認したが、主柱穴は断定されなかった。

45号竪穴住居跡出土遺物

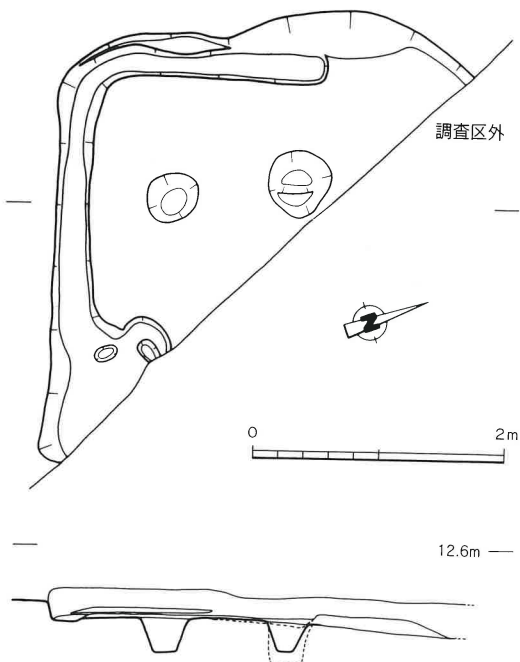
206は須恵器平瓶である。遺物の胎土に白色砂粒が含まれ内面の調整は口縁部が横ナデ、ほかの部分不明である。外面調整は口縁部から頸部が回転ナデ、胴部にはカキ目、底部は回転ヘラ削りを施している。頸部付近には、二箇所に指成形した把手を有す。成形をみると開口した胴部を作成し、開口部に円盤充填及び口縁部を装着したことが伺える。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は3.4cm、胴部最大径は12.8cm、器高は10.7cmである。遺物は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。

46号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側東端側に位置するもので、北壁にはカマドを付設したものと想定される。住居北西隅は削平されており、東半分は調査区外に展開するものと考えられる。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.71m×2.35m、最大深6cmである。住居北側には最大幅1.13m、最大高4cmのベッド状の高まりを持ち、主柱穴は2基を確認するに止まった。

46号竪穴住居カマド跡

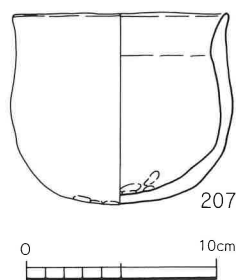
住居北壁に付設されたものと推定される。残存するカマドの構造は熱変赤色化した床面のみである。



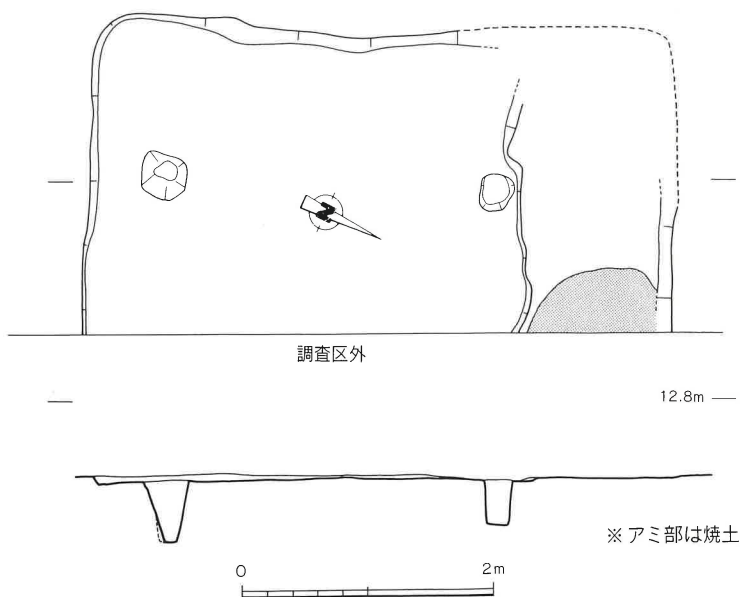
第107図 45号竪穴住居跡実測図

46号竪穴住居跡出土遺物

207は土師器埴である。遺物の胎土には雲母と白色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、そのほかは不定方向ナデ、内面は底部に指圧痕を残すほかは、内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は11.1cm、器高は9.1cmである。遺物は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。



第110図 46号竪穴住居跡出土遺物実測図



第109図 46号竪穴住居跡実測図

47号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置する。住居は東壁の一部を残すのみで、残存する壁面にカマドを付設したものと推定される。平面プランは想定できず、確認できる壁面の規模は全長1.93m、最大深7cmである。48号住居による削平のため支柱穴は2基を確認するに止まった。47号住居は48号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より47号住居から48号住居への新旧関係を確認した。遺構内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。

47号竪穴住居カマド跡

住居東壁に付設されたものと推定される。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。遺構内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。

48号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置しており、北壁にはカマドを付設している。住居中央部から南西隅にかけては49号住居により削平をうけていた。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は7.17m×6.31m、最大深15cmである。住居東壁中央部とカマド西側より残存する西壁にかけては最大深14cmの壁溝を検出している。支柱穴は49号竪穴住居跡の削平により3基を確認するに止まった。48号住居は47号住居、49号住居と切り合い関係にあるが、遺構検出面の観察から47号住居→48号住居→49号住居への新旧関係を確認した。

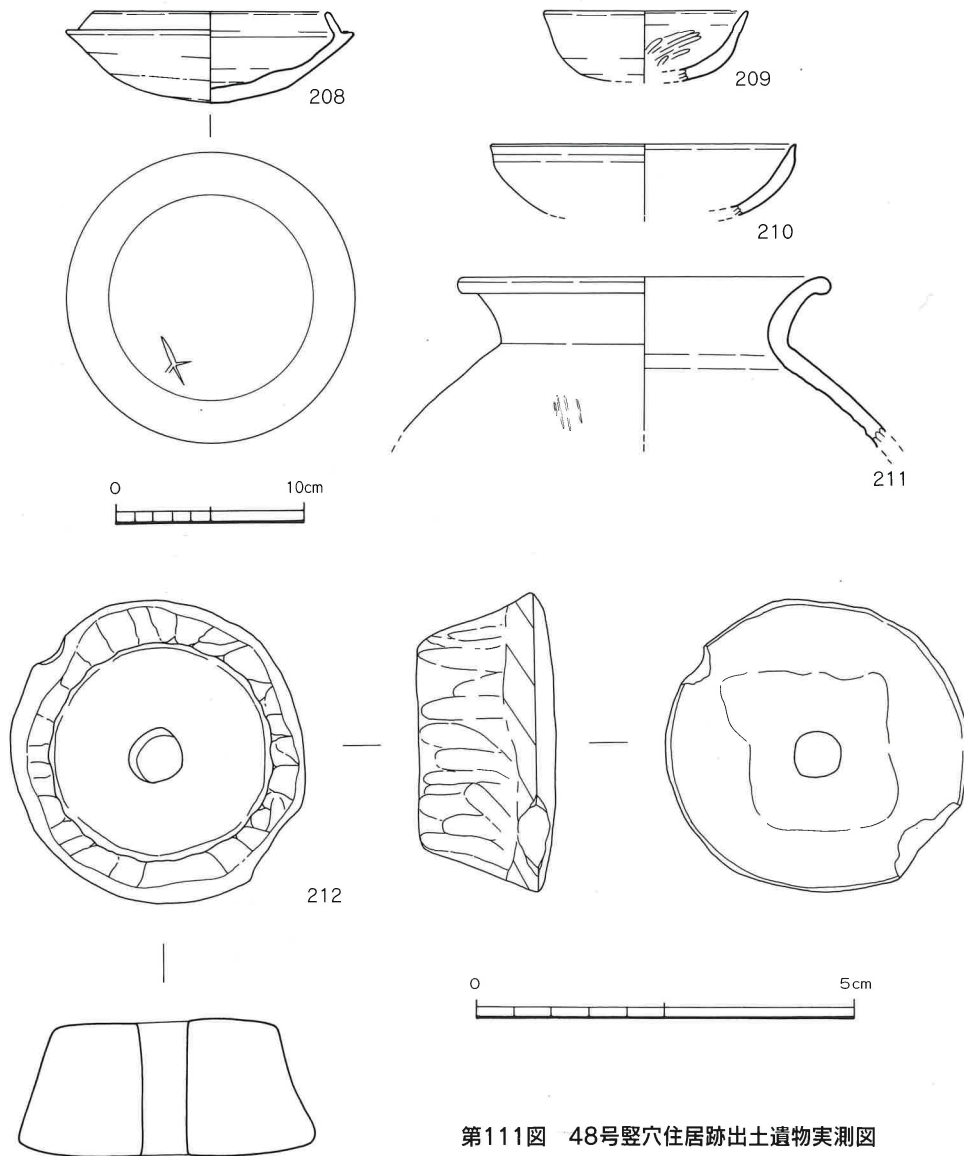
48号竪穴住居跡出土遺物

208は須恵器坏身、209・210は土師器埴、211は須恵器甕、212は紡錘車である。208の胎土には石英が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ切り、内面底部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。遺物外面にはヘラ記号を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は12.5cm、器高は4.8cmである。209の胎土には長石、石英、茶色砂粒が含まれ外面の調整は横ナデ、内面の口縁部は横ナデ、口縁部以下にはヘラ磨きを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は10.7cmである。210の胎土には石英、長石、茶色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙褐色である。口径は16.2cmである。211の胎土には石英、白色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には僅かに平行タタキを残す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は器面剥離のため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は19.7cmである。212は滑石製である。広径4.2cm、狭

径2.8cm、厚さ1.8cm、孔径0.7cm、重量43.5gである。208～211は6世紀末～7世紀前半と考えたい。

48号竪穴住居カマド跡

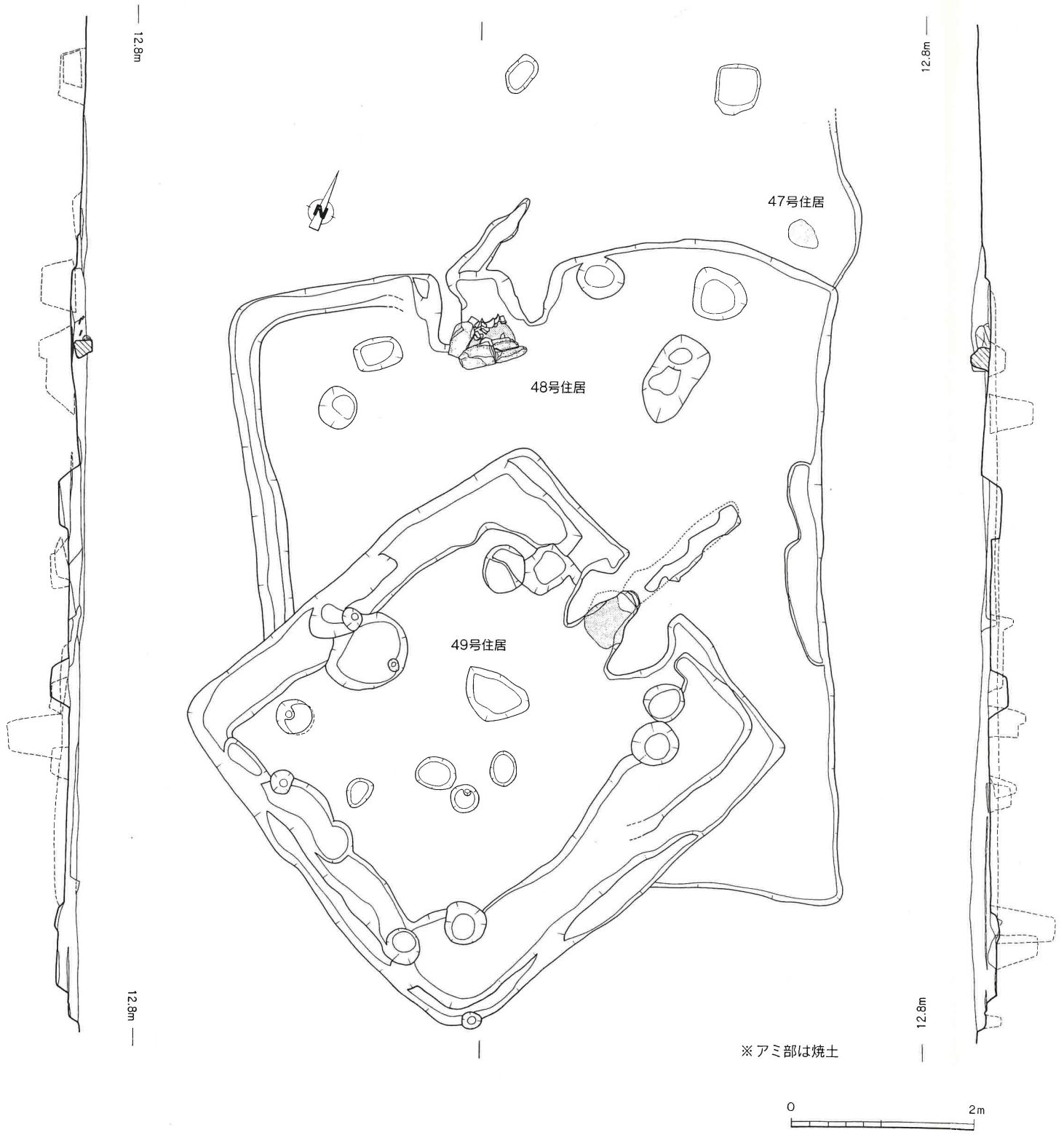
住居北壁に付設している。残存するカマド構造は両袖、西側焚口袖石、天井石（すでに崩落）、熱変赤色硬化した焚燃部、炎焼部－炎口部－煙口部－煙出部－煙道である。特に煙道はカマド主軸に対し東側へ、くの字に屈曲する形態を持つ。天井石、袖石は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いている。カマド基盤床の平面プランは楕円形で長軸78cm、短軸43cm、最大深10cmである。



第111図 48号竪穴住居跡出土遺物実測図

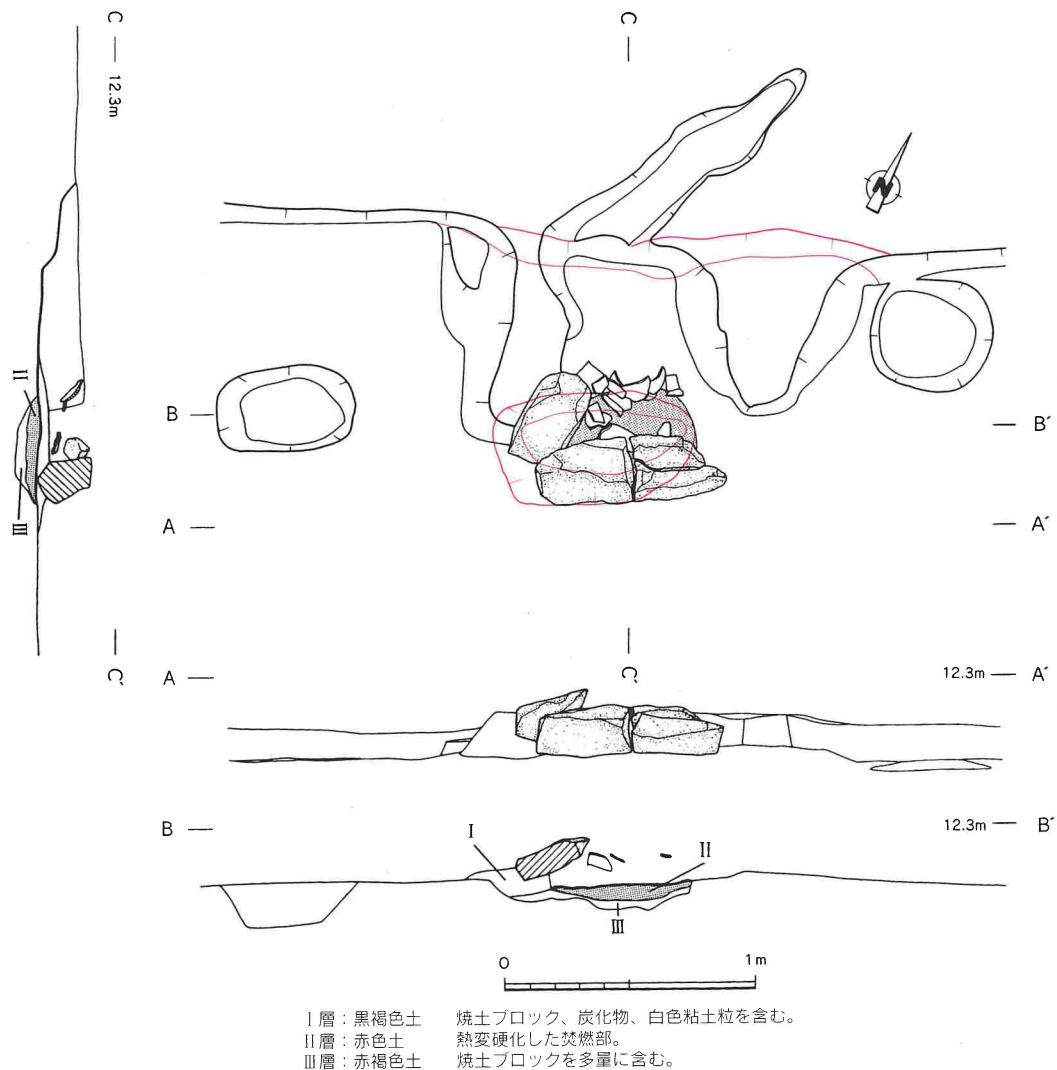
48号竪穴住居カマド跡出土遺物

213は須恵器坏身、214～220は土師器甕である。213の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ切り、内面底部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は12.9cm、器高は4.8cmである。214の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、頸部直下が縦ナデ、胴部から底部は指圧痕、ヘラ削り、不定方向ナデを確認できる。内面の調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は12.1cm、胴部最大径は17.5cm、器高は20.3cmである。215の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕、ヘ

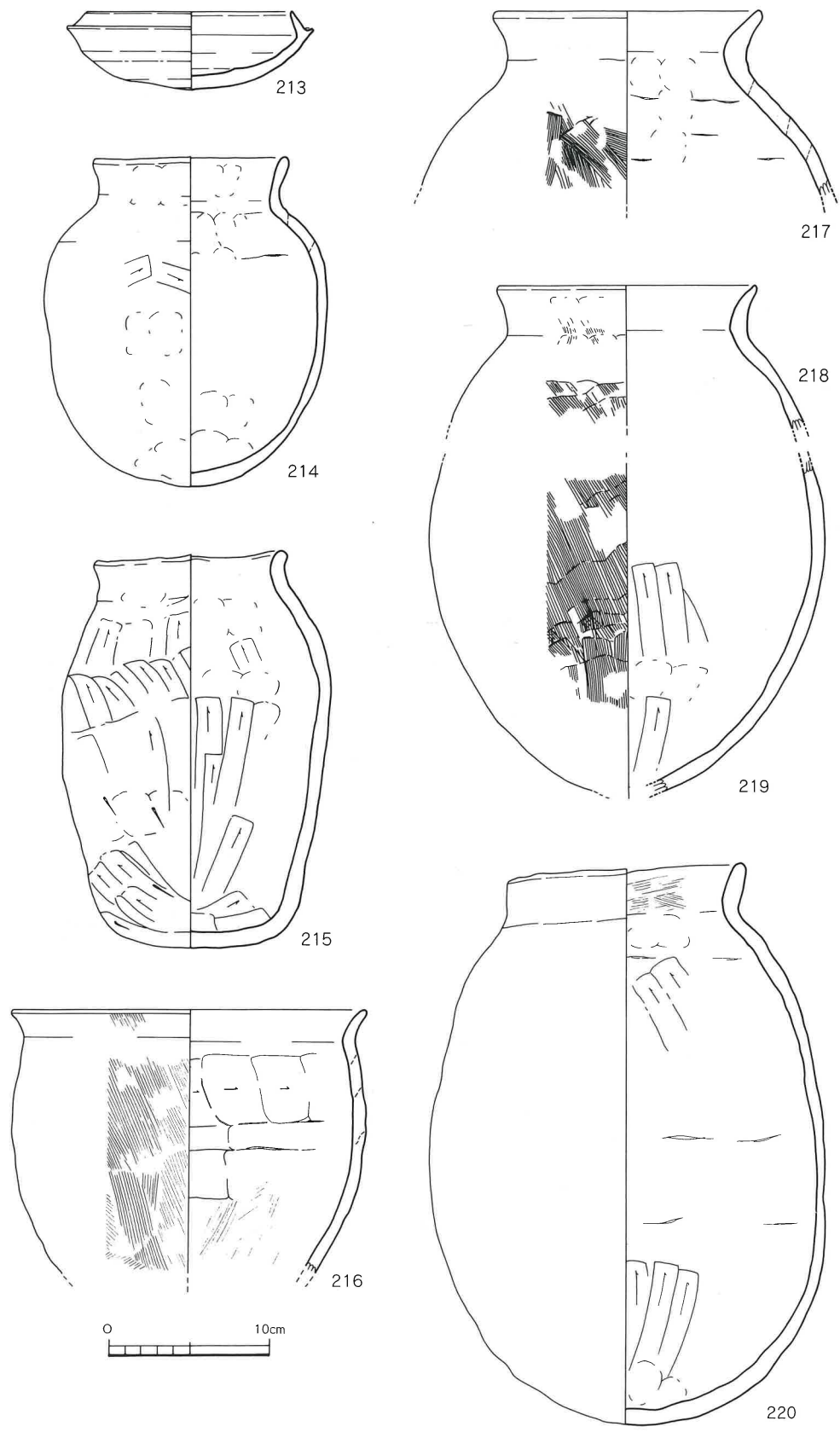


第112図 47号~49号竪穴住居跡実測図

ラ削り、不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕、ヘラ削り、不定方向ナデが残る。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は13.0cm、胴部最大径は16.6cm、器高は24.6cmである。**216**の胎土には長石、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部がハケ目と横ナデ、頸部以下にはハケ目を残す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びヘラ削り、ハケ目、不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は22.2cmである。**217**の胎土には長石と灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕、不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.6cmである。**218・219**は同一個体である。胎土にはには長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部以下にはハケ目を有す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がヘラ削り、指圧痕、不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.0cm、胴部最大径は24.4cmである。**220**の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデとハケ目、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕、ヘラ削り、不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.0cm、胴部最大径は24.6cm、器高は34.2cmである。**213~220**は6世紀末~7世紀前半と考えたい。



第113図 48号竪穴住居カマド跡実測図



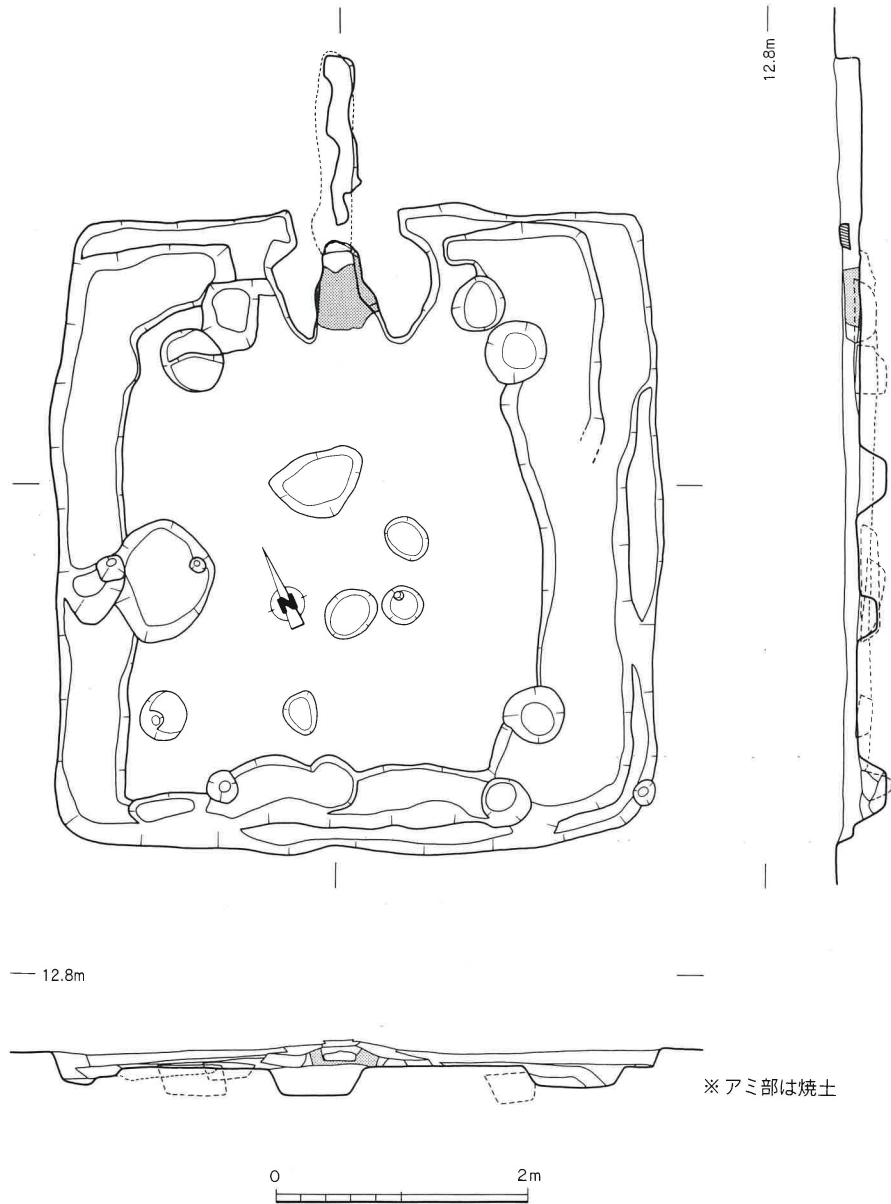
第114図 48号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

49号竪穴住居跡

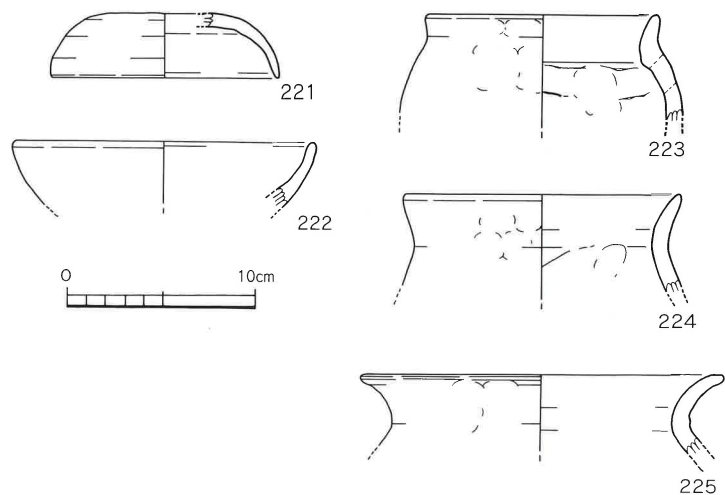
遺構は調査区の南側に位置しており、北壁にはカマドを付設している。平面プランは長方形で規模は5.15m×4.77m、最大深15cmである。支柱穴は4基で、カマドを除く全壁面沿いには最大深15cmの壁溝を検出した。49号住居は48号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から48号住居から49号住居への新旧関係を確認した。

49号竪穴住居跡出土遺物

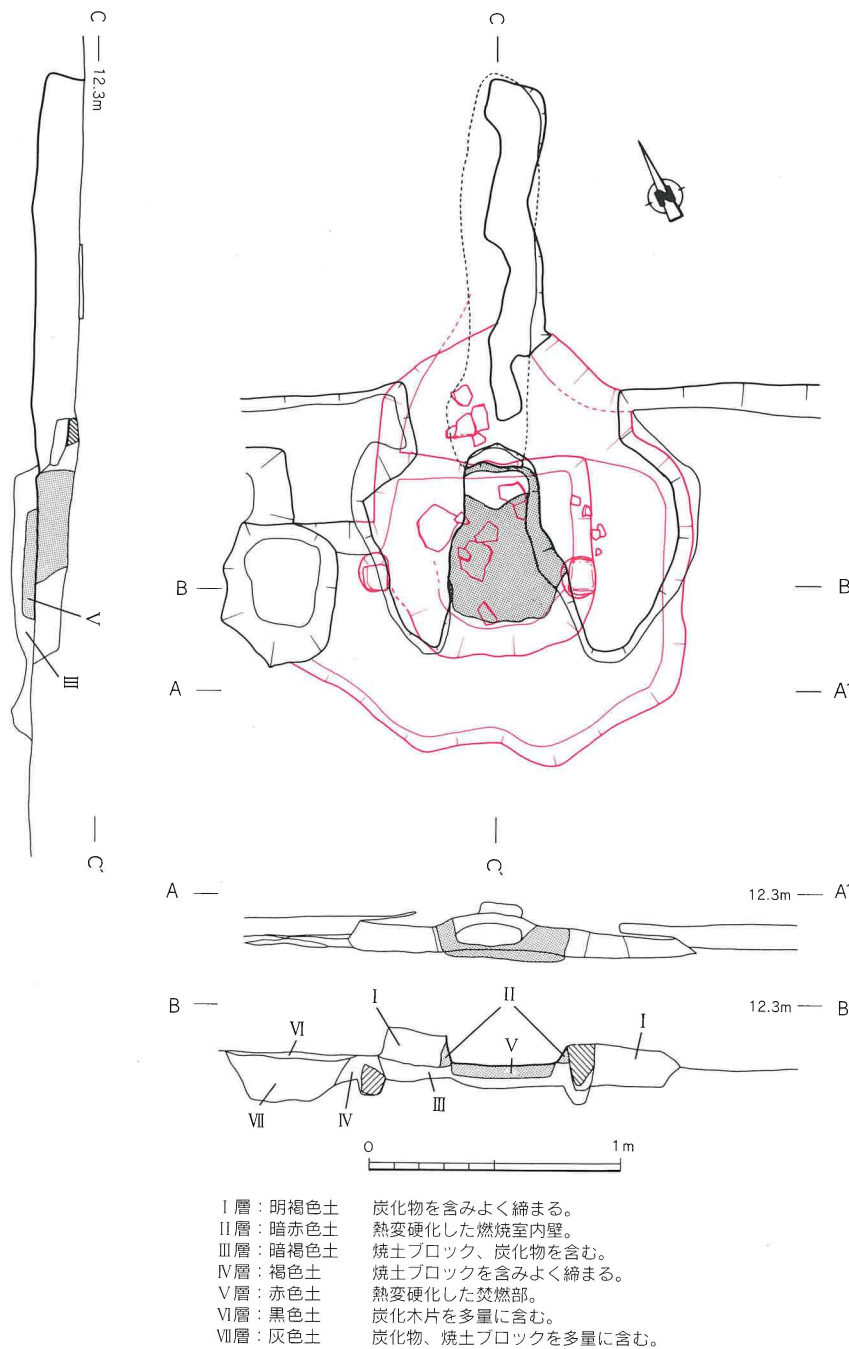
221は須恵器坏蓋、222は土師器碗、223～225は土師器甕である。221の胎土には石英、白色砂粒が含まれ調整は天井部外面が回転ヘラ切り、天井部内面が指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は青灰色である。口径は12.0cmである。222の胎土には長石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は15.9cmである。223の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを有する。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は12.4cmである。224の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以



第115図 49号竪穴住居跡実測図



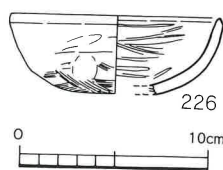
第116図 49号竪穴住居跡出土遺物実測図



第117図 49号竪穴住居カマド跡実測図

掘削痕を残す。平面プランは不定形で、規模は1.79m×1.58m、最大深15cmである。さらに、カマドの西側にはカマド基盤床構築後に設けられた掘り方を確認した。平面プランは歪な楕円形で、規模は長軸57cm、短軸45cm、最大深20cmである。掘り方埋土からは炭化物、焼土ブロックが大量に出土していることから、カマド使用時に排出される灰などを一時的に蓄積した機能を持つものと推定される。

49号竪穴住居カマド跡出土遺物



第118図 49号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

226は土師器碗である。遺物の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部がヘラ磨き、口縁部以下にはハケ目を有する。内面の調整はヘラ磨きを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が灰白色、内面が黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は10.9cm、器高は4.1cmである。226は7世紀前半と考えたい。

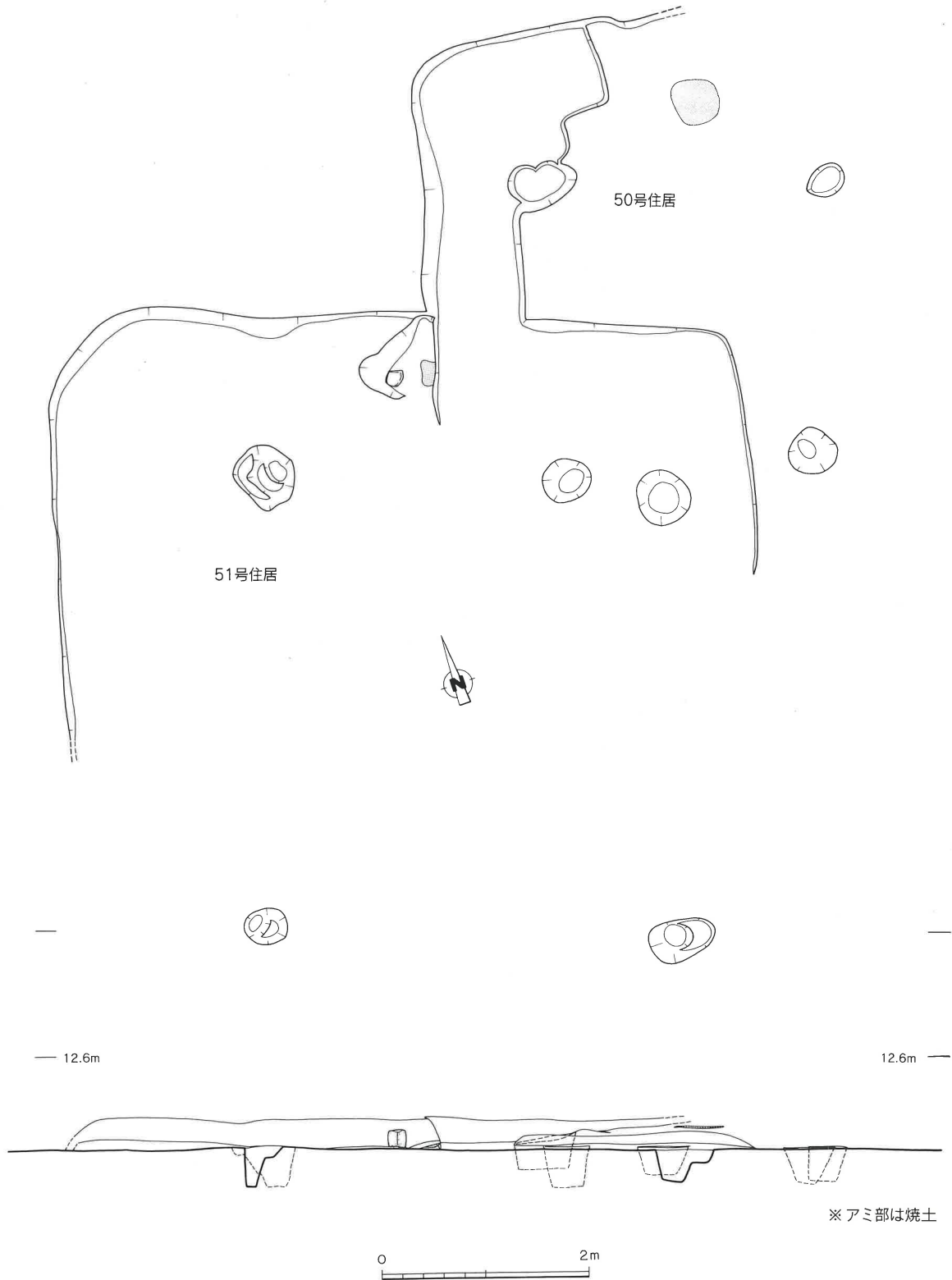
下は不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.7cmである。225の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は指圧痕及び横ナデ、内面は横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.0cmである。221～225は7世紀前半と考えたい。

49号竪穴住居カマド跡

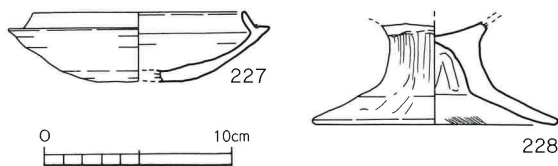
住居北壁に付設している。カマドは上部の構造が削平されているが、両袖、前庭、左右焚口袖石、内面が熱変赤色硬化した燃焼室、炎口部、煙口部、煙出部及び天井、煙道を残存している。袖石は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工して使用している。カマド基盤床の掘り方は前庭から煙道に及ぶもので二段掘りである。袖石直下には石のサイズに合わせた

50号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置する。北壁にはカマドを付設したものと推定されるが、住居北壁西半分、西壁北半分が残存するのみである。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は3.13m×2.61m、最大深10cmである。支柱穴は4基を確認した。北壁西側から西壁北半分にかけては床面より一段低い掘り方を検出しており、最大深10cmである。50号住居は51号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から51号住居から50号住居への新旧関係を確認した。



第119図 50号・51号竪穴住居跡実測図



第120図 50号竪穴住居跡出土遺物実測図

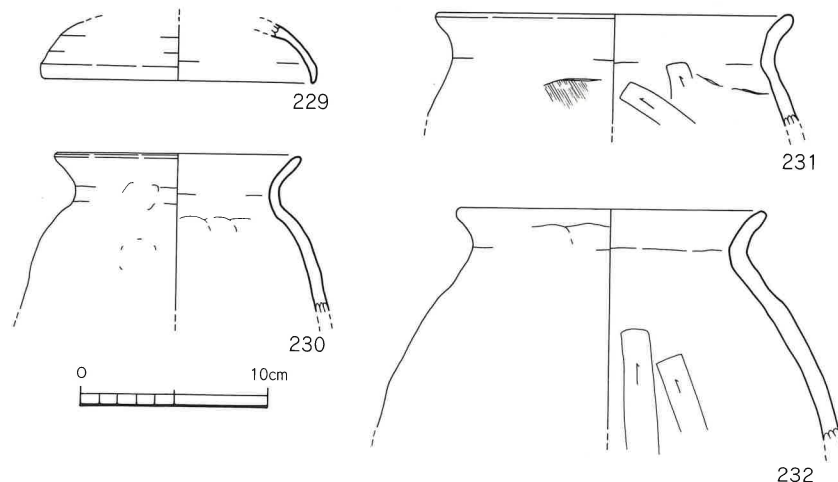
内外面ともに淡灰色である。口径は11.2cm、器高は3.7cmである。228の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整はハケ目と指圧痕、内面はへら削り、不定方向ナデ、ハケ目を僅かに残す。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、僅かに煤の付着がみられる。底径は13.0cmである。227・228は6世紀末～7世紀初頭と考えたい。

50号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものである。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。カマド内から遺物は出土しなかった。

51号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置する。北壁にはカマドを付設しているが、住居南半分は削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.35m×6.77m、最大深27cmである。主柱穴は4基を確認した。51号住居は50号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から51号住居から50号住居への新旧関係を確認した。住居は52号住居、53号住居、54号住居とも切り合い関係にあると考えられるが、各遺構とも削平が著しく前後関係を把握できない。



第121図 51号竪穴住居跡出土遺物実測図

指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は13.0cmである。231の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がハケ目、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は灰白色である。口径は18.2cmである。232の胎土に長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は指圧痕と横ナデ、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.4cmである。229～232は6世紀後半と考えたい。

50号竪穴住居跡出土遺物

227は須恵器坏身、228は土師器高坏である。227の胎土には長石と白色砂粒が含まれ調整は外面底部が回転へら削り、内面底部が不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は

51号竪穴住居跡出土遺物

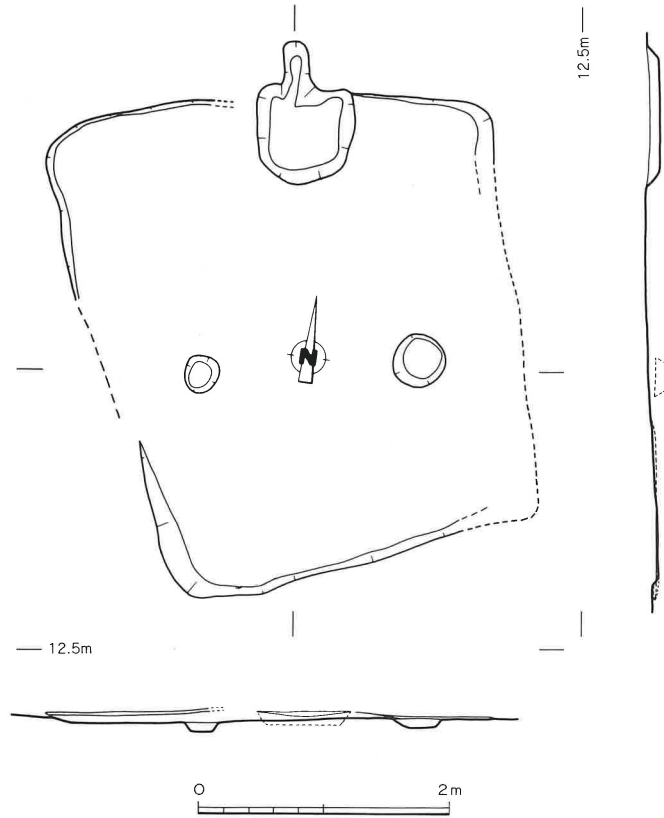
229は須恵器坏蓋、230～232は土師器甕である。229の胎土には長石が含まれ調整は内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.3cmである。230の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部には

51号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたもので、50号住居の削平によりカマド構造の東半分を消失していた。残存する構造は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いた西側焚口袖石と熱変赤色硬化した焚燃部である。カマド基盤床の平面プランは不定形で、規模は93cm×53cm、最大深3cmである。カマド内から遺物は出土しなかった。

52号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置する。住居北壁にはカマドを付設していたものと推定されるが、カマド西側、西壁中央南壁東端、東壁の大部分を削平されていた。平面プランは歪な長方形と推定され、確認できる規模は3.87m×3.53m、最大深2cmである。支柱穴は2基である。住居は51号住居、53号住居、54号住居と切り合い関係にあるが各遺構とも削平が著しく前後関係を把握できない。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第122図 52号竪穴住居跡実測図

52号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものと推定される。カマド基盤床を残すのみである。平面プランは不定形で、確認できる規模は1.12m×78cm、最大深12cmである。カマド内から遺物は出土しなかった。

53号竪穴住居跡

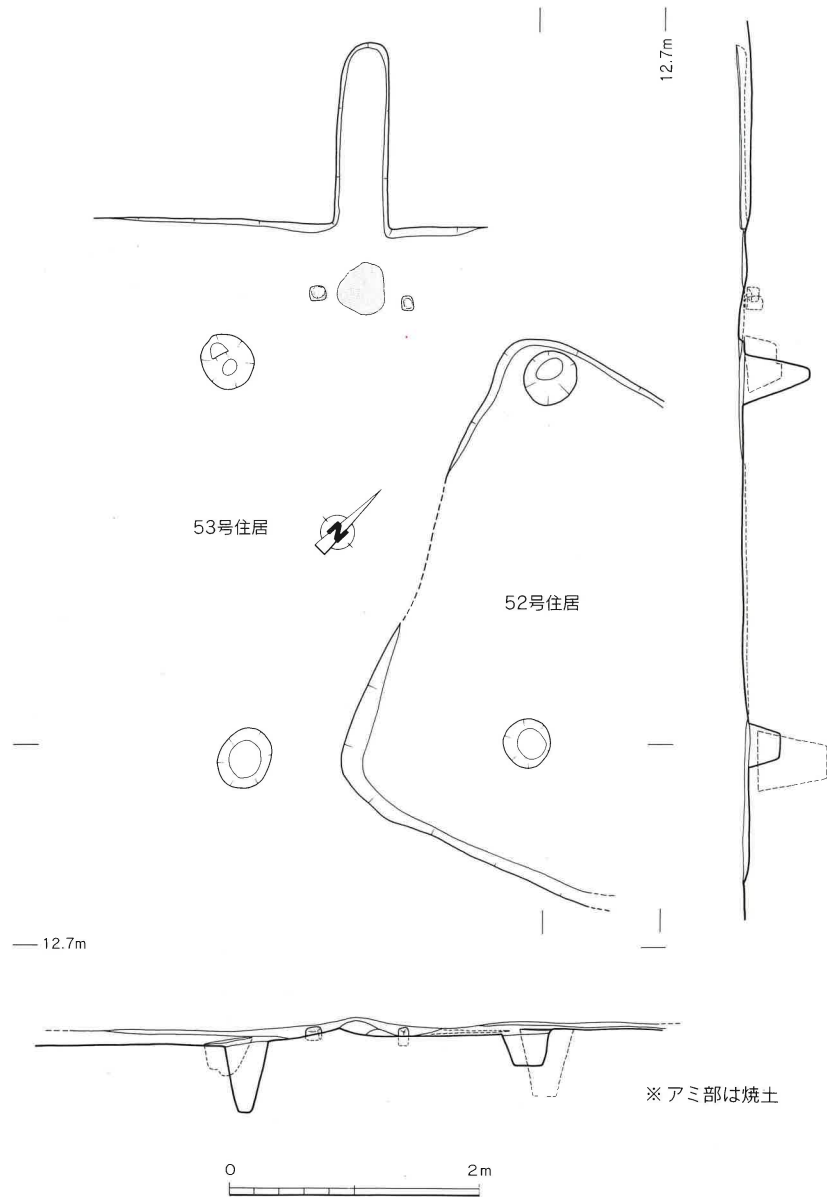
遺構は調査区の南側に位置する。北壁にはカマドを付設しているが、全体的に削平が著しく北壁の一部を残すのみである。平面プランは方形と推定され、確認できる壁面の規模は全長3.18m、最大深7cmである。支柱穴は4基である。住居は51号住居、52号住居、54号住居と切り合い関係にあるが各遺構とも削平が著しく前後関係を把握できない。

53号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設したものである。残存するカマド構造は熱変赤色硬化した焚燃部、遺跡周辺で採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工し用いている左右焚口袖石と煙道である。カマド基盤床の平面プランは不定形で、規模は80cm×97cm、最大深18cmである。

53号竪穴住居カマド跡出土遺物

233は須恵器坏身、234はミニチュア土器である。233の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は9.4cm、器高は3.1cmである。234の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ遺物は手づくね成形後、内外面を指ナデで仕上げている。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、僅かに煤の付着がみられる。口径は4.1cm、器高は4.3cmである。233・234は7世紀前半を中心とする時期と考えたい。



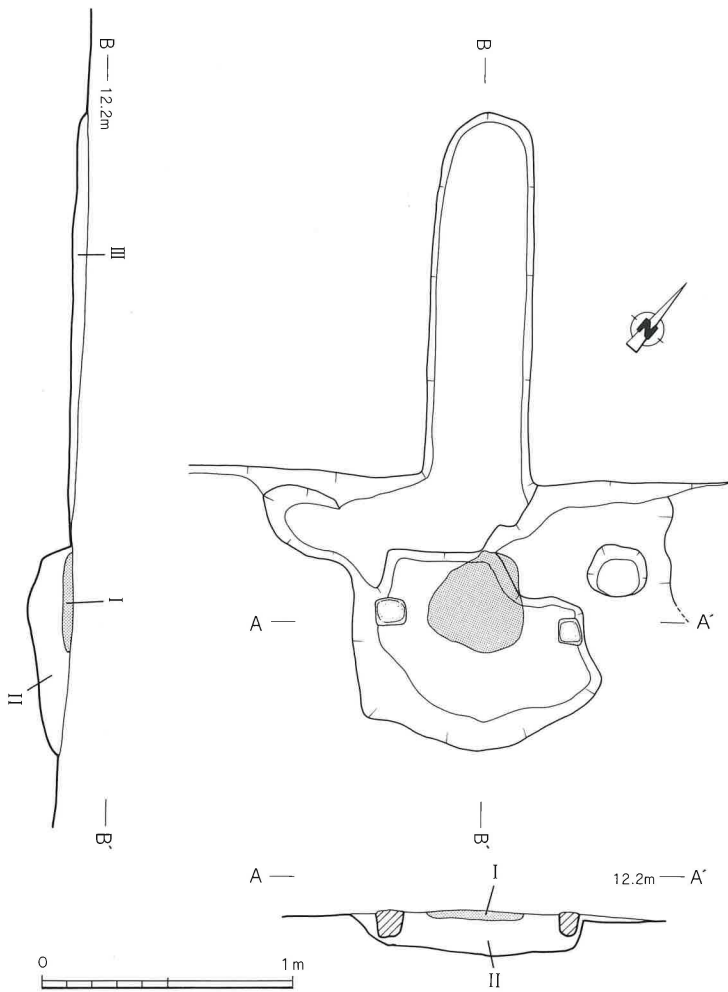
第123図 53号竪穴住居跡実測図

54号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置する。北壁にはカマドを付設したと推定されるが、全体的に削平が著しく住居南壁と西壁の一部を残すのみである。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は6.95m×5.33m、最大深7cmである。支柱穴は4基を確認した。住居は52号住居、53号住居及び14号土坑と切り合い関係にあるが各遺構とも削平が著しく前後関係を把握できない。遺構内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。

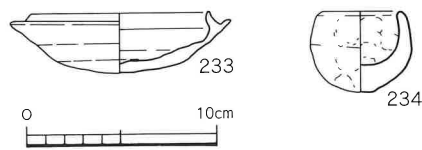
54号竪穴住居カマド跡

住居北壁に付設されたものと推定される。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した燂燃部のみである。カマド内から遺物は出土しなかった。



I層：赤色土 熱変硬化した焚燃部。
 II層：褐色土 炭化物、焼土ブロックを僅かに含む。
 III層：赤褐色土 炭化物、焼土ブロックを含む。

第124図 53号竪穴住居カマド跡実測図



第125図 53号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕、ハケ目、横ナデ、胴部がハケ目を残す。内面の調整は口縁部から頸部が指圧痕、ハケ目、横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が淡黄白色、内面が淡黄灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.6cmである。235～237は6世紀後半と考えたい。

55号竪穴住居カマド跡

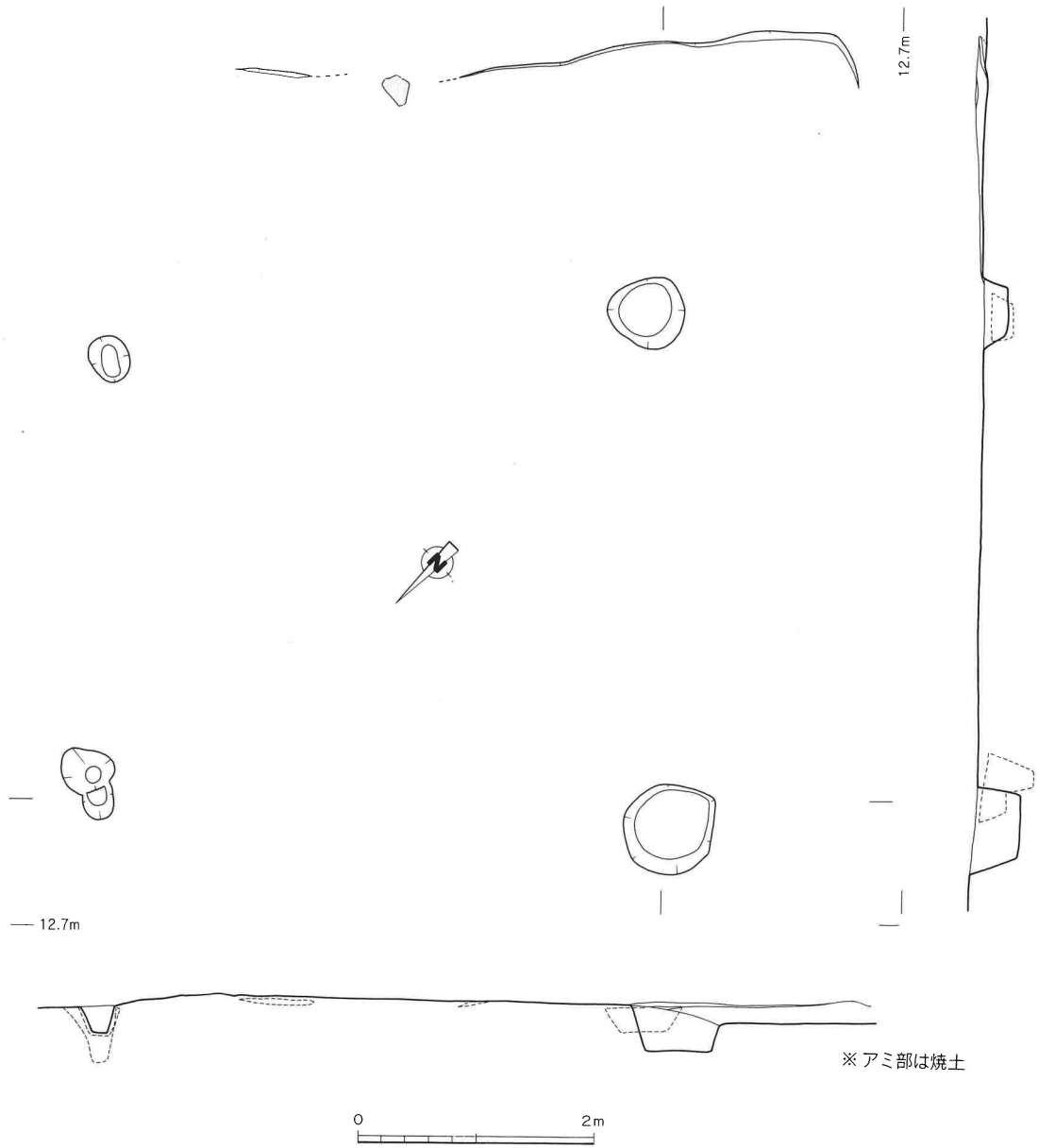
住居北壁に付設されている。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部と遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工して左右焚口袖石に用いたものである。カマド基盤床はなく袖石を固定するための掘り方を残すのみである。カマド内から遺物は出土しなかった。

55号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側東端に位置するので、北壁にはカマドを付設している。住居は8号溝などにより北壁と南壁の一部を失っている。東壁は調査区外に展開するものと考えられる。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は6.07m×6.07m、最大深4cmである。主柱穴は15号溝状遺構により一部削平されているが4基を確認した。西壁中央には階段状の高まりを検出しており、全長2.08m、最大幅25cm、最大高1.5cmである。55号住居は8号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より55号住居から8号溝への新旧関係を確認した。

55号竪穴住居跡出土遺物

235は須恵器坏身、236・237は土師器甕である。235の胎土には白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は外面底部が回転へら削り、内面底部が指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.6cm、器高は4.6cmである。236の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕と横ナデ、胴部がハケ目と指圧痕である。内面の調整は口縁部から頸部には横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が淡黄橙色、内面が淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.5cmである。237の胎土には長石、



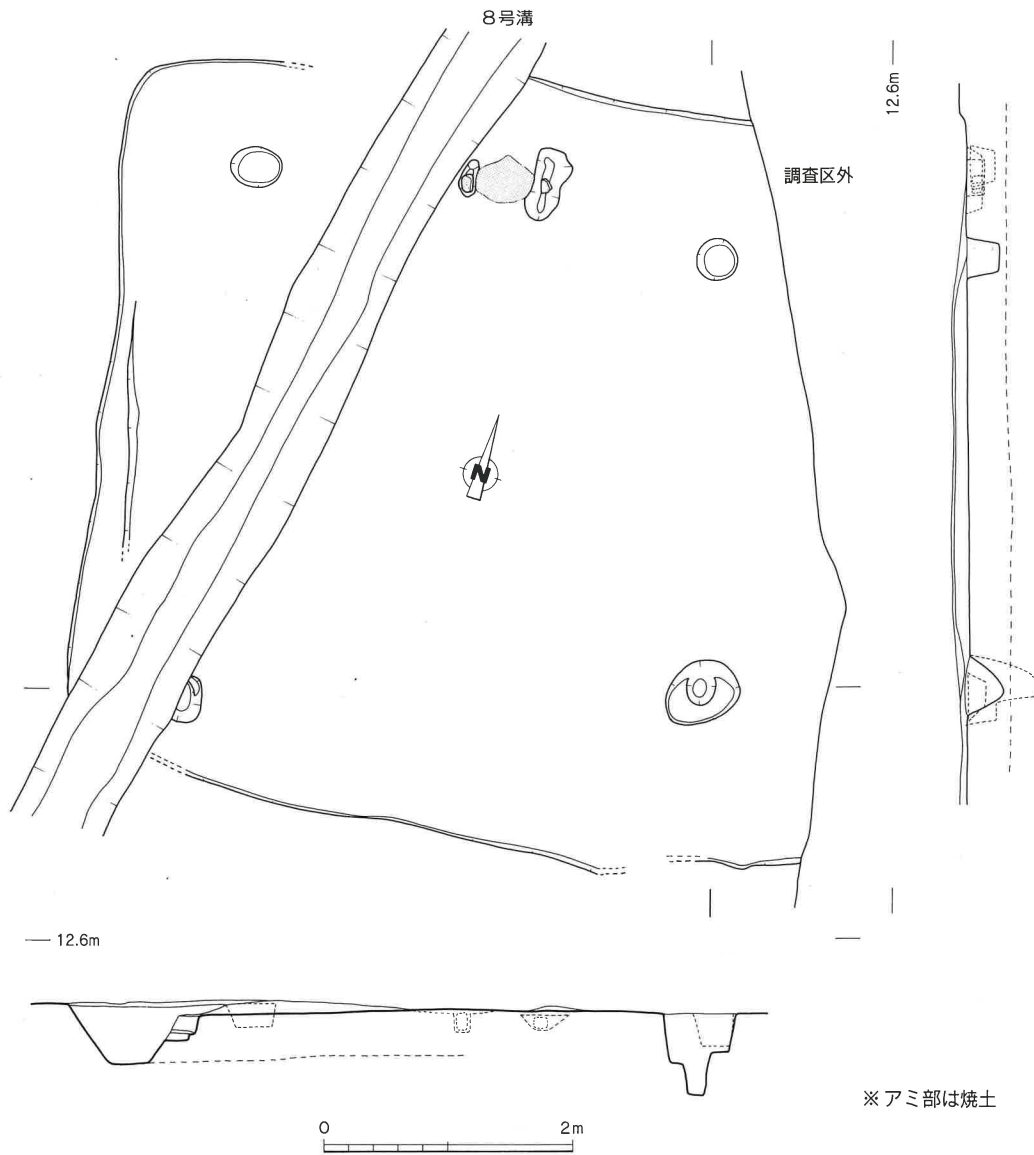
第126図 54号竪穴住居跡実測図

56号竪穴住居跡

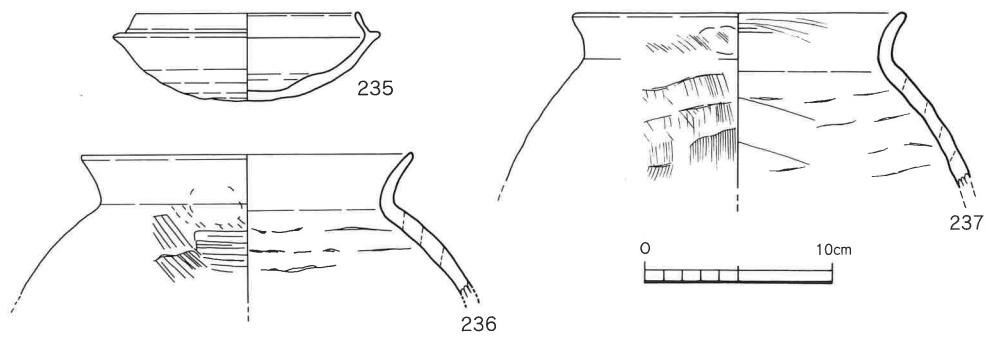
遺構は調査区の南端に位置する。北壁にはカマドを付設しているが、住居中央部を南北に8号溝が展開するため、カマド、南壁中央、北壁中央は削平を受けていた。平面プランは歪んだ方形で、確認できる規模は4.85m×5.08m、最大深20cmである。住居北西隅と西壁には最大深5cmの壁溝を検出している。主柱穴は一部攪乱されているため断定できないが、4基であったと推定される。56号住居と8号溝は切り合い関係にあるが、遺構検出面の観察より56号住居から8号溝への新旧関係を確認した。

56号竪穴住居カマド跡

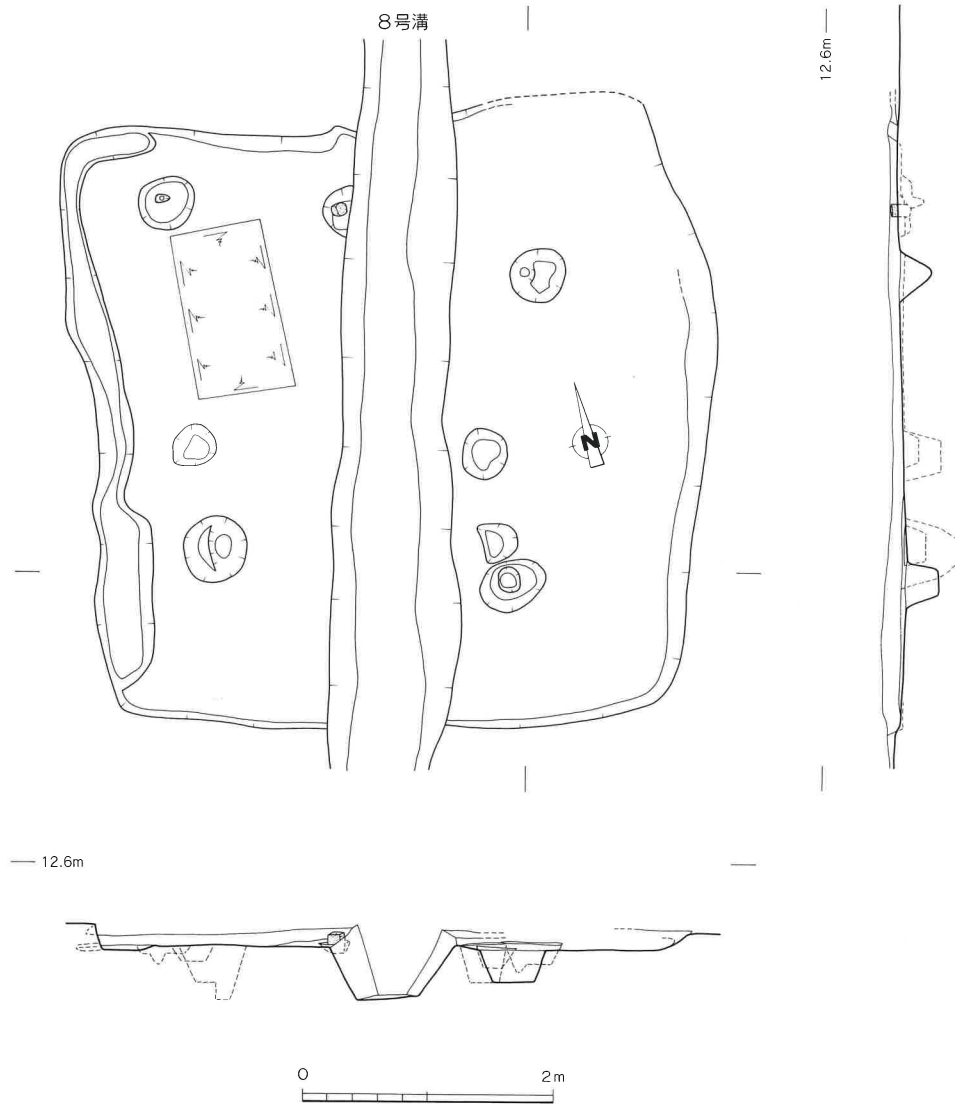
住居北壁に付設している。残存するカマド構造は遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を方柱状に加工して、西側焚口袖石に用いるものとその掘り方である。



第127図 55号竪穴住居跡実測図



第128図 55号竪穴住居跡出土遺物実測図

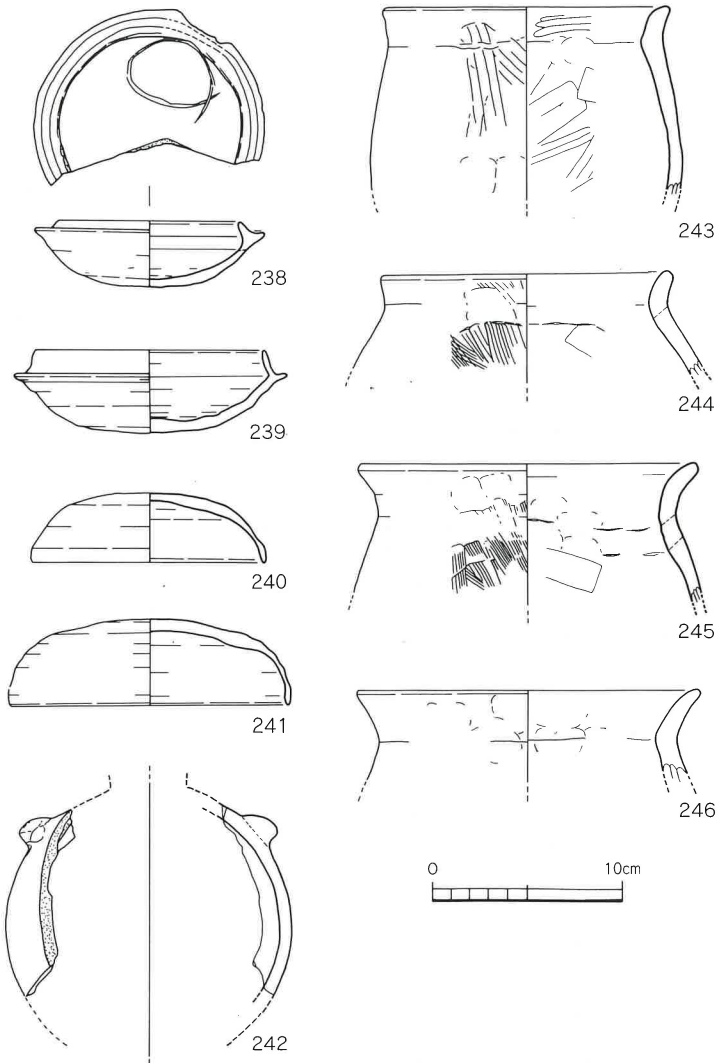


第129図 56号竪穴住居跡実測図

56号竪穴住居跡出土遺物

238・239は須恵器坏身、240・241は須恵器坏蓋、242は須恵器提瓶、243～246は土師器甕である。238の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部が回転ヘラ削り、内面底部が不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。遺物内面にはヘラ記号を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は9.6cm、器高は3.4cmである。239の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転ヘラ削りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は12.1cm、器高は7.3cmである。240の胎土には石英が含まれ調整は外面天井部が回転ヘラ削り、内面天井部に不定方向ナデを施すほかは内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は12.2cm、器高は3.6cmである。241の胎土には長石と黒色砂粒が含まれ調整は外面天井部にヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.8cm、器高は4.5cmである。242の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデ、把手部は指ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。243の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデとハケ目、胴部には指圧痕、ハケ目、不定方向ナデを残す。内面の調整は口縁部が横ナデと粗いハケ目、頸部は指圧痕と不定方向ナデ、胴部は指圧痕、ヘラ削り、ハケ目、不定方向ナデがみられる。焼成は

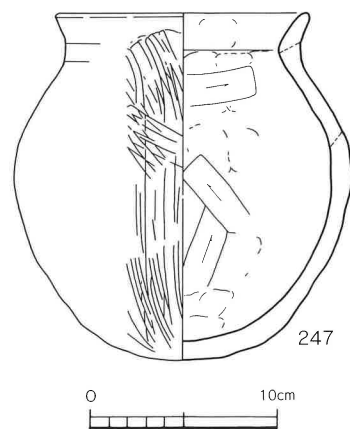
良好で、色調は内外面ともに明褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.2cmである。244の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、ハケ目、指圧痕、胴部にはハケ目を残す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.4cmである。245の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ指圧痕、ハケ目、胴部がハケ目である。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部にかけては粘土積み上げ痕及び指圧痕、へら削り、不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.9cmである。246の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに指圧痕と横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.1cmである。238~246は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。



第130図 56号竪穴住居跡出土遺物実測図

56号竪穴住居カマド跡出土遺物

247は土師器甕である。胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部は指圧痕と横ナデ、頸部以下には縦と斜め方向からハケ目を施す。内面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕、へら削り、不定方向ナデが観察できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は13.5cm、胴部最大径は17.8cm、器高は18.2cmである。遺物は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。



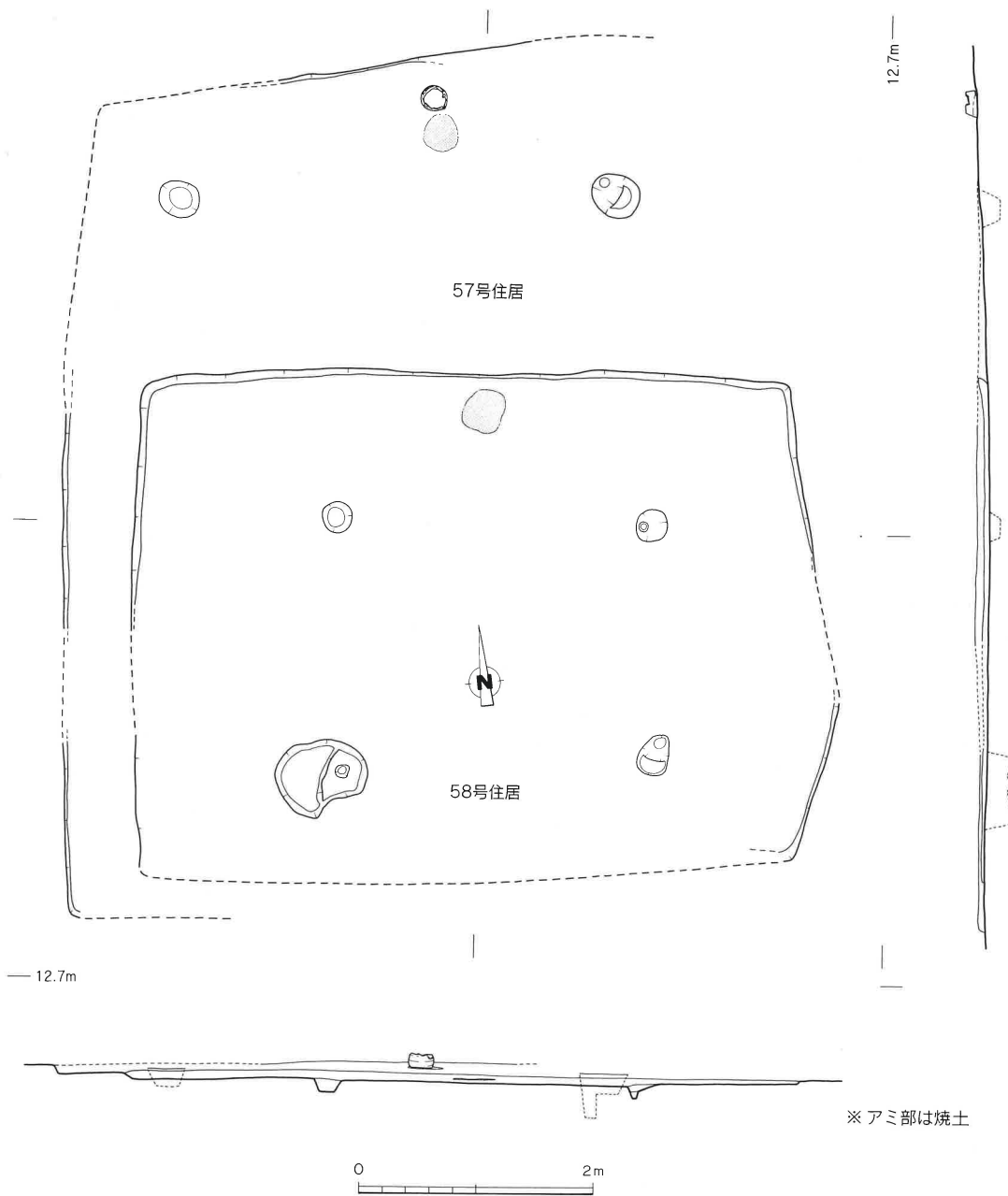
第131図 56号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

57号竪穴住居跡

遺構は調査区の南端に位置している。北壁にはカマドを付設しているが、削平が著しく北壁と西壁の一部を残すのみである。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は7.12m×4.82m、最大深8cmである。支柱穴は2基を確認するに止まった。57号住居と58号住居は切り合い関係にあるが、各遺構とも削平が著しいため前後関係は把握できない。

58号竪穴住居跡

遺構は調査区の南端に位置している。北壁にはカマドを付設していたと推定されるが、削平が著しく西壁中央部、南壁、東壁中央部が削平されている。平面プランは長方形と推定され、確認できる規模は4.37m×6.01m、最大深7cmである。支柱穴は4基を確認した。58号住居と57号住居は切り合い関係にあるが、各遺構とも削平が著しいため前後関係を把握できない。



第132図 57号・58号竪穴住居跡実測図

57号竪穴住居カマド跡

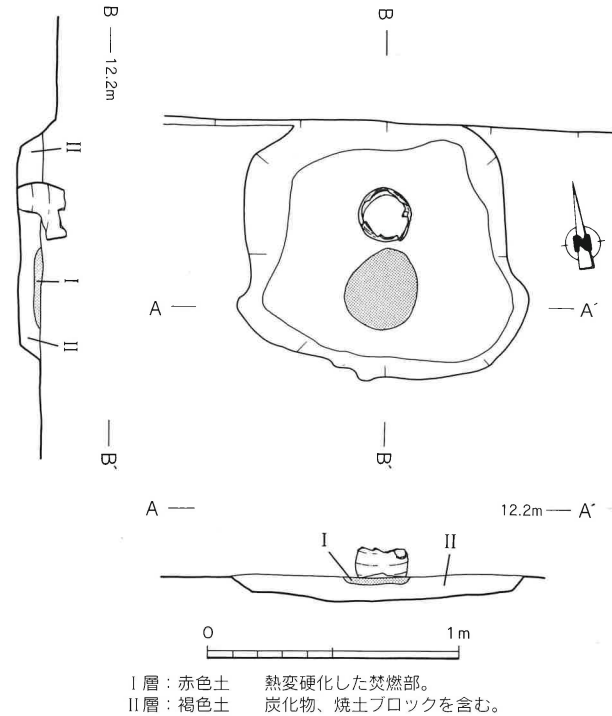
住居北壁に付設している。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部と甕の胴部と底部を打ち欠き支脚としたものである。カマド基盤床の平面プランは不定形で、規模は1.16m×88cm、最大深10cmである。

58号竪穴住居カマド跡

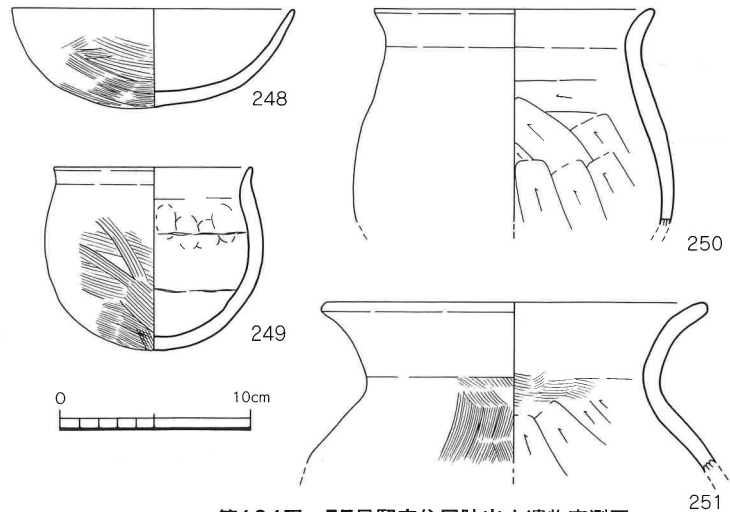
住居北壁に付設している。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部のみである。

57号竪穴住居跡出土遺物

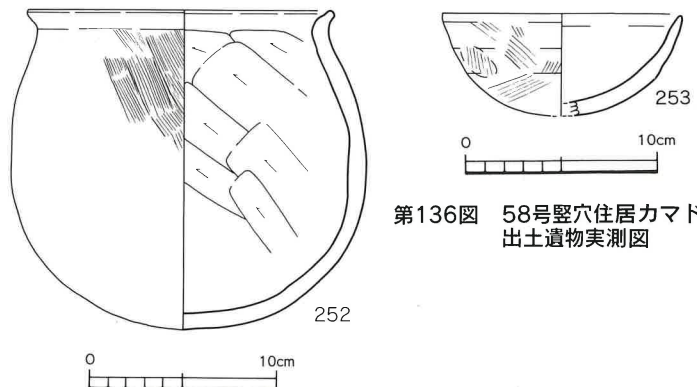
248は土師器壺、249は土師器甕、250・251は土師器甕である。248の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部に横ナデを施すほかはハケ目である。内面の調整は横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。口径は14.9cm、器高は5.2cmである。249の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部から底部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデが観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は10.5cm、器高は9.7cmである。250の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはヘラ削りと、不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.6cmである。251の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目、ヘラ削り、不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.2cmである。248～251は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。



第133図 57号竪穴住居カマド跡実測図



第134図 57号竪穴住居跡出土遺物実測図



第136図 58号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

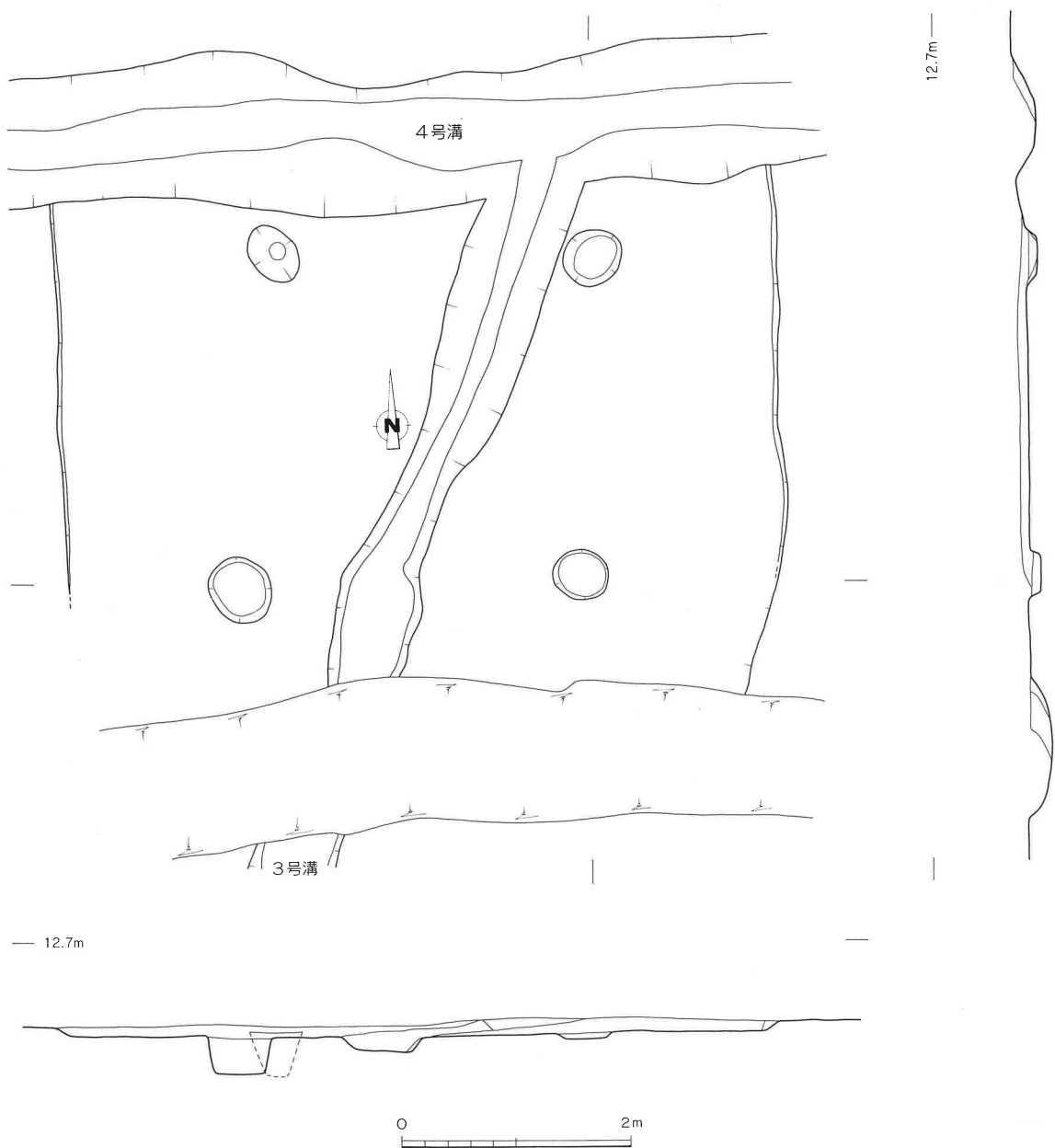
第135図 57号竪穴住居カマド跡出土遺物実測図

57号竪穴住居カマド跡出土遺物

252はカマド支脚に使用していた土師器甕である。胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目、内面は口縁部が横ナデ、頸部以下にはヘラ削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.2cm、器高は16.7cmである。遺物は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。

58号竪穴住居カマド跡出土遺物

253の土師器碗である。遺物の胎土には長石、赤色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部に横ナデを施すほかは、指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。内面の調整は不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は12.6cm、器高は5.3cmである。遺物は6世紀後半を中心とする時期と考えたい。



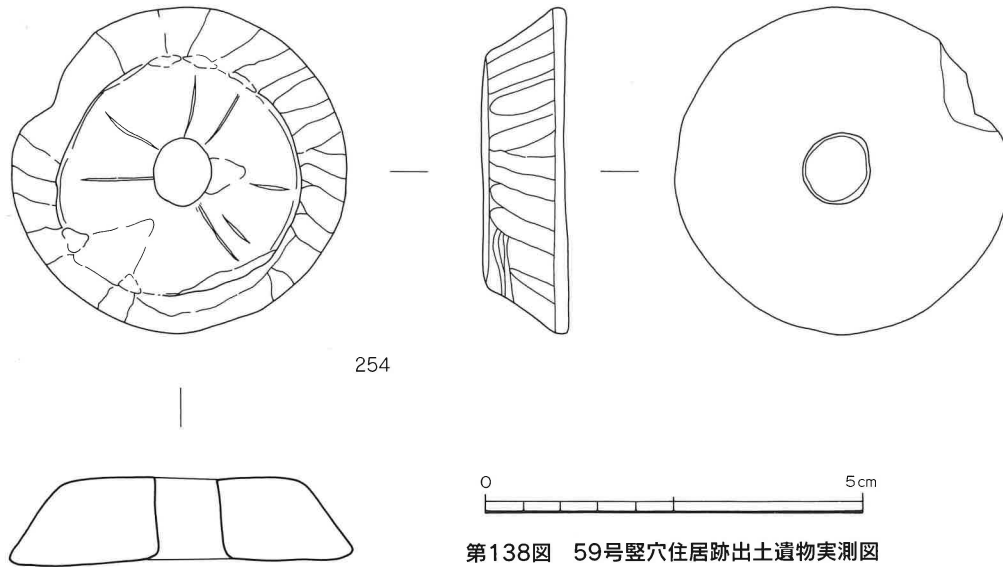
第137図 59号竪穴住居跡実測図

59号竪穴住居跡

遺構は調査区の南端に位置する。遺構は削平が著しく3号溝と4号溝及び近年の攪乱により、住居中央部、北壁、南壁、西壁と東壁の一部を消失していた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.57m×6.36m、最大深12cmである。主柱穴は4基を確認した。59号住居は3号溝及4号溝状と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から3号溝→59号住居→4号溝→12号溝への新旧関係を確認した。

59号竪穴住居跡出土遺物

254は滑石製の紡錘車である。広径4.5cm、狭径3.0cm、厚さ1.1cm、孔径0.8cm、重量33.3gである。



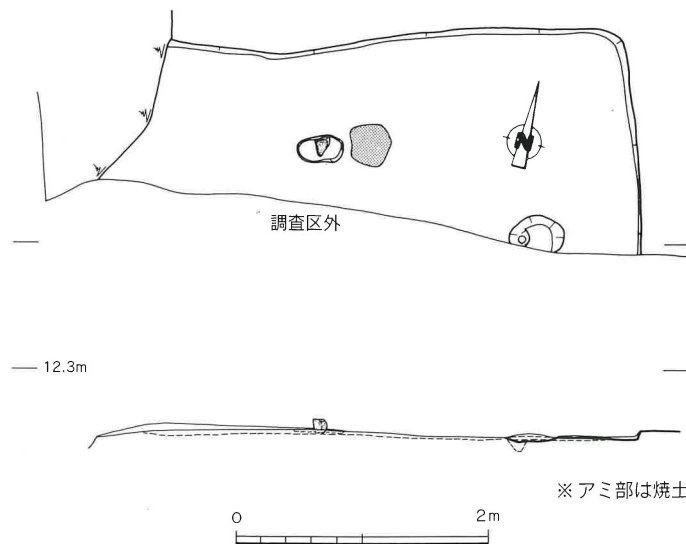
第138図 59号竪穴住居跡出土遺物実測図

60号竪穴住居跡

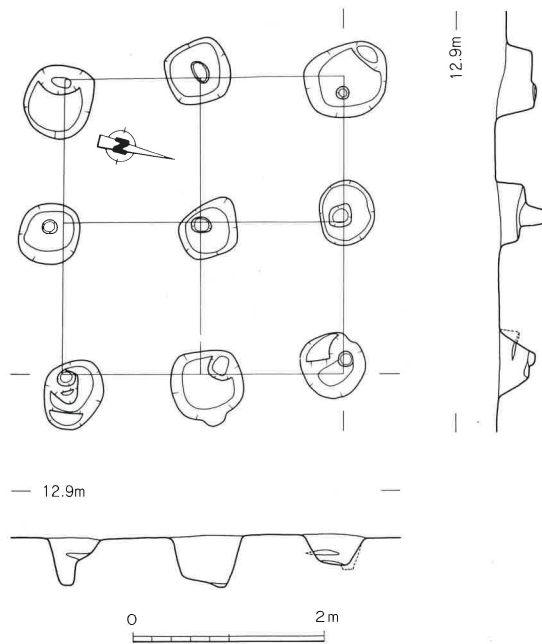
遺構は調査区の南端に位置する。住居北壁にはカマドを付設しているが、北壁、東壁の一部を確認するに止まった。住居南半分は調査区外に続くものと推定される。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は3.65m×1.78m、最大深8cmである。主柱穴は1基を検出した。遺構内から遺物は出土しなかった。

60号竪穴住居カマド跡

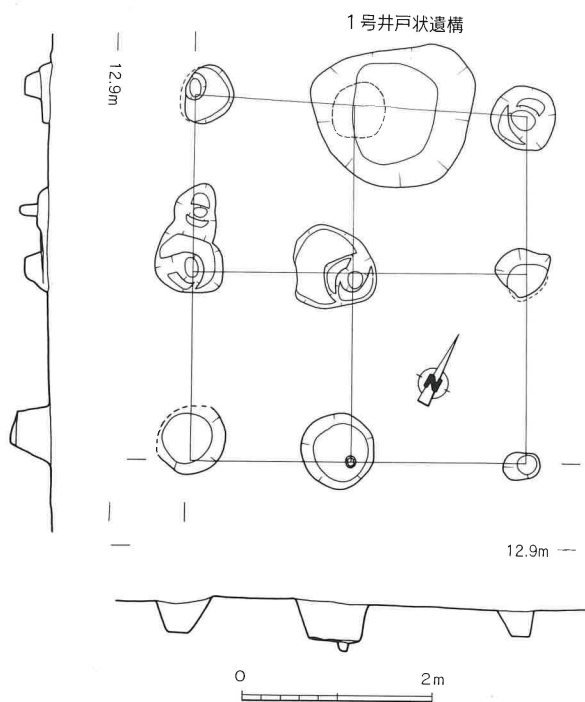
住居北壁に付設されたものである。残存するカマドの構造は熱変赤色硬化した焚燃部、遺跡周辺より採取される黄色の堆積岩を加工した西側焚口袖石とその掘り方である。カマド内から遺物は出土しなかった。



第139図 60号竪穴住居跡実測図



第140図 1号掘立柱建物跡実測図



第141図 2号掘立柱建物跡実測図

b. 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

遺構は調査区の北側に位置する2間×2間の建物である。平面プランはほぼ正方形で桁行3.08m、梁行2.95mである。桁行柱間寸法は全て1.54m、梁行柱間寸法は最大1.58m、最小1.35mとばらつきがある。柱穴掘り方は最大で長軸93cm、短軸80cm、最大深52cm、最小で長軸70cm、短軸58cm、最大深50cmである。1号掘立柱建物は1号溝、16号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から1号溝→16号溝→1号掘立柱建物の新旧関係を確認した。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

2号掘立柱建物跡

遺構は調査区の北側に位置する。2間×2間の建物であるが、遺構の一部は1号井戸状遺構により削平されていた。平面プランはほぼ長方形で桁行3.79m、梁行3.51mである。桁行柱間寸法は最大1.98m、最小1.65m、梁行柱間寸法は最大1.82m、最小1.68mである。柱穴掘り方は最大で長軸83cm、短軸82cm、最大深42cm、最小で長軸37cm、短軸28cm、最大深27cmである。2号掘立柱建物は16号溝、1号井戸状遺構と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から、16号溝から2号掘立柱建物、2号掘立柱建物から1号井戸状遺構への新旧関係をそれぞれ確認した。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

3号掘立柱建物跡

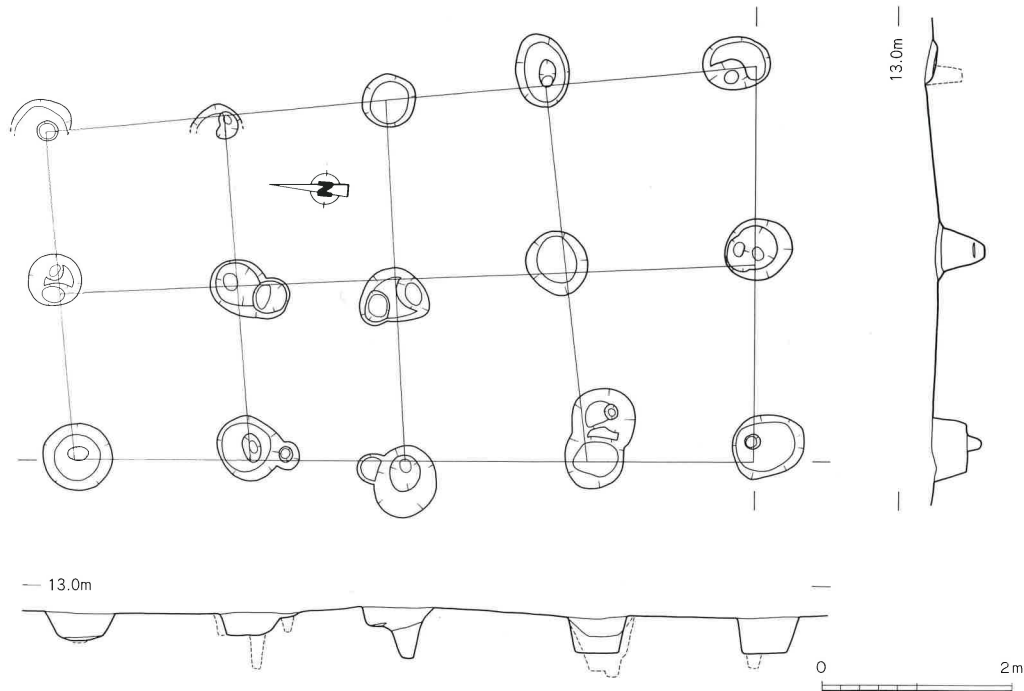
遺構は調査区の北側に位置する2間×4間の建物である。平面プランは台形状で桁行は最大7.28m、最小7.18m、梁行は最大3.85m、最小3.35mである。桁行柱間寸法は最大1.85m、最小1.62m、梁行柱間寸法は最大1.85m、最小1.75mである。柱穴掘り方は最大で長軸1.08m、短軸60cm、最大深62cm、最小で直径56cm、最大深35cmである。3号掘立柱

建物は1号溝、15号溝、6号住居、7号住居、8号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から1号溝から3号掘立柱建物、15号溝から3号掘立柱建物への前後関係をそれぞれ確認したが、その他の遺構との新旧関係は削平が著しく把握できなかつた。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

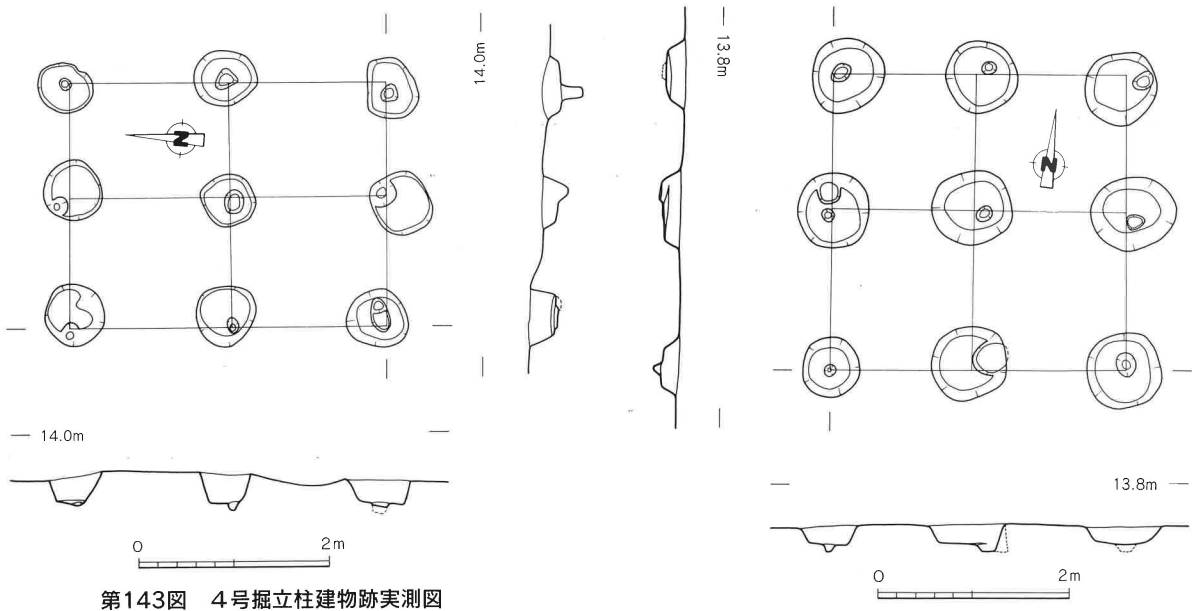
4号掘立柱建物跡

遺構は調査区の北側に位置する2間×2間の建物である。平面プランは長方形で桁行は全て3.31m、梁行は最大2.65m、最小2.45mである。桁行柱間寸法は最大1.85m、最小1.61m、梁行柱間寸法は最大1.35m、最小1.12mである。柱穴掘り方は最大で長軸70cm、短軸65cm、最大深28cm、最小で長軸58cm、短軸54cm、最大深25cmである。4号掘立柱建物は1号溝、10号住居、11号住居、12号住居と切り合い関係にあり遺構検出面

の観察より、各遺構から4号掘立柱建物へのそれぞれの新旧関係を確認した。遺構内より時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第142図 3号掘立柱建物跡実測図

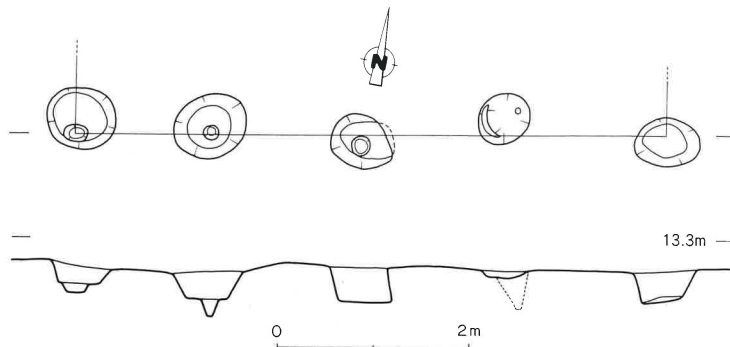


第143図 4号掘立柱建物跡実測図

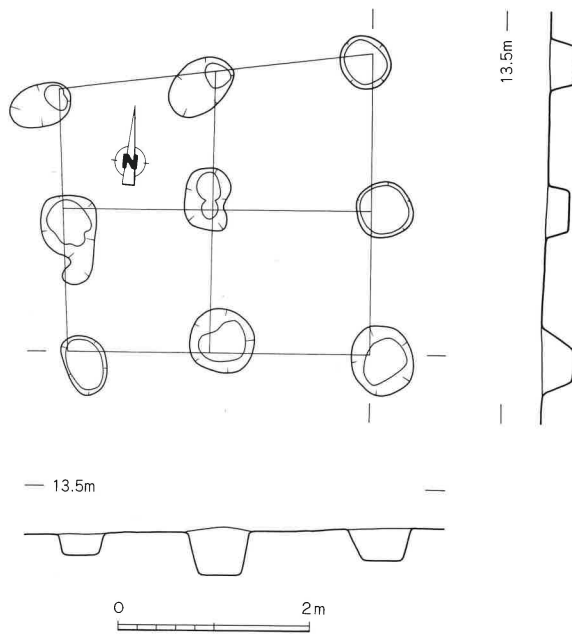
第144図 5号掘立柱建物跡実測図

5号掘立柱建物跡

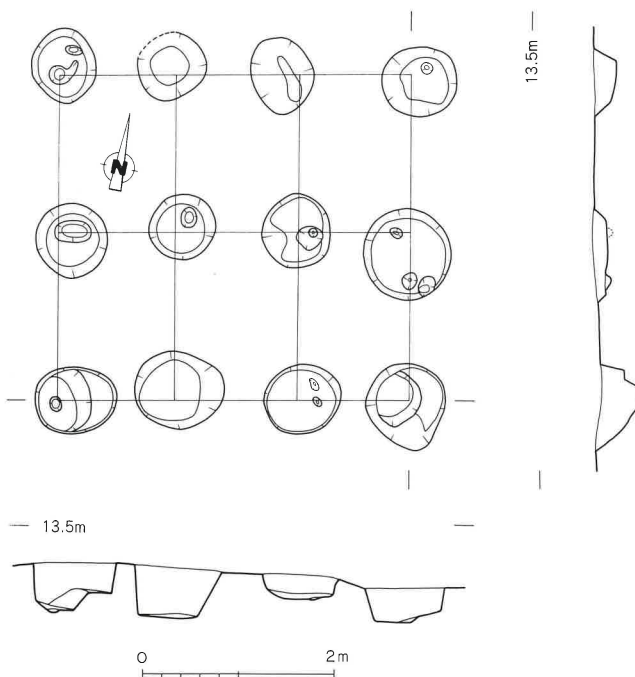
遺構は調査区の北側に位置する2間×2間の建物である。平面プランはほぼ正方形で桁行は全て3.20m、梁行も全て最大3.14mである。桁行柱間寸法は全て1.60m、梁行柱間寸法も全て1.57mで、整然とした形態をとる。柱穴掘り方は最大で長軸88cm、短軸77cm、最大深25cm、最小で直径60cm、最大深25cmである。5号掘立柱建物は5号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より5号溝から5号掘立柱建物への新旧関係を確認した。遺構内より時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第145図 6号掘立柱建物跡実測図



第146図 7号掘立柱建物跡実測図



第147図 8号掘立柱建物跡実測図

6号掘立柱建物跡

遺構は調査区の北側に位置するが、削平が著しいため建物南側と推定される部分を確認するに止まった。確認された建物はほぼ東西にのびる4間の柱穴列で、柱穴の規模、構造、埋土、周辺掘立柱建物跡と軸方向を同じにすることから建物跡とした。残存する桁行は6.22m、柱間寸法は最大1.55m、最小1.45mである。柱穴掘り方は最大で長軸80cm、短軸67cm、最大深48cm、最小で長軸57cm、短軸50cm、最大深39cmである。6号掘立柱建物は5号溝と切り合い関係にあるが削平が著しいため前後関係を把握できない。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

7号掘立柱建物跡

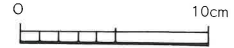
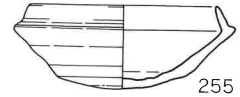
遺構は調査区の北側に位置する2間×2間の建物である。平面プランは台形状で桁行は最大3.27m、最小3.17m、梁行は最大3.11m、最小2.75mである。桁行柱間寸法は最大1.67m、最小1.43m、梁行柱間寸法は最大1.65m、最小1.23mである。柱穴掘り方は最大で長軸93cm、短軸61cm、最大深33cm、最小で長軸67cm、短軸43cm、最大深23cmである。7号掘立柱建物は13号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から13号住居から7号掘立柱建物への新旧関係を確認した。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

8号掘立柱建物跡

遺構は調査区の中央部に位置する2間×3間の建物である。平面プランは長方形で桁行は全て3.75m、梁行も全て3.45mである。桁行柱間寸法は最大で1.27m、最小で1.18m、梁行柱間寸法は最大1.77m、最小1.65mである。柱穴掘り方は最大で直径95cm、最大深18cm、最小で直径68cm、最大深27cmである。8号掘立柱建物は27号住居及び28号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から両住居から8号掘立柱建物への新旧関係を確認した。

8号掘立柱建物跡出土遺物

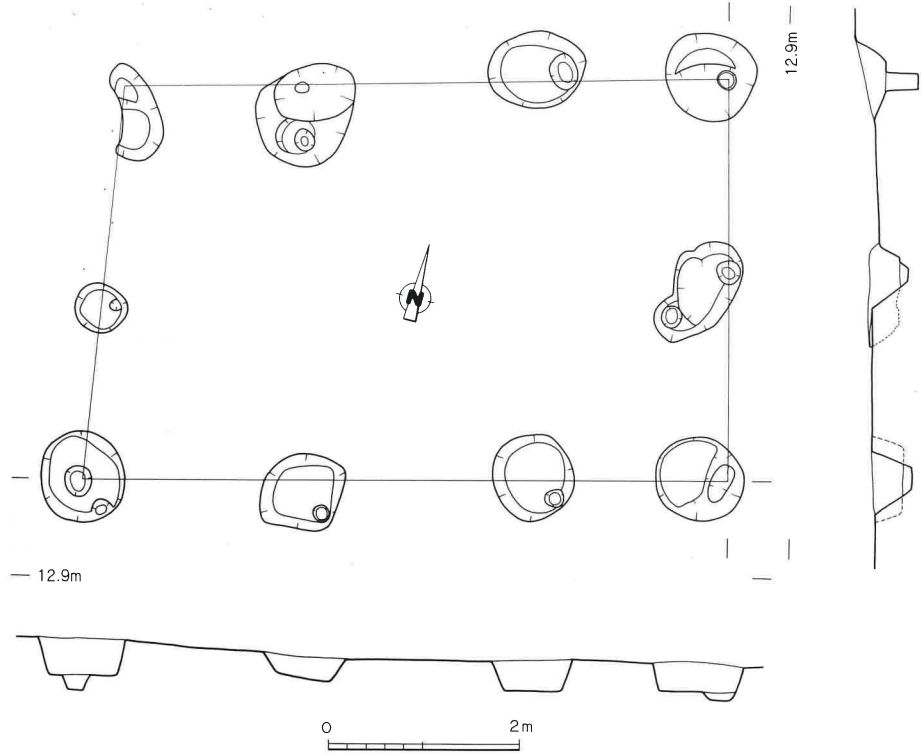
255は柱穴の底面より出土した須恵器坏身である。遺物の胎土には灰色砂粒が含まれる。調整は外面底部に回転ヘラ切り、内面底部に粗い指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒灰褐色である。口径は11.1cm、器高は4.4cmである。255は7世紀前半を中心とする時期と考えたい。



第148図 8号掘立柱建物跡出土遺物実測図

9号掘立柱建物跡

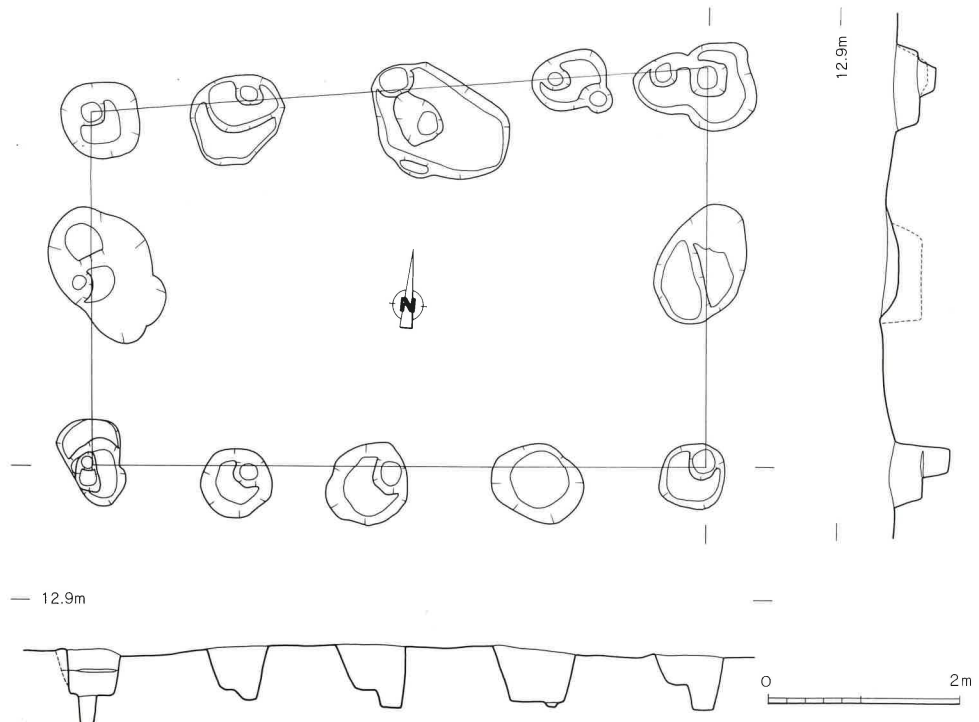
遺構は調査区の南側に位置する2間×3間の建物である。平面プランは台形状で桁行は6.81mと6.35m、梁行は4.17mと4.15mである。桁行柱間寸法は最大で2.75m、最小で1.87m、梁行柱間寸法は最大2.33m、最小1.95mである。柱穴掘り方は最大で長軸1.16m、短軸97cm、最大深68cm、最小で長軸55cm、短軸48cm、最大深27cmである。9号掘立柱建物は1号溝、38号住居、39号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より1号溝から9号掘立柱建物の新旧関係を確認したが、他の遺構との前後関係は把握できない。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第149図 9号掘立柱建物跡実測図

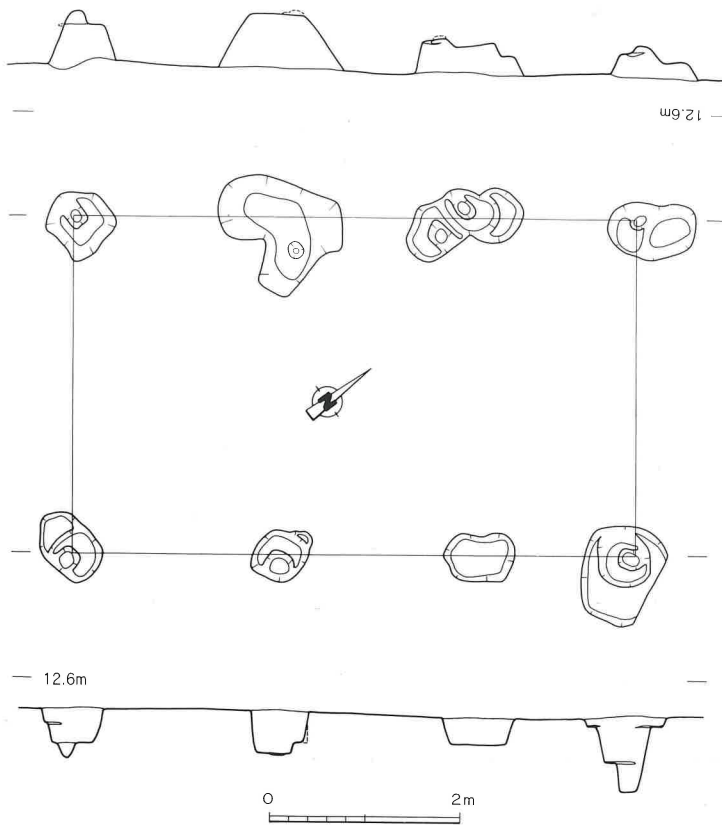
10号掘立柱建物跡

遺構は調査区の中央部南側に位置する2間×4間の建物である。平面プランは台形状で桁行6.47m、梁行4.01mと3.65mである。桁行柱間寸法は最大1.75m、最小1.65m、

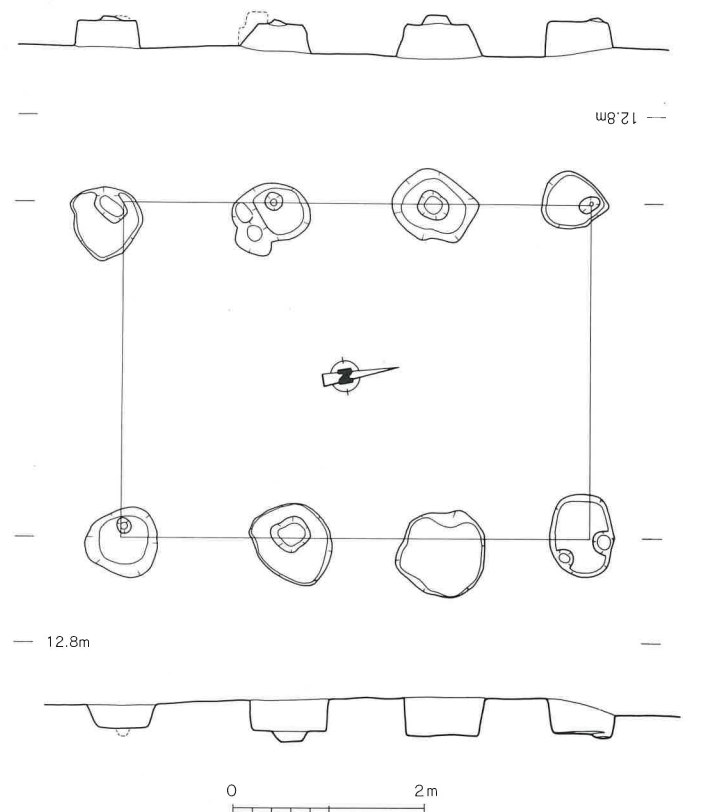


第150図 10号掘立柱建物跡実測図

梁行柱間寸法は最大1.92m、最小1.81mである。柱穴掘り方は最大で長軸1.57m、短軸1.07m、最大深77cm、最小で長軸75cm、短軸71cm、最大深55cmである。10号掘立柱建物は12号溝と切り合い関係にあるが前後関係を把握できなかった。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第151図 11号掘立柱建物跡実測図



第152図 12号掘立柱建物跡実測図

11号掘立柱建物跡

遺構は調査区の中央部南側に位置する1間×3間の建物である。平面プランは長方形で桁行は5.87m、梁行は3.53mである。桁行柱間寸法は最大2.31m、最小1.65m、梁行柱間寸法はともに3.52mである。柱穴掘り方は最大で1.23m×1.15m、最大深60cm、最小で長軸63cm、短軸52cm、最大深47cmである。11号掘立柱建物は34号住居と切り合い関係にあるが、削平が著しいため前後関係を把握できない。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

12号掘立柱建物跡

遺構は調査区の中央部南側に位置する1間×3間の建物である。平面プランは長方形で桁行はともに4.95m、梁行もともに3.45mである。桁行柱間寸法は全て1.73m、梁行柱間寸法は最大3.51m、最小3.41mである。柱穴掘り方は最大で長軸97cm、短軸88cm、最大深40cm、最小で長軸70cm、短軸60cm、最大深36cmである。12号掘立柱建物は35号住居と切り合い関係にあるが、削平が著しいため前後関係を把握できない。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

13号掘立柱建物跡

遺構は調査区の南側に位置する3間×3間の建物である。平面プランは長方形で桁行は全て4.47m、梁行も全て最大4.07mである。桁行柱間寸法は最大1.65m、最小1.35m、梁行柱間寸法は最大1.51m、最小1.35mである。柱穴掘り方は最大で長軸1.05m、短軸67cm、最大深1.31m、最小で長軸62cm、短軸56cm、最大深57cmである。13号掘立柱建物は1号溝、39号住居、40号住居と切り合い関係にあるが、削平が著しいため前後関係を把握できない。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

14号掘立柱建物跡

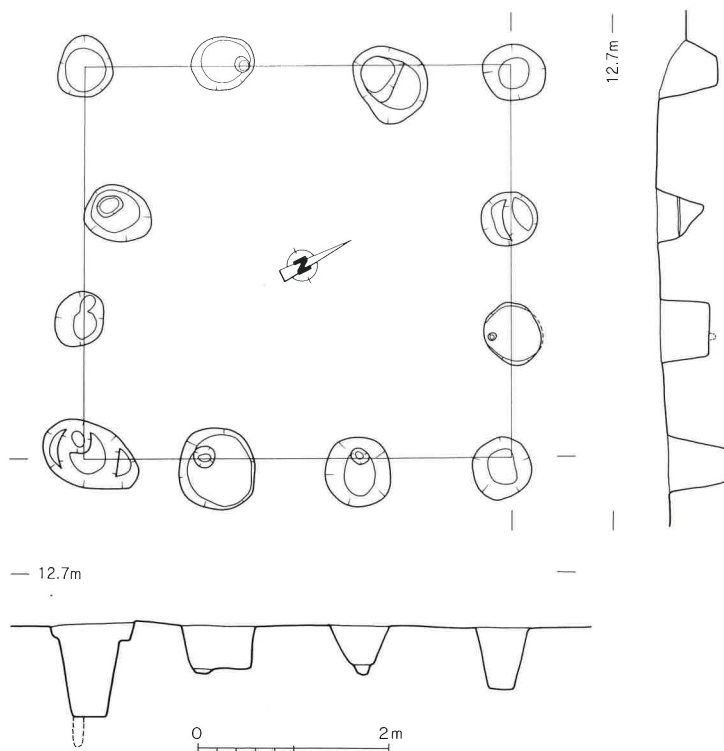
遺構は調査区の南西端に位置するもので、建物の西側部分は区外に展開するものと推定される。平面プランは長方形で2間×3間以上の建物と想定される。確認できる規模は桁行4.45m、梁行3.32mである。桁行柱間寸法は2.05m、梁行柱間寸法は1.65mである。柱穴掘り方は最大で1.37m×1.32m、最大深52cm、最小で長軸93cm、短軸63cm、最大深27cmである。14号掘立柱建物は2号溝と切り合い関係にあるが削平が著しいため前後関係を把握できない。遺構内からは土器の細片を出土したが時期を特定するには至らなかった。

15号掘立柱建物跡

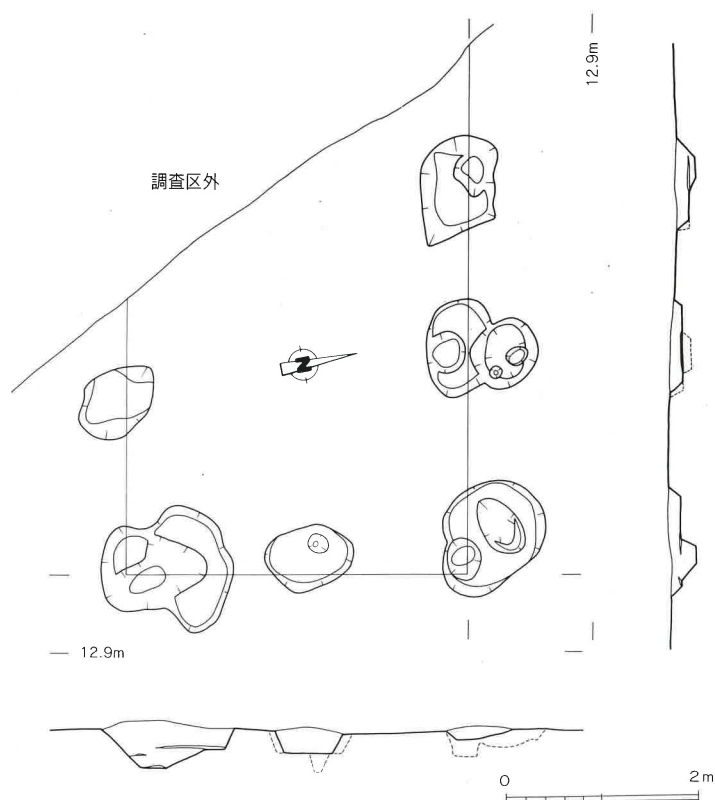
遺構は調査区の南側に位置する2間×3間の建物である。平面プランは台形状で桁行は最大5.62m、最小5.25m、梁行は最大3.91m、最小3.85mである。桁行柱間寸法は最大1.85m、最小1.62m、梁行柱間寸法は最大2.05m、最小1.85mである。柱穴掘り方は最大で長軸1.19m、短軸89cm、最大深50cm、最小で長軸65cm、短軸47cm、最大深35cmである。15号掘立柱建物は44号住居及び3号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から3号溝→44号住居→15号掘立柱建物への新旧関係を確認した。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。

16号掘立柱建物跡

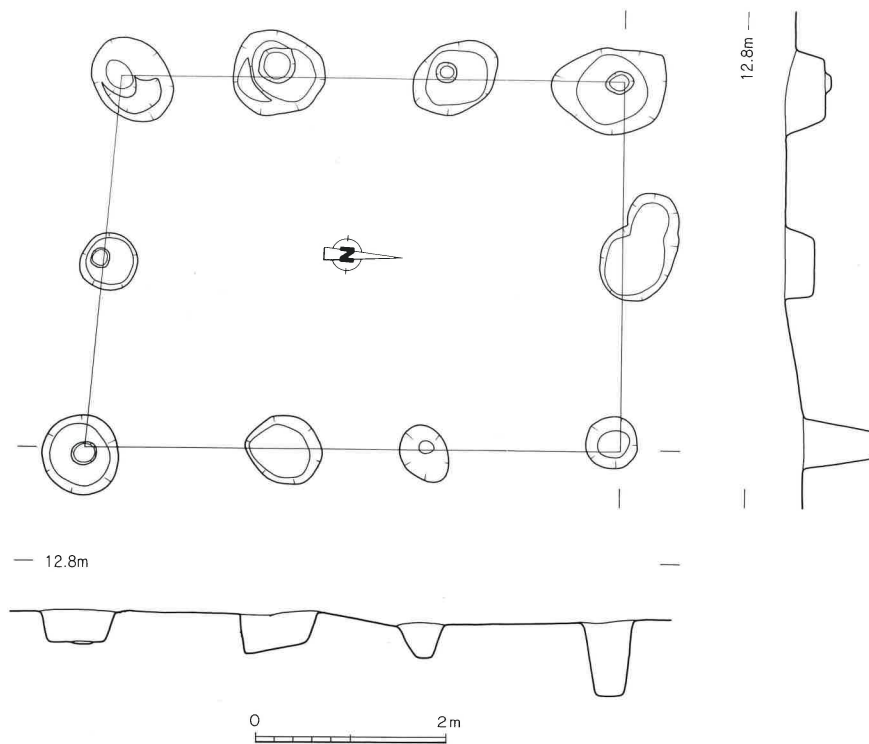
遺構は調査区の南東端に位置するが、北東隅の柱穴は8号溝により削平されていた。想定される規模は1間×2間である。平面プランはほぼ正方形で、確認できる桁行は3.08m、梁行2.92mである。桁行柱間寸法は1.48m、梁行柱間寸法は2.92mである。柱穴掘り方は最大で長軸1.08m、短軸75cm、最大深35cm、最小で長軸63cm、短軸55cm、最大深50cmである。16号掘立柱建物は55号住居及び8号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から55号住居→16号掘立柱建物→8号溝への新旧関係を確認した。遺構内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。



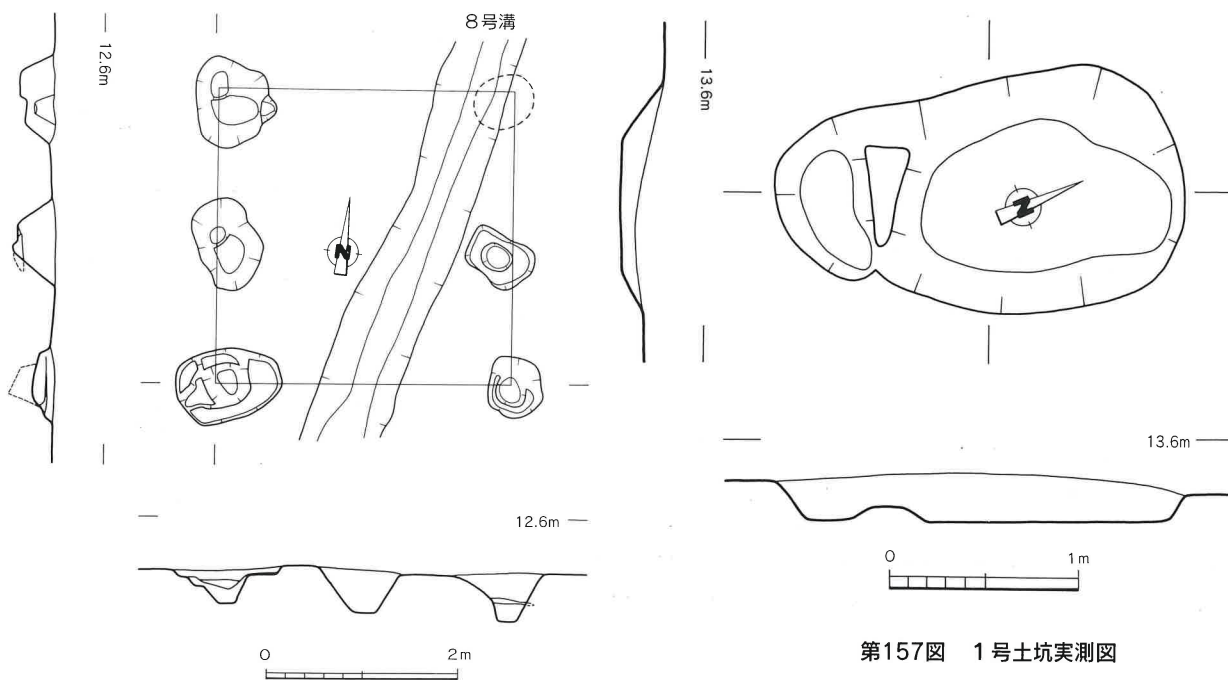
第153図 13号掘立柱建物跡実測図



第154図 14号掘立柱建物跡実測図



第155図 15号掘立柱建物跡実測図



第157図 1号土坑実測図

第156図 16号掘立柱建物跡実測図

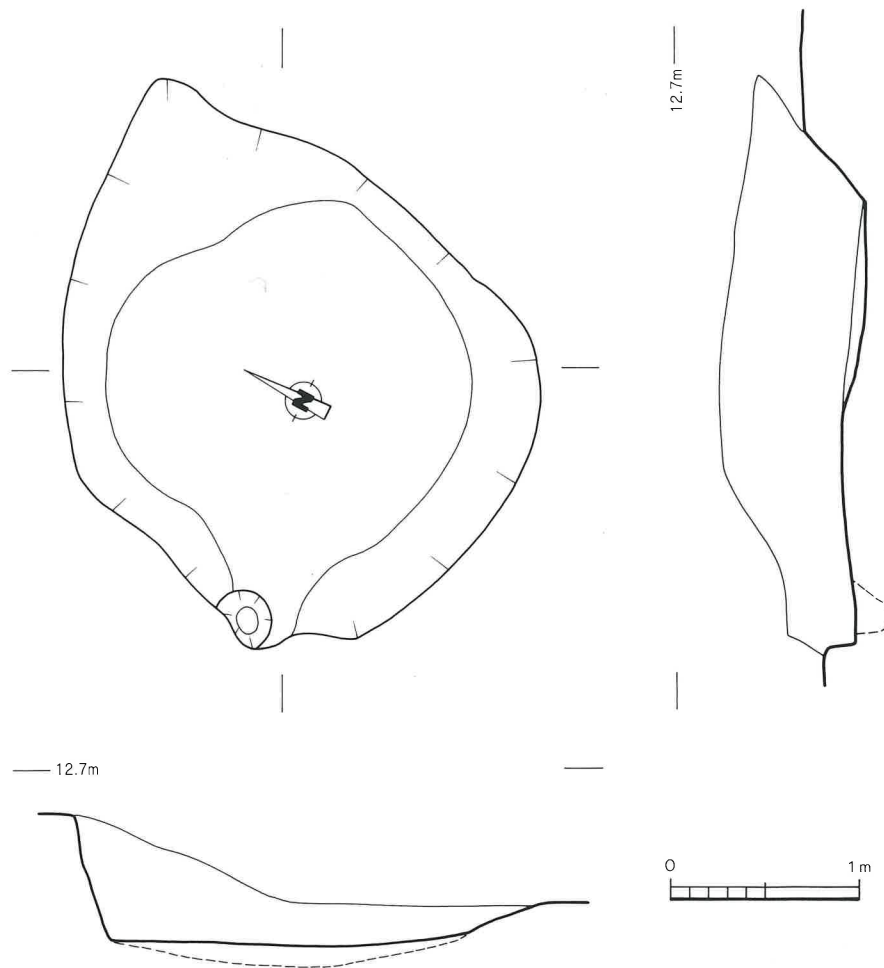
c. 土坑

1号土坑

遺構は調査区の北側、6号住居の西隣に位置する。平面プランは歪んだ楕円形で、規模は長軸2.16m、短軸1.24m、最大深27cmである。遺構の立ち上がりは明瞭で底部は平坦であるが、南側に最大高8cmの高まりを持つ。遺物は出土していない。

2号土坑

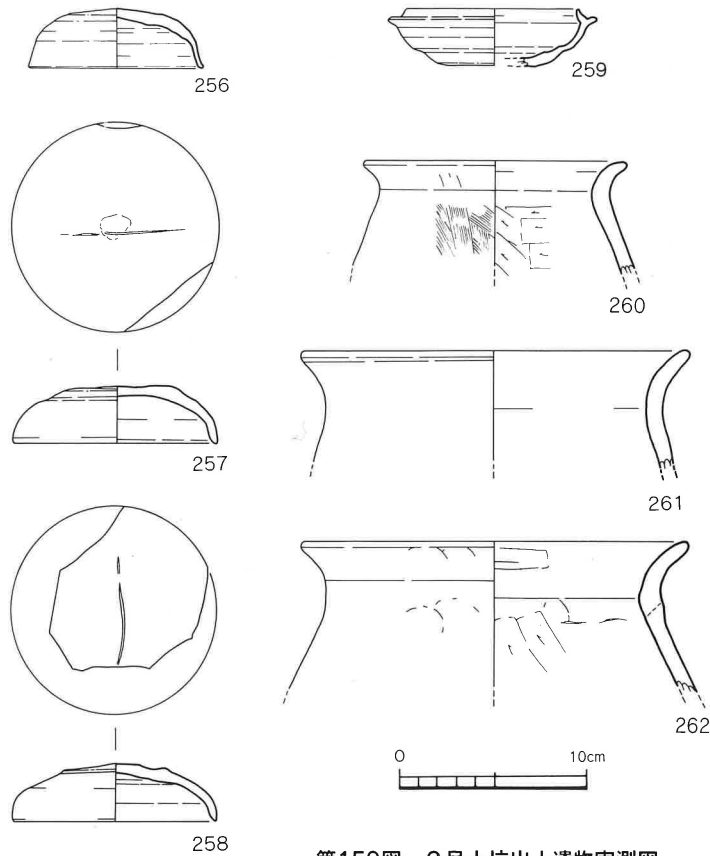
遺構は調査区の北側に位置する。平面プランは不定形で、規模は3.16m×3.77m、最大深98cm、立ち上がりは明瞭で底部は平坦である。2号土坑は9号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から9号住居から2号土坑への前後関係が確認された。



第158図 2号土坑実測図

2号土坑出土遺物

256～258は須恵器坏蓋、259は須恵器坏身、260～262は土師器甕である。256の胎土には長石と黒色砂粒が含まれ調整は外面天井部が回転ヘラ削り、内面天井部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。口径は8.5cm、器高は3.1cmである。257の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面天井部が回転ヘラ切り、内面天井部が指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。遺物外面にはヘラ記号を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は10.9cm、器高は3.0cmである。258の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ調整は外面天井部が回転ヘラ切り、内面天井部に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。遺物外面にはヘラ記号を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰茶褐色である。口径は10.8cm、器高は3.1cmである。259の胎土には白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は底部内面に指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。口径は9.1cm、器高は3.0cmである。260の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはヘラ削りと不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。口径は13.9cmである。261の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ外面の調整は



第159図 2号土坑出土遺物実測図

口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを残す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはへら削りと不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。口径は20.5cmである。262の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部は指圧痕と不定方向ナデが残る。内面の調整は口縁部がへら削りと横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びへら削り、指圧痕、不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が明黄褐色、内面が暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。口径は20.5cmである。256～262は7世紀前半を中心とした時期と考えたい。

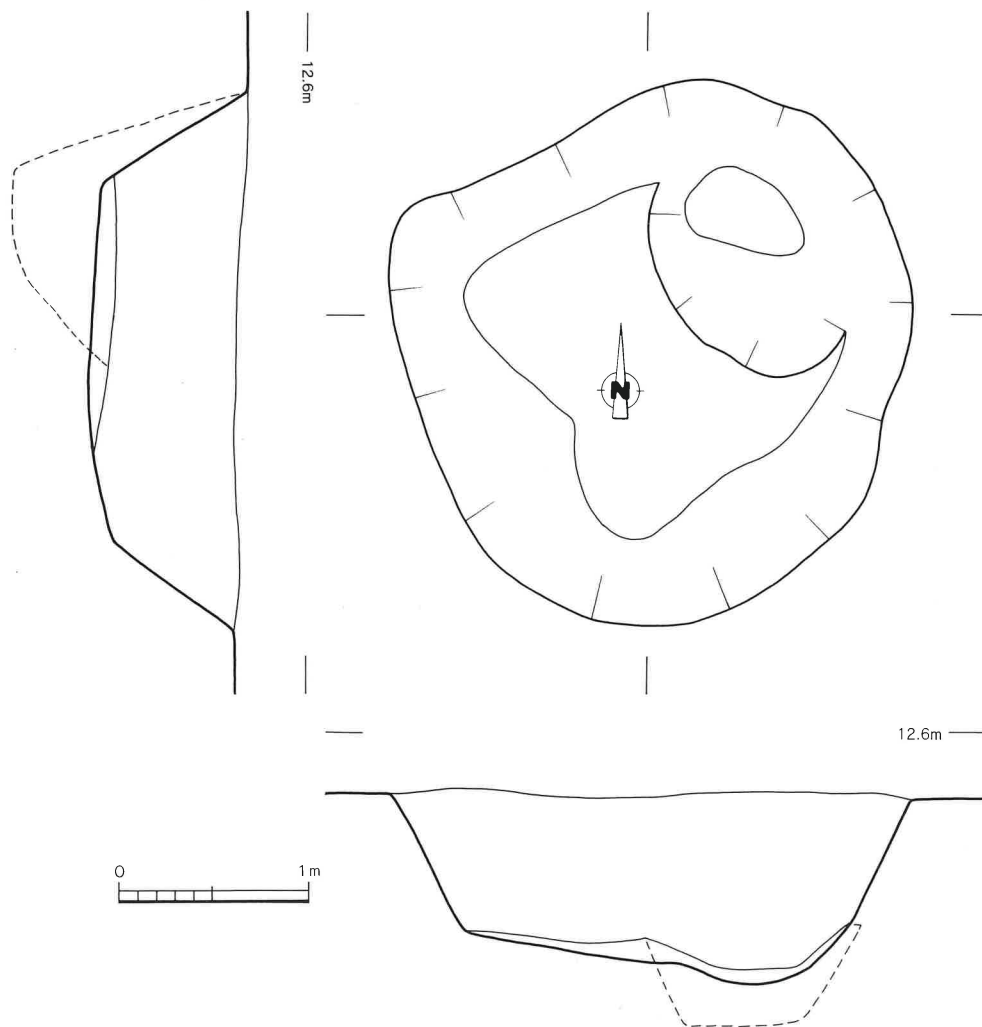
3号土坑

遺構は調査区の北側、2号土坑の西側に隣接する。平面プランは不定形で二段掘りになっている。規模は長軸3.88m、短軸3.84m、最大深1.25m、立ち上がりは明瞭で底部は平坦である。3号土坑は9号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から9号住居から3号土坑への前後関係を確認した。

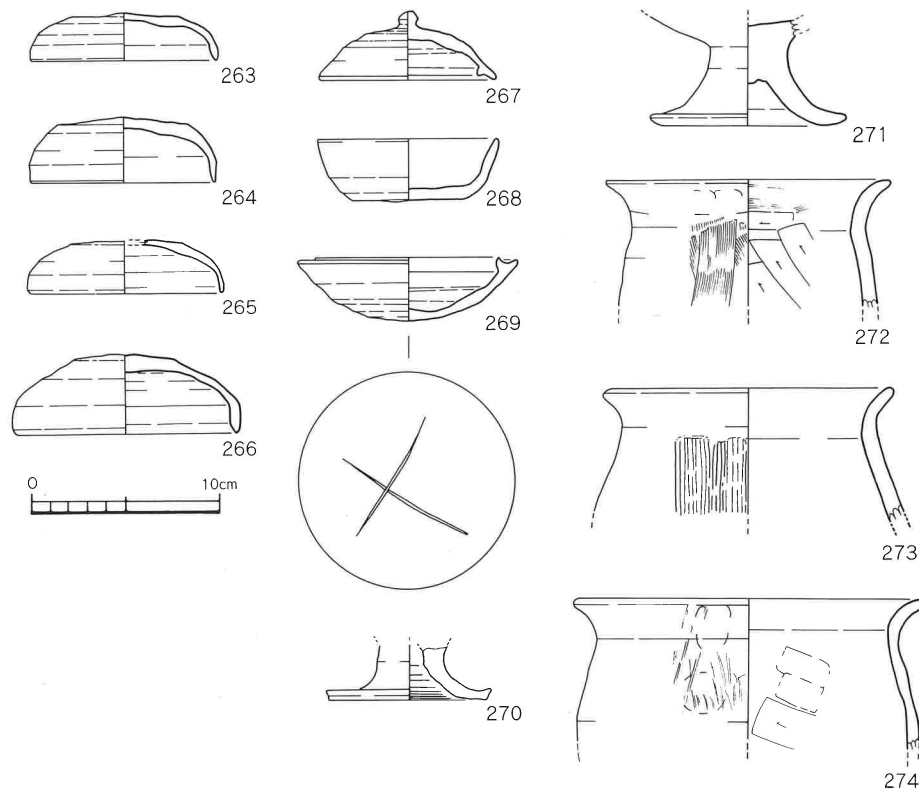
3号土坑出土遺物

263～267は須恵器坏蓋、268・269は須恵器坏身、270は須恵器高坏、271は土師器高坏、272～274は土師器甕である。263の胎土には白色砂粒と黒色砂粒が含まれ調整は外面天井部に回転へら切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径は9.3cm、器高は2.6cmである。264の胎土には白色砂粒と黒色砂粒が含まれ調整は外面天井部が回転へら切り、内面天井部が指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径は9.5cm、器高は3.5cmである。265の胎土には長石と白色砂粒が含まれ調整は外面天井部に回転へら切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡青灰色である。口径は9.9cm、器高は2.8cmである。266の胎土には長石、石英、白色砂粒が含まれ調整は外面天井部が回転へら切り、内面天井部が指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰色である。口径は11.5cm、器高は4.2cmである。267の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面天井部付近に回転へら削り、内面天井部に不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰色である。口径は7.7cm、器高は3.6cmである。268の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部が回転へら切り、内面底部が指ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰褐色である。口径は9.6cm、器高は3.3cmである。269の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部に回転へら切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。遺物外面にはへら記号を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径は9.6cm、器高は3.4cmである。270の胎土には角閃石と白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。底径は8.6cmである。271の胎土には長石、石英、茶色砂粒

が含まれ坏部の調整は不定方向ナデ、脚部は横ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。底径は10.2cmである。272の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下には指圧痕とハケ目を残す。内面の調整は口縁部がハケ目と指圧痕、頸部以下はヘラ削りと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が黄橙色、内面は暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.1cmである。273の胎土には角閃石、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはハケ目を施す。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。口径は15.5cmである。274の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が指圧痕、ハケ目、横ナデ、頸部以下には指圧痕とハケ目を残す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はヘラ削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面は赤褐色、内面は暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.6cmである。263～274は7世紀中頃を中心とした時期と考えたい。



第160図 3号土坑実測図



第161図 3号土坑出土遺物実測図

4号土坑

遺構は調査区の北側、3号土坑の東側に位置する。平面プランは歪な楕円形で、規模は長軸1.13m、短軸1.05m、最大深47cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は僅かに窪んでいる。遺構内から遺物は出土しなかった。

5号土坑

遺構は調査区の北側に位置するが、6号土坑、7号土坑と切り合い関係にあるため部分的に遺構を捕捉できなかった。平面プランは楕円形と推定され、二段掘りを施していた。確認できる規模は長軸1.55m、短軸93cm、最大深25cmである。二段目掘り方の平面プランは円形で、規模は直径48cm、最大深18cmである。土坑の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。5号土坑は6号土坑及び7号土坑と切り合い関係にあるが、新旧関係を把握できなかった。遺構内から遺物は出土していない。

6号土坑

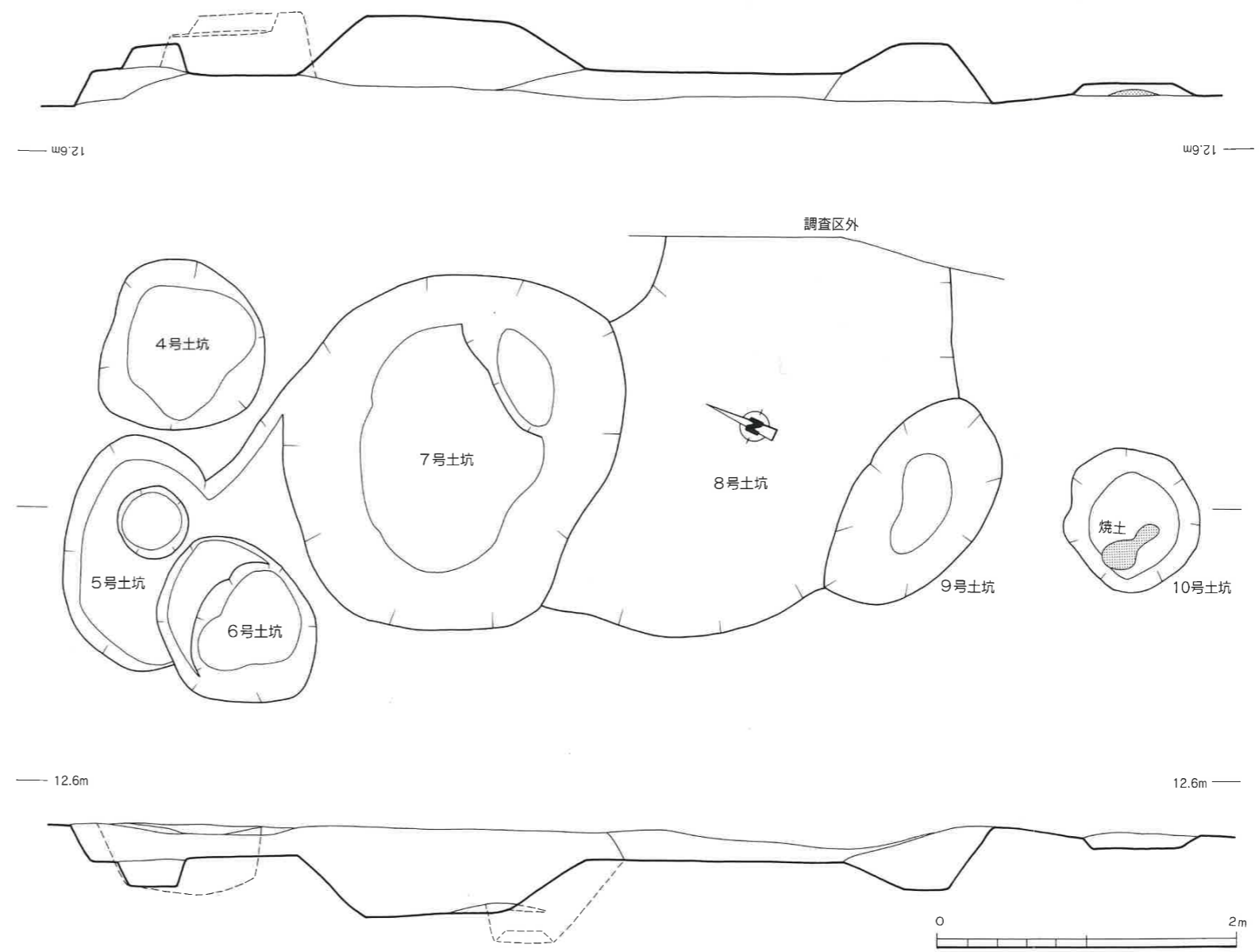
遺構は調査区の北側に位置するもので、掘り方は二段掘りである。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.21m、短軸1.01m、最大深41cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。6号土坑は5号土坑及び7号土坑と切り合い関係にあるが、新旧関係を把握できなかった。遺構内から遺物は出土していない。

7号土坑

遺構は調査区の北側に位置するもので、掘り方は二段掘りである。平面プランは歪んだ楕円形で、規模は長軸2.58m、短軸2.14m、最大深80cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。7号土坑は5号土坑、6号土坑、8号土坑と切り合い関係にあるが、5号土坑と6号土坑については新旧関係不明、8号土坑は7号土坑により削平される前後関係をそれぞれ確認した。遺構内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。

8号土坑

遺構は調査区の北側に位置するもので、東側は調査区外に展開するものと推定される。平面プランは不定形と推定され、確認できる規模は2.58m×2.38m、最大深9cmである。土坑の立ち上がりは不明瞭で、底部は丸みを持つ。8号土坑は7号土坑及び9号土坑と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から8号土坑から7号土坑、8号土坑から9号土坑への新旧関係をそれぞれ確認した。遺構内からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第162图 4号~10号土坑实测图

9号土坑

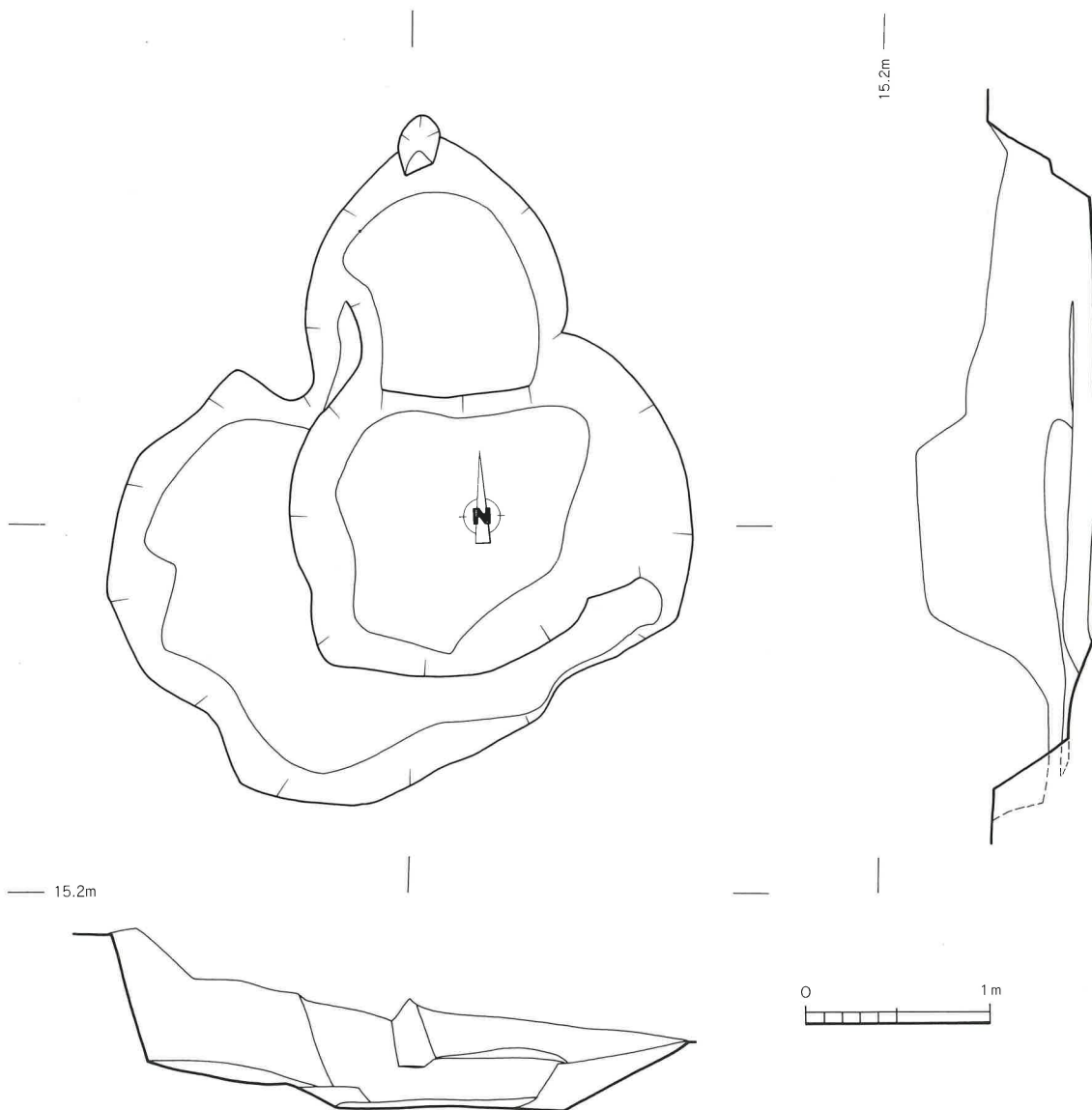
遺構は調査区の北側に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.54m、短軸85cm、最大深41cmである。土坑の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。9号土坑は8号土坑と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から8号土坑から9号土坑への新旧関係を確認した。遺構内から遺物は出土しなかった。

10号土坑

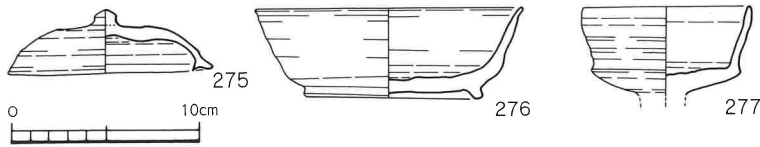
遺構は調査区の北側に位置する。平面プランは歪な円形で、規模は長軸95cm、短軸87cm、最大深9cmである。土坑内には熱変赤色硬化した焼土盤を有する。遺構掘り方の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。遺構内から遺物は出土していない。

11号土坑

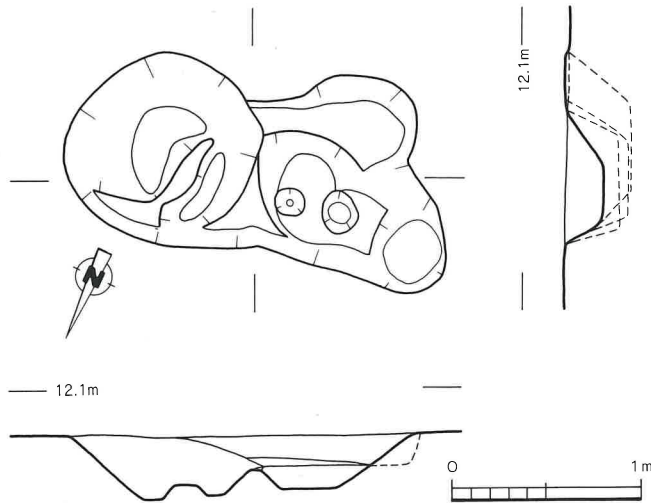
遺構は調査区の中央部西端に位置するもので、16号住居と21号住居に隣接している。平面プランは不定形で、二段掘りになっている。規模は3.82m×3.17m、最大深98cmである。土坑の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。



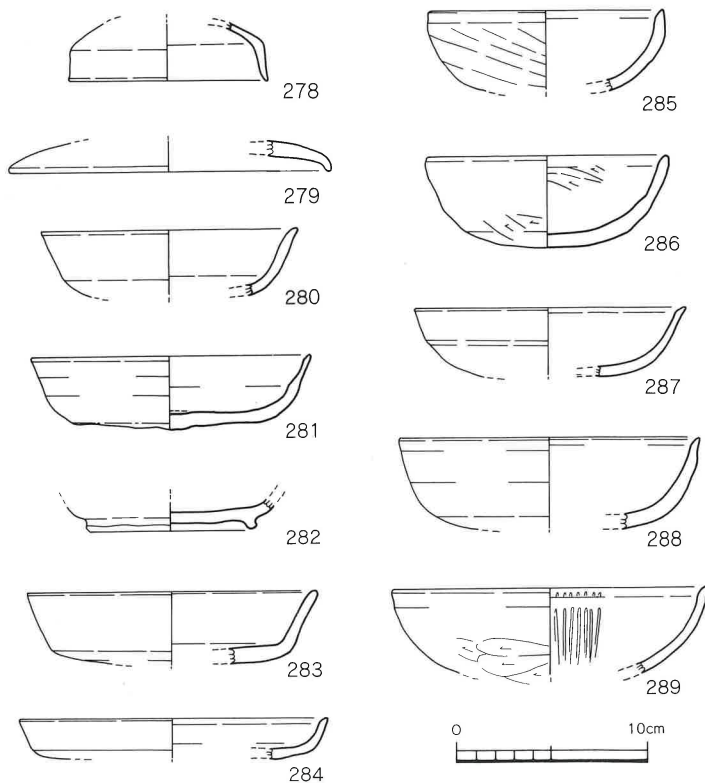
第163図 11号土坑実測図



第164図 11号土坑出土遺物実測図



第165図 12号土坑実測図



第166図 12号土坑出土遺物実測図

11号土坑出土遺物

275は須恵器坏蓋、276は須恵器坏身、277は須恵器高坏である。275の胎土には白色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒褐色である。口径は8.6cm、器高は3.3cmである。276の胎土には石英と白色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色である。口径は13.8cm、器高は4.7cmである。277の胎土には石英と白色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒褐色である。口径は8.6cmである。275~277は7世紀後半を中心とした時期と考えたい。

12号土坑

遺構は調査区の南側に位置するもので、41号住居埋土に掘り込まれていた。平面プランは不定形で、規模は2.11m×1.02m、最大深34cmを測る。土坑の立ち上がりは明瞭であるが、底部は複雑に掘り込まれている。12号土坑は41号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から41号住居から12号土坑への新旧関係を確認した。

12号土坑出土遺物

278は須恵器埴蓋、279は須恵器坏蓋、280~282須恵器坏身、283・284は土師器坏身、285~289は土師器碗である。278の胎土には白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径

は10.1cmである。279の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は16.9cmである。280の胎土には白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径は13.2cmである。281の胎土には石英と茶色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は14.8cmである。282の胎土には白色砂粒が含まれ外面の調整は回転

ナデ、内面は不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。底径は8.8cmである。283の胎土には石英、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は15.3cmである。284の胎土には石英、長石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は16.2cmである。285の胎土には茶色砂粒と角閃石が含まれ調整は内面と外面口縁部に横ナデを施すほかは、ヘラナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙褐色である。口径は15.8cmである。286の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下にはヘラ削りと不定方向ナデが残される。内面の調整はヘラ削りと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。口径は12.6cm、器高は4.7cmである。287の胎土には石英、長石、茶色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙褐色である。口径は14.4cmである。288の胎土には長石、石英、茶色砂粒、赤色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が橙褐色、内面が茶褐色である。口径は15.8cmである。289の胎土には茶色砂粒と白色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下にはヘラ削りを残す。内面の調整は口縁部がナデと磨き、口縁部以下には上下方向に磨きを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙褐色である。口径は16.8cmである。278～289は7世紀末～8世紀代を中心とする時期と考えたい。

13号土坑

遺構は調査区の南側に位置するもので、42号住居埋土のなかに二段掘りで掘削されていた。平面プランは不定形で、規模は2.25m×1.47m、最大深62cmである。土坑の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。13号土坑は42号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から42号住居から13号土坑への新旧関係を確認した。

14号土坑

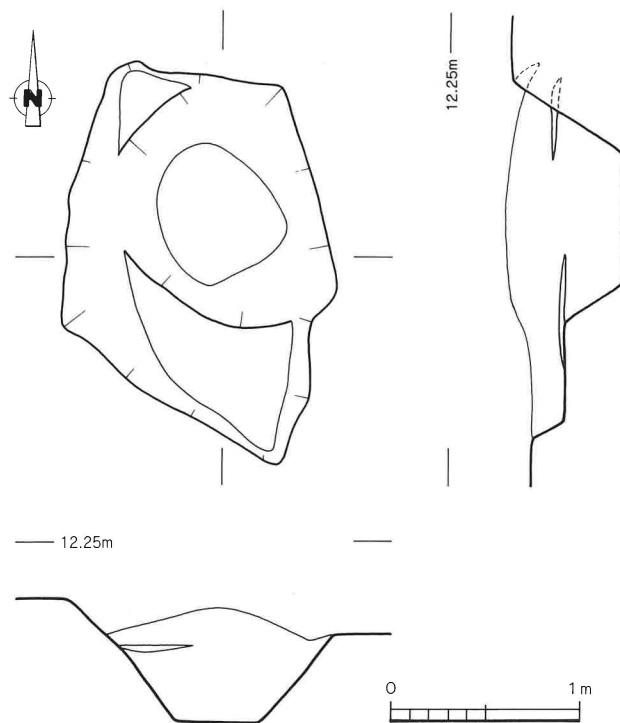
遺構は調査区の南側に位置する。平面プランは不定形で、規模は1.85m×1.29m、最大深15cmである。土坑内には円形の掘り方を確認しており、直径41cm、最大深26cmである。遺構の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。14号土坑は54号住居と切り合い関係にあるが、削平が著しいため新旧関係を把握できなかった。遺物は出土していない。

15号土坑

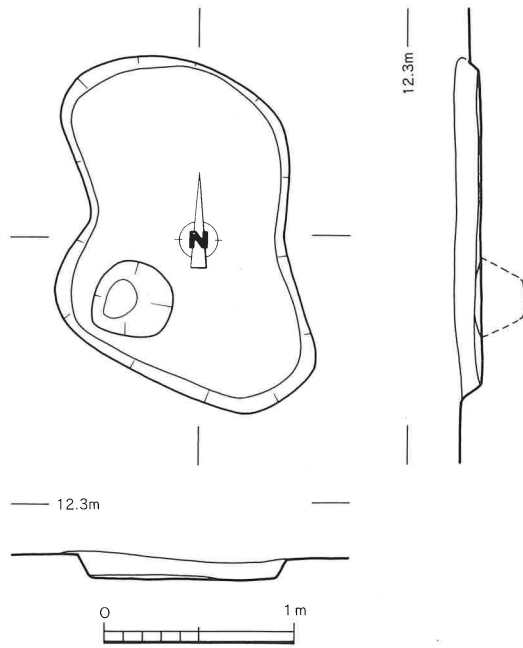
遺構は調査区の南側、54号住居、3号溝、4号溝の間に位置する。平面プランは不定形で、規模は2.65m×2.08m、最大深12cmである。土坑の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。遺物は出土していない。

16号土坑

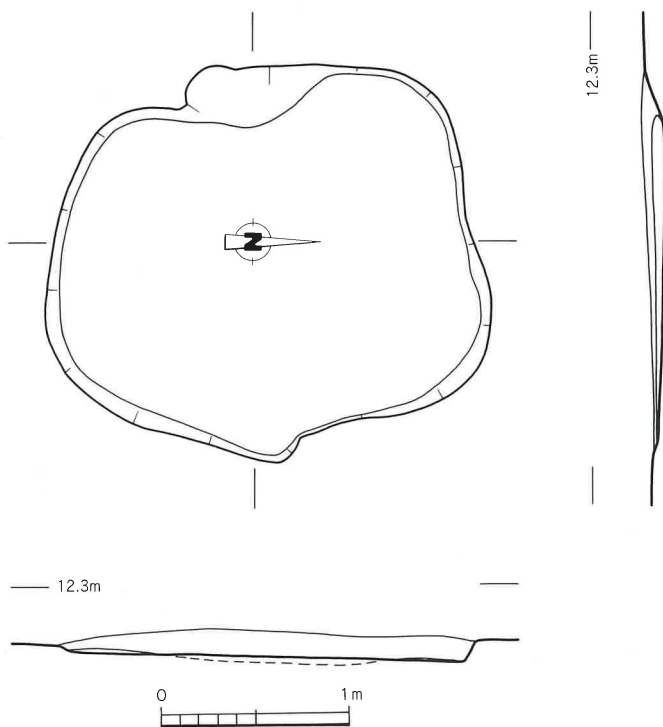
遺構は調査区の南側、57号住居の東側に位置するもので、東側の壁面は一部削平されている。平面プランは不定形と推定され、確認できる規模は1.98m×1.65m、最大深25cmである。土坑の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。遺構内からは円形の掘り方を2基確認している。



第167図 13号土坑実測図



第168図 14号土坑実測図



第169図 15号土坑実測図

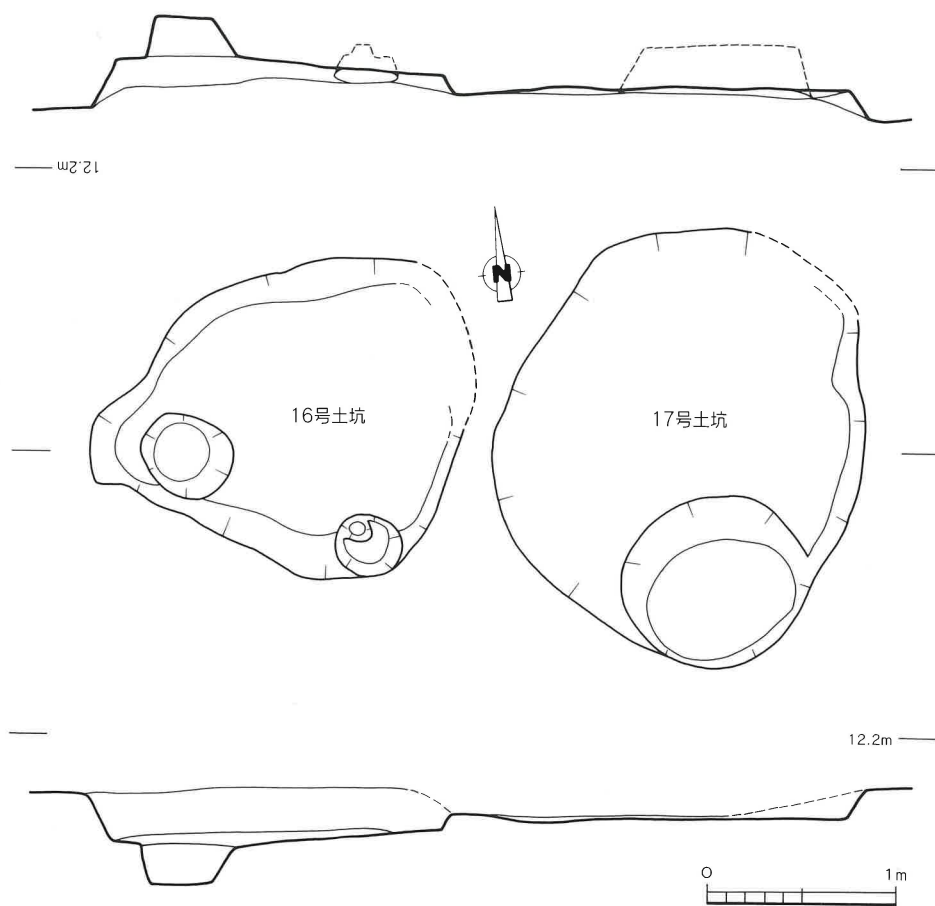
17号土坑

遺構は調査区の南側に位置する。4号溝に隣接しており、掘り方は二段掘りである。平面プランは楕円形で、規模は長軸2.23m、短軸1.91m、最大深15cmである。土坑の立ち上がりは明瞭で、底部は平坦である。遺構内からは楕円形の掘り方を確認しており長軸97cm、短軸92cm、最大深23cmである。17号土坑は4号溝と切り合い関係にあるが、各遺構とも削平が著しいため新旧関係を把握できなかった。

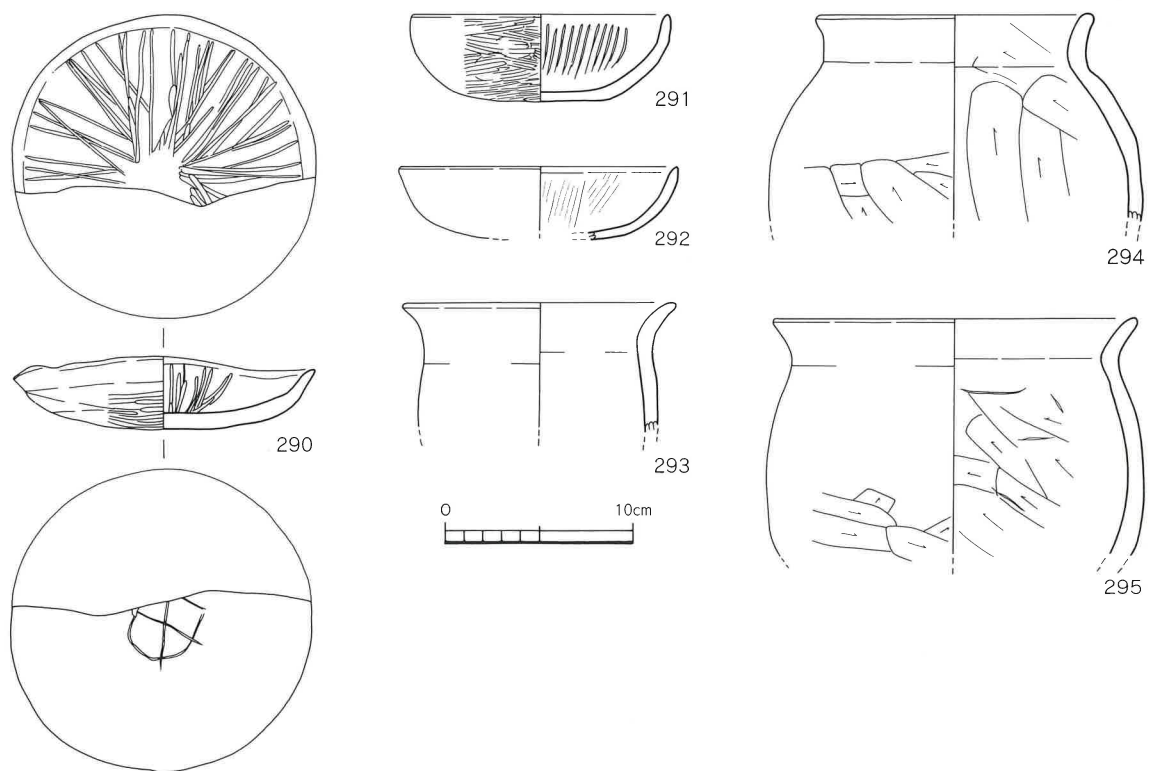
17号土坑出土遺物

290～292は土師器壺、293～295は土師器甕である。290の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面の調整は横ナデとヘラ削り後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きである。遺物外面にはヘラ記号を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。口径は16.0cm、器高は3.8cmである。291の胎土には石英、長石、赤色砂粒が含まれる。外面の調整は指圧痕とヘラ磨き、内面は不定方向ナデとヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙褐色である。口径は13.8cm、器高は4.7cmである。292の胎土には石英、長石、茶色砂粒が含まれる。外面の調整は不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデ、口縁部以下にはハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。口径は14.8cmである。293の胎土には石英、長石、赤色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。口径は14.4cmである。294の胎土には石英、長石、茶色砂粒が含まれる。外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は

上半分が不定方向ナデ、下半分がヘラ削りを残す。内面は口縁部が横ナデとヘラ削り、頸部以下にはヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。口径は14.6cm、胴部最大径は19.8cmである。295の胎土には長石、石英、赤色砂粒が含まれる。外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は上半分が不定方向ナデ、下半分がヘラ削りを残す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びヘラ削りを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙褐色である。口径は19.6cm、胴部最大径は20.1cmである。290～295は7世紀後半から8世紀初頭と考えたい。



第170图 16号·17号土坑实测图

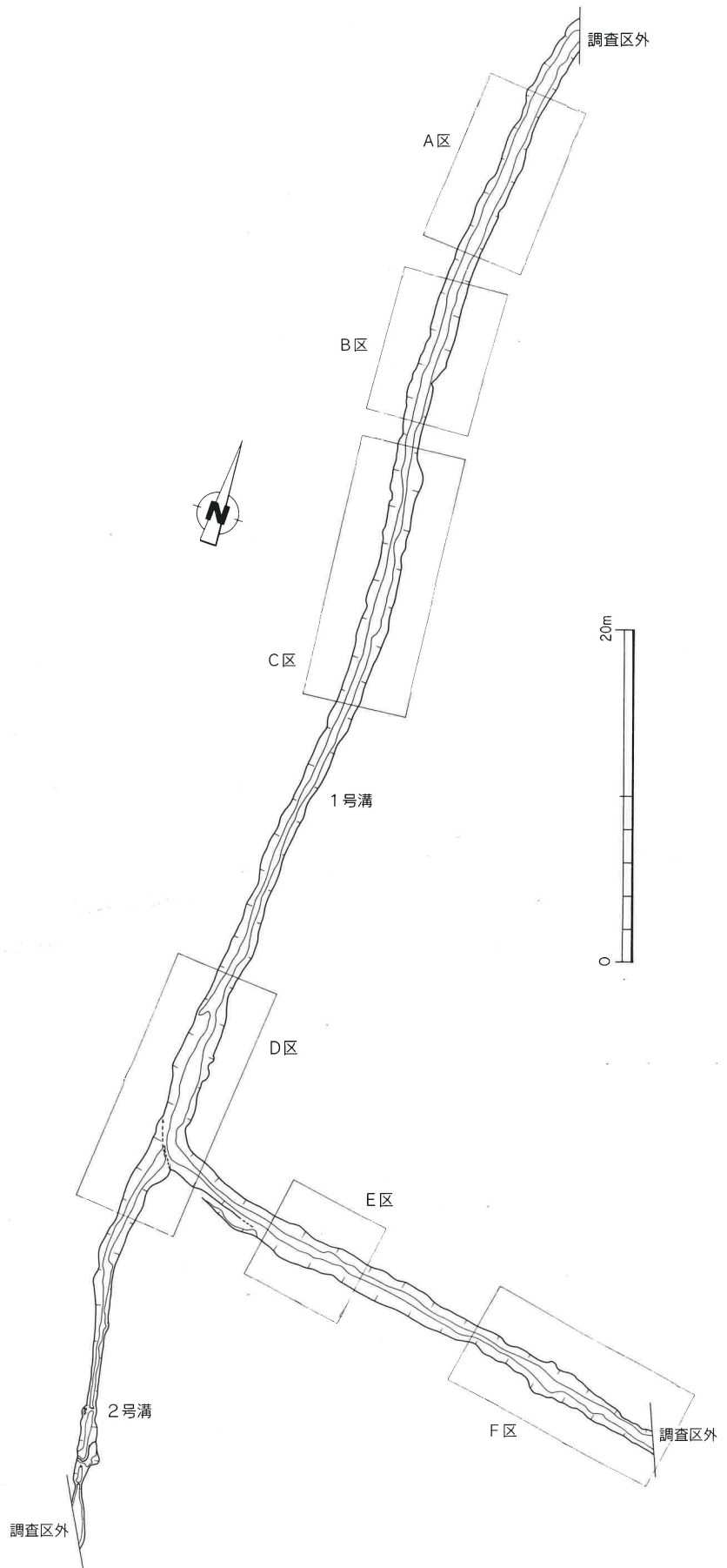


第171图 17号土坑出土遗物实测图

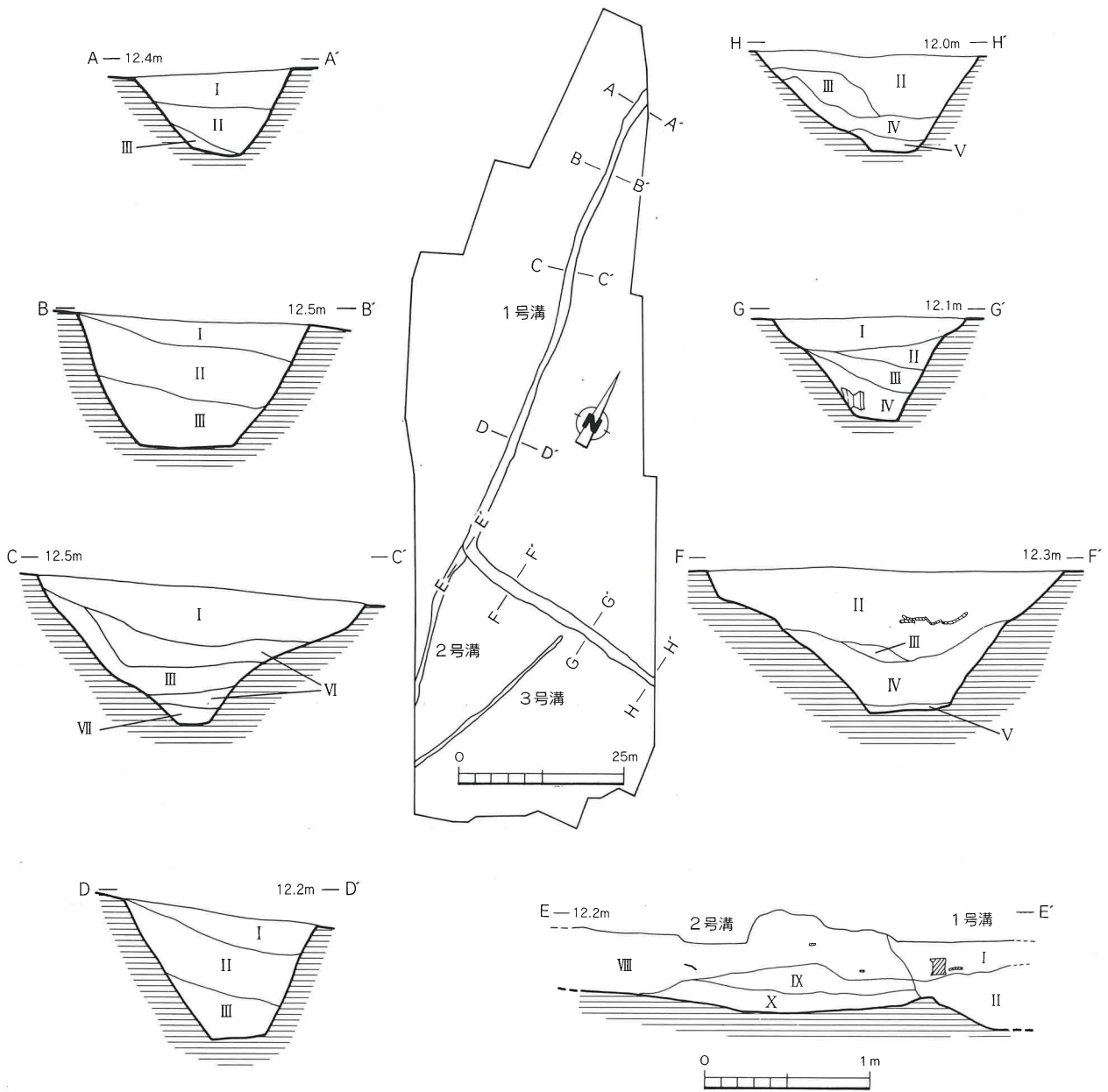
d. 溝

1号溝

遺構は調査区の北端から中央を経て中央部南西側で東に直角に向きを変え南東隅に展開する。南北辺71.57m、東西辺33.57m、最大幅2.32m、最小幅1.02m、最大深90cm、最小深57cmで、遺構断面は逆台形を呈す。底部の標高はA-A'間11.82m、B-B'間11.67m、C-C'間11.48m、D-D'間11.31m、E-E'間11.48m、F-F'間11.36m、G-G'間11.43m、H-H'間11.35mで、コーナー部北側を最深部として南北辺は緩やかな北上がりとなり、東西辺はほぼ平坦なつくりとなっている。溝の広がり調査区外である河岸段丘先端部に続くものと推定されており、遺構北端が東側に向きを変えはじめていることから想定される区画規模は南北辺約72m、北側東西辺約55m、南側東西辺約40mで溝により区画される面積は約3500㎡となる。遺構内の土砂堆積状況は基本的に区画外からの流れ込みである。遺物の出土はA区からF区の6ヶ所に特に集中している。A区からD区はI層（黒色土層）の下層とII層（褐色土層）の上層から集中的に大量の遺物が出土するが、D区の南端とE区、F区はIV層（暗褐色土層）より土器完形品を中心に遺物を出土する。他の区域、区画内については遺物の出土は皆無に等しい。溝に伴う遺構は断定されていないが9号～12号掘立柱建物跡、13号・32号・33号・36号竪穴住居跡についてはその可能性を指摘しておきたい。遺構は2号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面と土層の観察から2号溝から1号溝への新旧関係を確認した。同時期の遺物を出土する遺構は2号溝のほかに3号溝がある。遺構はその形態から環濠の可能性を指摘したい。



第172図 1号溝実測図

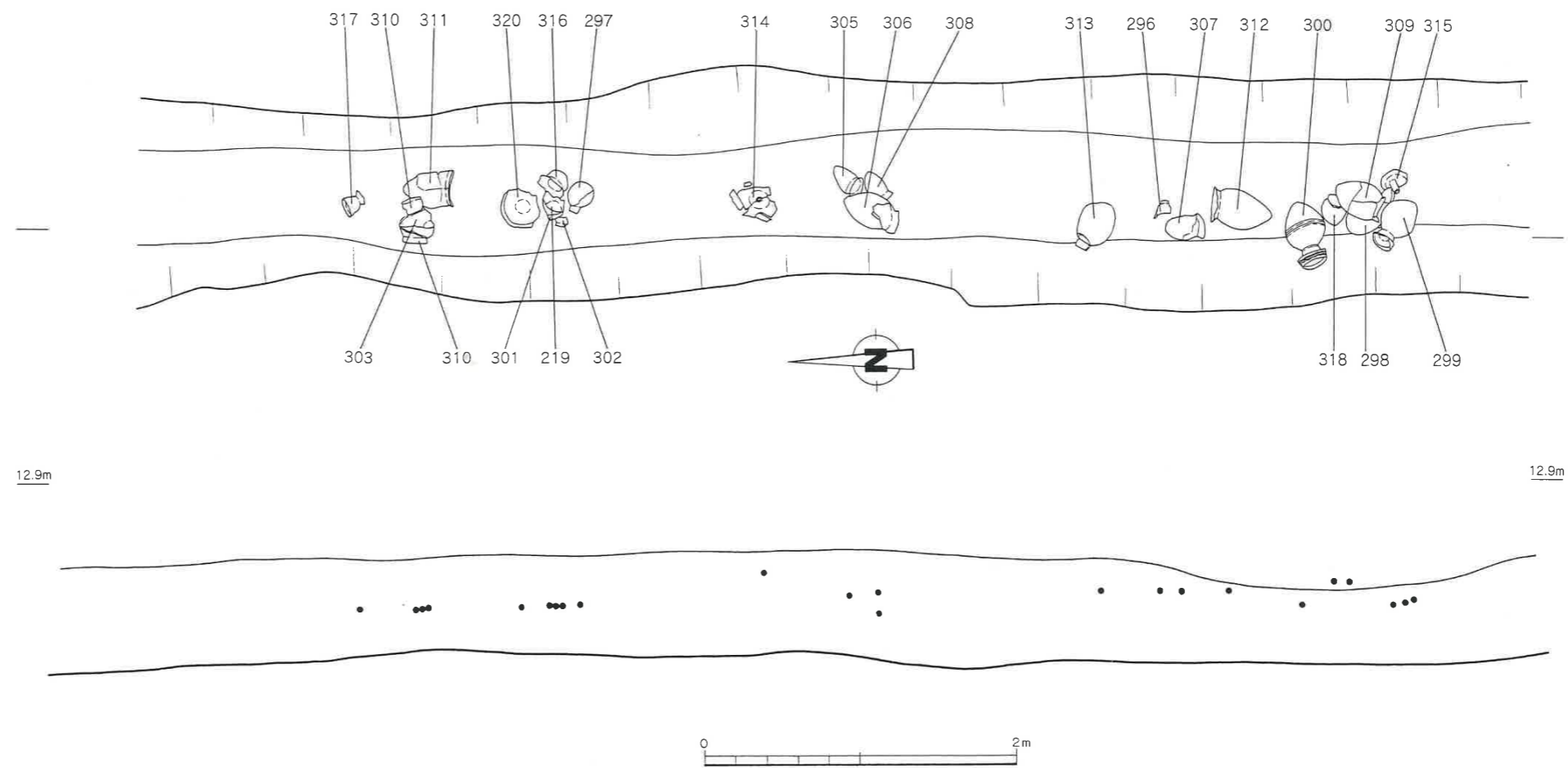


- | | |
|--------------|---|
| I層：黒色土層 | 炭化物を僅かに含み軟らかい。下層より大量の土器片（完形品を含む）を出土する。 |
| II層：褐色土層 | 炭化物と酸化鉄を僅かに含み固く締まる。上層より大量の土器片（完形品を含む）を出土する。 |
| III層：黄褐色土層 | 白色砂粒と酸化鉄を僅かに含み固く締まる。僅かに土器片を出土する。 |
| IV層：暗褐色土層 | 炭化物を含み固く締まる。最下層より完形の土器を出土する。 |
| V層：灰色弱粘質土層 | きめ細かい泥の堆積物で固く締まる。部分的に酸化鉄の沈着があり遺物を含まない。 |
| VI層：灰色砂質土層 | 灰色砂粒を主とし僅かに褐色土が混入する。炭化物と酸化鉄を含み固く締まるが遺物を僅かに含む。 |
| VII層：褐色弱粘質土層 | きめ細かい泥の堆積物で固く締まる。遺物は出土しない。 |
| VIII層：黒褐色土層 | 白色砂粒を僅かに含み固く締まる。上層より土器片（完形品を含む）を出土する。 |
| IX層：暗黄褐色土層 | 白色砂粒を含み軟らかい。遺物を含まない。 |
| X層：茶褐色粘質土層 | 白色砂粒を含み粘質が強く固く締まる。遺物を含まない。 |

第173図 1号溝土層実測図

A区出土遺物

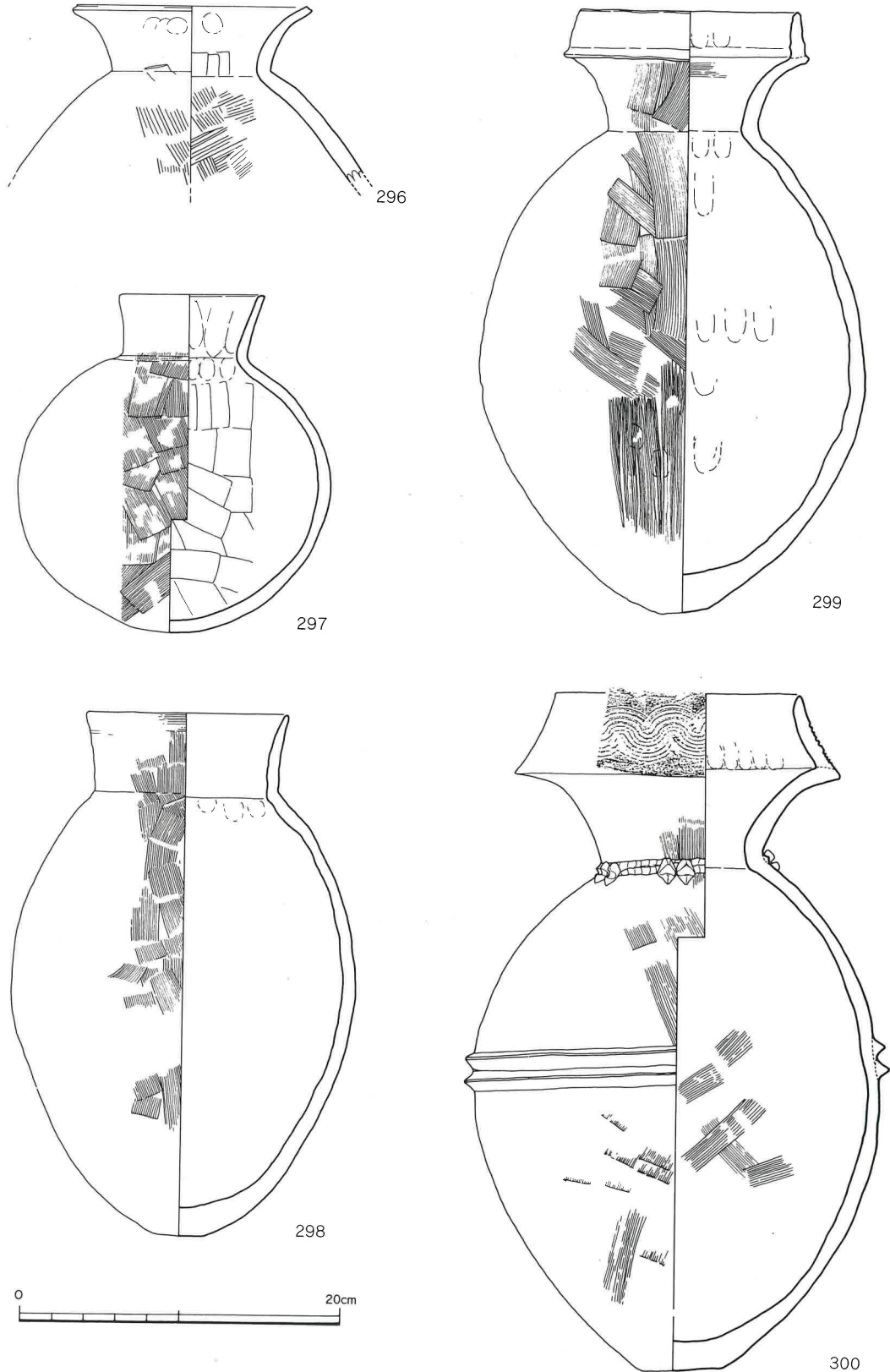
296～298は短頸壺、299・300は複合口縁壺、301～312は甕、313・314は高坏、315・317は脚付鉢、318～320は鉢である。296の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、頸部にはへら状工具痕、胴部はハケ目を施す。内面の調整は口縁部から頸部が指圧痕及びへら状工具痕と横ナデ、胴部には不定方向にハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。口径は15.0cmである。297の胎土には角閃石、長石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目を有す。内面は口縁部から頸部が指圧痕と不定方向ナデ、胴部以下には丁寧なへらナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに鈍い橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は9.1cm、胴部最大径は19.5cm、器高は21.1cmである。298の胎土には角閃石、長石、白色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下にはハケ目と不定方向ナデを施す。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は12.5cm、胴部最大径は21.7cm、器高は32.5cmである。299の胎土には角閃石と長石が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目と不定方向ナデを残す。内面は口縁部から頸部が指圧痕及びハケ目と横ナデ、胴部には指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。口径は18.8cm、胴部最大径は24.2cm、器高は37.3cmである。300の胎土には角閃石と長石が含まれ外面調整は口縁部に波状文と横ナデ、頸部には不定方向ナデ及びハケ目後、凸帯1条と2個で1対の浮文が5箇所に施される。胴部以下は不定方向ナデ及びハケ目が確認でき、胴部最大径付近には2条の凸帯が貼りつけられている。内面調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部以下にはハケ目と不定方向ナデを僅かに残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。外面の口縁部と胴部には黒斑を観察できる。口径は15.3cm、胴部最大径は26.5cm、器高は41.9cmである。301の胎土には角閃石、長石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデとハケ目、胴部以下には指圧痕と粗いハケ目が残る。内面調整は口縁部から頸部が横ナデと薄いハケ目、胴部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕とへらナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.5cmである。302の胎土には角閃石、長石、茶色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下には粗い磨きを観察できる。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び粗いへらナデと指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。口径は14.3cmである。303の胎土には角閃石、石英、金雲母、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部にはへら状工具痕及び不定方向ナデを残し、胴部には指圧痕と不定方向ナデを観察できる。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕及びへらナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.8cmである。304の胎土には角閃石、金雲母、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部には粘土積み上げ痕を残し、胴部にはハケ目と不定方向ナデを施す。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は21.1cmである。305の胎土には角閃石、石英、金雲母、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはハケ目、底部周辺は粗いへらナデを残す。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕及び粗いへらナデと指圧痕が観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は13.9cm、胴部最大径は13.1cm、器高は21.4cmである。306の胎土には角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下が不定方向ナデである。内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粗いナデと指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は12.2cm、胴部最大径は14.0cm、器高は20.7cmである。307の胎土には角閃石、長石、石英、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横



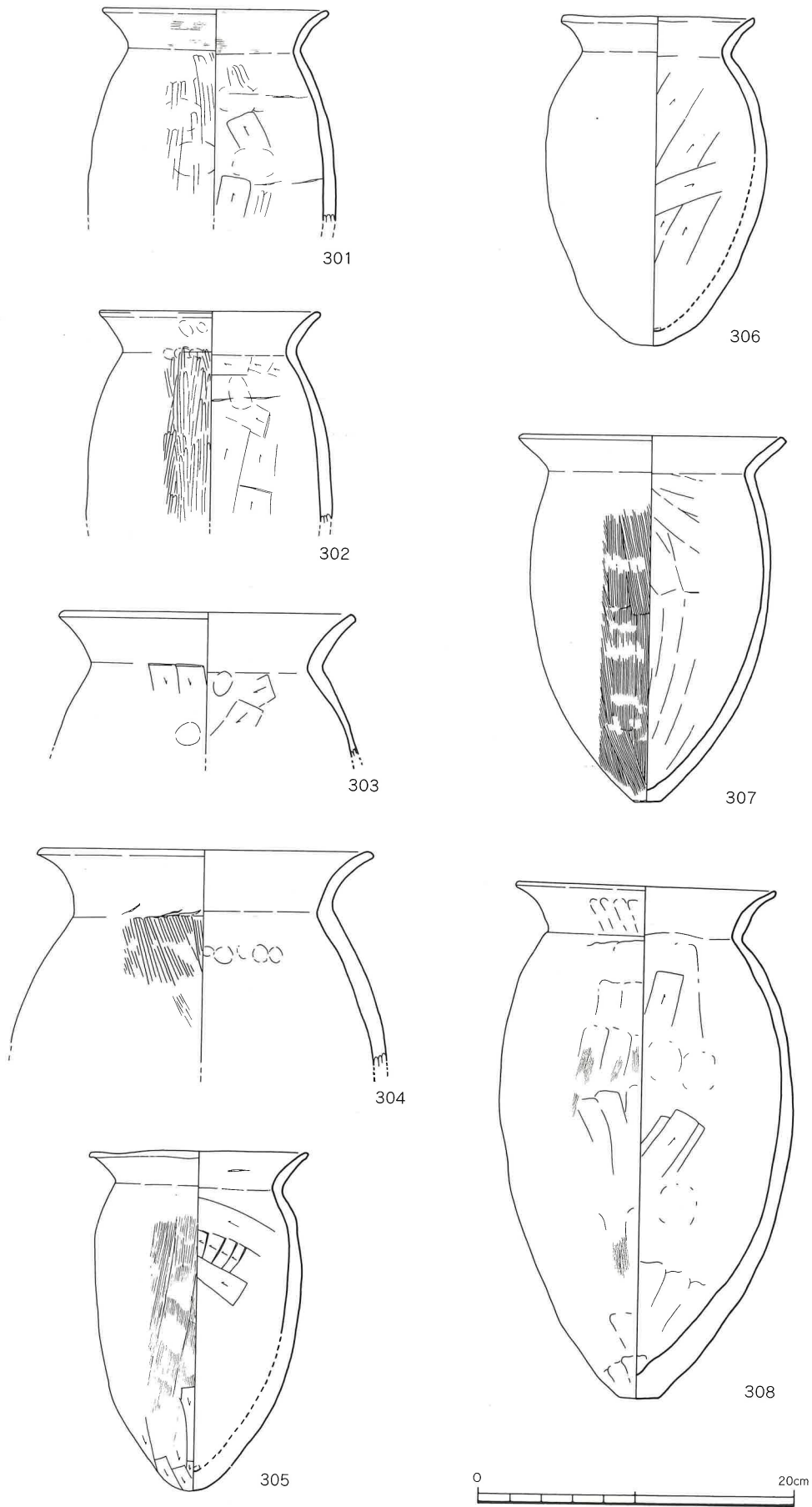
第174图 A区遺物出土状況実測図

ナデ、胴部がハケ目、底部がナデである。内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粗いナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられ、特に胴部内外面に沈着が顕著である。口径は16.6cm、胴部最大径は15.2cm、器高は23.0cmである。308の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデと縦方向ナデ、胴部はナデとハケ目、底部はナデである。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下は指圧痕、ナデ、ヘラナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.4cm、胴部最大径は18.5cm、器高は32.2cmである。309の胎土には角閃石、茶色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部にはヘラ状工具痕、胴部以下には不定方向ナデと薄いハケ目を確認できる。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び粗いヘラナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は19.2cm、胴部最大径は21.6cmである。310の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部がハケ目と縦方向ナデ、胴部が平行タタキと薄いハケ目を観察できる。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕とハケ目、胴部がハケ目とナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられ、特に胴部外面に沈着が顕著である。口径は19.6cm、胴部最大径は19.6cmである。311の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目とナデを観察できる。内面は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目、不定方向ナデ、指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.7cm、胴部最大径は18.7cm、器高は32.7cmである。312の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は頸部が横ナデ、胴部がハケ目、底部がナデである。内面は頸部が横ナデ、胴部にはハケ目とナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は23.2cmである。313の胎土には長石、角閃石、石英、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口唇部が横ナデ、口縁部から胴部までハケ目、胴部上半にはタタキ、底部周辺は不定方向ナデを確認できる。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられ、特に内面底部付近には煤が沈着している。口径は20.2cm、胴部最大径は24.4cm、器高は39.4cmである。314の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下には横ナデと不定方向ナデを観察できる。内面は口縁部が横ナデ、口縁部以下には横ナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は赤色塗彩のため内外面ともに赤褐色を帯び、地色は褐色である。口径は27.5cmである。315の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整はハケ目と横ナデ、内面は横ナデと不定方向ナデを僅かに残す。焼成は良好で、色調は赤色塗彩のため内外面ともに赤褐色を帯び、地色は淡褐色である。焼成前穿孔は4箇所に確認できる。底径は17.8cmである。316の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から胴部上半にかけて不定方向ヘラ磨き、胴部下半から脚部付近にかけては指圧痕と縦方向ヘラ磨きを残す。内面の調整は指圧痕と不定方向ヘラ磨きである。脚部内面は指圧痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐色である。胴部最大径は14.9cmである。317の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒、白色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部から脚部にかけてはヘラ磨きと不定方向ナデを残す。内面の調整は口縁部が横ナデで、ほかはヘラ磨き、不定方向ナデ、指圧痕を残す。脚部内面は指圧痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐色である。口径は19.1cm、胴部最大径は13.1cmである。318の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は頸部が横ナデ、胴部以下はハケ目、内面は頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と縦方向ナデである。焼成は良好で、色調は赤色塗彩のため内外面ともに赤褐色を帯び、地色は褐色である。胴部最大径は19.6cmである。319の胎土には角閃石、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部以下にはハケ目と不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下には指圧痕とヘラナデを残す。

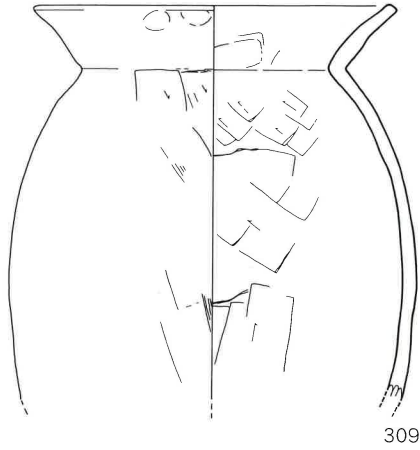
焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。口径は19.0cm、胴部最大径は19.0cm、器高は18.0cmである。320の胎土には角閃石と赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目と粗いヘラナデ、内面は口縁部から頸部が指圧痕とハケ目、胴部以下には粗いヘラナデとヘラ磨きが確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。口径は22.5cm、胴部最大径は22.1cm、器高は16.7cmである。296～320は弥生時代後期後半から終末の土器群と考えたい。



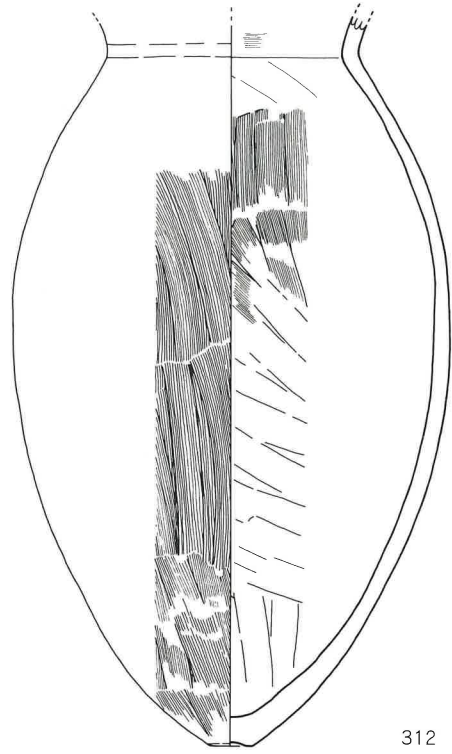
第175図 A区出土遺物実測図(1)



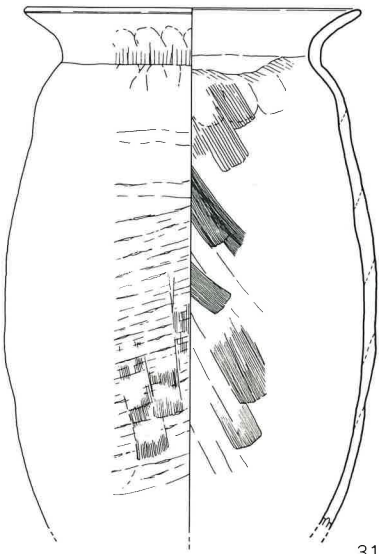
第176图 A区出土遗物实测图(2)



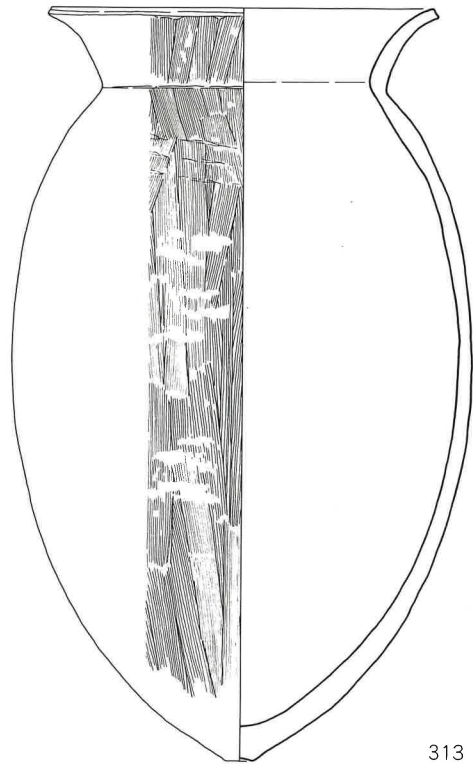
309



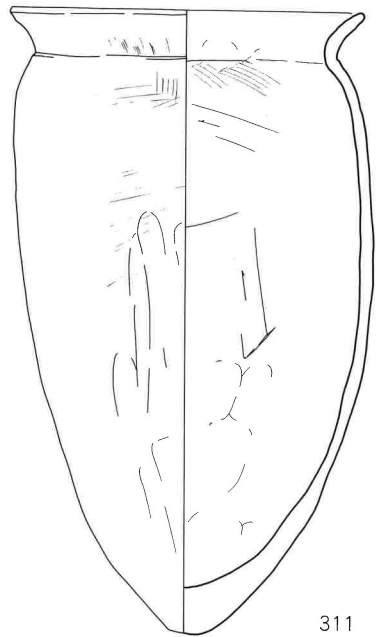
312



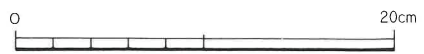
310



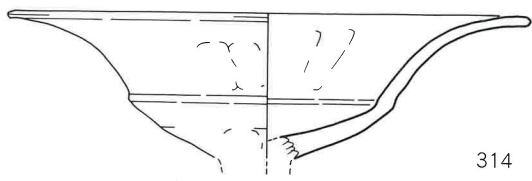
313



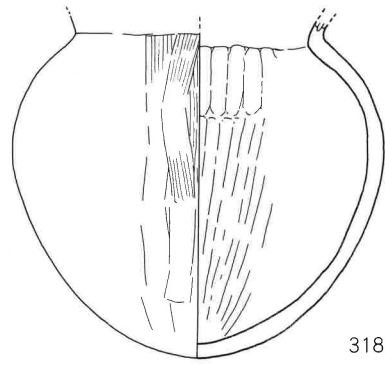
311



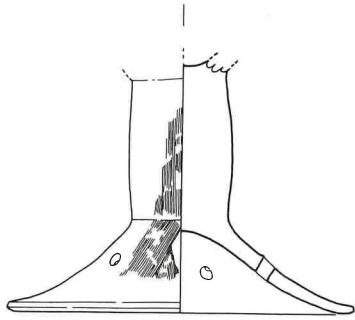
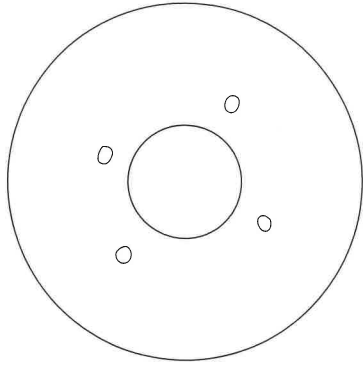
第177图 A区出土遗物实测图(3)



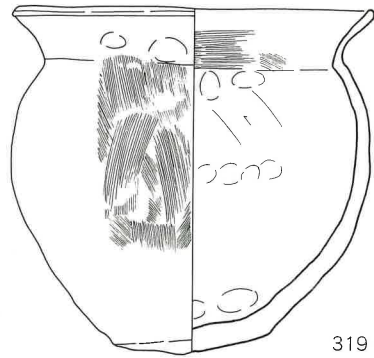
314



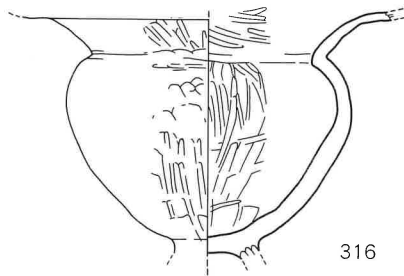
318



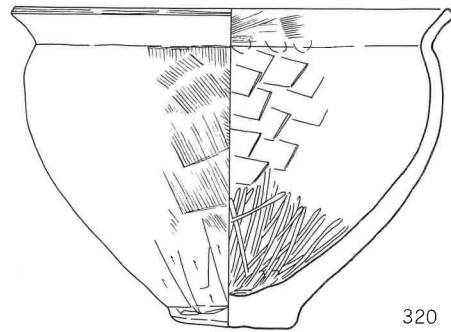
315



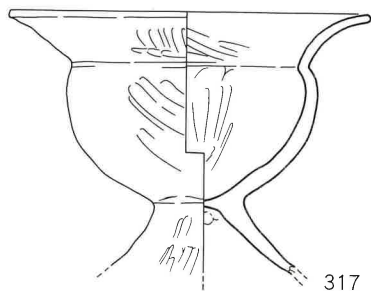
319



316



320

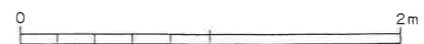
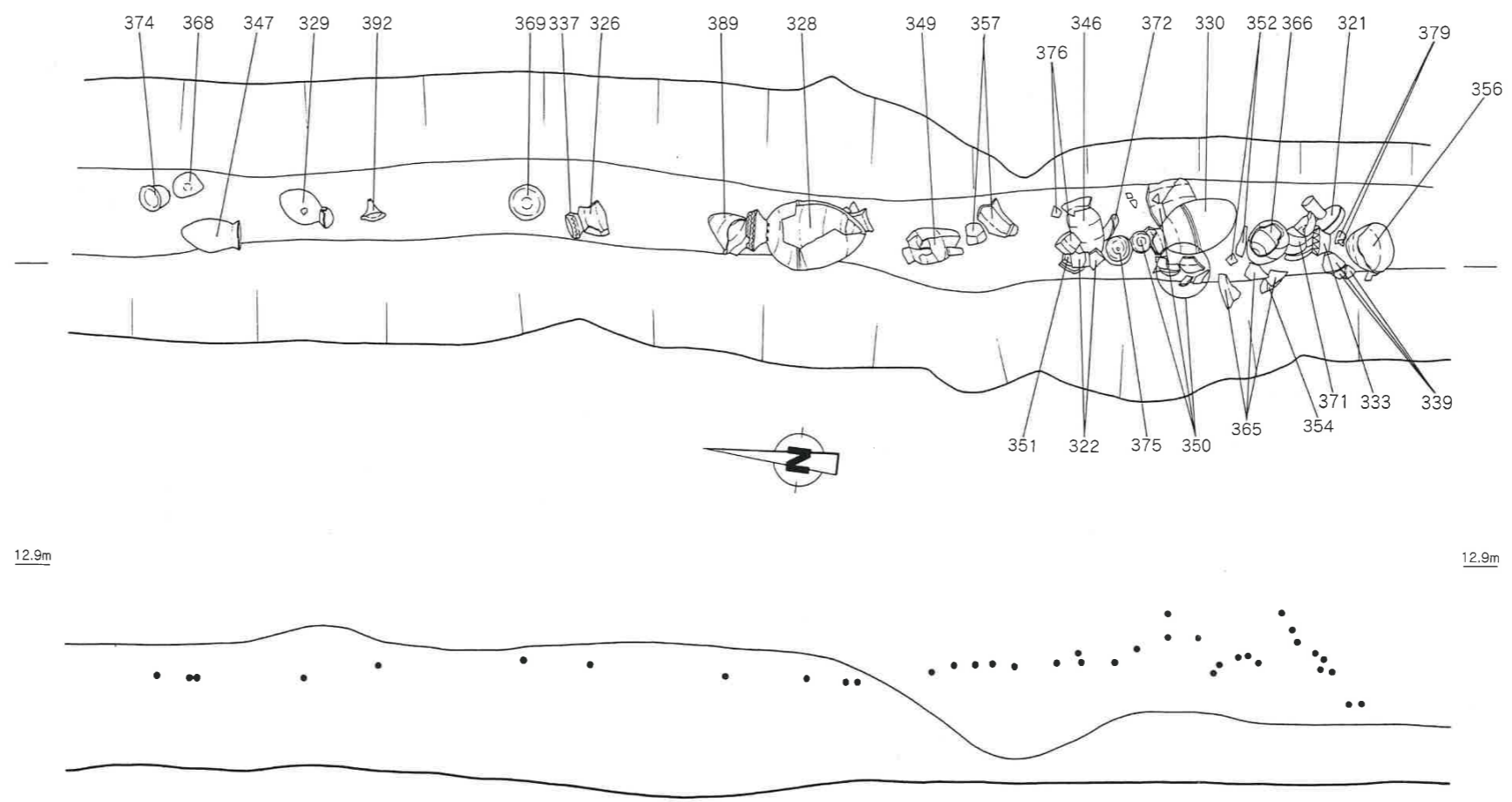


317

第178图 A区出土遗物实测图(4)

B区出土遺物

321は長頸壺、322～327は短頸壺、328～337は複合口縁壺、338・339は壺の胴部から底部、340～368は甕、369～373は鉢、374～376は脚付鉢、377～382は碗、383～389は壺あるいは甕の底部、390は甕の底部、391は高坏、392はB区精査時に出土した壺形埴輪である。321の胎土には角閃石、長石、白色砂粒が含まれ外面調整は全面に緻密な磨きを施している。頸部には凸帯1条と2個で1対の浮文を4箇所設けるほか、胴部にはヘラ記号と2条の凸帯を有す。内面調整は口縁部に指圧痕と不定方向ナデを確認できるほかは不明である。焼成は良好で、色調は赤色塗彩のため内外面ともに赤褐色を帯び、地色は淡褐色である。口径は8.5cm、胴部最大径は20.2cm、器高は26.2cmである。322の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が刻目凸帯、胴部には指圧痕と不定方向ナデを施す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は13.6cmである。323の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粗いハケ目、指圧痕、不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は14.2cmである。324の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部には凸帯を有し、頸部以下には不定方向ナデを施す。内面調整は口縁部が横ナデとヘラナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は12.6cmである。325の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部には凸帯を有し、胴部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。口径は14.4cmである。326の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口唇部は横ナデ、口縁部は粗いハケ目と不定方向ナデ、頸部以下には指圧痕とハケ目を確認できる。内面調整は口縁部が粗いハケ目とヘラ磨き、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰白色である。口径は13.3cmである。327の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部以下には指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は12.7cmである。328の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ及び波状文と指圧痕、頸部はハケ目後、凸帯及び2個で1対の浮文を5箇所に設けている。胴部にはハケ目を施した後、3条の凸帯を貼りつけ横ナデを施している。底部にはハケ目及び指圧痕とヘラナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、ハケ目、指圧痕、不定方向ナデ、頸部以下には指圧痕及び不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。口径は23.0cm、胴部最大径は44.5cm、器高は62.6cmである。329の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデで、頸部には凸帯を1条有する。胴部にはハケ目、指圧痕、ヘラナデ、不定方向ナデを施しており、焼成後穿孔を1孔確認している。底部には粗いヘラナデと不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部にかけて粗いヘラナデと横ナデ、胴部以下は指圧痕、ヘラナデ、不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。胴部最大径は22.1cmである。330の胎土には角閃石、長石、石英、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口唇部が横ナデ、口縁部は横ナデとハケ目、頸部は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを施した後、凸帯1条と2個で1対の浮文を4箇所に配置している。胴部はハケ目後、3条の凸帯を貼りつけている。底部は不定方向ナデにより仕上げを行なっている。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部付近には薄いハケ目と不定方向ナデ、胴部以下は不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。胴部外面には黒斑が2箇所確認できる。口径は19.8cm、胴部最大径は34.2cm、器高は57.4cmである。331の胎土には角閃石、石英、白色砂粒が含まれ外面調整は横ナデと磨きを確認でき、頸部付近には1条の凸帯を有する。内面は横ナデ及び指圧痕を観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。332の胎土には長石、角閃石、石英、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口唇部から口縁部が横ナデ、口縁部から頸部にか



第179图 B区遗物出土状况实测图

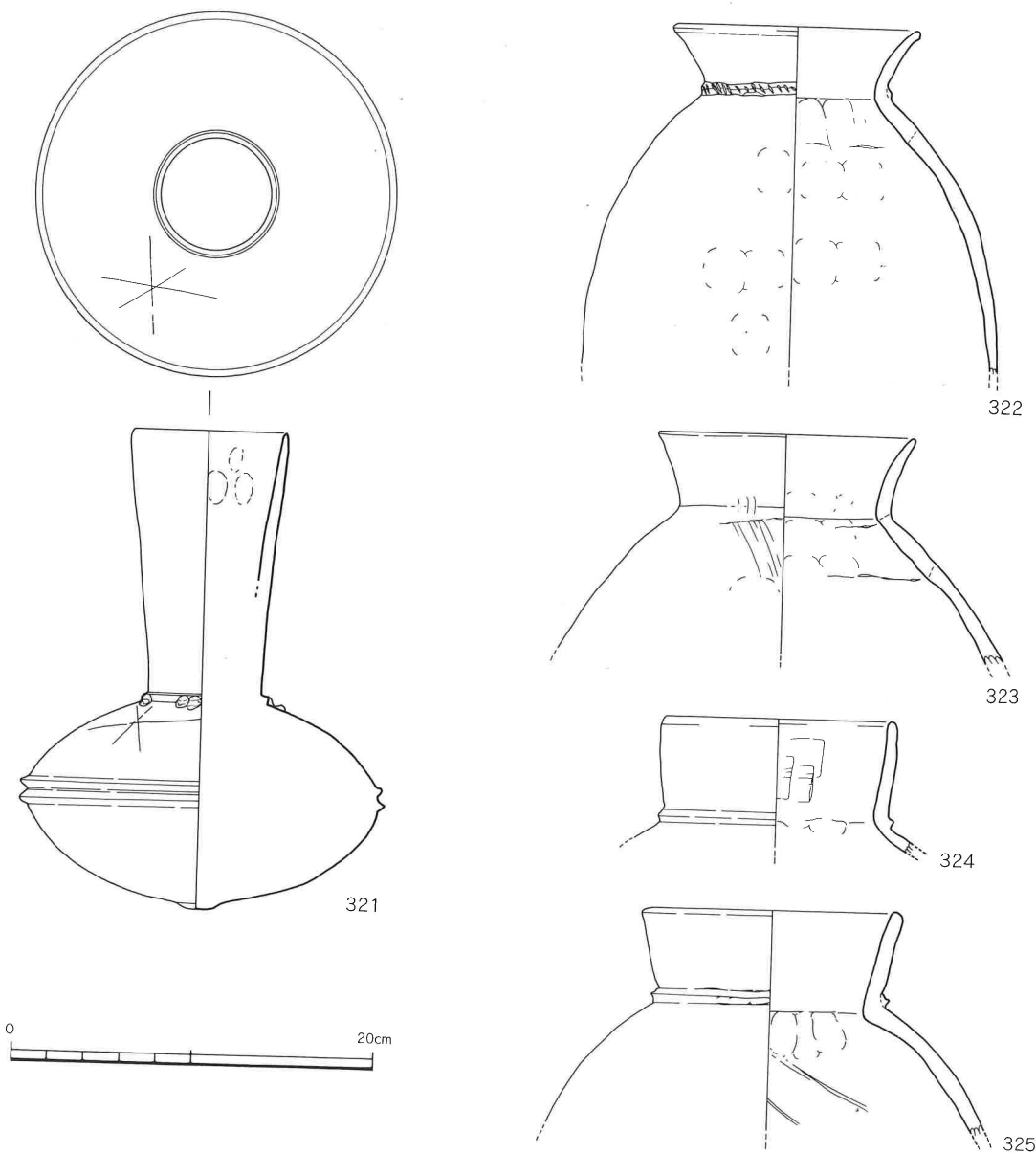
けては波状文及び指圧痕とハケ目である。内面は横ナデと粗いハケ目を観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。口径は13.0cmである。333の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面の調整は口唇部が横ナデ、口縁部以下には波状文及び指圧痕とハケ目を残す。内面は横ナデ及びハケ目と指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。口径は14.3cmである。334の胎土には角閃石と石英が含まれ外面調整は口唇部が横ナデ、口縁部以下には波状文及びハケ目と指圧痕を残す。内面はハケ目及び指圧痕とヘラ状工具痕を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色である。口径は13.1cmである。335の胎土には角閃石、石英、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整は口唇部が横ナデ、口縁部以下には波状文及び指圧痕とハケ目を残し、頸部付近には1条の凸帯を有す。内面はハケ目と指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は14.1cmである。336の胎土には角閃石、石英、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は横ナデとハケ目、内面は横ナデ及び指圧痕とヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。口径は18.8cmである。337の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は波状文及び不定方向ナデとハケ目を残す。内面は横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は赤色塗彩のため内外面ともに淡赤褐色を帯び、地色は淡褐色である。口径は18.0cmである。338の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデを残す。内面はハケ目と指圧痕を観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は24.2cmである。339の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ外面調整はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデである。内面は指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。胴部最大径は29.5cmである。340の胎土には長石、角閃石、石英、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目及び縦方向ナデが観察される。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗橙褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は13.1cm、胴部最大径は15.8cm、器高は24.1cmである。341の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には縦方向にナデを観察できる。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕と横ナデ、胴部以下にはヘラナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.0cm、胴部最大径は16.0cm、器高は23.5cmである。342の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は粘土積み上げ痕、指圧痕、粗いヘラナデ、ハケ目、不定方向ナデをみることができる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.3cm、胴部最大径は16.6cm、器高は23.1cmである。343の胎土には長石、石英、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には縦方向に丁寧なナデを施す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部には指圧痕とハケ目、胴部以下には縦方向にナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.4cm、胴部最大径は15.4cm、器高は25.3cmである。344の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデをみることができる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.6cm、胴部最大径は17.6cm、器高は30.7cmである。345の胎土には角閃石、石英、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部はハケ目、底部は粗いヘラナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕、粗いヘラナデ、不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.5cm、胴部最大径は18.5cm、器高は31.8cmである。346の胎土には長石、金雲母、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデとハケ目、胴部以下はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部が横ナデとヘラナデ、頸部以下はヘラナデ、指圧痕、薄いハケ目、不定方向ナデを観察できる。焼成は良

好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.1cm、胴部最大径は20.8cm、器高は32.1cmである。**347**の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下はハケ目、底部周辺は不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びハケ目、底部は不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰色である。胴部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.6cm、胴部最大径は20.4cm、器高は34.6cmである。**348**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部以下は粗いヘラナデと不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕及び粗いヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.0cm、胴部最大径は20.6cm、器高は34.4cmである。**349**の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部以下は指圧痕とハケ目を残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下はヘラナデ、ハケ目、指圧痕、不定方向ナデを僅かに確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.4cm、胴部最大径は20.8cm、器高は32.8cmである。**350**の胎土には角閃石、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部がヘラ状工具痕と横ナデ、頸部以下には薄いハケ目、粗いヘラナデ、不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粗いヘラナデ及び指圧痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は21.1cm、胴部最大径は26.4cm、器高は39.2cmである。**351**の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目とヘラ状工具痕がみられる。内面は口縁部から頸部に指圧痕及び粗いヘラナデと横ナデ、胴部は粗いヘラナデと不定方向ナデが残る。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.1cm、胴部最大径は14.4cmである。**352**の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は指圧痕と不定方向ナデを僅かに残す。内面は口縁部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.2cm、胴部最大径は18.5cmである。**353**の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部が不定方向ナデである。内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粗いヘラナデ、指圧痕、不定方向ナデを僅かに残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.4cm、胴部最大径は20.0cmである。**354**の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には薄いハケ目と不定方向ナデを観察できる。内面は口縁部が横ナデ、頸部が薄いハケ目、胴部が粗いヘラナデ、指圧痕、不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.0cm、胴部最大径は19.6cmである。**355**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデと粗いヘラナデ、頸部以下には粗いヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.9cm、胴部最大径は21.1cmである。**356**の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には不定方向ナデとハケ目を観察できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.0cm、胴部最大径は22.2cmである。**357**の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が指圧痕及びハケ目と横ナデ、頸部は凸帯を貼りつけ横ナデ、胴部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部以下には指圧痕、粗いヘラナデ、ハケ目、不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、

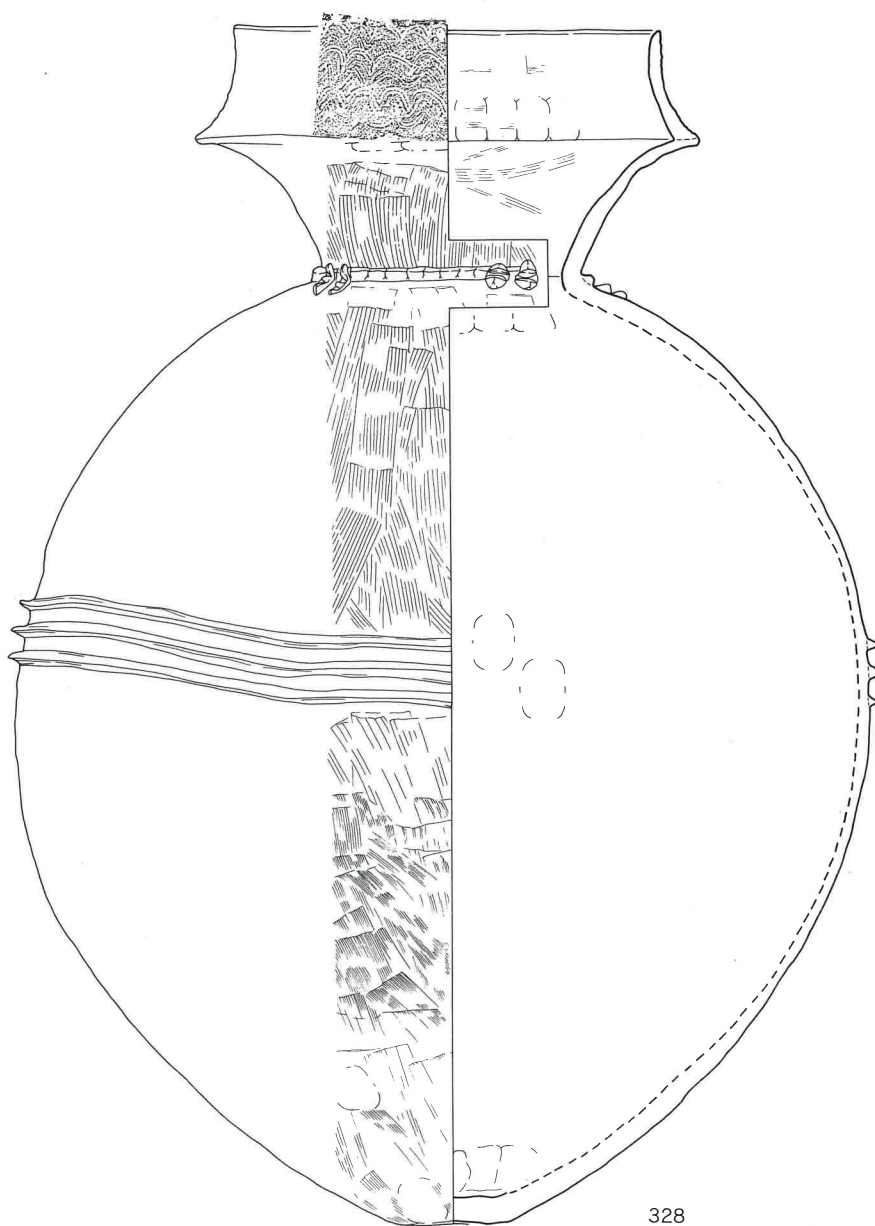
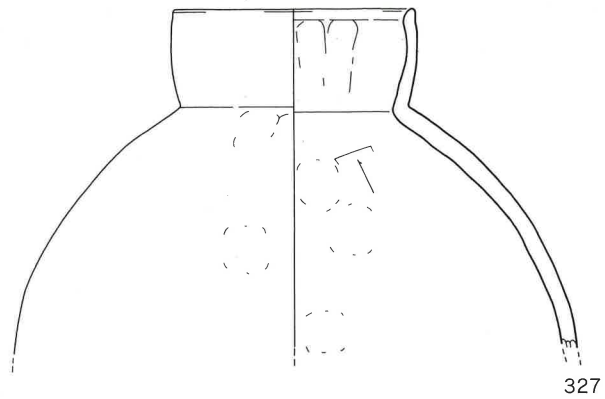
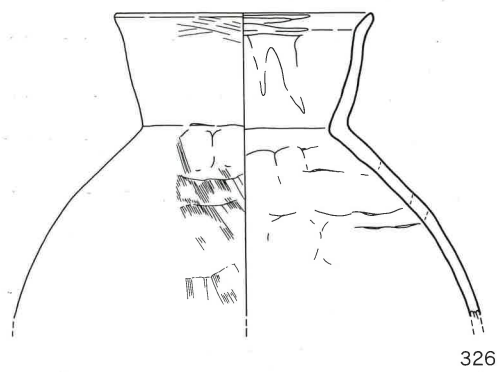
全面に煤の付着がみられる。口径は22.2cm、胴部最大径は27.4cmである。358の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはハケ目を施す。内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.5cmである。359の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを有す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と粗いヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は15.0cmである。360の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下にはハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.2cmである。361の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目を有す。内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.5cmである。362の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.2cmである。363の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと粗いヘラナデ、頸部以下には粗いヘラナデと不定方向ナデを施す。内面は口縁部に横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び粗いヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.8cmである。364の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目を残す。内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び粗いヘラナデとハケ目を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は23.8cmである。365の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと薄いハケ目、頸部には凸帯を貼りつけ後指圧痕、胴部にはハケ目と不定方向ナデがみられる。内面調整は口縁部が横ナデと薄いハケ目、頸部以下には薄いハケ目と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は35.6cmである。366の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部が横ナデ、胴部はハケ目と粗いヘラナデ、底部は不定方向ナデである。内面は頸部が横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕、薄いハケ目、ヘラナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は29.1cmである。367の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は粗いヘラナデと不定方向ナデ、内面は粗いヘラナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。368の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデ、内面は不定方向ナデとヘラ状工具痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。369の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、胴部はハケ目、底部は不定方向ナデである。内面は口縁部に横ナデ、胴部以下にヘラナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。口径は23.0cm、器高は12.0cmである。370の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は22.6cm、胴部最大径は18.2cm、器高15.2cmである。371の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部にかけて横ナデ及び指圧痕と粗いヘラナデ、胴部以下は粗いヘラナデと不定方向ナデを確認できる。

内面調整は口縁部から頸部が横ナデと粗いヘラナデ、胴部以下には粗いヘラナデ及び指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は24.5cm、胴部最大径は21.4cm、器高は16.4cmである。372の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデ、内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は23.6cm、胴部最大径は21.4cmである。373の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部以下が不定方向ナデと指圧痕である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕及び不定方向ナデと指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は25.1cm、胴部最大径は22.4cm、器高は17.1cmである。374の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ及びハケ目と指圧痕、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。脚部内面は不定方向ナデを僅かに残す。焼成は良好で、色調は黄褐色である。胴部には黒斑が観察できる。口径は17.5cm、胴部最大径は15.2cmである。375の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下は指圧痕とヘラ磨きを確認できる。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は指圧痕と不定方向ナデを残す。脚部内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.4cmである。376の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粗いハケ目とヘラナデを施す。内面調整はヘラ磨きとハケ目を残す。脚部内面は不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は21.5cm、胴部最大径は17.5cmである。377の胎土には石英、長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は劣化のため不明で、内面は粗いヘラナデあるいは不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。口径は9.7cm、器高は7.6cmである。378の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ内外面調整は共に指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色であるが、僅かに赤色塗彩を残す。遺物外面には黒斑を観察できる。口径は9.8cm、器高は8.6cmである。379の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目、内面は指圧痕とハケ目を残す。焼成は良好で、色調は赤色塗彩のため内外面ともに赤褐色を帯び、地色は淡褐色である。遺物外面には黒斑を観察できる。口径は10.8cm、器高は8.6cmである。380の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ内外面の調整はヘラナデ後、不定方向ナデで、外面口縁部には1条の沈線を巡らす。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。外面には黒斑を観察できる。口径は10.8cm、器高は10.6cmである。381の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕と不定方向ナデ、内面は口縁部が横ナデで、ほかは指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物外面には黒斑を観察できる。口径は12.7cm、器高は10.7cmである。382の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデで、ほかは指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。内面調整は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は13.3cm、器高は9.9cmである。383の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ調整は内外面ともにヘラナデを僅かに確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。384の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は丁寧なヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。385の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡暗灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。386の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ調整は内外面ともにヘラナデを僅かに確認できる。焼成は良好で、色調は淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。

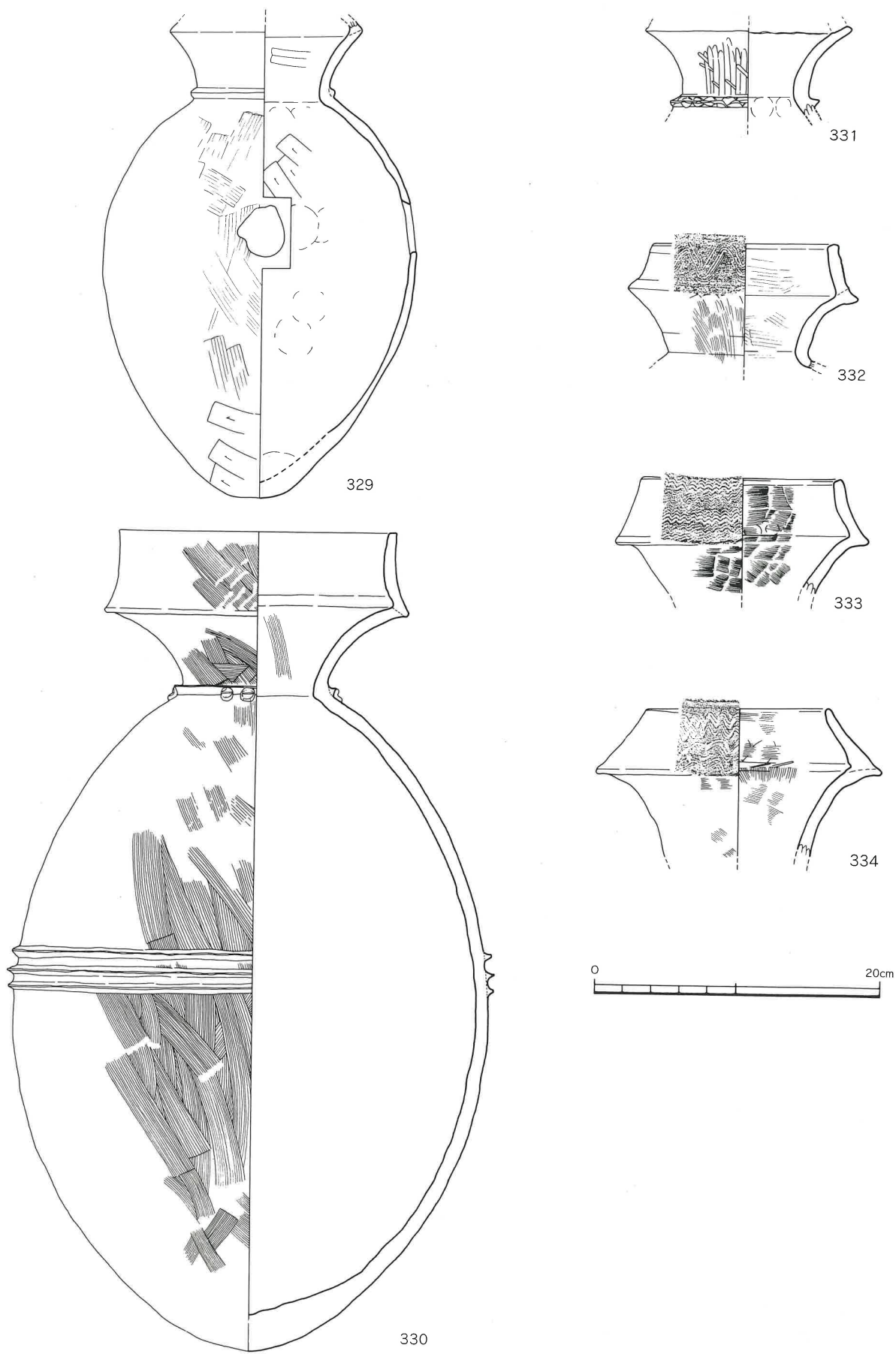
387の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は粗いヘラナデ、内面は粗いヘラナデと指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。388の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともにハケ目及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。389の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。外面には黒斑を観察できる。390の胎土には長石、角閃石、黒色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整は指圧痕及び薄いハケ目と不定方向ナデを有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。391の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は丁寧な磨きを施す。内面調整はヘラ状工具痕とハケ目を確認できる。焼成は良好で、色調は外面が赤色塗彩の赤褐色を帯び、内面は地色の淡橙色である。焼成前穿孔は4箇所を確認できる。底径は18.8cmである。392の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデ、内面調整は指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は黄灰褐色である。外面には黒斑を観察できる。321～391は弥生時代後期後半から終末の土器群、392は古墳時代中期初頭と考えたい。



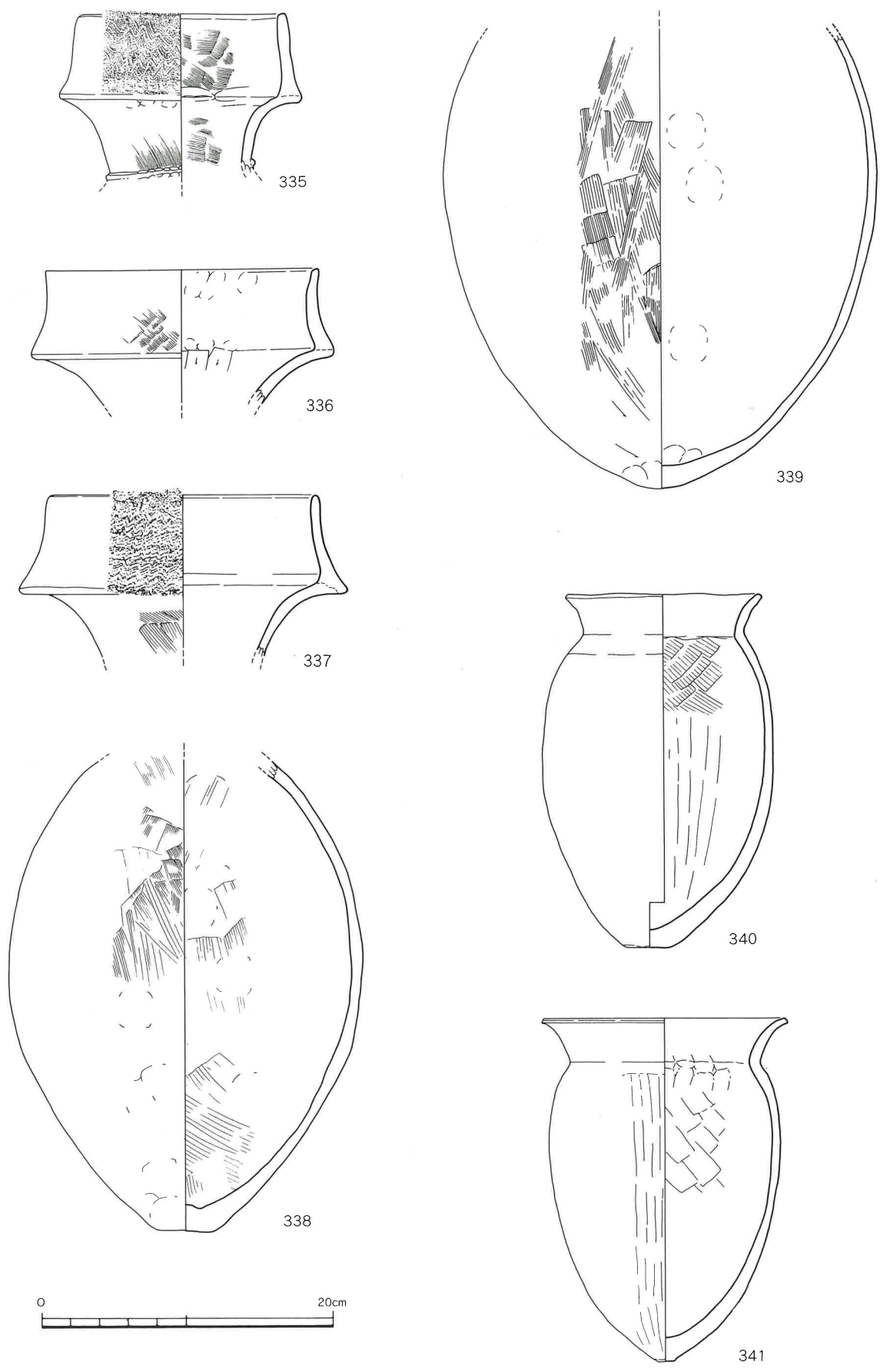
第180図 B区出土遺物実測図(1)



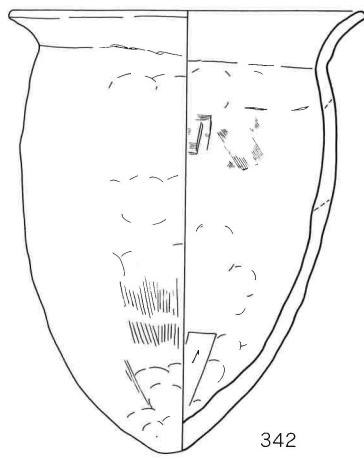
第181图 B区出土遗物实测图(2)



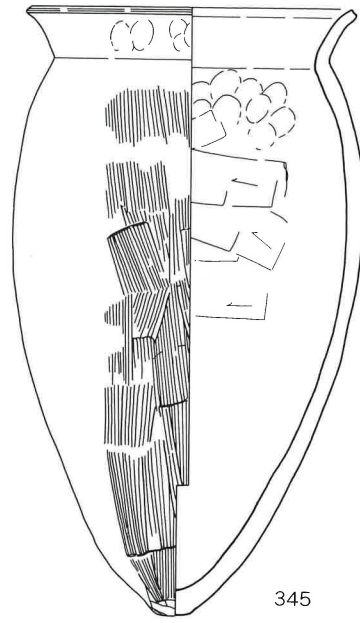
第182图 B区出土遗物实测图(3)



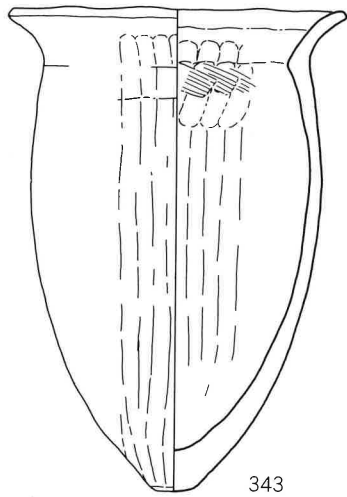
第183图 B区出土遗物实测图(4)



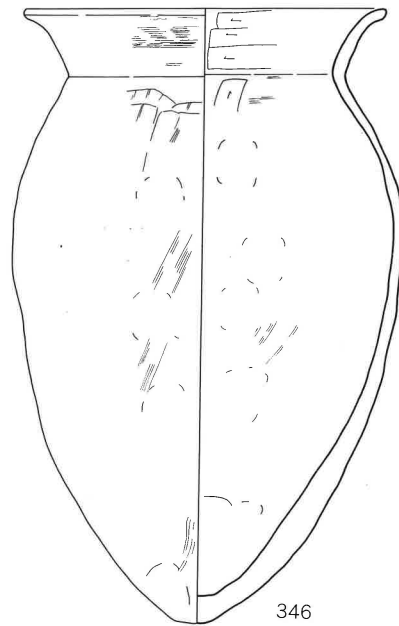
342



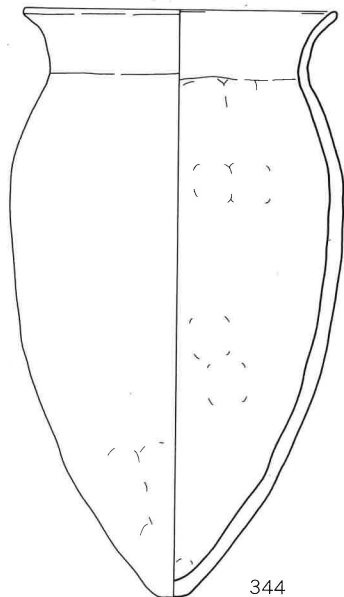
345



343



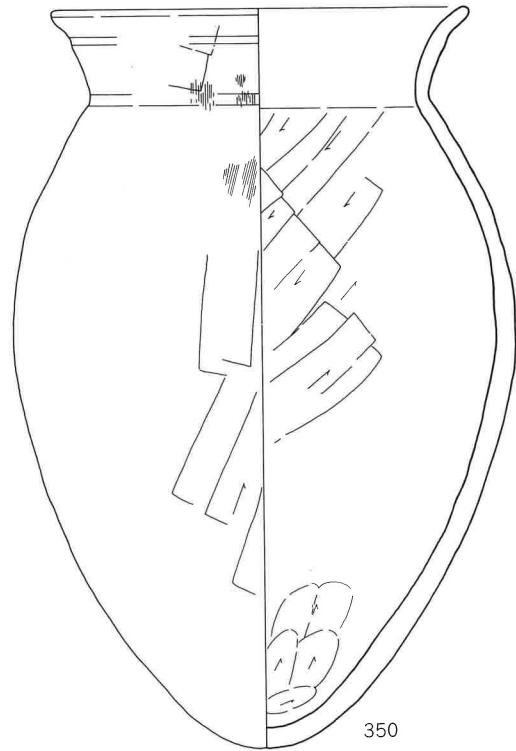
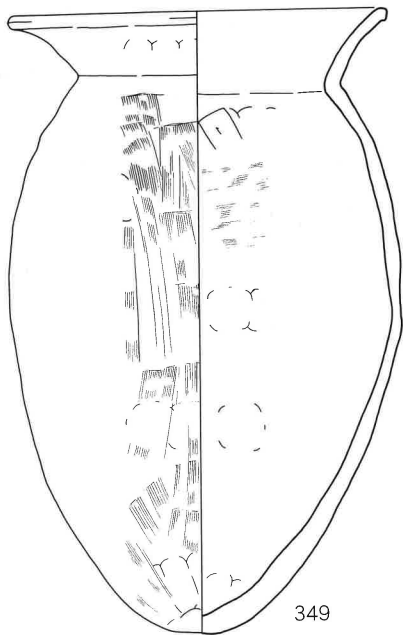
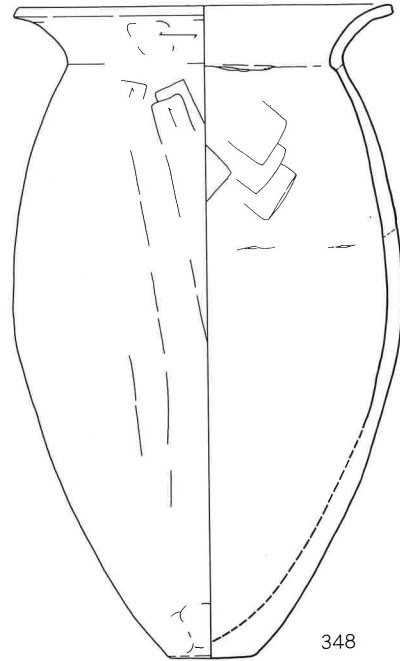
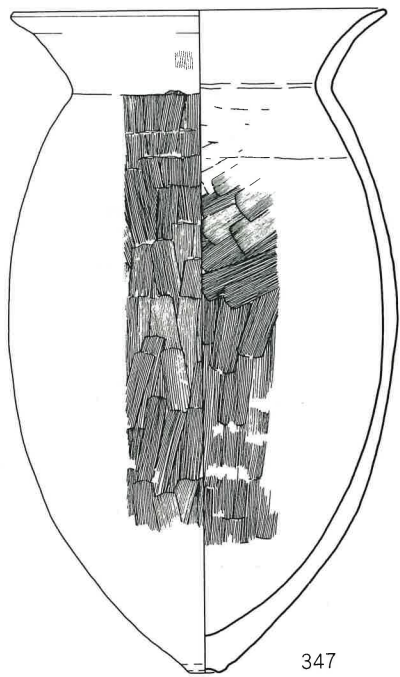
346



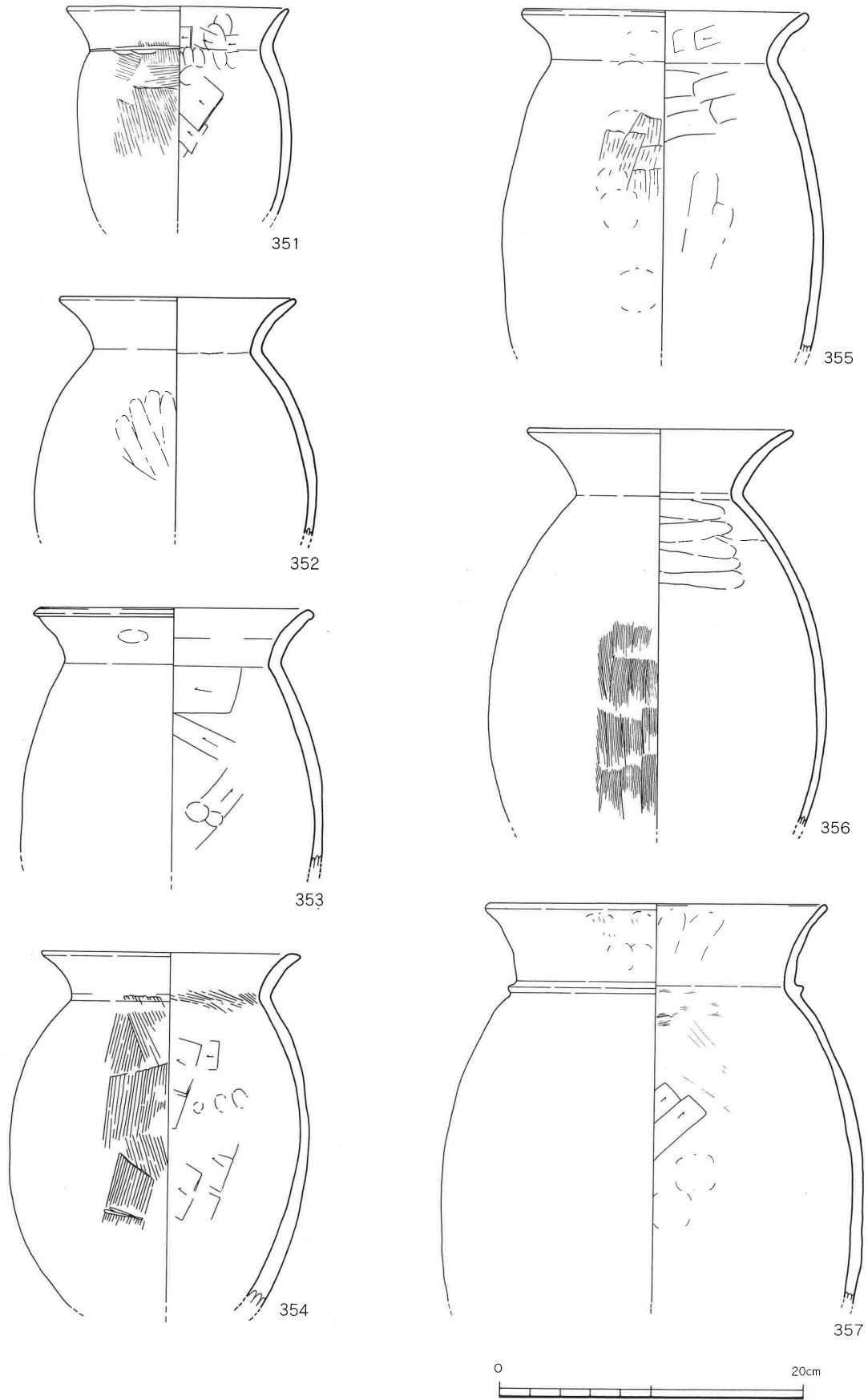
344



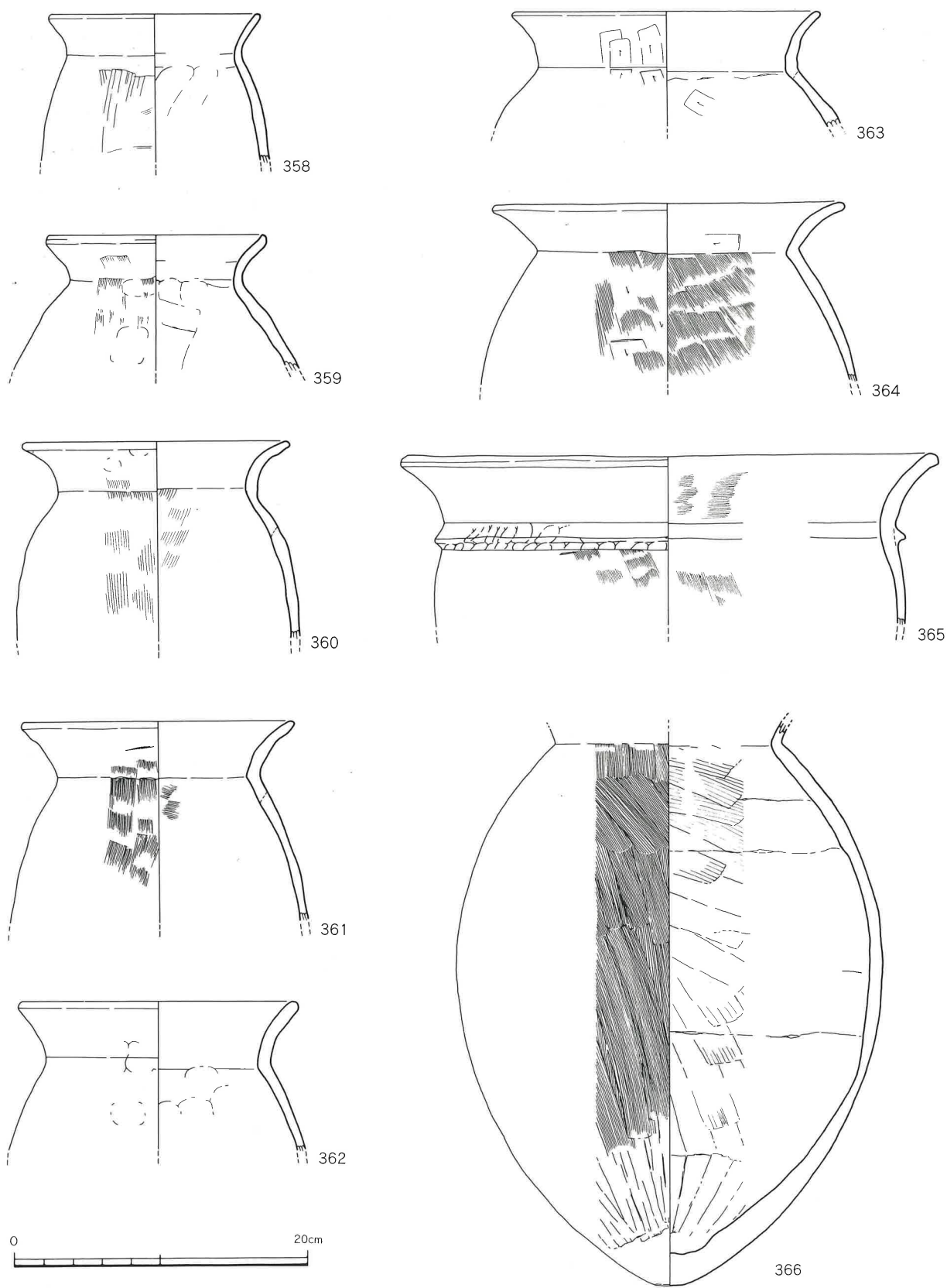
第184图 B区出土遗物实测图(5)



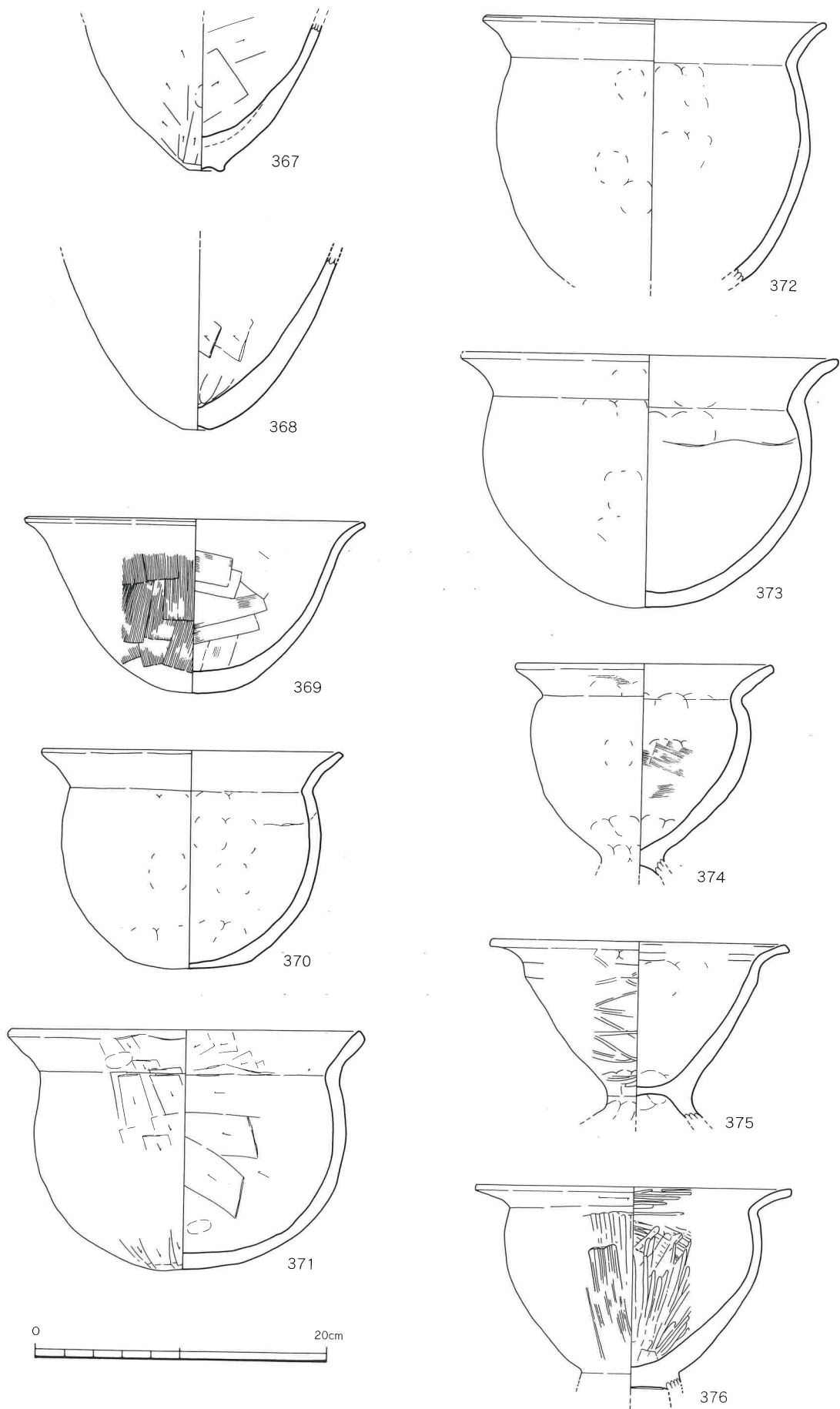
第185图 B区出土遗物实测图(6)



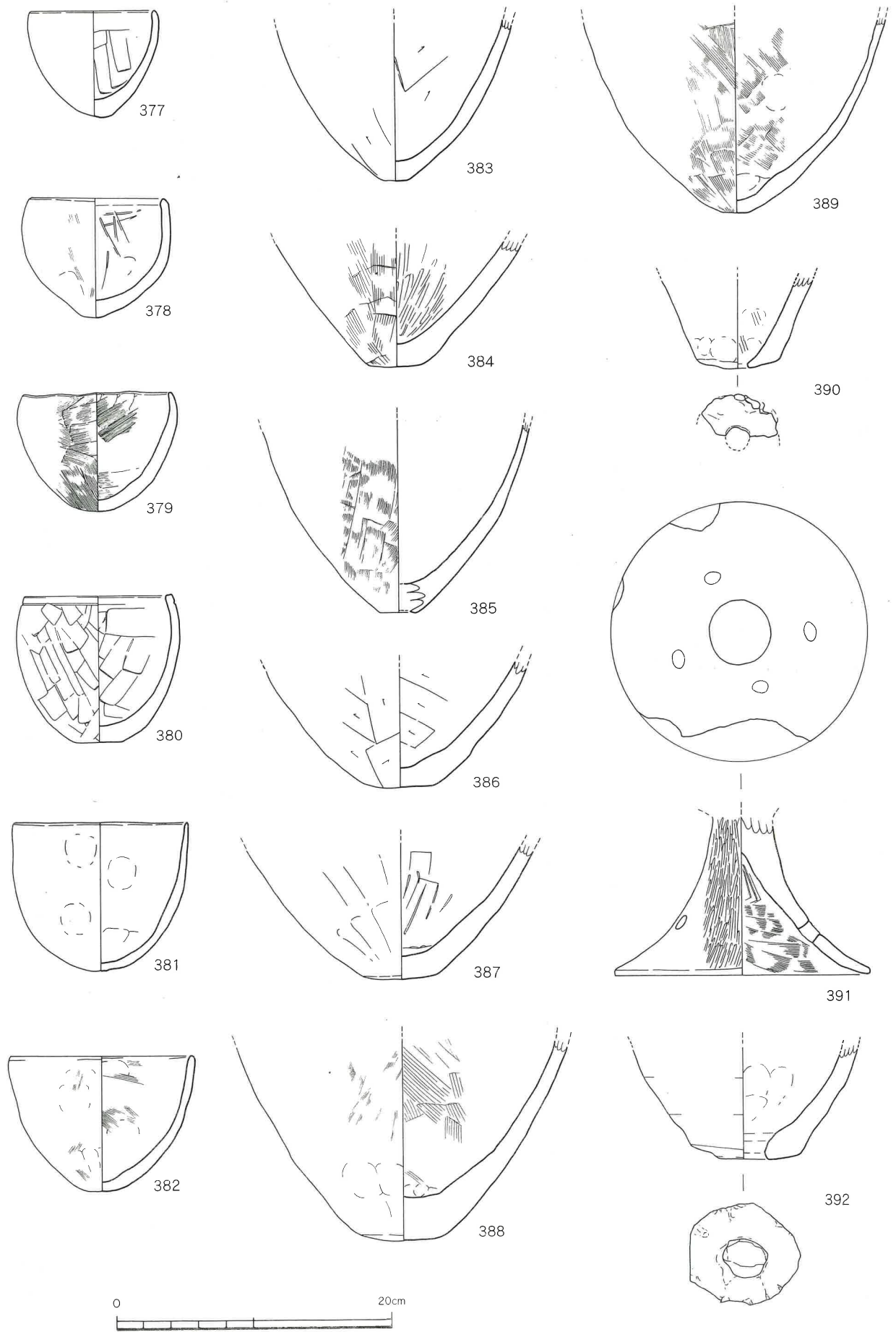
第186图 B区出土遗物实测图(7)



第187图 B区出土遗物实测图(8)



第188图 B区出土遗物实测图(9)

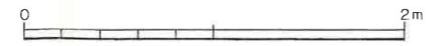
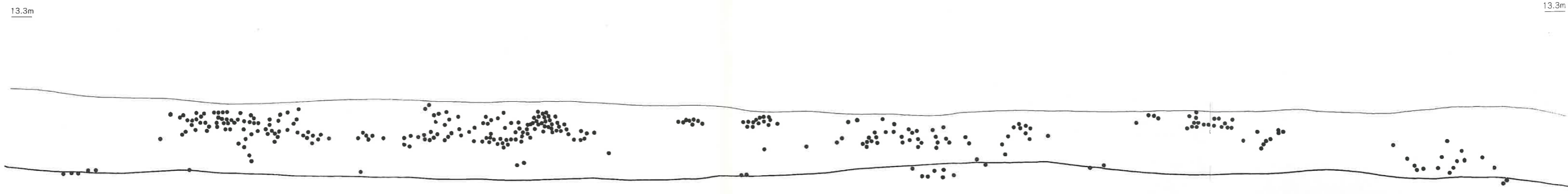
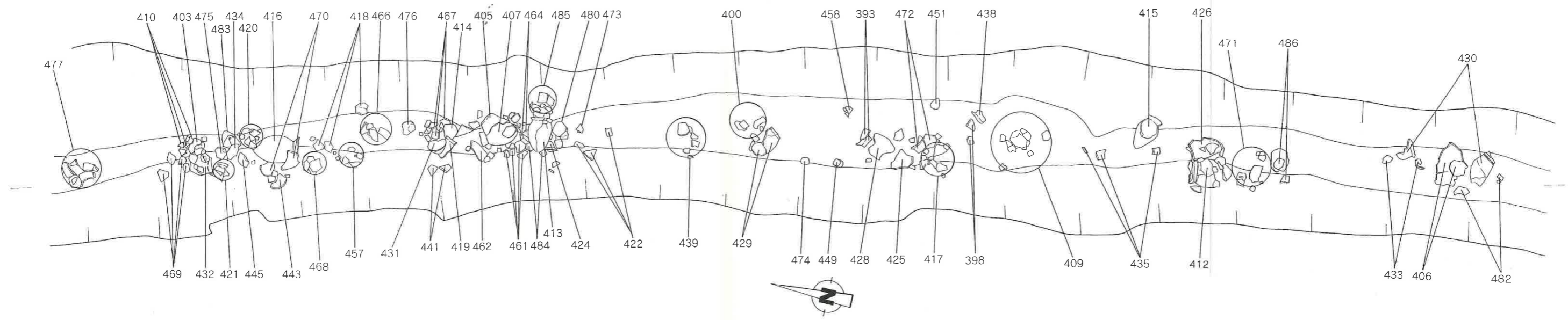


第189图 B区出土器物实测图(10)

C区出土遺物

393~405は複合口縁壺、406・407は短頸壺、408・409は壺の底部、410~463は甕、464~472は高坏、473は穿孔を持つ壺あるいは甕の底部、474は埴、475は脚付鉢、476は脚付鉢あるいは鉢、477は鉢、478~486は壺あるいは甕の底部である。393の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部には粗いハケ目を有す。内面調整は口縁部が粗いハケ目、頸部が不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は11.5cmである。394の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が波状文と横ナデ、頸部にはヘラ状工具痕及び不定方向ナデと指圧痕の残る凸帯を有す。内面調整はハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は14.1cmである。395の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が波状文、頸部が指圧痕と不定方向ナデを僅かに残す。内面調整はハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は14.2cmである。396の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整は波状文と横ナデ、内面はヘラ状工具痕及び指圧痕と横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色であるが、部分的に赤褐色の赤色塗彩が残る。口径は13.8cmである。397の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が波状文、頸部は指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整はハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。口径は16.2cmである。398の胎土には角閃石、赤色砂粒、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が波状文、頸部はハケ目及び横ナデとヘラ状工具で刻みを入れた凸帯を有す。内面調整は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。399の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が波状文、頸部にはハケ目と横ナデを残す。内面調整は指圧痕及びハケ目と横ナデを有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は14.9cmである。400の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が指圧痕及び横ナデと薄いハケ目、頸部には指圧痕、横ナデ、ハケ目と横ナデした凸帯を有す。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部がハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は16.3cmである。401の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は波状文と横ナデ、内面は指圧痕と横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。口径は16.4cmである。402の胎土には石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は波状文と横ナデ、内面は指圧痕及びハケ目と横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色であるが、部分的に赤褐色の赤色塗彩が残る。口径は16.6cmである。403の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が波状文、頸部以下には横ナデした凸帯及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。404の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部は横ナデと粗いハケ目、胴部には指圧痕と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部にかけては指圧痕と横ナデ、胴部には指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに明茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は12.4cmである。405の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整はハケ目とハケ状工具で刻みを施した凸帯を有す。内面調整はハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。406の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。胴部内外面には黒斑が観察できる。口径は13.9cmである。407の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケ目、底部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部はヘラナデと指圧痕、胴部はヘラナデとハケ目、底部は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明赤褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。口径は13.2cm、器高は38.1cmである。408の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面の調整は指圧痕及びハケ目

と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。409の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともにハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。胴部最大径は25.2cmである。410の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部がハケ目と横ナデ、胴部以下にはハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下にはハケ目とヘラナデを残す。胴部外面には黒斑を観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。口径は14.0cm、器高は18.2cmである。411の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.7cm、胴部最大径は16.7cm、器高は22.5cmである。412に胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が薄いハケ目と横ナデ、胴部以下にはハケ目と不定方向ナデを有す。内面調整は口縁部から頸部が指圧痕及びハケ目と横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕とハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.6cm、胴部最大径は18.6cm、器高は26.4cmである。413の胎土には石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部はハケ目、底部は不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はヘラナデとハケ目、底部は指圧痕を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.1cm、胴部最大径は20.8cm、器高は31.9cmである。414の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはヘラナデと不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.2cm、胴部最大径は19.8cm、器高は29.9cmである。415の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下はハケ目と不定方向ナデを施す。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、胴部以下にはハケ目及びヘラナデと指圧痕を確認できる。胴部には焼成後穿孔を1孔観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.8cm、胴部最大径は22.4cm、器高は34.3cmである。416の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部から胴部にかけては粘土積み上げ痕及び指圧痕、ハケ目、不定方向ナデ、ヘラナデ、底部には指圧痕をそれぞれ残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は21.5cm、胴部最大径は22.2cm、器高は36.0cmである。417の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケ目と不定方向ナデである。内面調整は指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.9cm、胴部最大径は19.1cmである。418の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部がハケ目と横ナデ、胴部は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部がハケ目と横ナデ、指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。口径は14.6cm、胴部最大径は18.9cmである。419の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはヘラナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は19.2cm、胴部最大径は21.6cmである。420の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデを有す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.3cm、



第190图 C区遗物出土状况实测图

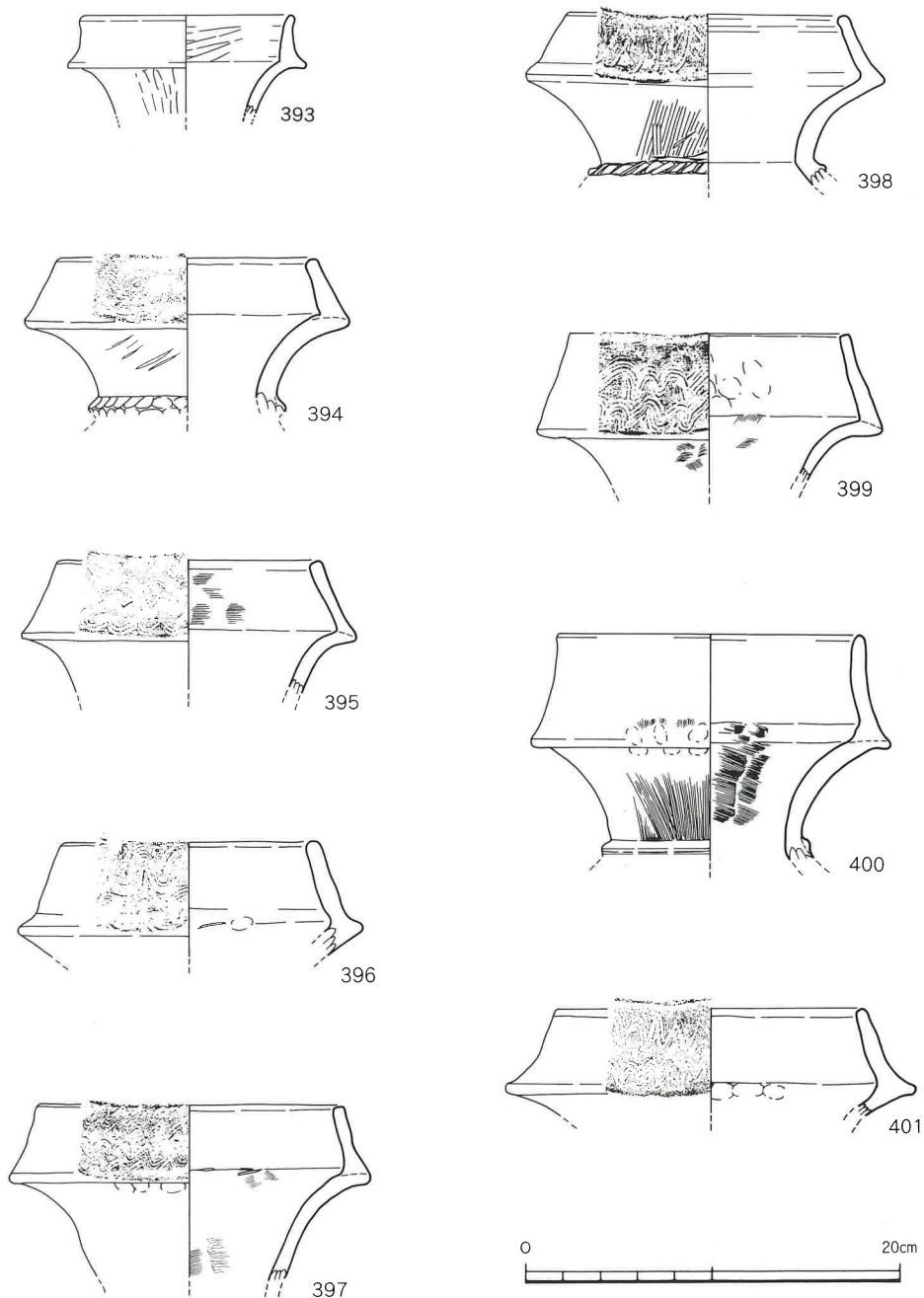
胴部最大径は23.7cmである。**421**の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目及び指圧痕と不定方向ナデを残す。内面は口縁部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗茶褐色がみられる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.7cm、胴部最大径は17.9cmである。**422**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はヘラナデ、粗いハケ目、指圧痕、不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.2cm、胴部最大径は22.1cmである。**423**の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケ目と不定方向ナデを観察できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びハケ目と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は22.6cm、胴部最大径は24.5cmである。**424**の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部がハケ目と横ナデ、胴部はハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部がヘラナデと横ナデ、胴部はヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は23.4cm、胴部最大径は21.4cmである。**425**の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が薄いハケ目と横ナデ、頸部には横ナデした凸帯を有し、胴部はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は23.5cm、胴部最大径は24.3cmである。**426**の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと薄いハケ目、頸部には指圧痕の残る凸帯を有し、胴部にはハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は25.2cm、胴部最大径は25.8cmである。**427**の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部がハケ目と横ナデ、胴部はハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部にはハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は22.4cm、胴部最大径は26.2cmである。**428**の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は22.3cmである。**429**の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は粘土積み上げ痕及びハケ目と不定方向ナデ、内面は粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は24.2cmである。**430**の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部が横ナデ、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整は頸部に指圧痕と横ナデ、胴部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は25.5cmである。**431**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部が横ナデ、胴部以下は粘土積み上げ痕、指圧痕、不定方向ナデ、ハケ目、ヘラナデをそれぞれ確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は22.6cmである。**432**の胎土には石英、角閃石、金雲母、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデ、内面は粗いヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は20.5cmである。**433**の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.5cmである。**434**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと薄いハケ目、頸部以下にはハケ目を

残す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は16.8cmである。**435**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部がへら磨き、頸部以下には粘土積み上げ痕及び不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.2cmである。**436**の胎土には長石、角閃石、金雲母、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目を施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。口径は17.4cmである。**437**の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には薄いハケ目が認められる。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には薄いハケ目が残る。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は18.4cmである。**438**の胎土には石英、角閃石、金雲母、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下はハケ目である。内面調整は口縁部から頸部がハケ目、頸部以下には指圧痕及びへらナデと不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は18.9cmである。**439**の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケ目を施す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.0cmである。**440**の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部は横ナデ、胴部にはへら状工具痕と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕とへらナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.6cmである。**441**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを観察できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.9cmである。**442**の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が指圧痕及びへらナデと横ナデ、頸部以下はへらナデと不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及びへら削りと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.1cmである。**443**の胎土には長石、角閃石、黒色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部がハケ目と横ナデ、頸部以下がハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部がハケ目と横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は21.3cmである。**444**の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと薄いハケ目、頸部以下にはハケ目を施す。内面調整は口縁部が横ナデと薄いハケ目、頸部以下には粘土積み上げ痕及び不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は22.2cmである。**445**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、黒色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目を有す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は23.7cmである。**446**の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部には指圧痕の残る凸帯を貼りつけ、胴部は不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は粗いへらナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は26.8cmである。**447**の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ調整は内外面ともに磨きとへらナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**448**の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整はハケ目とへらナデ、内面はへらナデと不定

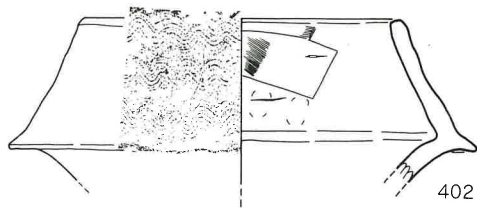
方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**449**の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面はヘラ状工具痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**450**の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともにヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が暗茶褐色、内面が橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。**451**の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともにヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。**452**の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整はヘラナデと不定方向ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**453**の胎土には長石、石英、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ調整は内外面ともにヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が淡橙色、内面が茶褐色である。**454**の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ調整は内外面ともにヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**455**の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともにヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**456**の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。**457**の胎土には石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が淡橙色、内面が暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**458**の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデを僅かに確認できる。内面調整は不定方向ナデとヘラ磨きを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**459**の胎土には長石、石英、角閃石、茶色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデとヘラ状工具痕を残す。内面調整は粗いヘラナデと指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。**460**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面はヘラナデと薄いハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**461**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**462**の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黒褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**463**の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕及び薄いハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。**464**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ坏部の調整は不明で、脚部外面は粗い磨きと横ナデ、内面はヘラナデと横ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。底径は16.0cmである。**465**の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ坏部の調整は磨き、脚部外面はヘラ磨きと横ナデ、内面はシボリ痕及びハケ目と横ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。焼成前穿孔は4箇所、脚部外面には黒斑が観察できる。底径は16.2cmである。**466**の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ坏部調整はヘラ磨き、脚部外面はヘラ磨きと横ナデ、内面はヘラ削り及びハケ目と横ナデを残す。焼成は良好で、色調は外面が赤色塗彩のため赤褐色、内面は淡橙色である。焼成前穿孔は4箇所に確認できる。底径は17.0cmである。**467**の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ坏部調整は不明、脚部外面はヘラ磨き及びハケ目と横ナデ、内面はヘラ削りと横ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。焼成前穿孔は5箇所に確認できる。底径は18.5cmである。**468**の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横

ナデ及びハケ目と不定方向ナデ、内面は横ナデ及びヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は淡赤褐色である。口径は20.1cmである。469の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデ、指圧痕、ヘラナデ、不定方向ナデである。内面調整は縦方向ナデ及び指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は22.2cmである。470の胎土には石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ坏部外面の調整は横ナデと磨き、脚部外面は指圧痕、ヘラナデ、ハケ目、横ナデである。坏部内面の調整は横ナデ及び磨きと指圧痕、脚部内面はヘラ削り及び指圧痕と横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。口径は23.8cm、底径は15.8cm、器高は16.5cmである。471の胎土には石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれ坏部の外面調整は横ナデ、指圧痕、不定方向ナデ、磨き、脚部外面は指圧痕と磨きを残す。坏部の内面調整は横ナデ及び磨きと指圧痕、脚部内面は不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は30.1cmである。472の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整をみると、口縁部は波状文を施したのち2個で1対の円形浮文が3箇所には貼りつけられている。口縁部以下には横ナデとハケ目がみられる。内面調整は横ナデ及びヘラ磨きとハケ目を観察できる。焼成は良好で、色調は赤色塗彩のため内外面ともに赤褐色を帯び、地色は灰褐色である。口径は32.2cmである。473の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれ外面調整はハケ目及び指圧痕、底部には指整形の後焼成前穿孔を1孔設けている。内面調整は磨きを僅かに残す。外面には黒斑を観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。474の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒、茶色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデ及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。外面には黒斑を観察できる。口径は13.6cm、器高は8.8cmである。475の胎土には石英、長石、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にハケ目及びヘラ削りと不定方向ナデが残る。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下はヘラ削り及び指圧痕と不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.8cmである。476の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口唇部が横ナデ、口縁部から頸部はヘラ磨き、胴部は指圧痕とハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ヘラ磨き、胴部には指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。口径は18.2cmである。477の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ後ハケ目、頸部から胴部はハケ目、底部にはヘラ状工具痕とハケ目を確認できる。内面調整は口縁部から胴部がハケ目、底部は指圧痕とハケ目である。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。口径は28.4cm、器高は18.6cmである。478の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は縦ナデと不定方向ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。479の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は縦ナデと不定方向ナデ、内面はヘラ状工具痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。480の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はヘラ状工具痕と不定方向ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。481の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整はヘラナデと不定方向ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。482の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。外面には黒斑を観察できる。483の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。484の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整はハケ目及び不定方向ナデ、内面はヘラナデ及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。485の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに指圧痕と不定方向ナデである。

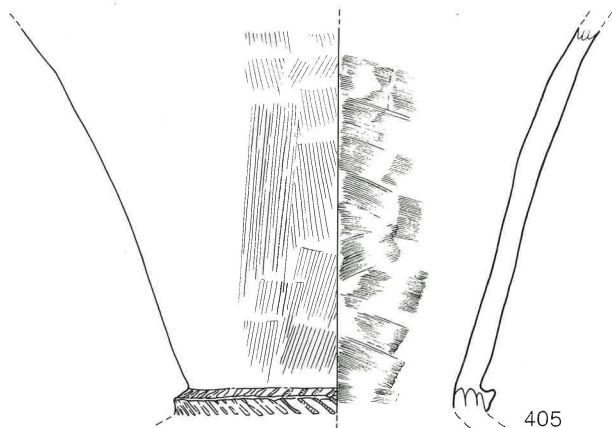
焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。486の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はタタキ後磨き及びハケ目と不定方向ナデで、内面は器面剥離が著しいため調整は不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。外面には黒斑を観察できる。393~486は弥生時代後期後半から終末の土器群と考えたい。



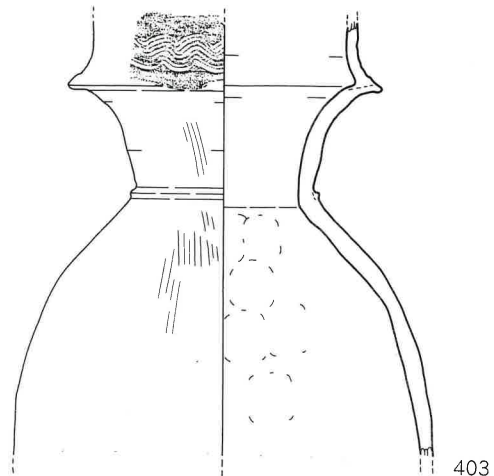
第191図 C区出土遺物実測図(1)



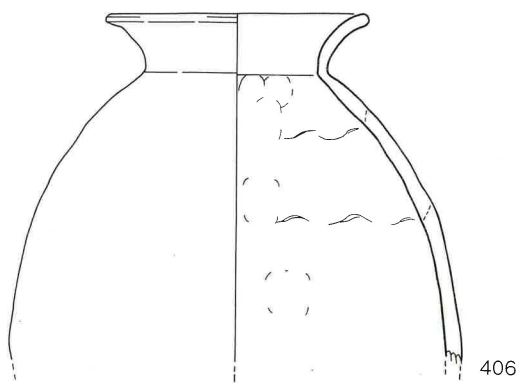
402



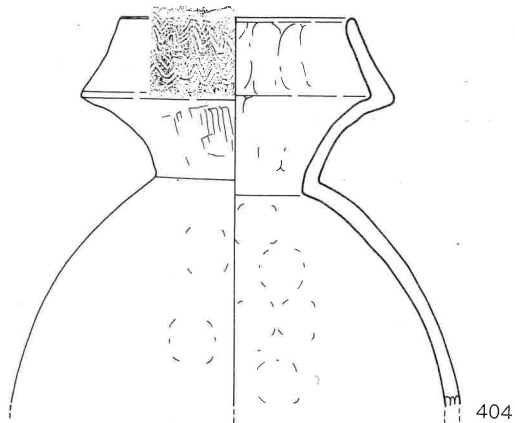
405



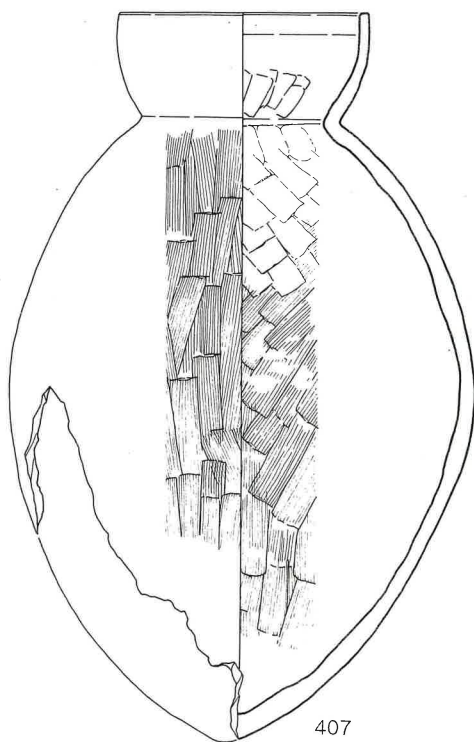
403



406



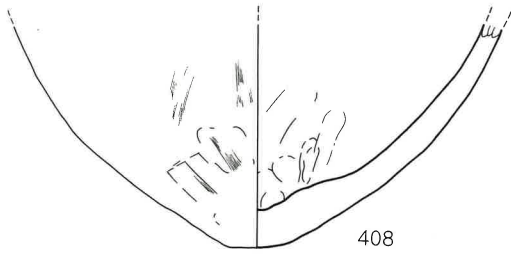
404



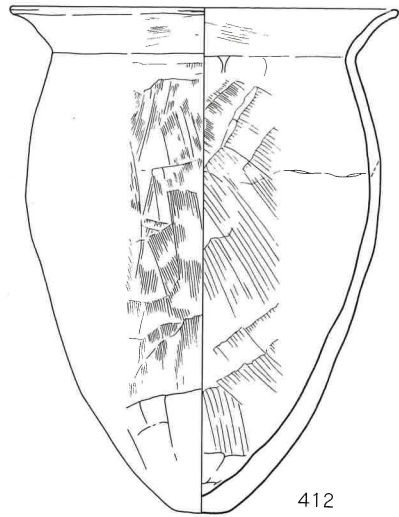
407



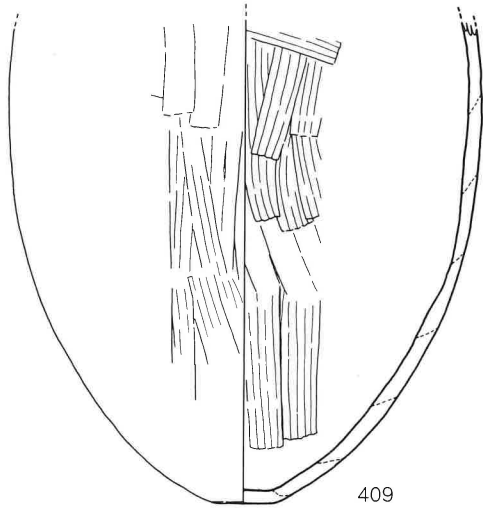
第192图 C区出土遗物实测图(2)



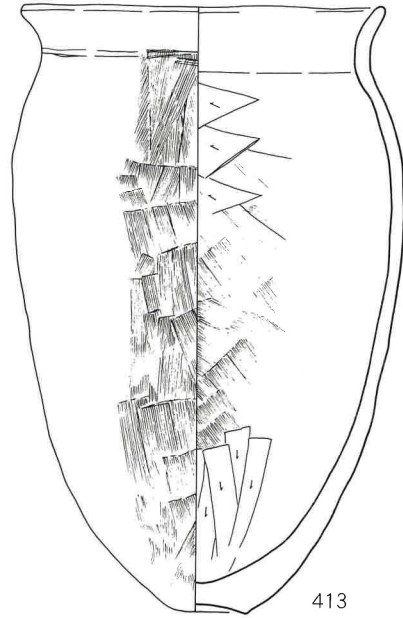
408



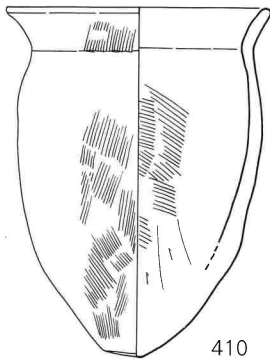
412



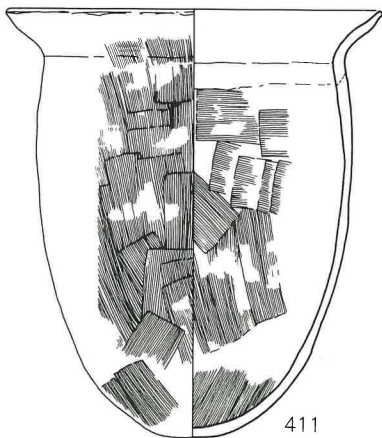
409



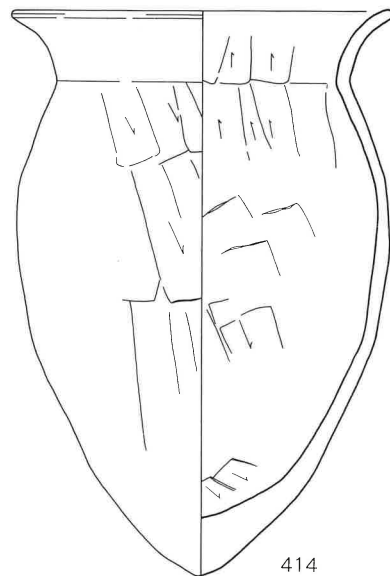
413



410



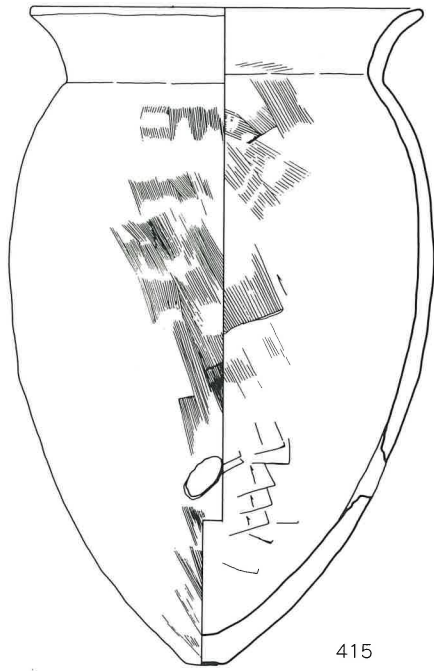
411



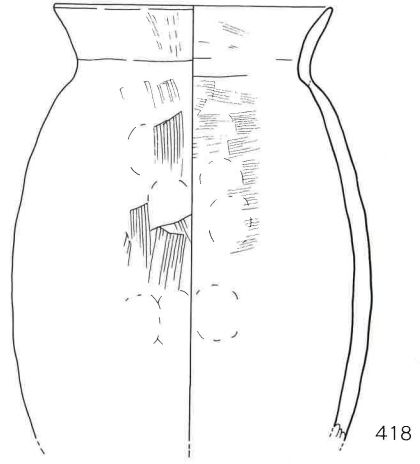
414



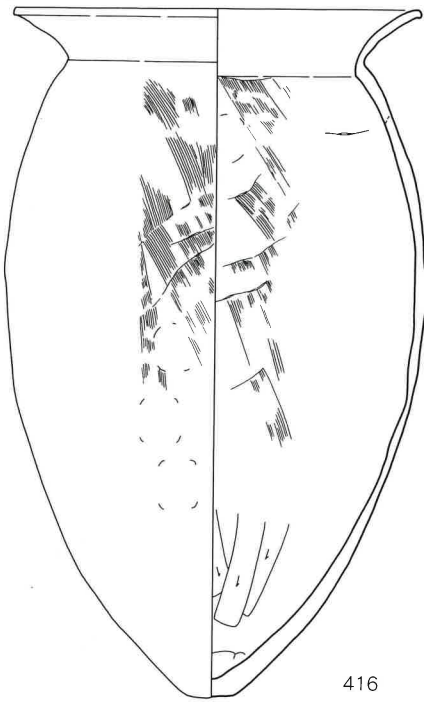
第193图 C区出土遗物实测图(3)



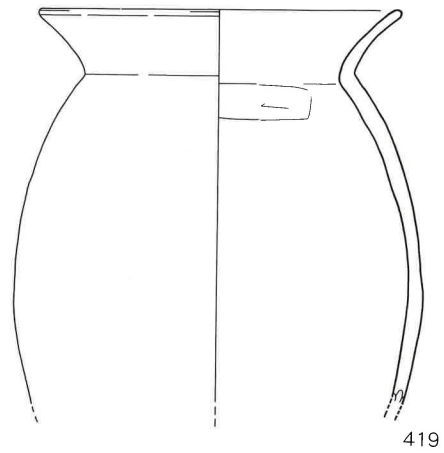
415



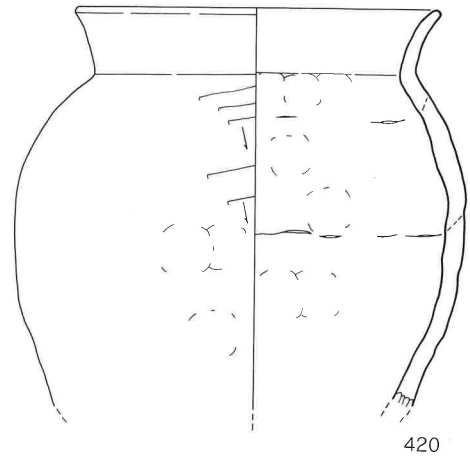
418



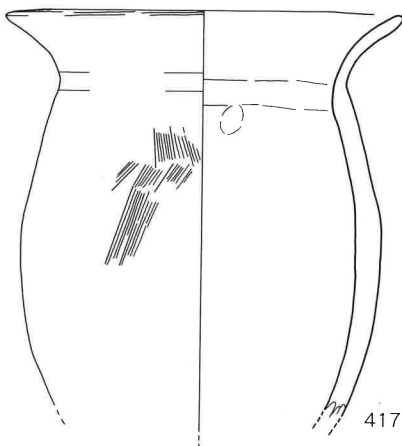
416



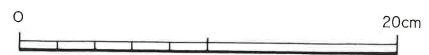
419



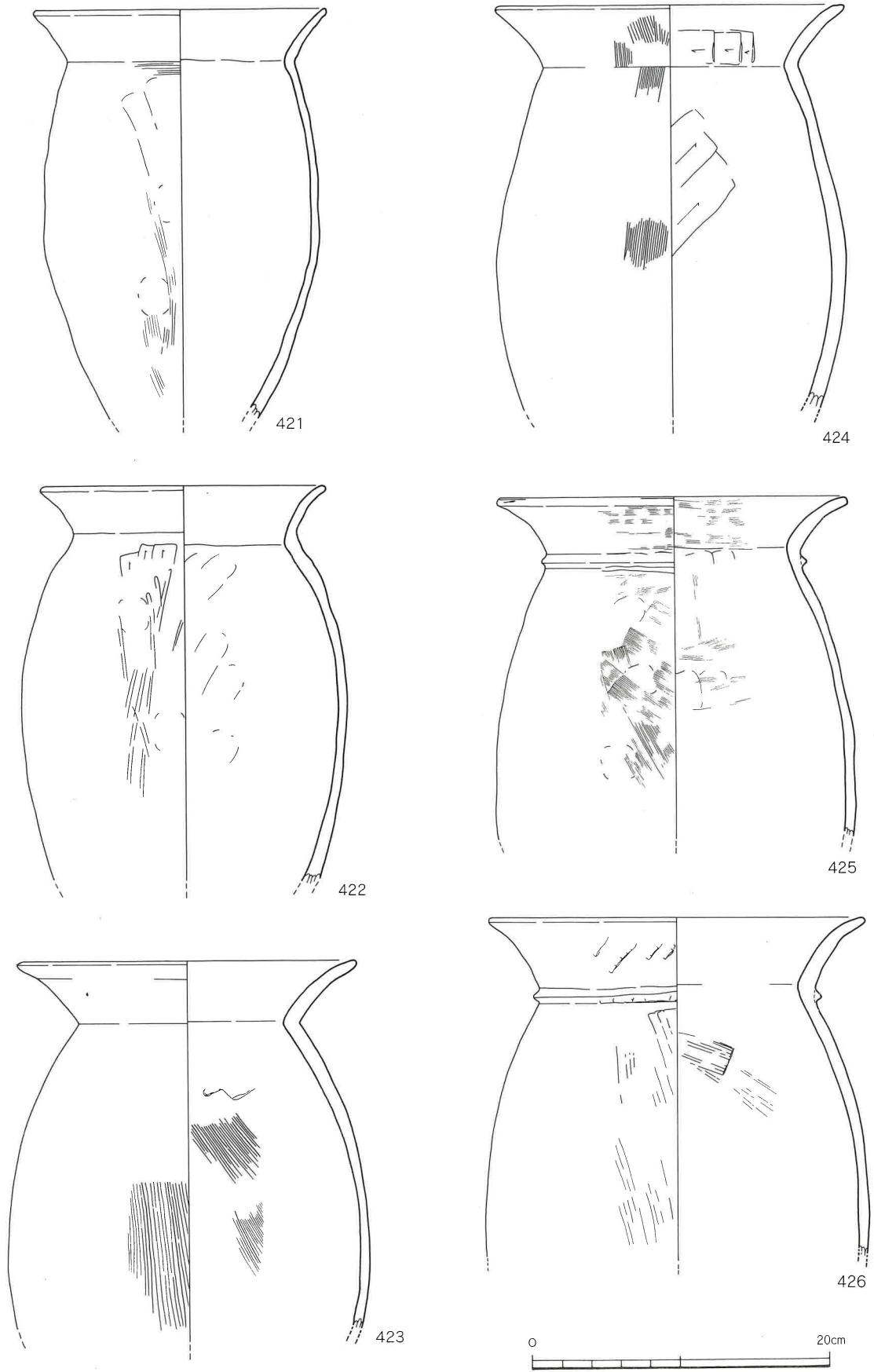
420



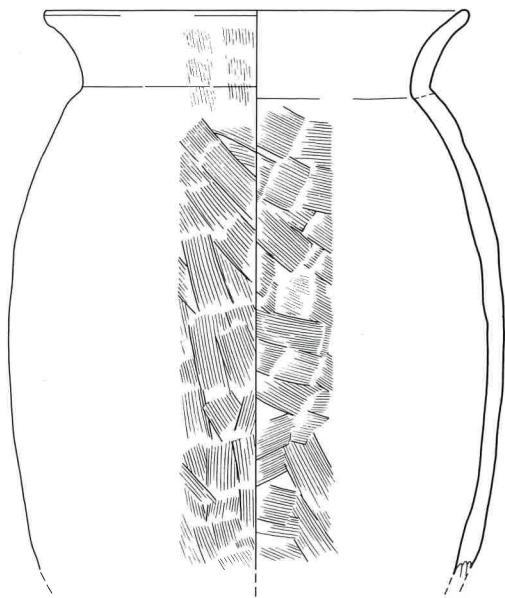
417



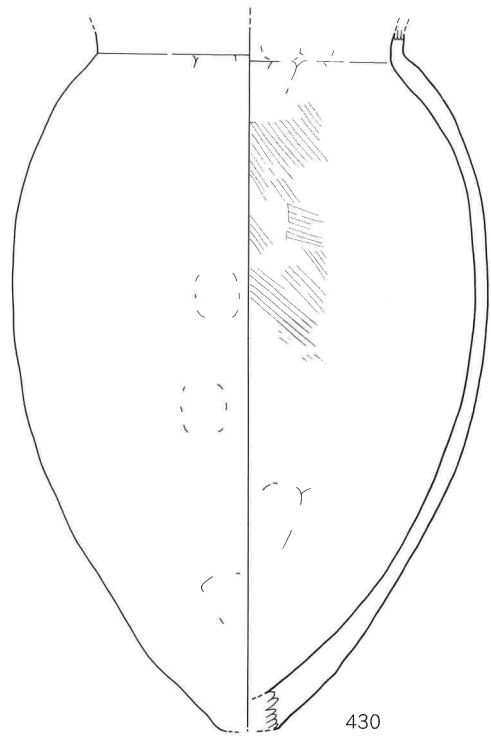
第194图 C区出土遗物实测图(4)



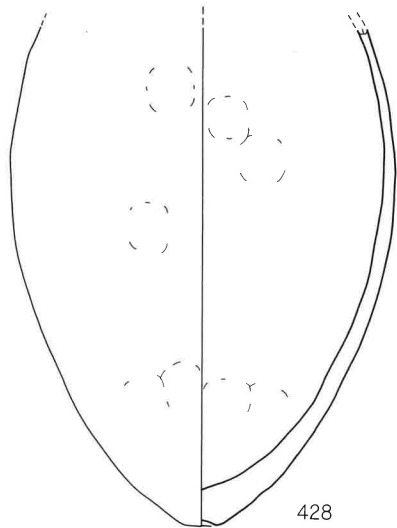
第195图 C区出土遗物实测图(5)



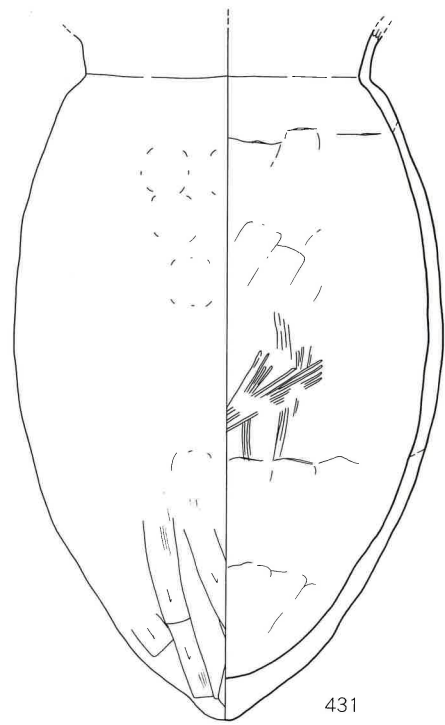
427



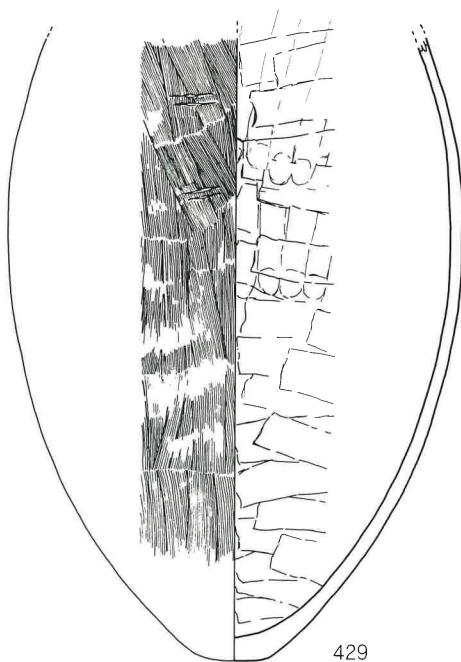
430



428



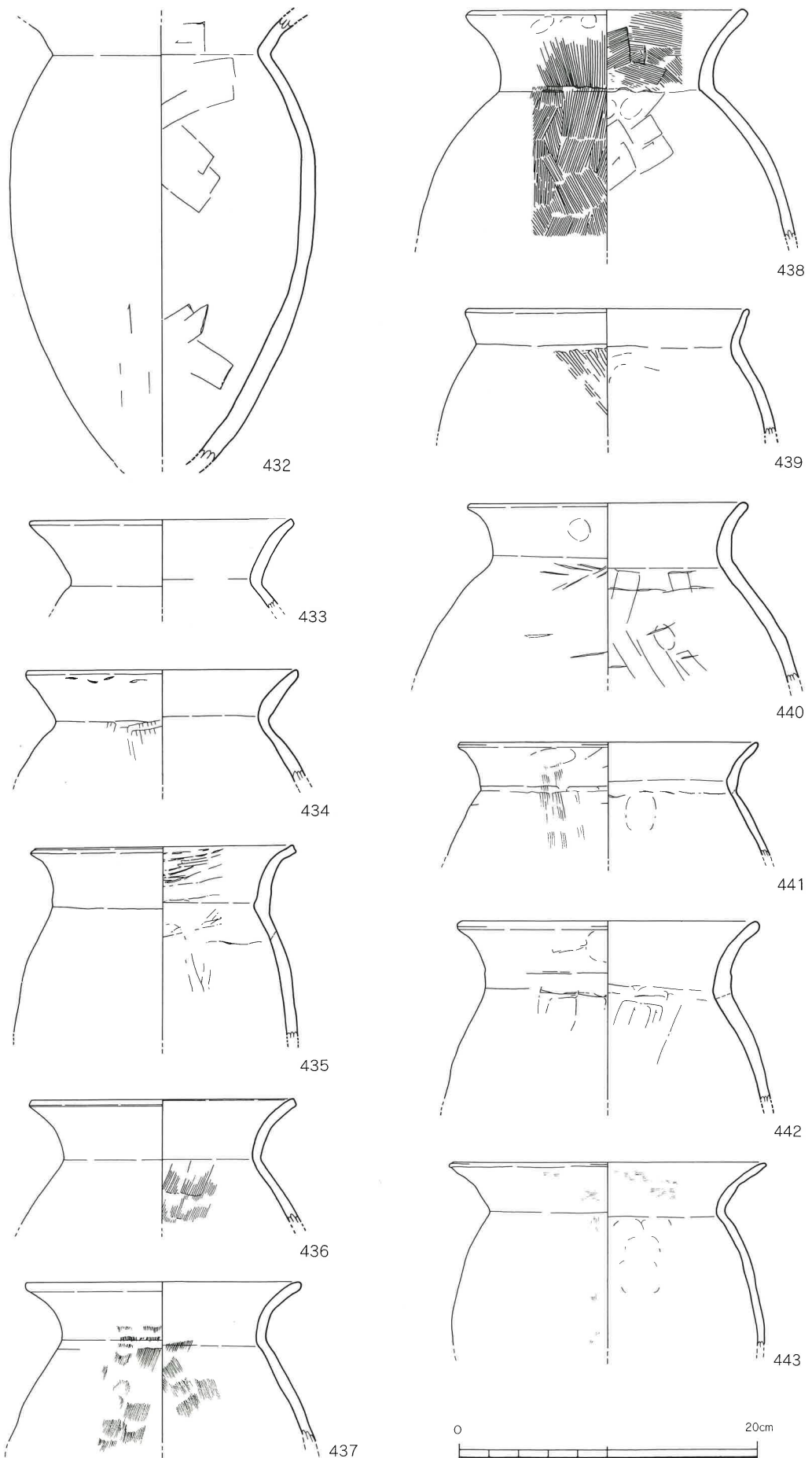
431



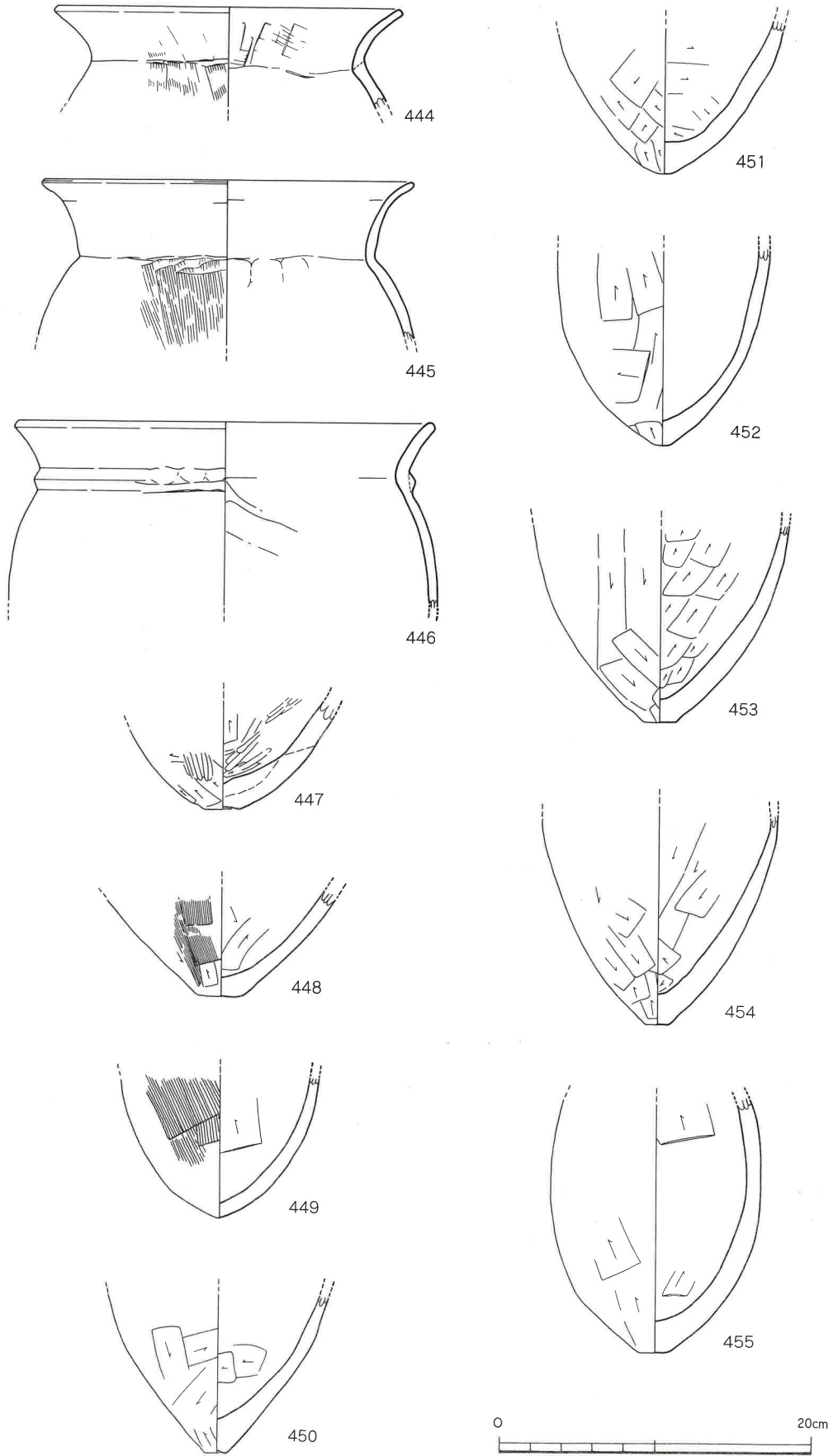
429



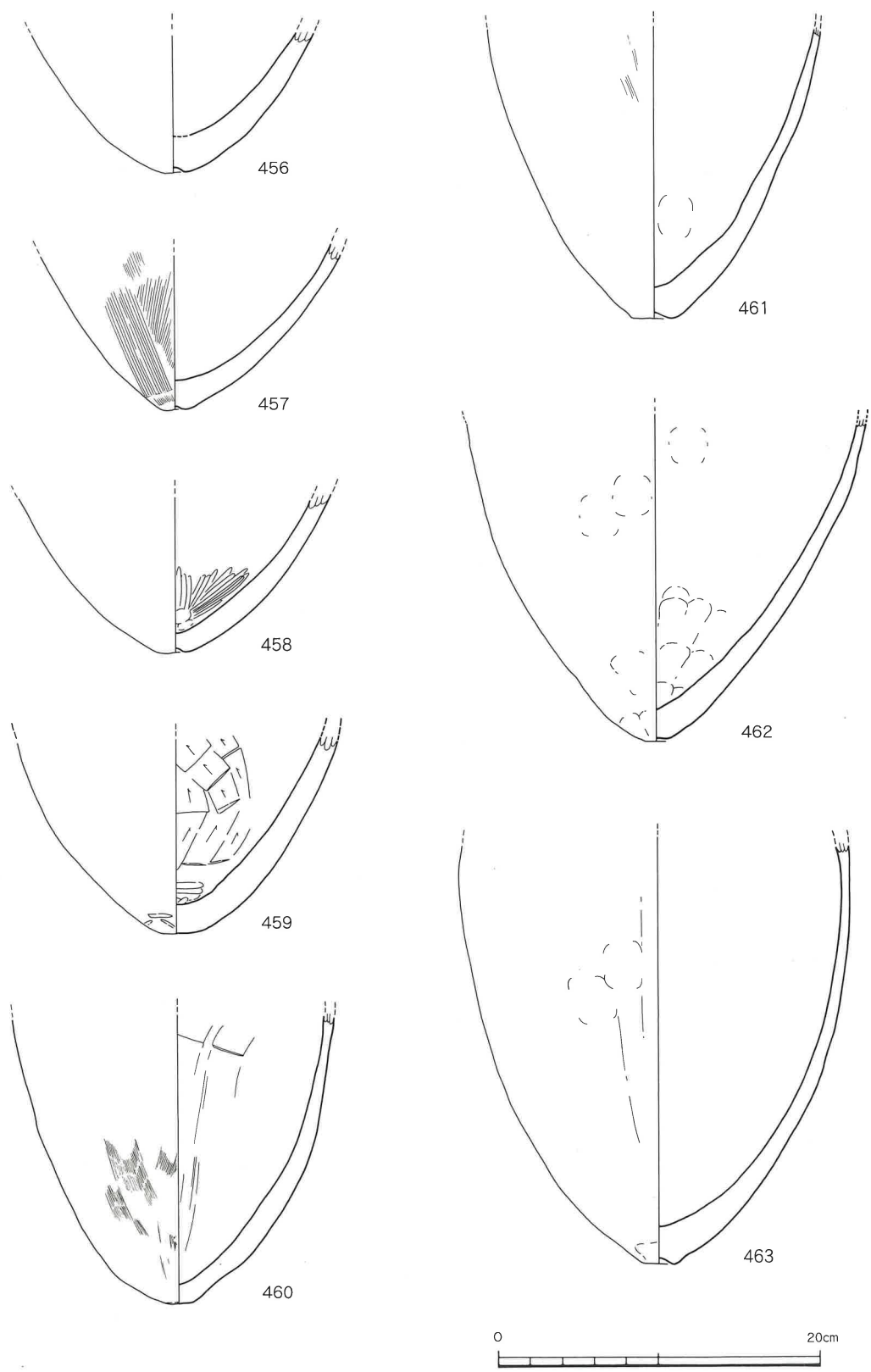
第196图 C区出土遗物实测图(6)



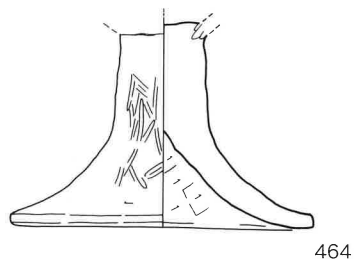
第197图 C区出土文物实测图(7)



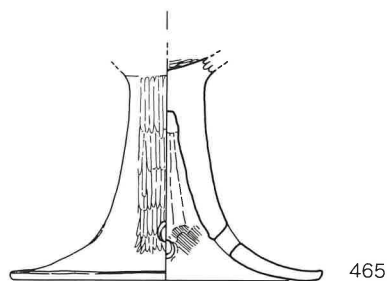
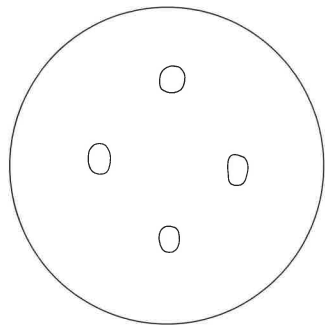
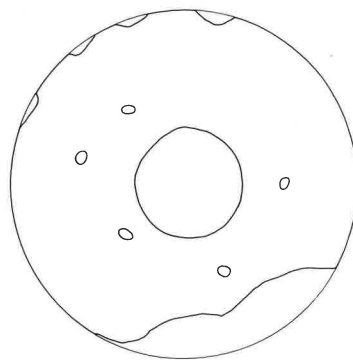
第198图 C区出土遗物实测图(8)



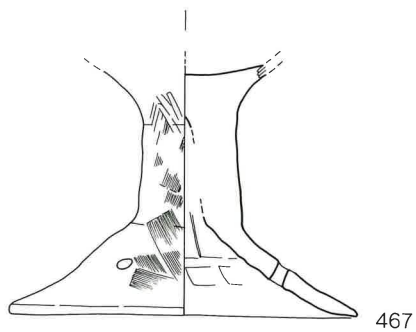
第199图 C区出土遗物实测图(9)



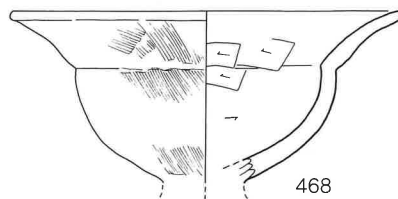
464



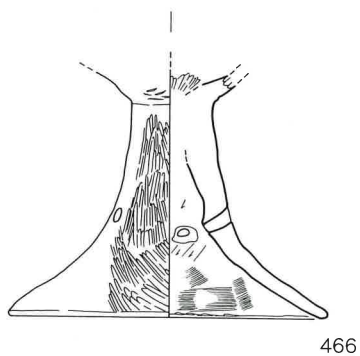
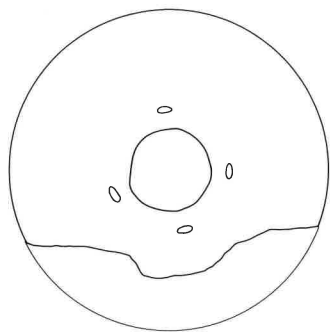
465



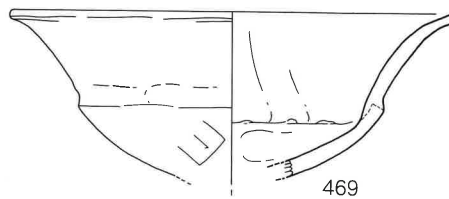
467



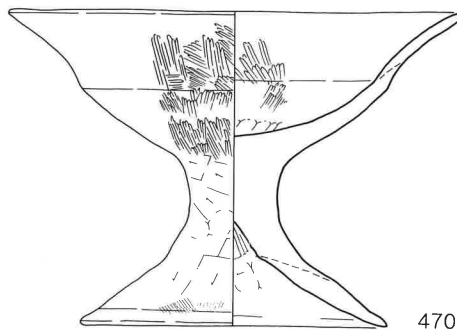
468



466



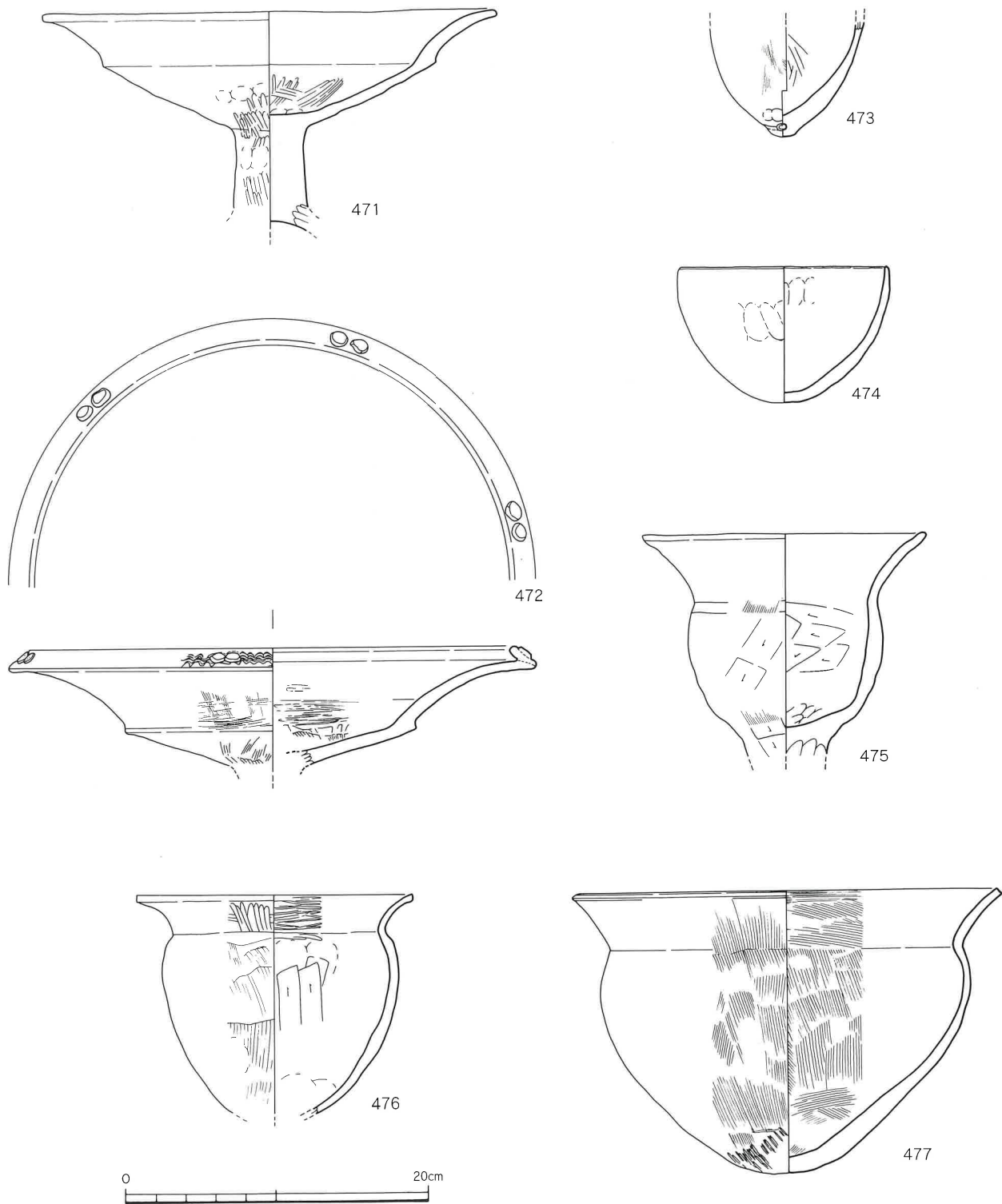
469



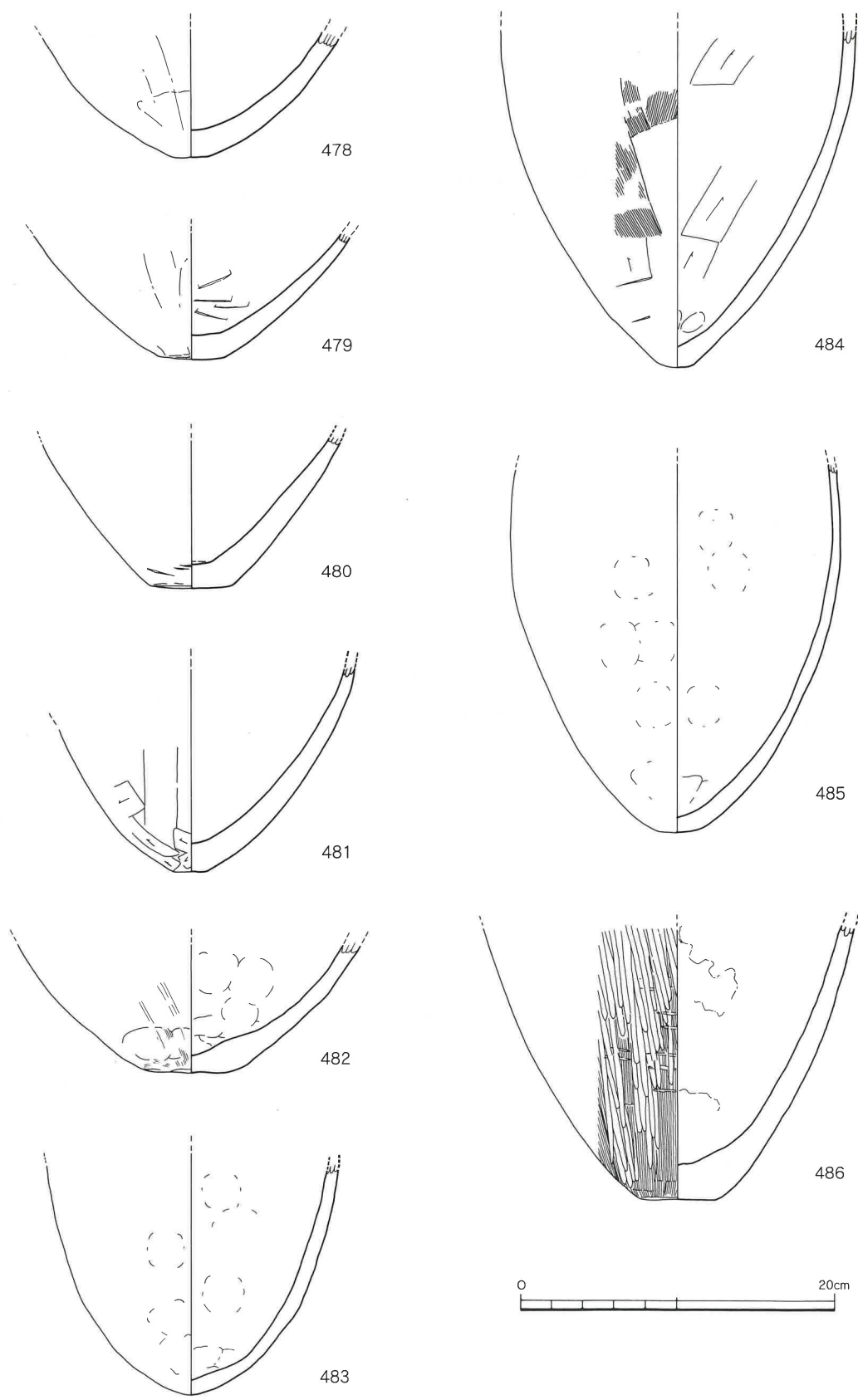
470



第200图 C区出土遗物实测图(10)



第201图 C区出土遗物实测图(11)

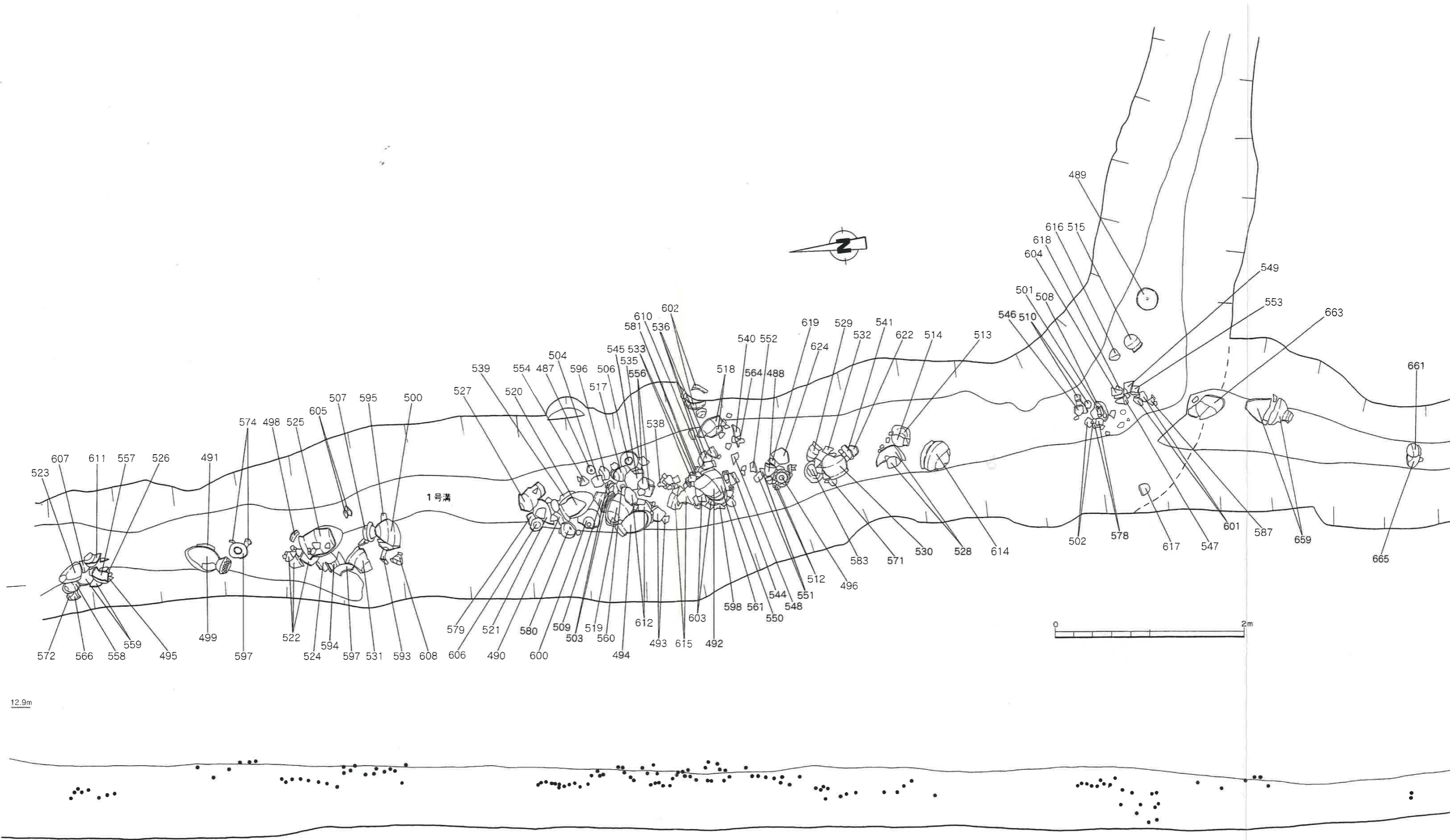


第202图 C区出土遗物实测图(12)

D区出土遺物

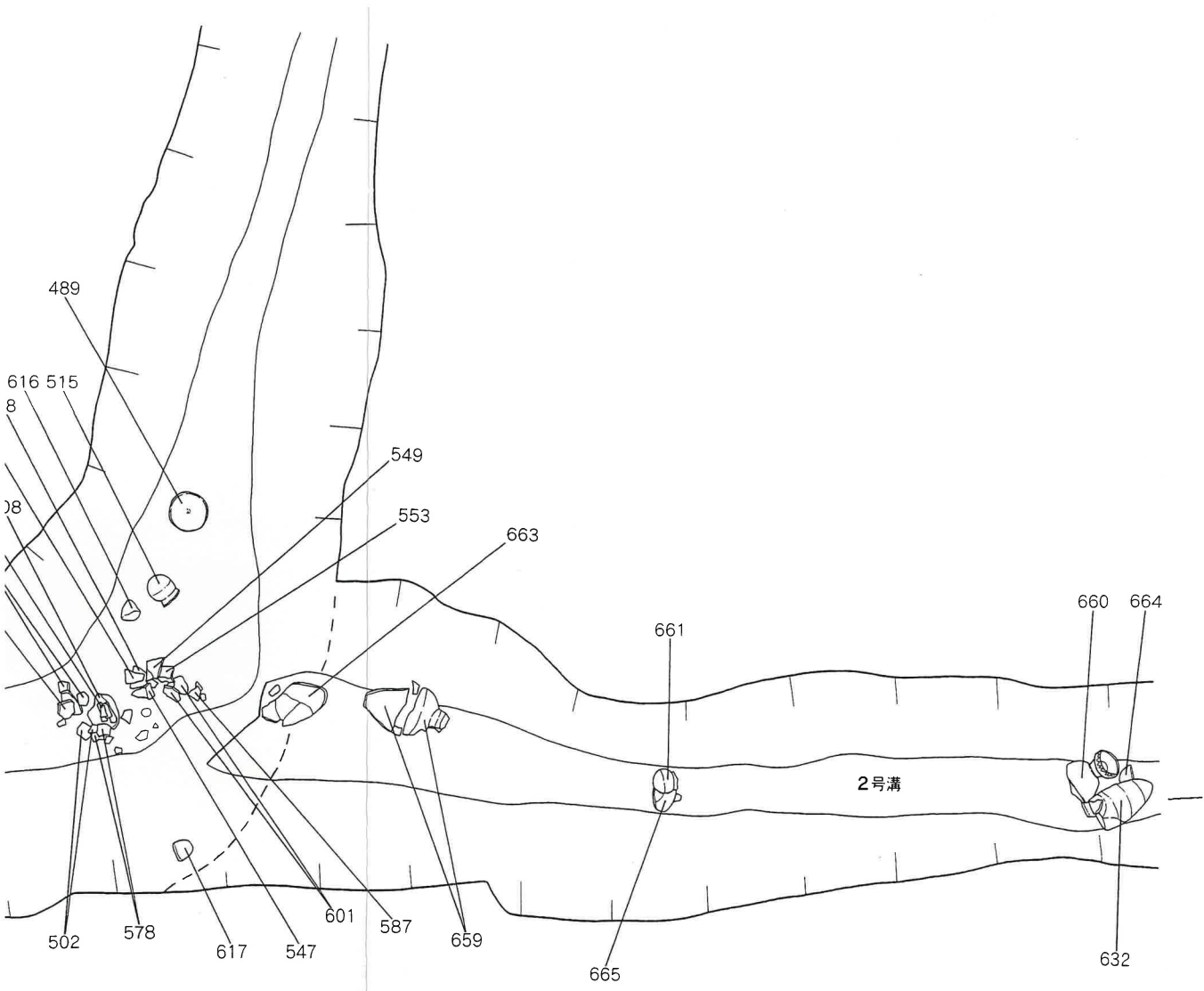
487～489は長頸壺、490～493は短頸壺、494～509は複合口縁壺、510～514は壺、515～592は甕、593～603は高坏、604は高坏あるいは脚付鉢、605～609は脚付鉢、610～615は鉢、616～618は碗、619は甌、620～626は壺あるいは甕である。487の胎土には石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整はハケ目及びへら磨きを基調としている。頸部には横ナデした凸帯と円形浮文（3個残存）を貼りつけ、その後竹管文を施している。胴部には横ナデした凸帯にハケ状工具による刻み目及び竹管文を施している。内面調整は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は外面が赤色塗彩により赤色、内面は地色の淡黄橙色である。胴部最大径は14.0cmである。488の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部に凸帯を貼りつけてへら磨き、胴部は横ナデ及びへら磨き後、横ナデした凸帯を設け、刻み目を施している。内面は指圧痕及びへらナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は外面に赤色塗彩が僅かに残り赤褐色、内面は地色の淡橙色である。胴部最大径は17.9cmである。489の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は磨きで、頸部に1条、胴部に2条の凸帯を貼りつけている。内面調整は頸部に不定方向ナデを確認できるほかは不明である。焼成は良好で、色調は外面が赤色塗彩のため赤色に、内面は地色の淡褐色である。胴部最大径は21.8cmである。490の胎土には石英、角閃石、金雲母を含む。外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下はハケ目とへら磨きである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕、ハケ目、へら磨き、不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は赤色塗彩のため内外面ともに赤色を帯び、地色は淡褐色である。口径は12.2cm、胴部最大径は15.1cmである。491の胎土には石英、長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部には2孔を1対とする焼成前穿孔を2箇所（口縁部を挟む対称位置）に設けている。胴部以下にはハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部上半分にはハケ目とへらナデ、胴部下半分から底部には不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。胴部外面には黒斑が確認できる。口径は11.2cm、胴部最大径は19.8cm、器高は18.3cmである。492の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと薄いハケ目、頸部には指圧痕を残す凸帯を設けている。胴部はハケ目と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部から頸部に横ナデとへらナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。口径は13.1cm、胴部最大径は23.6cmである。493の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下はハケ目と不定方向ナデを残す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は9.5cm、胴部最大径は25.4cmである。494の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部に波状文、頸部は横ナデ及び指圧痕を残す凸帯を設けている。胴部はハケ目、底部はハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部が横ナデと薄いハケ目、頸部は指圧痕とハケ目、胴部はハケ目、底部にはハケ目と指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、胴部外面に煤の沈着がみられる。口径は12.7cm、胴部最大径は19.5cm、器高は37.6cmである。495の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部には指圧痕及びハケ目を施すほか、指圧痕の残る凸帯を貼りつけている。内面調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部には薄いハケ目と指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。口径は14.3cmである。496の胎土には石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部が指圧痕及びハケ目と横ナデした凸帯を有す。内面調整は横ナデ及びハケ目と指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は13.6cmである。497の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデ及び指圧痕とハケ目である。内面は指圧痕及び横ナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。口径は15.8cmである。498の胎土には石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデとハケ目で、頸部には指圧痕を残す凸帯を有す。内面は口縁部がハケ目と横ナデで、頸部付近は剥落のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は16.4cmである。499の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部がへらナデ及

びハケ目と指圧痕の残る凸帯を有す。胴部から底部はハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部がハケ目と不定方向ナデ、胴部が粗いヘラナデ、底部がヘラナデと僅かにハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色であるが、口縁部に僅かに赤色塗彩を残す。口径は13.1cm、胴部最大径は26.2cm、器高は46.4cmである。500の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕とハケ目及び横ナデした凸帯を有す。胴部にはハケ目後、粗く横ナデした凸帯を貼りつけている。内面調整は口縁部が指圧痕、頸部がヘラナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕とヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口縁部と胴部に黒斑を観察できる。口径は15.0cm、胴部最大径は34.2cmである。501の胎土には石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部にはハケ目と指圧痕の残る凸帯を貼りつけている。内面調整は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は12.8cmである。502の胎土には石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部には横ナデとハケ目及び指圧痕の残る凸帯を貼りつけている。内面調整は横ナデと薄いハケ目を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は13.3cmである。503の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は横ナデと波状文で、頸部に横ナデした凸帯を有す。内面調整はハケ目と横ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は14.8cmである。504の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部には指圧痕とハケ目及び指圧痕の残る凸帯を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。口径は14.6cmである。505の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部がハケ目と指圧痕及び横ナデした凸帯を有す。内面調整は口縁部が横ナデ及びハケ目とヘラナデ工具痕、頸部にはハケ目と不定方向ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。口径は15.6cmである。506の胎土には角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が波状文と横ナデ、頸部には横ナデとハケ目及び横ナデした凸帯を有す。内面調整は横ナデ及びハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。口径は13.8cmである。507の胎土には石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は波状文と横ナデ、内面は横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は16.8cmである。508の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部が横ナデとハケ目である。内面調整は口縁部が横ナデと指圧痕、頸部がハケ目である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄色である。口径は20.8cmである。509の胎土には角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部には指圧痕とハケ目及び指圧痕の残る凸帯を有す。内面調整は口縁部が指圧痕、頸部がハケ目及びヘラナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は20.2cmである。510の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部がハケ目後、横ナデした凸帯を施し、胴部にはハケ目と指圧痕を確認できる。内面調整は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。511の胎土には石英、長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部が横ナデ、胴部はハケ目と指圧痕である。内面調整は頸部がハケ目と横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。512の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデとヘラナデである。内面調整は胴部が指圧痕と不定方向ナデ、底部には強く押さえた不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。胴部最大径は12.8cmである。513の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰白色である。514の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。515の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下は薄いハケ目と縦方向ナデを確認できる。内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がヘラナデ、底部が不定方向ナデで

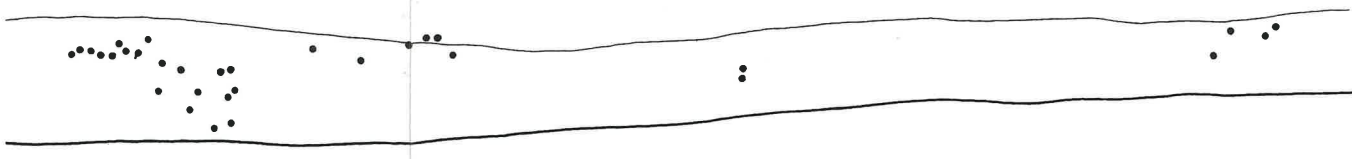


12.9m

第203図 D区及び2号溝遺物出土状況実測図



12.9m



ある。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は13.3cm、胴部最大径は15.0cm、器高は17.4cmである。**516**の胎土には長石、角閃石、茶色砂粒が含まれ調整は口唇部が横ナデ、外面底部が不定方向ナデを施すは内外面ともに丁寧なヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。胴部から底部外面には黒斑を確認できる。口径は12.9cm、器高は14.1cmである。**517**の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケ目、底部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下はハケ目である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は13.8cm、胴部最大径は12.3cm、器高は18.0cmである。**518**の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデとハケ目、胴部以下はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.1cm、胴部最大径は20.8cm、器高は36.2cmである。**519**の胎土には石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部はハケ目と不定方向ナデ、底部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.8cm、胴部最大径は23.3cm、器高は35.7cmである。**520**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部はハケ目、底部はハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部がハケ目、底部がハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.2cm、胴部最大径は23.7cm、器高は38.4cmである。**521**の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部から胴部はハケ目と指圧痕、底部は指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部が指圧痕と横ナデ、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.1cm、胴部最大径は20.8cm、器高は36.2cmである。**522**の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下は指圧痕及び不定方向ナデとハケ目を残す。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部が指圧痕と横ナデ、胴部はヘラナデ、ハケ目、指圧痕、不定方向ナデ、底部は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.1cm、胴部最大径は22.4cm、器高は37.6cmである。**523**の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が粗いハケ目、胴部以下は不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と縦方向ナデ、底部は指圧痕と縦方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。口径は13.5cm、胴部最大径は15.1cm、器高は23.5cmである。**524**の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部は指圧痕及び横ナデとハケ目、胴部以下は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕とヘラナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕、ヘラ削り、不定方向ナデ、指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は24.0cm、胴部最大径は22.5cm、器高は32.3cmである。**525**の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部がハケ目と指圧痕、胴部以下がハケ目、ヘラナデ、指圧痕、不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部が指圧痕と横ナデ、胴部以下が粘土積み上げ痕及びヘラナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は26.1cm、胴部最大径は28.2cm、器高は43.8cmである。**526**の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部以下は指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰白

色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は13.0cm、胴部最大径は15.1cm、器高は21.3cmである。527の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部がハケ目、胴部がハケ目と指圧痕、底部がヘラナデ及び指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部がハケ目と指圧痕、胴部が粘土積み上げ痕、ヘラナデ、指圧痕、不定方向ナデ、底部が指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.5cm、胴部最大径は20.6cm、器高は33.3cmである。528の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下は不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデと指圧痕、胴部以下が不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.1cm、胴部最大径は20.8cm、器高は35.5cmである。529の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部が指圧痕とハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.1cm、胴部最大径は20.3cmである。530の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下にはハケ目を残す。内面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部には指圧痕とハケ目を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は20.1cm、胴部最大径は24.6cmである。531の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部が不定方向ナデとハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕、ハケ目、ヘラナデ、不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。口径は20.9cm、胴部最大径は26.6cmである。532の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部が指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は11.9cm、胴部最大径は23.5cmである。533の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部がハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕と横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。口径は20.8cm、胴部最大径は24.1cmである。534の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部がハケ目と指圧痕である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は22.8cm、胴部最大径は26.1cmである。535の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデと粗いハケ目、胴部が粗いハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は24.6cmである。536の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が縦方向ナデと横ナデ、胴部は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。口径は18.4cmである。537の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部は横ナデとハケ目、胴部はハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がヘラナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.2cmである。538の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデと指圧痕、胴部がハケ目と指圧痕である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には指圧痕とハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに明茶褐色である。口径は19.6cmである。539の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色

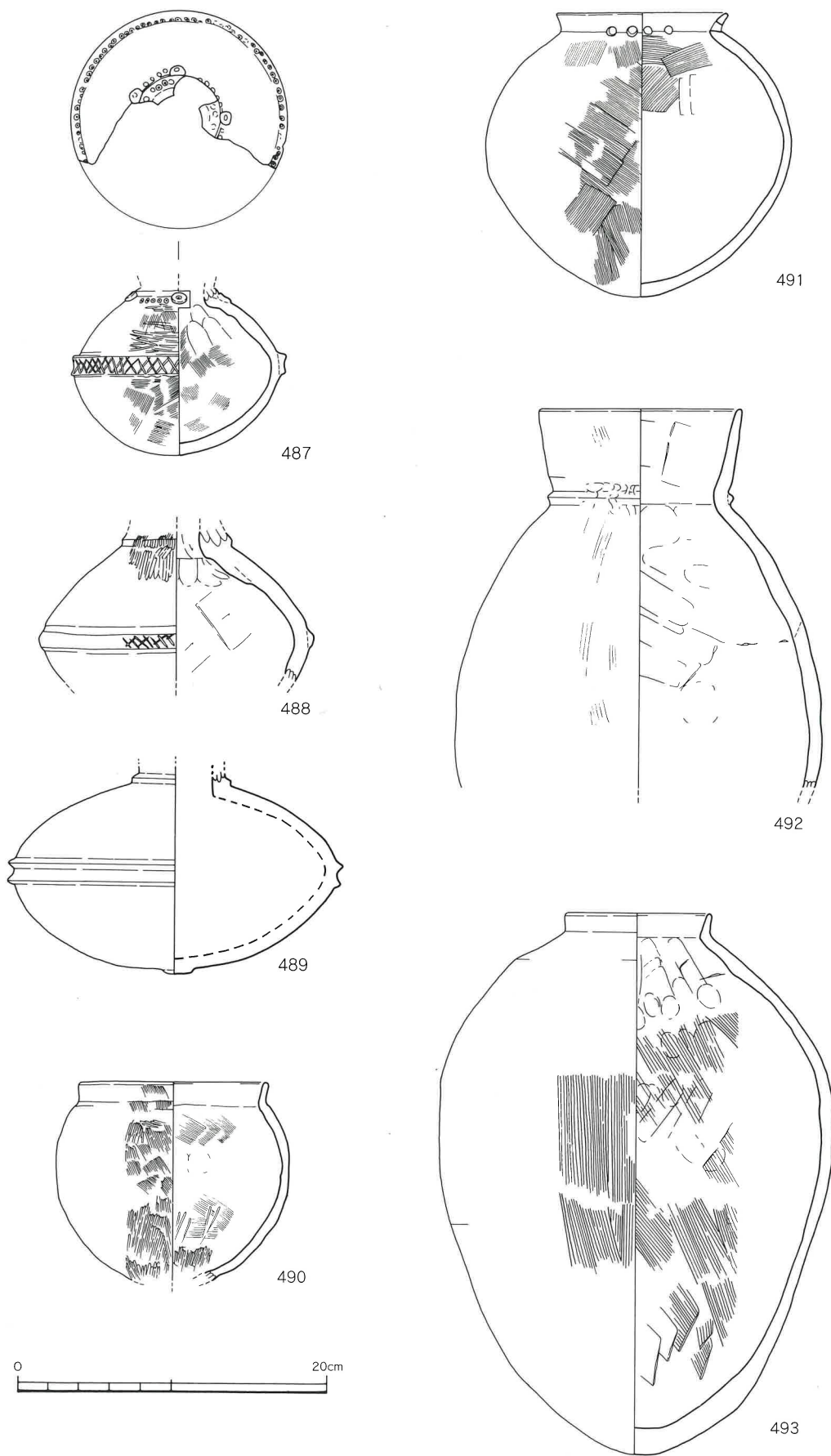
である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.5cmである。540の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部が不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が粘土積み上げ痕、ヘラナデ、指圧痕、不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は20.8cm、胴部最大径は22.1cmである。541の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部がハケ目である。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.3cmである。542の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下が不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は22.4cmである。543の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデで、外面頸部には横ナデした凸帯を有す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は26.2cmである。544の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が指圧痕と横ナデを残す凸帯、胴部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部がハケ目である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は22.1cmである。545の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ頸部には凸帯を有す。外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデした凸帯、胴部は指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕、指圧痕、ハケ目、不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.4cmである。546の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.1cmである。547の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部は指圧痕と横ナデ、胴部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.3cmである。548の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ目である。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰白色である。口径は17.2cmである。549の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部は横ナデとハケ目、胴部はハケ目である。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデ及び指圧痕とハケ目、胴部が指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は17.7cmである。550の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部は横ナデ、胴部が粗いハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.1cmである。551の胎土には石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部は横ナデとハケ目、胴部はハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデと薄いハケ目、胴部はハケ目である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.4cmである。552の胎土には石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下はハケ目である。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下はハケ目である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.2cm。553の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には斜め方向にナデを施す。焼成は良好で、色

調は内外面ともに淡黄灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.6cmである。554の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。口径は21.3cmである。555の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部がハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ及びハケ目、胴部がハケ目である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は23.4cmである。556の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部がハケ目、胴部が指圧痕とハケ目である。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部がハケ目と不定方向ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.6cmである。557の胎土には石英、長石、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は頸部から胴部が不定方向ナデ、底部には指圧痕と不定方向ナデを確認できる。内面調整は頸部から胴部がハケ目、底部が指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は18.3cmである。558の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部が横ナデと指圧痕、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は頸部が横ナデ及び指圧痕とヘラナデ、胴部以下は指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は20.5cmである。559の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部が横ナデ、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデを残す。内面調整は頸部が横ナデ、胴部以下は粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は24.5cmである。560の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデとハケ目、内面は粗いヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は17.5cmである。561の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、茶色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着が僅かにみられる。胴部最大径は22.4cmである。562の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗赤褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は22.5cmである。563の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれ外面調整はヘラナデと不定方向ナデ、内面は指圧痕及びヘラ状工具痕とヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。564の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。565の胎土には石英、角閃石が含まれ外面調整は不定方向ナデ、内面調整はヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。566の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整はハケ目及びヘラナデと不定方向ナデである。内面調整は不定方向ナデ及び指圧痕とヘラナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。567の胎土には石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整はハケ目とヘラナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。568の胎土には石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整はハケ目及びヘラナデと不定方向ナデである。内面調整は不定方向ナデ及びヘラナデと指圧痕である。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。569の胎土には長石と角閃石が含まれ外面調整は不定方向ナデ、内面は不定方向ナデとヘラ磨きを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。570の胎土には角閃石、金雲母、白色砂粒が含まれ外面調整はヘラナデと不定方向ナデ、内面は粗いヘラナデであ

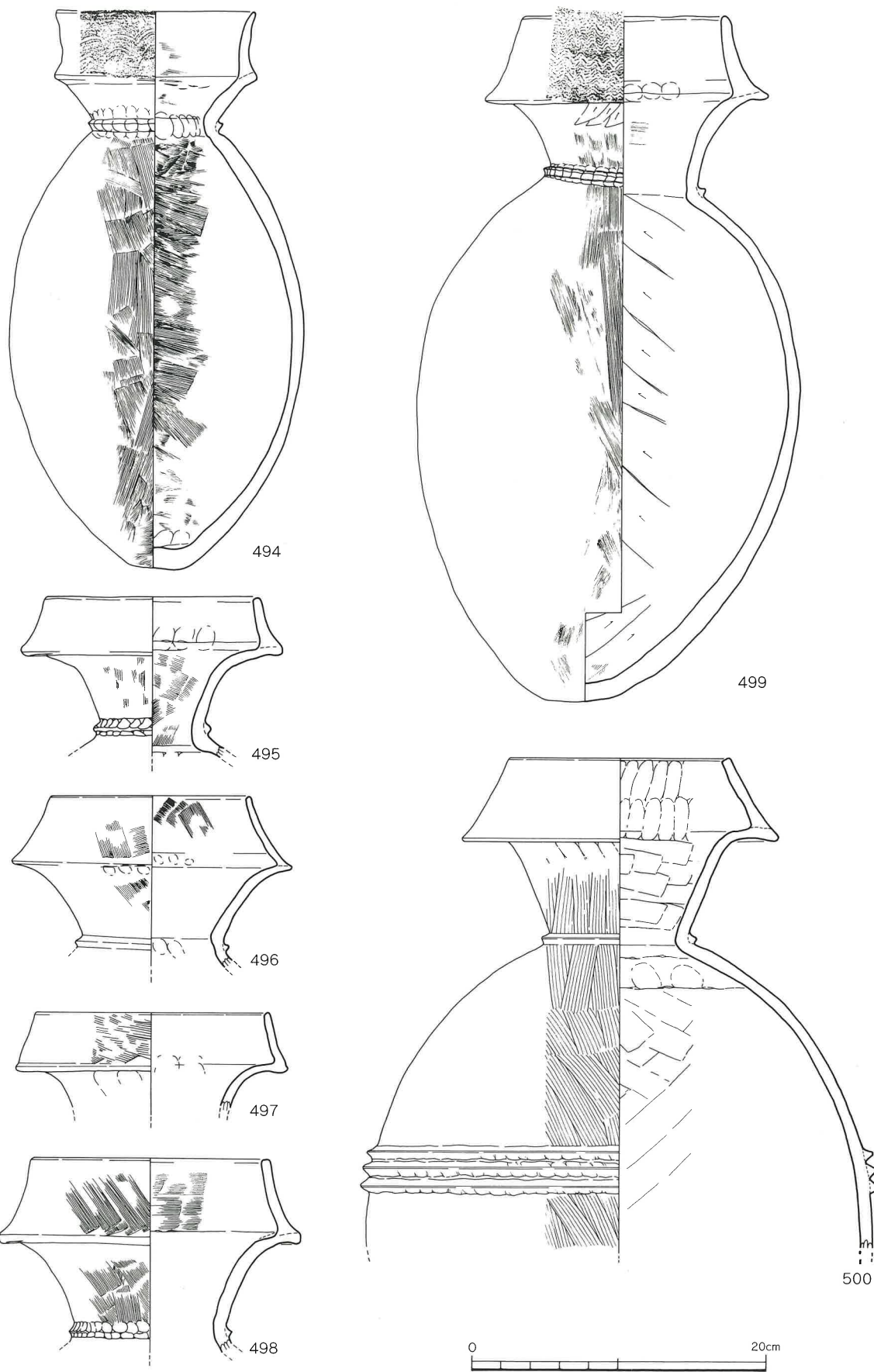
る。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。571の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目及び不定方向ナデと指圧痕、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。572の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整はハケ目及びヘラナデである。内面調整は不定方向ナデ及び指圧痕とヘラ磨きを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。573の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。574の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。575の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が淡黄褐色、内面が暗灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。576の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は粗いヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。577の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整はヘラナデと不定方向ナデ、内面は指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗茶褐色である。578の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデ、内面は僅かにハケ目と不定方向ナデが残る。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。579の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。580の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は器面剥落のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。581の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面はヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。582の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。583の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。584の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれ外面調整はヘラナデ及び指圧痕と不定方向ナデである。内面調整はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。585の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに粗いヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。586の胎土には石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整はヘラナデと不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。587の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は縦方向ナデと指圧痕、内面は指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。588の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面はハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰白色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。589の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデ、内面はハケ目及びヘラナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。590の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。591

の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目及びヘラ磨きと不定方向ナデ、内面は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。592の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともにハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。593の胎土には角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれ調整は外面と坏部内面が丁寧なヘラ磨き、脚部内面はヘラ削りと横ナデ及び底部に丁寧なヘラ磨きを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤色塗彩のため赤褐色を帯び、地色は褐色である。口径は27.8cm、底径は18.8cm、器高は20.9cmである。594の胎土には角閃石、金雲母、白色砂粒、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ坏部外面の調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下は指圧痕及び丁寧なヘラ磨きとハケ目を有し、内面は丁寧なヘラ磨き及びハケ目と指圧痕である。脚部外面の調整は指圧痕及び丁寧なヘラ磨きとハケ目、底部には横ナデを確認できる。脚部内面はハケ目及び指圧痕と横ナデである。脚部には焼成前穿孔1孔を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤色塗彩が残存するため赤褐色を帯び、地色は褐色である。口径は27.9cm、底径は17.7cm、器高は22.1cmである。595の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整はヘラナデ及び指圧痕と横ナデである。内面調整はヘラナデと横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。底径は20.2cmである。596の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデ及び丁寧なヘラ磨きと横ナデである。内面調整は横ナデと不定方向ナデを残す。焼成前穿孔は4孔を残す。焼成は良好で、色調は外面が赤色塗彩のため赤色、内面が黒褐色である。底径は19.1cmである。597の胎土には角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、口縁部以下にはハケ目及び指圧痕と丁寧なヘラ磨きを有す。内面調整はハケ目と指圧痕である。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤色塗彩のため赤色を帯び、地色は褐色である。口径は22.2cmである。598の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が淡黄褐色である。口径は24.8cmである。599の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は横ナデとヘラ磨き、内面は横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤色塗彩のため赤色を帯び、地色は褐色である。口径は25.2cmである。600の胎土には石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は横ナデ、指圧痕、ハケ目、ヘラ磨きである。内面調整は横ナデとヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物外面には黒斑を観察できる。601の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデ及び指圧痕とハケ目である。内面調整は横ナデ及び指圧痕とヘラナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤色塗彩のため赤褐色を帯び、地色は褐色である。口径は28.1cmである。602の胎土には角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部に波状文、口縁部以下には横ナデ及び指圧痕とヘラナデを施す。内面調整は指圧痕とヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は赤色塗彩を僅かに残すため赤褐色を帯び、地色は褐色である。口径は30.4cmである。603の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデと不定方向ナデ、内面は横ナデ、ヘラ磨き、指圧痕、不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が淡黄褐色である。口径は38.4cmである。604の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデと不定方向ナデ、内面は横ナデ及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗赤褐色である。遺物は器面の剥離が著しい。口径は21.5cmである。605の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒が含まれ外面調整は横ナデ及びヘラナデとヘラ状工具痕を残す。内面調整は鉢部がヘラナデ、脚部がヘラナデと横ナデである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が淡褐色である。底径は11.1cmである。606の胎土には石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれ外面調整は不定方向ナデ、ハケ目、ヘラナデ、横ナデである。内面調整は鉢部がヘラ磨き、脚部がヘラナデと横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。底径は13.6cmである。607の胎土には石英、角閃石、白色砂粒が含まれ外面調整は鉢部が粗いヘラ磨き、脚部がヘラ状工具でナデ上げを残す。内面調整は鉢部が粗いヘラ磨きと指圧痕、脚部がヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。底径は8.2cmである。608の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は鉢部が横ナデとハケ目、脚部がヘラナデと

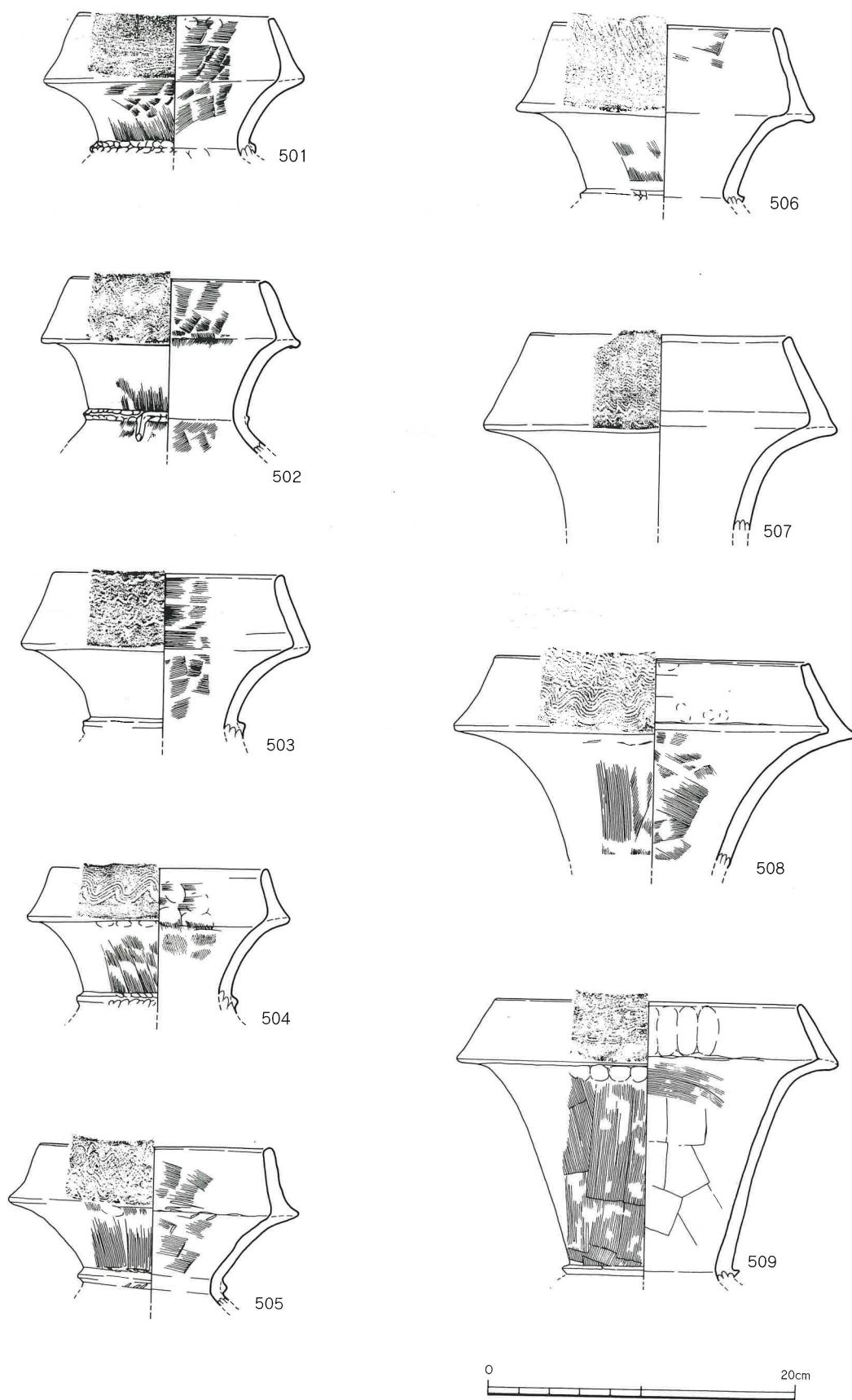
横ナデである。内面調整は鉢部がハケ目及びヘラナデと指圧痕、脚部が指圧痕と横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。鉢部外面には黒斑が観察できる。口径は17.3cm、底径は8.8cm、器高は13.4cmである。609の胎土には角閃石、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに緻密なヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤色塗彩のため赤色を帯び、地色は褐色である。底径は10.4cmである。610の胎土には石英、角閃石、金雲母が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、胴部がハケ目とヘラ磨き、底部はヘラナデである。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目のほかは、ヘラナデ後ヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。口径は13.6cm、器高は11.4cmである。611の胎土には角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデのほかはヘラナデである。内面調整はヘラナデと指圧痕である。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。外面には黒斑を観察できる。口径は20.2cm、器高は16.2cmである。612の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はヘラ磨きと指圧痕が確認できる。内面調整はハケ目及びヘラ磨きと指圧痕である。焼成は良好で、色調は外面が赤色塗彩のため赤色、内面は暗赤褐色である。613の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整はヘラナデとハケ目、内面は指圧痕及び横ナデとヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤が僅かに付着する。614の胎土には角閃石、金雲母、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部は横ナデ、頸部から胴部はハケ目、底部はヘラナデ後不定方向ナデを施す。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部から胴部は指圧痕及びヘラナデとヘラ磨き、底部は指圧痕とヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。口径は31.3cm、器高は19.3cmである。615の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部がハケ目、底部が縦方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部はハケ目、底部は縦方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面に赤色塗彩が僅かに残るため暗赤褐色、内面は淡褐色である。外面胴部には黒斑を観察できる。口径は33.0cm、器高は22.0cmである。616の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデとハケ目、内面は横ナデと指圧痕である。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。口径は11.8cm、器高は9.5cmである。617の胎土には角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデとヘラナデ、内面は横ナデ及びヘラナデと指圧痕である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は14.1cm、器高は11.1cmである。618の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデ及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。口径は15.7cmである。619の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに粗いヘラナデで、把手が2箇所指整形後貼り付けられている。底部には焼成前に設けられた穿孔が1孔ある。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は9.2cm、器高は13.4cmである。620の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は剥落のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。621の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面は剥落のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。622の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともにハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰色である。外面には黒斑を観察できる。623の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面はヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。624の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面はハケ目である。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。625の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。626の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目及び指圧痕と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。487～626は弥生時代後期後半から終末の土器群と考えたい。



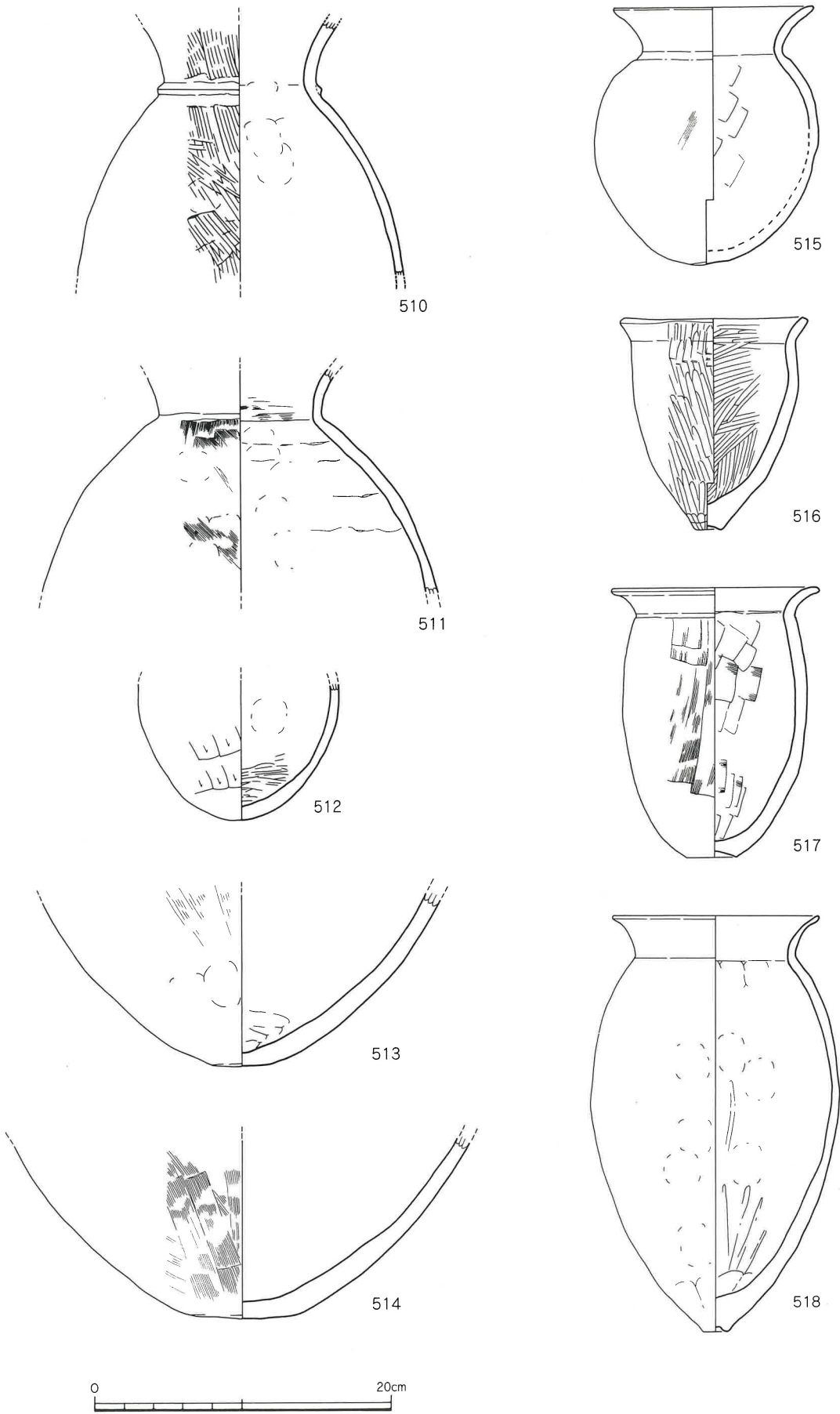
第204图 D区出土遗物实测图(1)



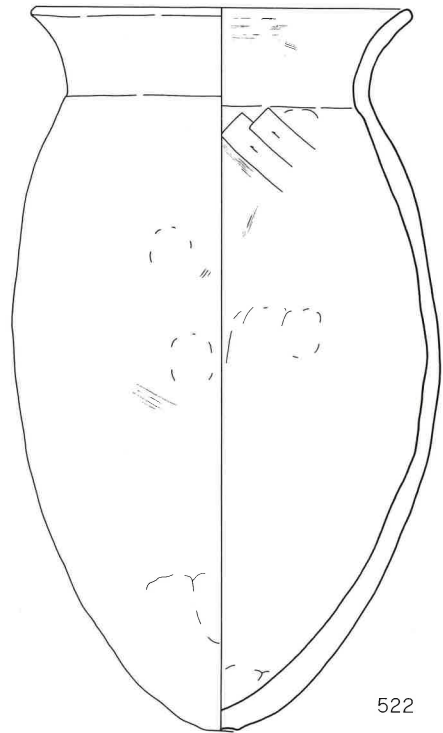
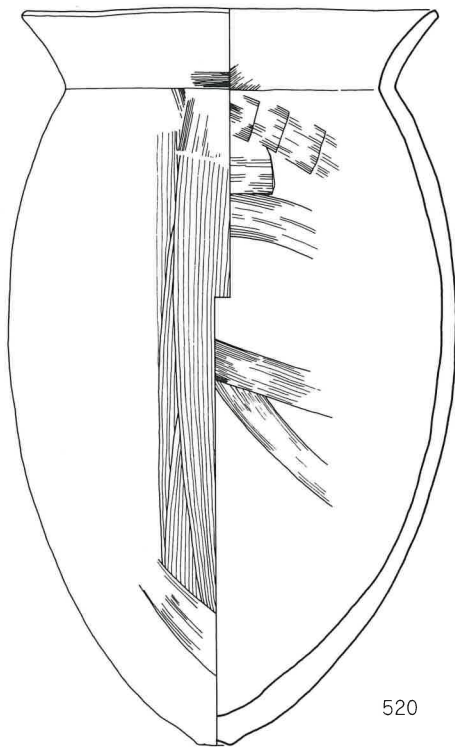
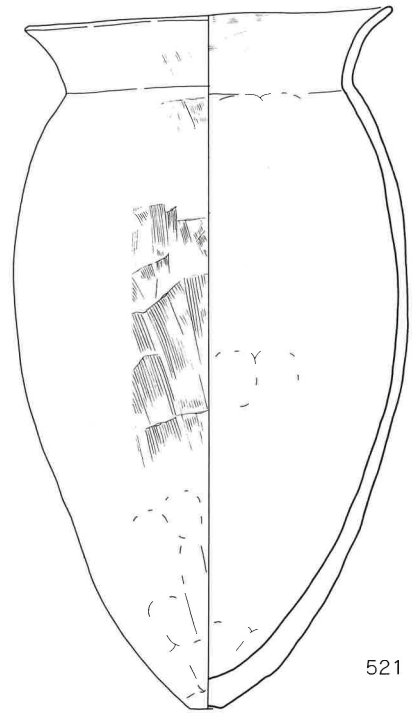
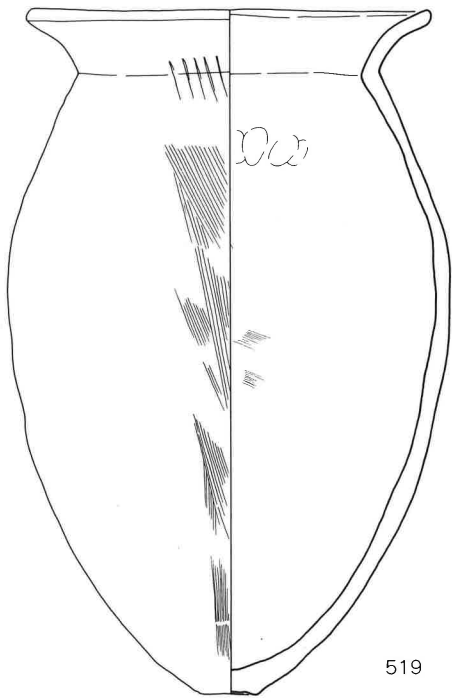
第205图 D区出土遗物实测图(2)



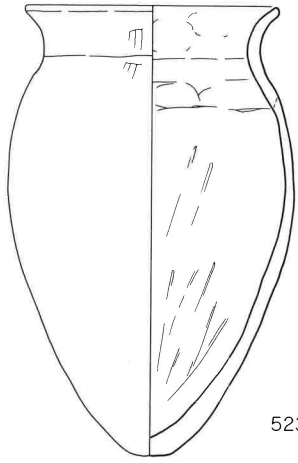
第206图 D区出土遗物实测图(3)



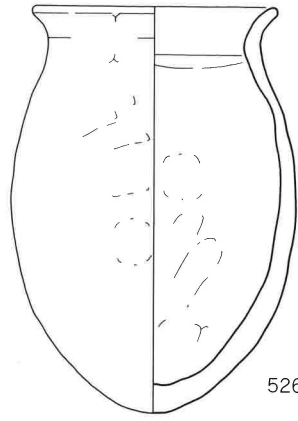
第207图 D区出土遗物实测图(4)



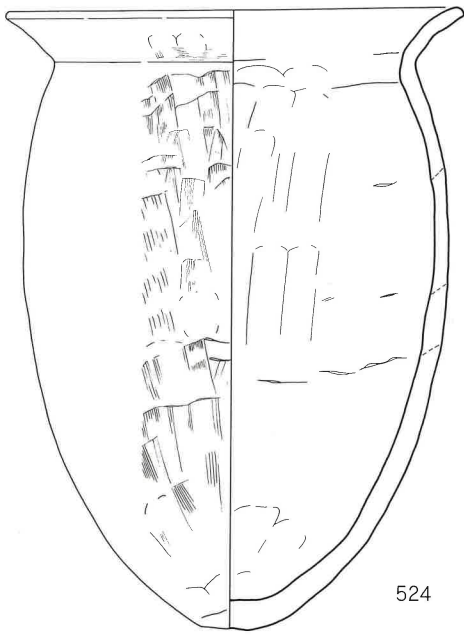
第208图 D区出土遗物实测图(5)



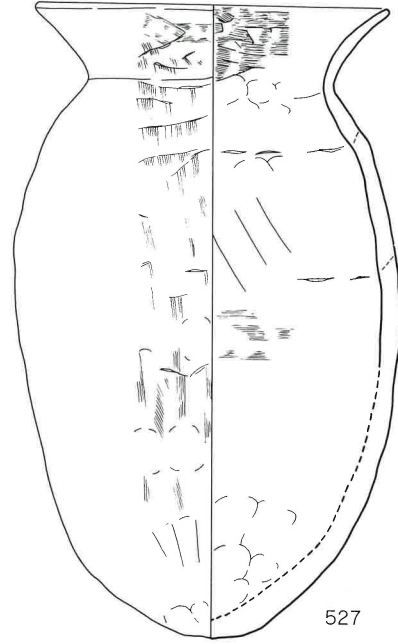
523



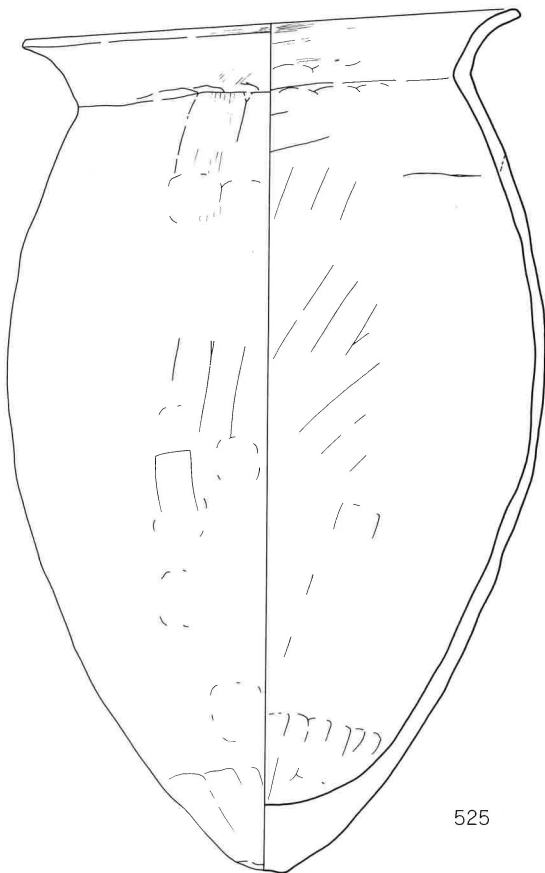
526



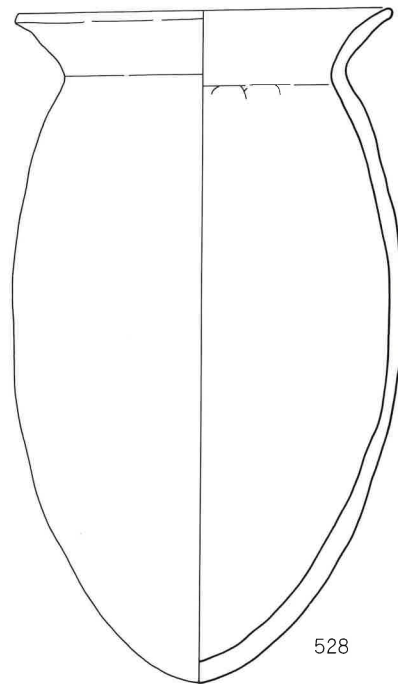
524



527



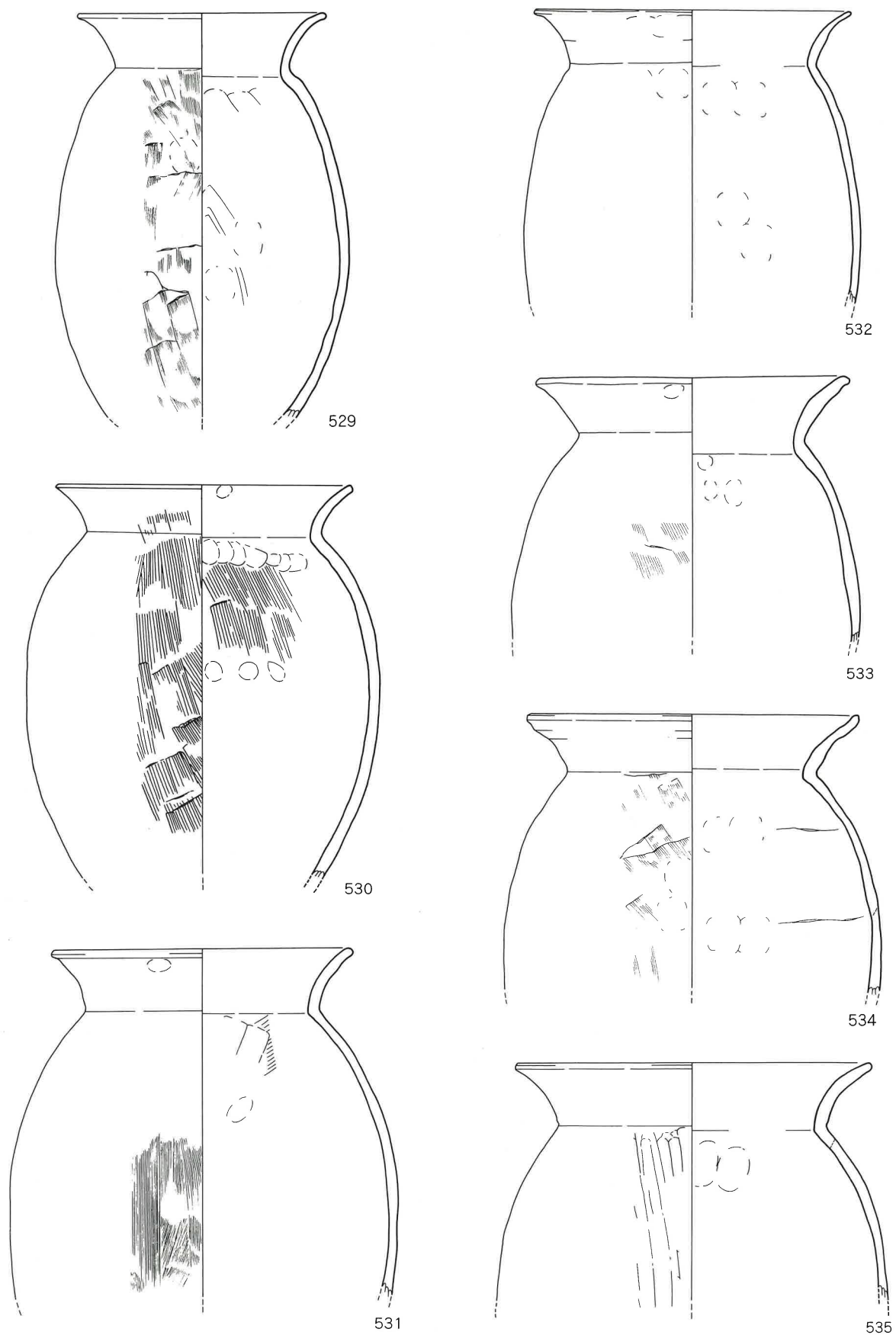
525



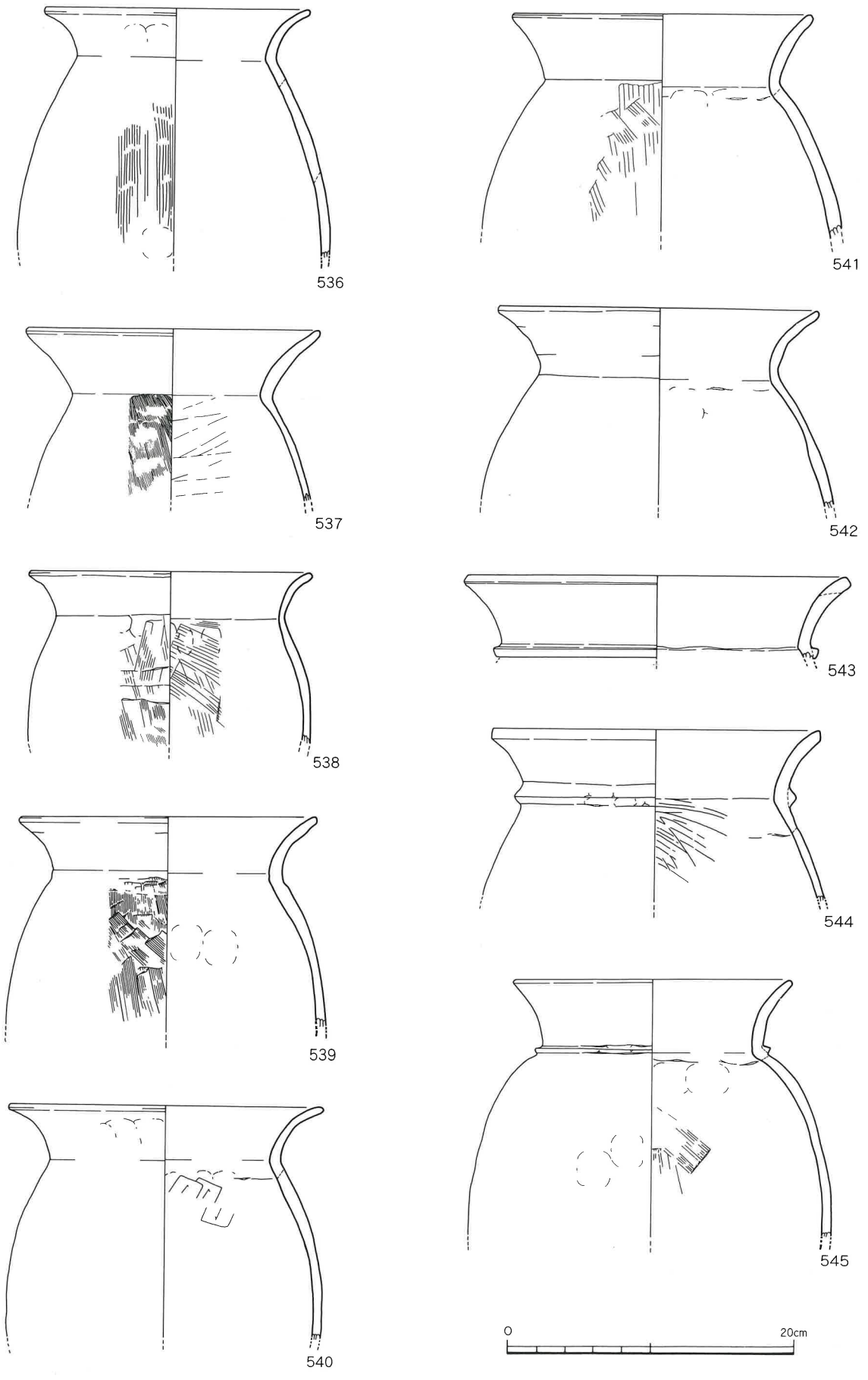
528



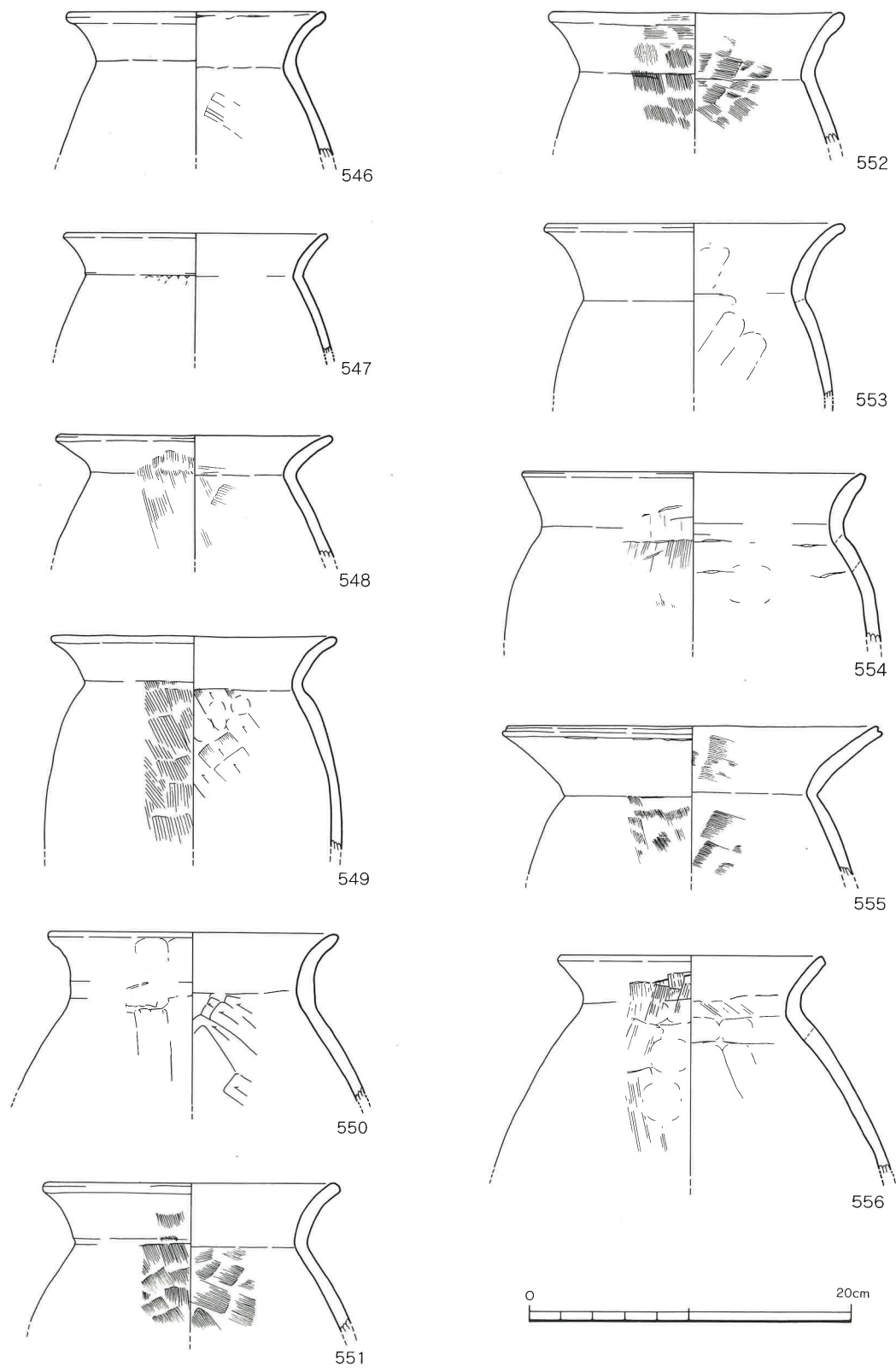
第209图 D区出土遗物实测图(6)



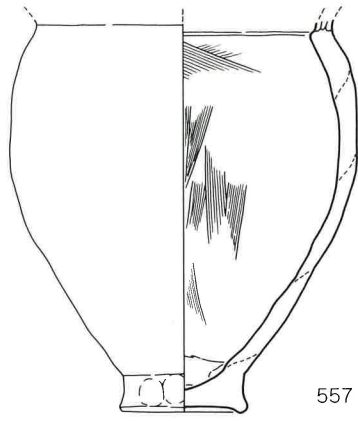
第210图 D区出土遗物实测图(7)



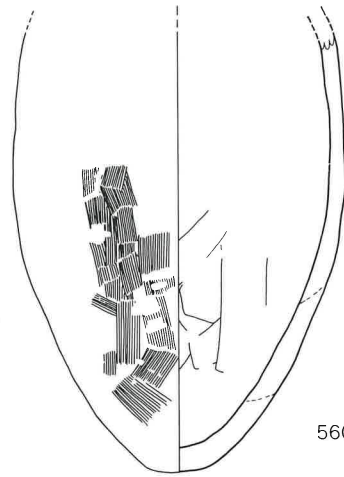
第211图 D区出土遗物实测图(8)



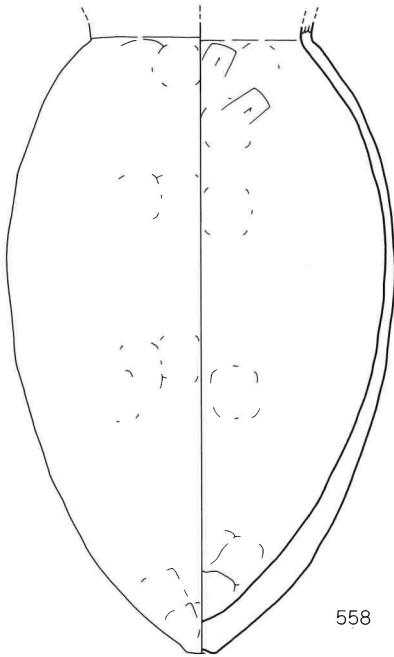
第212图 D区出土遗物实测图(9)



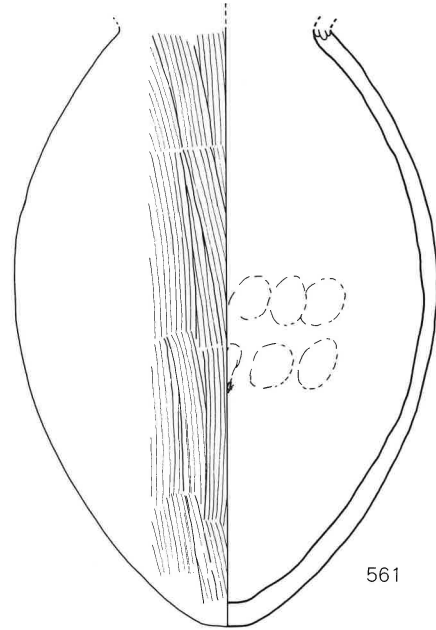
557



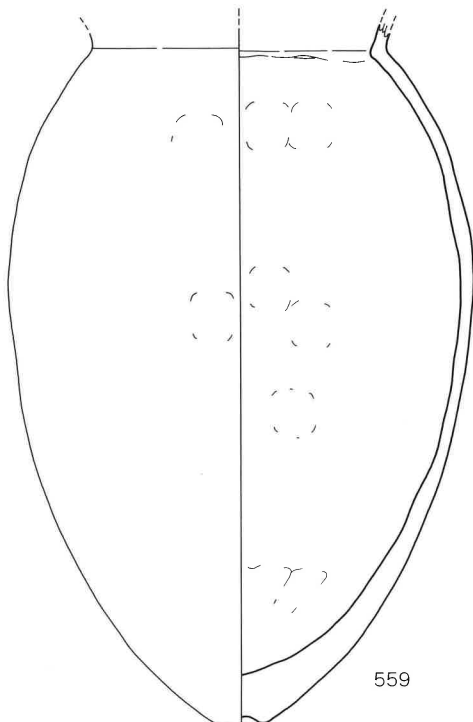
560



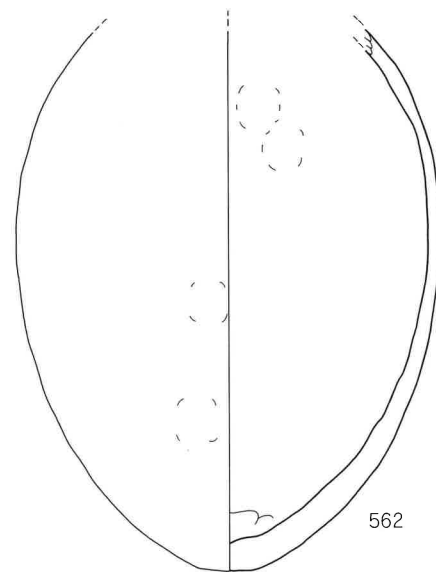
558



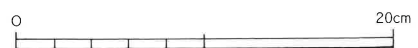
561



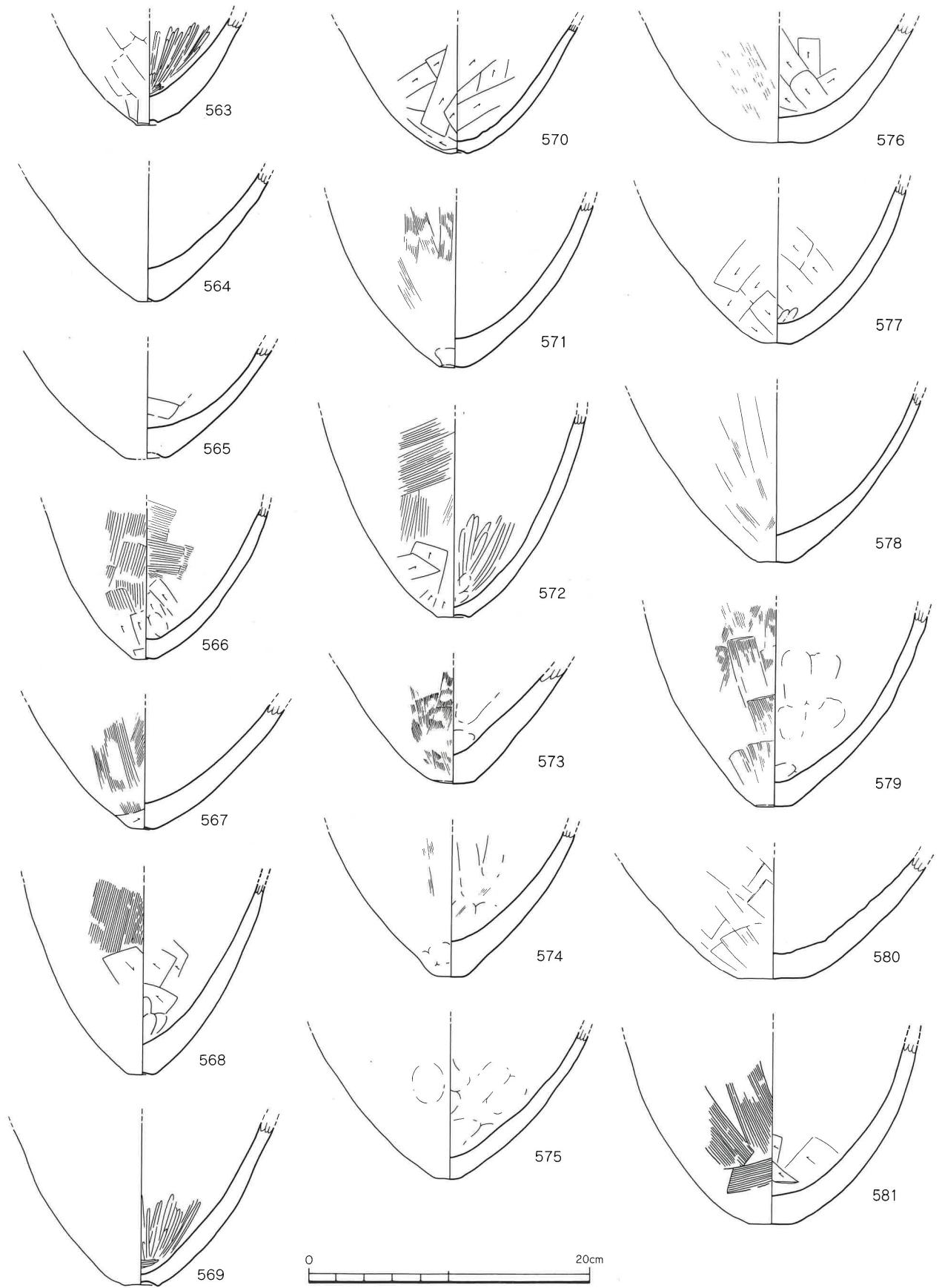
559



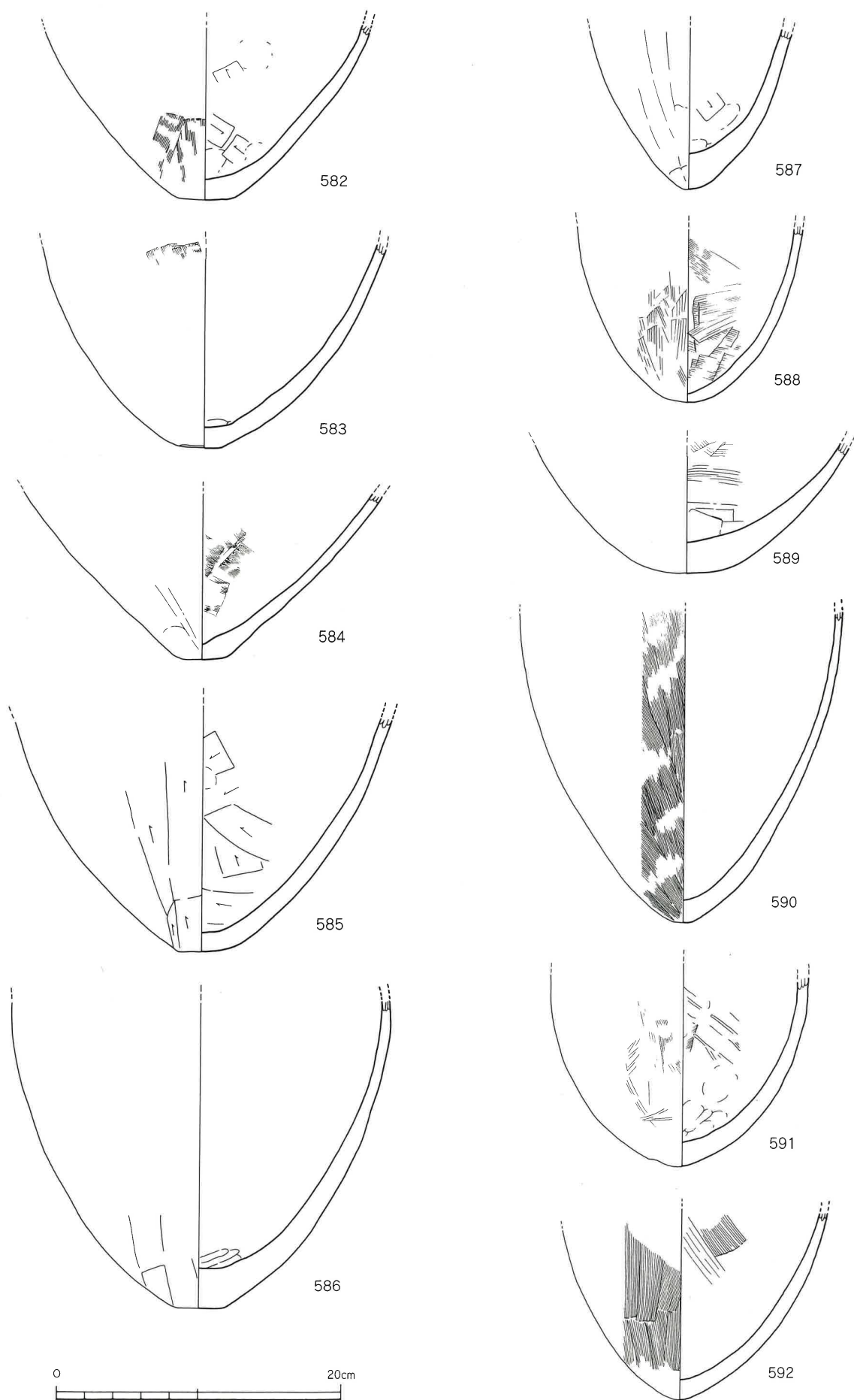
562



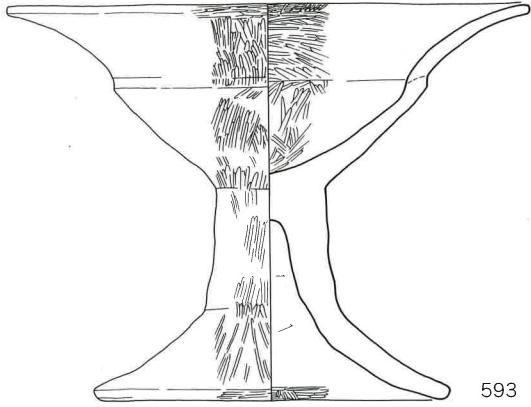
第213图 D区出土遗物实测图 (10)



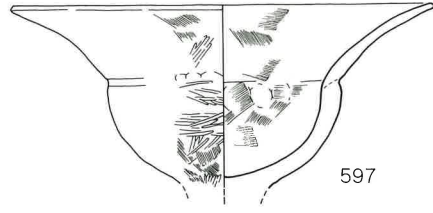
第214图 D区出土遗物实测图 (11)



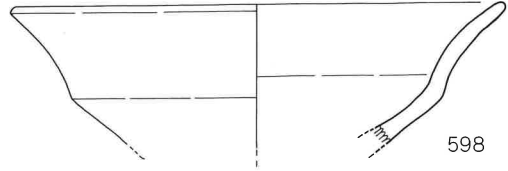
第215图 D区出土遗物实测图(12)



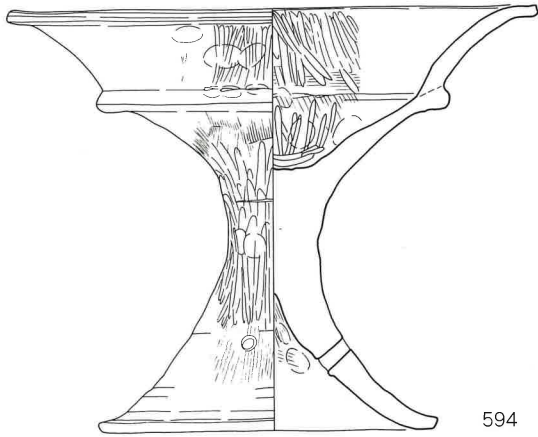
593



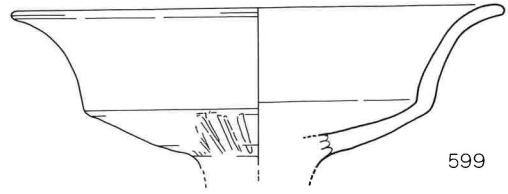
597



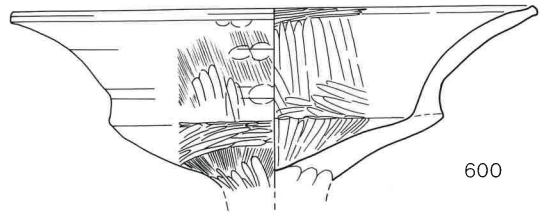
598



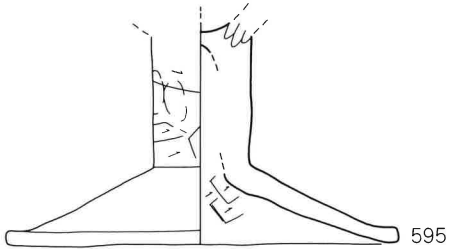
594



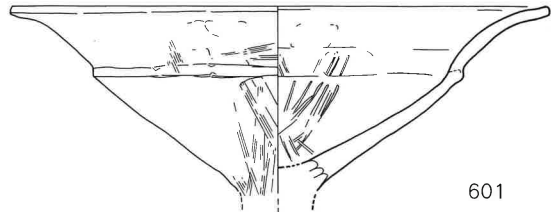
599



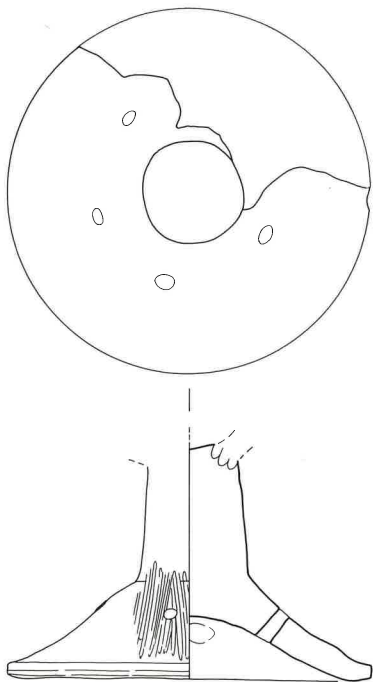
600



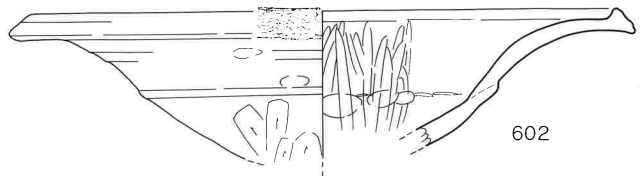
595



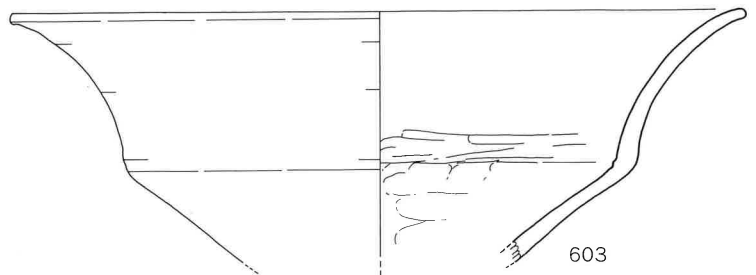
601



596



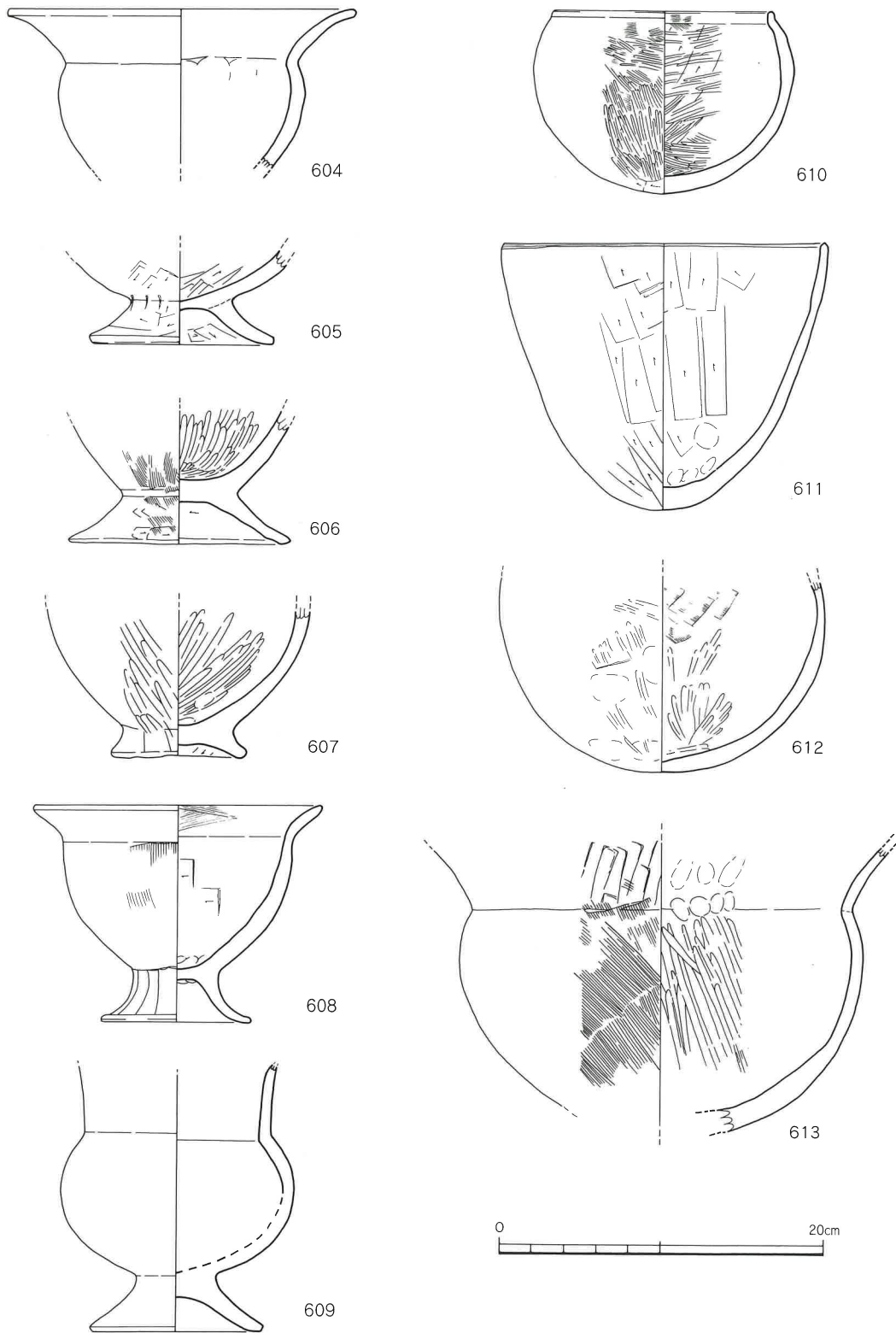
602



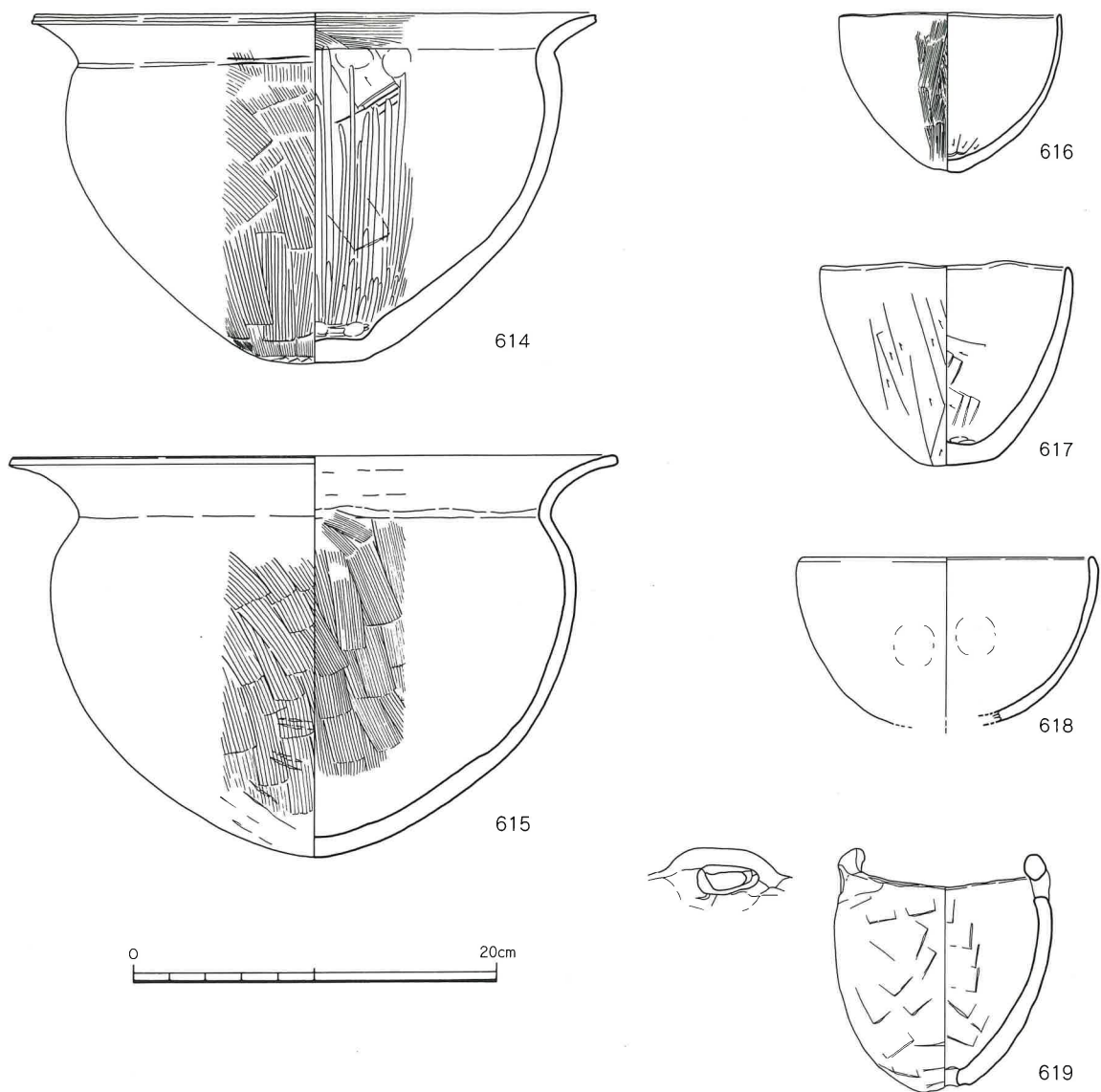
603



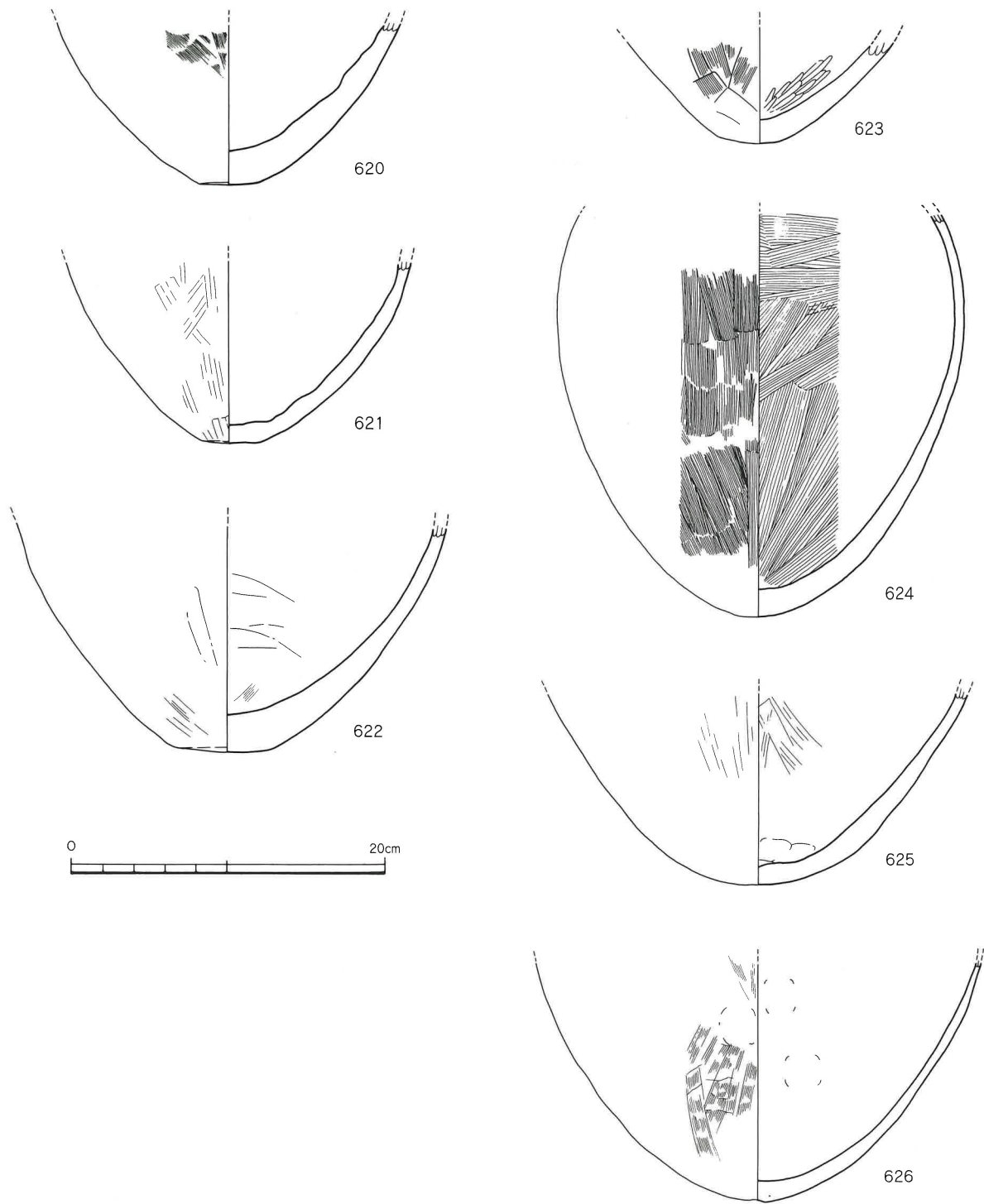
第216图 D区出土遗物实测图(13)



第217图 D区出土遗物实测图(14)



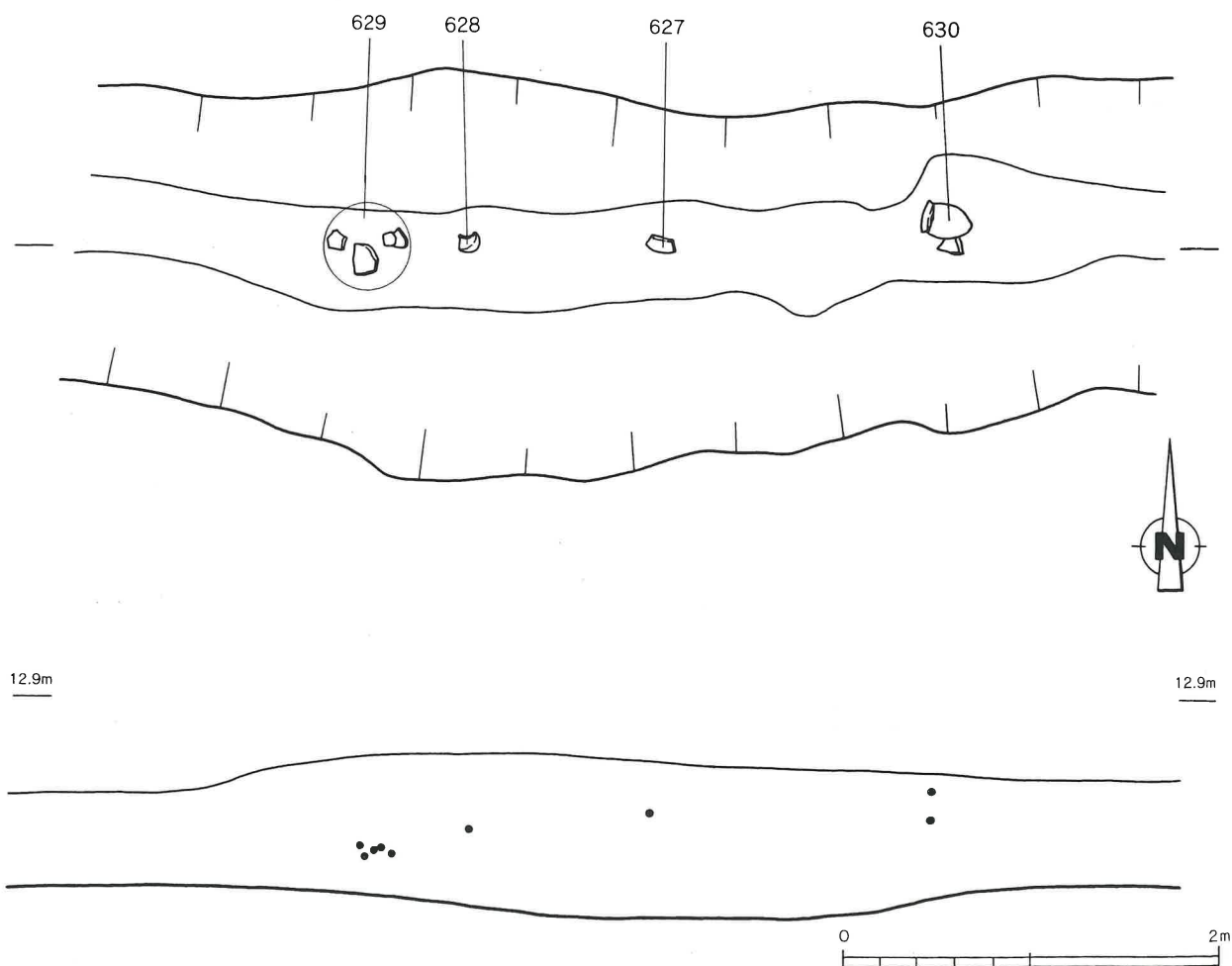
第218图 D区出土遗物实测图 (15)



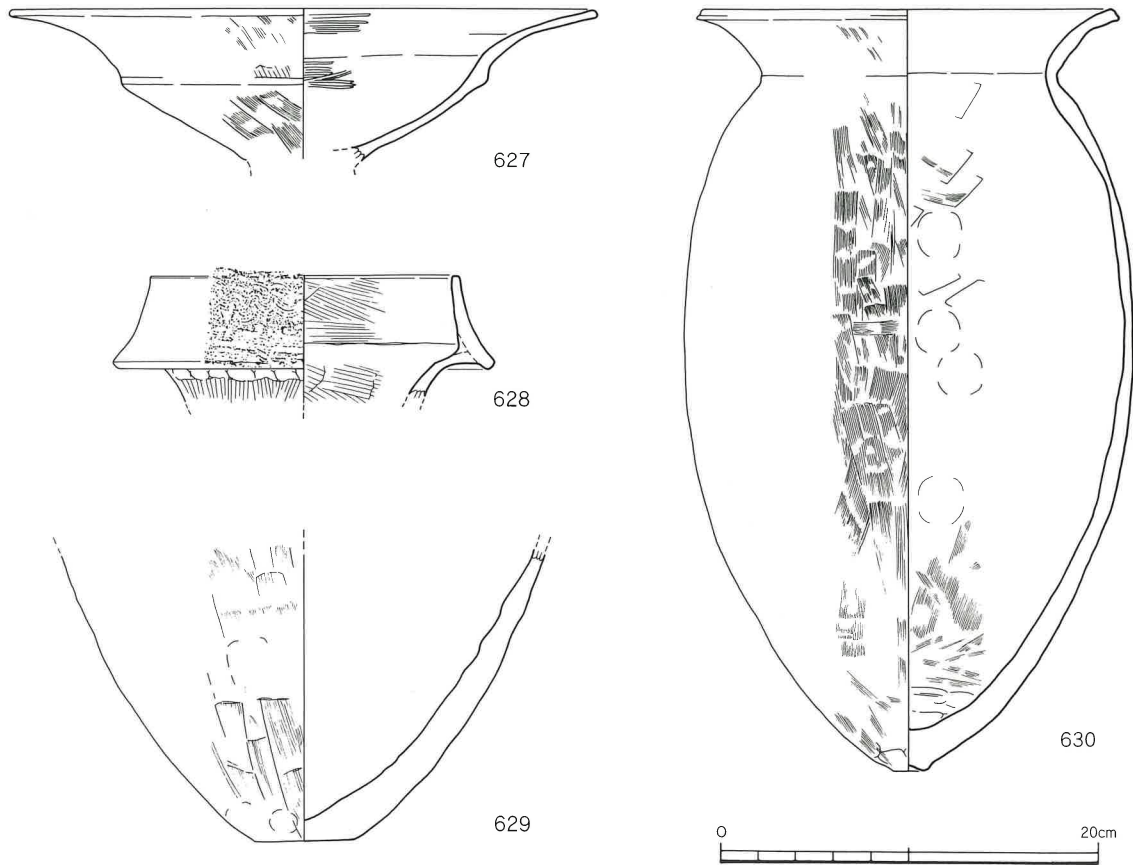
第219图 D区出土文物实测图 (16)

E区出土遺物

627は高坏の坏部、628は複合口縁壺の口縁部、629は壺の底部、630は甕である。627の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部に横ナデとハケ目、口縁部以下にはハケ目を確認できる。内面調整は口縁部が横ナデ、口縁部直下よりヘラ磨きと不定方向ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤色塗彩が部分的に残存しており赤褐色を帯びる。地色は外面が淡褐色、内面が黄褐色である。坏部内面には黒斑を観察することができる。口径は30.8cmである。628の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は横ナデ、波状文、指圧痕、ハケ目を観察できる。内面の調整は横ナデ及びハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.0cmである。629の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面の調整は指圧痕及びハケ目とヘラナデを確認できる。内面調整は剥落のため僅かに不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は外面が灰白色、内面が黄白色である。底部付近には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。630の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部が横ナデ、胴部がハケ目、底部が不定方向ナデとハケ目である。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとヘラナデ、胴部が指圧痕、ヘラナデ、ハケ目、不定方向ナデ、底部がハケ目と指圧痕である。焼成は良好で、色調は外面が暗黄褐色、内面が淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は22.4cm、胴部最大径は23.7cm、器高は39.8cmである。遺物は弥生時代後期後半から終末の土器群と考えたい。



第220図 E区遺物出土状況実測図

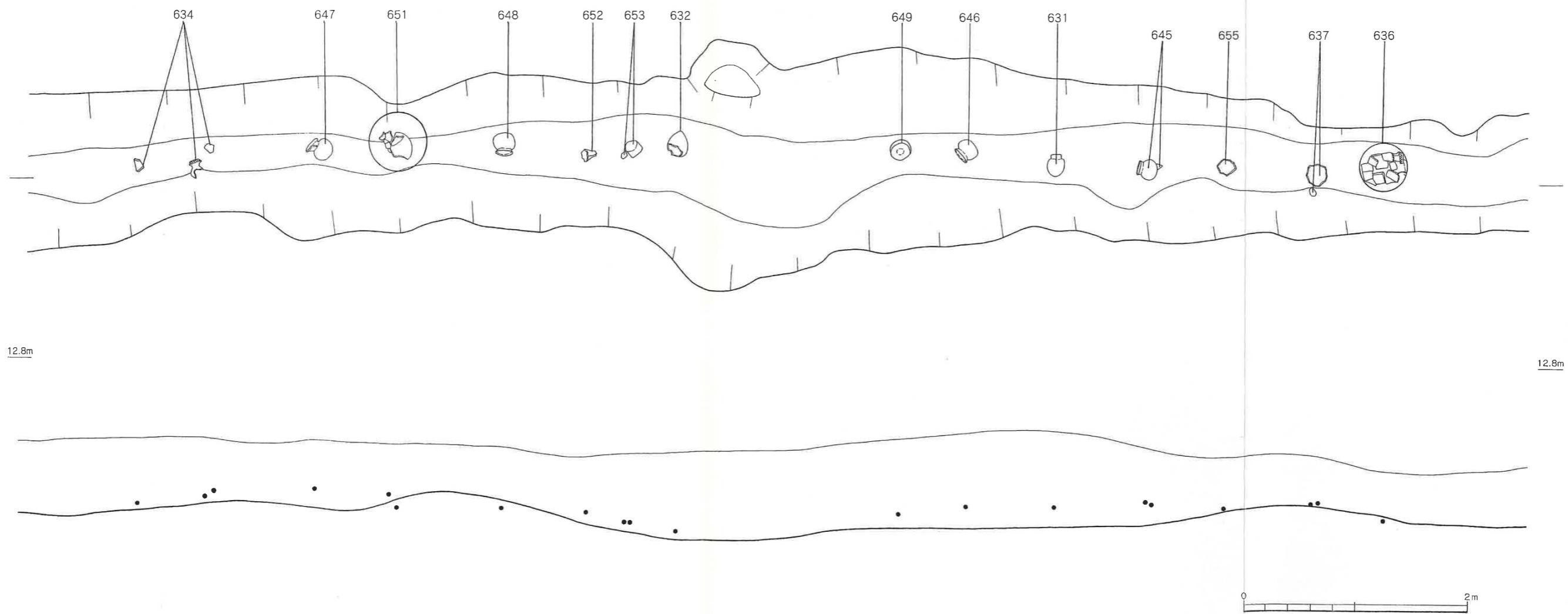


第221図 E区出土遺物実測図

F区出土遺物

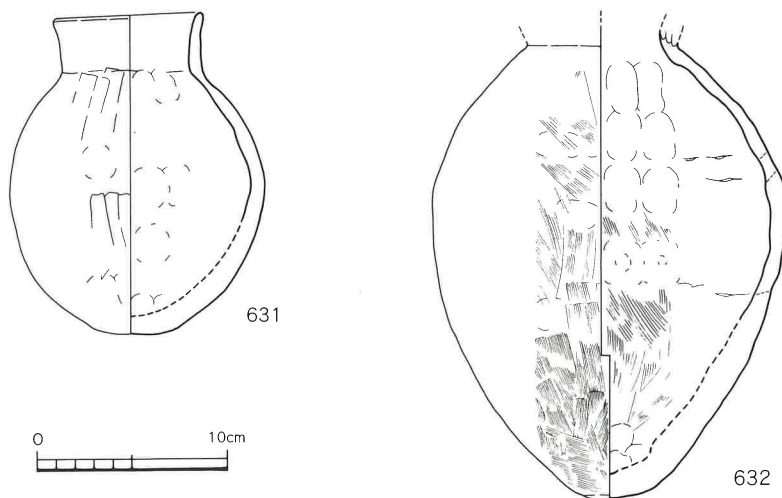
631は短頸壺、632は壺、633～636は複合口縁壺、637は壺の底部、638～644は甕、645～650は鉢、651は脚付鉢、652は高坏の脚部、653は碗、654は甌、655～658は甕の底部である。631の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕及びハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄灰色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は8.1cm、胴部最大径は13.4cm、器高は16.7cmである。632の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は頸部が横ナデ、胴部以下には指圧痕とハケ目を残す。内面調整は粘土積み上げ痕及び指圧痕とハケ目を観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。胴部最大径は18.7cmである。633の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部には横ナデとヘラナデ及び刻み目を施した凸帯を有する。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部には粘土積み上げ痕、指圧痕、ヘラ状工具痕、横ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。外面には黒斑を観察できる。口径は12.9cmである。634の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部以下には横ナデとハケ目を観察できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、胴部以下には指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は10.5cmである。635の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部が横ナデとハケ目及び横ナデした凸帯を貼りつけている。胴部はハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は12.6cm、胴部最大径は22.6cmである。636の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒を含む。外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部には指圧痕とハケ目及び刻み目を施した凸帯を貼りつけている。胴部は指圧痕とハケ目を残す。内面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部が指圧痕

とハケ目、胴部が指圧痕及び不定方向ナデと薄いハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。口径は14.1cm、胴部最大径は26.8cmである。637の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。638の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部にはハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は17.6cmである。639の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれ調整は内外面ともに口縁部から頸部が横ナデ、胴部がハケ目と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.8cmである。640の胎土には角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ及び指圧痕とハケ目、頸部以下はハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデとヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は19.8cmである。641の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部がハケ目と不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部が不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は20.8cm、胴部最大径20.8cmである。642の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部がハケ目である。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には粘土積み上げ痕及びヘラナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は16.9cmである。643の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデである。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部には指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は18.8cmである。644の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下はハケ目である。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。口径は21.2cmである。645の胎土には石英、角閃石、金雲母、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部上半分がハケ目、胴部下半分から底部は細かいヘラ磨きである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は指圧痕とヘラナデを残す。焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、内面が淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は12.3cm、胴部最大径は14.4cm、器高は13.3cmである。646の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデとヘラナデ、胴部が指圧痕及びヘラ磨きと不定方向ナデである。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下には粘土積み上げ痕及び指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が灰白色、内面が黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は13.1cm、胴部最大径は15.8cm、器高は13.6cmである。647の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部には横ナデとヘラ状工具痕、胴部以下はヘラ磨きを有す。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部は横ナデとヘラ磨き、胴部以下にヘラナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.5cm、胴部最大径は17.2cm、器高は16.8cmである。648の胎土には角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部はヘラ状工具痕とハケ目、胴部以下にはハケ目と不定方向ナデを確認できる。内面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部はヘラナデ及び指圧痕と不定方向ナデ、底部は器面剥落が著しいため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。胴部外面には黒斑を確認できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は17.1cm、胴部最大径は18.7cm、器高は19.5cmである。649の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面調整は横ナデとハケ目、内面は横ナデ、ハケ目、ヘラナデ、不定方向ナデである。焼成は良好で、

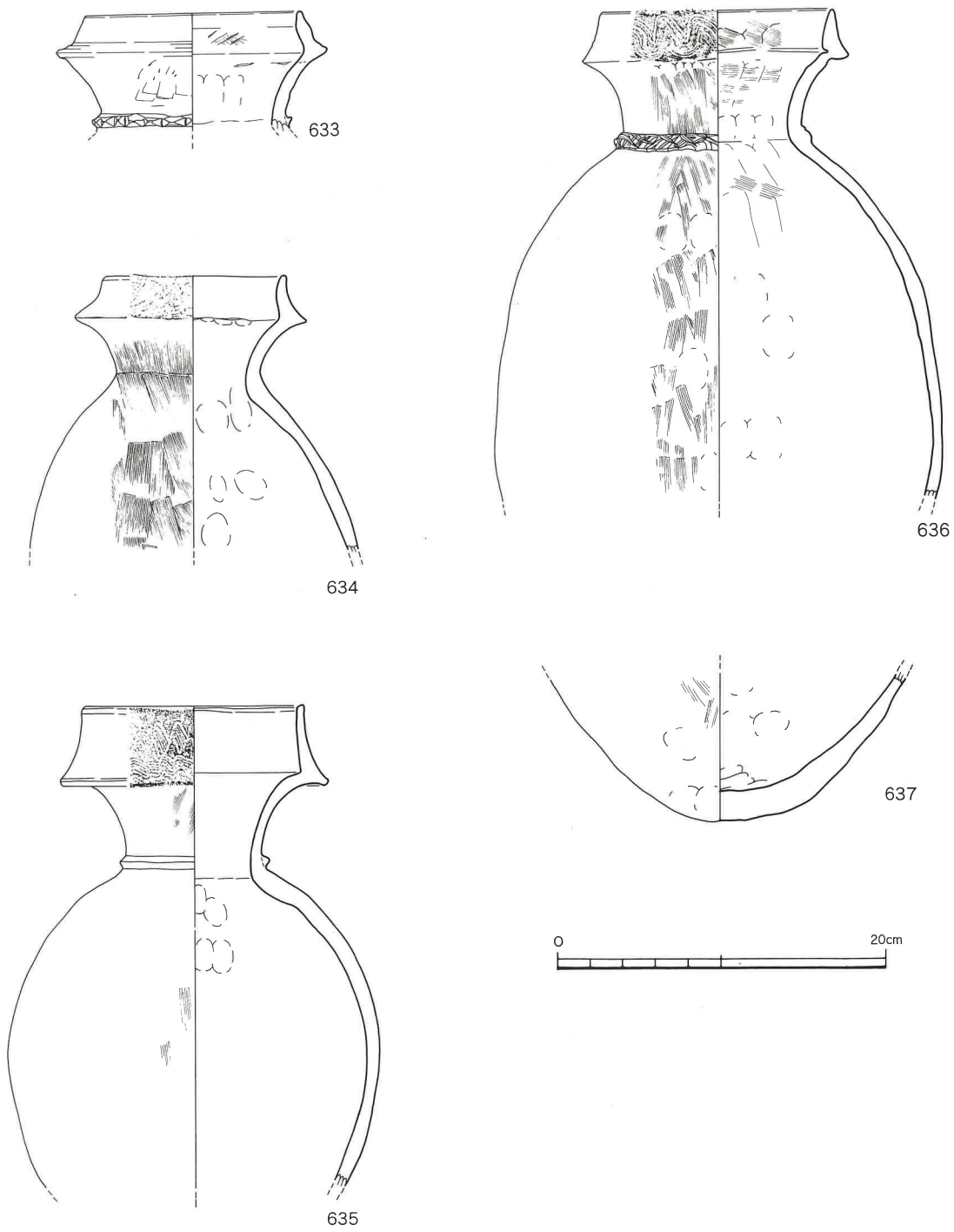


第222图 F区遗物出土状况实测图

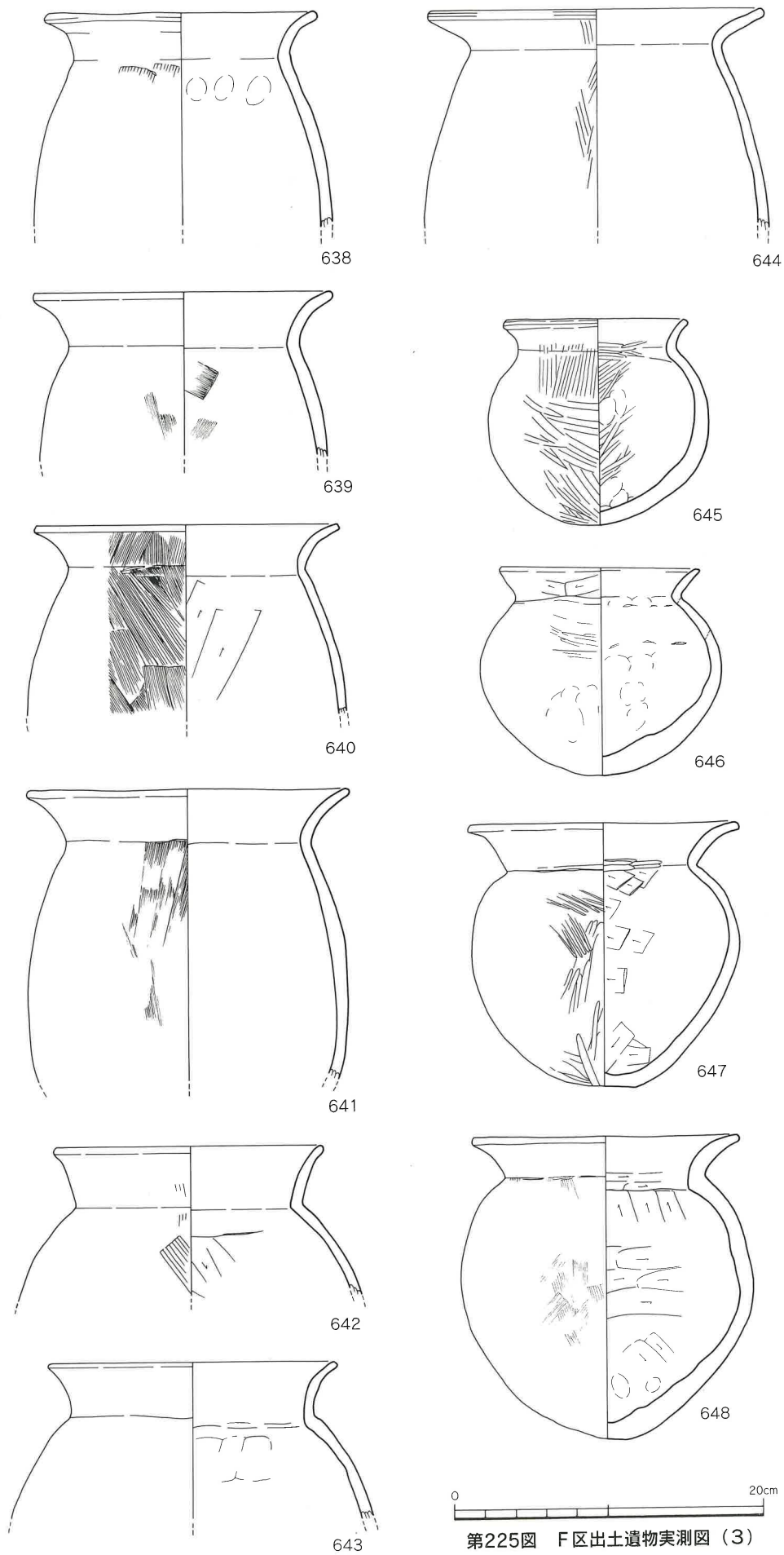
色調は内外面ともに淡赤褐色である。口径は18.1cm、器高は10.6cmである。650の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は横ナデとハケ目、内面調整は横ナデ及び不定方向ナデとハケ目を残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は19.8cm、器高は13.4cmである。651の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ調整は内外面ともに横ナデとハケ目で、脚部は内外面ともに指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は28.1cm、器高は20.6cmである。652の胎土には長石、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整はハケ目と横ナデを確認できる。内面調整はシボリ痕及び横ナデを残す。遺物には焼成前穿孔が4箇所を確認できるほか、外面に黒斑が観察できる。焼成は良好で、色調は外面が赤色塗彩のため赤褐色、内面が淡褐色である。底径は15.1cmである。653の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面の調整は横ナデ及びヘラ削りと粗いヘラ磨き、内面調整は横ナデ及び指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面に赤色塗彩が部分的に残存するため淡赤褐色、内面は淡灰色である。口径は11.2cm、器高は10.5cmである。654の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は粗いヘラナデ、底部付近はヘラ削りである。内面調整は不定方向ナデ及びヘラナデとヘラ削りである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。底径は4.1cmである。655の胎土には長石、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕と不定方向ナデ、内面は指圧痕及びヘラ磨きと不定方向ナデを確認できる。外面には黒斑が観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。656の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕及びハケ目と不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が黄褐色、内面が茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。657の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整はヘラナデ及びハケ目と不定方向ナデ、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。658の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデ、内面は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰白色である。底部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。遺物は弥生時代後期後半から終末の土器群と考えたい。



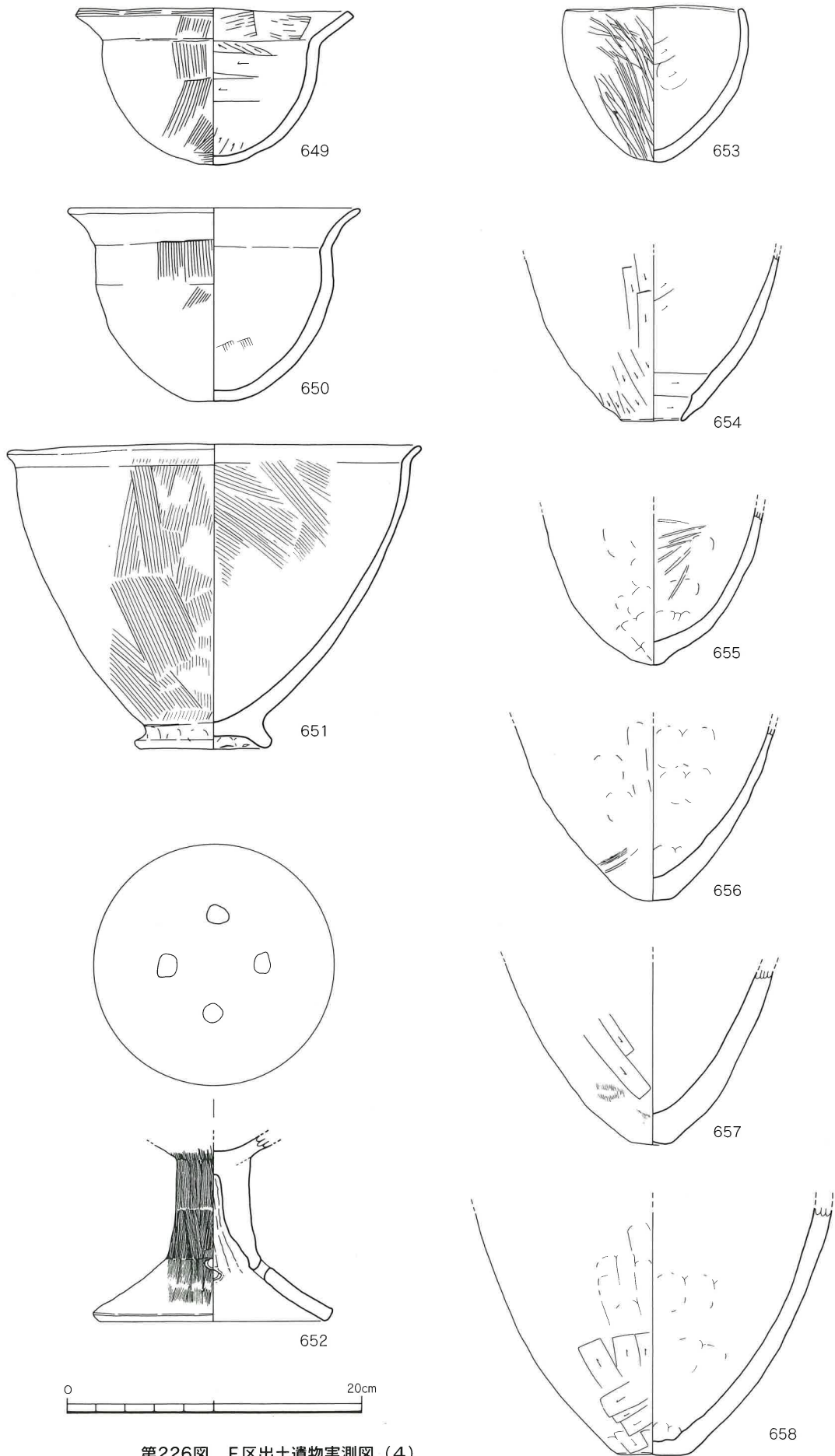
第223図 F区出土遺物実測図(1)



第224图 F区出土遗物实测图(2)



第225图 F区出土遗物实测图(3)



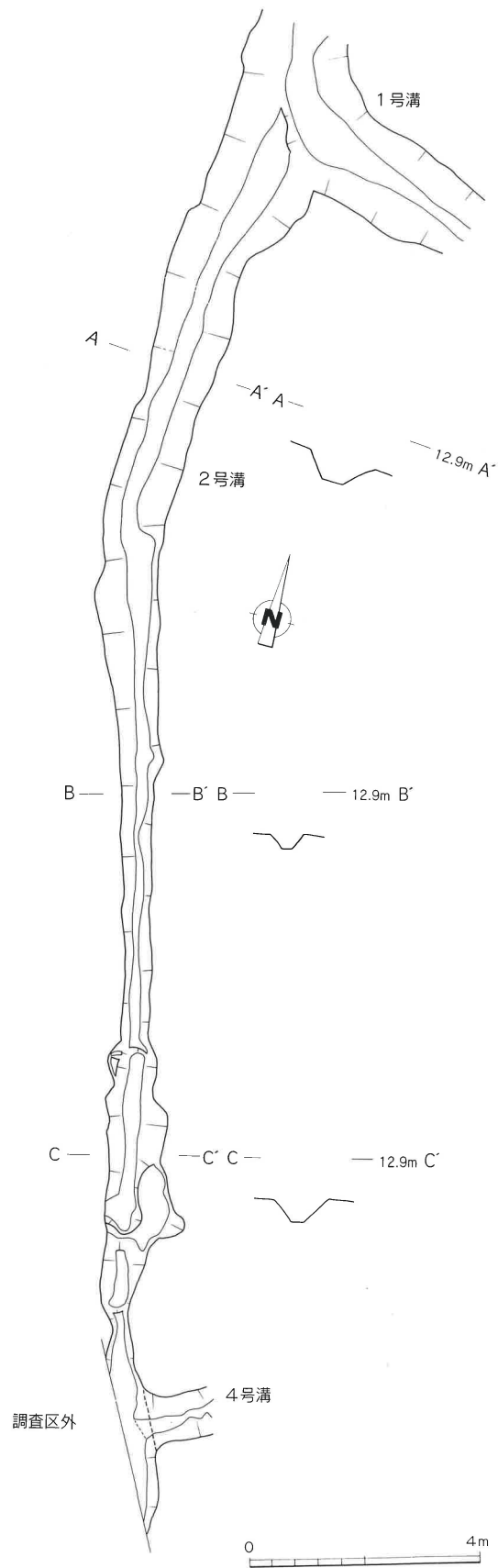
第226图 F区出土遗物实测图(4)

2号溝

遺構は1号溝南西コーナー南側から4号溝西端にかけて設けられており、南側は調査区外に続くものと推定される。全長は25.11mで、最大幅1.86m、最小幅28cm、最大深50cm、最小深10cmである。断面は逆台形形で、底部は南上がりである。溝は1号溝及び4号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より2号溝から1号溝、2号溝から4号溝への新旧関係をそれぞれ確認した。

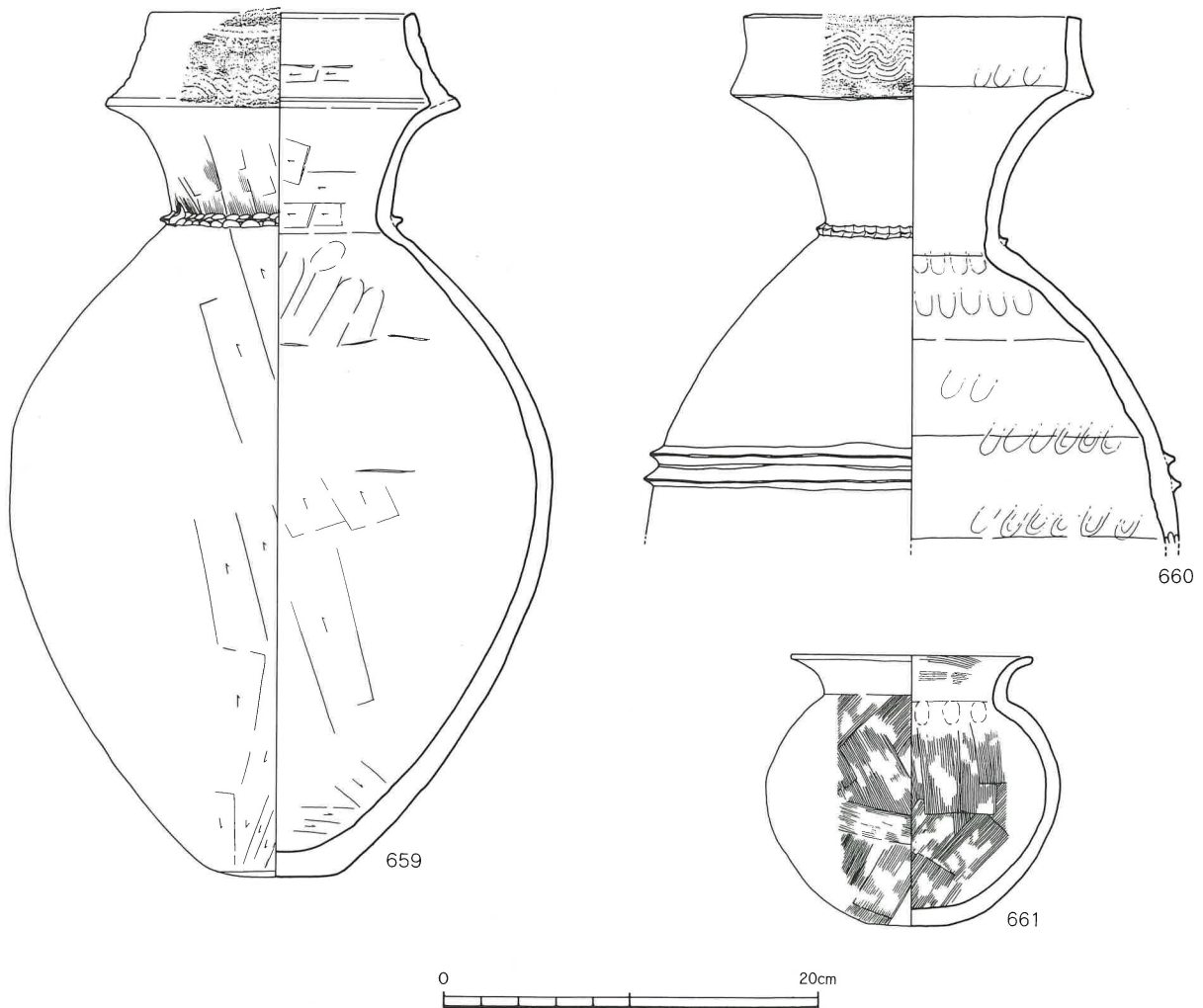
2号溝出土遺物

659・660は複合口縁壺、661は鉢、662・663は甕、664・665は高坏である。659の胎土には石英、角閃石、金雲母、茶色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部が横ナデとハケ目及び指圧痕の残る凸帯を有す。胴部は粗いヘラナデ及び不定方向ナデ、底部は不定方向ナデを確認できる。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデとヘラナデ、胴部は粘土積み上げ痕、ヘラナデ、指圧痕、不定方向ナデ、底部はヘラナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は14.2cm、胴部最大径は28.8cm、器高は46.4cmである。660の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部から胴部は不定方向ナデで、頸部には指ツマミ痕を残す凸帯1条、胴部には横ナデした凸帯2条を貼りつけている。内面の調整は口縁部から頸部が指圧痕と横ナデ、胴部は指圧痕と不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。口径は16.2cmである。661の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部は横ナデとハケ目、胴部以下はハケ目である。内面の調整は口縁部がハケ目と横ナデ、頸部が横ナデと指圧痕、胴部はハケ目を残す。焼成は良好で、色調は外面が淡黄褐色、内面が灰褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着が僅かにみられる。口径は12.8cm、胴部最大径は15.8cm、器高は14.4cmである。662の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケ目、底部は不定方向ナデである。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデとハケ目、胴部はハケ目とヘラナデ、底部はヘラナデと不定方向ナデを残す。焼成は良好で、色調は外面が淡赤褐色、内面が淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着、内面に煤と炭化物

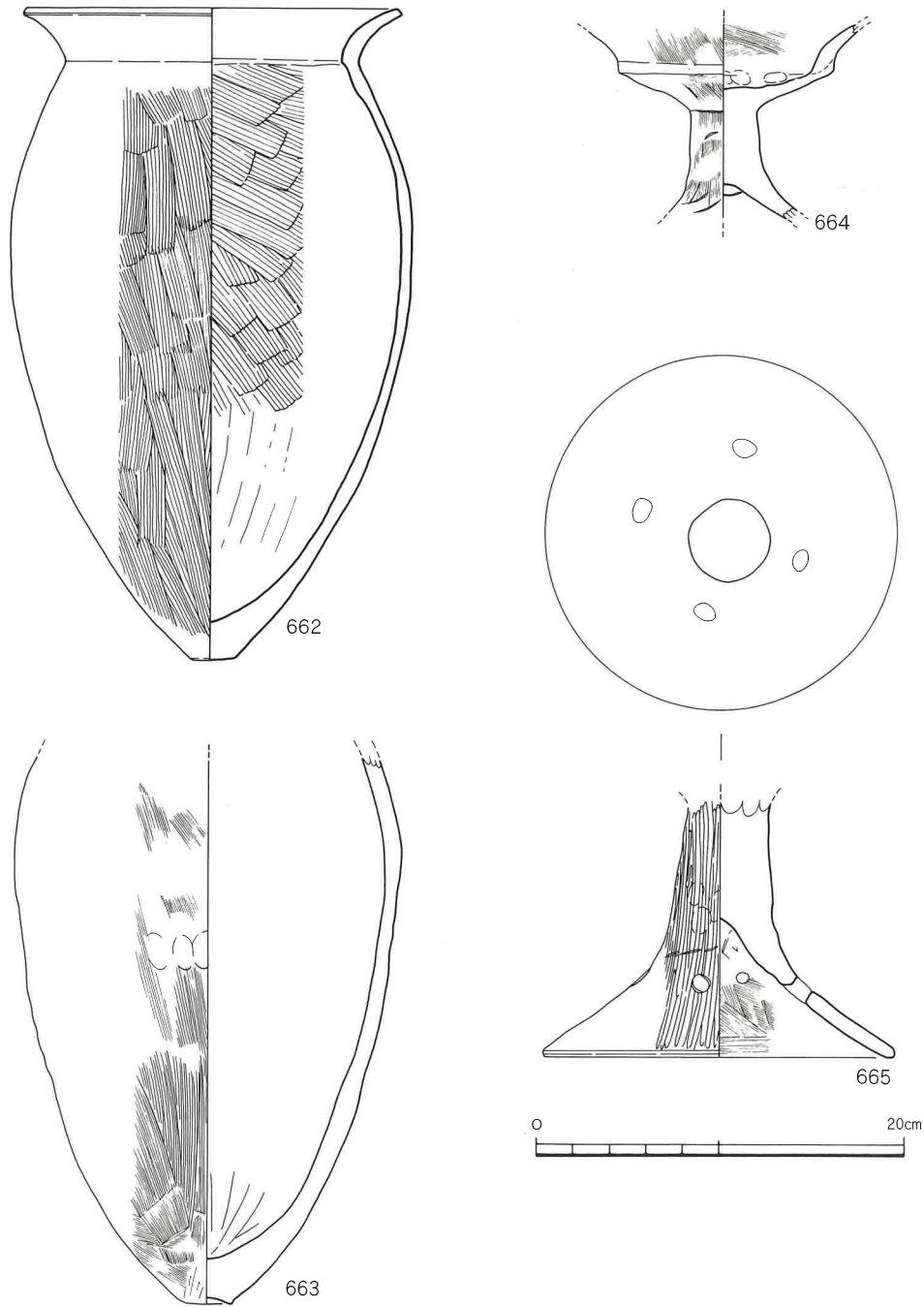


第227図 2号溝実測図

が沈着している。口径は19.9cm、胴部最大径は21.8cm、器高は35.1cmである。663の胎土には石英、角閃石、茶色砂粒、赤色砂粒、白色砂粒が含まれ外面の調整は胴部がハケ目と指圧痕、底部はハケ目及びへらナデと不定方向ナデを残す。内面の調整は胴部が不定方向ナデ、底部がへらナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。胴部最大径は21.1cmである。664の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整は坏部がハケ目と横ナデ、脚部が指圧痕及びへら状工具痕とハケ目を確認できる。内面の調整は坏部がハケ目、横ナデ、指圧痕、不定方向ナデ、脚部が不定方向ナデと指圧痕を残す。焼成は良好で、色調は外面が淡褐色、坏部及び脚部内面には赤色塗彩が僅かに残存しているため淡赤褐色を帯びる。665の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は指圧痕及び不定方向ナデと丁寧なへら磨き、底部には横ナデを施す。内面の調整は粗いへらナデ及び不定方向ナデとハケ目、底部には横ナデを残す。脚部の4箇所には焼成前穿孔を4孔確認できるほか、外面に黒斑を観察できる。焼成は良好で、色調は外面が暗茶褐色、内面が淡褐色である。底径は19.1cmである。遺物は弥生時代後期後半から終末の土器群と考えたい。



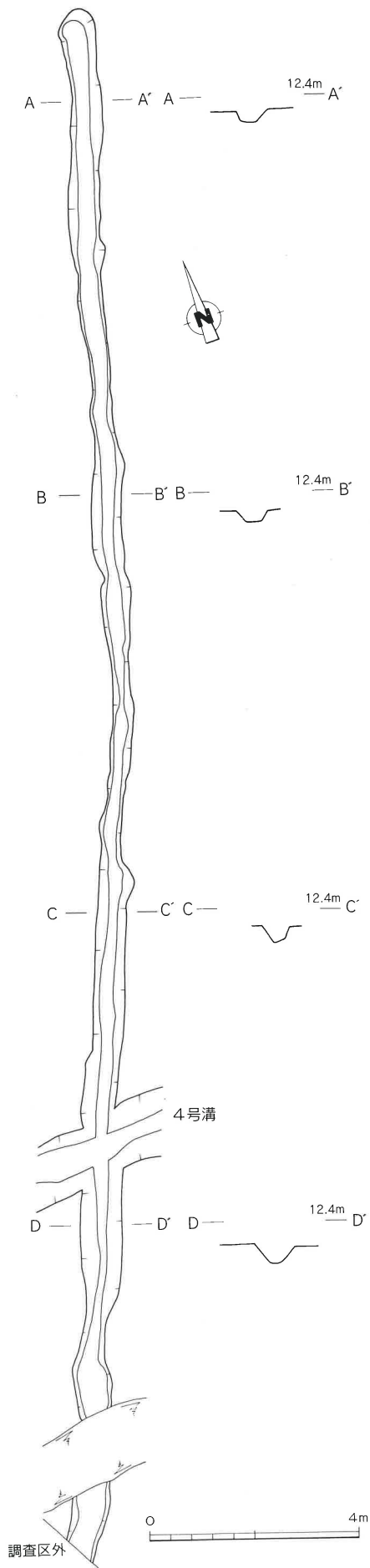
第228図 2号溝出土遺物実測図(1)



第229図 2号溝出土遺物実測図(2)

3号溝

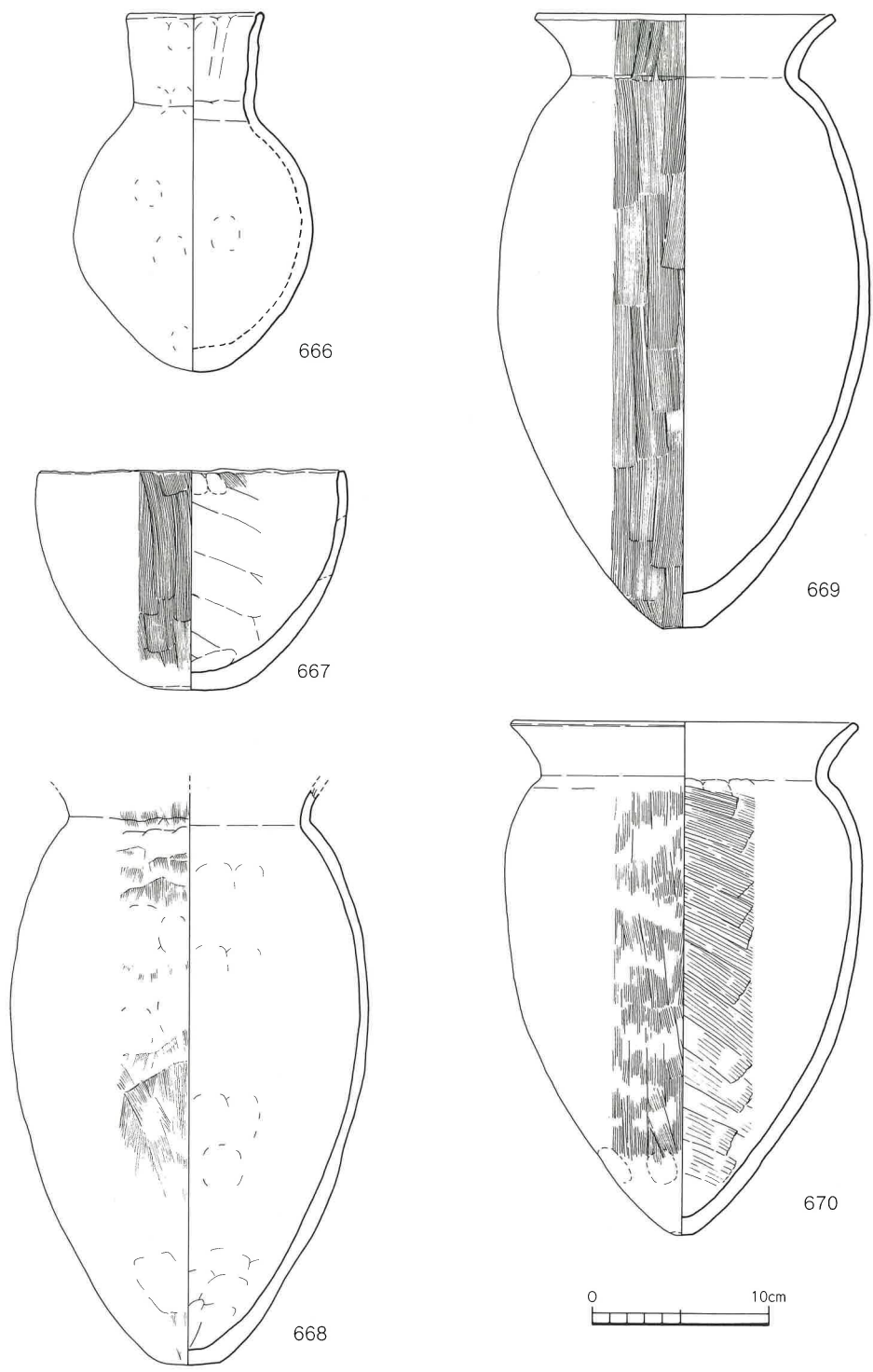
遺構は調査区南西隅から1号溝南側東西辺中央部にかけて設けられており、南側は調査区外に続くものと推定される。全長は29.88mで、最大幅83cm、最小幅31cm、最大深41cm、最小深8cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は南下がりである。溝は43号・44号・59号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より3号溝から各遺構への前後関係を確認した。



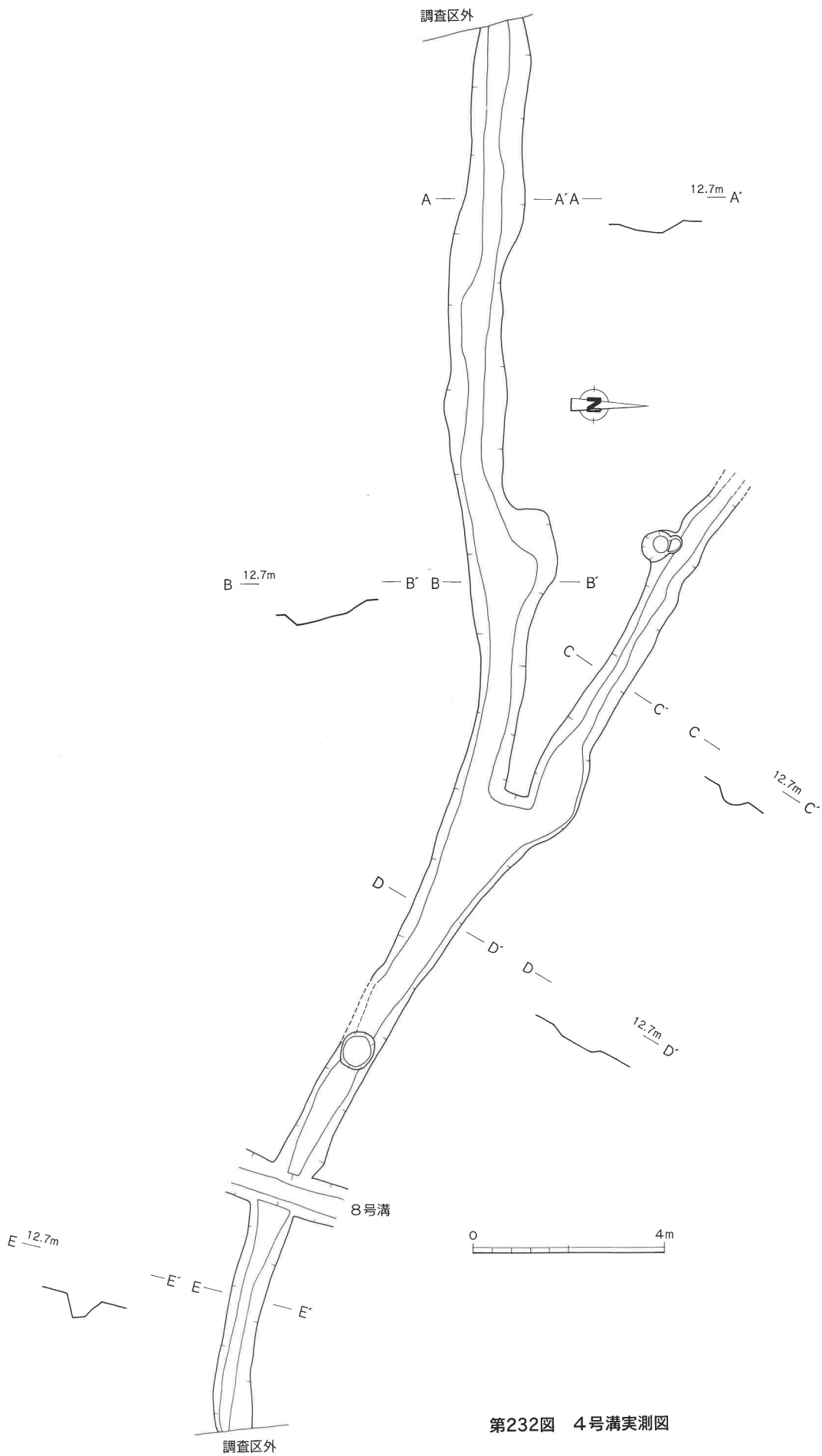
第230図 3号溝実測図

3号溝出土遺物

666は長頸壺、667は鉢、668～670は甕である。666の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部から頸部が指圧痕及び横ナデ、胴部以下は指圧痕及び不定方向ナデを残す。内面の調整は口縁部が指圧痕と横ナデ、頸部以下は指圧痕と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が淡茶褐色、内面が淡黄褐色である。口縁部の内外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は7.5cm、胴部最大径は13.5cm、器高は20.2cmである。667の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、灰色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面の調整はハケ目と不定方向ナデを残す。内面の調整は口縁部に指圧痕及びハケ目と横ナデを残すほかは、指圧痕と斜め方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が暗灰色、内面が淡褐色である。口縁部及び底部外面には黒斑を観察できる。口径は17.2cm、器高は12.4cmである。668の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は頸部から胴部が指圧痕とハケ目、底部が指圧痕及びハケ目と不定方向ナデである。内面の調整は頸部が横ナデ、胴部以下は指圧痕と不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。胴部外面には黒斑を観察できる。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。胴部最大径は20.4cmである。669の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部に僅かに横ナデを確認できるほかは、ハケ目である。内面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部以下は丁寧な不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が暗赤褐色、内面が淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は16.8cm、胴部最大径は21.1cm、器高は35.6cmである。670の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部は横ナデと指圧痕、胴部はハケ目、底部は指圧痕及び不定方向ナデを残す。内面の調整は口縁部が横ナデ、頸部が横ナデ及び指圧痕とハケ目、胴部がハケ目、底部はハケ目と不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は外面が淡灰褐色、内面が淡褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。遺物は弥生時代後期後半から終末の土器群と考えたい。



第231图 3号溝出土遺物実測図



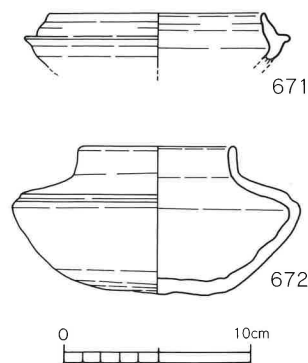
第232図 4号溝実測図

4号溝

遺構は2号溝南端から調査区南東隅にかけて設けられている。ほぼ中央部で分岐し西端は調査区外に続くものと推定されるが、東端は削平のため遺構を確認できなかった。全長は30.23mで、最大幅2.58m、最小幅60cm、最大深41cm、最小深5cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は東下がりである。溝内からはピット状の掘り方を2基確認している。溝は43号・59号住居、17号土坑、3号・8号・9号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から3号溝→59号住居→4号溝、4号溝→8号溝への新旧関係を確認したが、他の遺構との前後関係については削平が著しいため把握できなかった。

4号溝出土遺物

671は須恵器坏身、672は須恵器短頸壺である。671の胎土には白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面とも回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は11.3cmである。672の胎土には白色砂粒、灰色砂粒、角閃石が含まれ調整は外面底部にヘラ切りを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰色である。口径は7.8cm、器高は7.6cmである。671・672は6世紀後半～7世紀初頭と考えたい。



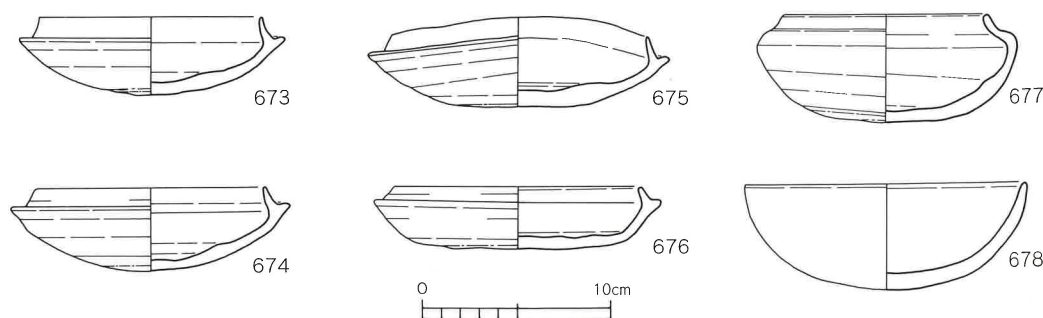
第233図 4号溝出土遺物実測図

5号溝

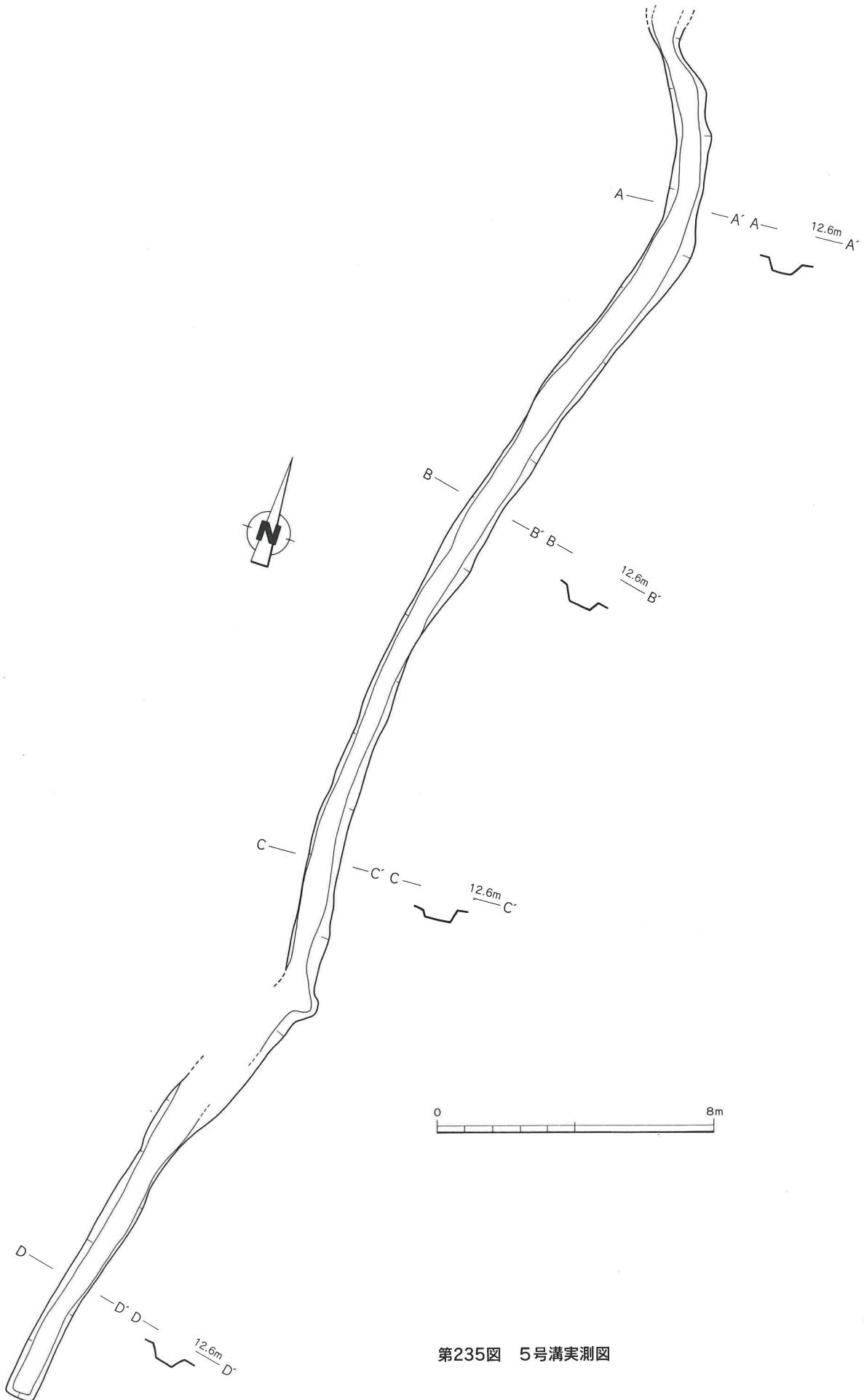
遺構は9号住居の南側から調査区中央部を通り1号溝西側コーナーまで設けられたものである。全長は45.84mで、最大幅1.18m、最小幅56cm、最大深37cm、最小深20cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は緩やかな南上がりである。溝は1号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から1号溝から5号溝への新旧関係を確認した。遺構は掘削方向及び形状から16号溝と同一である可能性がある。

5号溝出土遺物

673～676は須恵器坏身、677は須恵器短頸壺、678は土師器碗である。673の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ削り、内面底部に不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は11.8cm、器高は4.1cmである。674の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ削り、内面底部に不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡灰褐色である。口径は12.1cm、器高は4.4cmである。675の胎土には石英、白色砂粒が含まれ調整は外面底部に僅かにヘラ削り、内面底部に不定方向ナデを残すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径は13.6cm、器高は4.7cmである。676の胎土には石英と白色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ削り、内面底部に不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。口径は13.2cm、器高は3.2cmである。677の胎土には白色砂粒、石英が含まれ調整は外面底部にヘラ削り、内面底部に不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。口径は10.8cm、器高は5.9cmである。678の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は内外面ともに不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。口径は14.9cm、器高は5.7cmである。673～678は6世紀後半と考えたい。



第234図 5号溝出土遺物実測図



第235图 5号沟实测图

6号溝

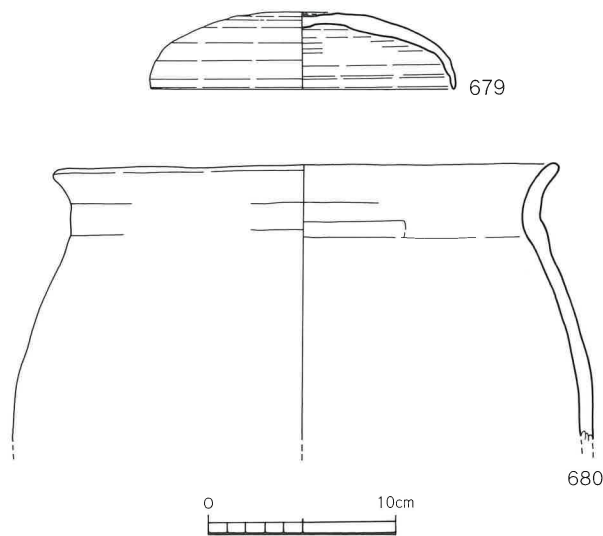
遺構は16号住居の西壁付近からほぼ真北にのびており、南側は調査区外に続くものと推定される。全長は11.44mで、最大幅1.95m、最小幅35cm、最大深18cm、最小深5cmである。立ち上がりは明瞭で、底部はほぼ平坦である。溝は16号住居と切り合い関係にあるが、削平が著しいため前後関係を把握できない。

6号溝出土遺物

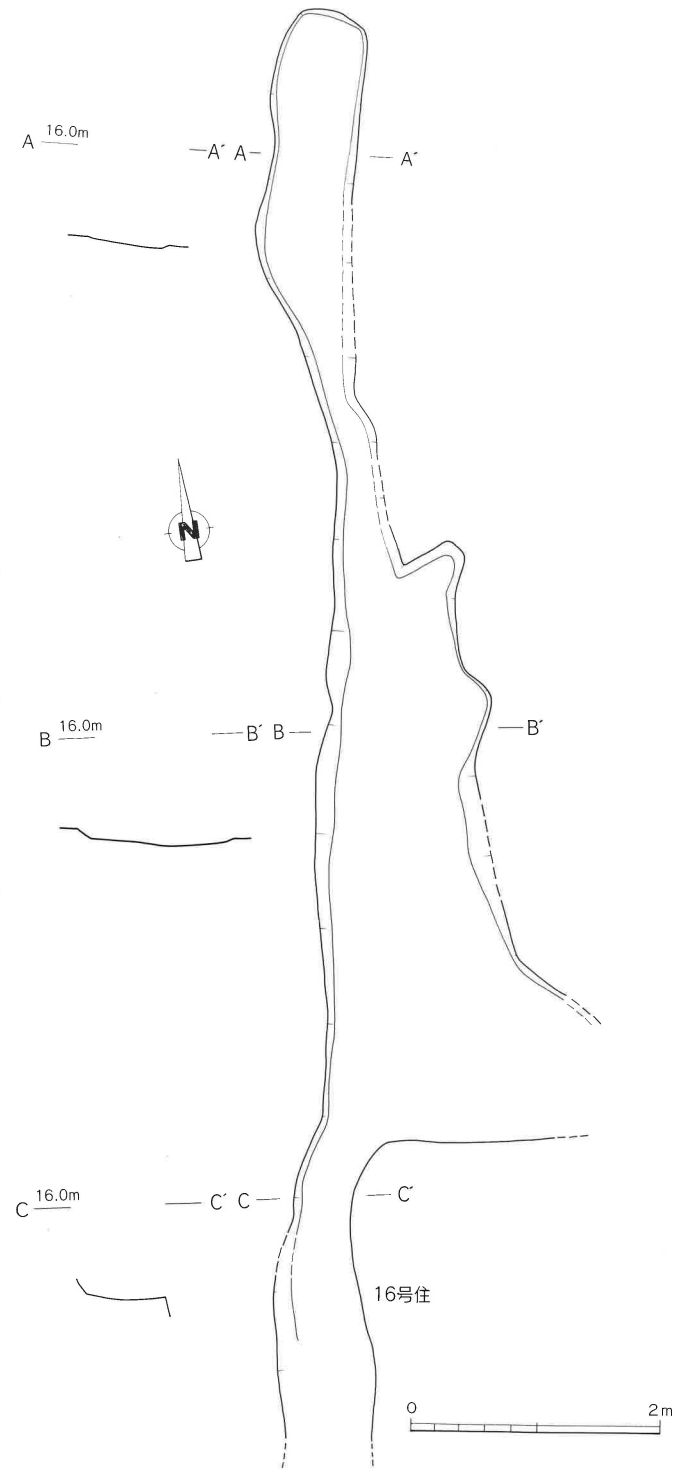
679は須恵器坏蓋、680は土師器甕である。679の胎土には白色砂粒が含まれ調整は外面天井部にヘラ削りを残すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は15.6cm、器高は4.0cmである。680の胎土には角閃石、赤色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部は不定方向ナデ、内面は口縁部から頸部が横ナデとヘラ状工具痕、胴部は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は27.2cm、胴部最大径30.4cmである。679・680は6世紀後半と考えたい。

7号溝

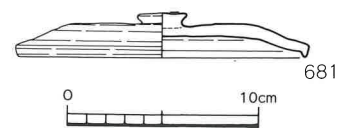
遺構は45号住居南壁から50号住居東側にかけて設けられている。全長は6.68mで、最大幅1.28m、最大深25cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は緩やかな南下がりである。溝内からはピット状の掘り方を7基確認している。溝は1号溝、45号・46号・50号住居と切り合い関係にあるが、遺構検出面の観察から1号溝から7号溝への前後関係を確めたほかは、削平が著しいため新旧関係を把握できない。



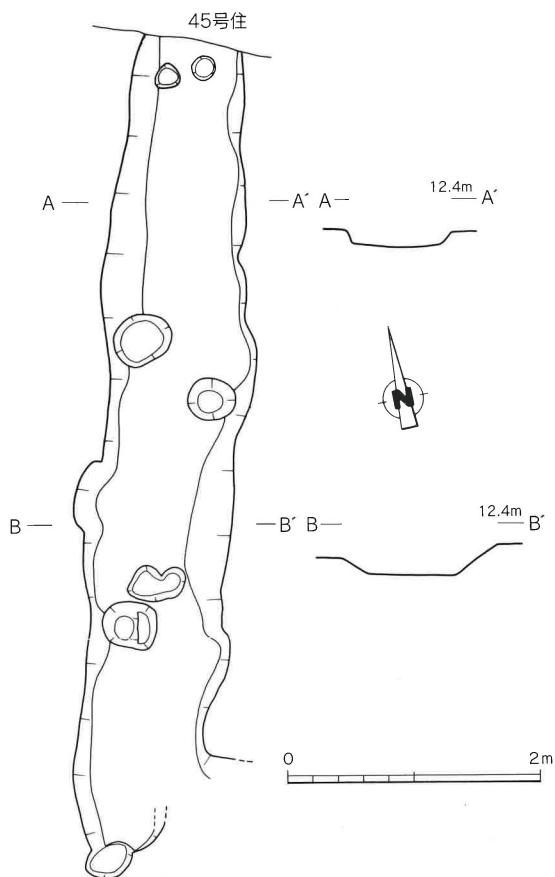
第237図 6号溝出土遺物実測図



第236図 6号溝実測図



第238図 7号溝出土遺物実測図



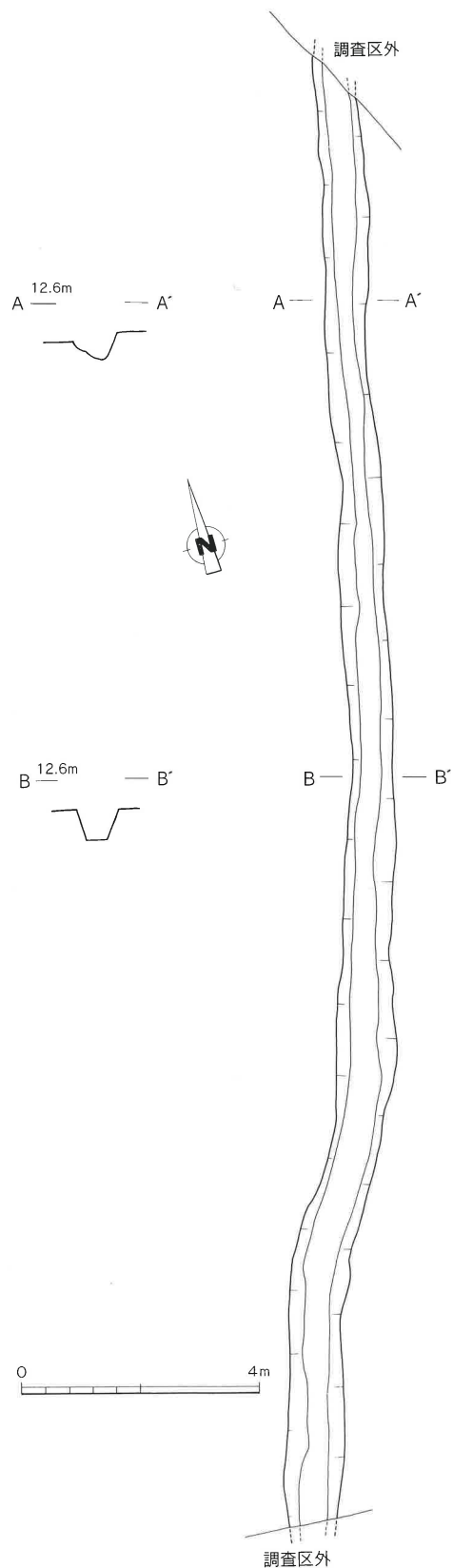
第239図 7号溝実測図

7号溝出土遺物

681は須恵器坏蓋である。681の胎土には白色砂粒が含まれ調整は内面天井部及び外面つまみ接合部に不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに青灰色である。口径は14.2cm、器高は2.4cmである。681は8世紀後半と考えたい。

8号溝

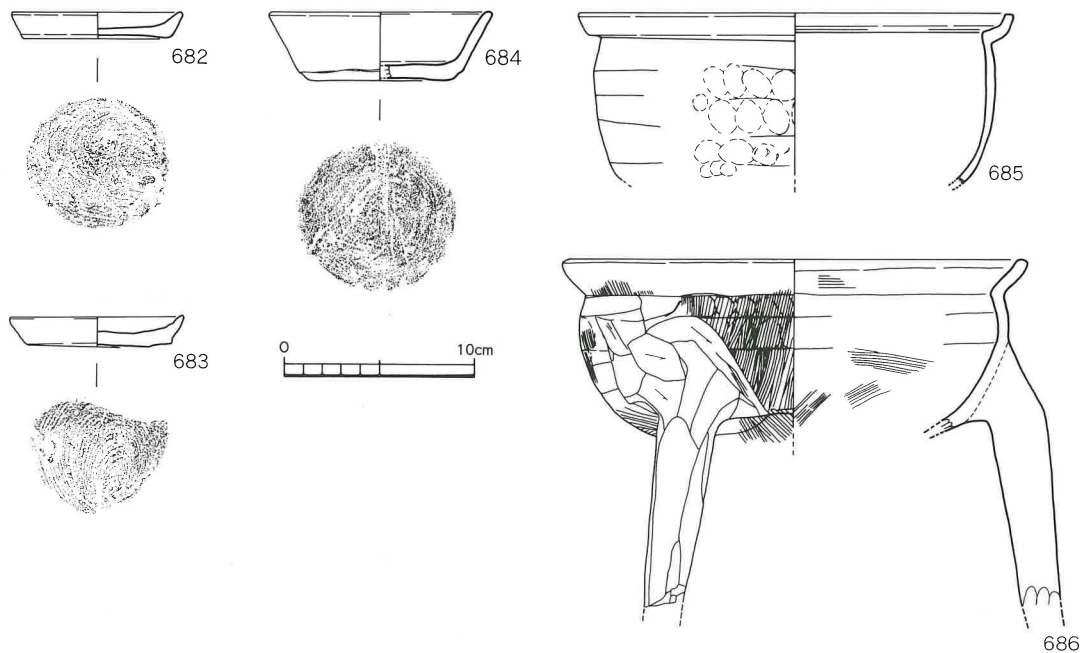
遺構は46号住居南側から調査区南東隅にかけて設けられている。北端は調査区外に続くものと推定されるが、南端は削平のため遺構を確認できなかった。全長は24.48mで、最大幅1.06m、最小幅68cm、最大深48cm、最小深22cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は南下がりである。溝は55号・56号住居及び4号・9号溝と切り合い関係にあり、55号住居→8号溝、56号住居→8号溝、4号溝→8号溝、9号溝→8号溝への新旧関係を確認した。



第240図 8号溝実測図

8号溝出土遺物

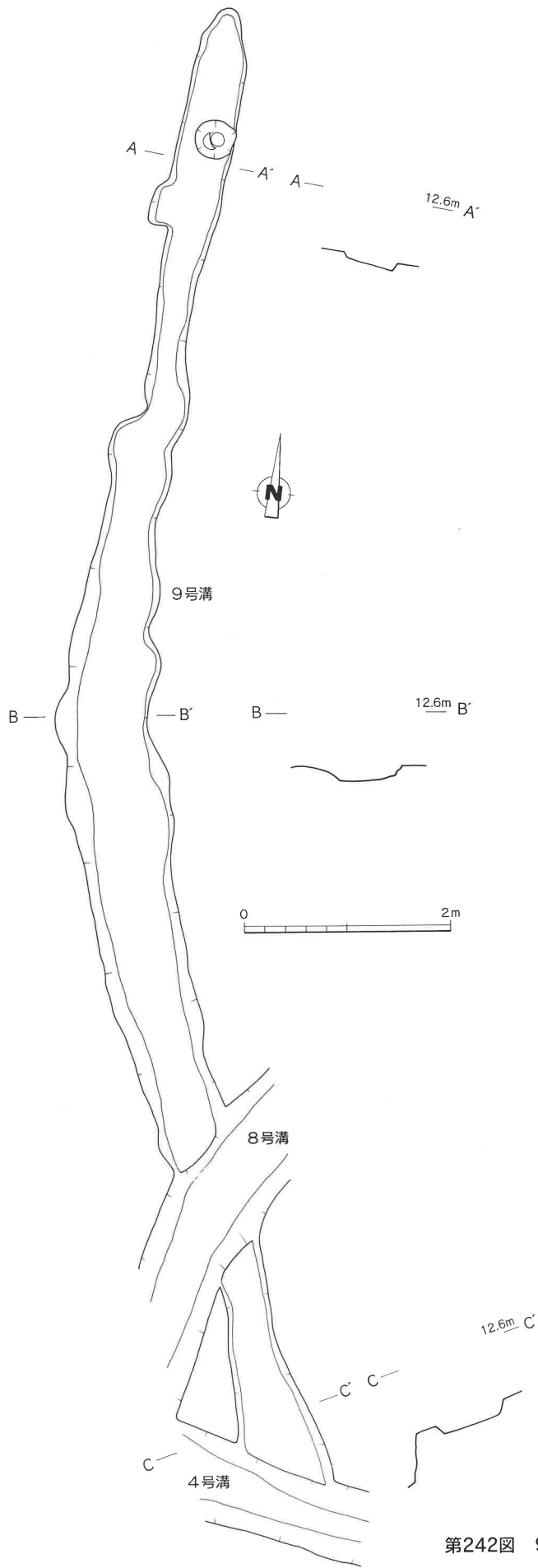
682・683は土師器小皿、684は土師器坏、685は瓦質鍋、686は土師質足鍋である。682の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ調整は外面底部に糸切り痕、内面底部に不定方向ナデを残すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は9.0cm、器高は1.4cmである。683の胎土には長石、石英、角閃石、灰色砂粒、白色砂粒が含まれ調整は外面底部に糸切り痕、内面底部に不定方向ナデを残すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。口径は9.2cm、器高は1.7cmである。684の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、茶色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は外面底部に糸切り痕を残すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡橙色である。口径は11.7cm、器高は4.0cmである。685の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母、灰色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデのほかは、指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は口縁部に横ナデを施すほかは、不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は22.8cmである。686の胎土には角閃石、赤色砂粒、白色砂粒、茶色砂粒が含まれ外面調整は口縁部が横ナデ、頸部以下は指圧痕及び横ナデとハケ目の後、足を貼りつけている。足は3本設けられていたと推定され、内2本が残存していた。足はヘラ状工具で削った後、丁寧に指ナデを行なっている。内面は横ナデ及び不定方向ナデとハケ目である。焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、内面が淡赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。口径は24.6cmである。682～686は13世紀末～14世紀初頭と考えたい。



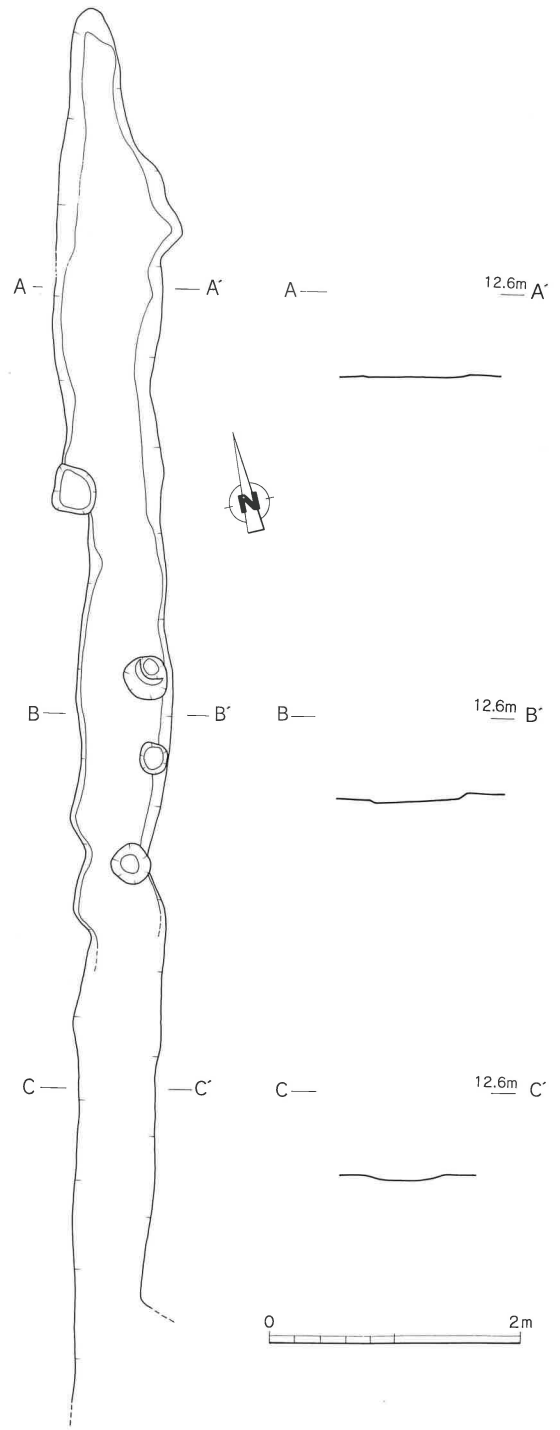
第241図 8号溝出土遺物実測図

9号溝

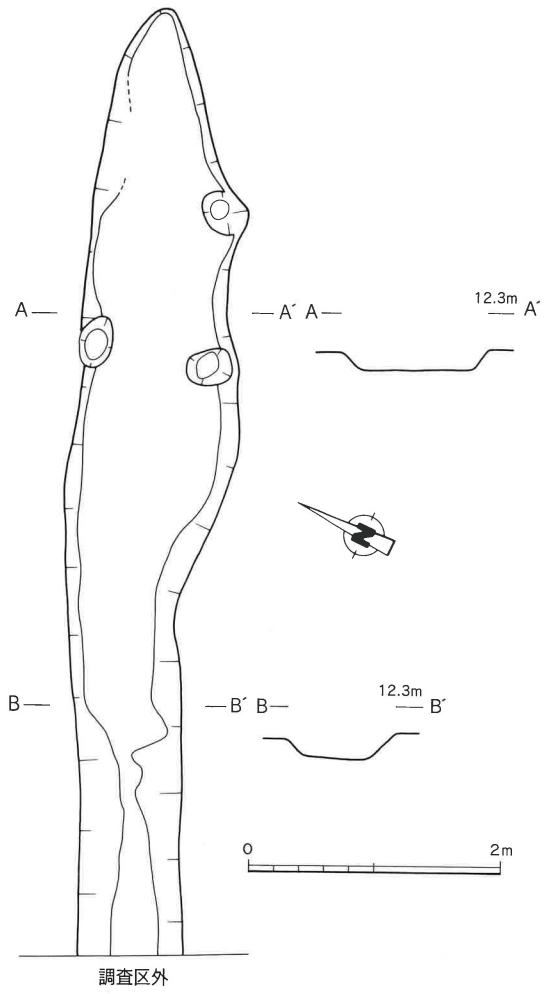
遺構は52号住居南側から調査区南東隅にかけて設けられている。全長は14.14mで、最大幅1.05m、最大深17cmである。立ち上がりは明瞭で、底部はほぼ平坦である。溝内からはピット状の掘り方を1基確認した。溝は4号・8号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より9号溝から8号溝への前後関係を確認したが、4号溝との新旧関係は把握できなかつた。遺構内から遺物は出土しなかつた。



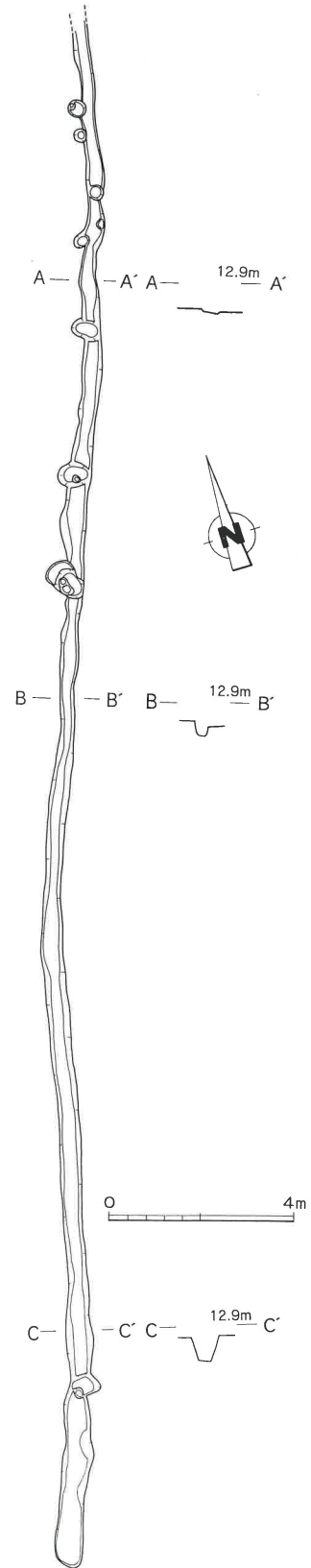
第242图 9号沟实测图



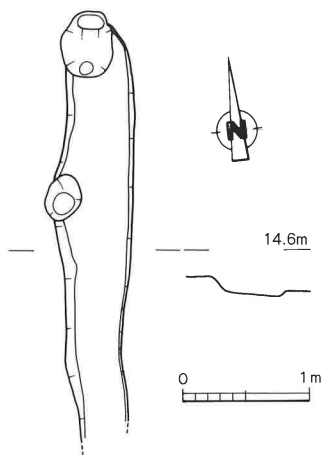
第243图 10号沟实测图



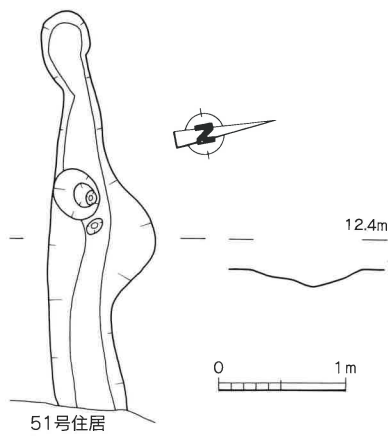
第244図 11号溝実測図



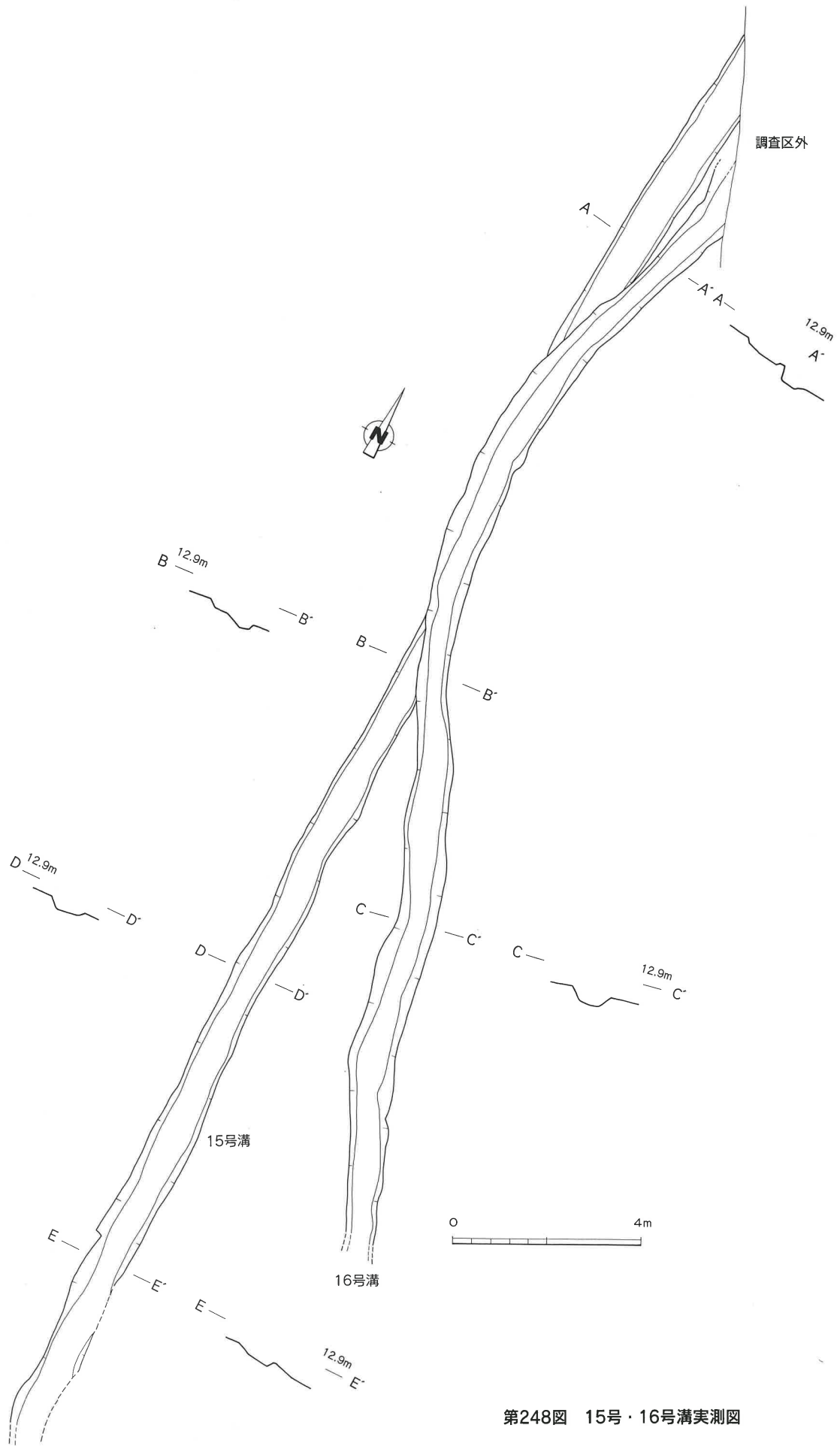
第245図 12号溝実測図



第247図 14号溝実測図



第246図 13号溝実測図



第248図 15号・16号溝実測図

10号溝

遺構は52号住居の南側から4号溝の北側にかけて設けられている。全長は11.14mで、最大幅1.03m、最大深5cmである。立ち上がりは不明瞭で、底部はほぼ平坦である。溝内からはピット状の掘り方を4基確認した。遺構内から遺物は出土しなかった。

11号溝

遺構は42号住居南側から2号溝南端にかけて設けられており、西側は調査区外に続くものと推定される。全長は7.51mで、最大幅1.31m、最大深22cmである。立ち上がりは明瞭で、底部はほぼ平坦である。溝内からはピット状の掘り方を3基確認している。溝は2号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から、2号溝から11号溝への新旧関係を確認した。遺構内から遺物は出土していない。

12号溝

遺構は40号住居南側から28号住居南側にかけて設けられている。全長は33.88mで、最大幅57cm、最小幅28cm、最大深53cm、最小深4cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は南下がりである。溝は38号～40号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察より各住居から7号溝への新旧関係をそれぞれ確認した。遺構から遺物は出土しなかった。

13号溝

遺構は51号住居の西側に設けられている。全長は3.13mで、最大幅85cm、最大深15cmである。立ち上がりは不明瞭で、底部は東下がりである。溝内にはピット状の掘り方を2基検出している。溝は51号住居と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から13号溝から51号住居への前後関係を確認した。遺構から遺物は出土しなかった。

14号溝

遺構は14号住居の北側に位置する。全長は1.68mで、最大幅68cm、最大深12cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は緩やかな北上がりである。溝内にはピット状の掘り方を2基検出している。時期を特定できる遺物は検出されなかった。

15号溝

遺構は1号溝の北端から10号住居にかけて直線的に設けられており、北側は調査区外に続くものと推定される。全長は33.28mで、最大幅1.01m、最小幅64cm、最大深28cm、最小深12cmである。立ち上がりは明瞭で、全体的に底部は平坦である。溝は1号溝、16号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から1号溝→15号溝→16号溝への新旧関係を確認した。時期を特定できる遺物は検出されなかった。

16号溝

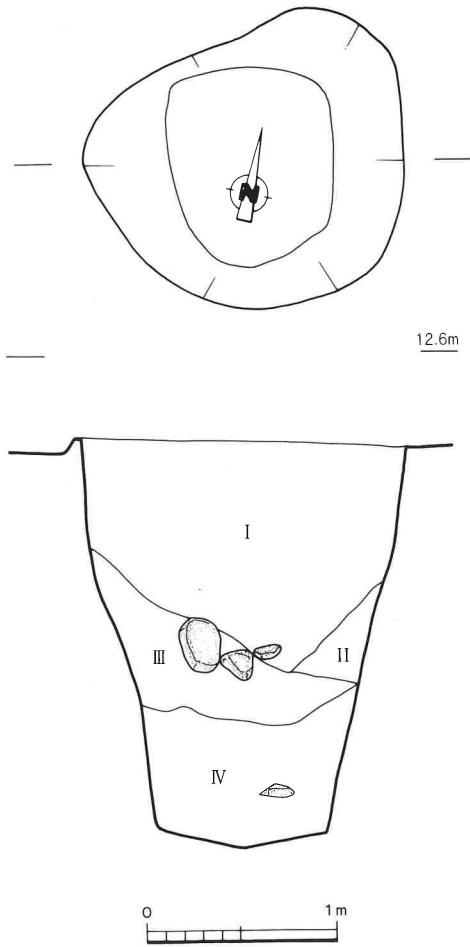
遺構は1号溝の北端から9号住居にかけて緩やかに湾曲したかたちで設けられおり、北側は調査区外に続くものと推定される。全長は25.55mで、最大幅1.04m、最小幅68cm、最大深32cm、最小深4cmである。立ち上がりは明瞭で、底部は緩やかな南下がりである。溝は1号溝、15号溝と切り合い関係にあり、遺構検出面の観察から1号溝→15号溝→16号溝への新旧関係を確認した。遺構は掘削方向から5号溝と同一である可能性がある。遺構内から時期を特定できる遺物は確認されなかった。

e. その他の遺構と遺物

1号井戸状遺構

遺構は調査区の北側に位置する。平面プランは歪な短楕円形で、規模は長軸1.91m、短軸1.33m、最大深2.18mである。壁面の立ち上がりは明瞭で、底部は僅かに窪んでいる。遺構底部には地山基盤層と推定される硬質の凝灰岩が露出している。遺構は2号掘立柱建物と切り合い関係にあるが、遺構検出面及び土層観察より2号掘立柱建物から1号井戸状遺構への新旧関係を確認した。遺物は埋土第I層から土師器小皿が出土している。

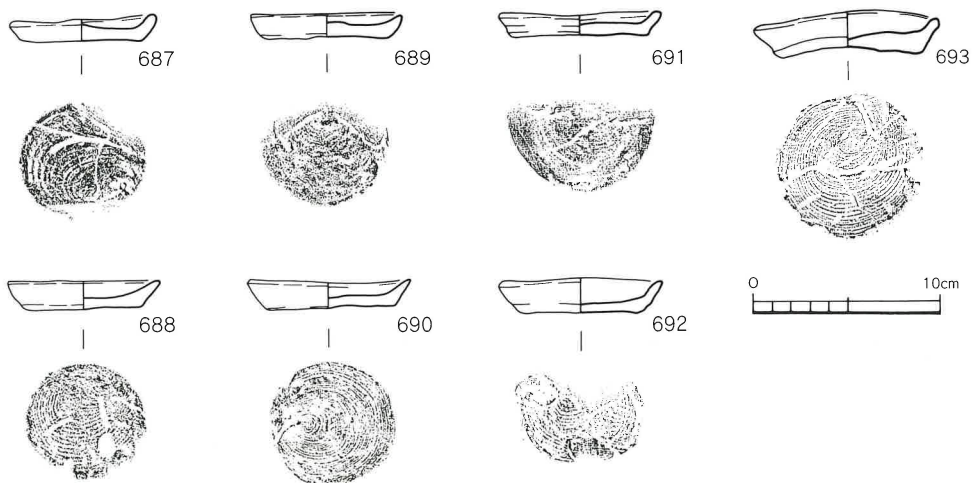
1号井戸状遺構出土遺物



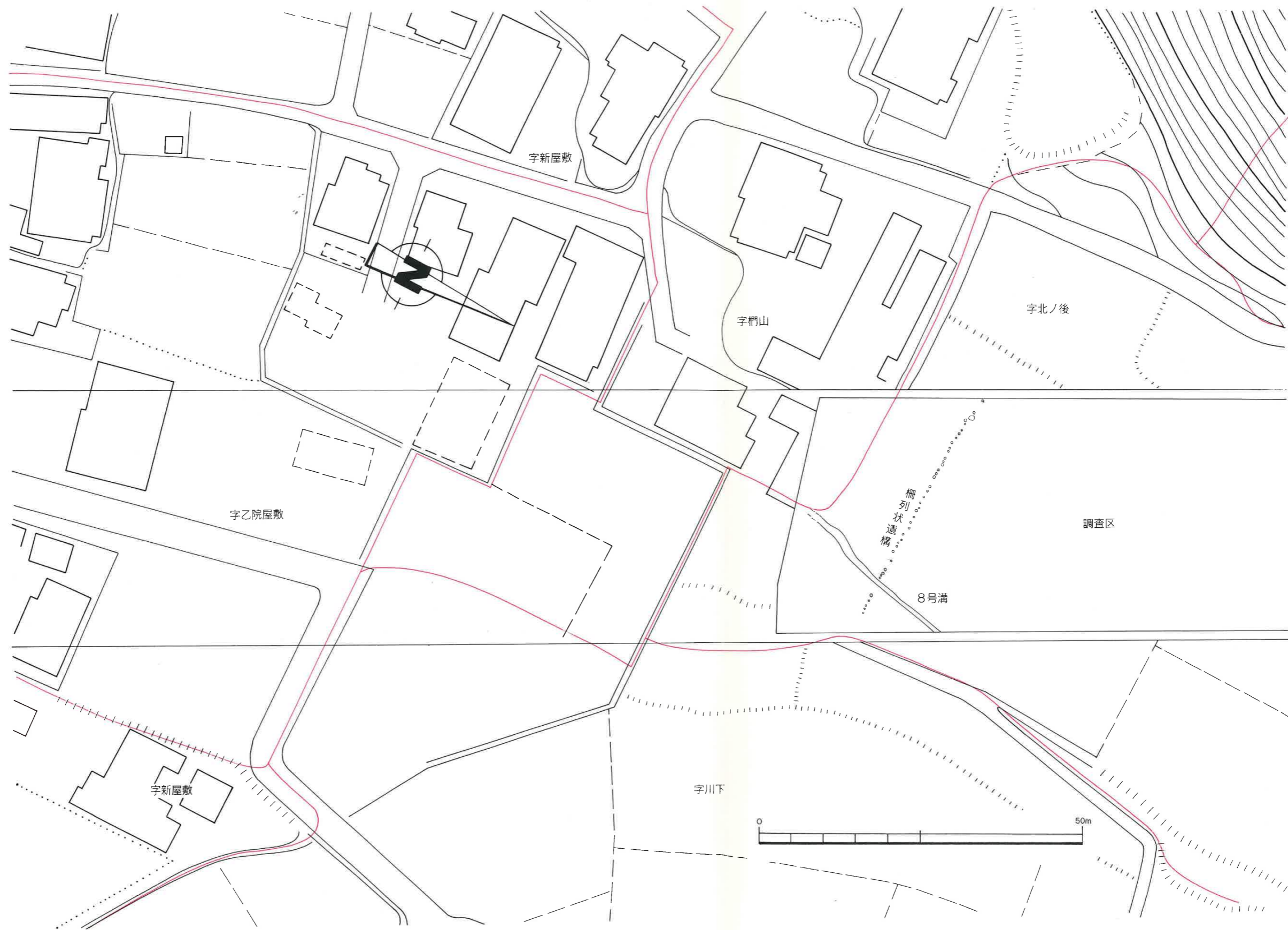
- I層：褐色弱粘質土層 遺物を包含する層で、炭化物を僅かに含みよく締まる。
- II層：淡褐色土層 I層と壁面を構成する褐色土の混合土で、崩落土と考えられる。
- III層：青灰色弱粘質土層 多量の水分を含み脆弱で崩れやすい、川原石を含む。
- IV層：青灰色土層 灰色砂粒、川原石、炭化物を含みよく締まる。

第249図 1号井戸状遺構実測図

687～693は土師器小皿で、第1層の最下層から出土した。687の胎土には茶色砂粒、白色砂粒が含まれ調整は外面底部が糸切り痕、内面底部が不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。口径は8.0cm、器高は1.4cmである。688の胎土には茶色砂粒が含まれ調整は外面底部が糸切り痕、内面底部が不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は8.2cm、器高は1.5cmである。689の胎土には茶色砂粒が含まれ調整は外面底部が糸切り痕、内面底部が不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。口径は8.0cm、器高は1.3cmである。690の胎土には茶色砂粒、赤色砂粒、白色砂粒、角閃石が含まれ調整は外面底部に糸切り痕を施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。口径は8.8cm、器高は1.5cmである。691の胎土には茶色砂粒、白色砂粒、角閃石が含まれ調整は外面底部が糸切り痕、内面底部が不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡茶褐色である。口径は8.6cm、器高は1.3cmである。692の胎土には茶色砂粒が含まれ調整は外面底部が糸切り痕、内面底部が不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色である。口径は8.6cm、器高は1.8cmである。693の胎土には茶色砂粒、白色砂粒が含まれ調整は外面底部が糸切り痕、内面底部が不定方向ナデを施すほかは、内外面ともに回転ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。口径は9.9cm、器高は1.9cmである。687～693は15世紀前半と考えたい。



第250図 1号井戸状遺構出土遺物実測図



第251図 1号柵列状遺構実測図

1号柵列状遺構

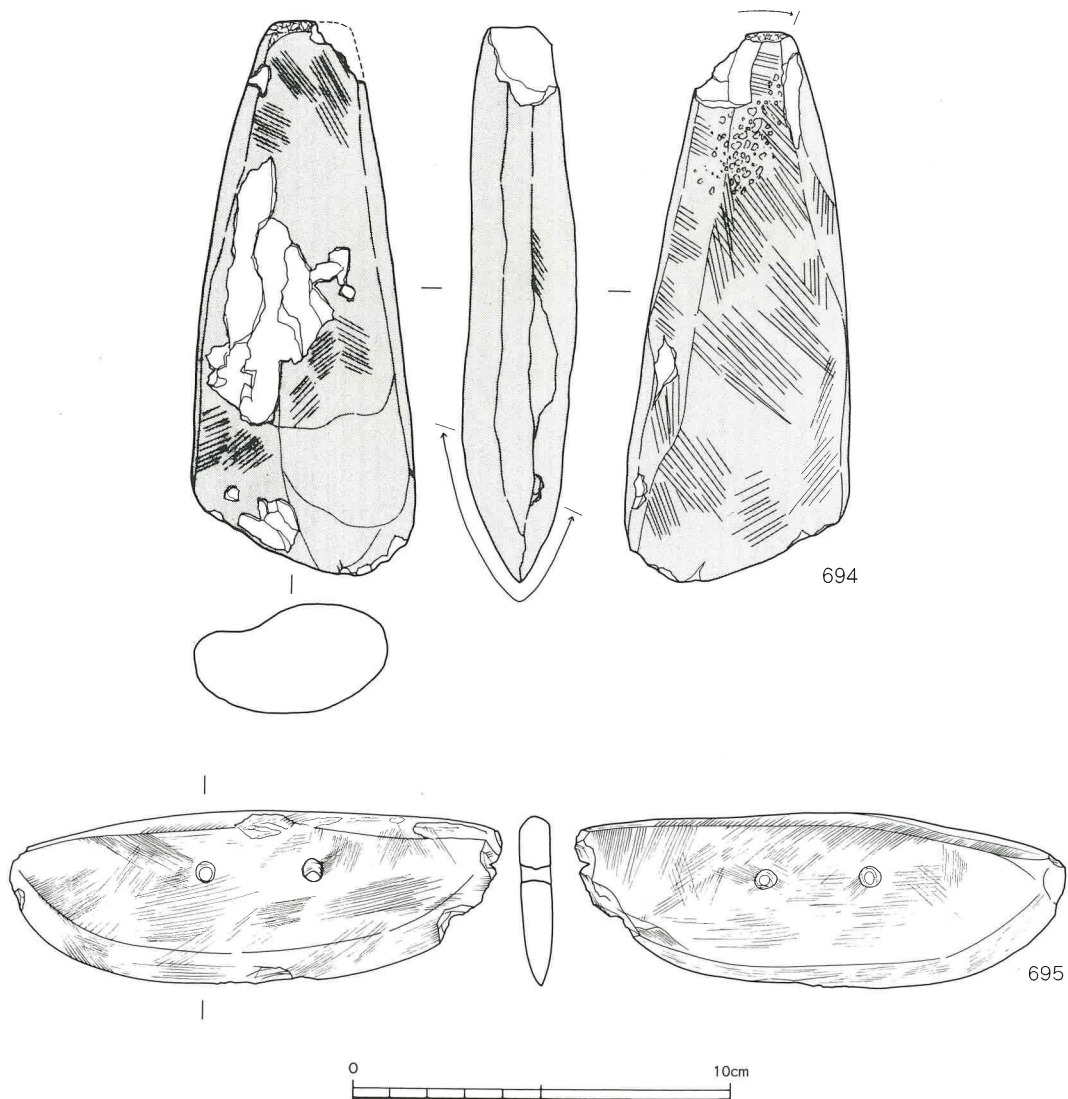
遺構は調査区の南側、55号住居から2号溝南側に向かい設けられている。柱穴数は41本、規模は最大で長軸48cm、短軸49cm、最大深12cm、最小で直径18cm、最大深2cmである。他遺構との新旧関係をみると42号住居跡、43号住居、54号住居、14号土坑、9号溝、10号溝のそれぞれから柵列状遺構への新旧関係を確認できる。2号溝及び8号溝との関係は不明である。遺構は字北ノ後、同櫛山、同乙院屋敷の字境と平行に設けられている。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

縄文・弥生時代の石器

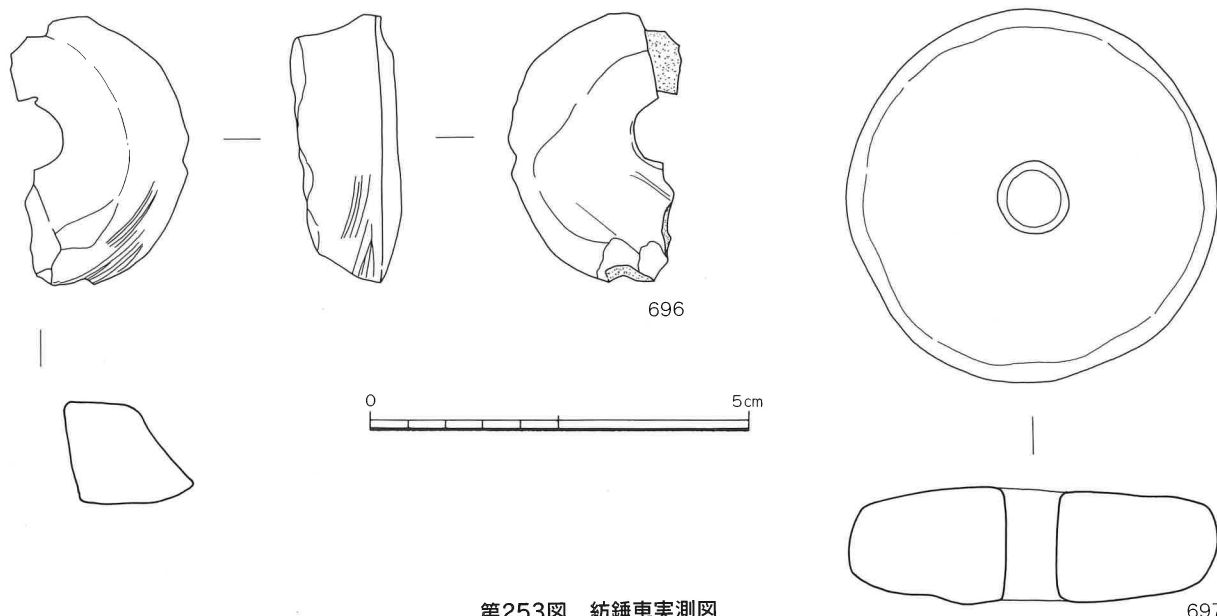
694は磨製石斧である。調査区南端の表土除去作業中に出土した一括遺物である。石材は緑泥片岩で、一部に敲打痕が残るほかは丁寧に研磨されている。最大長14.6cm、最大幅5.9cm、最大厚2.8cm、重量351gである。695は輝緑凝灰岩を用いた石庖丁である。両面とも丁寧に研磨されており、2箇所穿孔を有す。最大長13.1cm、最大幅4.6cm、最大厚0.8cm、重量87gである。694は縄文時代、695は弥生時代である。

紡錘車

696・697は紡錘車である。696は調査区中央部西端の表土除去作業中に出土した一括遺物である。石材は蛇紋岩で、広径3.5cm、挟径2.5cm、厚さ1.3cm、孔径0.8cmである。697は調査区南端から遺構精査時に出土した一括遺物である。697は土製で胎土には石英と角閃石が含まれ調整は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は褐色である。直径4.9cm、厚さ1.5cm、孔径0.9cmである。696は古墳時代、697は時期不明である。



第252図 縄文・弥生時代の石器実測図



第253図 紡錘車実測図

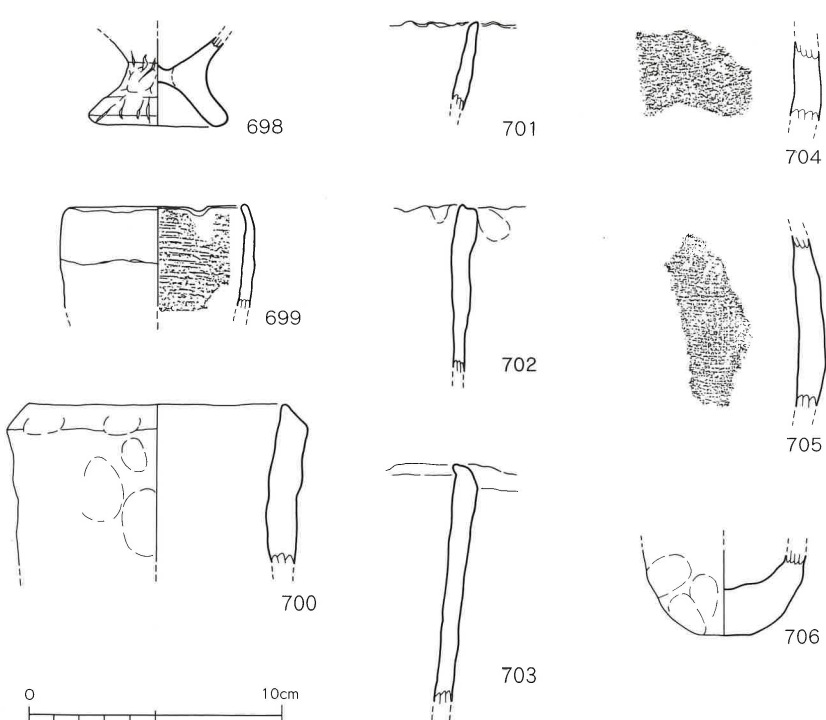
製塩土器

698は煎熬用、699は煎熬用と推定される土器片で、700～706は焼塩用である。698は12号住居カマド跡精査中に出土した。カマド周辺は削平が著しく、また、カマド直下には1号溝が存在するため住居に伴うものかは断定できない。遺物の胎土には石英が僅かに含まれる。体部から脚部にかけては円盤充填痕を確認できる。外面には整形時の亀裂が観察できるほか、指圧痕及び不定方向ナデと横ナデがみられる。体部内面はへら状工具によるナデ、脚部内面は不定方向ナデを残す。遺物の焼成は良好であるが二次加熱を受けており、器体劣化が顕著で内外面ともに淡橙褐色に変色している。底径は5.6cmである。699は2号・3号土坑精査時に出土したものである。両土坑は9号住居と新旧関係にあるが、遺物がどの遺構に伴うものかは不明である。遺物の胎土には灰色砂粒、石英が含まれ外面調整は口唇部が横ナデで、口縁部以下には粘土積み上げ痕及び不定方向ナデが確認できる。内面調整は横方向に貝殻条痕を残す。焼成は良好で硬化し、色調は内外面ともに淡褐色である。遺物には明瞭な二次加熱痕を確認できない。口径は8.4cmである。700～706は42号住居直上に堆積していた暗褐色弱質土（第18図参照）より出土したもので、遺構に伴うものかは不明である。700の胎土には石英、白色砂粒、赤色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕で、内面は剥離のため不明である。焼成は良好で、色調は二次加熱のため内外面ともに明橙色である。口径は11.8cmである。701の胎土には長石、石英、角閃石が含まれ調整は内外面ともに不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は二次加熱のため内外面ともに淡橙色である。702の胎土には長石、角閃石が含まれ外面調整は指圧痕で、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で硬化し、色調は二次加熱のため内外面ともに淡褐色である。703の胎土には石英と灰色砂粒が僅かに含まれる。外面調整は指圧痕と不定方向ナデで、内面には僅かに布目を残す。焼成は良好で、色調は二次加熱のため内外面ともに淡赤褐色である。704の胎土には石英と灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕、内面が布目である。焼成は良好で、色調は二次加熱のため内外面ともに淡褐色である。705の胎土には灰色砂粒が僅かに含まれる。外面調整は指圧痕、内面は布目である。焼成は良好で、色調は二次加熱のため内外面ともに淡橙色である。706の胎土には石英、角閃石、灰色砂粒が含まれ外面調整は指圧痕、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は二次加熱のため内外面ともに淡橙色である。698は古墳時代前期、699は2号・3号土坑出土遺物から7世紀前半、700～706は8世紀代と考えたい。

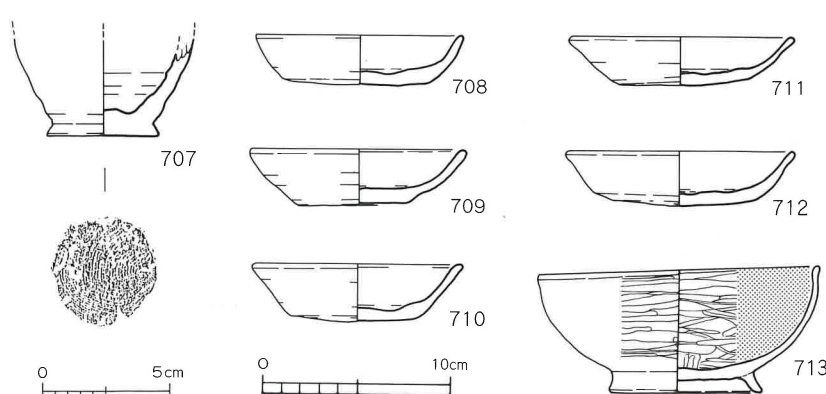
古代の遺物

707は須恵器壺、708～712は土師器坏、713は黒色土器A類の碗、714は女瓦片である。707は出土遺物700～706と同時に出土した。胎土には灰色砂粒と黒色砂粒が僅かに含まれ調整は外面底部に糸切り痕を残すほかは、内外面ともに回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡青灰色である。底径は4.4cmである。708～713は22号住居調査時に出土したものである。708の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整

は外面底部にヘラ切りを残すほかは、横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。遺物には全面に煤の付着がみられる。口径は11.0cm、器高は7.9cmである。709の胎土には長石、角閃石、灰色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ切りを残すほかは、回転横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。口径は11.5cm、器高は2.9cmである。710の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ切り、内面底部に回転横ナデを施すほかは、内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は11.3cm、器高は7.8cmである。711の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ調整は外面底部にヘラ切り、内面底部に回転横ナデを施すほかは、内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は12.0cm、器高は7.0cmである。712の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は回転横ナデとヘラ切り、内面は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は12.0cm、器高は2.9cmである。713の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒、灰色砂粒が含まれ外面調整は横ナデ後ヘラ磨き、高台は横ナデ、高台内はヘラ切り痕を残す。内面調整はヘラ磨きである。焼成は良好で、色調は外面が淡茶褐色、内面が黒色である。口径は14.8cm、器高は6.4cmである。714の胎土には石英が僅かに含まれる。凹面は布目、凸面は格子目タタキ、側面と端部はヘラ切り及びヘラ削りである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄色である。707は8世紀前半、708～713は10世紀前半、714は9世紀代と考えたい。

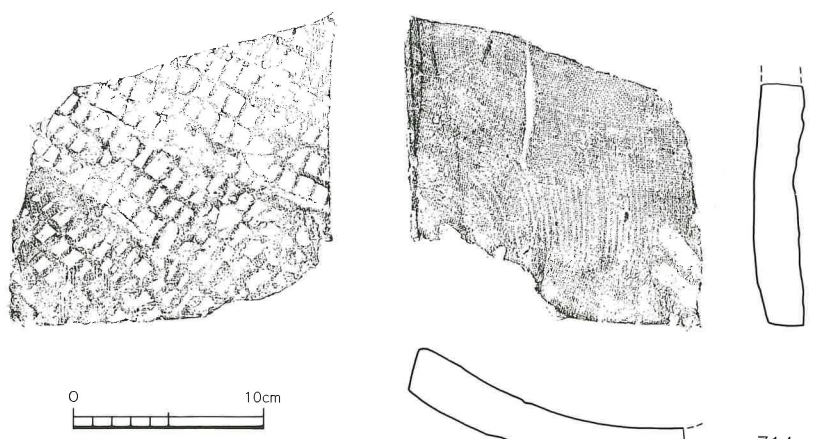


第254図 製塩土器実測図



第255図 古代の遺物実測図 (1)

第256図 古代の遺物実測図 (2)



第257図 古代の遺物実測図 (3)

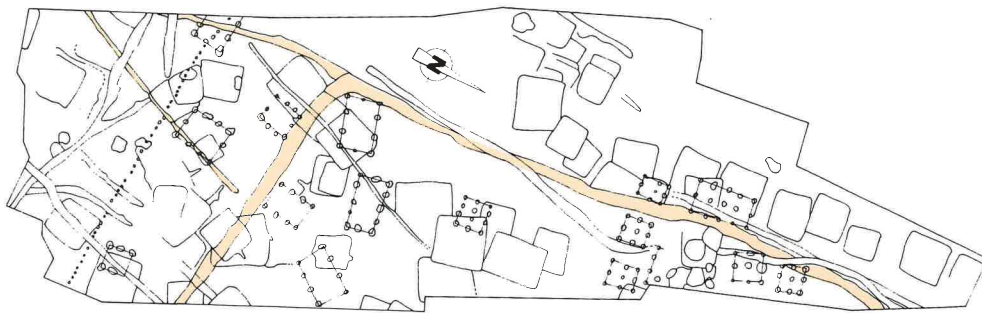
3. 小 結

北ノ後遺跡で確認された遺構の時期は弥生時代後期後半～終末（1号～3号溝）、6世紀前半（8号住）、6世紀後半（3号住、6号住、14号住、16号住、22号～24号住、28号住、31号住、39号住、51号住、55号住、5号溝、6号溝）、6世紀後半を中心とする時期（1号住、2号住、4号住、5号住、7号住、12号住、25号～27号住、29号住、30号住、45号住、46号住、56号住～58号住）、6世紀後半～7世紀前半（9号住、11号住、34号住、38号住、40号～43号住、48号～50号住、53号住、8号掘立柱建物、2号土坑、4号溝）、7世紀中頃（3号土坑）、7世紀後半～8世紀代（11号土坑、12号土坑、17号土坑、7号溝）、中世（8号溝、1号井戸状遺構）である。8号掘立柱建物と主軸あるいは形態を同じくする1号～7号掘立柱建物は8号掘立柱建物と同時期である可能性が高く、また、前述したように5号溝と16号溝も同一の溝である可能性を指摘しておきたい。

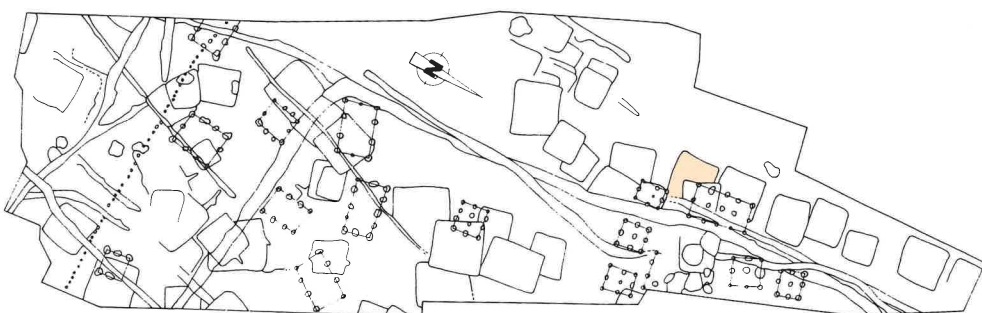
変遷図からも明らかなように、弥生時代の1号～3号溝が廃絶してから古墳時代に至るまで遺構及び遺物は確認されていない。6世紀前半になると竪穴住居がつくられはじめ、6世紀後半になると5号溝－16号溝を意識しながら、住居主軸をほぼ南北に向け、カマドを基本的に北壁付設（カマド基盤床、袖石等を設ける、しっかりとしたつくりのカマド）とする住居グループが広がることになる。6世紀後半を中心とする時期の住居（基本的に6世紀後半の住居と同様で、5号溝－16号溝を意識し、住居主軸を南北方向に向け、北壁にカマドを付設）を含めて考えると、9号～16号掘立柱建物の広がる区域を避けるように展開することがわかる。しかしながら、9号～16号掘立柱建物が6世紀後半及び6世紀後半を中心とする時期の住居グループに、対応するかはどうかは断定できていない。つづく、6世紀後半から7世紀前半の住居グループをみると、4号溝の北側に前期より住居グループの規模を減じて広がることがわかる。住居主軸、カマド（カマド基盤床、袖石の省略等、簡素なカマド構造となる）は統一性なく設定され、その北側に1号～8号掘立柱建物が建てられている。7世紀中頃、7世紀後半～8世紀代になると、土坑等を残すのみで、遺跡の中心からははずれるようである。その後の遺構、遺物はほとんど確認できなくなり、中世に至り8号溝（13世紀末～14世紀初頭）、1号井戸状遺構（15世紀前半）が出現する。後述する乙院屋敷遺跡周辺に遺跡の中心を移すとするならば、遺跡の末端部にあたると推測される。

以上のように、古墳時代を中心とする遺跡の展開は調査区内に止まる事無く、遺跡周辺に展開する段丘と扇状地及び微高地でも同様であることが玉沢地区条里跡六反田地区⁽¹⁾を好例に推測することができる。しかしながら、微高地間等に広がる沖積地には（北ノ後遺跡と玉沢地区条里跡六反田地区の間に広がる低湿な無遺構地帯）遺構・遺物を確認できない。この状況は県道大分大野線（国道210号交差点）道路改良事業に伴う試掘調査⁽²⁾において低湿地の広がりには宗方台及び雄城台の麓付近まで続くことが判明していることから旧河道などの存在が考えられよう。遺跡の周辺をみると古くは玉沢地区条里跡二反田地区⁽³⁾（縄文時代後期～晩期）、植田市遺跡（縄文時代晩期）に活発な活動をみることができ、発掘調査により資料が急増するのは深町遺跡（弥生時代中期前半～後半）等にみられるように弥生時代中期以降である。弥生時代後期には従来、大規模集落は雄城台遺跡（弥生時代後期末～古墳時代前期初頭）のように台地上の高地性集落として存在するものと考えられてきたが、最近では賀来中学校遺跡（弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭）に代表されるように沖積地上の微高地等に展開することが徐々に明らかとなってきた。七瀬川流域をみるとガランジ遺跡（弥生時代後期中葉）、植田平石遺跡（弥生時代後期終末）にも同期の住居跡が確認されている。北ノ後遺跡においても弥生時代後期後半から終末の遺物を出土する溝を確認しており、遺構は沖積地上への進出を補うものとなった。しかしながら、1号～3号溝を除けば同期の遺構・遺物はわずかにしか確認できず、それ以上の成果が得られなかったため、いかなる性質の遺跡であるか言及することは避けたい。

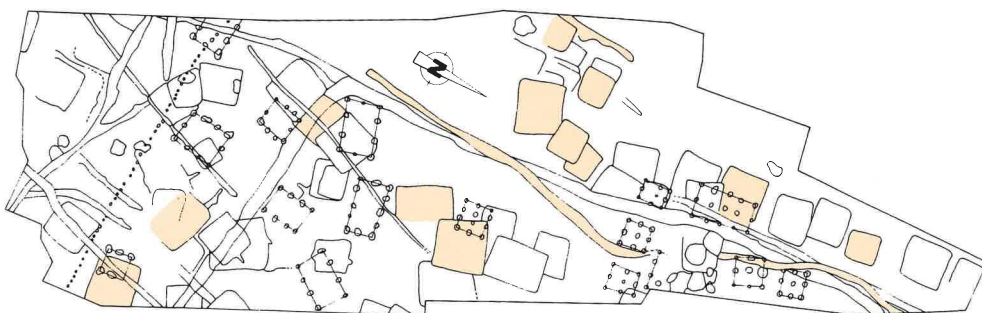
古墳時代になると集落は七瀬川がつくりだす沖積地上（微高地・自然堤防・段丘等）に著しく拡大しており植田市遺跡（国道210号バイパス建設に伴う発掘調査：古墳時代前期）、玉沢地区条里跡田仲地地区⁽⁴⁾（古墳時代前期）、植田条里遺跡D区（古墳時代前期の住居跡と溝）、植田市遺跡（七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査：古墳時代中期～後期）、玉沢地区条里跡六反田地区⁽⁵⁾（古墳時代後期住居跡及び溝）などがあげられ、北ノ後遺跡（古墳時代後期）⁽⁶⁾も当地域の主要な集落と考えることができる。さらに、水田跡として玉沢地区条里跡二反田地区（弥生・



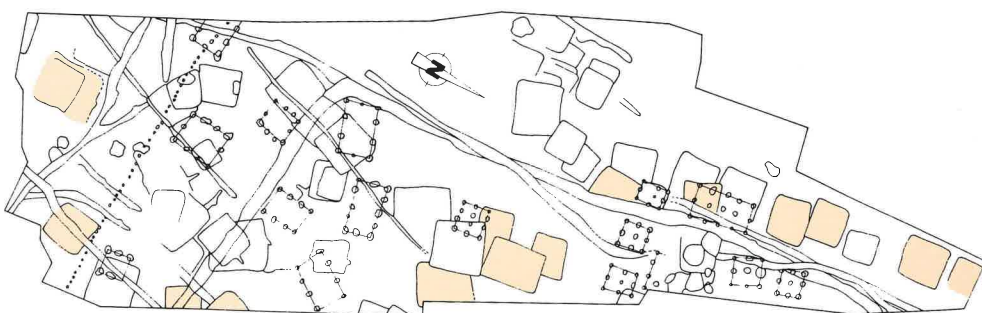
弥生時代後期後半～終末



6世紀前半



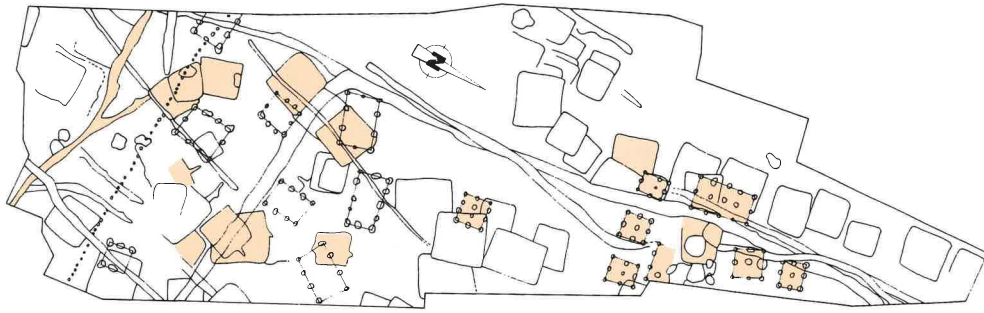
6世紀後半



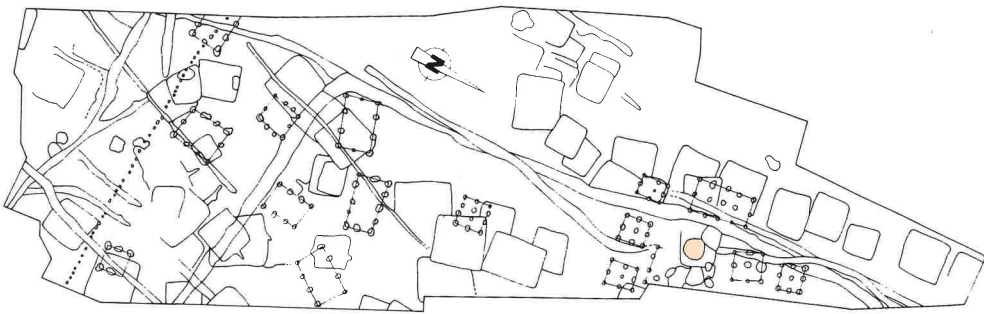
6世紀後半を中心とする時期



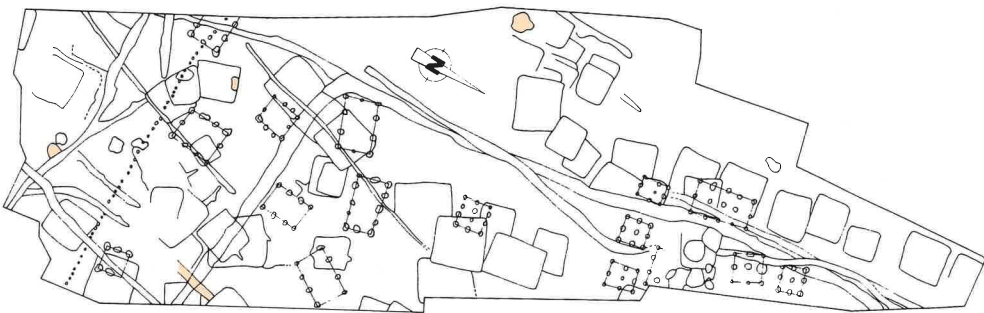
第258図 北ノ後遺跡遺構変遷図(1)



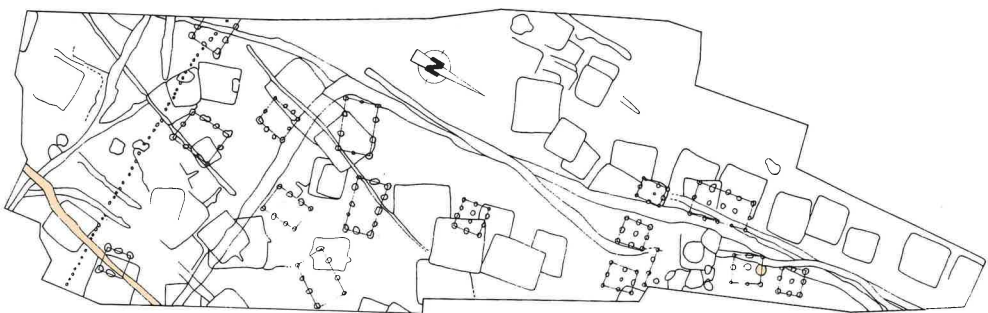
6世紀後半～7世紀前半



7世紀中頃



7世紀後半～8世紀代



中世

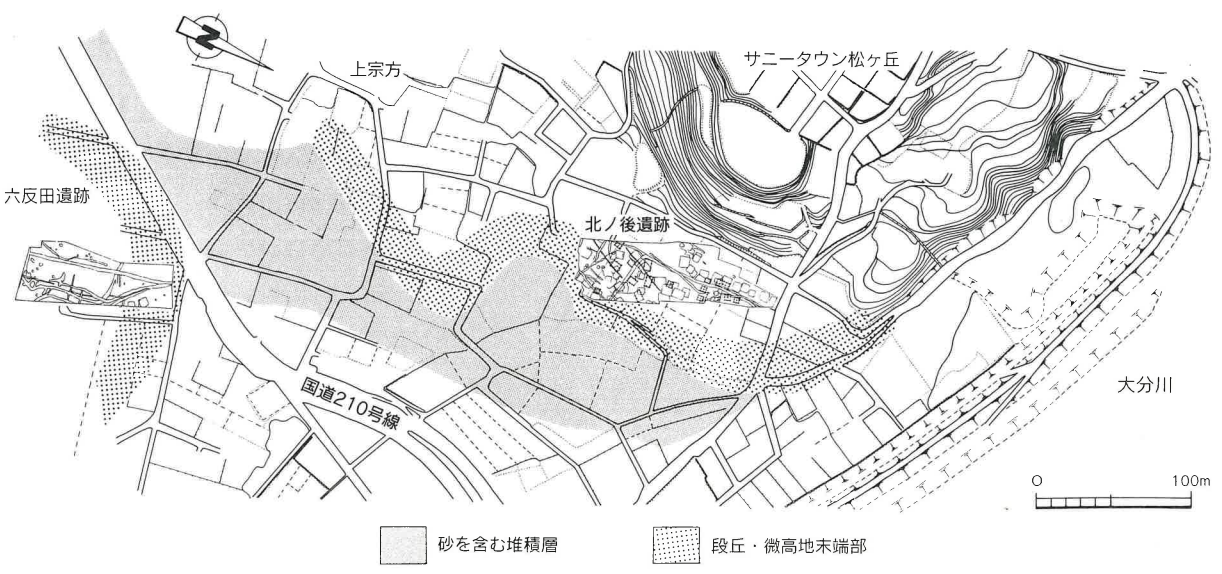


第259図 北ノ後遺跡遺構変遷図(2)

古墳時代の水田跡)、植田条里遺跡H区(古墳時代後期の水田跡)、植田条里遺跡D区(古墳時代後期の水田跡)、植田条里遺跡E区(古墳時代後期の水田跡)、植田条里遺跡F区(古墳時代後期の畦畔を伴う水田跡)、植田平石遺跡(古墳時代後期の水田跡)、植田条里遺跡B区(近世以前の水田跡)をあげることによって、古墳時代には微高地等に集落が散在し、その間を水田が埋める風景を描くことができる。水田に関係すると考えられる遺構について言及すると、玉沢地区条里跡六反田地区の古墳時代後期の溝はその形態から、宗方台及び雄城台から流れ下る流水を取水したものと考えられ、水門状の遺構の存在から流量調節機能を持つ溝(低湿地から六反田地区を通り玉沢地区条里跡二反田地区の水田に給水したものか?)の可能性を示している。このことは、大河川ではなく取水の容易な小河川から水を取り入れていた可能性を補完する⁽⁸⁾。次に、プラント・オパールのポジティブな反応についてみると、植田条里遺跡H区にみられた旧河道からの取水や前述の水門状遺構を持つ溝を基に植田条里遺跡～植田平石遺跡～玉沢地区条里跡二反田地区をカバーする水田域を想定することができる。共に旧河道に隣接しており植田条里遺跡H区と同様の取水(旧河道から溝を用い水田に給水)が可能であったといえる。このように考えると旧河道付近に集落が確認されている植田市遺跡、ガランジ遺跡、玉沢地区条里跡田仲地地区の周辺に旧河道から取水する水田が展開していた可能性は極めて高い。微高地等には集落、その間を埋める低湿な沖積地に旧河道及び小河川から取水した水路が錯綜し水田が展開するという構図が推測される。さらに、七瀬川流域で行なわれたプラント・オパール分析の結果を詳しくみると、植田条里遺跡では弥生時代後期には乾燥した氾濫原でイネを栽培(畑作状態のイネ栽培の可能性はある。しかしながら、畑作状態のイネ栽培といえども成長段階に応じて大量の水分を必要とすることから、水を容易に入手できる立地及び施設が必要条件となろう)していたが、古墳時代には湿潤化し水田を営むようである。

以上のように限られた区域での分析に基づかなければならないが、現段階においては、氾濫原において畑作状態でイネを栽培(弥生時代)→水稲(旧河道・小河川から取水できる範囲で:古墳時代)→灌漑が行なわれ全面水田化の変遷を組み立てることができる。しかしながら、畑作状態のイネと水稲が同時に行なわれていた可能性も現段階では否定できない。具体的には、氾濫原に囲まれる地勢と旧河道からの取水が可能な地区としてガランジ遺跡、玉沢地区条里跡田仲地地区、植田市遺跡⁽¹¹⁾では畑作状態のイネ栽培に続き、あるいは同時に水田を営んだ可能性が高いといえる。

北ノ後遺跡は七瀬川下流域では最も高所な位置に立地する。前述した水田化あるいは環境の変化による低湿化により、大分川による氾濫の可能性の高い地区に締め出されたのか、あるいは、大分川を日常的に渡河する活動⁽¹²⁾

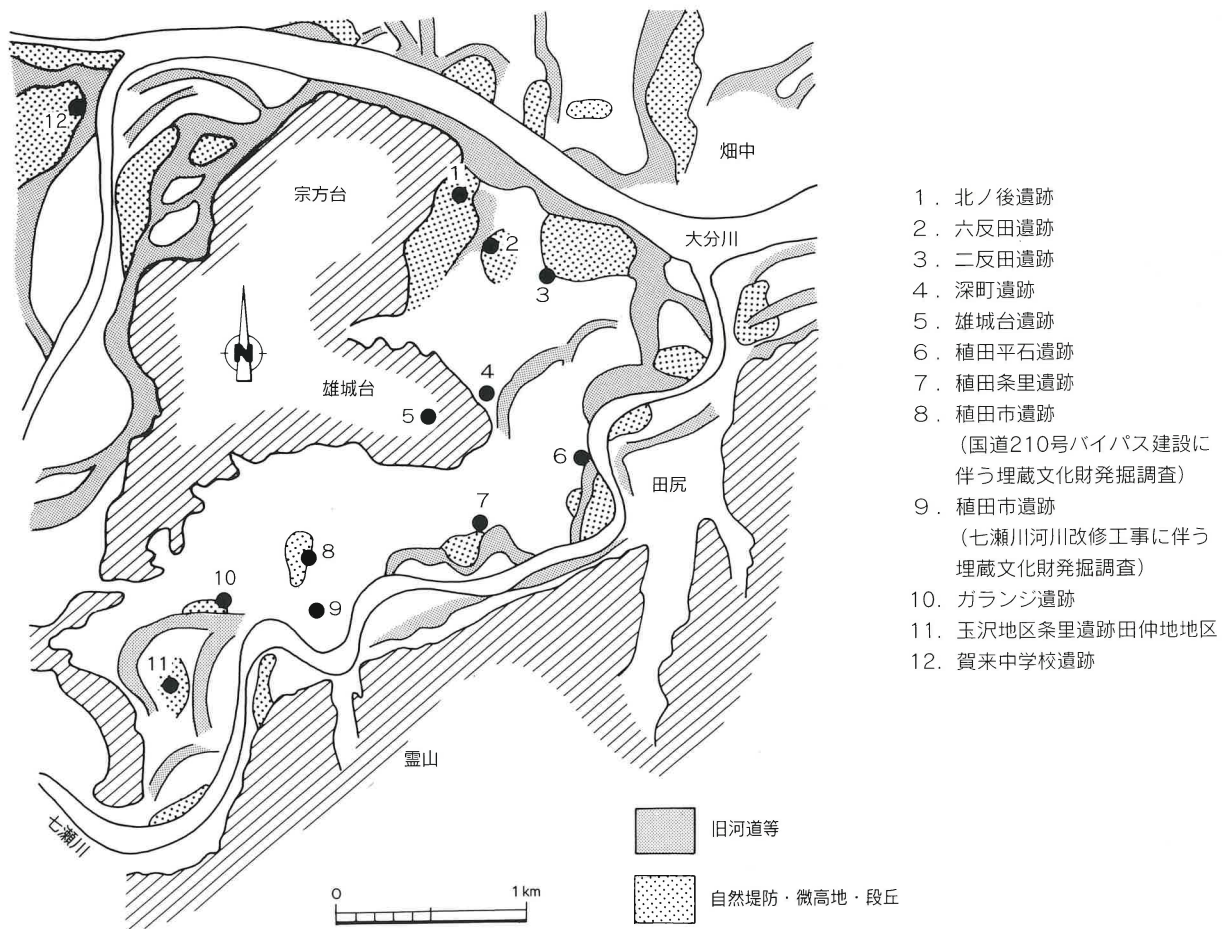


第260図 北ノ後遺跡周辺地形復元図

の可能性も考慮しなければならない。七瀬川下流域における総合的な古環境の復元には無遺構地区においてもプラント・オパールのサンプルリングは極めて重要であるほか、未調査地区である210号バイパスと雄城台に挟まれた地域がいかなる様相であるか解明する必要がある。

註)

- (1) 今年度刊行予定の『玉沢地区条里跡遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(12)所収の「六反田地区」による。
- (2) 平成8年度に同事業試掘調査で低湿な無遺構域を確認したもので、遺物も出土していない。調査区内の土砂堆積状況は表土層(客土層で厚さ1.5m)一暗褐色弱粘質土層(前述の無遺構層で厚さは約1mである。同層掘削と同時に大量の地下水が流出するもので、九州横断自動車道上宗方工事で確認された無遺構層に極めて類似する)一暗褐色粘質土層(シルト層で厚さ30cm~50cm)一青灰色粘質土層(粘質の強い粘土層)である。
- (3) 註(1)所収の「二反田地区」による。
- (4) 現在、整理作業中である一般国道442号線(大分市木の土工区)道路改良工事に伴う玉沢地区条里跡田仲地地区の発掘調査から遺跡は古墳時代前期の集落跡の可能性が高いと考えられる。
- (5) 註(1)所収の「六反田地区」では、このほかに複数の溝跡を確認している。
- (6) 註(1)所収の大分短期大学助教授 佐々木章「プラント・オパール分析結果からみた二反田地区の水田開発」から参照した。
- (7) 註(1)所収の「六反田地区」の1号溝(6世紀後半)、2号・3号溝(6世紀末~7世紀初頭)から水門状の遺構が確認されている。各溝間には水位、流量に起因すると考えられる形状、掘削深度の差異が認められている。
- (8) 小柳和宏編『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』国道210号バイパス(木の土工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1997の66頁で「七瀬川や賀来川などの小規模な河川流域のほうが水田として利用しやすかった」としている。
- (9) 註(8)61頁
- (10) 註(8)74頁~75頁
- (11) 平成8年度に実施した一般国道442号線(大分市木の土工区)道路改良工事に伴う玉沢地区条里跡の試掘調査でガランジ遺跡、伽藍地地区、田仲地地区を除く部分は氾濫原であったことが確認されている。
- (12) 註(8)66頁で高橋学氏の説を取り上げ古墳時代後期に「河川の小規模な氾濫が繰り返されそれまで存在した微起伏を埋積し始めた」、このため「相対的に高燥で集落の立地していた微高地が低湿化し居住に不向きになり、かつて集落が存在したところにも水田が拡大され、ひとつつぎの水田が形成され」としている。



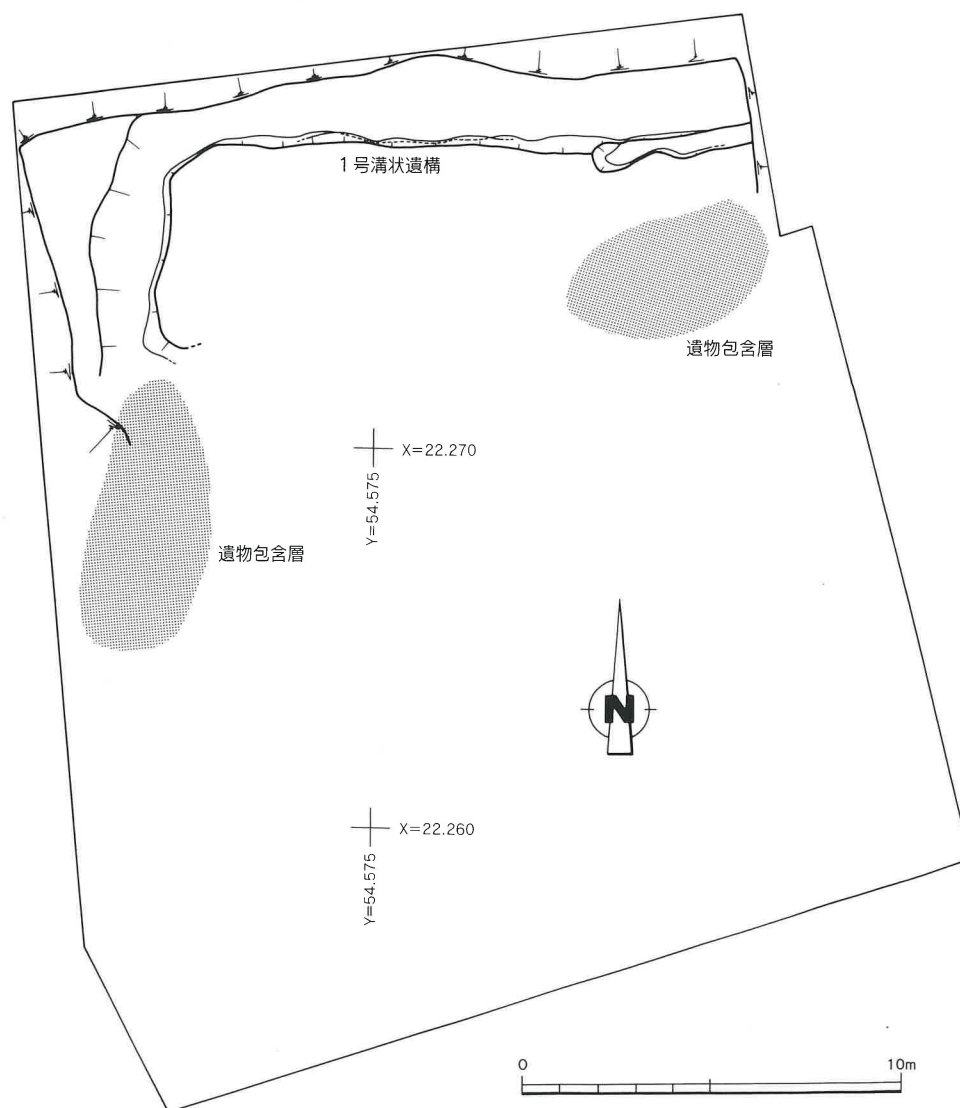
第261図 七瀬川周辺の地形分布と遺跡(『大分市史』上 1987 57頁 第14図を一部修正)

乙院屋敷遺跡

V. 乙院屋敷遺跡

1. 調査の概要

遺跡は大分市大字上宗方字乙院屋敷に所在するもので、北側を北ノ後遺跡が位置する河岸段丘、東側を大分川の旧河道、南側を六反田遺跡の所在する微高地、西側を松ヶ丘ニュータウンから流れだした土砂によって形成された扇状地に取り囲まれている。遺跡はこの扇状地の最末端に確認されたものである。現状は宅地に用いられたもので、標高11.500m前後であった。調査区を含む字乙院屋敷周辺は『豊後国図田帳』による「乙犬名」に比定されると考えられる地域で、特に当該区は中世植田氏の館跡として推定されているため調査を実施した。調査は家屋撤去後、重機により表土層及び盛り土層を除去した。区内の土砂堆積状況は表土層及び盛り土層（厚さ1.7m）－褐色土層（厚さ1mで直上より遺構を検出）－青灰色土層（旧河道沿いに形成された湿地跡と考えられる。）の順である。遺構検出面の標高は9.400m～9.800mである。北ノ後遺跡の標高が13m～14m前後であるから、一段低い扇状地先端部に遺跡が展開することになる。土地所有者及び地域住民の話では、昭和30年代に良質な粘土が採集されたため「一間」ほど掘り下げたという情報があり、このことは、盛り土層の厚さと一致することから原状は検出面より2mほど高いものと考えられる。確認された遺構は遺物包含層2箇所、字乙院屋敷と字柵山の字境に溝状遺構1条である。



第262図 乙院屋敷遺跡遺構配置図

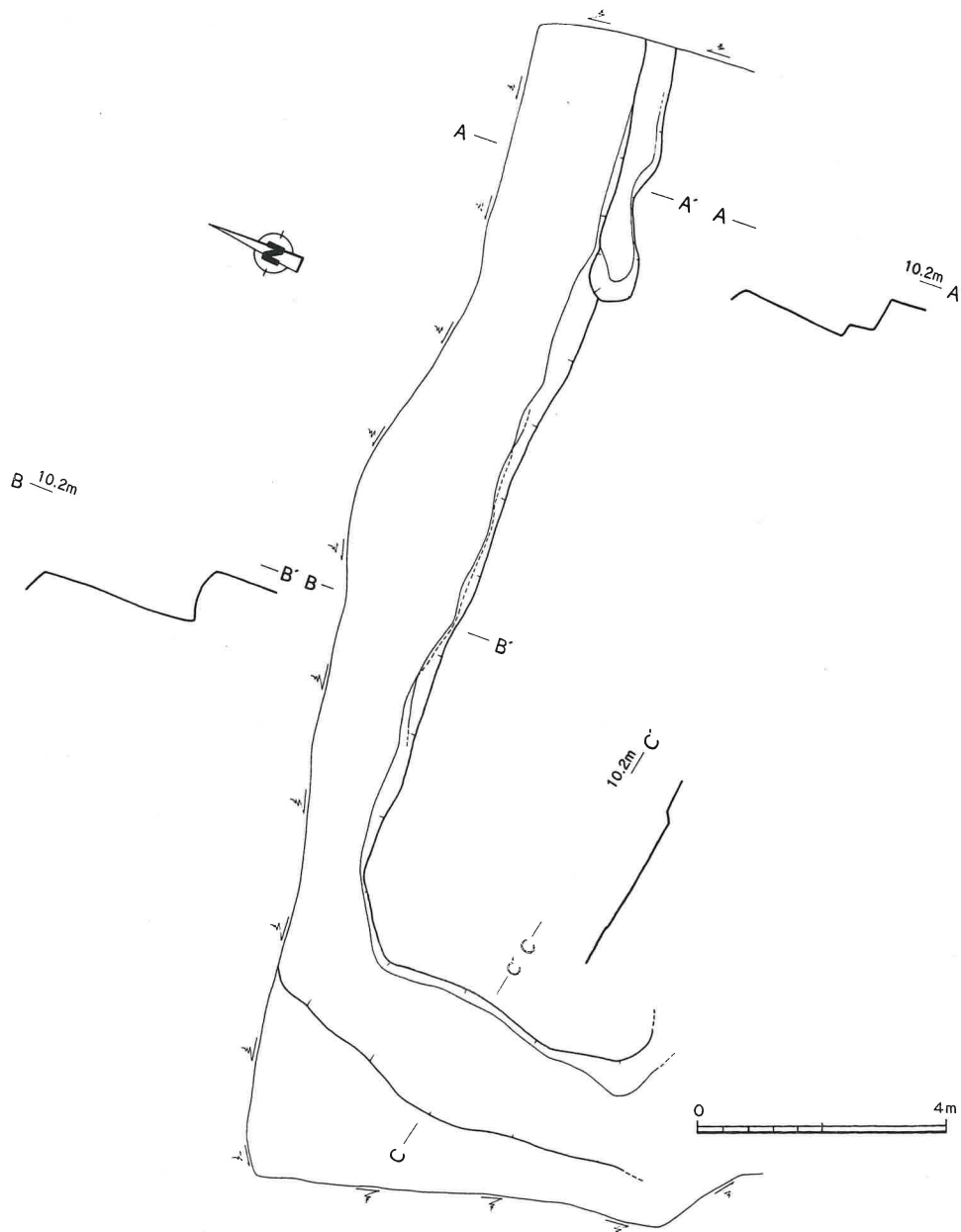
2. 遺構と遺物

遺物包含層

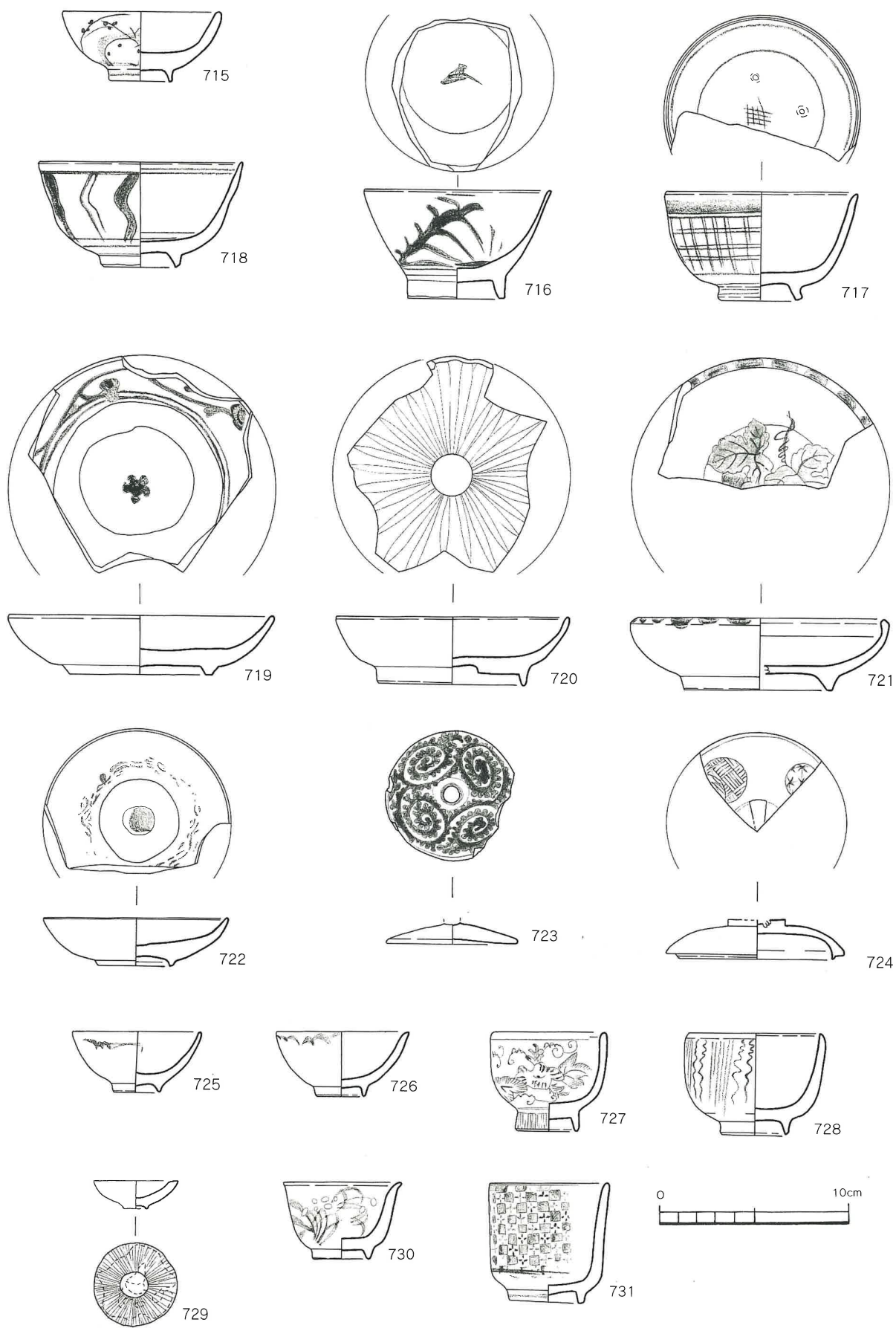
調査区の北東側と北西側に広がるものである。遺物は須恵器の細片が出土しているが時期を特定できる遺物は確認されなかった。

1号溝状遺構

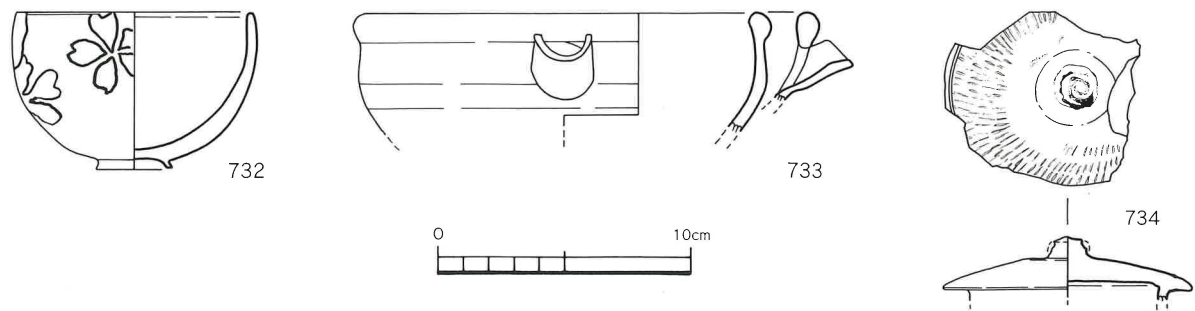
遺構は調査区の北側を東西に走るもので、溝跡の直上にはコンクリート製のU字溝が昭和30年代に設置され現在まで溝として機能を果たしていた。このため、遺構の上部が削平されており残存状況は悪かった。東側は調査区外に続くものと推定され、西側は南に向きを変え4.8mほど行ったところで途切れている。確認できる規模は全長21.81m、最大幅2.43m、最大深1.02mである。底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。東側には階段状の掘り方を確認しており、埋土は灰色土一層である。東西に走る溝は字乙院屋敷と字柵山の字境に位置するが、西端から南側に延びる溝は字境と一致せず、出土遺物も陶磁器を主にするものである。このため、溝跡が館を区画する溝であるかは不明である。



第263図 1号溝実測図



第264图 1号沟出土遗物实测图(1)



第265図 1号溝出土遺物実測図(2)

1号溝状遺構出土遺物

715は肥前磁器染付碗で、外面には梅樹雪輪文が描かれている。遺物は18世紀後半代の製品である。716は肥前磁器染付広東碗で、見込みには岩波文、外面には半菊花散らし文が描かれている。遺物は1780～1820年代の製品である。717は肥前磁器染付端反碗で、見込み及び外面には格子文が描かれる。遺物は1820～1860年代の製品である。718は肥前系磁器染付碗で、外面にはよろけ格子文が描かれる。遺物は明治時代前半の製品である。719は肥前波佐見系磁器染付皿で、見込みにはコンニャク印判(五弁花文)、内面には蛇ノ目軸ハギ周辺に二重圏線と唐草文がみられる。遺物は18世紀後半代の製品である。720は肥前系白磁皿で、型打ち成形によって菊花文を施す。遺物は19世紀以降の製品である。721は瀬戸美濃系磁器染付小鉢で、見込みには草花文を描いている。遺物は昭和以降の製品である。722は肥前系磁器染付小皿で、内面には型紙刷りによって唐草文を施す。遺物は明治時代の製品である。723は肥前系磁器染付蓋物で、蜻唐草文が描かれている。遺物は18世紀末から19世紀初頭の製品である。724は肥前磁器染付蓋物で、丸文が描かれる。遺物は18世紀末から19世紀初頭の製品である。725・726は肥前磁器染付紅猪口で、ともに笹文を描く。遺物は18世紀後半から江戸時代末の製品である。727は肥前磁器染付小坏で、外面には草花文が描かれている。遺物は19世紀前半から江戸時代末の製品である。728は肥前磁器染付小丸碗で、外面にはよろけ格子文を描く。遺物は19世紀前半から江戸時代末の製品である。729は肥前系磁器白磁紅皿で、型打ち成形である。遺物は18世紀後半から江戸時代末の製品である。730は瀬戸美濃系クロム青磁小碗で、大正時代から昭和初期の製品である。731は肥前系磁器染付湯呑碗で、型紙刷りによる装飾を施す明治時代の製品である。732は関西系陶器色絵碗で、外面には桜文が描かれる。遺物は19世紀代の製品である。733は産地不詳の行平鍋で、内外面には透明釉を施す。19世紀前半から江戸時代末の製品である。734は関西系陶器蓋物で、飛びガンナによる装飾を施す。遺物は19世紀代の製品である。

3. 小結

乙犬名の記事は植田庄最大の名として『豊後国弘安岡田帳』に「上義名五拾六町六段 大輔房有秀 乙犬名六拾丁八段 同人」として登場する。建武4年9月23日には、足利直義から植田大輔房有快に、元弘3年以来、領家方に分与されていた乙犬名など七名の半分地頭職などを安堵されている。従来、「乙犬」は「雄城」の字句から現大分川南岸の雄城周辺に比定されていたが、不明な点も多いとしている。この「乙犬」が「乙院」に転訛することは安易に推測でものであるが、⁽¹⁾出土遺物は18世紀後半を下限とするもので時間差を生じている。当該区は昭和30年代に粘土採集及びコンクリート製U字溝を設置しており、この時期まで溝さらいや溝の改修を繰り返していることから、出土遺物の時期を結論とするには消極的にならざるをえない。原状は北ノ後遺跡と変わらない標高であったと考えられ、溝の起源を江戸時代中期に遡ることは言うまでもないが、中世の集村形態をとる可能性から溝の起源を中世に遡ることは否定しえない。⁽²⁾⁽³⁾

註)

(1) 『日本歴史地名大系』第45巻大分県の地名 平凡社 1995 547頁

(2) 『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田糸里遺跡』国道210号バイパス(木ノ上工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1997 69頁

(3) 同 69頁